諟是爲眞眞爲甚
是爭是爲甚待眞
終々是得掛空何
是身牆壁未全心

道元自題

# 正法眼蔵

# 弁道話

諸仏、如来ともに妙法を単伝して阿耨菩提を証するに最上無為の妙術あり。
これ、ただ、ほとけ、仏にさずけて、よこしまなることなきは、すなわち自受用三昧、その標準なり。
この三昧に遊化( or 遊戯)するに端坐参禅を正門とせり。
この法は人人の分上に、ゆたかにそなわれりといえども、いまだ修せざるには、あらわれず、証せざるには、うることなし。
はなてば、てにみてり。一多のきわならんや。
かたれば、くちにみつ。縦横きわまりなし。
諸仏の、つねに、このなかに住持たる、各各の方面に知覚をのこさず。
群生の、とこしなえに、このなかに使用する、各各の知覚に方面あらわれず。
いま、おしうる功夫弁道は証上に万法をあらしめ、出路に一如を行ずるなり。
その超関脱落のとき、この節目にかかわらんや？
予、発心求法よりこのかた、わが朝の遍方に知識をとぶらいき。
ちなみに、建仁の全公をみる。
あいしたがう霜華すみやかに九回をへたり。
いささか臨済の家風をきく。
全公は祖師、西和尚の上足として、ひとり無上の仏法を正伝せり。
あえて余輩のならぶべきにあらず。
予かさねて大宋国におもむき知識を両浙にとぶらい家風を五門にきく。
ついに大白峰の浄禅師に参じて一生参学の大事ここに、おわりぬ。
それよりのち大宋、紹定のはじめ本郷にかえりし。すなわち弘法衆生をおもいとせり。
なお重担をかたにおけるがごとし。
しかあるに、弘道のこころを放下せん。
激揚のときをまつゆえに、しばらく雲遊萍寄して、まさに先哲の風をきこえんとす。
ただし、おのずから名利にかかわらず道念をさきとせん真実の参学あらんか？
いたずらに邪師にまどわされて、みだりに正解をおおい、むなしく自狂によって、ひさしく迷郷にしずまん。
なにによりてか般若の正種を長じ得道の時をえん？
貧道は、いま雲遊萍寄をこととすれば、いずれの山川をかとぶらわん？

これをあわれむゆえに、まのあたり大宋国にして禅林の風規を見聞し知識の玄旨を稟持せしをしるしあつめて参学閑道( or 参学間道)の人にのこして仏家の正法をしらしめんとす。
これ真訣ならんかも。
いわく、大師、釈尊、霊山会上にして法を迦葉につけ、祖祖正伝して、菩提達磨尊者にいたる。
尊者みずから神丹国におもむき法を慧可大師につけき。
これ東地の仏法伝来のはじめなり。
かくのごとく単伝して、おのずから六祖、大鑑禅師にいたる、ごとき( or このとき)、真実の仏法まさに東漢に流演して節目にかかわらぬむねあらわれき。
ときに、六祖に二位の神足ありき。
南嶽の懐譲と青原の行思となり。
ともに仏印を伝持して、おなじく人天の導師なり。
その二派の流通するに、よく五門ひらけたり。
いわゆる、法眼宗、潙仰宗、曹洞宗、雲門宗、臨済宗なり。
見在、大宋には臨済宗のみ天下にあまねし。
五家ことなれども、ただ一仏心印なり。
大宋国も後漢よりこのかた教籍あとをたれて一天にしけりといえども雌雄いまだ、さだめざりき。
祖師西来ののち直に葛藤の根源をきり純一の仏法ひろまれり。
わがくにもまた、しかあらんことをこいねがうべし。
いわく、仏法を住持せし諸祖ならびに諸仏ともに自受用三昧に端坐依行するをその開悟のまさしき、みちとせり。
西天、東地、さとりをえし人その風にしたがえり。
これ、師資ひそかに妙術を正伝し真訣を稟持せしによりてなり。
宗門の正伝にいわく、
この単伝正直( or 単伝正真)の仏法は最上のなかに最上なり。
参見知識のはじめより、さらに焼香、礼拝、念仏、修懺、看経をもちいず。
ただし打坐して身心脱落することをえよ。

もし人、一時なりというとも三業に仏印を標し三昧に端坐するとき、遍法界みな仏印となり、尽虚空ことごとく、さとりとなる。
ゆえに、諸仏、如来をしては本地の法楽をまし覚道の荘厳をあらたにす。
および、十方法界、三途六道の群類みなともに一時に身心明浄にして大解脱地を証し本来面目現ずるとき、諸法みな正覚を証会し、万物ともに仏身を使

用して、すみやかに証会の辺際を一超して覚樹王に端坐し一時に無等等の大法輪を転じ究竟無為の深般若を開演す。
これらの等正覚、さらに、かえりて、したしくあい冥資するみちかようがゆえに、この坐禅人、確爾として身心脱落し従来雑穢の知見思量を截断して天真の仏法に証会し、あまねく微塵際そこばくの諸仏、如来の道場ごとに仏事を助発し、ひろく仏向上の機にこうむらしめて、よく仏向上の法を激揚す。
このとき、十方法界の土地、草木、牆壁、瓦礫みな(仏事をなす)仏事をなすをもって、その、おこすところの風水の利益にあずかるともがらみな甚妙不可思議の仏化に冥資せられて、ちかきさとりをあらわす。
この水火を受用するたぐいみな本証の仏化を周旋するゆえに、これらのたぐいと共住して同語するものまた、ことごとく、あいたがいに無窮の仏徳そなわり展転広作して無尽、無間断、不可思議、不可称量の仏法を遍法界の内外に流通するものなり。
しかあれども、この、もろもろの当人の知覚に昏( or 混)ぜざらしむることは静中の無造作にして直証( or 真証)なるをもってなり。
もし凡流のおもいのごとく修、証を両段にあらせば、おのおの、あい覚知すべきなり。
もし覚知にまじわるは証則にあらず。
証則には迷情およばざるがゆえに。
また、心、境ともに静中の証入悟出あれども自受用の境界なるをもって一塵をうごかさず、一相をやぶらず、広大の仏事、甚深微妙の仏化をなす。
この化道のおよぶところの草木、土地ともに大光明をはなち深妙法をとくこと、きわまるときなし。
草木、牆壁は、よく凡聖含霊のために宣揚し、凡聖含霊は、か(え)って草木、牆壁のために演暢す。
自覚、覚他の境界もとより証相をそなえて、かけたることなく、証則おこなわれて、おこたるときなからしむ。
ここをもって、わずかに一人、一時の坐禅なりといえども諸法とあい冥し、諸時とまどかに通ずるがゆえに、無尽法界のなかに去来現に常恒の仏化道事をなすなり。
彼、彼ともに一等の同修なり。同証なり。
ただ坐上の修のみにあらず。
空をうちて、ひびきをなすこと、撞の前後に妙声綿綿たるものなり。
このきわのみにかぎらんや？
百頭みな本面目に本修行をそなえて、はかり、はかるべきにあらず。

しるべし。
たとえ十方無量恒河沙数の諸仏ともに、ちからをはげまして仏智慧をもって一人坐禅の功徳をはかりしり、きわめんとす、というとも、あえて、ほとりをうることあらじ。
いま、この坐禅の功徳、高大なることをききおわりぬ。
おろかならん人うたがうて、いわん。
仏法におおくの門あり。
なにをもってか、ひとえに坐禅をすすむるや？

しめして、いわく、
これ、仏法の正門なるをもってなり。

とうて、いわく、
なんぞ、ひとり、正門とする？

しめして、いわく、
大師、釈尊まさしく得道の妙術を正伝し、また、三世の如来ともに坐禅より得道せり。
このゆえに、正門なることをあいつたえたるなり。
しかのみにあらず。
西天、東地の諸祖みな坐禅より得道せるなり。
ゆえに、いま、正門を人、天にしめす。

とうて、いわく、
あるいは、如来の妙術を正伝し、または、祖師のあとをたずぬるによらん、まことに、凡慮のおよぶにあらず。
しかは、あれども、読経、念仏は、おのずから、さとりの因縁となりぬべし。
ただ、むなしく坐して、なすところなからん。
なにによりてか、さとりをうるたよりとならん？

しめして、いわく、
なんじ、いま、諸仏の三昧、無上の大法を、むなしく坐して、なすところなし、とおもわん。
これを大乗を謗ずる人とす。
まどいのいとふかき、大海のなかにいながら水なし、といわんがごとし。
すでに、かたじけなく、諸仏自受用三昧に安坐せり。

これ、広大の功徳をなすにあらずや？
あわれむべし。まなこ、いまだひらけず、こころ、なお、よいにあることを。
おおよそ諸仏の境界は不可思議なり。
心識のおよぶべきにあらず。
いわんや、不信劣智のしることをえんや？
ただ正信の大機のみ、よく、いることをうるなり。
不信の人は、たとえ、おしうとも、うくべきこと、かたし。
霊山に、なお、退亦佳矣のたぐいあり。
おおよそ心に正信おこらば修行し参学すべし。
しかあらずば、しばらく、やむべし。
むかしより法のうるおいなきことをうらみよ。
又、読経、念仏等のつとめにうるところの功徳を、なんじ、しるや、いなや？
ただ、したをうごかし、こえをあぐるを仏事、功徳とおもえる、いとはかなし。
仏法に擬するに、うたた、とおく、いよいよ、はるかなり。
又、経書をひらくことは、ほとけ、頓漸修行の儀則をおしえおけるをあきらめしり、教のごとく修行すれば、かならず、証をとらしめんとなり。
いたずらに思量念度をついやして菩提をうる功徳に擬せんとにはあらぬなり。
おろかに千万誦の口業をしきりにして仏道にいたらんとするは、なお、これ、ながえをきたにして越にむかわん、と、おもわんがごとし。
又、円孔に方木をいれんとせんとおなじ。
文をみながら修するみちにくらき、それ、医方をみる人の合薬をわすれん、なにの益かあらん？
口声をひまなくせる、春の田のかえるの昼夜になくがごとし。ついに、又、益なし。
いわんや、ふかく名利にまどわさるるやから、これらのことをすてがたし。
それ、利貪( or 貪利)のこころ、はなはだ、ふかきゆえに。
むかし、すでにありき。
いまのよに、なからんや？
もっとも、あわれむべし。
ただ、まさに、しるべし。
七仏の妙法は得道明心の宗匠に契心証会の学人あいしたがうて正伝すれば的旨あらわれて稟持せらるるなり。
文字習学の法師の、しりおよぶべきにあらず。

しかあれば、すなわち、この疑迷をやめて、正師のおしえにより坐禅弁道して、諸仏の自受用三昧を証得すべし。

とうて、いわく、
いま、わが朝につたわれるところの法華宗、華厳教( or 華厳宗)ともに大乗の究竟なり。
いわんや、真言宗のごときは毘盧遮那如来したしく金剛薩埵につたえて、師資みだりならず。
その談ずるむね、即心是仏( or 即身是仏)、是心作仏( or 是身作仏)というて、多劫の修行をふることなく一座に五仏の正覚をとなう。
仏法の極妙というべし。
しかあるに、いま、いうところの修行、なにの、すぐれたることあれば、かれらをさしおきて、ひとえに、これをすすむるや？

しめして、いわく、
しるべし。
仏家には、教の殊劣を対論することなく、法の浅深をえらばず、ただし修行の真偽をしるべし。
草花、山水にひかれて仏道に流入することありき。
土石、砂礫をにぎりて仏印を稟持することあり。
いわんや、広大の文字は万象にあまりて、なお、ゆたかなり。
転大法輪また、一塵におさまれり。
しかあれば、すなわち、即心即仏( or 即身即仏)のことば、なお、これ、水中の月なり。
即坐成仏( or 即坐成道)のむね、さらにまた、かがみのうちのかげなり。
ことばのたくみに、かかわるべからず。
いま直証菩提( or 真証菩提)の修行をすすむるに仏祖単伝の妙道をしめして真実の道人とならしめんとなり。
又、仏法を伝授することは、かならず、証契の人をその宗師とすべし。
文字をかぞうる学者をもって、その導師とするに、たらず。一盲の衆盲をひかんがごとし。
いま、この、仏祖正伝の門下には、みな、得道証契の哲匠をうやまいて仏法を住持せしむ。
かるがゆえに、冥陽の神道もきたり帰依し、証果の羅漢もきたり問法するに、おのおの心地を開明する手をさずけずということなし。
余門に、いまだ、きかざるところなり。

ただ、仏弟子は仏法をならうべし。
又、しるべし。
われらは、もとより、無上菩提、かけたるにあらず。
とこしなえに受用すといえども、承当することをえざるゆえに、みだりに知見をおこすことをならいとして、これを物とお(も)うによりて、大道いたずらに蹉過す。
この知見によりて空華まちまちなり。
あるいは、十二輪転、二十五有の境界とおもい、三乗、五乗、有仏、無仏の見つくることなし。
この知見をならうて仏法修行の正道とおもうべからず。
しかあるを、いまは、まさしく、仏印によりて万事を放下し一向に坐禅するとき、迷悟情量のほとりをこえて、凡聖のみちにかかわらず、すみやかに格外に逍遥し、大菩提を受用するなり。
かの、文字の筌罤にかかわるものの、かたをならぶるにおよばんや？

とうて、いわく、
三学のなかに定学あり。
六度のなかに禅度あり。
ともに、これ、一切の菩薩の初心よりまなぶところ。
利鈍をわかず修行す。
いまの坐禅も、そのひとつなるべし。
なにによりてか、このなかに如来の正法あつめたり、というや？

しめして、いわく、
いま、この、如来一大事の正法眼蔵、無上の大法を禅宗となづくるゆえに、この問きたれり。
しるべし。
禅宗の号は神丹以東におこれり。
竺乾には、きかず。
はじめ達磨大師、嵩山の少林寺にして九年面壁のあいだ、道俗、いまだ仏正法をしらず、坐禅を宗とする婆羅門となづけき。
のち、代代の諸祖みな、つねに坐禅をもっぱらす。
これをみる、おろかなる俗家は、実をしらず、ひたたけて、坐禅宗といいき。
いまのよには、坐のことばを簡して、ただ、禅宗というなり。
そのこころ、諸祖の広語にあきらかなり。
六度、および、三学の禅定に、ならっていうべきにあらず。

この仏法の相伝の嫡意なること、一代にかくれなし。
如来、むかし霊山会上にして正法眼蔵、涅槃妙心、無上の大法をもって、ひとり、迦葉尊者にのみ付法せし儀式は、現在して上界にある天衆まのあたり、みしもの存せり。
うたがうべきにたらず。
おおよそ仏法は、かの天衆とこしなえに護持するものなり。
その功いまだ、ふりず。
まさに、しるべし。
これは仏法の全道なり。
ならべていうべき物なし。

とうて、いわく、
仏家、なにによりてか、四儀のなかに、ただし坐にのみ、おおせて、禅定をすすめて証入をいうや？

しめして、いわく、
むかしよりの諸仏あいつぎて修行し証入せるみち、きわめしりがたし。
ゆえをたずねば、ただ、仏家のもちいるところをゆえとしるべし。
このほかに、たずぬべからず。
ただし、祖師ほめて、いわく、坐禅は、すなわち、安楽の法門なり。
はかりしりぬ。
四儀のなかに安楽なるゆえか？
いわんや、一仏、二仏の修行のみちにあらず。
諸仏、諸祖にみな、このみちあり。

とうて、いわく、
この坐禅の行は、いまだ仏法を証会せざらんものは坐禅弁道して、その証をとるべし。
すでに仏正法をあきらめえん人は坐禅なにの、まつところか、あらん？

しめして、いわく、
痴人のまえに、ゆめをとかず、山子の手には舟棹をあたえがたし、といえども、さらに訓をたるべし。
それ、修、証はひとつにあらず、とおもえる、すなわち、外道の見なり。
仏法には修、証これ一等なり。
いまも証上の修なるゆえに、初心の弁道、すなわち、本証の全体なり。

かるがゆえに、修行の用心をさずくるにも、修のほかに証をまつおもいなかれ、と、おしう。
直指の本証なるがゆえなるべし。
すでに修の証なれば証にきわなく、証の修なれば修にはじめなし。
ここをもって、釈迦如来、迦葉尊者ともに証上の修に受用せられ、達磨大師、大鑑高祖おなじく証上の修に引転せらる。
仏法住持のあと、みな、かくのごとし。
すでに証をはなれぬ修あり。
われら、さいわいに、一分の妙修を単伝せる。
初心の弁道、すなわち、一分の本証を無為の地にうるなり。
しるべし。
修をはなれぬ証を染汚せざらしめんがために仏祖しきりに修行のゆるくすべからざる、と、おしう。
妙修を放下すれば、本証、手の中にみてり。
本証を出身すれば、妙修、通身におこなわる。
又、まのあたり大宋国にして、みしかば、諸方の禅院みな坐禅堂をかまえて、五百、六百、および、一、二千僧を安じて日夜に坐禅をすすめき。
その席主とせる伝仏心印の宗師に仏法の大意をとぶらいしかば、修、証の、両段にあらぬむねをきこえき。
このゆえに、門下の参学のみにあらず、求法の高流、仏法のなかに真実をねがわん人、初心、後心をえらばず、凡人、聖人を論ぜず、仏のおしえにより宗匠の道をおうて坐禅弁道すべし、とすすむ。
きかずや？
祖師の、いわく、修、証は、すなわち、なきにあらず。染汚することは、えじ。
又、いわく、道をみるもの、道を修す、と。
しるべし。得道のなかに修行すべし、ということを。

とうて、いわく、
わが朝の先代に教をひろめし諸師ともに、これ、入唐伝法せしとき、なんぞ、このむねをさしおきて、ただ教をのみ、つたえし？

しめして、いわく、
むかしの人師この法をつたえざりしことは時節のいまだいたらざりしゆえなり。

とうて、いわく、
かの上代の師この法を会得せりや？

しめして、いわく、
会せば通じてん。

とうて、いわく、
あるが、いわく、
生死をなげくことなかれ。
生死を出離するに、いとすみやかなるみちあり。
いわゆる、心性の常住なることわりをしるなり。
その、むねたらく、
この身体は、すでに生あれば、かならず、滅にうつされゆくことありとも、
この心性は、あえて滅することなし。
よく生滅にうつされぬ心性、わが身にあることをしりぬれば、これを本来の性とするがゆえに、身は、これ、かりのすがたなり。
死此生彼さだまりなし。
心は、これ、常住なり。去来現在かわるべからず。
かくのごとく、しるを、生死をはなれたり、とは、いうなり。
このむねをしるものは従来の生死ながくたえて、この身おわるとき性海にいる。
性海に朝宗するとき、諸仏、如来のごとく、妙徳まさに、そなわる。
いまは、たとえ、しるといえども、前世の妄業になされたる身体なるがゆえに、諸聖とひとしからず。
いまだ、このむねをしらざるものは、ひさしく生死にめぐるべし。
しかあれば、すなわち、ただ、いそぎて、心性の常住なるむねを了知すべし。
いたずらに閑坐して一生をすぐさん、なにの、まつところか、あらん？
かくのごとく、いうむね、これは、まことに諸仏、諸祖の道にかなえりや？
いかん？

しめして、いわく、
いま、いうところの見、まったく仏法にあらず。
先尼外道が見なり。
いわく、かの外道の見は、
わが身、うちに、ひとつの霊知あり。

かの知、すなわち、縁にあうところに、よく、好悪をわきまえ、是非をわきまう。
痛痒をしり、苦楽をしる、みな、かの霊知のちからなり。
しかあるに、かの霊性は、この身の滅するとき、もぬけて、かしこに、うまるる。
ゆえに、ここに滅す、と、みゆれども、かしこの生あれば、ながく滅せずして常住なり、というなり。
かの外道が見、かくのごとし。
しかあるを、この見をならうて仏法とせん、瓦礫をにぎりて金宝とおもわんよりもなお、おろかなり。
痴迷の、はずべき、たとうるに、ものなし。
大唐国の慧忠国師ふかくいましめたり。
いま、心常相滅の邪見を計して諸仏の妙法にひとしめ、生死の本因をおこして生死をはなれたりとおもわん、おろかなるにあらずや？
もっとも、あわれむべし。
ただ、これ、外道の邪見なり、としれ。
みみにふるべからず。
こと、やむことをえず、いまなお、あわれみをたれて、なんじが邪見をすくわば、( or すくわん。)
しるべし。
仏法には、もとより、身心一如にして性相不二なり、と談ずる。
西天、東地おなじく、しれるところ。
あえて、たがう( or うかがう)べからず。
いわんや、常住を談ずる門には、万法みな常住なり。身と心とをわくことなし。
寂滅を談ず門には、諸法みな寂滅なり。性と相とをわくことなし。
しかあるを、なんぞ身滅心常といわん？
正理にそむかざらんや？
しかのみならず、生死は、すなわち、涅槃なり、と覚了すべし。
いまだ生死のほかに涅槃を談ずることなし。
いわんや、心は身をはなれて常住なり、と領解するをもって生死をはなれたる仏智に妄計す、というとも、この領解知覚の心は、すなわち、なお生滅して、まったく常住ならず。
これ、はかなきにあらずや？
嘗観すべし。

身心一如のむねは仏法のつねの談ずるところなり。
しかあるに、なんぞ、この身の生滅せんとき、心ひとり身をはなれて生滅せざらん？
もし一如なるときあり一如ならぬときあらば、仏説おのずから虚妄にありぬべし。
又、生死はのぞくべき法ぞ、とおもえるは、仏法をいとう、つみとなる。
つつしまざらんや？
しるべし。
仏法に心性大総相の法門というは、一大法界をこめて、性、相をわかず、生滅をいうことなし。
菩提涅槃におよぶまで心性にあらざるなし。
一切諸法( or 一切諸仏)、万象森羅ともに、ただ、これ、一心にして、こめず、かねざること、なし。
この、もろもろの法門みな平等一心なり。
あえて異違なし、と談ずる、これ、すなわち、仏家の心性をしれる様子なり。
しかあるを、この一法に身と心とを分別し、生死と涅槃とをわくことあらんや？
すでに仏子なり。
外道の見をかたる狂人のしたのひびきをみみにふるることなかれ。

とうて、いわく、
この坐禅をもっぱらせん人、かならず戒律を厳浄すべしや？

しめして、いわく、
持戒梵行は、すなわち、禅門の規矩なり。仏祖の家風なり。
いまだ戒をうけず、又、戒をやぶれるもの、その分なきにあらず。

とうて、いわく、
この坐禅をつとめん人、さらに真言止観の行をかね修せん、さまたげあるべからずや？

しめして、いわく、
在唐のとき、宗師に真訣をききしちなみに、西天、東地の古今に仏印を正伝せし諸祖、いずれも、いまだ、しかのごときの行をかね修す、ときかず、といいき。
まことに、一事をこととせざれば、一智に達することなし。

とうて、いわく、
この行は在俗の男女もつとむべしや？
ひとり出家人のみ修するか？

しめして、いわく、
祖師の、いわく、仏法を会すること男女、貴賤をえらぶべからず、ときこゆ。

とうて、いわく、
出家人は諸縁すみやかにはなれて坐禅弁道にさわりなし。
在俗の繁務は、いかにしてか、一向に修行して無為の仏道にかなわん？

しめして、いわく、
おおよそ仏祖、あわれみのあまり、広大の慈門をひらきおけり。
これ、一切衆生を証入せしめんがためなり。
人、天、だれか、いらざらんものや？
ここをもって、むかし、いまをたずぬるに、その証、これ、おおし。
しばらく、代宗、順宗の、帝位にして万機いとしげかりし、坐禅弁道して仏祖の大道を会通す。
李相国、防相国ともに、輔佐の臣位にはんべりて一天の股肱たりし、坐禅弁道して仏祖の大道に証入す。
ただ、これ、こころざしのあり、なし、によるべし。
身の在家、出家、にかかわらじ。
又、ふかくことの殊劣をわきまうる人、おのずから信ずることあり。
いわんや、世務は仏法をさゆ、とおもえるものは、ただ世中に仏法なし、とのみしりて、仏中に世法なきことをいまだしらざるなり。
ちかごろ大宋に、馮相公という、ありき。
祖道に長ぜりし大官なり。
のちに、詩をつくりて、みずからをいうに、いわく、
公事之余、喜坐禅、少、曾、将脇到牀眠。
雖然、現出宰宦相、長老之名、四海伝。
これは官務にひまなかりし身なれども、仏道にこころざしふかければ、得道せるなり。
他をもって、われをかえりみ、むかしをもって、いまをかがみるべし。
大宋国には、いまのよの国王、大臣、士、俗、男女ともに心を祖道にとどめずということなし。

武門、文家、いずれも、参禅学道をこころざせり。
こころざすもの、かならず、心地を開明すること、おおし。
これ、世務の仏法をさまたげざる、おのずから、しられたり。
国家に真実の仏法、弘通すれば、諸仏、諸天、ひまなく衛護するがゆえに、王化、太平なり。
聖化、太平なれば、仏法、そのちからをうるものなり。
又、釈尊の在世には、逆人、邪見、みちをえき。
祖師の会下には、猟者、樵翁、さとりをひらく。
いわんや、そのほかの人をや。
ただ、正師の教道をたずぬべし。

とうて、いわく、
この行は、いま、末代、悪世にも、修行せば、証をうべしや？

しめして、いわく、
教家に名、相をこととせるに、なお大乗実教には、正、像、末法をわくことなし。
修すれば、みな得道す、という。
いわんや、この単伝の正法には、入法、出身おなじく自家の財珍を受用するなり。
証の得否は、修せんもの、おのずから、しらんこと、用水の人の、冷暖を、みずから、わきまうるがごとし。

とうて、いわく、
あるが、いわく、
仏法には即心是仏のむねを了達しぬるがごときは、くちに経典を誦せず、身に仏道を行ぜざれども、あえて仏法にかけたるところなし。
ただ仏法は、もとより、自己にあり、としる。
これを得道の全円とす。
このほか、さらに、他人にむかいて、もとむべきにあらず。
いわんや、坐禅弁道をわずらわしく、せんや？

しめして、いわく、
このことば、もっとも、はかなし。
もし、なんじがいうごとくならば、こころあらんもの、だれが、このむねをおしえんに、しることなからん？

しるべし。
仏法は、まさに、自他の見をやめて学するなり。
もし自己即仏としるをもって得道とせば、釈尊、むかし、化道にわずらわじ。
しばらく、古徳の妙則をもって、これを証すべし。

むかし、則公監院という僧、法眼禅師の会中にありしに、法眼禅師、とうて、いわく、則監寺、なんじ、わが会にありて、いくばくのときぞ？
則公が、いわく、われ、師の会にはんべりて、すでに三年をへたり。
禅師の、いわく、なんじは、これ、後生なり。なんぞ、つねに、われに仏法をとわざる？
則公が、いわく、それがし、和尚をあざむくべからず。かつて、青峰禅師のところにありしとき、仏法におきて安楽のところを了達せり。
禅師の、いわく、なんじ、いかなる、ことばによりてか、いることをえし？
則公が、いわく、
それがし、かつて、青峰にといき、いかなるか、これ、学人の自己なる？
青峰の、いわく、丙、丁童子、来、求火。
法眼の、いわく、よきことばなり。ただし、おそらくは、なんじ、会せざらんことを。
則公が、いわく、丙、丁は火に属す。火をもって、さらに火をもとむ、自己をもって自己をもとむるににたり、と会せり。
禅師の、いわく、まことに、しりぬ。なんじ会せざりけり。仏法、もし、かくのごとくならば、きょうまでに、つたわれじ。
ここに、則公、懆悶して、すなわち、たちぬ。
中路にいたりて、おもいき、禅師は、これ、天下の善知識。又、五百人の大導師なり。わが非をいさむる。さだめて、長所あらん。
禅師のみもとにかえりて、懺悔、礼謝して、とうて、いわく、いかなるか、これ、学人の自己なる？
禅師の、いわく、丙、丁童子、来、求火。と。
則公、このことばのしたに、おおきに仏法をさとりき。

あきらかに、しりぬ。自己即仏の領解をもって、仏法をしれり、というにはあらず、ということを。
もし自己即仏の領解を仏法とせば、禅師、さきのことばをもって、みちびかじ。
又、しかのごとく、いましむべからず。

ただ、まさに、はじめ、善知識をみんより、修行の儀則を咨問して一向に坐禅弁道して、一知、半解を心にとどむることなかれ。
仏法の妙術、それ、むなしからじ。

とうて、いわく、
乾、唐の古今をきくに、あるいは、たけのこえをききて道をさとり、あるいは、はなのいろをみて、こころをあきらむるものあり。
いわんや、釈迦大師は明星をみしとき道を証し、阿難尊者は刹竿のたうれしところに法をあきらめし、のみならず、六代よりのち、五家のあいだに、一言半句のしたに心地をあきらむるもの、おおし。
かれら、かならずしも、かつて坐禅弁道せるもののみならんや？

しめして、いわく、
古今に見色明心し聞声悟道せし当人ともに、弁道に擬議(思)量なく、直下に第二人なきことをしるべし。

とうて、いわく、
西天、および、神丹国は、人、もとより、質、直なり。
中華の、しからしむるによりて、仏法を教化するに、いとはやく会入す。
我朝は、むかしより、人に仁、智、すくなくして、正種、つもりがたし。
蕃夷の、しからしむる、うらみざらんや？
又、このくにの出家人は大国の在家人にも、おとれり。
挙世おろかにして、心量、狭少なり。
ふかく有為の功を執して、事相の善をこのむ。
かくのごとくのやから、たとえ坐禅すというとも、たちまちに仏法を証得せんや？

しめして、いわく、
いうがごとし。
わがくにの人いまだ仁、智、あまねからず。
人、また、迂曲なり。
たとえ正直の法をしめすとも、甘露、かえりて、毒となりぬべし。
名利には、おもむきやすく、惑執とらけがたし。
しかは、あれども、仏法に証入すること、かならずしも人、天の世智をもって出世の舟航とするにはあらず。

仏、在世にも、てまりによりて四果を証し、袈裟をかけて大道をあきらめし、ともに、愚暗のやから、痴狂の畜類なり。
ただし、正信のたすくるところ、まどいをはなるるみちあり。
また、痴老の比丘、黙坐せしをみて、設斎の信女、さとりをひらきし。
これ、智によらず、文によらず、ことばをまたず、かたりをまたず、ただし、これ、正信にたすけられたり。
また、釈教の、三千界にひろまること、わずかに二千余年の前後なり。
刹土の、しなじな、なる、かならずしも仁、智のくににあらず。
人、また、かならずしも利智聡明のみあらんや？
しかあれども、如来の正法、もとより、不思議の大功徳力をそなえて、ときいたれば、その刹土にひろまる。
人、まさに、正信修行すれば、利、鈍をわかず、ひとしく、得道するなり。
わが朝は仁、智のくににあらず。
人に知、解おろかなりとして、仏法を会すべからず、とおもうことなかれ。
いわんや、人、みな、般若の正種、ゆたかなり。
ただ、承当すること、まれに、受用すること、いまだしきならじ。

さきの問答、往来し、賓、主、相交すること、みだりがわし。
いくばくか、はななきそらに、はなをなさしむる。
しかあれども、このくに、坐禅弁道におきて、いまだ、その宗旨、つたわれず。
しらん、と、こころざさんもの、かなしむべし。
このゆえに、いささか異域の見聞をあつめ、明師の真訣をしるしとどめて、参学のねがわんに、きこえん、とす。
このほか、叢林の規範、および、寺院の格式、いま、しめすに、いとまあらず。
又、草草にすべからず。
おおよそ我朝は龍海の以東にところして雲煙はるかなれども、欽明、用明の前後より秋方の仏法、東漸する。
これ、すなわち、人のさいわいなり。
しかあるを、名、相、事、縁、しげく、みだれて、修行のところにわずらう。
いまは、破衣綴盂を生涯として青巌白石のほとりに茅をむすんで端坐修練するに、仏向上の事、たちまちに、あらわれて、一生参学の大事、すみやかに究竟するものなり。
これ、すなわち、龍牙( or 霊山)の誡勅なり。鶏足の遺風なり。
その坐禅の儀則は、すぎぬる嘉禄のころ撰集せし普勧坐禅儀に依行すべし。

それ、仏法を国中に弘通すること、王勅をまつべしといえども、ふたたび霊山の遺嘱をおもえば、いま、百万億刹に現出せる王、公、相、将、みなともに、かたじけなく仏勅をうけて夙生に仏法を護持する素懐をわすれず生来せるものなり。
その化をしくさかい、いずれのところか、仏国土にあらざらん？
このゆえに、仏祖の道を流通せん、かならずしも、ところをえらび、縁をまつべきにあらず。
ただ、きょうをはじめ、とおもわんや？
しかあれば、すなわち、これをあつめて、仏法をねがわん哲匠、あわせて、道をとぶらい雲遊萍寄せん参学の真流に、のこす。
ときに、
寛喜辛卯　中秋日　　　　入宋 伝法 沙門 道元 記
正法眼蔵　弁道話

# 摩訶般若波羅蜜

観自在菩薩の行深般若波羅蜜多時は渾身の照見五蘊皆空なり。
五蘊は色受想行識なり。五枚の般若なり。
照見、これ、般若なり。
この宗旨の開演、現成するに、いわく、
色即是空なり。
空即是色なり。
色是色なり。
空即空なり。
百草なり。万象なり。
般若波羅蜜、十二枚、これ、十二入なり。
また、十八枚の般若あり。眼耳鼻舌身意、色声香味触法、および、眼耳鼻舌身意識、等なり。
また、四枚の般若あり。苦集滅道なり。
また、六枚の般若あり。布施、浄戒、安忍、精進、静慮、般若なり。
また、一枚の般若波羅蜜、而今、現成せり。阿耨多羅三藐三菩提なり。
また、般若波羅蜜、三枚あり。過去、現在、未来なり。
また、般若、六枚あり。地水火風空識なり。
また、四枚の般若、よのつねに、おこなわる。行住坐臥なり。

釈迦牟尼如来、会中、有、一苾蒭、竊作是念、
我、応、敬礼甚深般若波羅蜜多。
此中、雖無、諸法生滅、
而、有、戒蘊、定蘊、慧蘊、解脱蘊、(解脱)知見蘊、施設可得。
亦、有、預流果、一来果、不還果、阿羅漢果、施設可得。
亦、有、独覚菩提、施設可得。
亦、有、無上正等菩提、施設可得。
亦、有、仏、法、僧宝、施設可得。
亦、有、転妙法輪、度有情類、施設可得。

仏、知其念、告苾蒭、言、
如是、如是。
甚深般若波羅蜜、微妙、難測。

而今の、一苾蒭の竊作是念は、諸法を敬礼するところに、雖無、生滅の般若、これ、敬礼なり。
この正当、敬礼時、ちなみに、施設可得の般若、現成せり。
いわゆる、戒、定、慧、乃至、度有情類、等なり。
これを無という。
無の施設かくのごとく可得なり。
これ、甚深、微妙、難測の般若波羅蜜なり。

天帝釈、問、具寿、善現、言、
大徳、若、菩薩摩訶薩、欲学、甚深般若波羅蜜多、当、如何、学？
善現、答、言、
憍尸迦、若、菩薩摩訶薩、欲学、甚深般若波羅蜜多、当、如虚空、学。

しかあれば、学般若、これ、虚空なり。
虚空は学般若なり。

天帝釈、復、白仏、言、
世尊、
若、善男子、善女人、等、於此所説、甚深般若波羅蜜多、受持、読誦、如理、思惟、為他、演説、我、当、云何、而、為、守護？
唯願、世尊、垂哀、示教。
爾時、具寿、善現、謂天帝釈、言、
憍尸迦、汝、見、有法可守護？　不？
天帝釈、言、
不也。
大徳、我、不見、有法是可守護。
善現、言、
憍尸迦、若、善男子、善女人、等、作、如是説、甚深般若波羅蜜多、即、為、守護。
若、善男子、善女人、等、作、如所説、甚深般若波羅蜜多、常、不遠離。
当、知。
一切、人、非人、等、伺、求其便、欲為損害、終、不能得。
憍尸迦、若、欲守護、作如所説。
甚深般若波羅蜜多、諸菩薩者、無異、為欲守護虚空。

しるべし。

受持、読誦、如理、思惟、すなわち、守護、般若なり。
欲守護は受持、読誦、等なり。

先師、古仏、云、
渾身、似口、掛虚空。
不問、東西南北風。
一等、為他、談般若。
滴丁東了、滴丁東。

これ、仏祖、嫡嫡の談般若なり。
渾身、般若なり。
渾他、般若なり。
渾自、般若なり。
渾東西南北、般若なり。

釈迦牟尼仏、言、
舎利子、是諸有情、於此般若波羅蜜多、応、如仏住、供養、礼敬。
思惟、般若波羅蜜多、応、如供養礼敬(思惟)仏薄伽梵。
所以、者、何？
般若波羅蜜多、不異、仏薄伽梵。
仏薄伽梵、不異、般若波羅蜜多。
般若波羅蜜多、即是、仏薄伽梵。
仏薄伽梵、即是、般若波羅蜜多。
何以故？
舎利子、一切如来、応正等覚、皆、由般若波羅蜜多、得出現、故。
舎利子、一切菩薩摩訶薩、独覚、阿羅漢、不還、一来、預流、等、皆、由般若波羅蜜多、得出現、故。
舎利子、一切世間十善業道、四静慮、(四無量、)四無色定、五神通、皆、由般若波羅蜜多、得出現、故。

しかあれば、すなわち、仏薄伽梵は般若波羅蜜多なり。
般若波羅蜜多は是諸法なり。
この諸法は空相なり。不生不滅なり。不垢不浄、不増不減なり。
この般若波羅蜜多の現成せるは、仏薄伽梵の現成せるなり。
問取すべし。
参取すべし。

供養、礼敬する、これ、仏薄伽梵に奉覲、承事するなり。
奉覲、承事の、仏薄伽梵なり。

正法眼蔵　摩訶般若波羅蜜
爾時、天福元年、夏安居日、在、観音導利院、示衆。
寛元二年甲辰、春、三月二十一日、在、越宇、吉峰精舎、侍者、寮、書写、之。

# 現成公案

諸法の仏法なる時節、すなわち、迷悟あり、修行あり、生あり死あり、諸仏あり衆生あり。
万法ともに、われにあらざる時節、まどいなく、さとりなく、諸仏なく衆生なく、生なく滅なし。
仏道もとより豊倹より跳出せるゆえに、生滅あり、迷悟あり、生仏あり。
しかも、かくのごとくなりといえども、華は愛惜にちり、草は棄嫌におうるのみなり。
自己をはこびて万法を修、証するを迷とす。
万法すすみて自己を修、証するは、さとりなり。
迷を大悟するは諸仏なり。
悟に大迷なるは衆生なり。
さらに悟上に得悟する漢あり。
迷中又迷の漢あり。
諸仏の、まさしく諸仏なるときは、自己は諸仏なり、と覚知することをもちいず。
しかあれども、証仏なり。
仏を証しもってゆく。
身心を挙して色を見取し、身心を挙して声を聴取するに、したしく会取すれども、かがみにかげをやどすがごとくにあらず。
水と月とのごとくにあらず。
一方を証するときは一方はくらし。
仏道をならう、というは、自己をならうなり。
自己をならう、というは、自己をわするるなり。
自己をわするる、というは、万法に証せらるるなり。
万法に証せらるる、というは、自己の身心、および、他己の身心をして、脱落せしむるなり。
悟跡の休歇なるあり。
休歇なる悟跡を長長出ならしむ。
人、はじめて法をもとむるとき、はるかに法の辺際を離却せり。
法、すでに、おのれに正伝するとき、すみやかに本分人なり。
人、舟にのりてゆくに、目をめぐらして、きしをみれば、きしのうつる、とあやまる。

めをしたしく、ふねにつくれば、ふねのすすむをしるがごとく、身心を乱想して万法を弁肯するには、自心自性は常住なるか？　とあやまる。
もし行李をしたしくして箇裏に帰すれば、万法のわれにあらぬ道理あきらけし。
たきぎは、はいとなる。
さらに、かえりて、たきぎとなるべきにあらず。
しかあるを、灰はのち、薪はさき、と見取すべからず。
しるべし。
薪は薪の法位に住して、さきあり、のちあり。
前後ありといえども、前後際断せり。
灰は灰の法位にありて、後あり、先あり。
かの薪、はいとなりぬるのち、さらに薪とならざるがごとく、人のしぬるのち、さらに生とならず。
しかあるを、生の、死になる、といわざるは仏法のさだまれるならいなり。
このゆえに、不生という。
死の、生にならざる、法輪のさだまれる仏転なり。
このゆえに、不滅という。
生も一時のくらいなり。
死も一時のくらいなり。
たとえば冬と春とのごとし。
冬の、春となる、とおもはず。
春の、夏となる、といわぬなり。
人の悟をうる、水に月のやどるがごとし。
月もぬれず( or 月ぬれず)。
水もやぶれず( or 水やぶれず)。
ひろく、おおきなる光にてあれど、尺寸の水にやどり、全月も弥天も、くさの露にもやどり、一滴の水にもやどる。
悟の、人をやぶらざること、月の、水をうがたざるがごとし。
人の、悟を罣礙せざること、滴露の天月を罣礙せざるがごとし。
ふかきことは、たかき分量なるべし。
時節の長短は、大水、小水を検点し、天月の広、狭を弁取すべし。
身心に法いまだ参飽せざるには、法すでに、たれり、とおぼゆ。
法もし身心に充足すれば、ひとかたは、たらず、とおぼゆるなり。
たとえば、
船にのりて山なき海中にいでて四方をみるに、ただ、まろにのみ、みゆ。

さらに、ことなる相みゆることなし。
しかあれど、
この大海まろなるにあらず。
方なるにあらず。
のこれる海徳つくすべからざるなり。
宮殿のごとし。
瓔珞のごとし。
ただ、わがまなこのおよぶところ、しばらく、まろにみゆるのみなり。
かれがごとく、万法もまた、しかあり。
塵中格外おおく様子を帯せりといえども、参学眼力のおよぶばかりを見取、会取するなり。
万法の家風をきかんには、方、円とみゆるよりほかに、のこりの海徳、山徳おおく、きわまりなく、よもの世界あることをしるべし。
かたわらのみ、かくのごとく、あるにあらず。
直下も、一滴も、しかある、としるべし。
魚の、水を行に、ゆけども水のきわなく、鳥、そらをとぶに、とぶといえども、そらのきわ、なし。
しかあれども、魚、鳥いまだ、むかしより、みず、そらをはなれず。
ただ、用大のときは、使大なり。
要小( or 用小)のときは、使小なり。
かくのごとくして、頭頭に辺際をつくさずということなく、所所に踏翻せずということなし、といえども、鳥もし、そらをいづれば、たちまちに死す。
魚もし水をいづれば、たちまちに死す。
以水為命、しりぬべし。
以空為命、しりぬべし。
以鳥為命、あり。
以魚為命、あり。
以命為鳥、なるべし。
以命為魚、なるべし。
このほか、さらに進歩あるべし。
修、証あり、その寿者命者あること、かくのごとし。
しかあるを、水をきわめ、そらをきわめてのち、水、そらをゆかん、と擬する鳥、魚あらんは、水にも、そらにも、みちをうべからず。
ところをうべからず。
このところをうれば、この行李したがいて現成公案す。

このみちをうれば、この行李したがいて現成公案なり。
このみち、このところ、
大にあらず。小にあらず。
自にあらず。他にあらず。
さきよりあるにあらず。
いま現ずるにあらざるがゆえに、かくのごとく、あるなり。
しかあるがごとく、人もし仏道を修、証するに、
得一法、通一法なり。
遇一行、修一行なり。
これに、ところあり、みち通達せるによりて、しらるるきわの、しるからざるは、このしることの、仏法の究尽と同生し同参するゆえに、しかあるなり。
得所かならず自己の知見となりて慮知にしられんずる、とならうことなかれ。
証究すみやかに現成すといえども、密有かならずしも見成にあらず。
見成、これ、何必なり。

麻谷山、宝徹禅師、おうぎをつかうちなみに、僧きたりて、とう、
風性、常住、無所不周なり。
なにをもってか、さらに、和尚、おうぎをつかう？
師いわく、
なんじ、ただ、風性常住をしれりとも、いまだ、ところとして、いたらずということなき道理をしらず。と。
僧いわく、
いかならんか、これ、無所不周底の道理？
ときに、師、おうぎをつかうのみなり。
僧、礼拝す。

仏法の証験、正伝の活路、それ、かくのごとし。
常住なれば、おうぎをつかうべからず、つかわぬおりも風をきくべき、というは、常住をもしらず、風性をもしらぬなり。
風性は常住なるがゆえに、仏家の風は大地の黄金なるを現成せしめ、長河の蘇、酪を参熟せり。

正法眼蔵　現成公案

これは、天福元年、中秋のころ、かきて、鎮西の俗弟子、楊光秀にあたう。

(建長壬子、拾勒。)

# 一顆明珠

娑婆世界、大宋国、福州、玄沙(山)院、宗一大師、法諱、師備、俗姓者、謝なり。
在家のそのかみ、釣魚を愛し、舟を南台江にうかべて、もろもろのつり人にならいけり。
不釣自上の金鱗を不待にもありけん。唐の咸通のはじめ、たちまちに出塵をねがう。
舟をすてて山にいる。そのとし三十歳になりけり。
浮世のあやうきをさとり、仏道の高貴をしりぬ。
ついに雪峰山にのぼりて真覚大師に参じて昼夜に弁道す。
あるとき、あまねく諸方を参徹せんため(に)、嚢をたずさえて出嶺するちなみに、脚指を石に築著して流血し痛楚するに、忽然として猛省して、いわく、是身、非有。痛、自何、来？
すなわち、雪峰にかえる。
雪峰とう、那箇、是、備頭陀？
玄沙いわく、終、不敢誑於人。
このことばを雪峰ことに愛して、いわく、だれが、このことばをもたざらん？　だれが、このことばを道得せん？
雪峰さらにとう、備頭陀、なんぞ遍参せざる？
師いわく、達磨、不来東土。二祖、不往西天、(というに)、雪峰ことにほめき。
ひごろはつりする人にてあれば、もろもろの経書ゆめにもかつていまだみざりけれども、こころざしのあさからぬをさきとすれば、かたえにこゆる志気あらわれけり。
雪峰も、衆のなかにすぐれたり、とおもいて、門下の角立なり、とほめき。
衣は布をもちい、ひとつをかえざりければ、ももつづりに、つづれりけり。
はだえには紙衣をもちいけり。艾草をも、きけり。
雪峰に参ずるほかは自余の知識をとぶらわざりけり。
しかあれども、まさに、師の法を嗣するちから弁取せりき。
ついに、みちをえてのち、人にしめすに、いわく、尽十方世界、是、一箇明珠。
ときに、僧、問、
承和尚、有言、尽十方世界、是、一顆明珠。学人、如何、会得？

師、曰、
尽十方世界、是、一顆明珠。用会、作麼？

師、来日、却問、其僧、
尽十方世界、是、一顆明珠。汝、作麼生、会？
僧、曰、
尽十方世界、是、一顆明珠。用会、作麼？
師、曰、
知。汝、向黒山鬼窟裏、作活計。
いま道取する尽十方世界、是、一顆明珠、はじめて玄沙にあり。
その宗旨は、
尽十方世界は、
広大にあらず、微小にあらず、
方、円にあらず、
中、正にあらず、
鱍鱍にあらず
露回回にあらず。
さらに生死去来にあらざるゆえに、生死去来なり。
恁麼のゆえに、昔日、曾、此去にして、而今、従此、来なり。
究弁するに、
だれが片片なりと見徹するあらん？
だれが兀兀なりと検挙するあらん？
尽十方というは、逐物、為己、逐己、為物の未休なり。
情生、智隔を隔と道取する、これ、回頭、換面なり、展事、投機なり。
逐己、為物のゆえに、未休なる尽十方なり。
機先の道理なるゆえに、機要の管得にあまれることあり。
是、一顆(明)珠は、いまだ名にあらざれども、道得なり。
これを名に認じきたることあり。
一顆(明)珠は直須、万年なり。
亙古、未了なるに、亙今、到来なり。
身、今あり、心、今あり、といえども、明珠なり。
彼、此の草木にあらず、乾坤の山河にあらず、明珠なり。
学人、如何、会得？
この道取は、たとえ僧の弄、業識に相似せりとも、大用、現(前)、是、大軌則なり。
すすみて、一尺水、一尺波を突兀ならしむべし。

いわゆる、一丈珠、一丈明なり。
いわゆるの道得を道取するに、玄沙の道は尽十方世界、是、一顆明珠。用会、作麼？なり。
この道取は、仏は仏に嗣し、祖は祖に嗣す、玄沙は玄沙に嗣する、道得なり。嗣せざらん、と、回避せんに、回避のところなかるべきにあらざれども、しばらく、灼然回避するも、道取生あるは、現前の蓋時節なり。
玄沙、来日、問、其僧、
尽十方世界、是、一顆明珠。汝、作麼生、会？
これは道取す、昨日、説、定法なる。
今日、二枚をかりて出気す。
今日、説、不定法なり。
推倒、昨日、点頭、笑なり。
僧、曰、
尽十方世界、是、一顆明珠。用会、作麼？
いうべし！
騎賊馬、逐賊なり。
古仏、為汝、説するには異類中行なり。
しばらく、回光返照すべし。
幾箇枚の用会、作麼？かある？
試、道するには乳餅、七枚。菜餅、五枚。なりといえども、湘之南、潭之北の教行なり。
玄沙、曰、
知。汝、向黒山鬼窟裏、作活計。
しるべし。
日面、月面は往古より、いまだ不換なり。
日面は日面とともに共出す、月面は月面とともに共出するゆえに、若、六月、道、正是時、不可道、我性、熱、也。なり。
しかあれば、すなわち、この明珠の有如、無始は無端なり。
尽十方世界、一顆明珠なり。
両顆、三顆といわず。
全身、これ、一隻の正法眼なり。
全身、これ、真実体なり。
全身、これ、一句なり。
全身、これ、光明なり。
全身、これ、全身なり。

全身のとき、全身の罣礙なし。
円陀陀地なり。
転、轆轆なり。
明珠の功徳、かくのごとく見成なるゆえに、いまの見色、聞声の観音、弥勒あり、現身説法の古仏、新仏あり。
正当恁麼時、あるいは、虚空にかかり、衣裏にかかる、あるいは、頷下におさめ、髻中におさむる、みな、尽十方(世)界、一顆明珠。なり。
ころものうらにかかるを様子とせり。おもてにかけんと道取することなかれ。
髻中、頷下にかかるを様子とせり。髻表、頷表に弄せんと擬することなかれ。
酔酒の時節に、たまをあたうる親友あり。
親友には、かならず、たまをあたうべし。
たまをかけらるる時節、かならず、酔酒するなり。
既、是恁麼は尽十方界にてある一顆明珠なり。
しかあれば、すなわち、転、不転のおもてをかえゆくににたれども、すなわち、明珠なり。
まさに、たまは、かくありける、としる、すなわち、これ、明珠なり。
明珠は、かくのごとく、きこゆる、声、色あり。
既得恁麼なるには、われは明珠にはあらじ、と、たどらるるは、たまにはあらじ、と、うたがわざるべきなり。
たどり、うたがい、取捨する作、無作( or 作、無作も)、ただ、しばらく、小量の見なり。さらに小量に相似ならしむるのみなり。
愛せざらんや？　明珠、かくのごとくの彩光、きわまりなきなり。
彩彩光光の片片条条は尽十方界の功徳なり。
だれが、これを攙奪せん？
行市に瓦をなぐる人あらず。
六道の因果に不落、有落をわずらうことなかれ。
不昧、本来の頭正、尾正なる明珠は面目なり。明珠は眼睛なり。
しかあれども、われも、なんじも、いかなるか、これ、明珠？　いかなるか、これ、明珠にあらざる？　としらざる百思、百不思は明明の草料をむすびきたれども、玄沙の法道によりて、明珠なりける身心の様子をもききしり、あきらめつれば、心、これ、わたくしにあらず。
起、滅をだれとしてか、明珠なり、明珠にあらざる( or あらずる)？、と取捨にわずらわん。
たとえ、たどり、わずらうも明珠にあらぬにあらず。

明珠にあらぬ、が、ありて、おこさせける行にも念にも、にては、あらざれば、ただ、まさに、黒山、鬼窟の進歩、退歩、これ、一顆明珠なるのみなり。

正法眼蔵　一顆明珠
爾時、嘉禎四年、四月十八日、在、雍州、宇治県、観音導利興聖宝林寺、示衆。
寛元元年癸卯、閏七月二十三日、書写、于、越州、吉田郡、志比荘、吉峯寺院、主房侍者、比丘、懐弉。

# 重雲堂式

一。

道心ありて名利をなげすてん、ひと、いるべし。
いたずらに、まことなからんもの、いるべからず。
あやまりて、いれりとも、かんがえて、いだすべし。
しるべし。
道心ひそかにおこれば、名利たちどころに解脱するものなり。
おおよそ大千界のなかに、正嫡の付属まれなり。
わがくに、むかしより、いまこれを本源とせん。
のちをあわれみて、いまをおもくすべし。

一。

堂中の衆は、乳水のごとくに和合して、たがいに道業を一興すべし。
いまは、しばらく賓主なりとも、のちには、ながく仏祖なるべし。
しかあれば、すなわち、おのおの、ともに、あいがたきに、あいて、おこないがたきをおこなう。
まことのおもいをわするることなかれ。
これを仏祖の身心という。
かならず仏となり、祖となる。
すでに家をはなれ、里をはなれ、雲をたのみ、水をたのむ。
身をたすけ、道をたすけんこと、この衆の恩は父母にもすぐるべし。
父母は、しばらく、生死のなかの親なり。
この衆は、ながく仏道のともにてあるべし。

一。

ありきをこのむべからず。
たとえ切要には一月に一度をゆるす。
むかしのひと、とおき山にすみ、はるかなる、はやしに、おこなうし。
人事まれなるのみにあらず。
万縁ともに、すつ。
韜光晦跡せし、こころをならうべし。

いまは、これ、頭燃をはらうときなり。
このときをもって、いたずらに世縁にめぐらさん、なげかざらめや？
なげかざらめやは、無常、たのみがたし。
しらず、露命、いかなるみちのくさにか、おちん、まことに、あわれむべし。

一。

堂のうちにて、たとえ禅冊なりとも、文字をみるべからず。
堂にしては究理弁道すべし。
明窓下にむかうては古教照心すべし。
寸陰、すつることなかれ。
専一に功夫すべし。

一。

おおよそ、よるも、ひるも、さらんところをば、堂主にしらすべし。
ほしいままに、あそぶことなかれ。
衆の規矩にかかわるべし。
しらず、今生のおはりにてもあるらん、閑遊のなかに、いのちをおわん、さだめて、のちに、くやしからん。

一。

他人の非に、手、かくべからず。
にくむこころにて、ひとの非をみるべからず。
不見、他非、我、是、自然、上敬、下恭の、むかしのことばあり。
また、ひとの非をならうべからず。
わが徳を修すべし。
ほとけも非を制することあれども、にくめ、とにはあらず。

一。

大小の事、かならず、堂主にふれて、おこなうべし。
堂主にふれずして、ことをおこなわんひとは、堂をいだすべし。
賓主の礼、みだれば、正、偏、あきらめがたし。

一。

堂のうち、ならびに、その近辺にて、こえをたかくし、かしらをつどえて、ものいうべからず。
堂主、これを制すべし。

一。

堂のうちにて行道すべからず。

一。

堂のうちにて、珠数、もつべからず。
手をたれて、いでいり、すべからず。

一。

堂のうちにて、念誦、看経すべからず。
檀那の一会の看経を請せんは、ゆるす。

一。

堂のうちにて、はな、たかくかみ、つばき、たかくはくべからず。
道業のいまだ通達せざることをかなしむべし。
光陰の、ひそかにうつり、行道の、いのちをうばうことを、おしむべし。
おのずから、少水のうおのこころあらん。

一。

堂の衆、あやおりものをきるべからず。
かみぬのなどをきるべし。
むかしより、道をあきらめしひと、みな、かくのごとし。

一。

さけによいて堂中にいるべからず。
わすれて、あやまらんは、礼拝、懺悔すべし。
また、さけをとりいるべからず。
にらぎのかして堂中にいるべからず。

一。

いさかいせんものは、二人ともに下寮すべし。
みずから道業をさまたぐるのみにあらず、他人をも、さまたぐるゆえに。
いさかわんをみて制せざらんものも、おなじく、とが、あるべし。

一。

堂中のおしえにかかわらざらんは、諸人、おなじこころにて擯出すべし。
おかし、と、おなじこころにあらんは、とが、あるべし。

一。

僧、俗を堂内にまねきて、衆を起動すべからず。
近辺にても、賓客と、ものいうこえ、たかくすべからず。
ことさら、修練、自称して、供養をむさぼることなかれ。
ひさしく参学のこころざしあらんか？
あながちに巡礼のあらんは、いるべし。
そのときも、かならず、堂主にふるべし。

一。

坐禅は、僧堂のごとくにすべし。
朝参暮請、いささかも、おこたることなかれ。

一。

斎粥のとき、鉢盂の具足を地におとさんひとは、叢林の式によりて罰油あるべし。

一。

おおよそ仏祖の制誡をば、あながちに、まもるべし。
叢林の清規は、ほねにも銘ずべし。心にも銘ずべし。

一。

一生安穏にして弁道無為にあらん、と、ねがうべし。

以前の数条は、古佛の身心なり。
うやまい、したがうべし。

暦仁二年己亥、四月二十五日、観音導利興聖護国寺、開闢沙門、道元、示。
観音導利興聖護国寺　重雲堂式　終

爾時の堂主、宗信、この文をうつして、のちにつたうるなり。
ゆえに、近代流布の本のおわりに、堂主宗信の四字をのするものあり。
しかあれども、撰者にあらざること、しるべきなり。

# 即心是仏

仏仏、祖祖、いまだ、まぬがれず保任しきたれるは即心是仏のみなり。
しかあるを、西天には即心是仏なし、震旦に、はじめてきけり。
学者、おおく、あやまるによりて、将錯就錯せず。
将錯就錯せざるゆえに、おおく、外道に零落す。
いわゆる、即心の話をききて、痴人、おもわくは、衆生の慮知念覚の未発菩提心なるを、すなわち、仏とす、とおもえり。
これは、かつて正師にあわざるによりてなり。
外道のたぐいとなる、というは、西天竺国に外道あり、先尼となづく。
かれが見所のいわくは、
大道は、われらが、いまの身にあり。
その、ていたらくは、たやすく、しりぬべし。
いわゆる、苦楽をわきまえ、冷暖を自知し、痛苦を了知す。
万物にさえられず、諸境にかかわれず。
物は去来し、境は生滅すれども、霊知は、つねにありて不変なり。
この霊知、ひろく周遍せり。
凡聖含霊の隔異なし。
そのなかに、しばらく、妄法の空華ありといえども、一念相応の智慧あらわれぬれば、物も亡じ境も滅しぬれば、霊知本性ひとり了了として鎮常なり。
たとえ身相は、やぶれぬれども、霊知は、やぶれずして、いづるなり。
たとえば、人舎の失火にやくるに、舎主いでて、さるがごとし。
昭昭霊霊としてある、これを覚者、知者の性という。
これをほとけともいい、さとりとも称す。
自他おなじく具足し、迷悟ともに通達せり。
万法、諸境、ともかくもあれ、霊知は境と、ともならず、物とおなじからず、歴劫に常住なり。
いま現在せる諸境も、霊知の所在によらば、真実といいぬべし。
本性より縁起せるゆえには実法なり。
たとえ、しかありとも、霊知のごとくに常住ならず、存没するがゆえに。
明暗にかかわれず、霊知するがゆえに。
これを霊知という。
また、真我と称し、覚元といい、本性と称し、本体と称す。

かくのごとくの本性をさとるを、常住にかえりぬる、といい、帰真の大士、という。
これよりのちは、さらに、生死に流転せず、不生不滅の性海に証入するなり。
このほかは真実にあらず。
この性、あらわさざるほど、三界六道は競起する、というなり。
これ、すなわち、先尼外道が見なり。

大唐国、大証国師、慧忠和尚、問、僧、
従、何方、来？

僧、曰、
南方、来。

師、曰、
南方、有、何知識？

僧、曰、
知識、頗、多。

師、曰、
如何、示、人？

僧、曰、
彼方、知識、直下、示、学人、即心是仏。
仏、是、覚、義。
汝、今、悉、具、見聞覚知之性。
此性、善能、揚眉瞬目、去来運用。
遍、於、身中、挃頭、頭知、挃脚、脚知。
故、名、正遍知。
離此之外、更無、別仏。
此身、即、有、生滅。
心性、無始以来、未曾、生滅。
身、生滅、者、如、龍換骨、似、蛇脱皮、人出故宅。
即、身、是、無常。
其性、常、也。
南方、所説、大約、如是。

師、曰、
若、然、者、与、彼先尼外道、無有、差別。
彼、云、
我此身中、有、一神性。
此性、能、知、痛痒。
身、壊之時、神、則、出去。
如、舎、被焼、舎主、出去。
舎、即、無常。
舎主、常、矣。
審、如此者、邪正莫弁。
孰、為、之( or 是)、乎？
吾、比、遊方、多見、此色。
近、尤盛、矣。
聚却、三、五百衆、目視、雲漢、云、
是、南方、宗旨。
把、他、壇経、改換、添糅、鄙譚、削除、聖意、惑乱、後徒。
豈、成、言教？
苦哉。吾宗、喪、矣。
若、以、見聞覚知、是、(為、)仏性、者、浄名、不応云、
法、離、見聞覚知。
若、行、見聞覚知、是則、見聞覚知。非、求法、也。

大証国師は曹谿古仏の上足なり、天上、人間の大善知識なり。
国師のしめす宗旨をあきらめて参学の亀鑑とすべし。
先尼外道が見所としりて、したがうことなかれ。
(
近代、大宋国に、諸山の主人とあるやから、国師のごとくなるは、あるべからず。
むかしより、国師にひとしかるべき知識、いまだかつて出世せず。
しかあるに、世人あやまりて、おもわく、臨済、徳山も国師にひとしかるべし、と。
かくのごとくのやからのみ、おおし。
あわれむべし。明眼の師、なきことを。
いわゆる、
)
仏祖の保任する即心是仏は、外道、二乗の、ゆめにもみるところにあらず。

唯仏祖与仏祖のみ即心是仏しきたり、究尽しきたる、聞著あり、行取あり、証著あり。
仏、百草を拈却しきたり、打失しきたる。
しかあれども、丈六の金身に説似せず。
即、公案あり、見成を相待せず、敗壊を回避せず。
是、三界あり、退出にあらず、唯心にあらず。
心、牆壁あり、いまだ泥水せず、いまだ造作せず。
あるいは、
即心是仏に参究し、
心即仏是を参究し、
仏即是心を参究し、
即心仏是を参究し、
是仏心即を参究す。
かくのごとくの参究、まさしく、即心是仏。
これを挙して即心是仏に正伝するなり。
かくのごとく正伝して今日にいたれり。
いわゆる、正伝しきたれる心というは、一心、一切法。一切法、一心。なり。
このゆえに、古人いわく、若、人、識得、心、大地、無、寸土。
しるべし。
心を識得するとき、蓋天、撲落し、匝地、裂破す。
あるいは、心を識得すれば、大地、さらに、あつさ三寸をます。
古徳、云、作麼生、是、妙浄明心？　山河大地、日月星辰。
あきらかにしりぬ。
心とは、山河大地なり、日月星辰なり。
しかあれども、この道取するところ、すすめば、不足あり、しりぞくれば、あまれり。
山河大地心は、山河大地のみなり。さらに、波浪なし、風煙なし。
日月星辰心は、日月星辰のみなり。さらに、きりなし、かすみなし。
生死去来心は、生死去来のみなり。さらに、迷なし、悟なし。
牆壁瓦礫心は、牆壁瓦礫のみなり。さらに、泥なし、水なし。
四大五蘊心は、四大五蘊のみなり。さらに、馬なし、猿なし。
椅子払子心は、椅子払子のみなり。さらに、竹なし、木なし。
かくのごとくなるがゆえに、即心是仏、不染汚、即心是仏なり。
諸仏、不染汚、諸仏なり。
しかあれば、すなわち、即心是仏とは、発心、修行、菩提、涅槃の諸仏なり。

いまだ発心、修行、菩提、涅槃せざるは、即心是仏にあらず。
たとえ一刹那に発心、修、証するも即心是仏なり。
たとえ一極微中に発心、修、証するも即心是仏なり。
たとえ無量劫に発心、修、証するも即心是仏なり。
たとえ一念中に発心、修、証するも即心是仏なり。
たとえ半拳裏に発心、修、証するも即心是仏なり。
しかあるを、長劫に修行、作仏するは即心是仏にあらず、というは、即心是仏をいまだみざるなり、いまだしらざるなり、いまだ学せざるなり、即心是仏を開演する正師をみざるなり。
いわゆる、諸仏とは、釈迦牟尼仏なり。
釈迦牟尼仏、これ、即心是仏なり。
過去、現在、未来の諸仏ともに、ほとけとなるときは、かならず、釈迦牟尼仏となるなり。
これ、即心是仏なり。

正法眼蔵　即心是仏
爾時、延応元年、五月二十五日、在、雍州、宇治郡、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 洗浄

仏祖の護持しきたれる修、証あり。いわゆる、不染汚なり。

南嶽山、観音院、大慧禅師、因、六祖、問、
還、仮、修証？　不？
大慧、云、
修、証、不無、染汚、即、不得。
六祖、云、
只是不染汚、諸仏之所護念。
汝、亦、如是。
吾、亦、如是。
乃至、西天祖師、亦、如是。
云云。

大比丘三千威儀経、云、
浄身、者、洗、大小便、剪、十指爪。

しかあれば、身心、これ、不染汚なれども、浄身の法あり、浄心の法あり。
ただ身心をきよむるのみにあらず。国土、樹下をも、きよむるなり。
国土、いまだかつて塵穢あらざれども、きよむるは、諸仏之所護念なり。
仏果にいたりて、なお退せず、廃せざるなり。
その宗旨、はかりつくすべきことかたし。
作法、これ、宗旨なり。
得道、これ、作法なり。

華厳経、浄行品、云、
左右便利、当願、衆生、蠲除、穢汚、無、婬怒痴。
已而就水、当願、衆生、向、無上道、得、出世法。
以水、滌穢、当願、衆生、具足、浄忍、畢竟、無垢。

水、かならずしも本、浄にあらず、本、不浄にあらず。
身、かならずしも本、浄にあらず、本、不浄にあらず。
諸法、また、かくのごとし。
水、いまだ情、非情にあらず。

身、いまだ情、非情にあらず。
諸法、また、かくのごとし。
仏世尊の説、それ、かくのごとし。
しかあれども、水をもって身をきよむるにあらず。
仏法によりて仏法を保任するに、この儀あり。
これを洗浄と称す。
仏祖の一身心をしたしくして正伝するなり。
仏祖の一句子をちかく見聞するなり。
仏祖の一光明をあきらかに住持するなり。
おおよそ、無量、無辺の功徳を現成せしむるなり。
身心に修行を威儀せしむる正当恁麼時、すなわち、久遠の本行を具足、円成せり。
このゆえに、修行の身心、本現するなり。

十指の爪をきるべし。
十指というは、左右の両手の指のつめなり。
足指の爪、おなじく、きるべし。
経に、いわく、
つめのながさ、もし、一麦ばかりになれば、罪をうるなり。

しかあれば、爪をながくすべからず。
爪のながきは、おのずから、外道の先蹤なり。
ことさら、つめをきるべし。
しかあるに、いま、大宋国の僧家のなかに、参学眼そなわらざるともがら、おおく、爪をながからしむ。
あるいは、一寸、両寸、および、三、四寸にながきもあり。
これ、非法なり。
仏法の身心にあらず。
仏家の稽古あらざるによりて、かくのごとし。
有道の尊宿は、しかあらざるなり。
あるいは、長髪ならしむるともがらあり。
これも非法なり。
大国の僧家の所作なり、として、正法ならん、と、あやまることなかれ。
先師、古仏、ふかく、いましめのことばを天下の僧家の長髪、長爪のともがらにたまうに、いわく、
不会、浄髪、不是、俗人、不是、僧家、便是、畜生。

古来、仏祖、誰、是、不浄髪者？
如今、不会、浄髪、真箇、是、畜生。

かくのごとく示衆するに、年来、不剃頭のともがら、剃頭せる、おおし。

あるいは、上堂、あるいは、普説のとき、弾指、かまびすしくして、責呵す。
いかなる道理？　としらず、胡乱に長髪、長爪なる。
あわれむべし、南閻浮の身心をして非道におけること。
近来、二、三百年、祖師道、廃せるゆえに、しかのごとくのともがら、おおし。
かくのごとくのやから、寺院の主人となり、師号に署して為衆の相をなす、人、天の無福なり。
いま、天下の諸山に、道心箇、渾無なり、得道箇、久絶なり、祗管、破落党のみなり。

かくのごとく普説するに、諸方に長老の名をみだりにせるともがら、うらみず、陳説なし。
しるべし。
長髪は仏祖のいましむるところ、長爪は外道の所行なり。
仏祖の児孫、これらの非法をこのむべからず。
身心をきよからしむべし。
剪爪、剃髪すべきなり。

洗大小便おこたらしむることなかれ。
舎利弗、この法をもって、外道を降伏せしむることありき。
外道の本期にあらず、身子が素懐にあらざれども、仏祖の威儀、現成するところに、邪法、おのずから、伏するなり。
樹下、露地に修習するときは、起屋なし、便宜の谿谷、河水、等によりて、分土、洗浄するなり。
これは灰なし。
ただ二七丸の土をもちいる。
二七丸をもちいる法は、まず、法衣をぬぎて、たたみおきてのち、くろからず黄色なる土をとりて、一丸のおおきさ、大なる大豆許に分して、いしのうえ、あるいは、便宜のところに、七丸をひとならべにおきて、二七丸をふたえに、ならべおく。
そののち、磨石にもちいるべき石をもうく。

そののち屙す。
屙後、使籌、あるいは、使紙。
そののち、水辺にいたりて、洗浄する。
まず、三丸の土をたずさえて、洗浄す。
一丸土を掌にとりて、水、すこしばかりをいれて、水に合して、ときて、泥よりもうすく、漿ばかりになして、まず、小便を洗浄す。
つぎに、一丸の土をもって、さきのごとくして、大便所を洗浄す。
つぎに、一丸の土をさきのごとくして、略して触手をあらう。
寺舎に居してよりこのかたは、その屋を起立せり。
これを東司と称す。
あるときは圊といいい、厠というときもありき。
僧家の所住に、かならずあるべき屋舎なり。
東司にいたる法は、かならず、手巾をもつ。
その法は、手巾をふたえにおりて、ひだりのひじのうえにあたりて、衫袖のうえにかくるなり。
すでに東司にいたりては、浄竿に手巾をかくべし。
かくる法は、臂にかけたりつるがごとし。
もし九条、七条、等の袈裟を著してきたれらば、手巾にならべて、かくべし。
おちざらんように打併すべし。
倉卒に、なげかくることなかれ。
よくよく記号すべし。
記号というは、浄竿に字をかけり。
白紙にかきて月輪のごとく円にして、浄竿につけ、列せり。
しかあるを、いずれの字に、わが直裰はおけり、と、わすれず、みだらざるを記号というなり。
衆家、おおくきたらんに、自他の竿位を乱すべからず。
このあいだ、衆家、きたりて、たちつらなれば、叉手して揖すべし。
揖するに、かならずしも、あいむかいて曲躬せず。
ただ叉手をむねのまえにあてて気色ある揖なり。
東司にては、直裰を著せざるにも、衆家と揖し気色するなり。
もし両手ともに、いまだ触せず、両手ともに、ものをひっさげざるには、両手を叉して揖すべし。
もし、すでに一手を触せしめ、一手にものを提せらんときは、一手にて揖すべし。

一手にて揖するには、手をあふげて、指頭、すこしきかがめて、水を掬せんとするがごとくしてもちて、頭をいささか低頭せんとするがごとく揖するなり。
他、かくのごとくせば、おのれ、かくのごとくすべし。
おのれ、かくのごとくせば、他、また、しかあるべし。
褊衫、および、直裰を脱して、手巾のかたわらに、かく。
かくる法は、直裰をぬぎとりて、ふたつのそでをうしろへあわせて、ふたつのわきのしたをとりあわせて、ひきあぐれば、ふたつのそで、かさなれる。
このときは、左手にては直裰のうなじのうらのもとをとり、右手にては、わきをひきあぐれば、ふたつのたもとと左右の両襟と、かさなるなり。
両袖と両襟とをかさねて、また、たてざまに、なかより、おりて、直裰のうなじを浄竿の那辺へなげこす。
直裰の裙、ならびに、袖口、等は竿の遮辺にかかれり。
たとえば、直裰の合腰、浄竿にかくるなり。
つぎに、竿にかけたりつる手巾の遮、那、両端をひきちがえて、直裰より、ひきこして、手巾のかからざりつるかたにて、また、ちがえて、むすび、とどむ。
両、三匝も、ちがえちがえして、むすびて、直裰を浄竿より落地せしめざらんとなり。
直裰にむかいて合掌す。
つぎに、絆子をとりて両臂にかく。
つぎに、浄架にいたりて、浄桶に水をもりて、右手に提して浄廁にのぼる。
浄桶に水をいるる法は、十分にみつることなかれ。九分を度とす。
廁門のまえにして換鞋すべし。
蒲鞋をはきて、自鞋を廁門の前に脱するなり。
これを換鞋という。

禅苑清規、云、
欲、上、東司、応須、預、往。
勿、致臨時、内逼、倉卒。
乃、畳、袈裟、安、寮中、案上、或、浄竿上。

廁内にいたりて、左手にて門扉を掩す。
つぎに、浄桶の水をすこしばかり槽裏に瀉す。
つぎに、浄桶を当面の浄桶位に安ず。
つぎに、たちながら槽にむかいて弾指、三下すべし。

弾指のとき、左手は拳にして、左腰につけて、もつなり。
つぎに、袴口、衣角をおさめて、門にむかいて両足に槽唇の両辺をふみて、蹲居し、屙す。
両辺をけがすことなかれ。
前後にそましむることなかれ。
このあいだ、黙然なるべし。
隔壁と語笑し、声をあげて吟詠することなかれ。
涕唾、狼藉なることなかれ。
怒気、卒暴なることなかれ。
壁面に字をかくべからず。
厠籌をもって地面を画することなかれ。
屙尿、退後、すべからく使籌すべし。
また、かみをもちいる法あり。
故紙をもちいるべからず。
字をかきたらん紙、もちいるべからず。
浄籌、触籌、わきまうべし。
籌は、ながさ八寸につくりて三角なり。
ふとさは手拇指大なり。
漆にて、ぬれるもあり。
未漆なるもあり。
触は籌斗になげおき、浄は、もとより籌架にあり。
籌架は槽のまえの版頭のほとりにおけり。
使籌、使紙ののち、洗浄する法は、右手に浄桶をもちて、左手をよくよくぬらしてのち、左手を掬につくりて水をうけて、まず、小便を洗浄す(ること)三度、つぎに、大便をあらう。
洗浄、如法にして、浄潔ならしむべし。
このあいだ、あらく浄桶をかたむけて、水をして、手のほかに、あまし、おとし、あふれ、ちらして、水をはやくうしなうことなかれ。
洗浄しおわりて、浄桶を安桶のところにおきて、つぎに、籌をとりて、のごい、かわかす。
あるいは、紙をもちいるべし。
大小両所、よくよく、のごい、かわかすべし。
つぎに、右手にて袴口、衣角をひき、つくろいて、右手に浄桶を提して、厠門をいづるちなみに、蒲鞋をぬぎて自鞋をはく。
つぎに、浄架にかえりて、浄桶を本所に安ず。

つぎに、洗手すべし。
右手に灰匙をとりて、まず、すくいて、瓦石のおもてにおきて、右手をもって滴水を点じて触手をあらう。
瓦石にあてて、とぎ、あらうなり。
たとえば、さびあるかたなをとにあてて、とぐがごとし。
かくのごとく、灰にて三度あらうべし。
つぎに、土をおきて、水を点じて、あらうこと三度すべし。
つぎに、右手に皀莢をとりて、小桶の水にさし、ひたして、両手あわせて、もみあらう。
腕にいたらんとするまでも、よくよく、あらうなり。
誠心に住して慇懃にあらうべし。
灰、三、土、三、皀莢、一なり。
あわせて一七度を度とせり。
つぎに、大桶にて、あらう。
このときは、面薬、土、灰、等をもちいず。
ただ水にても、湯にても、あらうなり。
一番あらいて、その水を小桶にうつして、さらに、あたらしき水をいれて、両手をあらう。
華厳経、云、
以、水、盥、掌、当願、衆生、得、上妙手( or 上好手)、受持、仏法。

水杓をとらんことは、かならず右手にて、すべし。
このあいだ、桶、杓、おとをなし、かまびすしくすることなかれ。
水をちらし、皀莢をちらし、水架の辺をぬらし、おおよそ倉卒なることなかれ。
狼藉なることなかれ。
つぎに、公界の手巾に手をのごう。
あるいは、みずからが手巾にのごう。
手をのごいおわりて、浄竿のした、直裰のまえにいたりて、絆を脱して竿にかく。
つぎに、合掌してのち、手巾をとき、直裰をとりて、著す。
つぎに、手巾を左臂にかけて塗香す。
公界に塗香あり。
香木を宝瓶形につくれり。
その大は拇指大なり。
ながさ四指量につくれり。

繊索の尺余なるをもちて、香の両端に穿貫せり。
これを浄竿に、かけおけり。
これを両掌をあわせて、もみあわすれば、その香気、おのずから両手に薫ず。
絆を竿にかくるとき、おなじく、うえにかけ、かさねて、絆と絆と、みだらしめ、乱縷せしむることなかれ。
かくのごとくする、みな、これ、浄仏国土なり、荘厳仏国なり。
審細にすべし。
倉卒にすべからず。
いそぎ、おわりて、かえりなばや、と、おもい、いとなむことなかれ。
ひそかに、東司上、不説仏法の道理を思量すべし。
衆家の、きたり、いる面をしきりに、まもることなかれ。
厠中の洗浄には冷水をよろしとす。
熱湯は腸風をひきおこす、という。
洗手には温湯をもちいる。さまたげなし。
釜、一隻をおくことは、焼湯、洗手のためなり。
清規、云、
晩後、焼湯、上油、常、令、湯水、相続、無使、大衆、動念。

しかあれば、しりぬ。
湯水ともに、もちいるなり。
もし厠中の触せることあらば、門扉を掩して触牌をかくべし。
もし、あやまりて落桶あらば、門扉を掩して落桶牌をかくべし。
これらの牌かかれらん局には、のぼることなかれ。
もし、さきより厠上にのぼれらんに、ほかに人ありて弾指せば、しばらく、いづべし。

清規、云、
若、不洗浄、
不得、坐、僧牀、及、礼、三宝。
亦、不得、受、人礼拝。

三千威儀経、云、
若、不洗大小便、得、突吉羅罪。
亦、不得、僧浄坐具上、坐、及、礼、三宝。設礼、無福徳。

しかあれば、すなわち、弁道功夫の道場、この儀をさきにすべし。

あに三宝を礼せざらんや？
あに人の礼拝をうけざらんや？
あに人を礼せざらんや？
仏祖の道場、かならず、この威儀あり。
仏祖道場中人、かならず、この威儀、具足あり。
これ、自己の強為にあらず。
威儀の云為なり。
諸仏の常儀なり。
諸祖の家常なり。
ただ此界の諸仏のみにあらず。
十方の仏儀なり。
浄土、穢土の仏儀なり。
少聞のともがら、おもわくは、諸仏には厠屋の威儀あらず、娑婆世界の諸仏の威儀は浄土の諸仏のごとくにあらず、と、おもう。
これは学仏道にあらず。
しるべし。
浄穢は離人の滴血なり。
あるときは、あたたかなり。
あるときは、すさまじ。
諸仏に厠屋あり。
しるべし。

十誦律、第十四、云、
羅睺羅沙弥、宿、仏厠。
仏、覚了、仏、以、右手、摩、羅睺羅、頂、説、是偈、言、
汝、不為、貧窮、
亦、不失、富貴、
但為、求道、故、出家。
応、忍、苦。

しかあれば、すなわち、仏道場に厠屋あり。
仏厠屋裏の威儀は洗浄なり。
祖祖、相伝しきたれり。
仏儀の、なお、のこれる、慕古の慶快なり、あいがたきにあえるなり。
いわんや、如来、かたじけなく、厠屋裏にして、羅睺羅のために説法しまします。

廁屋は仏転法輪の一会なり。
この道場の進止、これ、仏祖、正伝せり。

摩訶僧祇律、第三十四、云、
廁屋、不得、在東、在北。応、在南、在西。
小行、亦、如是。

この方宜によるべし。
これ、西天竺国、諸精舎の図なり。
如来、現在の建立なり。
しるべし。
一仏の仏儀のみにあらず。
七仏の道場なり。
精舎なり。
はじめたるにあらず。
諸仏の威儀なり。
これらをあきらめざらんよりさきは、寺院を草創し、仏法を修行せん、あやまりは、おおく、仏威儀、そなわらず、仏菩提、いまだ現前せざらん。
もし道場を建立し、寺院を草創せんには、仏祖正伝の法儀によるべし。
これ、正嫡、正伝の法儀によるべし。
これ、正嫡、正伝なるがゆえに、その功徳、あつめ、かさなれり。
仏祖正伝の嫡嗣にあらざれば、仏法の身心、いまだしらず。
仏法の身心、しらざれば、仏家の仏業、あきらめざるなり。
いま、大師、釈迦牟尼仏の仏法、あまねく十方につたわれる、というは、仏身心の現成なり。
仏身心、現成の正当恁麼時、かくのごとし。

正法眼蔵　洗浄
爾時、延応元年己亥、冬、十月二十三日、在、雍州、宇治県、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 礼拝得髄

修行、阿耨多羅三藐三菩提の時節には、導師をうること、もっともかたし。
その導師は、男女等の相にあらず、大丈夫なるべし、恁麼人なるべし。
古今、人にあらず、野狐精にして善知識ならん。
これ、得髄の面目なり、導利なるべし。
不昧因果なり、爾我渠なるべし。
すでに導師を( or 導師に)相逢せんよりこのかたは、万縁をなげすてて、寸陰をすごさず、精進、弁道すべし。
有心にても修行し、無心にても修行し、半心にても修行すべし。
しかあれば、頭燃をはらい、翹足を学すべし。
かくのごとくすれば、訕謗の魔党におかされず、断臂得髄の祖さらに他にあらず、脱落身心の師すでに自なりき。
髄をうること、法をつたうること、必定して、至誠により、信心によるなり。
誠心、ほかよりきたるあとなく、内よりいづる方なし。
ただ、まさに、法をおもくし、身をかろくするなり。
世をのがれ、道をすみかとするなり。
いささかも、身をかえりみること、法よりも、おもきには、法、つたわれず、道、うることなし。
その法をおもくする志気、ひとつにあらず、他の教訓をまたずといえども、しばらく、一、二を挙拈すべし。
いわく、
法をおもくするは、
たとえ露柱なりとも、
たとえ灯籠なりとも、
たとえ諸仏なりとも、
たとえ野干なりとも、
鬼神なりとも、
男女なりとも、
大法を保任し吾髄を汝得せるあらば、身心を牀座にして、無量劫にも奉事するなり。
身心は、うることやすし。世界に稲麻竹葦のごとし。
法は、あうことまれなり。
釈迦牟尼仏の、いわく、

無上菩提を演説する師にあわんには、
種姓を観ずることなかれ。
容顔をみることなかれ。
非をきらうことなかれ。
行をかんがうることなかれ。
ただ般若を尊重するがゆえに、
日日に百、千両の金を食せしむべし。
天食をおくりて供養すべし。
天華を散じて供養すべし。
日日、三時に礼拝し恭敬して、さらに患悩の心を生ぜしむることなかれ。
かくのごとくすれば、菩提の道、かならず、ところあり。
われ、発心よりこのかた、かくのごとく修行して、今日は阿耨多羅三藐三菩提をえたるなり。

しかあれば、若、樹、若、石も、とかまし、とねがい、若、田、若、里も、とかまし、と、もとむべし。
露柱に問取し、牆壁をしても参究すべし。
むかし、野干を師として礼拝、問法する天帝釈あり。大菩薩の称、つたわれり。依業の尊卑によらず。
しかあるに、不聞仏法の愚痴のたぐい、おもわくは、
われは大比丘なり。年少の得法を拝すべからず。
われは久修練行なり。得法の晩学を拝すべからず。
われは師号に署せり。師号なきを拝すべからず。
われは法務司なり。得法の余僧を拝すべからず。
われは僧正司なり。得法の(俗男、)俗女を拝すべからず。
われは三賢十聖なり。得法せりとも比丘尼等を(礼)拝すべからず。
われは帝胤なり、得法なりとも臣家相門を拝すべからず。
という。

かくのごとくの痴人、いたずらに父国をはなれて他国の道路に跉跰するによりて、仏道を見聞せざるなり。

むかし、唐朝の趙州、真際大師、こころをおこして発足、行脚せしちなみに、いう、
たとえ七歳なりとも、われよりも勝ならば、われ、かれに、とうべし。
たとえ百歳なりとも、われよりも劣ならば、われ、かれを、おしうべし。

七歳に問法せんとき、老漢、礼拝すべきなり。
奇夷の志気なり。
古仏の心術なり。
得道、得法の比丘尼、出世せるとき、求法、参学の比丘僧、その会に投じて礼拝、問法するは、参学、勝躅なり。
たとえば、渇に飲にあうがごとくなるべし。

震旦国の志閑禅師は臨済下の尊宿なり。

臨済、ちなみに、師のきたるをみて、とり、とどむるに、師、いわく、
領、也。
臨済、はなちて、いわく、
旦、放、爾、一頓。

これより、臨済の子となれり。

臨済をはなれて末山にいたるに、末山、とう、
近、離、甚所？
師、いわく、
路口。
末山、いわく、
なんじ、なんぞ蓋却しきたらざる？
師、無語、すなわち、礼拝して師資の礼をもうく。
師、かえりて、末山に、とう、
いかならんか、これ、末山？
末山、いわく、
不露、頂。
師、いわく、
いかならんか、これ、山中人？
末山、いわく、
非、男女等、相。
師、いわく、
なんじ、なんぞ変ぜざる？
末山、いわく、
これ、野狐精にあらず。なにをか変ぜん？

師、礼拝す。

ついに発心して園頭をつとむること始終三年なり。
のちに出世せりしとき、衆にしめして、いわく、
われ、
臨済爺爺のところにして半杓を得しき。
末山孃孃のところにして半杓を得しき。
ともに一杓につくりて喫しおわりて直、至、如今、飽飽飽なり。

いま、この道をききて、昔日のあとを慕古するに、
末山は高安大愚の神足なり。
命脈ちからありて、志閑の孃となる。
臨済は黄檗運師の嫡嗣なり。
功夫ちからありて、志閑の爺となる。
爺とは、ちち、というなり。
孃とは、はは、というなり。
志閑禅師の、末山尼了然を礼拝、求法する、志気の勝躅なり、晩学の慣節なり、撃関破節というべし。

妙信尼は仰山の弟子なり。
仰山、ときに、廨院主を選するに、仰山、あまねく勤旧、前資、等にとう、だれ人か、その仁なる？
問答、往来するに、仰山、ついに、いわく、
信淮子、これ、女流なりといえども大丈夫の志気あり。まさに、廨院主とするに、たえたり。
衆、みな、応諾す。
妙信、ついに廨院主に充す。
ときに、仰山の会下にある龍象うらみず。
まことに、非細の職にあらざれども、選にあたらん自己としては自愛しつべし。
充職して廨院にあるとき、蜀僧、十七人ありて、党をむすびて尋師訪道するに、仰山にのぼらんとして薄暮に廨院に宿す。
歇息する夜話に、曹谿高祖の風幡の話を挙す。
十七人、おのおの、いうこと、みな、道不是なり。
ときに、廨院主、かべのほかにありて、ききて、いわく、

十七頭の瞎驢、おしむべし。いくばくの草鞋をか、ついやす？　仏法、也、未夢見在。
ときに、行者ありて、廨院主の、僧を不肯するをききて、十七僧にかたるに、十七僧ともに廨院主の不肯するをうらみず、おのれが道不得をはじて、すなわち、威儀を具し、焼香、礼拝して請問す。
廨院主、いはく、
近、前、来。
十七僧、近、前する、あゆみ、いまだやまざるに、廨院主、いはく、
不是、風動。不是、幡動。不是、心動。
かくのごとく為道するに、十七僧ともに有省なり、礼謝して師資の儀をなす。
すみやかに西蜀にかえる。
ついに仰山にのぼらず。

まことに、これ、三賢十聖のおよぶところにあらず。
仏祖嫡嫡の道業なり。
しかあれば、いまも、住持および半座の職むなしからんときは、比丘尼の得法せらんを請すべし。
比丘の高年、宿老なりとも、得法せざらん、なにの要か、あらん？
為衆の主人、かならず、明眼によるべし。
しかあるに、村人の身心に沈溺せらんは、かたくなにして、世俗にも、わらいぬべきこと、おおし。
いわんや、仏法には、いうにたらず。
また、女人および姉姑、等の伝法の師僧を拝、不肯ならん、と擬するもありぬべし。
これは、しることなく学せざるゆえに、畜生には、ちかく、仏祖には、とおきなり。
一向に仏法に身心を投ぜんことをふかく、たくわうるこころとせるは、仏法、かならず、人をあわれむことあるなり。
おろかなる人、天、なお、まことを感ずる、おもいあり。
諸仏の正位( or 正法)、いかでか、まことに感応する、あわれみなからん？
土石、沙礫にも、誠感の至神はあるなり。
見在、大宋国の寺院に、比丘尼の掛搭せるが、もし得法の声あれば、官家より尼寺の住持に補すべき詔をたまうには、即、寺にて上堂す。
住持以下、衆僧みな、上参して立地、聴法するに、問話も比丘僧なり。これ、古来の規矩なり。

得法せらんは、すなわち、一箇の真箇なる古仏にてあれば、むかしの、だれにて相見すべからず。
かれ、われをみるに、新条の特地に相接す。
われ、かれをみるに、今日須入今日の相待なるべし。
たとえば、正法眼蔵を伝持せらん比丘尼は、四果、支仏、および、三賢十聖も、きたりて礼拝、問法せんに、比丘尼、この礼拝をうくべし。
男児、なにをもってか貴ならん？
虚空は虚空なり。
四大は四大なり。
五蘊は五蘊なり。
女流もまた、かくのごとし。
得道は、いずれも、得道す。
ただし、いずれも、得法を敬重すべし。
男女を論ずることなかれ。
これ、仏道、極妙の法則なり。
また、宋朝に居士というは、未出家の士(大)夫なり。
庵居して夫婦そなわれるもあり、また孤独、潔白なるもあり。
なお塵労、稠林というべし。
しかあれども、あきらむるところあるは、雲衲霞袂、あつまりて礼拝、請益すること、出家の宗匠におなじ。
たとえ女人なりとも、畜生なりとも、また、しかあるべし。
仏法の道理、いまだゆめにもみざらんは、たとえ百歳なる老比丘なりとも、得法の男女におよぶべきにあらず。うやまうべからず。ただ賓主の礼のみなり。
仏法を修行し、仏法を道取せんは、たとえ七歳の女流なりとも、すなわち、四衆の導師なり、衆生の慈父なり。
たとえば、龍女成仏のごとし。
供養、恭敬せんこと、諸仏、如来にひとしかるべし。
これ、すなわち、仏道の古儀なり。
しらず、単伝せざらんは、あわれむべし。

また、和、漢の古今に、帝位にして女人あり。
その国土みな、この帝王の所領なり。
人みな、その臣となる。
これは人をうやまうにあらず、位をうやまうなり。

比丘尼もまた、その人をうやまうことは、むかしよりなし。ひとえに得法をうやまうなり。
また、阿羅漢となれる比丘尼のあるには、四果にしたがう功徳みな、きたる。
功徳、なお、したがう。
人、天、だれが四果の功徳よりも、すぐれん？
三界の諸天みな、およぶところにあらず。
しかしながら、すつるものとなる。
諸天みな、うやまうところなり。
いわんや、如来の正法を伝来し菩薩の大心をおこさん、だれの、うやまわざるか、あらん？
これをうやまわざらんは、おのれが、おかしなり。
おのれが無上菩提をうやまわざれば、謗法の愚痴なり。
また、わが国には、帝者のむすめ、あるいは、大臣のむすめの、后宮に準ずるあり。
また、皇后の院号せるあり。
これら、かみをそれるあり、かみをそらざるあり。
しかあるに、貪名愛利の比丘僧ににたる僧侶、この家門にはしるに、こうべをはきものにうたず、ということなし。
なお、主従よりも劣なり。
いわんや、また、奴僕となりて、としをふるも、おおし。
あわれなるかな、小国、辺地にうまれぬるに、かくのごときの、邪風とも、しらざることは。
天竺、唐土には、いまだなし。
我国のみなり。
かなしむべし。
あながちに鬢髪をそりて如来の正法をやぶる、深重の罪業というべし。
これ、ひとえに、夢幻、空華の世途をわするるによりて、女人の奴僕と繋縛せられたること、かなしむべし。
いたずらなる世途のため、なお、かくのごとくす。
無上菩提のため、なんぞ得法の、うやまうべきをうやまわざらん？
これは法をおもくするこころざし、あさく、法をもとむるこころざし、あまねからざるゆえなり。
すでに、たからをむさぼるとき、女人のたからにてあれば、うべからず、と、おもわず。
法をもとめんときは、このこころざしには、すぐるべし。

もし、しかあらば、草木、牆壁も正法をほどこす。
天地万法も正法をあたうるなり。
かならず、しるべき道理なり。
真善知識にあうといえども、いまだこの志気をたてて法をもとめざるときは、法水のうるおい、こうむらざるなり。
審細に功夫すべし。
また、いま、至愚のはなはだしき人おもうことは、女流は貪婬所対の境界にてあり、と、おもうこころをあらためずして、これをみる。
仏子、かくのごとく、あるべからず。
貪婬所対の境となりぬべし、とて、いむことあらば、一切男子もまた、いむべきか？
染汚の因縁となることは、男も境となる。
女も境縁となる。
非男非女も境縁となる。
夢幻、空華も境縁となる。
あるいは、水影を縁として非梵行あることありき。
あるいは、天日を縁として非梵行ありき。
神も境となる。
鬼も境となる。
その縁、かぞえつくすべからず。
八万四千の境界あり、という。
これ、みな、すつべきか？　みるべからざるか？
律、云、
男、二所、女、三所、おなじく、これ、波羅夷、不、共住。

しかあれば、婬所対の境になりぬべし、とて、きらわば、一切の男子と女人と、たがいに、あいきらうて、さらに、得度の期、あるべからず。
この道理、子細に換点すべし。
外道も妻なきあり。
妻なしといえども、仏法にいらざれば、邪見の外道なり。
仏弟子も在家の二衆は夫婦あり。
夫婦あれども、仏弟子なれば、人中、天上にも、肩をひとしくする余類なし。

また、唐国にも愚痴僧ありて、願志を立するに、いわく、
生生、世世、ながく、女人をみることなからん。

この願、なにの法にか、よる？
世法によるか？
仏法によるか？
外道の法によるか？
天魔の法によるか？
女人、なにの、とががある？
男子、なにの、徳がある？
悪人は男子も悪人なるあり。
善人は女人も善人なるあり。
聞法をねがい出離をもとむること、かならず、男子、女人によらず。
もし未断惑のときは、男子、女人、おなじく、未断惑なり。
断惑、証理のときは、男子、女人、簡別、さらにあらず。
また、ながく女人をみじ、と願せば、衆生無辺誓願度のときも、女人をば、すつべきか？
すてては菩薩にあらず。仏、慈悲といわんや？
ただ、これ、声聞の酒にようことふかきによりて、酔狂の言語なり。
人、天、これをまことと信ずべからず。
また、むかし犯罪ありし、とて、きらわば、一切菩薩をも、きらうべし。
もし、のちに犯罪ありぬべし、とて、きらわば、一切発心の菩薩をも、きらうべし。
かくのごとく、きらわば、一切みな、すてん。なにによりてか仏法、現成せん？
かくのごとくのことばは、仏法をしらざる痴人の狂言なり。
かなしむべし。
もし、なんじが願のごとくにあらば、釈尊、および、在世の諸菩薩みな、犯罪ありけるか？　また、なんじより菩提心も、あさかりけるか？
しずかに観察すべし。
付、法蔵の祖師、および、仏在世の菩薩、この願なくば、仏法にならうべきところや、ある？　と参学すべきなり。
もし汝が願のごとくにあらば、女人を済度せざるのみにあらず、得法の女人、よにいでて人、天のために説法せんときも、きたりて、きくべからざるか？
もし、きたりて、きかずば、菩薩にあらず、すなわち、外道なり。
今、大宋国をみるに、久修練行に似たる僧侶の、いたずらに海沙をかぞえて、生死海に流浪せるあり。
女人にてあれども、参尋知識し弁道功夫して人、天の導師にてある、あり。

餅をうらず餅をすてし老婆、等あり。
あわれむべし、男子の比丘僧にてあれども、いたずらに教海のいさごをかぞえて、仏法は夢にもいまだみざることを。
おおよそ、境をみては、あきらむることをならうべし。
おじて、にぐる、とのみ、ならうは、小乗、声聞の教行なり。
東をすてて西にかくれん、とすれば、西にも境界、なきにあらず。
たとえ、にげぬるとおもう、と、あきらめざるにも、遠にても境なり。
なお、これ、解脱の分にあらず。
遠境は、いよいよ、ふかかるべし。

また、日本国に、ひとつの、わらいごとあり。
いわゆる、あるいは、結界の境地と称し、あるいは、大乗の道場と称して、比丘尼、女人、等を来入せしめず。
邪風、ひさしく、つたわれて、人、わきまうることなし。
稽古の人、あらためず。
博達の士も、かんがうることなし。
あるいは、権者の所為と称し、あるいは、古先の遺風と号して、さらに論ずることなき。
笑わば、人の腸も、たえぬべし。
権者とは、なにものぞ？
賢人か？
聖人か？
神か？
鬼か？
十聖か？
三賢か？
等覚？
妙覚か？
また、ふるきをあらためざるべくば、生死流転をば、すつべからざるか？
いわんや、大師、釈尊、これ、無上正等覚なり。
あきらむべきは、ことごとく、あきらむ。
おこなうべきは、ことごとく、これをおこなう。
解脱すべきは、みな、解脱せり。
いまの、たれが、ほとりにも、およばん？
しかあるに、在世の仏会に、みな、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、等の四衆あり、八部あり、三十七部あり、八万四千部あり。

みな、これ、仏界を結せること、あらたなる仏会なり。
いずれの会か比丘尼なき？　女人なき？　八部なき？
如来在世の仏会よりも、すぐれて清浄ならん結界をば、われら、ねがうべきにあらず。天魔界なるがゆえに。
仏会の法儀は、自界、他方、三世千仏、ことなることなし。
ことなる法あらんは、仏会にあらず、と、しるべし。
いわゆる、四果は極位なり。
大乗にても、小乗にても、極位の功徳は差別せず。
しかあるに、比丘尼の四果を証する、おおし。
三界のうちにも、十方の仏土にも、いずれの界にか、いたらざらん？
だれが、この行履をふさぐことあらん？
また、妙覚は無上位なり。
女人、すでに作仏す、諸方、いずれのものか、究尽せられざらん？
だれが、これをふさぎて、いたらしめざらん、と擬せん？
すでに遍照、於、十方の功徳あり。界畔、いかがせん？
また、天女をも、ふさぎて、いたらしめざるか？
神女をも、ふさぎて、いたらしめざるか？
天女、神女も、いまだ断惑の類にあらず、なお、これ、流転の衆生なり。
犯罪あるときは、あり、なきときは、なし。
人女、畜女も、罪あるときは、あり、罪なきときは、なし。
天のみち、神のみち、ふさがん人は、だれぞ？
すでに三世の仏会に参詣す、仏所に参学す。
仏所、仏会にことならん。
だれが仏法と信受せん？
ただ、これ、誑惑、世間人の至愚なり。
野干の、窟穴を人にうばわれざらん、と、おしむよりも、おろかなり。
また、仏弟子の位は、菩薩にもあれ、たとえ声聞にもあれ、第一、比丘、第二、比丘尼、第三、優婆塞、第四、優婆夷、かくのごとし。
このくらい、天上、人間ともに、しれり。
ひさしく、きこえたり。
しかあるを、仏弟子第二の位は、転輪聖王よりも、すぐれ、釈提桓因よりも、すぐるべし。
いたらざるところ、あるべからず。
いわんや、小国、辺土の国王、大臣の位に、ならぶべきにあらず。

いま、比丘尼、いるべからず、という道場をみるに、田夫、野人、農夫、樵翁、みだれいる。
いわんや、国王、大臣、百官、宰相、だれが、いらざるあらん？
田夫、等と比丘尼と、学道を論じ、得位を論ぜんに、勝劣、ついに、いかん？
たとえ世法にて論ずとも、たとえ仏法にて論ずとも、比丘尼のいたらんところへ、田夫、野人、あえて、いたるべからず。
錯乱のはなはだしき、小国、はじめて、このあとをのこす。
あわれむべし。
三界慈父の長子、小国にきたりて、ふさぎて、いたらしめざるところありき。
また、かの結界と称するところにすめるやから、十悪をおそるることなし。
十重、つぶさに、おかす。
ただ造罪界として、不造罪人をきらうか？
いわんや、逆罪をおもきこととす。
結界の地にすめるもの、逆罪もつくりぬべし。
かくのごとくの魔界は、まさに、やぶるべし。
仏化を学すべし。
仏界にいるべし。
まさに、仏恩を報ずるにてあらん。
かくのごとくの古先、なんじ、結界の旨趣をしれりや？　いなや？
だれよりか相承せりし？
だれが印をか、こうむる？
いわゆる、この、諸仏、所結の大界にいるものは、諸仏も、衆生も、大地も、虚空も、繋縛を解脱し、諸仏の妙法に帰源するなり。
しかあれば、すなわち、この界をひとたびふむ衆生、しかしながら、仏功徳をこうむるなり。
不違越の功徳あり。
得、清浄の功徳あり。
一方を結するとき、すなわち、法界みな結せられ、一重を結するとき、法界みな結せらるるなり。
あるいは、水をもって結する界あり。
あるいは、心をもって結界することあり。
あるいは、空をもって結界することあり。
かならず、相承相伝ありて、しるべきことあり。

いわんや、結界のとき、灑、甘露ののち、帰命の礼、おわり、乃至、浄界、等ののち、頌、云、
茲界、遍法界、無為、結、清浄。

この旨趣、いま、ひごろ、結界と称する古先、老人、しれりや？　いなや？
おもうに、なんだち、結の中に遍法界の結せらるること、しるべからざるなり。
しりぬ。
なんじ、声聞の酒にようて、小界を大界とおもうなり。
ねがわくば、ひごろの迷酔、すみやかに、さめて、諸仏の大界の遍界に違越すべからず。
済度、摂受に一切衆生みな、化をこうむらん功徳を礼拝、恭敬すべし。
だれが、これを得、道髄といわざらん？

正法眼蔵　礼拝得髄
延応庚子、清明日、記、観音導利興聖宝林寺。

# 谿声山色

阿耨菩提に伝道受業の仏祖おおし。
粉骨の先蹤、即、不無なり。
断臂の祖宗まなぶべし。
掩泥の毫髪も、たがうることなかれ。
各各の脱殻をうるに( or 脱殻、うるに)、従来の知見解会に拘牽せられず。
曠劫、未明の事、たちまちに現前す。
恁麼時の而今は、吾も不知なり、誰も不識なり、汝も不期なり、仏眼も覰不見なり。
人慮、あに、測度せんや？

大宋国に東坡居士、蘇軾とてありしは、字は子瞻という。
筆海の真龍なりぬべし。
仏海の龍象を学す。
重淵にも遊泳す。
層雲にも昇降す。

あるとき、廬山にいたりしちなみに、谿水の、夜、流する声をきくに悟道す。
偈をつくりて常総禅師に呈するに、いわく、
谿声、便是、広長舌。
山色、無非( or 豈非)、清浄身。
夜来、八万四千偈。
他日、如何、挙似、人？

この偈を総禅師に呈するに、総禅師、然、之す。

総は照覚常総禅師なり。
総は黄龍慧南禅師の法嗣なり。
南は慈明楚円禅師の法嗣なり。

居士、あるとき、仏印禅師、了元和尚と相見するに、仏印さずくるに、法衣、仏戒、等をもってす。
居士、つねに( or ついに)、法衣を搭して修道しき。
居士、仏印にたてまつるに、無価の玉帯をもってす。

ときの人、いわく、凡俗、所及の儀にあらず、と。
しかあれば、聞谿、悟道の因縁、さらに、これ、晩流の潤益なからんや？
あわれむべし。
いくめぐりか現身説法の化儀にもれたるがごとくなる。
なにとしてか、さらに、山色を見、谿声をきく、一句なりとやせん？　半句なりとやせん？　八万四千偈なりとやせん？
うらむべし、山水にかくれたる声、色あること。
また、よろこぶべし、山水にあらわるる時節、因縁あること。
舌相も懈倦なし。
身色、あに、存没あらんや？
しかあれども、あらわるるときをや、ちかしとならう？
かくれたるときをや、ちかしとならわん？
一枚なりとやせん？
半枚なりとやせん？
従来の春秋は山水を見聞せざりけり。
夜来の時節は山水を見聞すること、わずかなり。
いま、学道の菩薩も山、流、水、不流より学入の門を開すべし。
この居士の悟道せし夜は、そのさきの日、総禅師と(居士)無情説法話を参問せしなり。
禅師の言下に翻身の儀いまだしといえども、谿声のきこゆるところは、逆水の波浪たかく天をうつものなり。
しかあれば、いま、谿声の、居士をおどろかす、谿声なりとやせん？　照覚の流瀉なりとやせん？
うたがうらくは、照覚の無情説法の語( or 無情説法話)、ひびき、いまだやまず、ひそかに谿流のよるの声にみだれいる。
だれが、これ、一升( or 一舛)なりと弁肯せん？　一海なりと朝宗せん？
畢竟じていわば、居士の、悟道するか？　山水の、悟道するか？
だれの明眼あらんか、長舌相、清浄身を急著眼せざらん？

また、香厳智閑禅師、かつて大潙、大円禅師の会に学道せしとき、大潙、いわく、
なんじ、聡明、博解なり。
章疏のなかより記持せず、父母未生以前にあたりて、わがために一句を道取しきたるべし。

香厳、いわんことをもとむること数番すれども不得なり。

ふかく身心をうらみ、年来たくわうるところの書籍を披尋するに、なお茫然なり。
ついに、火をもちて年来のあつむる書をやきて、いわく、
画にかける、もちいは、うえをふさぐにたらず。
われ、ちかう、
此生に仏法を会せんことをのぞまじ。
ただ行粥飯僧とならん。
といいて、行粥飯して年月をふるなり。
行粥飯僧というは、衆僧に粥、飯を行益するなり。
このくにの陪饌役送( or 陪饌促送)のごときなり。
かくのごとくして大潙にもうす、
智閑は身心昏昧にして道不得なり。
和尚、わがためにいうべし。
大潙の、いわく、
われ、なんじがために、いわんことを辞せず。
おそらくは、のちに、なんじ、われをうらみん。

かくて、年月をふるに、大証国師の蹤跡をたずねて武当山にいりて、国師の庵のあとに、くさをむすびて為、庵す。
竹をうえて、ともとしけり。
あるとき、道路を併浄するちなみに、かわら、ほとばしりて、竹にあたりて、ひびきをなすをきくに、豁然として、大悟す。
沐浴し潔斎して、大潙山にむかいて焼香、礼拝して、大潙にむかいて、もうす、
大潙、大和尚、むかし、わがためにとくことあらば、いかでか、いま、この事あらん？
恩のふかきこと、父母よりも、すぐれたり。

ついに、偈をつくりて、いわく、
一撃、亡、所知。
更、不自修治。
動容、揚、古路。
不堕、悄然機。
所所、無蹤跡。
声色外、威儀。
諸方、達道者、咸、言、上上機。

この偈を大潙に呈す。
大潙、いわく、
此子、徹、也。

また、霊雲志勤禅師は三十年の弁道なり。
あるとき、遊山するに、山脚に休息して、はるかに人里を望見す。
ときに、春なり。
桃華のさかりなるをみて、忽然として、悟道す。
偈をつくりて大潙に呈するに、いわく、
三十年来、尋、剣客、幾回、葉落、又、抽枝。
自従一見桃華後、直至如今、更不疑。
大潙、いわく、
従縁、入者、永、不退失。

すなわち、許可するなり。
いずれの入者か従縁せざらん？
いずれの入者か退失あらん？
ひとり勤をいうにあらず。

ついに大潙に嗣法す。

山色の清浄身にあらざらん、いかでか恁麼ならん？

長沙(景)岑禅師に、ある僧、とう、
いかにしてか山河大地を転じて自己に帰せしめん？
師、いわく、
いかにしてか自己を転じて山河大地に帰せしめん？
いまの道取は、自己の、おのずから自己にてある。
自己、たとえ山河大地というとも、さらに所帰に罣礙すべきにあらず。

瑯瑘の広照大師、慧覚和尚は南嶽の遠孫なり。
あるとき、教家の講師、子璿、とう、
清浄、本然、云何、忽、生、山河大地？
かくのごとく、とうに、和尚、しめすに、いわく、
清浄、本然、云何、忽、生、山河大地？

ここに、しりぬ。
清浄、本然なる山河大地を山河大地とあやまるべきにあらず。
しかあるを、経師、かつてゆめにもきかざれば、山河大地を山河大地としらざるなり。
しるべし。
山色、谿声にあらざれば、拈華も開演せず、得髄も依位せざるべし。
谿声、山色の功徳によりて、大地、有情、同時、成道し、見、明星、悟道する諸仏あるなり。
かくのごとくなる皮袋、これ、求法の志気、甚深なりし先哲なり。
その先蹤、いまの人、かならず参取すべし。
いまも、名利にかかわらざらん真実の参学は、かくのごときの志気をたつべきなり。
遠方の、近来は、まことに仏法を求覓する人、まれなり。
なきにはあらず。
難遇なるなり。
たまたま出家児となり、離俗せるににたるも、仏道をもって名利のかけはしとするのみ、おおし。
あわれむべし、かなしむべし、この光陰をおしまず、むなしく黒暗業に売買すること。
いずれのときが、これ、出離、得道の期ならん？
たとえ正師にあうとも、真龍を愛せざらん。
かくのごとくのたぐい、先仏、これを可憐憫者という。
その先世に悪因あるによりて、しかあるなり。
生をうくるに、為法、求法のこころざしなきによりて、真法をみるとき真龍をあやしみ、正法にあうとき正法にいとわるるなり。
この身心、骨肉、かつて従法而生ならざるによりて、法と不相応なり、法と不受用なり。
祖宗、師資、かくのごとく相承して、ひさしくなりぬ。
菩提心は、むかしのゆめをとくがごとし。
あわれむべし。
宝山にうまれながら宝財をしらず、宝財をみず。
いわんや、法財をえんや？
もし菩提心をおこしてのち、六趣、四生に輪転すといえども、その輪転の因縁みな菩提の行願となるなり。

しかあれば、従来の光陰は、たとえ、むなしくすごすというとも、今生の、いまだすぎざるあいだに、いそぎて発願すべし。
ねがわくば、われと一切衆生と、今生より、乃至、生生をつくして、正法をきくことあらん。
きくことあらんとき、正法を疑著せじ、不信なるべからず。
まさに、正法にあわんとき、世法をすてて、仏法を受持せん。
ついに、大地、有情ともに( or 大地、有情とともに)成道することをえん。

かくのごとく発願せば、おのずから正発心の因縁ならん。
この心術、懈倦することなかれ。
また、この日本国は、海外の、遠方なり、人のこころ、至愚なり。
むかしより、いまだ、聖人、うまれず、生知、うまれず。
いわんや、学道の実士、まれなり。
道心をしらざるともがらに、道心をおしうるときは、忠言の、逆耳するによりて、自己をかえりみず、他人をうらむ。
おおよそ、菩提心の行願には、菩提心の発、未発、行道、不行道を世人にしられんことをおもわざるべし。
しられざらん、と、いとなむべし。
いわんや、みずから口称せんや？
いまの人は実をもとむることまれなるによりて、身に行なくこころにさとりなくとも、他人のほむることありて、行、解、相応せり、と、いわん人をもとむるがごとし。
迷中又迷、すなわち、これなり。
この邪念、すみやかに抛捨すべし。
学道のとき、見聞すること(の)かたきは、正法の心術なり。
その心術は、仏仏、相伝しきたれるものなり。
これを仏光明とも、仏心とも、相伝するなり。
如来在世より今日にいたるまで、名利をもとむるを学道の用心とするににたるともがら、おおかり。
しかありしも、正師のおしえにあいて、ひるがえして、正法をもとむれば、おのずから得道す。
いま、学道には、かくのごとくの、やまうのあらん、と、しるべきなり。
たとえば、初心、始学にもあれ、久修練行にもあれ、伝道授業の機をうることもあり、機をえざることもあり。
慕古して、ならう機あるべし、訕謗して、ならわざる魔もあらん。
両頭ともに愛すべからず、うらむべからず。

いかにしてか、うれえなからん？　うらみざらん？
いわく、三毒を三毒としれるともがらまれなるによりて、うらみざるなり。
いわんや( or いわく)、はじめて仏道を欣求せしときのこころざしをわすれざるべし。
いわく、はじめて発心するときは、他人のために法をもとめず、名利をなげすてきたる。
名利をもとむるにあらず、ただ、ひとすじに得道をこころざす。
かつて国王、大臣の恭敬、供養をまつこと、期せざるものなり。
しかあるに、いま、かくのごとくの因縁あり。
本期にあらず。
所求にあらず。
人、天の繋縛にかかわらんことを期せざるところなり。
しかあるを、おろかなる人は、たとえ道心ありといえども、はやく、本志をわすれて、あやまりて人、天の供養をまちて、仏法の功徳いたれり、と、よろこぶ。
国王、大臣の帰依、しきりなれば、わがみちの現成とおもえり。
これは学道の一魔なり。
あわれむこころをわするべからずというとも、よろこぶことなかるべし。
みずや？　ほとけの、のたまわく、如来、現在、猶、多、怨、嫉の金言あることを。
愚の、賢をしらず、小畜の、大聖をあたむ( or ねたむ)こと、理、かくのごとし。
また、西天の祖師、おおく、外道、二乗、国王、等のために、やぶられたるを。
これ、外道の、すぐれたるにあらず。
祖師に遠慮なきにあらず。
初祖西来よりのち、嵩山に掛錫するに、梁、武もしらず、魏主もしらず。
ときに、両箇のいぬあり。
いわゆる、菩提流支三蔵と光統律師となり。
虚名、邪利の、正人にふさがれんことをおそりて、あうぎて天日をくらまさんと擬するがごとくなりき。
在世の達多よりもなお、はなはだし。
あわれむべし。
なんじが深愛する名利は、祖師、これを糞穢よりも、いとうなり。
かくのごとくの道理、仏法の力量の、究竟せざるにはあらず。

良人をほゆる、いぬあり、と、しるべし。
ほゆる、いぬをわずらうことなかれ、うらむることなかれ。
引導の発願すべし。
汝、是、畜生。発、菩提心と施設すべし。
先哲、いわく、
これは、これ、人面の畜生なり。

また、帰依、供養する魔類もあるべきなり。
前仏、いはく、
不親近、国王、王子、大臣、官長、婆羅門、居士。

まことに、仏道を学習せん人、わすれざるべき行儀なり。
菩薩、初学の功徳、すすむにしたがうて、かさなるべし。
また、むかしより、天帝、きたりて、行者の志気を試験し、あるいは、魔波旬、きたりて、行者の修道をさまたぐることあり。
これ、みな、名利の志気はなれざるとき、この事ありき。
大慈大悲のふかく、広度衆生の願の老大なるには、これらの障礙、あらざるなり。
修行の力量、おのずから国土をうることあり。
世運の達せるに相似せることあり。
かくのごとくの時節、さらに、かれを弁肯すべきなり。
かれに瞌睡することなかれ。
愚人、これをよろこぶ。たとえば、痴犬の枯骨をねぶるがごとし。
賢、聖、これをいとう、たとえば、世人の糞穢をおづるににたり。
おおよそ、初心の情量は仏道をはからうことあたわず。
測量すといえども、あたらざるなり。
初心に測量せずといえども、究竟に究尽なきにあらず。
徹地の堂奥は初心の浅識にあらず。
ただ、まさに、先聖の道をふまんことを行履すべし。
このとき、尋師訪道するに、梯山、航海あるなり。
導師をたずね知識をねがうに(は)、従天、降下なり( or 従天、降下し)、従地、涌出なり( or 涌出するなり)。
その接渠のところに、有情に道取せしめ、無情に道取せしむるに、身処にきき、心処にきく。
若、将、耳、聴は家常の茶飯なりといえども、眼処聞声、これ、何必不必なり。

見仏に(も)、自仏、他仏を(も)み、大仏、小仏をみる。
大仏にも、おどろき、おそれざれ。
小仏にも、あやしみ、わずらわざれ。
いわゆる、大仏、小仏を、しばらく、山色、谿声と認ずるものなり。
これに広長舌あり、八万(四千)偈あり。
挙似逈脱なり。
見徹独抜なり。
このゆえに、俗、いわく、
弥高、弥堅。なり。

先仏、いわく、
弥天、弥綸なり。

春松の操あり、秋菊の秀ある、即、是なるのみなり。
善知識、この田地にいたらんとき、人、天の大師( or 導師)なるべし。
いまだ、この田地にいたらず、みだりに為人の儀を存せん、人、天の大賊なり。
春松しらず、秋菊みざらん、なにの草料か、あらん？　いかが根源を截断せん？
また、心も、肉も、懈怠にもあり、不信にもあらんには、誠心をもっぱらして前仏に懺悔すべし。
恁麼するとき前仏懺悔( or 前仏に懺悔)の功徳力、われをすくいて清浄ならしむ。
この功徳、よく、無礙の浄信、精進を生長せしむるなり。
浄信、一現するとき、自他おなじく転ぜらるるなり。
その利益、あまねく、情、非情にこうむらしむ。
その大旨は、
願わくば、われ、たとえ過去の悪業おおく、かさなりて、障道の因縁ありとも、仏道によりて得道せりし諸仏、諸祖、われをあわれみて、業累を解脱せしめ、学道、さわりなからしめ、その功徳、法門、あまねく無尽法界に充満、弥綸せらん。
あわれみをわれに分布すべし。
仏祖の往昔は吾等なり。
吾等が当来は仏祖ならん。
仏祖を仰観すれば、一仏祖なり。
発心を観想するにも、一発心なるべし。

あわれみを七通八達せんに、得便宜なり、落便宜なり。

このゆえに、龍牙の、いわく、
昔生、未了、今、須、了。
此生、度、取、累生、身。
古仏、未悟、同、今者。
悟了今人、即、古人。

しずかに、この因縁を参究すべし。
これ、証仏の承当なり。
かくのごとく懺悔すれば、かならず、仏祖の冥助あるなり。
心念、身儀、発露、白、仏すべし。
発露のちから、罪根をして銷殞せしむるなり。
これ、一色の正修行なり、正信心なり、正信身なり。
正修行のとき、谿声、谿色、山色、山声ともに八万四千偈をおしまざるなり。
自己、もし、名利、身心を不惜すれば、谿山また、恁麼の不惜あり。
たとえ谿声、山色、八万四千偈を現成せしめ、現成せしめざることは、夜来なりとも、谿山の谿山を挙似する尽力未便ならんは、だれが、なんじを谿声、山色と見聞せん？

正法眼蔵　谿声山色
爾時、延応庚子、結制後五日、在、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 諸悪莫作

古仏、曰、
諸悪、莫作。
衆善、奉行。
自浄、其意。
是、諸仏教。

これ七仏、祖宗の通戒として、前仏より後仏に正伝す。
後仏は前仏に相嗣せり。
ただ七仏のみにあらず、是、諸仏教なり。
この道理を功夫、参究すべし。
いわゆる、七仏の法道、かならず、七仏の法道のごとし。
相伝相嗣、なお、箇裏の通消息なり。
すでに、是、諸仏教なり。
百、千、万仏の教行証なり。
いま、いうところの諸悪は、善性、悪性、無記性のなかに悪性あり。
その性、これ、無生なり。
善性、無記性、等もまた無生なり、無漏なり、実相なりというとも、この三性の箇裏に許多般の法あり。
諸悪は、此界の悪と他界の悪と同、不同あり。
先時と後時と同、不同あり。
天上の悪と人間の悪と同、不同あり( or なり)。
いわんや、仏道と世間と道、悪、道、善、道、無記はるかに殊異あり。
善悪は時なり。時は善悪にあらず。
善悪は法なり。法は善悪にあらず。
法等、悪等。なり。
法等、善等。なり。
しかあるに、阿耨多羅三藐三菩提を学するに、聞教し修行し証果するに、深なり、遠なり、妙なり。
この無上菩提を或、従、知識してきき、或、従、経巻してきく。
はじめは、諸悪、莫作ときこゆるなり。
諸悪、莫作ときこえざるは、仏正法にあらず、魔説なるべし。
しるべし。
諸悪、莫作ときこゆる、これ、仏正法なり。

この諸悪、つくることなかれ、という、凡夫の、はじめて造作して、かくのごとく、あらしむるにあらず。
菩提の説となれるを聞教するに、しかのごとく、きこゆるなり。
しかのごとく、きこゆるは、無上菩提のことばにてある道著なり。
すでに菩提語なり。
ゆえに、語菩提なり。
無上菩提の説著となりて聞著せらるるに転ぜられて、諸悪、莫作とねがい、諸悪、莫作とおこない、もってゆく。
諸悪、すでに、つくられずなりゆくところに、修行力、たちまちに現成す。
この現成は、尽地、尽界、尽時、尽法を量として現成するなり。
その量は莫作を量とせり。
正当恁麼時の正当恁麼人は、諸悪つくりぬべきところに住し往来し、諸悪つくりぬべき縁に対し、諸悪つくる友にまじわるににたりといえども、諸悪さらに、つくられざるなり。莫作の力量、現成するゆえに。
諸悪、みずから諸悪と道著せず。
諸悪に、さだまれる調度なきなり。
一拈、一放の道理あり。
正当恁麼時、すなわち、悪の、人をおかさざる道理しられ、人の、悪をやぶらざる道理あきらめらる。
みずからが心を挙して修行せしむ、身を挙して修行せしむるに、機先の八、九成あり、脳後の莫作あり。
なんじが身心を拈来して修行し、だれの身心を拈来して修行するに、四大、五蘊にて修行するちから驀地に見成するに、四大、五蘊の、自己を染汚せず、今日の四大、五蘊までも修行せられ、もってゆく。
如今の修行なる四大、五蘊のちから、上項の四大、五蘊を修行ならしむるなり。
山河大地、日月星辰まで( or にて)も修行せしむるに、山河大地、日月星辰、かえりて、われらを修行せしむるなり。
一時の眼睛にあらず、諸時の活眼なり。
眼睛の活眼にてある諸時なるがゆえに、諸仏、諸祖をして修行せしむ、聞教せしむ、証果せしむ。
諸仏、諸祖、かつて教行証をして染汚せしむることなきがゆえに、教行証、いまだ諸仏、諸祖を罣礙することなし。
このゆえに、仏祖をして修行せしむるに、過、現、当の機先、機後に回避する諸仏、諸祖なし。

衆生、作仏、作祖の時節、ひごろ所有の仏祖を罣礙せずといえども、作仏祖する道理を、十二時中の行住坐臥に、つらつら思量すべきなり。
作仏祖するに、衆生をやぶらず、うばわず、うしなうにあらず。
しかあれども、脱落しきたれるなり。
善悪因果をして修行せしむ。
いわゆる、因果を動ずるにあらず、造作するにあらず。
因果、あるときは、われらをして修行せしむるなり。
この因果の本来、面目すでに分明なる。
これ、莫作なり、無生なり、無常なり、不昧なり、不落なり。脱落なるがゆえに。
かくのごとく参究するに、諸悪は一条に、かつて莫作なりけると現成するなり。
この現成に助発せられて、諸悪、莫作なりと見得徹し、坐得断するなり。
正当恁麼のとき、初、中、後、諸悪、莫作にて現成するに、諸悪は因縁、生にあらず、ただ莫作なるのみなり。
諸悪は因縁、滅にあらず、ただ莫作なるのみなり。
諸悪、もし、等なれば、諸法も等なり。
諸悪は因縁、生としりて、この因縁の、おのれと莫作なるをみざるは、あわれむべきともがらなり。
仏種、従縁、起なれば縁、従仏種、起なり。
諸悪、なきにあらず、莫作なるのみなり。
諸悪、あるにあらず、莫作なるのみなり。
諸悪は、空にあらず、莫作なり。
諸悪は、色にあらず、莫作なり。
諸悪は、莫作にあらず、莫作なるのみなり。
たとえば、春松は、無にあらず、有にあらず、つくらざるなり。
秋菊は、有にあらず、無にあらず、つくらざるなり。
諸仏は、有にあらず、無にあらず、莫作なり。
露柱、灯籠、払子、拄杖、等、あるにあらず、なきにあらず、莫作なり。
自己は、有にあらず、無にあらず、莫作なり。
恁麼の参学は、見成せる公案なり、公案の見成なり。
主より功夫し、賓より功夫す。
すでに恁麼なるに、つくられざりけるをつくりける、と、くやしむも、のがれず、さらに、これ、莫作の功夫力なり。

しかあれば、莫作にあらば、つくらまじ、と趣向するは、あゆみをきたにして越にいたらん、と、またんがごとし。
諸悪、莫作は、井の、驢をみるのみにあらず、井の、井をみるなり、驢の、驢をみるなり、人の、人をみるなり、山の、山をみるなり。
説、箇応底、道理あるゆえに、諸悪、莫作なり。
仏、真法身、猶、若、虚空。応、物、現、形、如、水中月。なり。
応、物の莫作なるゆえに、現、形の莫作なり。
猶、若、虚空、左拍、右拍。なり。
如、水中月、被、水月、礙。なり。
これらの莫作、さらに、うたがうべからざる現成なり。

衆善、奉行。
この衆善は三性のなかの善性なり。
善性のなかに衆善ありといえども、さきより現成して行人をまつ衆善、いまだあらず。
作、善の正当恁麼時、きたらざる衆善なし。
万善は無象なりといえども、作、善のところに計、会すること、磁鉄よりも速疾なり。
そのちから、毘嵐風よりも、つよきなり。
大地山河、世界、国土、業増上力、なお、善の計、会を罣礙すること、あたわざるなり。
しかあるに、世界によりて善を認ずること、おなじからざる道理、おなじ認得を善とせるがゆえに、如、三世諸仏、説法之儀式。
おなじ、というは、在世、説法、ただ、時なり。
寿命、身量、また、ときに一任しきたれるがゆえに、説、無分別法なり。
しかあれば、すなわち、信行の機の善と、法行の機の善と、はるかに、ことなり、別法にあらざるがごとし。
たとえば、声聞の持戒は、菩薩の破戒なるがごとし。
衆善、これ、因縁、生、因縁、滅にあらず。
衆善は諸法なりというとも、諸法は衆善にあらず。
因縁と生滅と衆善と、おなじく、頭正あれば、尾正あり。
衆善は奉行なりといえども、自にあらず、自にしられず、他にあらず、他にしられず。
自他の知見は、知に自あり、他あり。見の自あり、他あるがゆえに、各各の活眼睛、それ、日にもあり、月にもあり。
これ、奉行なり。

奉行の正当恁麼時に、現成の公案ありとも、公案の始成にあらず、公案の久住にあらず、さらに、これを本行といわんや？
作善の奉行なるといえども、測度すべきにはあらざるなり。
いまの奉行、これ、活眼睛なりといえども、測度にはあらず。
法を測度せんために現成せるにあらず。
活眼睛の測度は、余法の測度と、おなじかるべからず。
衆善、有無、色空、等にあらず、ただ奉行なるのみなり。
いずれのところの現成、いずれのときの現成も、かならず奉行なり。
この奉行に、かならず衆善の現成あり。
奉行の現成、これ、公案なりというとも、生滅にあらず、因縁にあらず。
奉行の入、住、出、等もまた、かくのごとし。
衆善のなかの一善、すでに奉行するところに、尽法、全身、真実、地、等ともに奉行せらるるなり。
この善の因果、おなじく、奉行の現成、公案なり。
因はさき、果はのちなるにあらざれども、因、円満し、果、円満す。
因、等、法、等。
果、等、法、等。なり。
因にまたれて果、感ずといえども、前後にあらず。前後、等の道あるがゆえに。

自浄、其意というは、
莫作の自なり、莫作の浄なり、
自の其なり、自の意なり、
莫作の其なり、莫作の意なり、
奉行の意なり、奉行の浄なり、奉行の其なり、奉行の自なり。

かるがゆえに、是、諸仏教というなり。
いわゆる諸仏、あるいは、自在天のごとし。
自在天に同、不同ありといえども、一切の自在天は諸仏にあらず。
あるいは、転輪王のごとくなり。
しかあれども、一切の転輪聖王の、諸仏なるにあらず。
かくのごとくの道理、功夫、参学すべし。
諸仏は、いかなるべし、とも学せず、いたずらに苦辛するに相似せりといえども、さらに受苦の衆生にして、行仏道にあらざるなり。
莫作、および、奉行は、驢事、未去、馬事、到来なり。

唐の白居易は仏光如満禅師の俗弟子なり。
江西、大寂禅師の孫子なり。
杭州の刺史にて、ありしとき、鳥窠の道林禅師に参じき。
ちなみに、居易、とう、
如何、是、仏法、大意？
道林、いわく、
諸悪、莫作。衆善、奉行。
居易、いわく、
もし恁麼にてあらんは、三歳の孩児も道得ならん。
道林、いわく、
三歳孩児、縦、道得、八十老翁、行、不得なり。
恁麼いうに、居易、すなわち、拝謝して、さる。

まことに、居易は白将軍がのちなりといえども、奇代の詩仙なり。
人、つたうらくは、二十四生の文学なり。
あるいは、文殊の号あり、あるいは、弥勒の号あり。
風情のきこえざるなし。
筆海の朝せざるなかるべし。
しかあれども、仏道には初心なり、晩進なり。
いわんや、この諸悪、莫作。衆善、奉行は、その宗旨、ゆめにもいまだみざるがごとし。
居易、おもわくは、道林、ひとえに有心の趣向を認じて諸悪をつくることなかれ。衆善、奉行すべし。と、いうならん、とおもいて、仏道に千古万古の諸悪、莫作、衆善、奉行の亙古亙今なる道理、しらず、きかずして、仏法のところをふまず、仏法のちからなきがゆえに、しかのごとく、いうなり。
たとえ造作の諸悪をいましめ、たとえ造作の衆善をすすむとも、現成の莫作なるべし。
おおよそ、仏法は、知識のほとりにして、はじめてきくと、究竟の果上も、ひとしきなり。
これを頭正尾正といい、妙因妙果といい、仏因仏果という。
仏道の因果は異熟、等流、等の論にあらざれば、仏因にあらずば、仏果を感得すべからず。
道林、この道理を道取するゆえに、仏法あるなり。
諸悪、たとえ、いくかさなりの尽界に弥綸し、いくかさなりの尽法を呑却せりとも、これ、莫作の解脱なり。

衆善、すでに初中後善にてあれば、奉行の性、相、体、力、等を如是せるなり。
居易、かつて、この蹤跡をふまざるによりて、三歳の孩児も道得ならん、とはいうなり。
道得をまさしく道得するちからなくして、かくのごとく、いうなり。
あわれむべし。
居易、なんじ、道、甚麼？　なるぞ。
仏風、いまだきかざるがゆえに、三歳の孩児をしれりや？　いなや？
孩児の才生せる道理をしれりや？　いなや？
もし三歳の孩児をしらんものは、三世諸仏をもしるべし。
いまだ三世諸仏をしらざらんもの( or しらざるもの)、いかでか三歳の孩児をしらん？
対面せるは、しれり、と、おもうことなかれ。
対面せざれば、しらざる、と、おもうことなかれ。
一塵をしれるものは尽界をしり、一法を通ずるものは万法を通ず。
万法に通ぜざるものは一法に通ぜず。
通を学せるもの通徹のとき、万法をもみる、一法をもみるがゆえに、一塵を学するもの、のがれず、尽界を学するなり。
三歳の孩児は仏法をいうべからず、と、おもい、三歳の孩児のいわんことは容易ならん、と、おもうは至愚なり。
そのゆえは、生をあきらめ、死をあきらむるは、仏家一大事の因縁なり。
古徳、いわく、
なんじが、はじめて生下せりしとき、すなわち、獅子吼の分あり。

獅子吼の分とは如来、転法輪の功徳なり、転法輪なり。
又、古徳、いわく、
生死、去来、真実、人体なり。

しかあれば、真実体をあきらめ、獅子吼の功徳あらん、まことに、一大事なるべし。
たやすかるべからず。
かるがゆえに、三歳孩児の因縁、行履あきらめんとするに、さらに、大因縁なり。それ、三世諸仏の行履、因縁と、同、不同あるがゆえに。
居易、おろかにして、三歳の孩児の道得をかつてきかざれば、あるらん、とだにも疑著せずして、恁麼道取するなり。

道林の道声、雷よりも顕赫なるをきかず、道不得を( or 道不得と)いわんとしては、三歳孩児、還、道得という。
これ、孩児の獅子吼を(も)きかず、禅師の転法輪をも蹉過するなり。
禅師、あわれみをやむるにあたわず、かさねて、いうしなり、三歳の孩児は、たとえ道得なりとも、八十の老翁は行、不得ならん。と。
いうこころは、三歳の孩児に道得のことばあり。
これをよくよく参究すべし。
八十の老翁に行、不得の道あり。
よくよく功夫すべし。
孩児の道得は、なんじに一任す。しかあれども、孩児に一任せず。
老翁の行、不得は、なんじに一任す。しかあれども、老翁に一任せず。
といいしなり。
仏法は、かくのごとく弁取し、説取し、宗取するを道理とせり。

正法眼蔵　諸悪莫作
延応庚子、月夕、在、興聖宝林寺、示、衆。

# 有時

古仏、言、
有時、高高、峰頂、立。
有時、深深、海底、行。
有時、三頭八臂。
有時、丈六、八尺。
有時、拄杖、払子。
有時、露柱、灯籠。
有時、張三李四。
有時、大地、虚空。

いわゆる、有時は、時、すでに、これ、有なり。
有はみな、時なり。
丈六金身、これ、時なり。
時なるがゆえに、時の荘厳、光明あり。
いまの十二時に習学すべし。
三頭八臂、これ、時なり。
時なるがゆえに、いまの十二時に一如なるべし。
十二時の長遠短促、いまだ度量せずといえども、これを十二時という。
去来の方跡あきらかなるによりて、人、これを疑著せず。
疑著せざれども、しれるにあらず。
衆生、もとより、しらざる毎物毎事を疑著すること一定せざるがゆえに、疑著する前程、かならずしも、いまの疑著に符合することなし。
ただ、疑著、しばらく、時なるのみなり。
われを排列しおきて尽界とせり。
この尽界の頭頭、物物を時時なりと覰見すべし。
物物の、相礙せざるは、時時の、相礙せざるがごとし。
このゆえに、同時発心あり、同心発時あり。
および、修行、成道も、かくのごとし。
われを排列して、われ、これをみるなり。
自己の、時なる道理、それ、かくのごとし。
恁麼の道理なるゆえに、尽地に万象、百草あり。
一草、一象、おのおの、尽地にあることを参学すべし。
かくのごとくの( or この)往来は修行の発足なり。

到、恁麼の田地のとき、すなわち、一草、一象なり。
会、象、不会、象なり。
会、草、不会、草なり。
正当恁麼時のみなるがゆえに、有時みな、尽時なり。
有草、有象ともに時なり。
時時の時に尽有、尽界あるなり。
しばらく、いまの時にもれたる尽有、尽界ありや？　なしや？　と観想すべし。
しかあるを、仏法をならわざる凡夫の時節に、あらゆる見解は、有時のことばをきくに、おもわく、あるときは三頭八臂となれりき、あるときは丈六八尺となれりき、たとえば、河をすぎ、山をすぎしがごとくなり。と。
いまは、その山河、たとえ、あるらめども、われ、すぎきたりて、いまは玉殿、朱楼に処せり。山河と、われと、天と、地と、なり。と、おもう。
しかあれども、道理、この一条のみにあらず。
いわゆる、山をのぼり、河をわたりし時に、われありき。
われに時あるべし。
われ、すでにあり。
時、さるべからず。
時もし去来の相にならずば、上山の時は有時の而今なり。
時もし去来の相を保任せば、われに有時の而今ある。
これ、有時なり。
かの上山、渡河の時、この玉殿、朱楼の時を呑却せざらんや？　吐却せざらんや？
三頭八臂は、きのうの時なり。
丈六八尺は、きょうの時なり。
しかあれども、その昨今の道理、ただ、これ、山のなかに直入して千峯、万峯をみわたす時節なり。
すぎぬるにあらず。
三頭八臂も、すなわち、わが有時にて一経す。
彼方にあるににたれども、而今なり。
丈六八尺も、すなわち、わが有時にて一経す。
彼所にあるににたれども、而今なり。
しかあれば、松も時なり。
竹も時なり。
時は飛去するとのみ解会すべからず。

飛去は時の能とのみは学すべからず。
時もし飛去に一任せば、間隙、ありぬべし。
有時の道を経聞せざるは、すぎぬる、とのみ学するによりてなり。
要をとりて、いわば、
尽界に、あらゆる尽有は、つらなりながら時時なり。
有時なるによりて、吾、有時なり。
有時に(は)経歴の功徳あり。
いわゆる、
今日より明日に経歴す。
今日より昨日に経歴す。
昨日より今日に経歴す。
今日より今日に経歴す。
明日より明日に経歴す。
経歴は、それ、時の功徳なるがゆえに。
古今の時、かさなれるにあらず、ならびつもれるにあらざれども、青原も時なり、黄檗も時なり、江西も石頭も時なり。
自他、すでに時なるがゆえに、修、証は諸時なり。
入泥入水、おなじく、時なり。
いまの凡夫の見、および、見の因縁、これ、凡夫のみるところなりといえども、凡夫の法にあらず。
法、しばらく、凡夫を因縁せるのみなり。
この時、この有は、法にあらず、と学するがゆえに、丈六金身は、われにあらず、と認ずるなり。
われを丈六金身にあらずとのがれんとする、また、すなわち、有時の片片なり。
未証拠者の看看なり。
いま、世界に排列せる、うま、ひつじをあらしむるも、住法位の恁麼なる昇降、上下なり。
ねずみも時なり。
とらも時なり。
生も時なり。
仏も時なり。
この時、三頭八臂にて尽界を証し、丈六金身にて尽界を証す。
それ、尽界をもって尽界を界尽するを、究尽する、とはいうなり。

丈六金身をもって丈六金身するを、発心、修行、菩提、涅槃と現成する、すなわち、有なり、時なり。
尽時を尽有と究尽するのみ。
さらに剰法なし。剰法、これ、剰法なるがゆえに。
たとえ半究尽の有時も、半有時の究尽なり。
たとえ、蹉過す、と、みゆる形段も、有なり。
さらに、かれにまかすれば、蹉過の現成する前後ながら、有時の住位なり。
住法位の活鱍鱍地なる、これ、有時なり。
無と動著すべからず。
有と強為すべからず。
時は一向にすぐる、とのみ計功して、未到と解会せず。
解会は時なりといえども、他にひかるる縁なし。
去来と認じて、住位の有時と見徹せる皮袋なし。
いわんや、透関の時あらんや？
たとえ住位を認ずとも、だれが既得、恁麼の保任を道得せん？
たとえ恁麼と道得せること、ひさしきも、いまだ面目、現前を模索せざるなし。
凡夫の有時なるに一任すれば、菩提、涅槃も、わずかに去来の相のみなる有時なり。
おおよそ羅籠、とどまらず、有時、現成なり。
いま、右界に現成し左方に現成する天王天衆、いまも、わが尽力する有時なり。
その余外にある水陸の衆有時、これ、わが、いま尽力して現成するなり。
冥、陽に有時なる諸類、諸頭みな、わが尽力、現成なり、尽力、経歴なり。
わが、いま尽力経歴にあらざれば、一法、一物も現成することなし、経歴することなし、と参学すべし。
経歴というは、風雨の東西するがごとく学しきたるべからず。
尽界は不動転なるにあらず、不進退なるにあらず、経歴なり。
経歴は、たとえば、春のごとし。
春に許多般の様子あり。
これを経歴という。
外物なきに経歴する、と参学すべし。
たとえば、春の経歴は、かならず、春を経歴するなり。
経歴は春にあらざれども、春の経歴なるがゆえに、経歴、いま、春の時に成道せり。

審細に参来参去すべし。
経歴をいうに、境は外頭にして、能経歴の法は東にむきて百、千世界をゆきすぎて百、千(、万)劫をふる、と、おもうは、仏道の参学、これのみを専一にせざるなり。

薬山、弘道大師、ちなみに、無際大師の指示によりて、江西、大寂禅師に参問す、
三乗十二分教、某甲、ほぼ、その(宗)旨をあきらむ。如何、是、祖師西来意？
かくのごとく、とうに、大寂禅師、いわく、
有時、教、伊、揚眉瞬目。
有時、不教、伊、揚眉瞬目。
有時、教、伊、揚眉瞬目、者、是。
有時、教、伊、揚眉瞬目、者、不是。
薬山、ききて大悟し、大寂にもうす、
某甲、かつて石頭にありし(とき)、蚊子の鉄牛にのぼれるがごとし。

大寂の道取するところ、余者と、おなじからず。
眉、目は山、海なるべし。山、海は眉、目なる(が)ゆえに。
その教、伊、揚は山をみるべし。
その教、伊、瞬は海を宗すべし( or 宗とすべし)。
是は伊に慣習せり。
伊は教に誘引せらる。
不是は不教、伊にあらず。
不教、伊は不是にあらず。
これら、ともに、有時なり。
山も時なり。
(海も時なり。)
時にあらざれば、山、海あるべからず。
山、海の而今に時あらず、と、すべからず。
時もし壊すれば、山、海も壊す。
時もし不壊なれば、山、海も不壊なり。
この道理に、明星、出現す。如来、出現す、眼睛、出現す、拈華、出現す。
これ、時なり。
時にあらざれば、不恁麼なり。

葉県の帰省禅師は臨済の法孫なり、首山の嫡嗣なり。
あるとき、大衆にしめして、いわく、
有時、意、到、句、不到。
有時、句、到、意、不到。
有時、意、句、両倶、到。
有時、意、句、倶、不到。

意、句ともに有時なり。
到、不到ともに有時なり。
到時、未了なりといえども、不到時、来なり。
意は驢なり。
句は馬なり。
馬を句とし、驢を意とせり。
到、それ、来にあらず。
不到、これ、未(来)にあらず。
有時、かくのごとくなり。
到は、到に罣礙せられて、不到に罣礙せられず。
不到は、不到に罣礙せられて、到に罣礙せられず。
意は、意をさえ、意をみる。
句は、句をさえ、句をみる。
礙は、礙をさえ、礙をみる。
礙は、礙を礙するなり。
これ、時なり。
礙は他法に使得せらるといえども、他法を礙する礙、いまだあらざるなり。
我、逢、人なり。
人、逢、人なり。
我、逢、我なり。
出、逢、出なり。
これら、もし時をえざるには、恁麼ならざるなり。
また、意は現成公案の時なり。
句は向上、関棙の時なり。
到は脱体の時なり。
不到は即、此、離、此の時なり。
かくのごとく弁肯すべし、有時すべし。
向来の尊宿ともに、恁麼いうとも、さらに道取すべきところなからんや？
いうべし。

意、句、半到、也、有時、
意、句、半不到、也、有時。
かくのごとくの参究あるべきなり。
教、伊、揚眉瞬目、也、半有時。
教、伊、揚眉瞬目、也、錯有時。
不教、伊、揚眉瞬目、也、半有時。
不教、伊、揚眉瞬目、也、(錯)錯有時。
恁麼のごとく参来、参去、参到、参不到する、有時の時なり。

正法眼蔵　有時
仁治元年庚子、開冬日、書、于、興聖宝林寺。
寛元癸卯、夏安居、書写、之。　　　　懐弉

# 袈裟功徳

仏仏、祖祖、正伝の衣、法、まさしく震旦国に正伝することは嵩嶽の高祖のみなり。
高祖は釈迦牟尼仏より第二十八代の祖なり。
西天、二十八伝、嫡嫡、あいつたわれり。
二十八祖、したしく震旦にいりて初祖たり。
震旦国人、五伝して、曹谿にいたりて、三十三代の祖なり。
これを六祖と称す。
第三十三代の祖、大鑑禅師、この衣、法を黄梅山にして夜半に正伝し一生、護持しましします。
いまなお曹谿山、宝林寺に安置せり。
諸代の帝王、あいつぎて内裏に奉請し、供養、礼拝す。
神物、護持せるものなり。
唐朝、中宗、粛宗、代宗、しきりに帰内、供養しき。
奉請のとき、奉送のとき、ことさら勅使をつかわし、詔をたまう。
代宗、皇帝、あるとき、仏衣を曹谿山におくりたてまつる、みことのりに、いわく、
今、遣、鎮国大将軍、劉崇景、頂戴、而、送。
朕、為、之、国宝。
卿、可、於、本寺、如法、安置。
専、令、僧衆、親承宗旨者、厳、加、守護、勿、令、遺墜。

まことに、無量、恒河沙の三千大千世界を統領せんよりも、仏衣現在の小国に王として、これを見聞、供養したてまつらんは、生死のなかの善生、最勝の生なるべし。
仏化のおよぶところ、三千界、いずれのところか袈裟なからん？
しかありといえども、嫡嫡、面授して仏袈裟を正伝せるは、ただひとり嵩嶽の曩祖のみなり。
傍出は仏袈裟をさずけられず。
二十七祖の傍出、跋陀婆羅菩薩の伝、まさに、肇法師におよぶといえども、仏袈裟の正伝なし。
震旦の四祖、大師、また、牛頭山の法融禅師をわたすといえども、仏袈裟を正伝せず。

しかあれば、すなわち、正嫡の相承なしといえども、如来の正法、その功徳むなしからず。
千古万古、みな、利益、広大なり。
正嫡、相承せらんは、相承なきと、ひとしかるべからず。
しかあれば、すなわち、人、天もし袈裟を受持せんは、仏祖、相伝の正伝を伝受すべし。
印度、震旦、正法、像法のときは、在家なお、袈裟を受持す。
いま、遠方、辺土の、澆季には、剃除鬚髪して仏弟子と称する、袈裟を受持せず。
いまだ受持すべきと信ぜず、しらず、あきらめず、かなしむべし。
いわんや、体、色、量をしらんや？
いわんや、著用の法をしらんや？
袈裟は、ふるくより解脱服と称す。
業障、煩悩障、報障、等みな解脱すべきなり。
龍もし一縷をうれば、三熱をまぬがる。
牛もし一角にふるれば、その罪おのずから消滅す。
諸仏、成道のとき、かならず、袈裟を著す。
しるべし、最尊、最上の功なり、ということ。
まことに、われら辺地にうまれて末法にあう、うらむべしといえども、仏仏、嫡嫡、相承の衣、法にあうたてまつる、いくそばくの、よろこびとかせん？
いずれの家門か、わが正伝のごとく釈尊の衣、法ともに正伝せる？
これに、あうたてまつりて、だれが恭敬、供養せざらん？
たとえ一日に無量、恒河沙の身命をすてても供養したてまつるべし。
なお、生生、世世の値遇、頂戴、供養、恭敬を発願すべし。
われら仏生国をへだつること十万余里の山海はるかにして通じがたしといえども、宿善のあいもよおすところ、山海に擁塞せられず、辺鄙の愚蒙きらわるることなし。
この正法にあうたてまつり、あくまで日夜に修習す。
この袈裟を受持したてまつり、常恒に頂戴、護持す。
ただ一仏、二仏のみもとにして功徳を修せるのみならんや？
すでに恒河沙、等の諸仏のみもとにして、もろもろの功徳を修習せるなるべし。
たとえ自己なりというとも、とうとぶべし、随喜すべし。
祖師、伝法の深恩、ねんごろに報謝すべし。
畜類、なお恩を報ず。

人類、いかでか恩をしらざらん？
もし恩をしらずば、畜類よりも愚なるべし。
この仏衣、仏法の功徳、その伝、仏正法の祖師にあらざれば、余輩、いまだあきらめず、しらず。
諸仏のあとを欣求すべくば、まさに、これを欣楽すべし。
たとえ百、千、万代ののちも、この正伝を正伝とすべし。
これ、仏法なるべし。
証験、まさに、あらたならん。
水を乳に入るるに相似すべからず。
皇太子の帝位に即位するがごとし。
かの合水の乳なりとも、乳をもちいんときは、この乳のほかに、さらに乳なからんには、これをもちいるべし。
たとえ水を合せずとも、あぶらをもちいるべからず。
うるしをもちいるべからず。
さけをもちいるべからず。
この正伝もまた、かくのごとくならん。
たとえ凡師の庸流なりとも、正伝あらんは、用乳のよろしきときなるべし。
いわんや、仏仏、祖祖の正伝は、皇太子の即位のごとくなるなり。
俗、なお、いわく、先王の法服にあらざれば、服せず、と。
仏子、いずくんぞ仏衣にあらざらんを著せん？
後漢の孝明皇帝、永平十年よりのち、西天、東地に往還する出家、在家、くびすをつぎて、たえずといえども、西天にして仏仏、祖祖、正伝の祖師にあう、といわず。
如来より面授、相承の系譜なし。
ただ経論師にしたがうて、梵本の経教を伝来せるなり。
仏法、正嫡の祖師にあう、といわず。
仏袈裟、相伝の祖師あり、とかたらず。
あきらかに、しりぬ、仏法の閫奥にいらざりけり、ということを。
かくのごときのひと、仏祖、正伝のむね、あきらめざるなり。
釈迦牟尼如来、正法眼蔵、無上菩提を摩訶迦葉に付授しましますに、迦葉仏、正伝の袈裟、ともに伝授しまします。
嫡嫡、相承して曹谿山、大鑑禅師にいたる、三十三代なり。
その体、色、量、親伝せり。
それよりのち、青原、南嶽の法孫、したしく伝法しきたり、祖宗の法を搭し、祖宗の法を制す。

浣洗の法、および、受持の法、その嫡嫡、面授の堂奥に参学せざれば、しらざるところなり。

袈裟、言、有、三衣。
五条衣、七条衣、九条衣等大衣、也。
上行之流、唯、受、此三衣。
不蓄、余衣。
唯、用、三衣、供、身、事足。
若、経営、作務、大小、行来、著、五条衣。
為、諸善事、入、衆、著、七条衣。
教化、人、天、令、其、敬信、須、著、九条等大衣。
又、在、屏処、著、五条衣。
入、衆之時、著、七条衣。
若、入、王宮、聚落、須、著、大衣。
又復、調和、熅燸之時、著、五条衣。
寒冷之時、加、著、七条衣。
寒苦、厳、切、加、以、著、大衣。
故往、一時、正冬、入、夜、天寒、裂、竹。
如来、於、彼初夜分時、著、五条衣。
夜、久、転寒、加、七条衣。
於、夜後分、天寒、転盛、加、以、大衣。
仏、便、作、念、
未来世中、不忍、寒苦、諸善男子、以、此三衣、足、得、充身。

搭袈裟法。
偏袒右肩、これ、常途の法なり。
通両肩搭の法あり。如来、および、耆年、老宿の儀なり。
両肩を通ずというとも、胸臆をあらわすときあり、胸臆をおおうときあり。
通両肩搭は六十条衣以上の大袈裟のときなり。
搭袈裟のとき、両端ともに左臂、肩にかさね、かくるなり。
前頭は左端のうえにかけて臂外にたれたり。
大袈裟のとき、前頭を左肩より通して背後にいだし、たれたり。
このほか種種の著、袈裟の法あり。
久参咨問すべし。
梁、陳、隋、唐、宋、あいつたわれて数百歳のあいだ、大小両乗の学者、おおく、講経の業をなげすてて、究竟にあらずとしりて、すすみて、仏祖、正

伝の法を習学せんとするとき、かならず、従来の弊衣を脱落して、仏祖、正伝の袈裟を受持するなり。
まさしく、これ、捨、邪、帰、正なり。
如来の正法は、西天、すなわち、法、本なり。
古今の人師、おおく、凡夫の情量、局量の小見をたつ。
仏界、衆生界、それ、有辺、無辺にあらざるがゆえに、大小乗の教、行、人、理、いまの凡夫の局量にいるべからず。
しかあるに、いたずらに西天を本とせず、震旦国にして、あらたに局量の小見を今案して仏法とせる、道理、しかあるべからず。
しかあれば、すなわち、いま発心のともがら、袈裟を受持すべくば、正伝の袈裟を受持すべし。
今案の新作袈裟を受持すべからず。
正伝の袈裟というは、少林、曹谿、正伝しきたれる、如来の嫡嫡、相承なり。
一代も虧闕なし。
その法子、法孫の著しきたれる、これ、正伝、袈裟なり。
唐土の新作は正伝にあらず。
いま、古今に西天よりきたれる僧徒の所著の袈裟みな、仏祖、正伝の袈裟のごとく著せり。
一人としても、いま震旦新作の律学のともがらの所製の袈裟のごとくなる、なし。
くらきともがら、律学の袈裟を信ず。
あきらかなるものは抛却するなり。
おおよそ、仏仏、祖祖、相伝の袈裟の功徳、あきらかにして信受しやすし。
正伝、まさしく、相承せり。
本様、まのあたり、つたわれり。
いまに現在せり。
受持し、あい嗣法して、いまにいたる。
受持せる祖師ともに、これ、証契、伝法の師資なり。
しかあれば、すなわち、仏祖、正伝の作、袈裟の法によりて作法すべし。ひとり、これ、正伝なるがゆえに。
凡、聖、人、天、龍神みな、ひさしく証知しきたれるところなり。
この法の流布に、うまれ、あいて、ひとたび袈裟を身体におおい、刹那、須臾も受持せん、すなわち、これ、決定、成、無上菩提の護身符子ならん。
一句、一偈を身心にそめん、長劫、光明の種子として、ついに、無上菩提にいたる。

一法、一善を身心にそめん、亦復、如是なるべし。
心念も刹那、生滅し無所住なり。
身体も刹那、生滅し無所住なりといえども、所修の功徳、かならず、熟脱のときあり。
袈裟、また、作にあらず、無作にあらず。
有所住にあらず、無所住にあらず。
唯仏与仏の究尽するところなりといえども、受持する行者、その所得の功徳、かならず、成就するなり。
かならず、究竟するなり。
もし宿善なきものは、一生、二生、乃至、無量生を経歴すといえども、袈裟をみるべからず、袈裟を著すべからず、袈裟を信受すべからず、袈裟をあきらめしるべからず。
いま、震旦国、日本国をみるに、袈裟をひとたび身体に著すること、うるものあり、えざるものあり。
貴賤によらず、愚、智によらず。
はかりしりぬ、宿善によれり、ということ。
しかあれば、すなわち、袈裟を受持せんは、宿善、よろこぶべし、積功累徳、うたがうべからず。
いまだ、えざらんは、ねがうべし。
今生、いそぎ、その、はじめて下種せんことをいとなむべし。
さわりありて受持すること、えざらんものは、諸仏、如来、仏、法、僧の三宝に慚愧、懺悔すべし。
他国の衆生、いくばくか、ねがうらん？　わがくにも震旦国のごとく如来の衣、法、まさしく、正伝、親臨せまし、と。
おのれがくにに正伝せざること、慚愧、ふかかるらん、かなしむ、うらみあるらん。
われら、なにの、さいわいありてか？　如来、世尊の衣、法、正伝せる法にあうたてまつれる。
宿殖般若の大功徳力なり。
いま、末法、悪時世は、おのれが正伝なきをはじず、他の正伝あるをそねむ。
おもわくは、魔党ならん。
おのれが、いまの所有、所住は前業にひかれて真実にあらず。
ただ、正伝の仏法に帰敬せん、すなわち、おのれが学仏の実帰なるべし。
おおよそ、しるべし。

袈裟は、これ、諸仏の恭敬、帰依しましますところなり、仏身なり、仏心なり。
解脱服と称し、
福田衣と称し、
無相衣と称し、
無上衣と称し、
忍辱衣と称し、
如来衣と称し、
大慈大悲衣と称し、
勝幢衣( or 勝幡衣)と称し、
阿耨多羅三藐三菩提、衣と称す。
まさに、かくのごとく受持、頂戴すべし。
かくのごとくなるがゆえに、こころにしたがうて、あらたむべきにあらず。
その衣財、また、絹布、よろしきにしたがうて、もちいる。
かならずしも、布は清浄なり、絹は不浄なる、にあらず。
布をきらうて絹をとる所見なし。(絹をきらうて布をとる所見なし。)わらうべし。
諸仏の常法、かならず、糞掃衣を上品とす。
糞掃に、十種あり、四種あり。
いわゆる、火焼、牛嚼、鼠噛、死人衣、等。
五印度人、如此等衣、棄、之、巷、野。
事、同、糞掃、名、糞掃衣。
行者、取、之、浣洗、縫治、用、以、供、身。
そのなかに絹類あり、布類あり。
絹、布の見をなげすてて、糞掃を参学すべきなり。
糞掃衣は、むかし、阿耨達池にして、浣洗せしに、龍王、讃歎、雨、華、礼拝しき。
小乗教師、また、化糸の説あり。
よるところ、なかるべし。
大乗人、わらうべし。
いずれか、化糸にあらざらん？
なんじ、化をきくみみを信ずとも、化をみる目をうたがう。
しるべし。
糞掃をひろうなかに、絹に相似なる布あらん、布に相似なる絹あらん。
土俗、万差にして、造化、はかりがたし、肉眼の、よくしるところにあらず。

かくのごとき( or かくのごとく)のものをえたらん、絹、布と論ずべからず、糞掃と称すべし。
たとえ人、天の糞掃と生長せるありとも、有情ならじ、糞掃なるべし。
たとえ松、菊の糞掃と生長せるありとも、非情ならじ、糞掃なるべし。
糞掃の、絹、布にあらず、金、銀、珠玉にあらざる道理を信受するとき、糞掃、現成するなり。
絹、布の見解、いまだ脱落せざれば、糞掃、也、未夢見在なり。
ある僧、かつて、古仏にとう、
黄梅、夜半の伝衣、これ、布なりとやせん？　絹なりとやせん？　畢竟じて、なにものなりとかせん？
古仏、いわく、
これ、布にあらず。これ、絹にあらず。

しるべし。
袈裟は絹、布にあらざる。
これ、仏道の玄訓なり。
商那和修尊者は第三の付法蔵なり。
うまるるときより衣と倶、生せり。
この衣、すなわち、在家のときは俗服なり、出家すれば、袈裟となる。
また、鮮白比丘尼、発願、施、氎ののち、生生のところ、および、中有、かならず、衣と倶、生せり。
今日、釈迦牟尼仏にあうたてまつりて出家するとき、生得の俗衣、すみやかに転じて袈裟となる、和修尊者におなじ。
あきらかに、しりぬ、袈裟は絹、布、等にあらざること。
いわんや、仏法の功徳、よく身心、諸法を転ずること、それ、かくのごとし。
われら、出家、受戒のとき、身心依正、すみやかに転ずる道理、あきらかなれど、愚蒙にして、しらざるのみなり。
諸仏の常法、ひとり和修、鮮白に加して、われらに加せざることなきなり。
随分の利益、うたがうべからざるなり( or うたがうべからずなり)。
かくのごとくの道理、あきらかに功夫、参学すべし。
善来得戒の披体の袈裟、かならずしも布にあらず、絹にあらず。
仏化、難思なり。
衣裏の宝珠は算、沙の所能にあらず。
諸仏の袈裟の体、色、量の有量、無量、有相、無相、あきらめ参学すべし。
西天、東地、古往今来の祖師みな、参学、正伝せるところなり。

祖祖、正伝の、あきらかにして、うたがうところなきを見聞しながら、いたずらに、この祖師に正伝せざらんは、その意楽、ゆるしがたからん。愚痴のいたり、不信のゆえなるべし。
実をすてて、虚をもとめ、本をすてて末をねがうものなり。
これ、如来を軽忽したてまつる、ならん。
菩提心をおこさんともがら、かならず、祖師の正伝を伝受すべし。
われら、あいがたき仏法にあうたてまつる、のみにあらず、仏袈裟、正伝の法孫として、これを見聞し、学習し、受持することをえたり。
すなわち、これ、如来をみたてまつるなり。
仏、説法をきくなり。
仏、光明にてらさるるなり。
仏、受用を受用するなり。
仏心を単伝するなり。
仏髄をえたるなり。
まのあたり、釈迦牟尼仏の袈裟におおわれたてまつるなり。
釈迦牟尼仏、まのあたり、われに袈裟をさずけましますなり。
仏にしたがうたてまつりて、この袈裟は、うけたてまつれり。

浣袈裟法。
袈裟をたたまず、浄桶にいれて、香湯を百沸して、袈裟をひたして、一時ばかり、おく。
またの法、きよき灰水を百沸して、袈裟をひたして、湯のひややかになるをまつ。
いまは、よのつねに、灰湯をもちいる。
灰湯、ここには、あくのゆ、という。
灰湯さめぬれば、きよく、すみたる湯をもって、たびたび、これを浣洗するあいだ、両手にいれて、もみあらわず、ふまず。
あか、のぞこおり、あぶら、のぞこおるを期とす。
そののち、沈香、栴檀香、等を冷水に和して、これをあらう。
そののち、浄竿にかけて、ほす。
よくほしてのち、摺襞して、たかく安じて、焼香、散華して、右遶数帀して礼拝したてまつる。
あるいは、三拝、あるいは、六拝、あるいは、九拝して、胡跪、合掌して、袈裟を両手にささげて、くちに偈を誦してのち、たちて、如法に著したてまつる。

世尊、告、大衆、言、

我、往昔、在宝蔵仏所時、為、大悲菩薩。
爾時、大悲菩薩摩訶薩、在、宝蔵仏、前、而、発願、言、

世尊、
我、成仏、已、
若、有、衆生、入、我法中、出家著袈裟者、
或、犯、重戒、或、行、邪見、若、於、三宝、軽毀不信、集、諸重罪、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、
若、於、一念中、生、恭敬心、尊重、僧伽梨衣、生、恭敬心、尊重、世尊、或、於、法、僧、
世尊、
如是、衆生、乃至、一人、不、於、三乗、得、受記別、而、退転、者、
則、為、欺誑、十方世界、無量、無辺、阿僧祇、等、現在、諸仏。
必定、不成、阿耨多羅三藐三菩提。

世尊、
我、成仏、已来、諸天、龍、鬼神、人、及、非人、若、能、於、此著袈裟者、恭敬、供養、尊重、讃歎、
其人、若、得、見、此袈裟、少分、
即、得、不退、於、三乗中。

若、有、衆生、為、飢渇、所逼、
若、貧窮鬼神、下賤諸人、乃至、餓鬼衆生、
若、得、袈裟、少分、乃至、四寸、
即、得、飲食、充足、随、其所願、疾、得、成就。

若、有、衆生、共相違反、起、怨賊想、展転闘諍、
若、諸天、龍、鬼神、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽、狗弁荼、毘舎遮、人、及、非人、共闘諍時、
念、此袈裟、
依、袈裟力、尋、生、悲心、柔軟之心、無怨賊心、寂滅之心、調伏善心、還、得、清浄。

有、人、若、在、兵甲、闘訟、断事之中、
持、此袈裟、少分、至、此輩中、為自護故、供養、恭敬、尊重、

是諸人等、無能、侵、毀、触、嬈、軽、弄。
常、得、勝、他、過、此諸難。

世尊、
若、我袈裟、不能、成就、如是五事聖功徳、者、
則、為、欺誑、十方世界、無量、無辺、阿僧祇、等、現在、諸仏。
未来、不応、成就、阿耨多羅三藐三菩提、作仏事、也。
没失、善法、必定、不能、破壊、外道。

善男子、
爾時、宝蔵如来、申、金色右臂、摩、大悲菩薩、頂、讃、言、
善哉。
善哉。
大丈夫。
汝所言、者、是、大珍宝、是、大賢善。
汝、成、阿耨多羅三藐三菩提、已、是袈裟(衣)服、能、成就、此五聖功徳、作、大利益。

善男子、
爾時、大悲菩薩摩訶薩、聞、仏讃歎、已、心、生、歓喜、踊躍、無量。
因、仏、申、此金色之臂、長指、合縵。
其手、柔軟、猶如、天衣。
摩、其頭、已、其身、即、変状、如、童子、二十歳人。

善男子、
彼会大衆、諸天、龍神、乾闥婆、人、及、非人、叉手、恭敬、向、大悲菩薩、供養、種種華、乃至、伎楽、而、供養、之、復、種種讃歎、已、默然、而、住。

如来在世より今日にいたるまで、菩薩、声聞の経、律のなかより、袈裟の功徳をえらびあぐるとき、かならず、この五聖功徳をむねとするなり。
まことに、それ、袈裟は三世諸仏の仏衣なり。
その功徳、無量なりといえども、釈迦牟尼仏の法のなかにして袈裟をえたらんは、余仏の法のなかにして袈裟をえんにも、すぐれたるべし。
ゆえ、いかん、となれば、

釈迦牟尼仏、むかし、因地のとき、大悲菩薩摩訶薩として、宝蔵仏のみまえにて、五百大願をたてましますとき、ことさら、この袈裟の功徳におきて、かくのごとく誓願をおこしまします。
その功徳、さらに、無量、不可思議なるべし。
しかあれば、すなわち、世尊の皮肉骨髄、いまに正伝する、というは、袈裟衣なり。
正法眼蔵を正伝する祖師、かならず、袈裟を正伝せり。
この衣を伝持し頂戴する衆生、かならず、二、三生のあいだに得道せり。
たとえ戯笑のため、利益のために身を著せる、かならず、得道の因縁なり。

龍樹祖師、曰、

復次、
仏法中、出家人、雖、破戒、堕罪、罪、畢、得、解脱、如、優鉢羅華比丘尼本生経、中、説。

仏在世時、此比丘尼、得、六神通、阿羅漢。
入、貴人舎、常、讃、出家法、語、貴人婦女、言、
姉妹、
可、出家。
諸貴婦女、言、
我等、少、容色、盛、美、持戒、為、難、或、当、破戒。
比丘尼、言、
破戒、便、破。
但、出家。
問、言、
破戒、当、堕、地獄。
云何、可、破？
答、言、
堕、地獄、便、堕。
諸貴婦女(皆)、笑、之、言、
地獄、受、罪。
云何、可、堕？
比丘尼、言、
我、自、憶念、本、宿命時、作、戯女、著、種種衣服、而、説、旧語。
或時、著、比丘尼衣、以、為、戯笑。

以、是因縁、故、迦葉仏時、作、比丘尼。
時、自、恃、貴姓、端正、(心、)生、憍慢、而、破、禁戒。
破、禁戒、罪、故、堕、地獄、受、種種罪。
受、罪、畢竟、値、釈迦牟尼仏、出家、得、六神通、阿羅漢道。
以、是故、知。
出家、受戒、雖、復、破、戒、以、戒因縁、故、得、阿羅漢道。
若、但、作、悪、無、戒因縁、不得道、也。
我、乃、昔時、世世、堕、地獄、
従、地獄、出、為、悪人、
(悪人、)死、還、入、地獄、
都、無、所得。
今、以(、此)、証知。
出家、受戒、雖、復、破、戒、以、是因縁、可、得、道果。

この蓮華色(比丘尼)、阿羅漢、得道の初因、さらに他の功にあらず。
ただ、これ、袈裟を戯笑のために、その身に著せし功徳によりて、いま得道せり。
二生に迦葉仏の法にあうたてまつりて比丘尼となり、三生に釈迦牟尼仏にあうたてまつりて大阿羅漢となり三明、六通を具足せり。
三明とは天眼、宿命、漏尽なり。
六通とは神境通、他心通、天眼通、天耳通、宿命通、漏尽通なり。
まことに、それ、ただ作、悪、人とありしときは、むなしく死して地獄にいる。
地獄より、いでて、また、作、悪、人となる。
戒の因縁あるときは、禁戒を破して地獄におちたりといえども、ついに、得道の因縁なり。
いま、戯笑のため袈裟を著せる、なお、これ、三生に得道す。
いわんや、無上菩提のために清浄の信心をおこして袈裟を著せん、その功徳、成就せざらめやは？
いかに、いわんや、一生のあいだ受持したてまつり頂戴したてまつらん功徳、まさに、広大、無量なるべし。
(もし)菩提心をおこさん人、いそぎ、袈裟を受持、頂戴すべし。
この好世にあうて、仏種をうえざらん、かなしむべし。
南洲の人身をうけて、釈迦牟尼仏の法にあうたてまつり、仏法、嫡嫡の祖師にうまれ、あい、単伝、直指の袈裟をうけたてまつりぬべきをむなしくすごさん、かなしむべし。

いま、袈裟、正伝は、ひとり祖師、正伝、これ、正嫡なり。
余師の、肩をひとしくすべきにあらず。
相承なき師にしたがうて袈裟を受持する、なお、功徳、甚深なり。
いわんや、嫡嫡、面授しきたれる正師に受持せん、まさしき、如来の法子、法孫ならん。
まさに、如来の皮肉骨髄を正伝せるなるべし。
おおよそ、袈裟は三世、十方の諸仏、正伝しきたれること、いまだ断絶せず。
三世、十方の諸仏、菩薩、声聞、縁覚、おなじく、護持しきたれるところなり。
袈裟をつくるには麤布を本とす。
麤布なきがごときは細布をもちいる。
麤、細の布ともになきには絹素をもちいる。
絹、布ともになきがごときは綾羅、等をもちいる。
如来の聴許なり。
絹、布、綾羅、等の類すべてなきくにには如来、また、皮袈裟を聴許しまします。
おおよそ、袈裟は、そめて、青、黄、赤、黒、紫色ならしむべし。
いずれも、色のなかの壊色ならしむ。
如来は、つねに、肉色の袈裟を御しましませり。
これ、袈裟、色なり。
初祖、相伝の仏袈裟は青黒色なり、(西天の屈眴布なり、)いま、曹谿山にあり。
西天、二十八伝し、震旦、五伝せり。
いま、曹谿古仏の遺弟みな、仏衣の故実を伝持せり。
余僧のおよばざるところなり。
おおよそ、衣に三種あり。
一、者、糞掃衣。
二、者、毳衣。
三、者、衲衣。
なり。
糞掃は、さきにしめすがごとし。
毳衣、者、鳥獣、細毛。
これをなづけて毳とす。
行者、若、無、糞掃、可、得、取、之、為、衣。

衲衣、者、朽故破弊、縫、衲、供、身、不、著、世間、好衣。

具寿、鄔波離、請、世尊、曰、
大徳、世尊、
僧伽胝衣、条数、有、幾？

仏、言、
有、九。
何、謂、為、九、謂、
九条、十一条、十三条、十五条、十七条、十九条、二十一条、二十三条、二十五条。
其僧伽胝衣、初之三品、其中、壇隔、両長、一短、如是、応、持。
次、三品、三長、一短。
後、三品、四長、一短。
過、是、条外、便、成、破、衲、也。

鄔波離、復、白、世尊、曰、
大徳、世尊、
有、幾種、僧伽胝衣？

仏、言、
有、三種。
謂、上、中、下。
上、者、竪三肘、横五肘。
下、者、竪二肘半、横四肘半。
二内、名、中。

鄔波離、復、白、世尊、曰、
大徳、世尊、
嗢呾羅僧伽衣、条数、有、幾？

仏、言、
但、有、七条。
壇隔、両長、一短。

鄔波離、復、白、世尊、曰、
大徳、世尊、

七条、復、有、幾種？

仏、言、
有、其、三品。
謂、上、中、下。
上、者、三、五肘。
下、者、各、減、半肘。
二内、名、中。

鄔波離、復、白、仏、言、
大徳、世尊、
安咀婆裟衣、条数、有、幾？

仏、言、
有、五条。
壇隔、一長、一短。

鄔波離、復、白、世尊、言、
大徳、世尊、
安咀婆裟衣、有、幾種？

仏、言、
有、三品。
謂、上、中、下。
上、者、三、五肘。
中、下、同、前。

仏、言、
安咀婆裟衣、復、有、二種。
何、為、二？
一、者、竪二肘、横五肘。
二、者、竪二、横四。

僧伽胝、者、訳、為、重複衣。
嗢咀羅僧伽、者、訳、為、上衣。
安咀婆裟、者、訳、云、下衣、又、云、内衣。

又、云、僧伽梨衣、謂、大衣、也。又、云、入王宮衣、説法衣。
鬱多羅僧、謂、七条衣、也。又、云、中衣、入衆衣。
安陀会、謂、五条衣、也。又、云、小衣、行道、作務衣。

この三衣、かならず、護持すべし。
また、僧伽胝衣に六十条袈裟あり。かならず、受持すべし。
おおよそ、八万歳より百歳にいたるまで、寿命の増減にしたがうて、身量の長短あり。
八万歳と一百歳と、ことなることあり、という。また、平等なるべし、という。
そのなかに、平等なるべし、というを正伝とす。
仏と人と、身量、はるかに、ことなり。
人身は、はかりつべし。
仏身は、ついに、はかるべからず。
このゆえに、迦葉仏の袈裟、いま、釈迦牟尼仏、著しましますに、長にあらず、ひろきにあらず。
いま、釈迦牟尼仏の袈裟、弥勒如来、著しましますに、みじかきにあらず、せまきにあらず。
仏身の、長短にあらざる道理、あきらかに観見し、決断し、照了し、警察すべきなり。
梵王の、たかく色界にある、その仏頂をみたてまつらず。
目連、はるかに、光明播世界にいたる、その仏声をきわめず。
遠近の見聞ひとし。まことに、不可思議なるものなり。
如来の一切の功徳みな、かくのごとし。
この功徳を念じたてまつるべし。
袈裟を裁縫するに、割截衣あり、褋葉衣あり、摂葉衣あり、縵衣あり。
ともに、これ、作法なり。
その所得にしたがうて受持すべし。
仏、言、
三世仏袈裟、必定、却刺。

その衣財をえんこと、また、清浄を善なりとす。
いわゆる、糞掃衣を最上清浄とす。
三世の諸仏ともに、これを清浄としまします。
そのほか、信心檀那の所施の衣、また、清浄なり。
あるいは、浄財をもって、いちにして、かう、また、清浄なり。

作衣の日限ありといえども、いま、末法、澆季なり、遠方、辺邦なり。
信心のもよおすところ、裁縫をえて、受持せんには、しかじ。
在家の人、天なれども、袈裟を受持することは、大乗最極の秘訣なり。
いまは梵王、釈王ともに袈裟を受持せり。欲色の勝躅なり、人間には勝計すべからず。
在家の菩薩みな、ともに、受持せり。
震旦国には梁、武帝、隋、煬帝ともに袈裟を受持せり。
代宗、粛宗ともに袈裟を著し、僧家に参学し、菩薩戒を受持せり。
その余の居士、婦女、等の受、袈裟、受、仏戒のともがら、古今の勝躅なり。
日本国には聖徳太子、袈裟を受持し、法華、勝鬘、等の諸経、講説のとき、天、雨、宝華の奇瑞を感得す。
それより、このかた、仏法、わがくにに流通せり。
天下の摂籙なりといえども、すなわち、人、天の導師なり。
仏のつかいとして、衆生の父母なり。
いま、わがくに、袈裟の体、色、量ともに訛謬せりといえども、袈裟の名字を見聞する、ただ、これ、聖徳太子の、おおん、ちからなり。
そのとき、邪をくだき、正をたてずば、今日、かなしむべし。
のちに、聖武皇帝、また、袈裟を受持し菩薩戒をうけまします。
しかあれば、すなわち、たとえ帝位なりとも、たとえ臣下なりとも、いそぎ、袈裟を受持し菩薩戒をうくべし。
人身の慶幸、これよりも、すぐれたる、あるべからず。
有、言、
在家、受持、袈裟、一、名、単縫、二、名、俗服。
乃、未、用、却刺、而、縫、也。

又、言、
在家、趣、道場、時、具、三法衣、楊枝、澡水、食器、坐具、応、如、比丘、修行、浄行。

古徳の相伝、かくのごとし。
ただし、いま、仏祖、単伝しきたれるところ、国王、大臣、居士、士、民にさずくる袈裟みな、却刺なり。
盧行者、すでに、仏袈裟を正伝せる、勝躅なり。
おおよそ、袈裟は仏弟子の標幟なり。
もし袈裟を受持しおわりなば、毎日に頂戴したてまつるべし。
頂上に安じて、合掌して、この偈を誦す。

大哉。
解脱服、無相、福田衣。
披奉、如来教、広、度、諸衆生。

しこうしてのち、著すべし。
袈裟におきては、師想、塔想をなすべし。
浣衣、頂戴のときも、この偈を誦するなり。
仏、言、
剃、頭、著、袈裟、諸仏、所加護。
一人、出家、者、天人、所供養。

あきらかに、しりぬ。
剃、頭、著、袈裟より、このかた、一切諸仏に加護せられたてまつるなり。
この諸仏の加護によりて、無上菩提の功徳、円満すべし。
この人をば、天衆、人衆ともに供養するなり。

世尊、告、智光比丘、言、
法衣、得、十勝利。
一、者、能、覆、其身、遠離、羞恥、具足、慚愧、修行、善法。
二、者、遠離、寒、熱、及以、蚊、虫、悪獣、毒虫、安穏、修道。
三、者、示現、沙門、出家、相貌、見者、歓喜、遠離、邪心。
四、者、袈裟、即是、人、天、宝幢之相。尊重、敬礼、得、生、梵天。
五、者、著、袈裟、時、生、宝幢想、能、滅、衆罪、生、諸福徳。
六、者、本制( or 本製)、袈裟、染、令、壊色、離、五欲想、不生、貪愛。
七、者、袈裟、是、仏浄衣。永、断、煩悩、作、良田、故。
八、者、身、著、袈裟、罪業、消除、十善業道、念念、増長。
九、者、袈裟、猶如、良(福)田、能善、増長、菩薩道、故。
十、者、袈裟、猶如、甲冑、煩悩、毒箭、不能、害、故。

智光、当、知。
以、是因縁、三世諸仏、縁覚、声聞、清浄出家、身、著、袈裟、三聖、同、坐、解脱、宝牀。
執、智慧剣、破、煩悩魔、共、入、一味、諸涅槃界。

爾時、世尊、而、説、偈、言、
智光比丘、応、善、聴。

大福田衣、十勝利。
世間衣服、増、欲染。
如来法服、不如是。
法服、能、遮、世、羞恥。
慚愧、円満、生、福田。
遠離、寒、熱、及、毒虫。
道心、堅固、得、究竟。
示現、出家、離、貪欲。
断除、五見、正修行。
瞻、礼、袈裟、宝幢相、恭敬、生、於、梵王、福。
仏子、披、衣、生、塔想、生、福、滅、罪、感、人、天。
粛容、致、敬、真沙門。
所為、不染、諸塵俗。
諸仏、称讃、為、良田。
利楽( or 利益)、郡生、此、為、最。
袈裟、神力、不思議。
能、令、修、植、菩提行。
道、芽、増長、如、春、苗。
菩提、妙果、類、秋、実。
堅固、金剛、真甲冑、煩悩、毒箭、不能、害。
我、今、略、讃、十勝利。歴劫、広、説、無有、辺。
若、有、龍、身、披、一縷、得、脱、金翅鳥王、食。
若、人、渡、海、持、此衣、不怖、龍魚、諸鬼難。
雷電、霹靂、天之怒、披袈裟者、無恐畏。
白衣、若、能、親、捧持、一切悪鬼、無能、近。
若、能、発心、求、出家、厭離、世間、修、仏道、十方、魔宮、皆、振動、是人、速、証、法王身。

この十勝利、ひろく仏道の、もろもろの功徳を具足せり。
長行偈頌に、あらゆる功徳、あきらかに参学すべし。
披閲して、すみやかに、さしおくことなかれ。
句句にむかいて久参すべし。
この勝利は、ただ袈裟の功徳なり、行者の猛利、恒、修のちからにあらず。
仏、言、袈裟、神力、不思議。
いたずらに凡夫、賢、聖のはかりしるところにあらず。
おおよそ、速、証、法王身のとき、かならず、袈裟を著せり。

袈裟を著せざるものの法王身を証せること、むかしより、いまだ、あらざるところなり。
その最第一清浄の衣財は、これ、糞掃衣なり。
その功徳、あまねく大乗、小乗の経、律、論のなかに、あきらかなり。
広学に諮問すべし。
その余の衣財、また、かね、あきらむべし。
仏仏、祖祖、かならず、あきらめ、正伝しましますところなり。
余類のおよぶべきにあらず。

中阿含経、曰、
復、次、
諸賢、
或、有、一人、身、浄行、口、意、不浄行、
若、慧者、見、設生、恚悩、応当、除、之。
諸賢、
或、有、一人、身、不浄行、口、意、浄行、
若、慧者、見、設生、恚悩、応当、除、之。
当、云何、除？
諸賢、
猶如、阿練若比丘、持、糞掃衣、見、糞掃中、所棄、弊衣、或、大便汚、或、小便、洟、唾、及、余不浄之所染汚、見、已、左手、執、之、右手、舒張、若、非、大便、小便、洟、唾、及、余不浄之所汚処、又、不穿、者、便、裂、取、之。
如是、
諸賢、
或、有、一人、身、不浄行、口、意、浄行、
莫、念、彼、身、不浄行。
但、当、念、彼、口、意之浄行。
若、慧者、見、設生、恚悩、応、如是、除。

これ、阿練若比丘の拾、糞掃衣の法なり。
四種の糞掃あり、十種の糞掃あり。
その糞掃をひろうとき、まず、不穿のところをえらびとる。
つぎには、大便、小便、ひさしく、そみて、ふかくして、浣洗すべからざらん、また、とるべからず。
浣洗しつべからん、これをとるべきなり。

十種、糞掃。
一、牛嚼衣。
二、鼠噛衣。
三、火焼衣。
四、月水衣。
五、産婦衣。
六、神廟衣。
七、塚間衣。
八、求願衣。
九、王職衣。
十、往還衣。

この十種、ひとの、すつるところなり。
人間の、もちいるところにあらず。
これをひろうて袈裟の浄財とせり。
三世諸仏の讃歎しましますところ、もちいきたりましますところなり。
しかあれば、すなわち、この糞掃衣は、人、天、龍、等の、おもくし擁護するところなり。
これをひろうて袈裟をつくるべし。
これ最第一の浄財なり、最第一の清浄なり。
いま、日本国、かくのごとく糞掃衣なし。
たとえ、もとめんとすとも、あうべからず。
辺地、小国、かなしむべし。
ただ檀那、所施の浄財、これをもちいるべし。
人、天の、布施するところの浄財、これをもちいるべし。
あるいは、浄命より、うるところのものをもって、いちにして貿易( or 貨易)せらん、また、これ袈裟につくりつべし。
かくのごときの糞掃、および、浄命より、えたるところは、絹にあらず、布にあらず、金、銀、珠玉、綾羅、錦繍、等にあらず、ただ、これ、糞掃衣なり。
この糞掃は、弊衣のためにあらず、美服のためにあらず、ただ、これ、仏法のためなり。
これを用、著する、すなわち、三世諸仏の皮肉骨髄を正伝せるなり、正法眼蔵を正伝せるなり。
この功徳、さらに、人、天に問著すべからず、仏祖に参学すべし。

正法眼蔵　袈裟功徳

予、在宋の、そのかみ、長連牀に功夫せしとき、斉肩の隣単をみるに、開静のときごとに、袈裟をささげて頂上に安じ、合掌、恭敬し、一偈を黙誦す。
その偈に、いわく、
大哉。
解脱服、無相、福田衣。
披奉、如来教、広、度、諸衆生。

ときに、予、未曾見のおもいを生じ、歓喜、身にあまり、感涙、ひそかにおちて衣襟をひたす。
その旨趣は、そのかみ、阿含経を披閲せしとき、頂戴、袈裟の文をみるといえども、その儀則、いまだ、あきらめず。
いま、まのあたり、みる。
歓喜、随喜し、ひそかに、おもわく、
あわれむべし。
郷土にありしとき、おしゆる師匠なし、すすむる善友あらず。
いくばくか、いたずらに、すぐる光陰をおしまざる。
かなしまざらめやは？
いまの見聞するところ、宿善、よろこぶべし。
もし、いたずらに郷間にあらば、いかでか、まさしく、仏衣を相承、著用せる僧宝に隣肩することをえん？
悲喜、ひとかたならず。
感涙、千、万、行。

ときに、ひそかに発願す、
いかにしてか、われ、不肖なりというとも、仏法の嫡嗣となり、正法を正伝して、郷土の衆生をあわれむに、仏祖、正伝の衣、法を見聞せしめん。

かのときの発願、いま、むなしからず。
袈裟を受持せる在家、出家の菩薩、おおし。
歓喜するところなり。
受持、袈裟のともがら、かならず、日夜に頂戴すべし。
殊勝、最勝の功徳なるべし。
一句、一偈の見聞は、若、樹、若、石の因縁もあるべし。

見聞、あまねく、九道にかぎらざるべし。
袈裟、正伝の功徳は十方に難遇ならん。
わずかに一日一夜なりとも、最勝、最上なるべし。

大宋、嘉定十七年癸未、十月中に、高麗僧、二人ありて、慶元府にきたれり。
一人は智玄となづけ、一人は景雲という。
この二人、しきりに仏経の義を談ずといえども、さらに文学の士なり。
しかあれども、袈裟なし、鉢盂なし、俗人のごとし。
あわれむべし。
比丘形なりといえども比丘法なし。
小国、辺地の、しかあらしむるならん。
日本国の比丘形のともがら、他国にゆかんとき、また、かの智玄に、ひとしからん。
釈迦牟尼仏、十二年中、頂戴して、さしおきましまさざりき。
すでに、遠孫なり。
これを学すべし。
いたずらに名利のために天を拝し、神を拝し、王を拝し、臣を拝する頂門をめぐらして、仏衣、頂戴に回向せん、よろこぶべきなり。

ときに、仁治元年庚子、開冬日、在、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 伝衣

仏仏、正伝の衣、法、まさに、震旦に正伝することは少林の高祖のみなり。
高祖は、すなわち、釈迦牟尼仏より第二十八代の祖師なり。
西天、二十八代、嫡々あいつたわれ、震旦に、六代、まのあたり、正伝す。
西天、東地、都、盧、三十三代なり。
第三十三代の祖、大鑑禅師、この衣、法を黄梅の夜半に正伝し生前、護持しきたる。
いまなお曹谿の宝林寺に安置せり。
諸代の帝王、あいつぎて内裏に請入して供養す。
神物、護持せるものなり。
唐朝の中宗、粛宗、代宗、しきりに帰内、供養しき。
請するにも、おくるにも、勅使をつかわし、詔をたまう。
すなわち、これ、おもくする儀なり。
代宗皇帝、あるとき、仏衣を曹谿山におくる詔に、いわく、
今、遣、鎮国大将軍、劉崇景、頂戴、而、送。
朕、為、之、国宝。
卿、可、於、本寺、安置、令、僧衆親承宗旨者、厳、加、守護、勿、令、遺墜。

しかあれば、すなわち、数代の帝者ともに、くにの重宝とせり。
まことに、無量、恒河沙の三千世界を統領せんよりも、この仏衣、くににたもてるは、ことに、すぐれたる大宝なり。
卞璧に準ずべからざるものなり。
たとえ伝国璽となるとも、いかでか、伝仏の奇宝とならん？
大唐より、このかた、瞻礼せる緇白、かならず、信法の大機なり。
宿善のたすくるにあらずよりは、いかでか、この身をもちて、まのあたり、仏仏、正伝の仏衣を瞻礼することあらん？
信受することあたわざらんは、みずからなりというとも、うらむべし、仏種子にあらざることを。
俗、なお、いわく、
その人の行李をみるは、すなわち、その人をみるなり。

いま、仏衣を瞻礼せしは、すなわち、仏をみたてまつるなり。
百、千、万の塔を起立して、この仏衣に供養すべし。

天上、海中にも、こころあらんは、おもくすべし。
人間にも、転輪聖王、等の、まことをしり、すぐれたるをしらんは、おもくすべきなり。
あわれむべし、よに国主となれるやから、わがくにに重宝のあるをしらざること。
ままに道士の教にまどわされて、仏法を廃せる、おおし。
そのとき、袈裟をかけず、円頂に葉巾をいただく。
講ずるところは延寿長年の方なり。
唐朝にもあり、宋朝にもあり。
これらのたぐいは、国主なりといえども、国民よりも、いやしかるべきなり。
しずかに観察しつべし。
わがくにに仏衣とどまりて現在せり。
衣、仏国土なるべきか？　とも思惟すべきなり。
舎利、等よりも、すぐれたるべし。
舎利は輪王にもあり、獅子にもあり、人にもあり、乃至、辟支仏、等にもあり。
しかあれども、輪王には袈裟なし、獅子に袈裟なし、人に袈裟なし。
ひとり諸仏のみに袈裟あり。
ふかく信受すべし。
いまの愚人、おおく、舎利は、おもくすといえども、袈裟をしらず、護持すべきとしれるもの、まれなり。
これ、すなわち、先来より袈裟のおもきことをきけるもの、まれなり。
仏法、正伝いまだきかざるがゆえに、しかあるなり。
つらつら釈尊在世をおもいやれば、わずかに二千余年なり。
国宝、神器の、いまにつたわれるも、これよりも、すぎて、ふるくなれるも、おおし。
この仏法、仏衣は、ちかく、あらたなり。
若、田、若、里に展転せんこと、たとえ五十転々になれりとも、その益、これ、妙なるべし。
かれ、なお、功徳、あらたなり。
この仏衣、かれと、おなじかるべからず。
かれは正嫡より正伝せず。
これは正嫡より正伝せり。
しるべし。
四句偈をきくに得道す、一句子をきくに得道す。

四句偈、および、一句子、なにとしてか、恁麼の霊験ある？
いわゆる、仏法なるによりてなり。
いま、一頂衣、九品衣、まさしく、仏法より正伝せり。
四句偈よりも劣なるべからず。
一句、法よりも験、なかるべからず。
このゆえに、二千余年より、このかた、信行、法行の諸機ともに、随仏学者みな、袈裟を護持して身心とせるものなり。
諸仏の正法にくらきたぐいは袈裟を崇重せざるなり。
いま、釈提桓因、および、阿那跋達多龍王、等ともに、在家の天主なりといえども、龍王なりといえども、袈裟を護持せり。
しかあるに、剃頭のたぐい、仏子と称するともがら、袈裟におきては、受持すべきものとしらず。
いわんや、体、色、量をしらんや？
いわんや、着用の法をしらんや？
いわんや、その威儀、ゆめにもいまだみざるところなり。
袈裟をば、ふるくより、いわく、除熱悩服となづく、解脱服となづく。
おおよそ、功徳、はかるべからざるなり。
龍鱗の三熱、よく、袈裟の功徳より、解脱するなり。
諸仏、成道のとき、かならず、この衣をもちいるなり。
まことに、辺地にうまれ、末法にあうといえども、相伝あると相伝なきと、たくらぶることあらば、相伝の正嫡なるを信受、護持すべし。
いずれの家門にか、わが正伝のごとく、まさしく、釈迦の衣、法ともに正伝せる。
ひとり仏道のみにあり。
この衣、法にあわんとき、だれが恭敬供養をゆるくせん？
たとえ一日に無量、恒河沙の身命をすてても供養すべし。
生々、世々の値遇、頂戴をも発願すべし。
われら、仏生国をへだつること十万余里の山海のほかに、うまれて、辺方の愚蒙なりといえども、この正法をききて、この袈裟を一日一夜なりといえども受持し、一句、一偈なりといえども参究する。
これ、ただ一仏、二仏を供養せる福徳のみにはあるべからず。
無量、百、千、億のほとけを供養、奉覲せる福徳なるべし。
たとえ自己なりといえども、とうとぶべし、愛すべし、おもくすべし。
祖師、伝法の大恩、ねんごろに報謝すべし。
畜類、なお、恩を報ず。

人類、いかでか、恩をしらざらん？
もし恩をしらずば、畜類よりも劣なるべし、畜類よりも愚なるべし。
この仏衣の功徳、その伝、仏正法の祖師にあらざる余人は、ゆめにもいまだしらざるなり。
いわんや、体、色、量をあきらむるにおよばんや？
諸仏のあとをしたうべくば、まさに、これをしたうべし。
たとえ百、千、万代ののちも、この正伝を正伝せんは、まさに、仏法なるべし。
証験、これ、あらたなり。
俗、なお、いわく、
先王の服にあらざれば、服せず。
先王の法にあらざれば、おこなわず。

仏道もまた、しかあるなり。
先仏の法服にあらざれば、もちいるべからず。
もし先仏の法服にあらざらんほかは、なにを服してか、仏道を修行せん？
諸仏に奉覲せん？
これを服せざらんは、仏会にいたりがたかるべし。
後漢、孝明皇帝、永平年中より、このかた、西天より東地に来到する僧侶、くびすをつぎて、たえず。
震旦より印度におもむく僧侶、ままにきこゆれども、だれ人にあいて仏法を面授せりける、といわず。
ただ、いたずらに論師、および、三蔵の学者に習学せる名相のみなり。
仏法の正嫡をきかず。
このゆえに、仏衣、正伝すべき、といいつたえるにもおよばず、仏衣、正伝せりける人にあいあう、といわず、伝衣の人を見聞す、とかたらず。
はかりしりぬ、仏家の閫奥にいらざりける、ということを。
これらのたぐいは、ひとえに衣服とのみ認じて、仏法の尊重なり、としらず。
まことに、あわれむべし。
仏、法蔵、相伝の正嫡に、仏衣も相伝、相承するなり。
法蔵、正伝の祖師は仏衣を見聞せざるなきむねは、人中、天上、あまねく、しれるところなり。
しかあれば、すなわち、仏袈裟の体、色、量を正伝しきたり、正く見聞しきたり、仏袈裟の大功徳を正伝し、仏袈裟の身心骨髄を正伝せること、ただ、まさに、正伝の家業のみにあり。
もろもろの阿笈摩教の家風には、しらざるところなり。

おのおの今案に自立せるは正伝にあらず、正嫡にあらず。
わが大師、釈迦牟尼如来、正法眼蔵、無上菩提を摩訶迦葉に付授するに、仏衣、ともに伝授せりしより、嫡嫡、相承して曹谿山、大鑑禅師にいたるに三十三代なり。
その体、色、量を親見、親伝せること、家門、ひさしくつたわれて、受持いまに、あらたなり。
すなわち、五宗の高祖おのおの受持せる、それ、正伝なり。
あるいは、五十余代、あるいは、四十余代、おのおの、師資みだることなく、先仏の法によりて搭し、先仏の法によりて製することも、唯仏与仏の相伝し証契して、代代をふるに、おなじく、あらたなり。
嫡嫡、相承する仏訓に、いわく、
九条衣　三長一短( or 二長一短)(或、四長一短)
十一条衣　三長一短( or 二長一短)(或、四長一短)
十三条衣　三長一短( or 二長一短)(或、四長一短)
十五条衣　三長一短
十七条衣　三長一短
十九条衣　三長一短
二十一条衣　四長一短
二十三条衣　四長一短
二十五条衣　四長一短
二百五十条衣　四長一短
八万四千条衣　八長一短
いま、略して挙するなり。
このほか諸般の袈裟あるなり。
ともに、これ、僧伽梨衣なるべし。
あるいは、在家にしても受持し、あるいは、出家にしても受持す。
受持する、というは、着用するなり。
いたずらに、たたみ、もちたらんするは、あらざるなり。
たとえ、かみ、ひげをそれども、袈裟を受持せず、袈裟をにくみ、いとい、袈裟をおそるるは、天魔、外道なり。
百丈、大智禅師、いわく、
宿殖の善種なきものは袈裟をいむなり、袈裟をいとうなり、正法をおそれ、いとうなり。

仏、言、
若、有、衆生、入、我法中、或、犯、重罪、或、堕、邪見、

於、一念中、敬心、尊重、僧伽梨衣、
諸仏、及、我、必、於、三乗、授記、
此人、当、得、作仏。

若、天、若、龍、若、人、若、鬼、若、能、恭敬、此人、袈裟、少分、功徳、即、得、三乗不退不転。

若、有、鬼神、及、諸衆生、能、得、袈裟、乃至、四寸、
飲食、充足。

若、有、衆生、共相違反、欲、堕、邪見、
念、袈裟力、
依、袈裟力、尋、生、悲心、還、得、清浄。

若、有、人、在、兵陣、
持、此袈裟、少分、恭敬、尊重、
当、得、解脱。

しかあれば、しりぬ。
袈裟の功徳、それ、無上、不可思議なり。
これを信受、護持するところに、かならず、得、授記あるべし、得、不退あるべし。
ただ釈迦牟尼仏のみにあらず、一切諸仏、また、かくのごとく宣説しましますなり。
しるべし。
ただ諸仏の体相、すなわち、袈裟なり。
かるがゆえに、仏、言、
当、堕悪道者、厭、悪、僧伽梨。

しかあれば、すなわち、袈裟を見聞せんところに、厭悪の念おこらんには、当、堕、悪道のわがみなるべし、と悲心を生ずべきなり、慚愧、懺悔すべきなり。
いわんや、釈迦牟尼仏、はじめて王宮をいでて山にいらんとせしとき、樹神、ちなみに、僧伽梨衣、一条を挙して、釈迦牟尼仏にもうす、
この衣を頂戴すれば、もろもろの魔嬈をまぬがるるなり。

ときに、釈迦牟尼仏、この衣をうけて頂戴して十二年をふるに、しばらくも、おかず、という。
これ阿含経、等の説なり。
あるいは、いう、
袈裟は、これ、吉祥服なり。
これを服用するもの、かならず、勝位にいたる。

おおよそ、世界に、この僧伽梨衣の現前せざる時節、なきなり。
一時の現前は長劫中の事なり。
長劫中の事は一時来なり。
袈裟を得するは仏、標幟を得するなり。
このゆえに、諸仏、如来の、袈裟を受持せざる、いまだあらず。
袈裟を受持せんともがらの、作仏せざる、あらざるなり。

搭袈裟法。
偏袒右肩は常途の法なり。
通両肩搭の法もあり。
両端ともに左の臂、肩にかさね、かくるに、前頭を表面にかさね、後頭を裏面にかさねること、仏、威儀の一時あり。
この儀は諸声聞衆の見聞し相伝するところにあらず。
諸阿笈摩教の経典に、もらし、とくにあらず。
おおよそ、仏道に袈裟を搭する威儀は、現前せる伝、正法の祖師、かならず、受持せるところなり。
受持、かならず、この祖師に受持すべし。
仏祖、正伝の袈裟は、これ、すなわち、仏仏、正伝みだりにあらず。
先仏、後仏の袈裟なり。
古仏、新仏の袈裟なり。
道を化し、仏を化す。
過去を化し、現在を化し、未来を化するに、
過去より現在に正伝し、
現在より未来に正伝し、
現在より過去に正伝し、
過去より過去に正伝し、
現在より現在に正伝し、
未来より未来に正伝し、
未来より現在に正伝し、

未来より過去に正伝して、
唯仏与仏の正伝なり。
このゆえに、祖師西来、このかた、大唐より大宋にいたる数百歳のあいだ、講経の達者、おのれが業を見徹せるもの、おおく、教、家、律、等のともがら、仏法にいるとき、従来旧窠の弊衣なる袈裟を抛却して、仏道正伝の袈裟を正受するなり。
かの因縁、すなわち、伝、広、続、普灯、等の録に、つらなれり。
教、律、局量の小見を解脱して、仏祖、正伝の大道をとうとみし、みな、仏祖となれり。
いまの人も、むかしの祖師をまなぶべし。
袈裟を受持すべくば、正伝の袈裟を正伝すべし、信受すべし。
偽作の袈裟を受持すべからず。
その正伝の袈裟というは、いま、少林、曹谿より正伝せるは、これ、如来より嫡嫡、相承すること、一代も虧闕せざるところなり。
このゆえに、道業、まさしく、禀受し、仏衣、したしく手にいれるによりてなり。
仏道は仏道に正伝す。
閑人の伝得に一任せざるなり。
俗諺に、いわく、
千聞は一見にしかず。
千見は一経にしかず。

これをもって、かえりみれば、
千見、万聞、たとえ、ありとも、一得にしかず。
仏衣、正伝せるに、しくべからざるなり。
正伝あるをうたがうべくは、正伝をゆめにもみざらんは、いよいよ、うたがうべし。
仏経を伝聞せんよりは、仏衣、正伝せらんは、したしかるべし。
千経、万得、ありとも、一証にしかじ。
仏祖は証契なり。
教、律の凡流にならうべからず。
おおよそ、祖門の袈裟の功徳は、正伝、まさしく、相承せり。
本様、まのあたり、つたわれり。
受持し、あい嗣法して、いまに、たえず。
正受せるひとみな、これ、証契、伝法の祖師なり。
十聖三賢にもすぐる。

奉覲、恭敬し、礼拝、頂戴すべし。
ひとたび、この仏衣、正伝の道理、この身心に信受せられん、すなわち、値仏の兆なり、学仏の道なり。
不堪、受、是法ならん、悲生なるべし。
この袈裟をひとたび身体におおわん、決定、成、菩提の護身符子なりと深肯すべし。
一句、一偈を信心にそめつれば、長劫の光明にして虧闕せず、という。
一法を身心にそめんも、亦復、如是なるべし。
かの心念も無所住なり、我有にかかわれずといえども、その功徳、すでに、しかあり。
身体も無所住なりといえども、しかあり。
袈裟も、無所、従来なり、亦、無所、去なり、我有にあらず、他有にあらずといえども、所持のところに現住し、受持の人に加す。
所得、功徳もまた、かくのごとくなるべし。
作、袈裟の作は凡、聖、等の作にあらず。
その宗旨、十聖三賢の究尽するところにあらず。
宿殖の道種なきものは、一生、二生、乃至、無量生を経歴すといえども、袈裟をみず、袈裟をきかず、袈裟をしらず、いかに、いわんや、受持することあらんや？
ひとたび身体にふるる功徳も、うるものあり、えざるものあり。
すでに、うるは、よろこぶべし。
いまだ、えざらんは、ねがうべし。
うべからざらんは、かなしむべし。
大千界の内外に、ただ仏祖の門下のみに仏衣、つたわれること、人、天ともに見聞、普智せり。
仏衣の様子をあきらむることも、ただ祖門のみなり。
余門には、しらず。
これをしらざらんものの、自己をうらみざらんは、愚人なり。
たとえ八万四千の三昧、陀羅尼をしれりとも、仏祖の衣、法を正伝せず、袈裟の正伝をあきらめざらんは、諸仏の正嫡なるべからず。
他界の衆生は、いくばくか、ねがうらん、震旦国に正伝せるがごとく仏衣、まさしく、正伝せんことを。
おのれがくにに正伝せざること、はずる、おもいあるらん、かなしむこころ、ふかかるらん。

まことに、如来、世尊の衣、法、正伝せる法に値遇する、宿殖、般若の大功徳、種子によるなり。
いま、末法、悪時世は、おのれが正伝なきことをはじず、正伝をそねむ魔党、おおし。
おのれが所有、所住は、真実のおのれにあらざるなり。
ただ正伝を正伝せん、これ、学仏の直道なり。
おおよそ、しるべし。
袈裟は、これ、仏身なり、仏心なり。
また、解脱服と称し、
福田衣と称し、
忍辱衣と称し、
無相衣と称し、
慈悲衣と称し、
如来衣と称し、
阿耨多羅三藐三菩提、衣と称するなり。
まさに、かくのごとく受持すべし。
いま、現在、大宋国の律学と名称するともがら、声聞の酒に酔狂するによりて、おのれが家門に、しらぬ、いえを伝来することを慚愧せず、うらみず、覚知せず。
西天より伝来せる袈裟、ひさしく漢、唐につたわれることをあらためて、小量にしたがうる。
これ、小見によりて、しかあり。
小見の、はずべきなり。
もし、いま、なんじが小量の衣をもちいるがごときは、仏威儀、おおく虧闕することあらん。
仏儀を学伝せることの、あまねからざるによりて、かくのごとくあり。
如来の身心、ただ祖門に正伝して、かれらが家業に流散せざること、あきらかなり。
もし、万一も、仏儀をしらば、仏衣をやぶるべからず。
文、なお、あきらめず。
宗、いまだ、きくべからず。
又、ひとえに麁布を衣財にさだむこと、ふかく仏法にそむく。
ことに仏衣をやぶれり。
仏弟子、きるべきにあらず。
ゆえは、いかん？

布、見を挙して、袈裟をやぶれり。
あわれむべし、小乗、声聞の見、まさに、迂曲なることを。
なんじが布、見やぶれてのち、仏衣、現成すべきなり。
いうところの、絹、布の用は、一仏、二仏の道にあらず。
諸仏の大法として、糞掃を上品、清浄の衣財とせるなり。
そのなかに、しばらく、十種の糞掃をつらぬるに、絹類あり、布類あり、余帛の類もあり。
絹類の糞掃をとるべからざるか？
もし、かくのごとくならば、仏道に相違す。
絹、すでに、きらわば、布、また、きらうべし。
絹、布、きらうべき、そのゆえ、なににかある？
絹糸は殺生より生ぜる、ときらう。
おおきに、わらうべきなり。
布は生物の縁にあらざるか？
情、非情の情、いまだ凡情を解脱せず。
いかでか、仏袈裟をしらん？
又、化糸の説をきたして乱道することあり。
又、わらうべし。
いずれが、化にあらざる？
なんじ、化をきくみみを信ずといえども、化をみる目をうたがう。
目に耳なし、耳に目なきがごとし。
いまの耳目、いずれのところにかある？
しばらく、しるべし。
糞掃をひろうなかに、絹ににたる布あり、布のごとくなる絹あらん。
これをもちいんには、絹となづくべからず、布と称すべからず、まさに、糞掃と称すべし。
糞掃なるがゆえに、糞掃にして、絹にあらず、布にあらざるなり。
たとえ人、天の、糞掃と生長せるありとも、有情というべからず、糞掃なるべし。
たとえ松、菊の糞掃となれるありとも、非情というべからず、糞掃なるべし。
糞掃の、絹、布にあらず、珠玉をはなれたる道理をしるとき、糞掃衣は現成するなり、糞掃衣には、うまれ、あうなり。
絹、布の見、いまだ零落せざるは、いまだ糞掃を夢也未見なり。
たとえ麁布を袈裟として一生、取持すとも、布、見をおぼえらんは、仏衣、正伝にあらざるなり。

又、数般の袈裟のなかに、布袈裟あり、絹袈裟あり、皮袈裟あり。
ともに、諸仏のもちいるところ、仏衣、仏功徳なり。
正伝せる宗旨あり。
いまだ断絶せず。
しかあるを、凡情、いまだ解脱せざるともがら、仏法をかろくし、仏語を信ぜず、凡情に随、他、去せんと擬する、付、仏法の外道というつべし、壊、正法のたぐいなり。
あるいは、いう、天人のおしえによりて仏衣をあらたむ、と。
しかあらば、天仏をねがうべし。
又、天の流類となれるか？
仏弟子は仏法を天人のために宣説すべし。
道を天人にとうべからず。
あわれむべし。
仏法の正伝なきは、かくのごとくなり。
天衆の見と仏子の見と、大小はるかにことなることあれども、天くだりて法を仏弟子にとぶらう。
そのゆえは、仏見と天見と、はるかにことなるがゆえなり。
律家、声聞の小見をすてて、まなぶことなかれ。
小乗なり、としるべし。
仏、言、
殺、父、殺、母は懺悔しつべし。
謗、法は懺悔すべからず。

おおよそ小見、狐疑の道は、仏の本意にあらず。
仏法の大道は、小乗、およぶところ、なきなり。
諸仏の大戒を正伝すること、付法蔵の祖道のほかには、ありとしれるものなし。
むかし、黄梅の夜半に、仏の衣、法、すでに六祖の頂上に正伝す。
まことに、これ、伝法、伝衣の正伝なり。
五祖の、人をしるによりてなり。
四果、三賢のやから、および、十聖、等のたぐい、教家の論師、経師、等のたぐいは、神秀にさずくべし、六祖に正伝すべからず。
しかあれども、仏祖の、仏祖を選するに、凡情、路を超越するがゆえに、六祖、すでに、六祖となれるなり。
しるべし。

仏祖、嫡々の知、人、知、己の道理、なおざりに測量すべきところにあらざるなり。
のちに、ある僧、すなわち、六祖にとう、
黄梅の夜半の伝衣、これ、布なりとやせん？　絹なりとやせん？　帛なりとやせん？　畢竟じて、これ、なにものとかせん？
六祖、いわく、
これ、布にあらず。これ、絹にあらず。これ、帛にあらず。

曹谿高祖の道、かくのごとし。
しるべし。
仏衣は、絹にあらず、布にあらず、屈眴にあらざるなり。
しかあるを、いたずらに絹と認じ、布と認じ、屈眴と認ずるは、謗、仏法のたぐいなり。
いかにしてか、仏袈裟をしらん？
いわんや、善来得戒の機縁あり。
かれらが所得の袈裟、さらに、絹、布の論にあらざるは、仏道の仏訓なり。
また、商那和修が衣は、在家の時は俗服なり、出家すれば袈裟となる。
この道理、しずかに思量、功夫すべし。
見聞せざるがごとくして、さしおくべきにあらず。
いわんや、仏仏、祖祖、正伝しきたれる宗旨あり。
文字、かぞうるたぐい、覚知すべからず、測量すべからず。
まことに、仏道の千変万化、いかでか庸流の境界ならん？
三昧あり、陀羅尼あり。
算、沙のともがら、衣裏の宝珠をみるべからず。
いま、仏祖、正伝せる袈裟の体、色、量を諸仏の袈裟の正本とすべし。
その例、すでに、西天、東地、古往今来、ひさしきなり。
正邪を分別せし人、すでに、超証しき。
祖道のほかに袈裟を称するありとも、いまだ、枝葉とゆるす本祖あらず。
いかでか、善根の種子をきざさん？
いわんや、果実あらんや？
われら、いま、曠劫已来、いまだ、あわざる仏法を見聞するのみにあらず、仏衣を見聞し、仏衣を学習し、仏衣を受持することをえたり。
すなわち、これ、まさしく、仏を見たてまつるなり。
仏、音声をきく。
仏、光明をはなつ。
仏、受用を受用す。

仏心を単伝するなり。
得、仏髄なり。
袈裟をつくる衣財、かならず、清浄なるをもちいる。
清浄というは、浄信檀那の供養するところの衣財、あるいは、市にて買得するもの、あるいは、天衆のおくるところ、あるいは、龍神の浄施、あるいは、鬼神の浄施、あるいは、国王、大臣の浄施、あるいは、浄皮、かくのごとく、衣財、共に、もちいるべし。
また、十種の糞掃衣を清浄なりとす。
いわゆる、十種糞掃衣。
一、者、牛嚼衣。
二、者、鼠噛衣。
三、者、火焼衣。
四、者、月水衣。
五、者、産婦衣。
六、者、神廟衣。
七、者、塚間衣。
八、者、求願衣。
九、者、王職衣。
十、者、往還衣。
この十種をことに清浄の衣財とせるなり。
世俗には抛捨す。
仏道には、もちいる。
世間と仏道と、その家業、はかりしるべし。
しかあれば、すなわち、清浄をもとめんときは、この十種をもとむべし。
これをえて、浄をしり、不浄を弁肯すべし。
心をしり、身を弁肯すべし。
この十種をえて、たとえ絹類なりとも、たとえ布類なりとも、その浄、不浄を商量すべきなり。
この糞掃衣をもちいることは、いたずらに弊衣にやつれたらんがためと学するは至愚なるべし。
荘厳、綺麗ならんがために、仏道に用、着しきたれるところなり。
仏道に、やつれたる衣服とならんことは、錦繍、綾羅、金、銀、珍珠、等の衣服の、不浄よりきたれるを、やつれたる、とはいうなり。
おおよそ此土他界の仏道に、清浄、綺麗をもちいるには、この十種、それなるべし。

これ、浄、不浄の辺際を超越せるのみにあらず、漏、無漏の境界にあらず。
色、心を論ずることなかれ。
得、失に、かかわれざるなり。
ただ正伝、受持するは、これ、仏祖なり。
仏祖たるとき、正伝、禀受するがゆえに、仏祖として、これを受持するは、身の現、不現によらず、心の挙、不挙によらず、正伝せられゆくなり。
ただ、まさに、この日本国には、近来の僧尼、ひさしく袈裟を着せざりつることをかなしむべし。
いま、受持せんことをよろこぶべし。
在家の男女、なお、仏戒を受得せんは、五条、七条、九条の袈裟を着すべし。
いわんや、出家人、いかでか、着せざらん？
はじめ梵王、六天より、婬男、婬女、奴婢にいたるまでも、仏戒をうくべし、袈裟を着すべし、という。
比丘、比丘尼、これを着せざらんや？
畜生、なお、仏戒をうくべし、袈裟をかくべし、という。
仏子、なにとしてか、仏衣を着せざらん？
しかあれば、仏子とならんは、天上、人間、国王、百官をとわず、在家、出家、奴婢、畜生を論ぜず、仏戒を受持し、袈裟を正伝すべし。
まさに、仏位に正入する直道、也。

予、在宋の、そのかみ、長連牀に功夫せしとき、斉肩の隣単をみるに、毎暁の開静のとき、袈裟をささげて頂上に安置し、合掌、恭敬しき。
一偈を黙誦す。
ときに、予、未曾見のおもいをなし、歓喜、みにあまり、感涙、ひそかにおちて衣襟をうるおす。
阿含経を披閲せしとき、頂戴、袈裟の文をみるといえども、不分暁なり。
いまは、まのあたり、みる。
歓喜、随喜し、ひそかに、おもわく、
あわれむべし。
郷土にありしには、おしうる師匠なし、かたる善友にあわず。
いくばくか、いたずらに、すぐる光陰をおしまざる。
かなしまざらめや？
いま、これを見聞す、宿善、よろこぶべし。
もし、いたずらに本国の諸寺に交肩せば、いかでか、まさしく、仏衣を着せる僧宝と隣肩なることをえん？
悲喜、ひとかたにあらず。

感涙、千、万、行。

ときに、ひそかに、発願す、
いかにしてかは、不肖なりというとも、仏法の正嫡を正伝して、郷土の衆生をあわれむに、仏々、正伝の衣、法を見聞せしめん。

かのときの発願、いま、むなしからず。
袈裟を受持せる在家、出家の菩薩、おおし。
歓喜するところなり。
受持、袈裟のともがら、かならず、日夜に頂戴すべし。
殊勝、最勝の功徳なるべし。
一句、一偈を見聞することは、若、樹、若、石の因縁もあるべし。
袈裟、正伝の功徳は、十方に難遇ならん。

大宋、嘉定十七年癸未、冬、十月中、三韓の僧、二人ありて、慶元府にきたれり。
一人は、いわく、智玄。
一人は景雲。
この二人、ともに、しきりに仏経の儀を談ず。
あまつさえ文学の士なり。
しかあれども、袈裟なし、鉢盂なし、俗人のごとし。
あわれむべし、比丘形なりといえども比丘法なきこと。
小国、辺地のゆえなるべし。
我朝の比丘形のともがら、他国にゆかんとき、かの二僧のごとくならん。
釈迦牟尼仏、すでに、十二年中、頂戴して、さしおきましまさざるなり。
すでに遠孫として、これを学すべし。
いたずらに名利のために、天を拝し、神を拝し、王を拝し、臣を拝する頂門をいま、仏衣、頂戴に回向せん。
よろこぶべき大慶なり。

正法眼蔵　伝衣
ときに、仁治元年庚子、開冬日、記、于、観音導利興聖宝林寺。　　　　　入宋、伝法、沙門、道元。

袈裟、浣濯之時、須、用、衆末香和水。
灑、乾之後、畳、収、安置、高所、以、香、華、而、供養、之。

三拝然後、踞跪、頂戴、合掌、致信、唱、此偈、
大哉。
解脱服、無相、福田衣。
披奉、如来教、広、度、諸衆生。

三唱而後、立地、披奉。

# 山水経

而今の山、水は、古仏の道、現成なり。
ともに法位に住して、究尽の功徳を成ぜり。
空劫已前の消息なるがゆえに、而今の活計なり。
朕兆未萌の自己なるがゆえに、現成の透脱なり。
山の諸功徳、高、広なるをもって、乗雲の道徳、かならず、山より通達す。
順風の妙功、さだめて、山より透脱するなり。

大陽山、楷和尚、示、衆、云、
青山、常、運、歩。
石女、夜、生、児。

山は、そなわるべき功徳の虧闕することなし。
このゆえに、常、安住なり、常、運、歩なり。
その運、歩の功徳、まさに、審細に参学すべし。
山の運、歩は、人の運、歩のごとくなるべきがゆえに、人間の行歩に、おなじくみえざればとて、山の運、歩をうたがうことなかれ。
いま仏祖の説道、すでに、運、歩を指示す。
これ、その得、本なり。
常、運、歩の示衆を究弁すべし。
運、歩のゆえに、常なり。
青山の運、歩は其疾、如風よりも、すみやかなれども、山中、人は不覚不知なり。
山中とは世界裏の華開なり。
山外、人は不覚不知なり。
山をみる眼目あらざる人は、不覚不知、不見不聞。
這箇、道理なり。
もし山の運、歩を疑著するは、自己の運、歩をも、いまだ、しらざるなり。
自己の運、歩なきにはあらず。
自己の運、歩、いまだ、しらざるなり、あきらめざるなり。
自己の運、歩をしらんがごとき、まさに、青山の運、歩をも、しるべきなり。
青山、すでに、有情にあらず、非情にあらず。
自己、すでに、有情にあらず、非情にあらず。
いま、青山の運、歩を疑著せんこと、うべからず。

いく法界を量局として青山を照鑑すべしとしらず。
青山の運、歩、および、自己の運、歩、あきらかに撿点すべきなり。
退歩、歩退、ともに撿点あるべし。
未朕兆の正当時、および、空王那畔より、進歩、退歩に、運、歩、しばらくも、やまざること撿点すべし。
運、歩、もし休することあらば、仏祖、不出現なり。
運、歩、もし究極( or 窮極)あらば、仏法、不到、今日ならん。
進歩、いまだ、やまず。
退歩、いまだ、やまず。
進歩のとき退歩に乖向せず。
退歩のとき進歩を乖向せず。
この功徳を山、流とし流、山とす。
青山も運、歩を参究し、東山も水上、行を参学するがゆえに、この参学は山の参学なり。
山の身心をあらためず、山の面目ながら回途参学しきたれり。
青山は運、歩、不得なり。
東山、水上、行、不得なると、山を誹謗することなかれ。
低下の見所のいやしきゆえに、青山、運、歩の句をあやしむなり。
小聞のつたなきによりて、流、山の語をおどろくなり。
いま、流水の言も七通八達せずといえども、小見、小聞に沈溺せるのみなり。
しかあれば、所積の功徳を挙せるを形名とし、命脈とせり。
運、歩あり、流、行あり。
山の山児を生ずる時節あり。
山の、仏祖となる道理によりて、仏祖、かくのごとく出現せるなり。
たとえ草木、土石、牆壁の現成する眼睛あらんときも、疑著にあらず、動著にあらず、全現成にあらず。
たとえ七宝、荘厳なりと見取せらるる時節、現成すとも、実帰にあらず。
たとえ諸仏、行道の境界と見、現成あるも、あながちの愛所にあらず。
たとえ諸仏、不思議の功徳と見、現成の頂〓をうとも、如実、これのみにあらず。(「〓」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
各各の見成は各各の依正なり。
これらを仏祖の道業とするにあらず。
一隅の管見なり。
転境、転心は大聖の所呵なり。
説心説性は仏祖の所不肯なり。

見心見性は外道の活計なり。
滞言滞句は解脱の道著にあらず。
かくのごとくの境界を透脱せるあり。
いわゆる、青山、常、運、歩なり、東山、水上、行なり。
審細に参究すべし。
石女、夜、生、児は石女の生、児するときを夜という。
おおよそ、男石、女石あり、非男女石あり。
これ、よく、天を補し、地を補す。
天石あり、地石あり。
俗のいうところなりといえども、人のしるところ、まれなるなり。
生、児の道理、しるべし。
生、児のときは、親子、並化するか？
児の親となるを生、児、現成と参学するのみならんや？
親の児となるときを生、児、現成の修、証なりと参学すべし、究徹すべし。

雲門、匡真大師、いわく、
東山、水上、行。

この道、現成の宗旨は、諸山は東山なり、一切の東山は水上、行なり。
このゆえに、九山、迷盧、等、現成せり、修、証せり。
これを東山という。
しかあれども、雲門、いかでか、東山の皮肉骨髄、修、証、活計に透脱ならん？
いま、現在、大宋国に、杜撰のやから、一類あり。いまは群をなせり。
小実の撃、不能なるところなり。
かれら、いわく、
いまの東山水上行話、および、南泉の鎌子話のごときは、無理会話なり。
その意旨は、もろもろの念慮にかかわれる語話は仏祖の禅話にあらず。
無理会話、これ、仏祖の語話なり。
かるがゆえに、黄檗の行棒、および、臨済の挙喝、これら、理会、およびがたく、念慮にかかわれず。
これを朕兆未萌已前の大悟とするなり。
先徳の方便、おおく、葛藤断句をもちいるというは、無理会なり。

かくのごとく、いうやから、かつて、いまだ正師をみず、参学眼なし。
いうにたらざる小獃子なり。

宋土、ちかく、二、三百年より、このかた、かくのごとくの魔子、六群禿子、おおし。
あわれむべし。
仏祖の大道の廃するなり。
これらが所解、なお、小乗、声聞におよばず、外道よりも、おろかなり。
俗にあらず、僧にあらず、人にあらず、天にあらず。
学仏道の畜生よりも、おろかなり。
禿子がいう無理会話、なんじのみ無理会なり、仏祖は、しかあらず。
なんじに理会せられざればとて、仏祖の理会路を参学せざるべからず。
たとえ畢竟、無理会なるべくば、なんじが、いま、いう理会も、あたるべからず。
しかのごときの、たぐい、宋朝の諸方におおし。
まのあたり、見聞せしところなり。
あわれむべし。
かれら、念慮の、語句なることをしらず、語句の、念慮を透脱することをしらず。
在宋のとき、かれらをわらうに、かれら、所陳なし、無語なりしのみなり。
かれらが、いまの、無理会の、邪計なるのみなり。
だれが、なんじにおしうる？
天真の師範なしといえども、自然の外道、見なり。
しるべし。
この東山水上行は仏祖の骨髄なり。
諸水は東山の脚下に現成せり。
このゆえに、諸山、くもにのり、天をあゆむ。
諸水の頂□は諸山なり。(「□」は「」という一文字の漢字です。)
向上、直下の行歩ともに、水上なり。
諸山の脚尖、よく、諸水を行歩し、諸水を趯出せしむるゆえに、運、歩、七縦八横なり、修、証、即、不無なり。
水は強弱にあらず、湿、乾にあらず、動静にあらず、冷暖にあらず、有無にあらず、迷悟にあらざるなり。
こりては、金剛よりも、かたし。だれが、これをやぶらん？
融しては、乳水よりも、やわらかなり。だれが、これをやぶらん？
しかあれば、すなわち、現成、所有の功徳をあやしむことあたわず。
しばらく、十方の水を十方にして著眼看すべき時節を参学すべし。
人、天の、水をみるときのみの参学にあらず。

水の、水をみる参学あり。水の、水を修、証するがゆえに。
水の、水を道著する参究あり。
自己の、自己に相逢する通路を現成せしむべし。
他己の、他己を参徹する活路を進退すべし、跳出すべし。
おおよそ、山水をみること、種類にしたがいて不同あり。
いわゆる、水をみるに、瓔珞と、みるものあり。
しかあれども、瓔珞を水とみるにはあらず。
われらが、なに、と、みるかたちを、かれが水とすらん。
かれが瓔珞は、われ、水とみる。
水を妙華とみる、あり。
しかあれども、華を水ともちいるにあらず。
鬼は水をもって猛火とみる、膿、血とみる。
龍魚は、宮殿とみる、楼台とみる。
あるいは、七宝、摩尼珠とみる。
あるいは、樹林、牆壁とみる。
あるいは、清浄、解脱の法性とみる。
あるいは、真実人体とみる。
あるいは、身相、心性とみる。
人間、これを水とみる、殺活の因縁なり。
すでに、随類の所見、不同なり。
しばらく、これを疑著すべし。
一境をみるに、諸見、しなじななり、とやせん？
諸象を一境なりと誤錯せりとや(せん)？
功夫の頂𩕳に、さらに功夫すべし。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
しかあれば、すなわち、修、証、弁道も一般、両般なるべからず。
究竟の境界も千種万般なるべきなり。
さらに、この宗旨を憶想するに、諸類の水、たとえ、おおしといえども、本水、なきがごとし、諸類の水、なきがごとし。
しかあれども、随類の諸水、それ、心によらず、身によらず、業より生ぜず、依自にあらず、依他にあらず、依水の透脱あり。
しかあれば、水は地水火風空識、等にあらず。
(水は)青、黄、赤、白、黒、等にあらず、色声香味触法、等にあらざれども、地水火風(空)、等の水、おのずから現成せり。

かくのごとくなれば、而今の国土、宮殿、なにものの能成、所成とあきらめ、いわんこと、がたかるべし。
空輪、風輪にかかれると道著する、わがまことにあらず、他のまことにあらず。
小見の測度を擬議するなり。
かかれるところなくば、住すべからず、とおもうによりて、この道著するなり。
仏、言、
一切諸法、畢竟、解脱、無有、所住。

しるべし。
解脱にして繋縛なしといえども諸法、住、位せり。
しかあるに、人間の、水をみるに、流注して、とどまらざる、とみる一途あり。
その流に多般あり。
これ、人、見の一端なり。
いわゆる、地を流通し、空を流通し、上方に流通し、下方に流通す。
一曲にも、ながれ、九淵にも、ながる。
のぼりて雲をなし、くだりて、ふちをなす。
文子、曰、
水之道、上、天、為、雨露、下、地、為、江河。

いま、俗のいうところ、なお、かくのごとし。
仏祖の児孫と称せんともがら、俗よりも、くらからんは、もっとも、はずべし。
いわく、水の道は、水の所知覚にあらざれども、水、よく、現、行す。
水の不知覚にあらざれども、水、よく、現、行するなり。
上、天、為、雨露という。
しるべし。
水は、いくそばくの上天、上方へも、のぼりて、雨、露をなすなり。
雨、露は世界にしたがうて、しなじななり。
水のいたらざるところ、ある、というは、小乗、声聞教なり、あるいは、外道の邪教なり。
水は火焔裏にもいたるなり、心念思量分別裏にもいたるなり、覚知仏性裏にもいたるなり。
下、地、為、江河。

しるべし。
水の下、地するとき、江河をなすなり。
江河の精、よく、賢人となる。
いま、凡愚庸流の、おもわくは、水は、かならず江河、海、川にある、と、おもえり。
しかには、あらず。
水のなかに江、海をなせり。
しかあれば、江、海ならぬところにも水はあり。
水の、下、地するとき、江海の功をなすのみなり。
また、水の、江、海をなしつるところなれば、世界、あるべからず、仏土、あるべからず、と学すべからず。
一滴のなかにも無量の仏国土、現成なり。
しかあれば、仏土のなかに水あるにあらず。
水裏に仏土あるにあらず。
水の所在、すでに、三際にかかわれず、法界にかかわれず。
しかも、かくのごとくなりといえども、水、現成の公案なり。
仏祖のいたるところには、水、かならず、いたる。
水のいたるところ(には)、仏祖、かならず、現成するなり。
これによりて、仏祖、かならず、水を拈じて身心とし、思量とせり。
しかあれば、すなわち、水は、かみにのぼらず、というは、内外の典籍にあらず。
水之道は、上下、縦横に通達するなり。
しかあるに、仏経のなかに、(火、)風は上にのぼり、地、水は下にくだる。
この上下は、参学するところあり。
いわゆる、仏道の上下を参学するなり。
いわゆる、地、水のゆくところを下とするなり。
下を地、水のゆくところとするにあらず。
火、風のゆくところは上なり。
法界、かならずしも上下、四維の量にかかわるべからざれども、四大、五大、六大、等の行所によりて、しばらく、方隅法界を建立するのみなり。
無想天は、かみ、阿鼻獄は、しもとせるにあらず。
阿鼻も尽法界なり。
無想も尽法界なり。
しかあるに、龍魚の、水を宮殿とみるとき、人の、宮殿をみるがごとくなるべし、さらに、ながれゆく、と知見すべからず。

もし傍観ありて、なんじが宮殿は流水なり、と為説せんときは、われらが、いま、山、流の道著を聞著するがごとく、龍魚。たちまちに驚疑すべきなり。
さらに、宮殿、楼閣の欄、階、露柱は、かくのごとくの説著ありと保任することもあらん。
この料理、しずかに、おもいきたり、おもいもってゆくべし。
この辺表に透脱を学せざれば、凡夫の身心を解脱せるにあらず、仏祖の国土を究尽せるにあらず、凡夫の国土を究尽せるにあらず、凡夫の宮殿を究尽せるにあらず。
いま、人間には、海のこころ、江のこころを、ふかく水と知見せり、といえども、龍魚、等、いかなるものをもって水と知見し水と使用す、と、いまだしらず。
おろかに、わが、水と知見するを、いずれのたぐいも水にもちいるらん、と認ずることなかれ。
いま、学仏のともがら、水をならわんとき、ひとすじに、人間のみには、とどこおるべからず。
すすみて仏道の水を参学すべし。
仏祖のもちいるところの水は、われら、これをなにとか所見する？　と参学すべきなり。
仏祖の屋裏、また、水ありや？　水なしや？　と参学すべきなり。

山は超古超今より大聖の所居なり。
賢人、聖人ともに、山を堂奥とせり、山を身心とせり。
賢人、聖人によりて、山は現成せるなり。
おおよそ、山は、いくそばくの大聖、大賢、いり、あつまれるらん、とおぼゆれども、山は、いりぬるより、このかたは、一人にあう、一人もなきなり。
ただ山の活計の現成するのみなり。
さらに、いりきたりつる蹤跡、なお、のこらず。
世間にて山をのぞむ時節と、山中にて山にあう時節と、頂⊠、眼睛、はるかにことなり。(「⊠」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
不流の憶想、および、不流の知見も、龍魚の知見と、一斉なるべからず。
人、天の自界にところをうる、他類、これを疑著し、あるいは、疑著におよばず。
しかあれば、山、流の句を仏祖に学すべし、驚疑にまかすべからず。
拈一は、これ、流なり。
拈一は、これ、不流なり。
一回は流なり。

一回は不流なり。
この参究、なきがごときは、如来、正法輪にあらず。
古仏、いわく、
欲、得、不招、無間業、莫、謗、如来、正法輪。

この道を皮肉骨髄に銘ずべし、身心依正に銘ずべし、空に銘ずべし、色に銘ずべし。
若、樹、若、石に銘ぜり。
若、田、若、里に銘ぜり。
おおよそ、山は国界に属せりといえども、山を愛する人に属するなり。
山、かならず、主を愛するとき、聖、賢、高徳、やまにいるなり。
聖、賢、やまにすむとき、やま、これに属するがゆえに、樹石鬱茂なり、禽獣霊秀なり。
これ、聖、賢の徳をこうむらしむるゆえなり。
しるべし。
山は、賢をこのむ実あり、聖をこのむ実あり。
帝者、おおく、山に幸して、賢人を拝し、大聖を拝問するは、古今の勝躅なり。
このとき、師礼をもって、うやまう、民間の法に準ずることなし。
聖化のおよぶところ、まったく山賢を強為することなし。
山の人間をはなれたること、しりぬべし。
崆峒華封の、そのかみ、黄帝、これを拝請するに、膝行して叩頭して広成にとうしなり。
釈迦牟尼仏、かつて、父王の宮をいでて山へいれり。
しかあれども、父王、やまをうらみず。
父王、やまにありて太子をおしうるともがらをあやしまず。
十二年の修道、おおく、山にあり。
法王の運啓も在山なり。
まことに、輪王、なお、山を強為せず。
しるべし。
山は人間のさかいにあらず、上天のさかいにあらず。
人慮の測度をもって山を知見すべからず。
もし人間の流に比準せずば、だれが山、流。山、不流。等を疑著せん。

あるいは、むかしよりの賢人、聖人、ままに水にすむもあり。
水にすむとき、魚をつるあり、人( or 水)をつるあり、道をつるあり。

これ、ともに、古来、水中の風流なり。
さらに、すすみて、自己をつるあるべし、釣をつるあるべし、釣につらるるあるべし、道につらるるあるべし。
むかし、徳誠和尚、たちまちに薬山をはなれて江心にすみし。
すなわち、華亭江の賢聖をえたるなり。
魚をつらざらんや？
人をつらざらんや？
水をつらざらんや？
みずからをつらざらんや？
人の、徳誠をみることをうるは、徳誠なり。
徳誠の、人を接するは、人にあうなり。
世界に水あり、というのみにあらず、水界に世界あり。
水中の、かくのごとく、あるのみにあらず。
雲中にも有情世界あり。
風中にも有情世界あり。
火中にも有情世界あり。
地中にも有情世界あり。
法界中にも有情世界あり。
一茎草中にも有情世界あり。
一拄杖中にも有情世界あり。
有情世界あるがごときは、そのところ、かならず、仏祖世界あり。
かくのごとくの道理、よくよく参学すべし。
しかあれば、水は、これ、真龍の宮なり。
流落にあらず。
流のみなりと認ずるは、流のことば、水を謗ずるなり。たとえば、非流と強為するがゆえに。
水は水の如是実相のみなり。
水、是、水功徳なり、流にあらず。
一水の流を参究し、不流を参究するに、万法の究尽、たちまちに現成するなり。

山も、宝にかくるる山あり。
沢にかくるる山あり。
空にかくるる山あり。
山にかくるる山あり。
蔵に蔵山する参学あり。

古仏、いわく、山、是、山。水、是、水。

この道取は、山、是、山というにあらず、山、是、山というなり。
しかあれば、山を参究すべし。
山を参究すれば、山に功夫なり。

かくのごとくの山、水、おのずから賢をなし、聖をなすなり。

正法眼蔵　山水経
爾時、仁治元年庚子、十月十八日、在、于、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 仏祖

宗礼(それ)、仏祖の現成は、仏祖を挙拈して奉覲するなり。
過、現、当来のみにあらず。
仏向上よりも向上なるべし。
まさに、仏祖の面目を保任せるを拈じて礼拝し相見す。
仏祖の功徳を現挙せしめて住持しきたり、体証しきたれり。

毘婆尸仏　大和尚(此、云、広説)
尸棄仏　大和尚(此、云、火)
毘舎浮仏　大和尚(此、云、一切慈)
拘留孫仏　大和尚(此、云、金仙人)
拘那含牟尼仏　大和尚(此、云、金色仙)
迦葉仏　大和尚(此、云、飲光)
釈迦牟尼仏　大和尚(此、云、能仁、寂黙)
摩訶迦葉　大和尚(第一祖)
阿難陀　大和尚(第二祖)
商那和修　大和尚(第三祖)
優婆毱多　大和尚(第四祖)
提多迦　大和尚(第五祖)
弥遮迦　大和尚(第六祖)
婆須蜜多　大和尚(第七祖)
仏陀難提　大和尚(第八祖)
伏駄蜜多　大和尚(第九祖)
婆栗湿縛　大和尚(第十祖)
富那夜奢　大和尚(第十一祖)
馬鳴　大和尚(第十二祖)
迦毘摩羅　大和尚(第十三祖)
那伽閼刺樹那　大和尚(又、龍樹、又、龍勝、又、龍猛)(第十四祖)
伽那提婆　大和尚(第十五祖)
羅睺羅多　大和尚(第十六祖)
僧伽難提　大和尚(第十七祖)
伽耶舍多　大和尚(第十八祖)
鳩摩羅多　大和尚(第十九祖)
闍夜多　大和尚(第二十祖)

婆修盤頭　大和尚(第二十一祖)
摩奴羅　大和尚(第二十二祖)
鶴勒那　大和尚(第二十三祖)
獅子　大和尚(第二十四祖)
婆舎斯多　大和尚(第二十五祖)
不如蜜多　大和尚(第二十六祖)
般若多羅　大和尚(第二十七祖)
菩提達磨　大和尚(第二十八祖)
慧可　大和尚
僧璨　大和尚
道信　大和尚
弘忍　大和尚
慧能　大和尚
行思　大和尚
希遷　大和尚
惟儼　大和尚
曇晟　大和尚
良价　大和尚
道膺　大和尚
道丕　大和尚
観志　大和尚
縁観　大和尚
警玄　大和尚
義青　大和尚
道楷　大和尚
子淳　大和尚
清了　大和尚
宗珏　大和尚
智鑑　大和尚
如浄　大和尚

道元、大宋国、宝慶元年乙酉、夏安居時、先師、天童古仏、大和尚に参侍して、この仏祖を礼拝、頂戴することを究尽せり。
唯仏与仏なり。

正法眼蔵　仏祖

爾時、仁治二年辛丑、正月三日、書、于、日本国、雍州、宇治県、観音導利興聖宝林寺、而、示、衆。

# 嗣書

仏仏、かならず、仏仏に嗣法し、
祖祖、かならず、祖祖に嗣法する。
これ、証契なり。
これ、単伝なり。
このゆえに、無上菩提なり。
仏にあらざれば、仏を印、証すること、あたわず。
仏の印、証をえざれば、仏となることなし。
仏にあらずよりは、だれが、これを最尊なりとし、無上なりと印可すること
あらん？
仏の( or 仏に)印、証をうるとき、無師独悟するなり、無自独悟するなり。
このゆえに、仏仏、証、嗣し、祖祖、証契す、というなり。
この道理の宗旨は、仏仏にあらざれば、あきらむべきにあらず。
いわんや、十地等覚の所量ならんや？
いかに、いわんや、経師、論師、等の測度するところならんや？
たとえ為説すとも、かれら、きくべからず。
仏仏、相嗣するがゆえに、しるべし、仏道は、ただ仏仏の究尽にして、仏仏
にあらざる時節あらず。
たとえば、石は石に相嗣し、玉は玉に相嗣することあり。
菊も相嗣あり、松も印、証するに、みな、前菊、後菊、如如なり、前松、後
松、如如なるがごとし。
かくのごとくなるをあきらめざるともがら、仏仏、正伝の道にあうといえど
も、いかにある道得ならん？　とあやしむにも、およばず。
仏仏、相嗣し、祖祖、証契す、という領覧あることなし。
あわれむべし、仏種族に相似なりといえども、仏子にあらざることを、子仏
にあらざることを。

曹谿、あるとき、衆にしめして、いわく、
七仏より慧能にいたるに四十仏あり。
慧能より七仏にいたるに四十祖あり。

この道理、あきらかに仏祖、正嗣の宗旨なり。
いわゆる、七仏は、過去、荘厳劫に出現せるもあり、現在、賢劫に出現せる
もあり。

しかあるを、四十祖の面授をつらぬるは、仏道なり、仏嗣なり。
しかあれば、すなわち、六祖より向上して七仏にいたれば、四十祖の仏嗣あり。
七仏より向下して六祖にいたるに四十仏の仏嗣なるべし。
仏道、祖道、かくのごとし。
証契にあらず、仏祖にあらざれば、仏智慧にあらず、祖究尽にあらず。
仏智慧にあらざれば、仏信受なし。
祖究尽にあらざれば、祖証契せず。
しばらく、四十祖というは、ちかきをかつ(かつ)挙するなり。
これによりて、仏仏の相嗣すること、深遠にして、不退不転なり、不断不絶なり。
その宗旨は、釈迦牟尼仏は七仏已前に成道すといえども、ひさしく迦葉仏に嗣法せるなり。
降生より三十歳、十二月八日に成道すといえども、七仏已前の成道なり。
諸仏斉肩同時の同、成道なり。
諸仏已前の成道なり。
一切の諸仏より末上の成道なり。
さらに、迦葉仏は釈迦牟尼仏に嗣法する、と参究する道理あり。
この道理をしらざるは、仏道をあきらめず。
仏道をあきらめざれば、仏嗣にあらず。
仏嗣というは、仏子ということなり。

釈迦牟尼仏、あるとき、阿難に、とわしむ、
過去の諸仏は、これ、だれが弟子なるぞ？
釈迦牟尼仏の、いわく、
過去の諸仏は、これ、我、釈迦牟尼仏の弟子なり。

諸仏の仏義、かくのごとし。
この諸仏に奉覲して、仏嗣を成就せん( or 成就せしむ)、すなわち、仏仏の仏道にてあるべし。
この仏道、かならず、嗣法するとき、さだめて、嗣書あり。
もし嗣法なきは、天然外道なり。
仏道もし嗣法を決定するにあらずよりは、いかでか、今日にいたらん？
これによりて、仏仏なるには、さだめて、仏嗣仏の嗣書あるなり、仏嗣仏の嗣書をうるなり。
その嗣書の為体は、日月星辰をあきらめて嗣法す。

あるいは、皮肉骨髄を得せしめて嗣法す。
あるいは、袈裟を相嗣し、
あるいは、拄杖を相嗣し、
あるいは、松枝を相嗣し、
あるいは、払子を相嗣し、
あるいは、優曇華を相嗣し、
あるいは、金襴衣を相嗣す。
鞁鞋の相嗣あり、
竹篦の相嗣あり。
これらの嗣法を相嗣するとき、
あるいは、指血をして嗣書し、
あるいは、舌血をして嗣書す。
あるいは、油、乳をもってかき嗣法する。
ともに、これ、嗣書なり。
嗣せるもの、得せるもの、ともに、これ、仏嗣なり。
まことに、それ、仏祖として現成するとき、嗣法、かならず、現成す。
現成するとき、期せざれども、きたり、もとめざれども、嗣法せる、仏祖、おおし。
嗣法あるは、かならず、仏仏、祖祖なり。
第二十八祖、西来より、このかた、仏道に嗣法ある宗旨を、東土に正聞するなり。
それより、さきは、かつて、いまだ、きかざりしなり。
西天の論師、法師、等、およばず、しらざるところなり。
および、十聖三賢の境界、およばざるところ、三蔵義学の呪術師、等は、あるらん？　と疑著するにも、およばず。
かなしむべし、かれら、道器なる人身をうけながら、いたずらに教網にまつわれて、透脱の法をしらず、跳出の期を期せざることを。
かるがゆえに、学道を審細にすべきなり。
参究の志気をもっぱらすべきなり。

道元、在宋のとき、嗣書を礼拝することをえしに、多数の嗣書ありき。

そのなかに、惟一西堂とて、天童に掛錫せしは、越上の人事なり。
前住、広福寺の堂頭なり。
先師と同郷人なり。
先師、つねに、いわく、境風は一西堂に問取すべし。

あるとき、西堂、いわく、
古蹟の可観は人間の珍玩なり。いくばくか見来せる？
道元、いわく、
見来すくなし。
ときに、西堂、いわく、
吾那裏に一軸の古蹟あり。恁麼、次第なり、与老兄看、
と、いいて、携来をみれば、嗣書なり。
法眼下の嗣書にてありけるを、老宿の衣鉢のなかよりえたりけり。
惟一長老のには、あらざりけり。
かれに、かきたりしは、
初祖、摩訶迦葉、悟、於、釈迦牟尼仏。
釈迦牟尼仏、悟、迦葉仏。

かくのごとく、かきたり。
道元これをみしに、正嫡の正嫡に嗣法あることを決定、信受す。
未曾見の法なり。
仏祖の、冥感して、児孫を護持する時節なり。
感激、不勝なり。

雲門下の嗣書とて、宗月長老の、天童の首座職に充せしとき、道元にみせしは、いま嗣書をうる人の、つぎ、かみの師、および、西天、東地の仏祖をならべ、つらねて、その下頭に、嗣書をうる人の名字あり。
諸仏祖より直に、いまの新祖師の名字につらぬるなり。
しかあれば、如来より四十余代ともに、新嗣の名字へきたれり。
たとえば、各々の、新祖にさずけたるがごとし。
摩訶迦葉、阿難陀、等は余門のごとくに、つらなれり。
ときに、道元、宗月首座にとう、
和尚、いま、五家の宗派をつらぬるに、いささか同異あり。
その、こころ、いかん？
西天より嫡嫡相嗣せらば、なんぞ、同異あらんや？
宗月、いわく、
たとえ、同異、はるかなりとも、ただ、まさに、雲門山の仏は、かくのごとくなる、と学すべし。
釈迦老師、なにによりてか、尊重、他なる？
悟道によりて尊重なり。

雲門大師、なにによりてか、尊重、他なる？
悟道によりて尊重なり。

道元、この説をきくに、いささか領覧あり。
いま、江浙に大刹の主とあるは、おおく、臨済、雲門、洞山、等の嗣法なり。
しかあるに、臨済の遠孫と自称するやから、ままに、くはだつる不是あり。
(いわく、)善知識の会下に参じて、頂相、一幅、法語、一軸を懇請して、嗣法の標準にそなう。
しかあるに、一類の狗子あり。
尊宿のほとりに法語、頂相、等を懇請して、かくし、たくわうること、あまたあるに、晩年におよびて、官家に陪銭し、一院を討得して、住持職に補するときは、法語、頂相の師に嗣法せず、当代の名誉のともがら、あるいは、王、臣に親付なる長老、等に嗣法するときは、得法をとわず、名誉をむさぼるのみなり。
かなしむべし、末法、悪時、かくのごとくの邪風あることを。
かくのごとくのやからのなかに、いまだかつて一人としても、仏祖の道を夢にも見聞せる、あらず。
おおよそ、法語、頂相、等をゆるすことは、教家の講師、および、在家の男女、等にもさずく、行者、商客、等にも、ゆるすなり。
そのむね、諸家の録に、あきらかなり。
あるいは、そのひとにあらざるが、みだりに嗣法の証拠をのぞむによりて、一軸の書をもとむるに、有道のいたむところなりといえども、なまじいに援筆するなり。
しかのごときのときは、古来の書式によらず、いささか嗣吾( or 師吾)のよしをかく。
近来の法は、ただ、その師の会下にて得力すれば、すなわち、かの師を師と嗣法するなり。
かつて、その師の印をえざれども、ただ入室、上堂に咨参して、長連牀にあるともがら、住院のときは、その師承を挙するに、いとまあらざれども、大事、打開するとき、その師を師とせるのみ、おおし。

また、龍門、仏眼禅師、清遠和尚の遠孫にて、伝蔵主というものありき。
かの伝蔵主、また、嗣書を帯せり。
嘉定のはじめに、隆禅上座、日本国の人なりといえども、かの伝蔵主、やまいしけるに、隆禅、よく、伝蔵主を看病しけるに、勤労しきりなるによりて、看病の労を謝せんがために、嗣書をとりいだして、礼拝せしめけり。

みがたきものなり。
与、爾、礼拝、といいけり。
それより、このかた、八年ののち、嘉定十六年癸未、あきのころ、道元、はじめて天童山に寓止するに、隆禅上座、ねんごろに伝蔵主に請して、嗣書を道元にみせし。
その嗣書の様は、七仏よりのち臨済にいたるまで、四十五祖をつらねかきて、臨済よりのちの師は、一円相をつくりて、そのなかに、めぐらして、法諱と華字とをうつし、かけり。
新嗣は、おわりに、年月の下頭に、かけり。
臨済の尊宿に、かくのごとくの不同あり、としるべし。

先師、天童堂頭、ふかく、人の、みだりに嗣法を称することをいましむ。
まことに、先師の会は、これ、古仏の会なり、叢林の中興なり。
みずからも、まだらなる袈裟をかけず。
芙蓉山の道楷禅師の衲法衣、つたわれりといえども、上堂、陞座にもちいず。
おおよそ、住持職として、まだらなる法衣、かつて一生のうちに、かけず。
こころあるも、ものしらざるも、ともに、ほめき。真善知識なり、と尊重す。
先師、古仏、上堂するに、つねに諸方をいましめて、いわく、
近来、おおく、祖道に名をかれるやから、みだりに法衣を搭し、長髪をこのみ、師号に署するを出世の舟航とせり。
あわれむべし。
だれが、これをすくわん？
うらむらくは、諸方、長老、無道心にして、学道せざることを。
嗣書、嗣法の因縁を見聞せるもの、なお、まれなり。
百、千人中、一箇、也、無。
これ、祖道、陵夷( or 陵遅)なり。

かくのごとく、よのつねに、いましむるに、天下の長老、うらみず。
しかあれば、すなわち、誠心、弁道することあらば、嗣書あることを見聞すべし。
見聞することあるは、学道なるべし。

臨済の嗣書は、まず、その名字をかきて、
某甲子、われに参ず、ともかき、
わが会にきたれり、ともかき、
入、吾堂奥、ともかき、

嗣吾、ともかきて、
ついでのごとく、前代をつらぬるなり。
かれも、いささか、いいきたれる法訓あり。
いわゆる、宗趣は、(嗣は、)おわり、はじめにかかわれず、ただ真善知識を相見する的々の宗旨なり。

臨済には、かくのごとく、かけるもあり。
まのあたり、みしによりて、しるす。
了派、蔵主、者、威武人、也。
今、吾子、也。
徳光、参侍、径山、杲和尚。
径山、嗣、夾山、勤。
勤、嗣、楊岐、演。
演、嗣、海会、端。
端、嗣、楊岐、会。
会、嗣、慈明、円。
円、嗣、汾陽、照。
照、嗣、首山、念。
念、嗣、風穴、沼。
沼、嗣、南院、顒。
顒、嗣、興化、奘。
奘、是、臨済高祖之長嫡、也。

これは、阿育王山、仏照禅師、徳光、かきて派無際にあたうるを、天童の住持なりしとき、小師僧、智庚、ひそかに、もちきたりて、了然寮にて、道元にみせし。
ときに、大宋、嘉定十七年甲申、正月二十一日、はじめて、これをみる。
喜感、いくそばくぞ。
すなわち、仏祖の冥感なり。
焼香、礼拝して披看す。
この嗣書を請出することは、去年七月のころ、師広、都寺、ひそかに寂光堂にて、道元にかたれり。
道元、ちなみに、都寺にとう、
如今、だれ人が、これを帯持せる？
都寺、いわく、

堂頭老漢、那裏、有、相似( or 相嗣)。のちに、請出、ねんごろにせば、さだめて、みすることあらん。

道元、このことばをききしより、もとむる、こころざし、日夜に休せず。
このゆえに、今年、ねんごろに小師の智庾を屈請し、一片心をなげて請得せりしなり。
その、かける地は、白絹の表背せるに、かく。
表紙は、あかき錦なり。
軸は玉なり。
長、九寸ばかり、闊、七尺余なり。
閑人には、みせず。
道元、すなわち、智庾を謝す。
さらに、即時に堂頭に参じて焼香し、無際和尚に礼謝す。
ときに、無際、云、
這一段事、少、得見知。
如今、老兄、知得、便是、学道之実帰、也。

ときに、道元、喜感、無勝。

のちに、宝慶のころ、道元、台山、雁山、等に雲遊するついでに、平田の万年寺にいたる。
ときの住持は福州の元鼐和尚なり。
宗鑑、長老、退院ののち、鼐和尚、補す。
叢席を一興せり。
人事のついでに、むかしよりの仏祖の家風、往来せしむるに、大潙、仰山の令嗣話を挙するに、長老、いわく、
曾、看、我箇裏、嗣書、也？　否？
道元、いわく、
いかにして(か)、みることをえん？

長老、すなわち、みずから、たちて、嗣書をささげて、いわく、
這箇は、たとえ親人なりといえども、たとえ侍僧のとしをへたるといえども、これをみせしめず。
これ、すなわち、仏祖の法訓なり。
しかあれども、元鼐、ひごろ出城し、見、知府のために在城のとき、一夢を感ずるに、いわく、

大梅山、法常禅師とおぼしき高僧ありて、梅華、一枝をさしあげて、いわく、
もし、すでに船舷をこゆる実人あらんには、華をおしむことなかれ。
と、いいて、梅華をわれにあたう。
元鼒、おぼえずして、夢中に吟じて、いわく、
未、跨、船舷、好、与、三十棒。

しかあるに、不経、五日、与、老兄、相見。
いわんや、老兄、すでに船舷にまたがり、きたる。
この嗣書、また、梅華の綾にかけり。
大梅のおしうるところならん。
夢想と符合するゆえに、とりいだすなり。
老兄、もし、われに嗣法せん、と、もとむや？
たとえ、もとむとも、おしむべきにあらず。

道元、信感、おくところなし。
嗣書を請すべしといえども、ただ焼香、礼拝して、恭敬、供養するのみなり。
ときに、焼香侍者、法寧というあり、はじめて嗣書をみる、といいき。
道元、ひそかに思惟しき、
この一段の事、まことに、仏祖の冥資にあらざれば、見聞、なお、かたし。
辺地の愚人として、なにの、さいわいありてか、数番、これをみる？

感涙、霑、袖。
ときに、維摩室、大舎堂、等に閑闃、無人なり。
この嗣書は、落地梅、綾の、しろきに、かけり。
長、九寸余、闊、一尋余なり。
軸子は黄玉なり。
表紙は錦なり。

道元、台山より天童にかえる路程に大梅山、護聖寺の旦過に宿するに、
大梅、祖師きたりて、開華せる一枝の梅華をさずくる、霊夢を感ず。
祖鑑、もっとも仰憑するものなり。
その一枝華の縦横は一尺余なり。
梅華、あに、優曇華にあらざらんや？
夢中と覚中と、おなじく真実なるべし。
道元、在宋のあいだ、帰国よりのち、いまだ人にかたらず。

いま、わが洞山門下に、嗣書をかけるは、臨済、等にかけるには、ことなり。
仏祖の衣裏にかかれりけるを、青原高祖、したしく曹谿の机前にして、手指より浄血をいだして、かき、正伝せられけるなり。
この指血に、曹谿の指血を合して、書伝せられける、と相伝せり。
初祖、二祖のところにも、合血の儀、おこなわれけり、と相伝す。
これ、吾子、参、吾、などは、かかず、諸仏、および、七仏の、かきつたえられける嗣書の儀なり。
しかあれば、しるべし。
曹谿の血気は、かたじけなく、青原の浄血に和合し、青原の浄血、したしく、曹谿の親血に和合して、まのあたり、印、証をうることは、ひとり高祖、青原和尚のみなり。
余祖のおよぶところにあらず。
この事子をしれるともがらは、仏法は、ただ青原のみに正伝せる、と道取す。

正法眼蔵　嗣書
于、時、日本、仁治二年歳次辛丑、三月七日、観音導利興聖宝林寺、入宋、伝法、沙門、道元、記。
寛元癸卯、九月二十四日、掛錫、於、越前、吉田県、吉峰古寺、草庵　(華字)

先師、古仏、天童堂上、大和尚、しめして、いわく、
諸仏、かならず、嗣法あり。
いわゆる、
釈迦牟尼仏は、迦葉仏に嗣法す。
迦葉仏は、拘那含牟尼仏に嗣法す。
拘那含牟尼仏は、拘留孫仏に嗣法するなり。
かくのごとく、相嗣して、いまにいたる、と信受すべし。
これ、学仏の道なり。

ときに、道元、もうす、
迦葉仏、入涅槃ののち、釈迦牟尼仏、はじめて出世、成道せり。
いわんや、また、賢劫の諸仏、いかにしてか、荘厳劫の諸仏に嗣法せん？
この道理、いかん？

先師、いわく、
なんじがいうところは聴教の解なり、十聖三賢、等のみちなり。

仏祖、嫡嫡のみちにあらず。
わが、仏仏、相伝のみちは、しかあらず。
釈迦牟尼仏、まさしく、迦葉仏に嗣法せり、と、ならいきたるなり。
釈迦仏の、嗣法してのちに、迦葉仏は入涅槃す、と参学するなり。
釈迦仏、もし迦葉仏に嗣法せざらんは、天然外道と、おなじかるべし。
だれが、釈迦仏を信ずる、あらん？
かくのごとく、仏仏、相嗣して、いまにおよびきたれるによりて、箇箇仏ともに正嗣なり。
つらなれるにあらず。
あつまれるにあらず。
まさに、かくのごとく、仏仏、相嗣する、と学するなり。
諸阿笈摩教のいうところの劫量、寿量、等にかかわれざるべし( or かかわるべからず)。
もし、ひとえに、釈迦仏より、おこれり、といわば、わずかに二千余年なり、ふるきにあらず。
相嗣も、わずかに四十余代なり、あらたなる、といいぬべし。
この仏嗣は、しかのごとく学するにあらず。
釈迦仏は、迦葉仏に嗣法する、と学し、
迦葉仏は、釈迦仏に嗣法せり、と学するなり。
かくのごとく学するとき、まさに、諸仏、諸祖の嗣法にてあるなり。

このとき、道元、はじめて、仏祖の嗣法あることを稟受するのみにあらず、
従来の旧窠をも脱落するなり。

# 法華転法華

十方仏土中は、法華の唯有なり。
これに十方三世一切諸仏、阿耨多羅三藐三菩提衆は、転法華あり、法華転あり。
これ、すなわち、
本行菩薩道の不退不転なり。
諸仏智慧、甚深無量なり。
難解難入の安詳三昧なり。
あるいは、これ、文殊師利仏として、大海仏土なる唯仏与仏の如是相あり。
あるいは、これ、釈迦牟尼仏として、唯我知是相、十方仏亦然なる出現於世あり。
これ、すなわち、我及十方仏、乃能知是事と欲令衆生、開示悟入せしむる一時なり。
あるいは、これ、普賢なり。( or 普賢として、)
不可思議の功徳なる法華転を成就し、深大久遠なる阿耨多羅三藐三菩提を閻浮提に流布せしむるに、三草二木、大小諸樹を能生する地なり、能潤するあめなり。
法華転を所不能知に尽行成就なるのみなり。
普賢の流布、いまだ、おわらざるに、霊山の大会、きたる。
普賢の往来する、釈尊、これを白毫光相と証す。
釈迦の仏会、いまだ、なかばにあらざるに、文殊の惟忖、すみやかに弥勒に授記する法華転あり。
普賢、諸仏、文殊、大会ともに、初中後善の法華転を知見波羅蜜なるべし。
このゆえに、唯以一乗、為一大事として出現せるなり。
この出現、すなわち、一大事なるがゆえに、唯仏与仏、乃能究尽、諸法実相とあるなり。
その法、かならず、一仏乗にして、唯仏、さだめて、唯仏に究尽せしむるなり。
諸仏、七仏、おのおの仏仏に究尽せしめ、釈迦牟尼仏に成就せしむるなり。
西、天竺、東、震旦にいたる、十方仏土中なり。
三十三祖、大鑑禅師にいたるも、すなわち、究尽にてある唯仏一乗法なり。
唯以の、さだめて、一大事なる、一仏乗なり。
いま、出現於世なり、出現於此なり。

青原の仏風、いまに、つたわれ、南嶽の法門、よに開演する、みな、如来、如実知見なり。
まことに、唯仏与仏の究尽なり、嫡仏、仏嫡の開示悟入なりと法華転すべし。
これを妙法蓮華経ともなづく教菩薩法なり。
これを諸法となづけきたれるゆえに、法華を国土として、霊山もあり、虚空もあり、大海もあり、大地もあり。
これは、すなわち、
実相なり、
如是なり、
(
法住法位なり、
一大事因縁なり、
)
仏之知見なり、
世相常住なり、
如実なり、
如来、寿量なり。
甚深無量なり、
諸行無常なり。
法華三昧なり、
釈迦牟尼仏なり。
転法華なり、
法華転なり、
正法眼蔵、涅槃妙心なり、
現身度生なり、
授記作仏なる保任あり、
住持あり。

大唐国、広南東路、韶州、曹谿山、宝林寺、大鑑禅師の会に、法達という僧、まいれりき。みずから称す、
われ、法華経を読誦すること、すでに三千部なり。

祖、いわく、
たとえ万部におよぶとも、経をえざらんは、とがをしるにも、およばざらん。

法達、いわく、

学人は愚鈍なり。
従来、ただ文字にまかせて誦念す。
いかでか、宗趣をあきらめん？

祖、いわく、
なんじ、こころみに一遍を誦すべし。
われ、なんじがために解説せん。

法達、すなわち、誦経す。

方便品にいたりて、祖、いわく、
とどまるべし。
この経は、もとより、因縁出世を宗旨とせり。
たとえ、おおくの譬喩をとくも、これより、こゆることなし。
何、者、因縁？　というに、唯一大事なり。
唯一大事は、即、仏知見なり、開示悟入なり。
おのずから、これ、仏之知見なり。
已、具、知見、彼、既、是、仏なり。
なんじ、いま、まさに信ずべし。
仏知見、者、只、汝自心なり。

かさねて、しめす偈に、いわく、
心、迷、法華、転。
心、悟、転、法華。
誦、久、不明、己、与、義、作、讐家。
無念、念、即、正。
有念、念、成、邪。
有無、倶、不計、長、御、白牛車。

法達、すなわち、偈をききて、かさねて祖にもうす、
経に、いわく、諸大声聞、乃至、菩薩、みな、尽思、度量するに、仏智、はかること、あたわず。
いま、凡夫をして、ただし自心をさとらしめんを、すなわち、仏之知見となづけん。
上根にあらずよりは、疑、謗をまぬがれがたし。
また、経に、三車をとくに、大牛車と白牛車と、いかなる区別か、あらん？

ねがわくば、和尚、ふたたび宣説をたれんことを。

祖、いわく、
経意は、あきらかなり。
なんじ、おのずから迷、背す。
諸三乗人の、仏智をはかること、あたわざる患は、度量にあるなり。
たとえ、かれら、尽思、共推すとも、うたた懸遠ならん。
仏は本、為、凡夫、説のみなり、不、為、仏、説なり。
この理を信ずること不肯にして退席すとも、ことに、しらず、白牛車に坐しながら、さらに門外にして三車をもとむることを。
経文、あきらかに、なんじにむかいていう、無二亦無三、と。
なんじ、いかが、さとらざる？
三車は、これ、仮なり。昔時なるがゆえに。
一乗は、これ、実なり。今時なるがゆえに。
ただ、なんじをして仮をば去とし、実をば帰とせしむ。
帰実するには、実も名にあらず。
しるべし。
所有は、みな、珍宝なり。
ことごとく、なんじに属す。
由、汝、受用なり。
さらに、父想ならず、また、子想ならず、また、用想なしといえども、これは法華経となづくるなり。
劫より劫にいたり、昼より夜にいたるに、手、不、釈、巻なれども、誦念にあらざるとき、なきなり。

法達、すでに啓発をこうむりて、踊躍、歓喜して、偈を呈し、賛して、いわく、
経、誦、三千部、曹谿、一句、亡。
未、明、出世旨、寧、歇、累生狂。
羊、鹿、牛、権、設。
初中後善、揚。
誰、知、火宅内、元、是、法中王？

この偈を呈するに、祖、いわく、
なんじ、いまよりは、念経僧となづけつべし。

法達禅師の曹谿に参ぜし因縁、かくのごとし。
これより法華転と転法華との法華は開演するなり。
それより、さきは、きかず。
まことに、仏之知見をあきらめんことは、かならず、正法眼蔵ならん仏祖なるべし。
いたずらに沙石をかぞうる文字の学者は、しるべきにあらずということ、いま、この法達の従来にても、みるべし。
法華の正宗をあきらめんことは、祖師の開示を唯一大事因縁と究尽すべし。
余乗にとぶらわん、とすることなかれ。
いま、法華転の実相、実性、実体、実力、実因、実果の如是なる、祖師より以前には、震旦国に、いまだ、きかざるところ、いまだ、あらざるところなり。

いわゆる、法華転というは、心迷なり。
心迷は、すなわち、法華転なり。
しかあれば、すなわち、心迷は法華に転ぜらるるなり。
その宗趣は、心迷、たとえ万象なりとも、如是相は法華に転ぜらるるなり。
この転ぜらるる、よろこぶべきにあらず、まつべきにあらず、うるにあらず、きたるにあらず。
しかあれども、法華転は、すなわち、無二亦無三なり。
唯有一仏乗にてあれば、如是相の法華にてあれば、能転、所転といえども、一仏乗なり、一大事なり。
唯以の赤心片片なるのみなり。
しかあれば、心迷をうらむることなかれ。
汝等、所行、是、菩薩道なり。
本行菩薩道の奉覲於諸仏なり。
開示悟入みな各各の法華転なり。
火宅に心迷あり、
当門に心迷あり、
門外に心迷あり、
門前に心迷あり、
門内に心迷あり。
心迷に門内、門外、乃至、当門、火宅、等を現成せるがゆえに、白牛車のうえにも開示悟入あるべし。
この車上の荘校として入を存ぜんとき、
露地を所入とや期せん？

火宅を所出とや認ぜん？
当門は経歴のところなるとのみ究尽すべきか？
まさに、しるべし。
くるまのなかに火宅を開示悟入せしむる転もあり。
露地に火宅を開示悟入せしむる転もあり。
当門の全門に開示悟入を転ずるあり。
普門の一門に開示悟入を転ずるあり。
開示悟入の各各に普門を開示悟入する転あり。
門内に開示悟入を転ずるあり。
門外に開示悟入を転ずるあり。
火宅に露地を開示悟入するあり。
このゆえに、火宅も不会なり、露地も不識なり。
輪転三界を、だれが、くるまと、一乗せん？
開示悟入を、だれが、門なりと出入せん？
火宅より、くるまをもとむれば、いくばくの輪転ぞ？
露地より、火宅をのぞめば、そこばくの深遠のみなり。
露地に霊山を安穏せりとや究尽せん？
霊山に露地の平坦なるとや修行せん？
衆生、所、遊楽を我浄土、不毀と常在せるをも、審細に本行すべきなり。
一心、欲、見、仏は、みずからなりとや？　参究する、他なりとや？　参究する。
分身と成道せしときあり、全身と成道せしときあり。
倶出霊鷲山は、身命を自惜せざるによりてなり。
常在此説法なる開示悟入あり。
方便現涅槃なる開示悟入あり。
而不見の雖近なる、だれが一心の会、不会を信ぜざらん？
天人常充満のところは、すなわち、釈迦牟尼仏、毘盧遮那の国土、常寂光土なり。
おのずから四土に具する、われら、すなわち、如一の仏土に居するなり。
微塵をみるとき、法界をみざるにあらず。
法界を証するに、微塵を証せざるにあらず。
諸仏の、法界を証するに、われらを証にあらざらしむるにあらず。
その初中後善なり。
しかあれば、いまも証の如是相なり。
驚疑、怖畏も如是にあらざるなし。

ただ、これ、仏之知見をもって微塵をみると、微塵に坐するとの、ことなるのみなり。
法界に坐せるとき、広にあらず、微塵に坐するとき、せまきにあらざるゆえは、保任にあらざれば坐すべからず、保任するには広、狭に驚疑なきなり。
これ、法華の体、力を究尽せるによりてなり。
しかあれば、われらが、いまの相、性、この法界に本行すとやせん？　微塵に本行すとやせん？
驚疑なし、怖畏なし、ただ法華転の本行なる、深遠、長遠なるのみなり。
この微塵をみると、法界をみると、有作、有量にあらざるなり。
有量、有作も、法華量をならい、法華作をならうべし。
開示悟入をきかんには、欲令衆生、ときくべし。
いわゆる、
開仏知見の法華転なる、示仏知見にならうべし。
悟仏知見の法華転なる、入仏知見にならうべし。
示仏知見の法華転なる、悟仏知見にならうべし。
かくのごとく、開示悟入の法華転、おのおの、究尽のみち、あるべし。
おおよそ、この諸仏、如来の知見波羅蜜は、広大、深遠なる法華転なり。
授記は、すなわち、自己の開仏知見なり、他のさずくるにあらざる法華転なり。
これ、すなわち、心、迷、法華、転なり。

心、悟、転、法華というは、法華を転ずる、というなり。
いわゆる、法華の、われらを転ずるちから、究尽するときに、かえりて、みずからを転ずる如是力を現成するなり。
この現成は転、法華なり。
従来の転、いまも、さらに、やむことなしといえども、おのずから、かえりて、法華を転ずるなり。
驢事、いまだ、おわらざれども、馬事到来すべし。
出現於此の唯以一大事因縁あり。
地涌千界の衆、ひさしき法華の大聖尊なりといえども、みずからに転ぜられて地涌し、他に転ぜられて地涌す。
地涌のみを転、法華すべからず。
虚空涌をも転、法華すべし。
地、空のみにあらず、法華涌とも仏知すべし。
おおよそ、法華のときは、かならず、父少而子老なり。
子の、子にあらざるにはあらず。

父の、父にあらざるにはあらず。
まさに、子は老なり、父は少なり、と、ならうべし。
世の不信にならうて、おどろくことなかれ。
世の不信なるは法華の時なり。
これをもって一時仏住を転、法華すべし。
開示悟入に転ぜられて地涌し、仏之知見に転ぜられて地涌す。
この転、法華のとき、法華の心、悟あるなり、心、悟の法華あるなり。
あるいは、下方という、すなわち、空中なり。
この下、この空、すなわち、転、法華なり、すなわち、仏寿量なり。
仏寿と法華と法界と一心とは、下とも現成し、空とも現成する、と転、法華すべし。
かるがゆえに、下方空というは、すなわち、転、法華の現成なり。
おおよそ、このとき、法華を転じて三草ならしむることあり、法華を転じて二木ならしむることもあり。
有、覚とまつべきにあらず。
無、覚とあやしむべきにあらず。
自、転じて発菩提なるとき、すなわち、南方なり。
この成道、もとより南方に集会する霊山なり。
霊山、かならず、転、法華なり。
虚空に集会する十方仏土あり。
これ、転、法華の分身なり。
すでに十方仏土と転、法華す、一微塵のいるべきところなし。
色即是空の転、法華あり、若、退、若、出にあらず。
空即是色の転、法華あり、無有、生死なるべし。在世というべきにあらず、滅度のみにあらんや？
われに親友なるは、われも、かれに親友なり。
親友の礼勤、わするべからざるゆえに、髻珠をもあたう、衣珠をもあたうる時節、よくよく究尽すべし。
仏前に宝塔ある転、法華あり、高五百由旬なり。
塔中に仏坐する転、法華あり、量二百五十由旬なり。
従地涌出、住在空中の転、法華あり、心も罣礙なし、色も罣礙なし。
従空涌出、住在地中の転、法華あり、まなこにもさえらる、身にもさえらる。
塔中に霊山あり。
霊山に宝塔あり。
宝塔は虚空に宝塔し、虚空は宝塔を虚空す。

塔中の古仏は座を霊山のほとけにならべ、霊山のほとけは証を塔中のほとけに証す。
霊山のほとけ、塔中へ証、入するには、すなわち、霊山の依正ながら、転、法華、入するなり。
塔中のほとけ、霊山に涌出するには、古仏土ながら、久滅度ながら、涌出するなり。
涌出も転入も、凡夫、二乗にならわざれ。転、法華を学すべし。
久滅度は、仏上にそなわれる証、荘厳なり。
塔中と、仏前と、宝塔と、虚空と、霊山にあらず、法界にあらず、半段にあらず、全界にあらず。
是法位のみにかかわれず、非思量なるのみなり。
或現仏身、而為説法。或現此身、而為説法なる転、法華あり。
或現提婆達多なる転、法華あり。
或現退亦佳矣なる転、法華あり。
合掌瞻仰待、かならず、六十小劫と、はかることなかれ。
一心待の量をつづめて、しばらく、いく無量劫というとも、なお、これ、不能測仏智なり。
待なる一心、いく仏智の量とかせん？
この転、法華は、本行菩薩道のみなりと認ずることなかれ。
法華一座のところ、今日如来説大乗と転、法華なる功徳なり。
法華の、いまし法華なる、不覚不知なれども、不識、不会なり。
しかあれば、五百塵点は、しばらく、一毛許の転、法華なり。
赤心片片の仏寿の開演せらるるなり。

おおよそ、震旦に、この経つたわれ、転、法華してより、このかた、数百歳、あるいは、疏釈をつくるともがら、ままに、しげし。
また、この経によりて上人の法をうるもあれども、いま、われらが高祖、曹谿古仏のごとく、法華、転の宗旨をえたる、なし、転、法華の宗旨、つかう、あらず。
いま、これをきき、いま、これにあう、古仏の、古仏にあうにあえり、古仏土にあらざらんや？
よろこぶべし。
劫より劫にいたるも法華なり。
昼より夜にいたるも法華なり。
法華、これ、従劫至劫なるがゆえに。
法華、これ、乃昼乃夜なるがゆえに。

たとえ自身心を強弱すとも、さらに、これ、法華なり。
あらゆる如是は珍宝なり、光明なり、道場なり、広大深遠なり、深大久遠なり、心迷法華転なり、心悟転法華なる。
実に、これ、法華、転、法華なり。
心、迷、法華、転。
心、悟、転、法華。
究尽、能、如是、法華、転、法華。
かくのごとく供養、恭敬、尊重、讃歎する、法華、是、法華なるべし。

正法眼蔵　法華転法華

仁治二年辛丑、夏安居日、これをかきて慧達禅人にさずく。
これ、出家、修道を感喜するなり。
ただ鬢髪をそる、なお、好事なり。
かみをそり、また、かみをそる、これ、真出家児なり。
今日の出家は、従来の転、法華、如是力の如是果報なり。
いまの法華、かならず、法華の法華果あらん。
釈迦の法華にあらず、諸仏の法華にあらず、法華の法華なり。
ひごろの転、法華は、如是相も不覚不知にかかれり。
しかあれども、いまの法華、さらに、不識、不会にあらわる。
昔時も出息入息なり、今時も出息入息なり。
これを妙難思の法華と保任すべし。

開山、観音導利興聖宝林寺、入宋、伝法、沙門、道元、記。　(押華字)
嘉元三年乙巳、孟春、初、於、宝慶寺、書写、了。

# 心不可得

釈迦牟尼仏、言、
過去心、不可得。
現在心、不可得。
未来心、不可得。

これ、仏祖の参究なり。
不可得裏に過去、現在、未来の窟籠を剜来せり。
しかあれども、自家の窟籠をもちいきたれり。
いわゆる、自家というは、心不可得なり。
而今の思量分別は、心不可得なり。
使得十二時の渾身、これ、心不可得なり。
仏祖の入室より、このかた、心不可得を会取す。
いまだ仏祖の入室あらざれば、心不可得の問取なし、道著なし、見聞せざるなり。
経師、論師のやから、声聞、縁覚のたぐい、夢也未見在なり。

その験、ちかきにあり。
いわゆる、徳山宣鑑禅師、そのかみ、金剛般若経をあきらめたりと自称す。
あるいは、周金剛王と自称す。
ことに青龍疏をよくせりと称す。
さらに十二担の書籍を撰集せり、斉肩の講者なきがごとし。
しかあれども、文字の法師の末流なり。
あるとき、南方に嫡嫡、相承の無上の仏法あることをききて、いきどおりにたえず、経疏をたずさえて、山河( or 山川)をわたりゆくちなみに、龍潭の信禅師の会にあえり。
かの会に投ぜん、とおもむく中路に歇息せり。
ときに、老婆子きたりあいて、みちのかたわらに歇息せり。
ときに、鑑講師、とう、
なんじは、これ、なに人ぞ？
婆子、いわく、
われは売餅の老婆子なり。
徳山、いわく、
わがために、もちいをうるべし。

婆子、いわく、
和尚、もちいをかうて、なににかせん？
徳山、いわく、
もちいをかうて点心にすべし。
婆子、いわく、
和尚の、そこばく、たずさえてあるは、それ、なにものぞ？
徳山、いわく、
なんじ、きかずや？
われは、これ、周金剛王なり。
金剛経に長ぜり。
通達せずというところなし。
わが、いま、たずさえたるは、金剛経の解釈なり。

かく、いうをききて、婆子、いわく、
老婆に一問あり。
和尚、これをゆるすや？　いなや？

徳山、いわく、
われ、いま、ゆるす。
なんじ、こころにまかせて、とうべし。

婆子、いわく、
われ、かつて金剛経をきくに、いわく、
過去心、不可得。
現在心、不可得。
未来心、不可得。
いま、いずれの心をか、もちいをして、いかに点ぜんとかする？
和尚、もし道得ならんには、もちいをうるべし。
和尚、もし道不得ならんには、もちいをうるべからず。

徳山、ときに、茫然として祇対すべきところをおぼえざりき。
婆子、すなわち、払、袖して、いでぬ。
ついに、もちいを徳山にうらず。

うらむべし、数百軸の釈主、数十年の講者、わずかに弊婆の一問をうるに、
たちまちに負処に堕して、祇対におよばざること。

正師をみると、正師に師承せると、正法をきけると、いまだ正法をきかず正法をみざると、はるかにことなるによりて、かくのごとし。
徳山、このとき、はじめて、いわく、画にかける、もちい、うえをやむるに、あたわず、と。
いまは龍潭に嗣法す、と称す。

つらつら、この婆子と徳山と相見する因縁をおもえば、徳山の、むかし、あきらめざることは、いま、きこゆるところなり。
龍潭をみしよりのちも、なお婆子を怕却しつべし。
なお、これ、参学の晩進なり、超証の古仏にあらず。
婆子、そのとき、徳山を杜口せしむとも、実に、その人なること、いまだ、さだめがたし。
そのゆえは、心不可得のことばをききては、心うべからず、心あるべからず、とのみ、おもいて、かくのごとく、とう。
徳山、もし丈夫なりせば、婆子を勘破するちから、あらまし。
すでに勘破せましかば、婆子、まことに、その人なる道理も、あらわるべし。
徳山、いまだ徳山ならざれば、婆子、その人なることも、いまだ、あらわれず。
現在、大宋国にある雲衲霞袂、いたずらに徳山の対、不得をわらい、婆子が霊利なることをほむるは、いと、はかなかるべし、おろかなるなり。
そのゆえは、婆子を疑著するゆえなきにあらず。
いわゆる、そのちなみ、徳山、道不得ならんに、婆子、なんぞ、徳山にむかうて、いはざる？
和尚、いま、道不得なり。
さらに、老婆に、とうべし。
老婆、かえりて、和尚のために、いうべし。

かくのごとく、いいて、徳山の問をえて、徳山にむかうて、いうこと、道是ならば、婆子、まことに、その人なり、ということ、あらわるべし。
問著、たとえ、ありとも、いまだ道処あらず。
むかしより、いまだ、一語をも道著せざるをその人ということ、いまだ、あらず。
いたずらなる自称の始終、その益なき、徳山の、むかしにて、みるべし。
いまだ道処なきものをゆるすべからざること、婆子にて、しるべし。

こころみに徳山にかわりて、いうべし。

婆子、まさしく恁麼、問著せんに、徳山、すなわち、婆子にむかいて、いうべし、
恁麼、則、爾、莫、与、吾、売、餅。
もし徳山、かくのごとく、いわましかば、霊利の参学ならん。

婆子、もし、徳山、とわん、
現在心、不可得。
過去心、不可得。
未来心、不可得。
いま、もちいをして、いずれの心をか点ぜんとかする？

かくのごとく、とわんに、婆子、すなわち、徳山にむかうて、いうべし、
和尚は、ただ、もちいの、心を点ずべからず、とのみ、しりて、心の、もちいを点ずることをしらず、心の、心を点ずることをも、しらず。
恁麼、いわんに、徳山、さだめて、擬議すべし。
当恁麼時、もちい三枚を拈じて徳山に度与すべし。
徳山、とらんと擬せんとき、婆子、いうべし、
過去心、不可得。
現在心、不可得。
未来心、不可得。

もし、また、徳山、展手、擬取せずば、一餅を拈じて徳山をうちて、いうべし、
無魂、屍子、爾、莫、茫然。
かくのごとく、いわんに、徳山、いふことあらば、よし、いうことなからんには、婆子、さらに徳山のために、いうべし。
ただ払、袖して、さる( or さりたる)。
そでのなかに蜂ありとも、おぼえず。
徳山も、われは、いうこと、あたわず。老婆、わがために、いうべし、とも、いわず。
しかあれば、いうべきをいわざるのみにあらず、とうべきをも、とわず。
あわれむべし。
婆子、徳山、過去心、未来心、問著、道著、未来心不可得なるのみなり。
おおよそ、徳山、それよりのちも、させる発明ありとも、みえず。
ただ、あらあらしき造次のみなり。

ひさしく龍潭にとぶらいせば、頭角触折することも、あらまし、頷珠を正伝する時節にも、あわまし。
わずかに、吹滅、紙燭をみる。
伝灯に不足なり。
しかあれば、参学の雲水、かならず、勤学なるべし。
容易にせしは不是なり。
勤学なりしは仏祖なり。
おおよそ、心不可得とは、画餅一枚を買、弄して、一口に咬著、嚼著( or 嚼尽)するをいう。

正法眼蔵　心不可得
爾時、仁治二年辛丑、夏安居、于、雍州、宇治郡、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 心不可得

心不可得は、諸仏なり、みずから阿耨多羅三藐三菩提と保任しきたれり。
金剛経、曰、
過去心、不可得。
現在心、不可得。
未来心、不可得。

これ、すなわち、諸仏なる心不可得の保任の現成せるなり。
三界心、不可得なり、諸法心、不可得なり、と保任しきたれるなり。
これをあきらむる保任は、諸仏にならわざれば、証取せず、諸祖にならわざれば、正伝せざるなり。
諸仏にならう、というは、丈六身にならい、一茎草にならうなり。
諸祖にならう、というは、皮肉骨髄にならい、破顔微笑にならうなり。
この宗旨は、正法眼蔵、あきらかに正伝しきたりて、仏仏、祖祖の心印、まさに、直指なること嫡嫡、単伝せるに、とぶらい、ならうに、かならず、その骨髄、面目つたわれ、身体髪膚うくるなり。
仏道をならわず、祖室にいらざらんは、見聞せず、会取せず、問取の法におよばず、道取の分、ゆめにもいまだみざるところなり。

徳山の、そのかみ、不丈夫なりしとき、金剛経に長ぜりき。
ときの人、これを周金剛王と称しき。
八百余家のなかに王なり。
ことに青龍の疏をよくせるのみにあらず、さらに十二担の書籍を釈集せり。
斉肩の講者、あることなし。
ちなみに、南方に無上道の嫡嫡、相承せる、ありとききて、書をたずさえて山川をわたりゆく。
龍潭にいたらんとする、みちのひだりに歇息するに、婆子きたりあう。
徳山、とう、
なんじは、これ、なにびとぞ？
婆子、いわく、
われは、もちい、うる、老婆なり。
徳山、いわく、
わがために、もちいをうるべし。
婆子、いわく、

和尚、かうて、なにかせん？
徳山、いわく、
もちいをかうて点心にすべし。
婆子、いわく、
和尚の、そこばく、たずさえてあるは、これ、なにものぞ？
徳山、いわく、
汝きかずや？
われ、これ、周金剛王なり。
金剛経に長ぜり。
通達せずというところなし。
この、たずさえてあるは金剛経の解釈なり。

これをききて、婆子、いわく、
老婆に一問あり。
和尚、これをゆるすや？　いなや？

徳山、いわく、
ゆるす。
なんじが、こころにまかせて、とうべし。

いわく、
われ、かつて金剛経をきくに、いわく、
過去心、不可得。
現在心、不可得。
未来心、不可得。
いま、もちいをして、いずれの心をか点ぜんとする？
和尚、もし道得ならんには、もちいをうるべし。
和尚、もし道不得ならんには、もちいをうるべからず。

徳山、ときに、茫然として、祗対すべきことをえざりき。
婆子、すなわち、払、袖して出ぬ。
ついに、もちいを徳山にうらず。

うらむべし、数百軸の釈主、数十年の講者、わずかに弊婆の一問をうるに、
すみやかに負処におちぬること。

師承あると、師承なきと、正師の室にとぶらうと、正師の室にいらざると、はるかにことなるによりて、かくのごとし。
不可得の言をききては、彼此ともに、おなじく、うることあるべからず、とのみ解せり。
さらに活路なし。
また、うべからず、というは、もとより、そなわれるゆえに、いうなん、と、おもうひともあり。
これら、いかにも、あたらぬことなり。

徳山、このとき、はじめて、画にかける、もちいは、うえをやむるに、あたわず、としり、また、仏道修行には、かならず、そのひとにあうべき、と、おもいしりき。
また、いたずらに経書にのみ、かかわれるが、まことのちからをうべからざることをも、おもいしりき。
ついに、龍潭に参じて、師資のみち見成せりしより、まさに、そのひとなりき。
いまは雲門、法眼の高祖なるのみにあらず、人中、天上の導師なり。

この因縁をおもうに、徳山、むかし、あきらめざることは、いま、みゆるところなり。
婆子、いま、徳山を杜口せしむればとても、実に、そのひとにてあらんことも、さだめがたし。
しばらく、心不可得のことばをききて、心あるべきにあらず、とばかりおもいて、かくのごとく、とうにてあるらん、とおぼゆ。
徳山の、丈夫にてありしかば、かんがうるちからもありなまし。
かんがうることあらば、婆子が、そのひとにてありけることも、きこゆべかりしかども、徳山の、徳山にてあらざりしときにてあれば、婆子が、そのひとなることも、いまだ、しられず、みえざるなり。
また、いま、婆子を疑著すること、ゆえなきにあらず。
徳山、道不得ならんに、などか、徳山にむかうて、いわざる？
和尚、いま道不得なり。
さらに老婆に、とうべし。
老婆、かえりて、和尚のために、いうべし。
と。
このとき、徳山の問をえて、徳山にむかいて、いうことありせば、老婆が、まことにてある、ちからも、あらわれぬべし。

かくのごとく、古人の骨髄も面目も、古仏の光明も現瑞も、同参の功夫ありて、徳山をも婆子をも、不可得をも可得をも、餅をも心をも、把定に、わずらわざるのみにあらず、放行にも、わずらわざるなり。
いわゆる、仏心は、これ、三世なり。
心と三世と、あいへだたること、毫釐にあらずといえども、あいはなれ、あいさることを論ずるには、すなわち、十万八千よりも、あまれる深遠なり。
いかにあらんか、これ、過去心？　といわば、かれにむかいて、いうべし、これ、不可得、と。
いかにあらんか、これ、現在心？　といわば、かれにむかいて、いうべし、これ、不可得、と。
いかにあらんか、これ、未来心？　といわば、かれにむかいて、いうべし、これ、不可得、と。
いわくのこころは、心を、しばらく、不可得となづくる心あり、とは、いわず、しばらく、不可得なり、という。
心うべからず、とは、いわず、ひとえに、不可得、という。
心うべし、とは、いわず、ひとえに、不可得、というなり。
また、いかなるか、過去心、不可得？　といわば、生死去来、というべし。
いかなるか、現在心、不可得？　といわば、生死去来、というべし。
いかなるか、未来心、不可得？　といわば、生死去来、というべし。
おおよそ、牆壁、瓦礫にてある仏心あり。
三世諸仏ともに、これを不可得にてありと証す。
仏心にてある牆壁、瓦礫のみあり。
諸仏、三世に、これを不可得なりと証す。
いわんや、山河大地にてある、不可得のみずからにてあるなり。
草木、風、水なる不可得の、すなわち、心なるあり。
また、応、無所住、而、生、其心の不可得なるあり。
また、十方諸仏の、一代の代にて八万法門をとく。不可得の心、それ、かくのごとし。
また、大証国師のとき、大耳三蔵、はるかに西天より到京せり。
他心通をえたりと称す。
唐の粛宗皇帝、ちなみに、国師に命じて試験せしむるに、三蔵、わずかに国師をみて、すみやかに礼拝して右にたつ。
国師、ついに、とう、
なんじ、他心通をえたりや？　いなや？
三蔵、もうす、

不敢。
と。
国師、いわく、
なんじ、いうべし。
老僧、いま、いずれのところにか、ある？
三蔵、もうす、
和尚は、これ、一国の師なり。
なんぞ、西川にゆきて競渡のふねをみる？
国師、ややひさしくして再問す、
なんじ、いうべし。
老僧、いま、いずれのところにか、ある？
三蔵、もうす、
和尚は、これ、一国の師なり。
なんぞ、天津橋上にゆきて、猢猻を弄するをみる？
国師、また、とう、
なんじ、いうべし。
老僧、いま、いずれのところにか、ある？
三蔵、ややひさしくあれども、しることなし、みるところなし。
国師、ちなみに、叱して、いわく、
這野狐精、なんじが他心通、いずれのところにかある？
三蔵、また、祗対なし。

かくのごとくのこと、しらざれば、あしし、きかざれば、あやしみぬべし。
仏祖と三蔵と、ひとしかるべからず。天地懸隔なり。
仏祖は仏法をあきらめてあり、三蔵は、いまだ、あきらめず。
まことに、それ、三蔵は、在俗も三蔵なることあり。たとえば、文華にところをえたらんがごとし。
しかあれば、ひろく竺、漢の言音をあきらめてあるのみにあらず、他心通をも修得せりといえども、仏道の身心におきては、ゆめにもいまだみざるゆえに、仏祖の位に証せる国師にまみゆるには、すなわち、勘破せらるるなり。
いわゆる、仏道に、心をならうには、万法、即、心なり、三界、唯心なり、唯心、これ、唯心なるべし、是仏、即、心なるべし。
たとえ自なりとも、たとえ他なりとも、仏道の心をあやまらざるべし。
いたずらに西川に流落すべからず、天津橋に、おもい、わたるべからず。
仏道の身心を保任すべくば、仏道の智、通を学習すべし。
いわゆる、仏道には、尽地みな、心なり。

起、滅にあらたまらず、尽法みな、心なり。
尽心を智、通とも学すべし。
三蔵、すでに、これをみず、野狐精のみなり。
しかあれば、以前、両度も、いまだ国師の心をみず、国師の心に通ずることなし。
いたずらなる西川と天津と競渡と猢猻とのみに、たわむるる、野狐子なり。
いかにしてか、国師をみん？
また、国師の在所をみるべからざる道理、あきらけし。
老僧、いま、いずれのところにか、ある？　と、みたび、とうに、このことばをきかず、もし、きくことあらば、たずぬべし。
きかざれば、蹉過するなり。
三蔵、もし仏法をならうことありせば、国師のことばをきかまし、国師の身心をみることあらまし。
ひごろ、仏法をならわざるがゆえに、人中、天上の導師に、うまれ、あうといえども、いたずらに、すぎぬるなり。
あわれむべし。
かなしむべし。
おおよそ、三蔵の学者、いかでか、仏祖の行履におよばん？　国師の辺際をしらん？
いわんや、西天の論師、および、竺乾の三蔵、たえて、国師の行履をしるべからず。
三蔵のしらんことは、天帝もしるべし、論師もしるべし。
論師、天帝、しらんこと、補処の智力、およばざらんや？　十聖三賢もおよばざらんや？
国師の身心は、天帝もしるべからず、補処もいまだあきらめざるなり。
身心を仏家に論ずること、かくのごとし。
しるべし。
信ずべし。
わが大師、釈尊の法、いまだ、二乗、外道、等の野狐精には、おなじからざるなり。

しかあるに、この一段の因縁、ふるくより、諸代の尊宿おのおの参究するに、その話、のこれり。

僧、ありて、趙州に、とう、
三蔵、なにとしてか、第三度に国師の所在をみざる？

趙州、いわく、
国師、在、三蔵、鼻孔上、所以、不見。

また、僧、ありて、玄沙に、とう、
既、在、鼻孔上、為、甚、不見？
玄沙、いわく、
只、為、太近。

海会、端、いわく、
国師、若、在、三蔵、鼻孔上、有、什麼、難、見？
殊、不知、国師、在、三蔵、眼睛裏。

また、玄沙、三蔵を徴して、いわく、
汝、道、前、両度、還、見、麼？

雪竇、顕、いわく、
敗也、敗也。

また、僧、ありて、仰山に、とう、
第三度、なにとしてか、三蔵、ややひさしくあれども、国師の所在をみざる？
仰山、いわく、
前、両度、是、渉境心。
後、入、自受用三昧。
所以、不見。

この五位の尊宿ともに諦当なれども、国師の行履は蹉過せり。
いわゆる、第三度、しらず、とのみ論じて、前、両度はしれり、とゆるすににたり。
これ、すなわち、古先の蹉過するところなり。
晩進のしるべきところなり。
興聖、いま、五位の尊宿を疑著すること、両般あり。
一には、いはく、
国師の、三蔵を試験する意趣をしらず。
二には、いわく、
国師の身心をしらず。

しばらく、国師の、三蔵を試験する意趣をしらず、というは、
第一番に国師、いわく、
汝、道。
老僧、即、今、在、什麼所？
と。
いうこころは、
三蔵、もし、仏法をしれりや？　いまだしらずや？　と試問するとき、三蔵、もし仏法をきくことあらば、老僧、即、今、在、什麼所？　ときくことばを、仏法にならうべきなり。
仏法にならう、というは、
国師の老僧、いま、いずれのところにか、ある？　というは、
這辺にあるか？
那辺にあるか？
無上菩提にあるか？
般若波羅蜜にあるか？
空にかかれるか？
地にたてるか？
草庵にあるか？
宝所にあるか？
と、とうなり。
三蔵、このこころをしらず、いたずらに凡夫、二乗、等の見解をたてまつる。
国師、かさねて、とう、
汝、道。
老僧、即、今、在、什麼所？
ここに、三蔵、さらに、いたずらのことばをたてまつる。
国師、かさねて、とう、
汝、道。
老僧、即、今、在、什麼所？
ときに、三蔵、ややひさしくあれども、ものいわず、ここち( or こころ)、茫然なり。
ちなみに、国師、すなわち、三蔵を叱して、いわく、
這野狐精、他心通、在、甚麼所？
かく、いふに、三蔵、なお、いうことなし。

つらつら、この因縁をおもうに、古先ともに、おもわくは、いま、国師の三蔵を叱すること、前、両度は国師の所在をしるといえども、第三度、しらざるがゆえに、叱するなり、と。
しかには、あらず。
おおよそ、三蔵の、野狐精のみにして、仏法は夢也未見在なることを叱するなり。
前、両度はしれり、第三度はしらざる、と、いわぬなり。
叱するは、総じて、三蔵を叱するなり。
国師のこころは、まず、仏法を他心通ということ、ありや？　いなや？　とも、おもう。
また、たとえ他心通というとも、
他も仏道にならう他を挙すべし、
心も仏道にならう心を挙すべし、
通も仏道にならう通を挙すべきに、いま、三蔵、いうところは、かつて仏道にならうところにあらず、いかでか、仏法と、いわん？　と国師はおもうなり。
試験す、というは、たとえ第三度、いうところありとも、前、両度のごとくならば、仏法の道理にあらず、国師の本意にあらざれば、叱すべきなり。
三度、問著するは、三蔵、もし、国師のことばをきくことや、ある？
と、かさねて問著するなり。

二には、国師の身心をしらず、というは、いわゆる、
国師の身心は、三蔵の、しるべきにあらず、通ずべきにあらず、
十聖三賢、およばず、
補処、等覚の、あきらむるにあらず、
凡夫、三蔵、いかでか、しらん？
と。
この道理、あきらかに決定すべし。
国師の身心は、三蔵もしるべし、およぶべし、と擬するは、おのれ、すでに国師の身心をしらざるによりてなり。
他心通をえんともがら、国師をしるべし、と、いわば、二乗、さらに、国師をしるべきか？
しかある、べからず。
二乗人は、たえて国師の辺際におよぶべからざるなり。
いま、大乗経をよむ二乗人、おおし。
かれらも国師の身心をしるべからず。

また、仏法の身心、よめにもみるべからざるなり。
たとえ大乗経を読誦するに、にたれども、まったく、かれは小乗人なり、と、あきらかにしるべし。
おおよそ、国師の身心は、神通、修、証をうるともがらの、しるべきにあらざるなり。
国師の身心は、国師、なお、はかりがたからん。
ゆえは、いかん？
行履、ひさしく作仏を図せず。
ゆえに、仏眼も覷、不見なり。
去就、はるかに窠窟を脱落せり。
籠羅の、拘牽すべきにあらざるなり。

いま、五位の尊宿ともに、勘破すべし。

趙州、いわく、
国師は三蔵の鼻孔上にあるゆえに、みず。

この話、なにとか、いう？
本をあきらめずして末をいうには、かくのごとくの、あやまり、あり。
国師、いかにしてか、三蔵の鼻孔上にあらん？
三蔵、いまだ、鼻孔なし。
また、国師と三蔵と、あいみるたより、あるに、あいにたれども、あいちかづくみちなし。
明眼は、まさに、弁肯すべし。

玄沙、いわく、
只、為、太近。

まことに太近は、さもあらばあれ、あたりには、あたらず。
いかなるをか、太近という？
なにをか、太近と挙する？
玄沙、いまだ、太近をしらず、太近を参ぜず、仏法におきては遠之遠、矣。

仰山、いわく、
前、両度、渉境心。
後、入、自受用三昧。
所以、不見。

これ、小釈迦のほまれ、西天に、たかくひびくといえども、この不是、なきにあらず。
相見のところは、かならず渉境なり、と、いわば、仏祖、相見のところ、なきがごとし。
授記、作仏の功徳、ならわざるに、にたり。
前、両度は実に三蔵、よく、国師の所在をしれり、という。
国師の一毛の功徳をしらず、というべし。

玄沙の、徴に、いわく、
前、両度、還、見、麼？

この還、見、麼？の一句、いうべきをいうに、にたりといえども、見、如、不見といわんとす。
ゆえに、是に、あらず。

これをききて、雪竇、明覚禅師、いわく、
敗也、敗也。

これ、玄沙の道を道とするとき、しか、いうべし。
道にあらず、とせんとき、しか、いうべからず。

海会、端、いわく、
国師、若、在、三蔵、鼻孔上、有、什麼、難、見？
殊、不知、国師、在、三蔵、眼睛裏。

これ、また、第三度を論ずるなり。
前、両度もみざることを呵すべきを呵せず。
いかんが、国師の鼻孔上にあり？　眼睛裏にあり？　ともしらん。

五位、尊宿、いずれも国師の功徳にくらし。
仏法の弁道ちから、なきに、にたり。
しるべし。
国師は、すなわち、一代の仏なり。
仏、正法眼蔵、あきらかに正伝せり。
小乗の三蔵、論師、等、さらに、国師の辺際をしらざる。
その証、これなり。

他心通ということ、小乗の、いうがごときは、他念通といいぬべし。
小乗、三蔵の他心通のちから、国師の一毛端をも、半毛端をも、しるべし、と、おもえるは、あやまりなり。
小乗の三蔵、すべて国師の功徳の所在みるべからず、と一向、ならうべきなり。
たとえ、もし、国師、さきの両度は所在をしらるといえども第三度にしらざらんは、三分に両分の能あらん。
叱すべきにあらず。
たとえ叱すとも、全分虧闕にあらず。
これを叱せん、だれが国師を信ぜん？
意趣は、三蔵、すべて、いまだ仏法の身心あらざることを叱せしなり。
五位の尊宿、すべて国師の行李をしらざるによりて、かくのごとくの不是あり。
このゆえに、いま、仏道の心不可得をきかしむるなり。
この一法を通ずること、えざらんともがら、自余の法を通ぜりといわんこと信じがたしといえども、古先も、かくのごとく将錯就錯あり、としるべし。

あるとき、僧、ありて、国師に、とう、
いかにあらんか、これ、諸仏、常住、心？
国師、いわく、
幸、遇、老僧、参内。

これも不可得の心を参究するなり。

天帝釈、あるとき、国師に、とう、
いかにしてか、有為を解脱せん？
国師、いわく、
天子、
修道して有為を解脱すべし。
天帝釈、かさねて、とう、
いかならんか、これ、道？
国師、いわく、
造次心、是、道。
天帝釈、いわく、
いかならんか、これ、造次心？
国師、ゆびをもって、さして、いわく、

這箇、是、般若台。
那箇、是、真珠網。
天帝釈、礼拝す。

おおよそ、仏道に、身心を談ずること、仏仏、祖祖の会に、おおし。
ともに、これを参学せんことは、凡夫、賢、聖の念慮知覚にあらず。
心不可得を参究すべし。

正法眼蔵　心不可得
仁治二年辛丑、夏安居日、書、于、興聖宝林寺。

# 古鏡

諸仏、諸祖の、受持し単伝するは、古鏡なり。
同見、同面なり。
同像、同鋳なり。
同参、同証す。
胡来、胡現、十万八千、
漢来、漢現、一念、万年なり。
古来、古現し、
今来、今現し、
仏来、仏現し、
祖来、祖現するなり。

第十八祖、伽耶舎多、尊者は、西域の摩提国の人なり。
姓は鬱頭藍。
父、名、天蓋。
母、名、方聖。
母氏かつて夢見に、いわく、ひとりの大神、おおきなる、かがみを持して、
むかえり、と。
ちなみに、懐胎す。
七日ありて師をうめり。
師、はじめて生ぜるに、肌体、みがける瑠璃のごとし。
いまだかつて洗沐せざるに自然に香、潔なり。
いとけなくより閑静をこのむ。
言語、よのつねの童子に、ことなり。
うまれしより、一の浄明の円鑑、おのずから同生せり。
円鑑とは円鏡なり。
奇代の事なり。
同生せり、というは、円鑑も母氏の胎より、うめるにはあらず。
師は胎生す。
師の、出胎する、同時に、円鑑きたりて、天真として師のほとりに現前して、
ひごろの調度のごとく、ありしなり。
この円鑑、その儀、よのつねにあらず。
童子、むかいきたるには、円鑑を両手にささげきたるがごとし。
しかあれども、童面、かくれず。

童子、さりゆくには、円鑑をおおうて、さりゆくがごとし。
しかあれども、童身、かくれず。
童子、睡眠するときは、円鑑、そのうえにおおう。
たとえば、華蓋のごとし。
童子、端坐のときは、円鑑、その面前にあり。
おおよそ、動容進止にあいしたがうなり。
しかのみにあらず、古来今の仏事ことごとく、この円鑑にむかいて、みることをう。
また、天上、人間の衆事、諸法みな円鑑にうかびて、くもれるところなし。
たとえば、経書にむかいて照古照今をうるよりも、この円鑑より、みるは、あきらかなり。
しかあるに、童子、すでに出家、受戒するとき、円鑑、これより現前せず。
このゆえに、近里、遠方、おなじく、奇妙なり、と讃歎す。
まことに、この娑婆世界に比類すくなしというとも、さらに、他那裏に親族の、かくのごとくなる種胤あらんことを莫、怪なるべし、遠慮すべし。
まさに、しるべし。
若、樹、若、石に化せる経巻あり。
若、田、若、里に流布する智識あり。
かれも円鑑なるべし。
いまの黄紙朱軸は円鑑なり。
だれが、師をひとえに希夷なり、と、おもわん？

あるとき、出遊するに、僧伽難提、尊者にあうて、直に、すすみて、難提、尊者の前にいたる。
尊者、とう、
汝が手中なるは、まさに、何の所表か、ある？

有、何、所表？　を問著にあらずとききて参学すべし。

師、いわく、
諸仏、大円鑑、内外、無瑕翳、両人、同、得見、心、眼、皆、相似。

しかあれば、諸仏、大円鑑、なにとしてか、師と同生せる？
師の生来( or 来生)は大円鑑の明なり。
諸仏は、この円鑑に同参、同見なり。
諸仏は大円鑑の鋳像なり。

大円鑑は、智にあらず、理にあらず、性にあらず、相にあらず。
十聖三賢、等の法のなかにも大円鏡(智)の名あれども、いまの諸仏の大円鑑にあらず。
諸仏、かならずしも智にあらざるがゆえに、諸仏に智慧あり。
智慧を諸仏とせるにあらず。
参学、しるべし。
智を説著するは、いまだ仏道の究竟説にあらざるなり。
すでに諸仏、大円鑑、たとえ、われと同生せり、と見聞すというとも、さらに道理あり。
いわゆる、この大円鑑、この生に接すべからず、他生に接すべからず。
玉鏡にあらず、銅鏡にあらず、肉鏡にあらず、髄鏡にあらず。
円鑑の、言、偈なるか？
童子の、説、偈なるか？
童子、この四句の偈をとくことも、かつて人に学習せるにあらず。
かつて或、従、経巻にあらず。
かつて或、従、知識にあらず。
円鑑をささげて、かくのごとく、とくなり。
師の、幼稚のときより、かがみにむかうの、常儀とせるのみなり。
生知の弁、慧あるがごとし。
大円鑑の、童子と同生せるか？
童子の、大円鑑と同生せるか？
まさに、前後生もあるべし。
大円鑑は、すなわち、諸仏の功徳なり。
このかがみ、内外に、くもりなし、というは、外にまつ内にあらず、内にくもれる外にあらず、面背あることなし、両箇、おなじく、得見あり。
心と眼と、あいにたり。
相似というは、人の、人にあうなり。
たとえ内の形像も、心、眼あり、同、得見あり。
たとえ外の形像も、心、眼あり、同、得見あり。
いま、現前せる依報、正報ともに、内に相似なり、外に相似なり。
われにあらず、だれにあらず、これは両人の相見なり、両人、相似なり。
かれも、われ、という。
われも、かれとなる。
心と眼と、皆、相似、というは、心は心に相似なり、眼は眼に相似なり。
相似は心、眼なり。

たとえば、心、眼、各、相似、と、いわんがごとし。
いかならんか、これ、心の、心に相似せる？
いわゆる、三祖、六祖なり。
いかならんか、これ、眼の、眼に相似なる？
いわゆる、道眼、被、眼、礙なり。
いま、師の、道得する宗旨、かくのごとし。
これ、はじめて僧伽難提、尊者に奉覲する本由なり。
この宗旨を挙拈して、大円鑑の仏面、祖面を参学すべし。
古鏡の眷属なり。

第三十三祖、大鑑禅師、かつて黄梅山の法席に功夫せしとき、壁書して祖師に呈する偈に、いわく、
菩提、本、無、樹。
明鏡、亦、非、台。
本来、無一物。
何所、有、塵、埃？

しかあれば、この道取を学取すべし。
大鑑高祖、よの人、これを古仏という。
圜悟禅師、いわく、稽首、曹谿真古仏。
しかあれば、しるべし。
大鑑高祖の、明鏡をしめす、本来、無一物。何所、有、塵、埃？　なり。
明鏡、非、台、これ、命脈あり、功夫すべし。
明明は、みな、明鏡なり。
かるがゆえに、明頭、来、明頭、打という。
いずれのところに、あらざれば、いずれのところ、なし。
いわんや、かがみにあらざる一塵の、尽十方界に、のこれらんや？
かがみにあらざる一塵の、かがみに、のこらんや？
しるべし。
尽界は塵刹にあらざるなり。
ゆえに、古鏡面なり。

南嶽、大慧禅師の会に、ある僧、とう、
如、鏡、鋳像、光、帰、何所？
師、云、
大徳、未出家時、相貌、向、甚麼所、去？

僧、曰、
成後、為、甚麼、不、鑑、照？
師、云、
雖、不、鑑、照、瞞、他一点、也、不得。

いま、この万像は、なにもの、とあきらめざるに、たずぬれば、鏡を鋳成せる証明、すなわち、師の道にあり。
鏡は、金にあらず、玉にあらず、明にあらず、像にあらず、といえども、たちまち(に)、鋳像なる。
まことに、鏡の究弁なり。
光、帰、何所？　は、如、鏡、鋳像の如、鏡、鋳像なる道取なり。
たとえば、像、帰、像所なり、鋳、能、鋳、鏡なり。
大徳、未出家時、相貌、向、甚麼所、去？　というは、鏡をささげて照面するなり。
このとき、いずれの面面か、すなわち、自己面ならん？
師、云、雖、不、鑑、照、瞞、他一点、也、不得というは、鑑、照、不得なり、瞞、他、不得なり。
海、枯、不到、露、底を参学すべし。
莫、打破。
莫、動著なり。
しかありといえども、さらに、参学すべし。
拈、像、鋳、鏡の道理あり。
当恁麼時は、百、千、万の鑑、照にて瞞瞞点点なり。

雪峰、真覚大師、あるとき、衆にしめすに、いわく、
要、会、此事、我這裏、如、一面古鏡、相似。
胡、来、胡、現。
漢、来、漢、現。

時、玄沙、出、問、
忽、遇、明鏡、来時、如何？
師、云、
胡、漢、倶、隠。
玄沙、曰、
某甲、即、不、然。
峰、云、

作麼生？
玄沙、曰、
請、和尚、問。
峰、云、
忽、遇、明鏡、来時、如何？
玄沙、曰、
百雜砕。

しばらく、雪峰、道の此事というは是、什麼事？　と参学すべし。
しばらく、雪峰の古鏡をならい、みるべし。
如、一面古鏡の道は、一面とは、辺際、ながく断じて、内外、さらにあらざるなり。
一珠、走、盤の自己なり。
いま、胡、来、胡、現は一隻の赤髭なり。
漢、来、漢、現は、この漢は、混沌より、このかた、盤古よりのち、三才、五才の、現成せる、といいきたれるに、いま、雪峰の道には、古鏡の功徳の漢、現せり。
いまの漢は漢にあらざるがゆえに、すなわち、漢、現なり。
いま、雪峰、道の胡、漢、倶、隠、さらに、いうべし、鏡、也、自、隠なるべし。
玄沙、道の百雜砕は、道、也、須、是、恁麼道なりとも、比来、責、爾、還、吾、砕片、来？　如何、還、我、明鏡、来？　なり。

黄帝のとき、十二面の鏡あり。
家訓に、いわく、天、授なり。
また、広成子、崆峒山にして、与、授せりける、ともいう。
その十二面の、もちいる儀は、十二時に時時に一面をもちいる。
また、十二月に毎月、毎面にもちいる。
十二年に年年、面面にもちいる。
いわく、鏡は広成子の経典なり。
黄帝に伝授するに、十二時、等は鏡なり。
これより照古照今するなり。
十二時、もし鏡にあらずよりは、いかでか、照古あらん？
十二時、もし鏡にあらずば、いかでか、照今あらん？
いわゆる、十二時は十二面なり。
十二面は十二鏡なり。

古今は十二時の所使なり。
この道理を指示するなり。
これ、俗の道取なりといえども、漢、現の十二時中なり。

軒轅、黄帝、膝行、進、崆峒、問、道、乎、広成子。
于、時、広成子、曰、
鏡、是、陰陽、本。
治、身、長久、自、有、三鏡。曰、天、曰、地、曰、人。
此鏡、無、視、無、聴。
抱、神、以、静、形、将、自、正。
必、静、必、清、無労、汝形、無揺汝精、乃、可、以、長生。

むかしは、この三鏡をもちて、天下を治し、大道を治す。
この大道にあきらかなるを天地の主とするなり。
俗の、いわく、太宗は人をかがみとせり。安危、理乱。これによりて照、悉する、という。
三鏡のひとつをもちいるなり。
人を鏡とする、とききては、博覧ならん人に古今を問取せば、聖、賢の用、捨をしりぬべし。たとえば、魏徴をえしがごとく、房玄齢をえしがごとし。とおもう。
これをかくのごとく会取するは、太宗の、人を鏡とする、と道取する道理には、あらざるなり。
人を鏡とす、というは、
鏡を鏡とするなり。
自己を鏡とするなり。
五行を鏡とするなり。
五常を鏡とするなり。
人物の去来をみるに、来、無、跡、去、無、方を人鏡の道理という。
賢、不肖の万般なる、天象に相似なり。
まことに、経緯なるべし。
人面、鏡面、日面、月面なり。
五嶽の精、および、四瀆の精、世をへて四海をすます。
これ、鏡の慣習なり。
人物をあきらめて経緯をはかるを太宗の道というなり。
博覧人をいうにあらざるなり。

日本国、自、神代、有、三鏡、璽之、与、剣、而、共、伝来、至、今。
一枚、在、伊勢大神宮。
一枚、在、紀伊国、日前社。
一枚、在、内裏、内侍所。

しかあれば、すなわち、国家みな、鏡を伝持すること、あきらかなり。
鏡をえたるは国をえたるなり。
人、つたうらくは、この三枚の鏡は、神位とおなじく伝来せり。天神より伝来せり。と相伝す。
しかあれば、百練の銅も陰陽の化成なり。
今、来、今、現。
古、来、古、現ならん。
これ、古今を照臨するは古鏡なるべし。

雪峰の宗旨は、
新羅、来、新羅、現。
日本、来、日本、現。ともいうべし。
天、来、天、現。
人、来、人、現。ともいうべし。
現、来をかくのごとくの参学すというとも、この現、いま、われらが本末をしれるにあらず、ただ現を相見するのみなり。
かならずしも来、現を、それ、知なり。それ、会なり。と学すべきにあらざるなり。
いま、いう宗旨は、胡、来は胡、現なりというか？
胡、来は一条の胡、来にて、胡、現は一条の胡、現なるべし。
現のための来にあらず。
古鏡、たとえ古鏡なりとも、この参学あるべきなり。

玄沙いでて、とう、
たちまちに明鏡、来に、あわんに、いかん？

この道取、たずね、あきらむべし。
いま、いう、明の道得は、幾許なるべきぞ？
いわくの道は、その来は、かならずしも胡、漢にはあらざるを、これは明鏡なり。さらに、胡、漢と現成すべからず。と道取するなり。
明鏡、来は、たとえ明鏡、来なりとも、二枚なるべからざるなり。

たとえ二枚にあらずというとも、古鏡は、これ、古鏡なり。
明鏡は、これ、明鏡なり。
古鏡あり、明鏡ある、証験、すなわち、雪峰と玄沙と道取せり。
これを仏道の性、相とすべし。
この玄沙の明鏡、来の道話の七通八達なる、としるべし。
八面玲瓏なること、しるべし。
逢、人には即、出なるべし。
出、即には接、渠なるべし。
しかあれば、明鏡の明と、古鏡の古と、同なりとやせん？　異なりとやせん？
明鏡に古の道理ありや？　なしや？
古鏡に明の道理ありや？　なしや？
古鏡という言によりて、明なるべし、と学することなかれ。
宗旨は吾、亦、如是あり、汝、亦、如是あり。
西天、諸祖、亦、如是の道理、はやく練磨すべし。
祖師の道得に、古鏡は磨あり、と(も)道取す。
明鏡も、しかあるべきか？　いかん？
まさに、ひろく諸仏、諸祖の道にわたる参学あるべし。
雪峰、道の胡、漢、倶、隠は、胡も漢も、明鏡(来の)時は倶、隠なりとなり。
この倶、隠の道理、いかに、いふぞ？
胡、漢すでに来、現すること、古鏡を相罣礙せざるに、なにとしてか、いま、倶、隠なる？
古鏡は、たとえ胡、来、胡、現。漢、来、漢、現。なりとも、明鏡来は、おのずから明鏡来なるがゆえに、古鏡、現の胡、漢は倶、隠なるなり。
しかあれば、雪峰、道にも古鏡一面あり、明鏡一面あるなり。
正当明鏡来のとき、古鏡、現の胡、漢を罣礙すべからざる道理、あきらめ決定すべし。
いま、道取する古鏡の胡、来、胡、現。漢、来、漢、現。は、
古鏡上に来、現す、と、いわず。
古鏡裏に来、現す、と、いわず。
古鏡外に来、現す、と、いわず。
古鏡と同参、来、現す、と、いわず。
この道を聴取すべし。
胡、漢、来、現の時節は、古鏡の胡、漢を現、来せしむるなり。

胡、漢、倶、隠ならん時節も、鏡は存取すべきと道得せるは、現にくらく、来におろそかなり。
錯乱というにおよばざるものなり。

ときに、玄沙、いわく、
某甲は、すなわち、しかあらず。
雪峰、いわく、
なんじ、作麼生？
玄沙、いわく、
請すらくは、和尚、とうべし。

いま、玄沙のいう請、和尚、問のことば、いたずらに蹉過すべからず。
いわゆる、和尚問の来なる、和尚問の請なる、父、子の投機にあらずば、為、甚、如此？なり。
すでに、請、和尚、問ならん時節は、恁麼人、さだめて問所を若会すべし。
すでに問所の霹靂するには、無、回避所なり。

雪峰、いわく、忽、遇、明鏡、来時、如何？

この問所は、父、子ともに参究する一条の古鏡なり。

玄沙、いわく、百雑砕。

この道取は、百、千、万に雑砕するとなり。
いわゆる、忽、遇、明鏡、来時は百雑砕なり。
百雑砕を参得せんは、明鏡なるべし。
明鏡を道得ならしむるに、百雑砕なるべきがゆえに。
雑砕のかかれるところ、明鏡なり。
さきに未雑砕なるときあり、のちに、さらに不雑砕ならん時節を管見することなかれ。
ただ百雑砕なり。
百雑砕の対面は孤峻の一なり。
しかあるに、いま、いう、百雑砕は、古鏡を道取するか？　明鏡を道取するか？
更、請、一転語なるべし。
また、古鏡を道取するにあらず、明鏡を道取するにあらず。

古鏡、明鏡は、たとえ問来得なりといえども、玄沙の道取を擬議するとき、沙礫、牆壁のみ現前せる舌端となりて、百雑砕なりぬべきか？
砕来の形段、作麼生？
万古、碧潭、空界、月。

雪峰、真覚大師と三聖院、慧然禅師と、行次に、ひとむれの獼猴をみる。
ちなみに、雪峰、いわく、この獼猴おのおの一面の古鏡を背せり。

この語、よくよく参学すべし。
獼猴というは、さるなり。
いかならんか雪峰のみる獼猴？
かくのごとく問取して、さらに功夫すべし。
経劫をかえりみることなかれ。
おのおの一面の古鏡を背せり、とは、古鏡、たとえ諸仏祖面なりとも、古鏡は向上にも古鏡なり。
獼猴おのおの面面に背せり、というは、面面に大面小面あらず、一面古鏡なり。
背す、というは、たとえば、絵像の仏のうらをおしつくるを背すとはいうなり。
獼猴の背を背するに、古鏡にて背するなり。
使、得、什麼糊、来？
こころみに、いわば、さるのうらは古鏡にて背すべし、古鏡のうらは獼猴にて背するか？
古鏡のうらを古鏡にて背す。
さるのうらをさるにて背す。
各背、一面のことば、虚設なるべからず。
道得是の道得なり。
しかあれば、獼猴か？　古鏡か？　畢竟、作麼生、道？
われら、すでに獼猴か？　獼猴にあらざるか？
だれにか、問取せん？
自己の獼猴にある、自知にあらず、他知にあらず。
自己の自己にある、模索およばず。

三聖、いわく、歴劫無名なり、なにのゆえにか、あらわして、古鏡とせん？

これは、三聖の古鏡を証明せる一面一枚なり。

歴劫というは、一心、一念、未萌以前なり、劫裏の不出頭なり。
無名というは、歴劫の日面、月面、古鏡面なり、明鏡面なり。
無名、真箇に無名ならんには、歴劫、いまだ歴劫にあらず。
歴劫、すでに歴劫にあらずば、三聖の道得、これ、道得にあらざるべし。
しかあれども、一念未萌以前というは今日なり。
今日を蹉過せしめず練磨すべきなり。
まことに、歴劫無名、この名、たかくきこゆ。
なにをあらわしてか、古鏡とする？
龍頭蛇尾。
このとき、三聖にむかいて、雪峰、いうべし、古鏡、古鏡、と。
雪峰、恁麼いわず、さらに、瑕生也、というは、きず、いできぬるとなり。
いかでか、古鏡に瑕生也ならんとおぼゆれども、古鏡の瑕生也は、歴劫無名というをきずとせるなるべし。
古鏡の瑕生也は全古鏡なり。
三聖、いまだ古鏡の瑕生也の窟をいでざりけるゆえに、道来せる参究は一任に古鏡瑕なり。
しかあれば、古鏡にも瑕生なり、瑕生なるも古鏡なり、と参学する。
これ、古鏡を参学するなり。

三聖、いわく、有、什麼、死急？　話頭、也、不識。

いわくの宗旨は、なにとしてか、死急なる？
いわゆるの死急は、
今日か？
明日か？
自己か？
他門か？
尽十方界か？
大唐国裏か？
審細に功夫、参学すべきなり。
話頭、也、不識は、話というは、道来せる話あり、未道得の話あり、すでに道了也の話あり。
いまは話頭なる道理、現成するなり。
たとえば、話頭も大地、有情、同時、成道しきたれるか？
さらに再全の錦にはあらざるなり。
かるがゆえに、不識なり。

対、朕、者、不識なり、対面、不相識なり。
話頭は、なきにあらず、祗、是、不識なり。
不識は条条の赤心なり。
さらに、また、明明の不見なり。

雪峰、いわく、老僧、罪過。

いわゆるは、あしくいいにける、というにも、かくいうこともあれども、しかは、こころうまじ。
老僧といふことは、屋裏の主人翁なり。
いわゆる、余事を参学せず、ひとえに老僧を参学するなり。
千変万化あれども、神頭鬼面あれども、参学は唯、老僧、一著なり。
仏来、祖来、一念、万年あれども、参学は唯、老僧、一著なり。
罪過は住持、事繁なり。
おもえば、それ、雪峰は徳山の一角なり、三聖は臨済の神足なり。
両位の尊宿、おなじく、系譜いやしからず、青原の遠孫なり、南嶽の遠派なり。
古鏡を住持しきたれる、それ、かくのごとし。
晩進の亀鑑なるべし。

雪峰、示、衆、云、
世界、闊一丈、古鏡、闊一丈。
世界、闊一尺、古鏡、闊一尺。

時、玄沙、指、火炉、云、
且、道。
火炉、闊、多少？

雪峰、云、
似、古鏡闊。
玄沙、云、
老和尚、脚跟、未、点、地、在。

一丈、これを世界という。
世界は、これ、一丈なり。
一尺、これを世界とす。
世界、これ、一尺なり。

而今の一丈をいう、而今の一尺をいう、さらに、ことなる尺、丈にはあらざるなり。
この因縁を参学するに、世界のひろさは、よのつねに、おもわくは、無量、無辺の三千大千世界、および、無尽法界というも、ただ小量の自己にして、しばらく、隣里の彼方をさすがごとし。
この世界を拈じて一丈とするなり。
このゆえに、雪峰、いわく、古鏡、闊一丈、世界、闊一丈。
この一丈を学せんには、世界闊の一端を見取すべし。
また、古鏡の道を聞取するにも、一枚の薄氷の見をなす、しかにはあらず。
一丈の闊は世界の闊一丈に同参なりとも、形興、かならずしも世界の無端に斉肩なりや？　同参なりや？　と功夫すべし。
古鏡は、さらに一顆珠のごとくにあらず。
明珠を見解することなかれ。
方、円を見取することなかれ。
尽十方界、たとえ一顆明珠なりとも、古鏡にひとしかるべきにあらず。
しかあれば、古鏡は胡、漢の来、現にかかわれず。
縦横の玲瓏に条条なり。
多にあらず。
大にあらず。
闊は、その量を挙するなり。
広をいわんとにはあらず。
闊というは、よのつねの、二寸、三寸といい、七箇、八箇と、かぞうるがごとし。
仏道の算数には、大悟、不悟と算数するに、二両、三両をあきらめ、仏仏、祖祖と算数するに、五枚、十枚を見成す。
一丈は古鏡闊なり。
古鏡闊は一枚なり。

玄沙のいう、火炉、闊、多少？
かくれざる道得なり。
千古万古に、これを参学すべし。
いま、火炉をみる、だれ人となりてか、これをみる？
火炉をみるに、七尺にあらず、八尺にあらず。
これは動執の時節話にあらず。
新条特地の現成なり。
たとえば、是、什麼物、恁麼来？　なり。

闊、多少の言、きたりぬれば、向来の多少は、多少にあらざるべし。
当所解脱の道理、うたがわざりぬべし。
火炉の諸相、諸量にあらざる宗旨は、玄沙の道をきくべし。
現前の一団子、いたずらに落地せしむることなかれ。
打破すべし。
これ、功夫なり。

雪峰、いわく、如、古鏡闊。

この道取、しずかに照顧すべし。
火炉闊、一丈というべきにあらざれば、かくのごとく道取するなり。
一丈といわんは道得是にて、如、古鏡闊は道不是なるにあらず。
如、古鏡闊の行履をかんがみるべし。
おおく、人のおもわくは、火炉闊、一丈といわざるを道不是とおもえり。
闊の独立をも功夫すべし。
古鏡の一片をも鑑照すべし。
如如の行李をも蹉過せしめざるべし。
動容、揚、古路、不堕、悄然機なるべし。

玄沙、いわく、老漢、脚跟、未、点、地、在。

いわくのこころは、老漢といい、老和尚といえども、かならず、雪峰にあらず。
雪峰は老漢なるべきがゆえに。
脚跟というは、いずれのところぞ？　と問取すべきなり。
脚跟というは、なにをいうぞ？　と参究すべし。
参究すべしというは、(脚跟とは、)
正法眼蔵をいうか？
虚空をいうか？
尽地をいうか？
命脈をいうか？
幾箇あるものぞ？
一箇あるか？
半箇あるか？
百、千、万箇あるか？
恁麼、勤学すべきなり。

未、点、地、在は、地というは、是、什麼物なるぞ？
いまの大地というは、一類の所見に準じて、しばらく、地という。
さらに、諸類、あるいは、不思議解脱法門とみるあり、諸仏諸行道とみる一類あり。
しかあれば、脚跟の点ずべき地は、なにものをか、地とせる？
地は、実有なるか？　実無なるか？
また、おおよそ、地というものは、大道のなかに寸許もなかるべきか？
問来問去すべし。
道他、道己すべし。
脚跟は、点、地、也、是なる？　不、点、地、也、是なる？
作麼生なればか、未、点、地、在と道取する？
大地、無、寸土の時節は、点、地、也、未、未、点、地、也、未なるべし。
しかあれば、老漢、脚跟、未、点、地、在は、老漢の消息なり、脚跟の造次なり。

婺州、金華山、国泰院、弘瑫禅師、ちなみに、僧、とう、
古鏡、未磨時、如何？
師、云、
古鏡。
僧、曰、
磨後、如何？
師、云、
古鏡。

しるべし。
いま、いう、古鏡は、磨時あり、未磨時あり、磨後あれども、一面に古鏡なり。
しかあれば、磨時は古鏡の全古鏡を磨するなり。
古鏡にあらざる水銀、等を和して磨するにあらず。
磨、自、自、磨にあらざれども、磨、古鏡なり。
未磨時は、古鏡、くらきにあらず。
くろし、と道取すれども、くらきにあらざるべし。
活、古鏡なり。
おおよそ、
鏡を磨して鏡となす。
瓦を磨して鏡となす。

瓦を磨して瓦となす。
鏡を磨して瓦となす。
磨して、なさざるあり。
なることあれども、磨すること、えざるあり。
おなじく、仏祖の家業なり。

江西、馬祖、むかし、南嶽に参学せしに、南嶽、かつて心印を馬祖に密受せしむ。
磨、瓦のはじめのはじめなり。
馬祖、伝法院に住して、よのつねに坐禅すること、わずかに十余歳なり。
雨夜の草庵、おもいやるべし。
封雪の寒牀に、おこたる、といわず。
南嶽、あるとき、馬祖の庵にいたるに、馬祖、侍立す。
南嶽、とう、
なんじ、近日、作、什麼？
馬祖、いわく、
近日、道一、祗管打坐するのみなり。
南嶽、いわく、
坐禅、なにごとをか図する？
馬祖、いわく、
坐禅は作仏を図す。
南嶽、すなわち、一片の瓦をもちて、馬祖の庵のほとりの石にあてて磨す。
馬祖、これをみて、すなわち、とう、
和尚、作、什麼？
南嶽、いわく、
磨、瓦。
馬祖、いわく、
磨、瓦、用、作、什麼？
南嶽、いわく、
磨、作、鏡。
馬祖、いわく、
磨、瓦、豈、得、成、鏡、耶？
南嶽、いわく、
坐禅、豈、得、作仏、耶？

この一段の大事、むかしより数百歳のあいだ、人、おおく、おもえらくは、
南嶽、ひとえに馬祖を勧励せしむる、と。
いまだ、かならずしも、しかあらず。
大聖の行履、はるかに凡境を出離せるのみなり。
大聖、もし磨、瓦の法なくば、いかでか、為人の方便あらん？
為人のちからは仏祖の骨髄なり。
たとえ構得すとも、なお、これ、家具なり。
家具、調度にあらざれば、仏家につたわれざるなり。
いわんや、すでに馬祖を接すること、すみやかなり。
はかりしりぬ、仏祖、正伝の功徳、これ、直指なることを。
まことに、しりぬ。
磨、瓦の鏡となるとき、馬祖、作仏す。
馬祖、作仏するとき、馬祖、すみやかに馬祖となる。
馬祖の、馬祖となるとき、坐禅、すみやかに坐禅となる。
かるがゆえに、瓦を磨して鏡となすこと、古仏の骨髄に住持せられきたる。
しかあれば、瓦のなれる古鏡あり。
この鏡を磨しきたるとき、従来も未染汚なるなり。
瓦のちり、あるにはあらず。
ただ瓦なるを磨、瓦するなり。
このところに、作、鏡の功徳の現成する、すなわち、仏祖の功夫なり。
磨、瓦、もし、作、鏡せずば、磨、鏡も作、鏡すべからざるなり。
だれが、はかることあらん？　この作に作仏あり、作、鏡あることを。
また、疑著すらくは、古鏡を磨するとき、あやまりて瓦と磨しなすことのあるべきか？
磨時の消息は、余時の、はかるところにあらず。
しかあれども、南嶽の道、まさに、道得を道得すべきがゆえに、畢竟じて、
すなわち、これ、磨、瓦、作、鏡なるべし。
いまの人も、いまの瓦を拈じ磨して、こころみるべし。さだめて鏡とならん。
瓦、もし鏡とならずば、人、ほとけになるべからず。
瓦を、泥団なり、と、かろしめば、人も泥団なり、と、かろからん。
人、もし心あらば、瓦も心あるべきなり。
だれが、しらん？　瓦、来、瓦、現の鏡子あることを。
また、だれが、しらん？　鏡、来、鏡、現の鏡子あることを。

正法眼蔵　古鏡
仁治二年辛丑、九月九日、在、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 看経

阿耨多羅三藐三菩提の修、証、あるいは、知識をもちい、あるいは、経巻をもちいる。
知識というは、全自己の仏祖なり。
経巻というは、全自己の経巻なり。
全仏祖の自己、全経巻の自己なるがゆえに、かくのごとくなり。
自己と称すといえども、我、爾の拘牽にあらず。
これ、活眼睛なり、活拳頭なり。
しかあれども、念経、看経、誦経、書経、受経、持経あり。
ともに仏祖の修、証なり。
しかあるに、仏経にあうこと、たやすきにあらず。
於、無量国中、乃至、名字、不可得聞なり。
於、仏祖中、乃至、名字、不可得聞なり。
於、命脈中、乃至、名字、不可得聞なり。
仏祖にあらざれば、経巻を見聞、読誦、解義せず。
仏祖、参学より、かつかつ経巻を参学するなり。
このとき、耳処、眼処、舌処、鼻処、身心塵処、到処、聞処、話処の聞、持、受、説経、等の現成あり。
為、求、名聞、故、説、外道、論議の輩、仏経を修行すべからず。
そのゆえは、経巻は、
若、樹、若、石の伝持あり。
若、田、若、里の流布あり。
塵刹の演出あり。
虚空の開講あり。

薬山、(曩祖、)弘道大師、久、不陞堂。
院主、白、云、
大衆、久、思、和尚、慈誨。
山、云、
打鐘著。
院主、打鐘。
大衆、才集。
山、陞堂、良久、便、下座、帰、方丈。
院主、随、後、白、云、

和尚、適来、聴許、為、衆、説法。
如何、不、垂、一言？
山、云、
経、有、経師。
論、有、論師。
争、怪得、老僧？

曩祖の慈晦するところは、
拳頭、有、拳頭師。
眼睛、有、眼睛師。なり。
しかあれども、しばらく、曩祖に拝問すべし。
争、怪得、和尚？　はなきにあらず。
いぶかし、和尚、是、什麼師？

韶州、曹谿山、大鑑高祖、会下、誦法華経僧、法達、来参。
高祖、為、法達、偈、云、
心、迷、法華、転。
心、悟、転、法華。
誦、久、不明、己、与、義、作、讐家。
無念、念、即、正。
有念、念、成、邪。
有無、倶、不計、長、御、白牛車。

しかあれば、心迷は法華に転ぜられ、心悟は法華を転ず。
さらに、迷悟を跳出するときは、法華の、法華を転ずるなり。

法達、まさに、偈をききて、踊躍、歓喜、以、偈、讃、曰、
経、誦、三千部、曹谿、一句、亡。
未、明、出世旨、寧、歇、累生狂。
羊、鹿、牛、権設。
初中後善、揚。
誰、知、火宅内、元、是、法中王？

その時、高祖、曰、
汝、今後、方、可、名、為、念経僧、也。

しるべし、仏道に念経僧あることを。

曹谿古仏の直指なり。
この念経僧の念は、
有念、無念、等にあらず、
有無、倶、不計なり、
ただ、それ、従、劫、至、劫、手、不、釈、巻、従、昼、至、夜、無、不念(時)なるのみなり。
従、経、至、経、無不、経なるのみなり。

第二十七祖、東印度、般若多羅、尊者、因、東印度国王、請、尊者、斎、次、国王、乃、問、
諸人尽、転経。
唯、尊者、為、甚、不転？
祖、曰、
貧道、出息、不随、衆縁。
入息、不居、蘊界。
常、転、如是経、百、千、万、億巻。非、但一巻、両巻。

般若多羅、尊者は、天竺国、東印度の種草なり。
迦葉、尊者より第二十七世の正嫡なり。
仏家の調度、ことごとく正伝せり。
頂𩕳、眼睛、拳頭、鼻孔、拄杖、鉢盂、衣、法、骨髄、等を住持せり。
(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
われらが曩祖なり。
われらは雲孫なり。
いま、尊者の渾力道( or 渾身道)は、出息の衆縁に不随なるのみにあらず、衆縁も出息に不随なり。
衆縁、たとえ頂𩕳、眼睛にてもあれ、衆縁、たとえ渾身にてもあれ、衆縁、たとえ渾心にてもあれ、担来、担去、又、担来、ただ不随、衆縁なるのみなり。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
不随は渾随なり。
このゆえに、築著磕著なり。
出息、これ、衆縁なりといえども、不随、衆縁なり。
無量劫来、いまだ出息、入息の消息をしらざれども、而今、まさに、はじめて、しるべき時節到来なるがゆえに、不居、蘊界をきく、不随、衆縁をきく。
衆縁、はじめて入息、等を参究する時節なり。
この時節、かつて、さきにあらず、さらに、のちにあるべからず。

ただ而今のみにあるなり。
蘊界というは、五蘊なり。
いわゆる、色受想行識をいう。
この五蘊に不居なるは、五蘊、いまだ到来せざる世界なるがゆえなり。
この関棙子を拈ぜるゆえに、所転の経、ただ一巻(、両巻)にあらず、常、転、百、千、万、億巻なり。
百、千、万、億巻は、しばらく、多の一端をあぐといえども、多の量のみにあらざるなり。
一息出の不居、蘊界を百、千、万、億巻の量とせり。
しかあれども、有漏、無漏智の所測にあらず、有漏、無漏法の界にあらず。
このゆえに、
有智の知の測量にあらず。
有知の智の卜度にあらず。
無智の知の商量にあらず。
無知の智の所到にあらず。
仏仏、祖祖の修、証、皮肉骨髄、眼睛、拳頭、頂⊠、鼻孔、拄杖、払子、⊠跳造次なり。(「⊠」は「寧頁」という一文字の漢字です。「⊠」は「⻊ 孛」という一文字の漢字です。)

趙州、観音院、真際大師、因、有、婆子、施、浄財、請、大師、転、大蔵経。
師、下、禅牀、遶、一帀、向、使者、云、
転、蔵、已、畢。
使者、回、挙似、婆子。
婆子、曰、
比来、請、転、一蔵。
如何、和尚、只、転、半蔵？

あきらかに、しりぬ。
転、一蔵、半蔵は婆子経、三巻なり。
転、蔵、已、畢は趙州経、一蔵なり。
おおよそ、転、大蔵経のていたらくは、禅牀をめぐる趙州あり、禅牀ありて趙州をめぐる。
趙州をめぐる趙州あり。
禅牀をめぐる禅牀あり。
しかあれども、一切の転蔵は、遶、禅牀のみにあらず、禅牀、遶のみにあらず。

益州、大隋山、神照大師、法諱、法真。
嗣、長慶寺、大安禅師。
因、有、婆子、施、浄財、請、師、転、大蔵経。
師、下、禅牀、一帀、向、使者、曰、
転、大蔵経、已、畢。
使者、帰、挙似、婆子。
婆子、云、
比来、請、転、一蔵。
如何、和尚、只、転、半蔵？

いま、大隋の、禅牀をめぐると学することなかれ。
禅牀の、大隋をめぐると学することなかれ。
拳頭、眼睛の団欒のみにあらず。
作、一円相せる打、一円相なり。
しかあれども、婆子、それ、有眼なりや？　未具、眼なりや？
只、転、半蔵、たとえ道取を拳頭より正伝すとも、婆子、さらに、いうべし、
比来、請、転、大蔵経。
如何、和尚、只管、弄精魂？

あやまりても、かくのごとく道取せましかば、具、眼睛の婆子なるべし。

高祖、洞山、悟本大師、因、有、官人、設、斎、施、浄財、請、師、看、転、大蔵経。
大師、下、禅牀、向、官人、揖。
官人、揖。
大師、引、官人、倶、遶、禅牀、一帀、向、官人、揖。
良久、向、官人、云、
会、麼？
官人、云、
不会。
大師、云、
我、与、汝、看、転、大蔵経。
如何、不会？

それ、我、与、汝、看、転、大蔵経、あきらかなり。

遶、禅牀を看、転、大蔵経と学するにあらず。
看、転、大蔵経を遶、禅牀と会せざるなり。
しかありといえども、高祖の慈誨を聴取すべし。

この因縁、先師、古仏、天童山に住せりしとき、高麗国の施主、入山、施、財、大衆、看経、請、先師、陞座のとき挙するところなり。
挙しおわりて、先師、すなわち、払子をもって、おおきに円相をつくること一帀して、いわく、天童、今日、与、汝、看、転、大蔵経。
便、擲下、払子、下、座。

いま、先師の道所を看、転すべし。
余者に比準すべからず。
しかありというとも、看、転、大蔵経には、一隻眼をもちいるとやせん？
半隻眼をもちいるとやせん？
高祖の道所と、先師の道所と、用、眼睛、用、舌頭、いくばくをか、もちいきたれる？
究弁、看。

曩祖、薬山、弘道大師、尋常、不許、人、看経。
一日、将、経、自、看。
因、僧、問、
和尚、
尋常、不許、人、看経。
為、甚麼、却、自、看？
師、云、
我、只、要、遮、眼。
僧、云、
某甲、学、和尚、得、麼？
師、云、
爾、若、看、牛皮、也、須、穿。

いま、我、要、遮、眼の道は、遮、眼の自、道所なり。
遮、眼は、
打失、眼睛なり。
打失、経なり。
渾眼、遮なり。

渾遮、眼なり。
遮、眼は、
遮中、開眼なり。
遮裏、活眼なり。
眼裏、活遮なり。
眼皮上、更、添、一枚皮なり。
遮裏、拈、眼なり。
眼、自、拈、遮なり。
しかあれば、眼睛、経にあらざれば、遮、眼の功徳、いまだ、あらざるなり。
牛皮、也、須、穿は、
全牛皮なり。
全皮牛なり。
拈、牛、作、皮なり。
このゆえに、皮肉骨髄、頭角、鼻孔を牛、牸の活計とせり。
学、和尚のとき、牛、為、眼睛なるを遮、眼とす。
眼睛、為、牛なり。

冶父道川禅師、云、
億、千、供、仏、福、無辺。
争、似、常、将、古教、看。
白紙、上辺、書、黒字。
請、君、開眼、目前、観。

しるべし。
古仏を供すると、古教をみると、福徳、斉肩なるべし、福徳、超過なるべし。
古教というは、白紙の上に黒字を書せる。
だれが、これを古教としらん？
当恁麼の道理を参究すべし。

雲居山、弘覚大師、因、有、一僧、在、房内、念経。
大師、隔、窓、問、云、
闍梨、念底、是、什麼経？
僧、対、曰、
維摩経。
師、云、
不問、爾、維摩経。

念底、是、什麼経？
此僧、従、此、得、入。

大師、道の念底、是、什麼経？　は、一条の念底、年代、深遠なり。
不欲、挙似、於、念なり。
路にしては死蛇にあう。
このゆえに、什麼経？　の問著、現成せり。
人にあうては錯、挙せず。
このゆえに、維摩経なり。
おおよそ、看経は、尽仏祖を把、拈し、あつめて、眼睛として、看経するなり。
正当恁麼時、たちまちに仏祖、作仏し、説法し、説仏し、仏作するなり。
この看経の時節にあらざれば、仏祖の頂⿰、面目、いまだ、あらざるなり。
(「⿰」は「寧頁」という一文字の漢字です。)

現在、仏祖の会に、看経の儀則、それ、多般あり。
いわゆる、施主、入山、大衆、看経、
あるいは、常、転、請、僧、看経、
あるいは、僧衆、自発心、看経、等なり。
このほか、大衆、為、亡僧、看経あり。

施主、入山、請、僧、看経は、
当日の粥時より、堂司、あらかじめ看経牌を僧堂前、および、諸寮にかく。
粥罷に拝席を聖僧前にしく。
とき、いたりて、僧堂前鐘を三会うつ、あるいは、一会うつ。
住持人の指揮にしたがうなり。
鐘声罷に、首座、大衆、搭、袈裟、入、雲堂、就、被位、正面、而、坐。
つぎに、住持人、入堂し、向、聖僧、問訊、焼香罷、依位、而、坐。
つぎに、童行をして経を行ぜしむ。
この経、さきより庫院にととのえ、安排し、もうけて、とき、いたりて供達するなり。
経は、あるいは、経函ながら行じ、あるいは盤子に安じて行ず。
大衆、すでに経を請して、すなわち、ひらき、よむ。
このとき、知客いまし施主をひきて雲堂に、いる。
施主、まさに雲堂前にて手炉をとりて、ささげて入堂す。
手炉は院門の公界にあり。

あらかじめ装香して、行者をして雲堂前にもうけて、施主、まさに入堂せんとするとき、めしによりて施主にわたす。
手炉をめすことは、知客、これをめすなり。
入堂するときは、知客はさき、施主はのち、雲堂の前門の南頬より、いる。
施主、聖僧前にいたりて、焼、一片香、拝、三拝あり。
拝のあいだ、手炉をもちながら拝するなり。
拝のあいだ、知客は拝席のきたに、おもてを南にして、すこしき施主にむかいて、叉手して、たつ。
施主の拝、おわりて、施主、みぎに転身して、住持人にむかいて手炉をささげて曲躬し揖す。
住持人は椅子にいながら経をささげて合掌して揖をうく。
施主、つぎに、北にむかいて揖す。
揖、おわりて、首座のまえより巡堂す。
巡堂のあいだ、知客、さきにいけり。
巡堂、一帀して、聖僧前にいたりて、なお、聖僧にむかいて手炉をささげて揖す。
このとき、知客は雲堂の門限のうちに、拝席のみなみに、面を北にして叉手して、たてり。
施主、揖、聖僧、おわりて、知客にしたがいて雲堂前にいでて、巡堂前、一帀して、なお、雲堂内にいりて、聖僧にむかいて拝、三拝す。
拝、おわりて、交椅につきて看経を証明す。
交椅は、聖僧のひだりの柱のほとりに南にむかいて、これをたつ。
あるいは、南柱のほとりに北にむかいて、たつ。
施主、すでに座につきぬれば、知客、すべからく施主にむかいて揖してのち、くらいにつくべし。
あるいは、施主、巡堂のあいだ、梵音あり。
梵音の座、あるいは、聖僧のみぎ、あるいは、聖僧のひだり、便宜にしたがう。
手炉には、沈香、桟香、等の名香をさしはさみ、たくなり。
この香は、施主、みずから弁、備するなり。
施主、巡堂のときは、衆僧、合掌す。
つぎに、看経銭を俵す。
銭の多少は、施主のこころにしたがう。
あるいは、綿、あるいは、扇、等の物子、これを俵す。
施主、みずから俵す。

あるいは、知事、これを俵す。
あるいは、行者、これを俵す。
俵する法は、僧のまえに、これをおくなり。
僧の手に、いれず。
衆僧は、俵銭をまえに、俵するとき、おのおの合掌して、うくるなり。
俵銭、あるいは、当日の斎時に、これを俵す。
もし斎時に俵するがごときは、首座、施、食ののち、さらに、打、椎、一下して、首座、施、財す。
施主、回向の旨趣を紙片にかきて、聖僧のみぎのはしらに貼せり。
雲堂裏、看経のとき、揚、声して、よまず、低声に、よむ。
あるいは、経巻をひらきて文字をみるのみなり。
句読におよばず、看経するのみなり。
かくのごとくの看経、おおくは、金剛般若経、法華経普門品、安楽行品、金光明経、等を、いく百、千巻となく、常住にもうけ、おけり。
毎僧、一巻を行ずるなり。
看経、おわりぬれば、もとの盤、もしは、函をもちて、座のまえをすぐれば、大衆おのおの経を安ず。
とるとき、おくとき、ともに、合掌するなり。
とるときは、まず、合掌して、のちに、とる。
おくときは、まず、経を安じて、のちに、合掌す。
そののち、おのおの合掌して、低声に回向するなり。
もし常住、公界の看経には、都鑑寺僧、焼香、礼拝、巡堂、俵銭みな、施主のごとし。
手炉をささぐることも、施主のごとし。
もし衆僧のなかに、施主となりて、大衆の看経を請するも、俗施主のごとし。
焼香、礼拝、巡堂、俵銭、等あり。
知客、これをひくこと、俗施主のごとくなるべし。

聖節の看経ということあり。
しかれば、今上の聖誕の、仮令、もし正月十五日なれば、まず、十二月十五日より、聖節の看経、はじまる。
今日、上堂なし。
仏殿の釈迦仏のまえに、連牀を二行にしく。
いわゆる、東西にあいむかえて、おのおの南北行にしく。
東西牀のまえに台盤をたつ。
そのうえに経を安ず。

金剛般若経、仁王経、法華経、最勝王経、金光明経、等なり。
堂裏の僧を一日に幾僧と請して、斎前に点心をおこなう。
あるいは、麺、一椀、羹、一杯を毎僧に行ず。
あるいは、饅頭、六、七箇、羹、一分、毎僧に行ずるなり。
饅頭、これも椀にもれり。
はしをそえたり。
かいをそえず。
おこなうときは、看経の座につきながら、座をうごかずして、おこなう。
点心は、経を安ぜる台盤に安排せり。
さらに棹子をきたせることなし。
行、点心のあいだ、経は台盤に安ぜり。
点心、おこないおわりぬれば、僧おのおの座をたちて、漱口して、かえりて、座につく。
すなわち、看経す。
粥罷より斎時にいたるまで看経す。
斎時、三下、鼓、響に座をたつ。
今日の看経は、斎時をかぎりとせり。
はじむる日より、建祝聖道場の牌を仏殿の正面の東の簷頭にかく。
黄牌なり。
また、仏殿のうちの正面の東の柱に、祝聖の旨趣を障子牌にかきて、かく。
これ、黄牌なり。
住持人の名字は紅紙、あるいは、白紙にかく。
その二字を小片紙にかきて、牌面の年月日の下頭に貼せり。
かくのごとく看経して、その御降誕の日にいたるに、住持人、上堂し、祝聖するなり。
これ、古来の例なり。
いまに、ふりざるところなり。

また、僧の、みずから発心して看経する、あり。
寺院、もとより、公界の看経堂あり。
かの堂につきて看経するなり。
その儀、いま、清規のごとし。

高祖、薬山、弘道大師、問、高沙弥、云、
汝、
従、看経、得？

従、請益、得？
高沙弥、云、
不、従、看経、得。
亦、不従、請益、得。
師、云、
大、有、人、不看経、不請益、為、什麼、不得？
高沙弥、云、
不道、他、無。
只、是、他、不肯、承当。

仏祖の屋裏に、承当あり、不承当あり、といえども、看経、請益は、家常の調度なり。

正法眼蔵　看経
于、時、仁治二年辛丑、秋、九月十五日、在、雍州、宇治県、興聖宝林寺、示、衆。

# 仏性

釈迦牟尼仏、言、
一切衆生、悉、有、仏性。
如来、常住、無有、変易。

これ、われらが大師、釈尊の獅子吼の転法輪なりといえども、一切諸仏、一切祖師の頂□、眼睛なり。(「□」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
参学しきたること、すでに二千一百九十年(、当日本仁治二年辛丑歳)、正嫡わずかに五十代(、至、先師、天童、浄和尚)、西天二十八代、代代、住持しきたり、東地二十三世、世世、住持しきたる。
十方の仏祖ともに、住持せり。
世尊、道の一切衆生、悉、有、仏性は、その宗旨いかん？
是、什麼物、恁麼来？の道、転法輪なり。
あるいは、衆生といい、有情といい、群生といい、群類というは、(悉、有の言は、)衆生なり、群有なり。
すなわち、悉、有は仏性なり。
悉、有の一悉( or 一分)を衆生という。
正当恁麼時は、衆生の内外、すなわち、仏性の悉、有なり。
単伝する皮肉骨髄のみにあらず。汝、得、吾皮肉骨髄なるがゆえに。
しるべし。
いま、仏性に悉、有せらるる有は、有無の有にあらず。
悉、有は、
仏語なり。
仏舌なり。
仏祖眼睛なり。
衲僧鼻孔なり。
悉、有の言、さらに、
始有にあらず。
本有にあらず。
妙有、等にあらず。
いわんや、縁有、妄有ならんや？
心、境、性、相、等にかかわれず。
しかあれば、すなわち、衆生、悉、有の依正、しかしながら、
業増上力にあらず。

妄縁起にあらず。
法爾にあらず。
神通、修、証にあらず。
(もし)衆生の悉、有、それ、業増上(力)、および、縁起、法爾、等ならんには、諸聖の証道、および、諸仏の菩提、仏祖の眼睛も、業増上力、および、縁起、法爾なるべし。
しかあらざるなり。
尽界は、すべて、客塵なし。
直下、さらに、第二人あらず。
直、截、根源、人、未識、忙忙、業識、幾時、休？　なるがゆえに。
妄縁起の有にあらず。
遍界、不曾蔵のゆえに。
遍界、不曾蔵というは、かならずしも満界、是、有というにあらざるなり。
遍界、我有は、外道の邪見なり。
本有の有にあらず。亙古亙今のゆえに。
始起の有にあらず。不受、一塵のゆえに。
条条の有にあらず。合取のゆえに。
無始有の有にあらず。是、什麼物、恁麼来？　のゆえに。
始起有の有にあらず、平常心、是、道のゆえに。
まさに、しるべし。
悉有中に衆生、快便難逢なり。
悉、有を会取すること、かくのごとくなれば、悉、有、それ、透体脱落なり。
仏性の言をききて、学者、おおく、先尼外道の我のごとく邪計せり。
それ、人にあわず、自己にあわず、師をみざるゆえなり。
いたずらに風、火の動著する心意識を仏性の覚知覚了とおもえり。
だれが、いうし？　仏性に覚知覚了あり、と。
覚者、知者は、たとえ諸仏なりとも、仏性は覚知覚了にあらざるなり。
いわんや、諸仏を覚者、知者という覚知は、なんだちが云云の邪解を覚知とせず。
風、火の動静を覚知とするにあらず、ただ一、両の仏面祖面、これ、覚知なり。
往往に、古老、先徳、あるいは、西天に往還し、あるいは、人、天を化導する、漢(、唐)より宋朝にいたるまで、稲麻竹葦のごとくなる、おおく、風、火の動著を仏性の知覚とおもえる。
あわれむべし。

学道、転、疎なるによりて、いまの失誤あり。
いま、仏道の晩学、初心、しかあるべからず。
たとえ覚知を学習すとも、覚知は動著にあらざるなり。
たとえ動著を学習すとも、動著は恁麼にあらざるなり。
もし真箇の動著を会取することあらば、真箇の覚知覚了を会取すべきなり。
仏、之与、性、達、彼、達、此なり。
仏性、かならず、悉、有なり。悉、有は仏性なるがゆえに。
悉、有は百雑砕にあらず。
悉、有は一条、鉄にあらず。
拈、拳頭なるがゆえに、大小にあらず。
すでに仏性という、諸聖と斉肩なるべからず、仏性と斉肩すべからず。
ある一類、おもわく、
仏性は草木の種子のごとし。
法雨のうるおい、しきりに、うるおすとき、芽、茎、生長し、枝、葉、華、果、もすことあり。
果実、さらに種子をはらめり。

かくのごとく見解する、凡夫の情量なり。
たとえ、かくのごとく見解すとも、種子、および、華、果、ともに、条条の赤心なり、と参究すべし。
果裏に種子あり。
種子、みえざれども、根、茎、等を生ず。
あつめざれども、そこばくの枝条、大囲となれる。
内外の論にあらず。
古今の時に不空なり。
しかあれば、たとえ凡夫の見解に一任すとも、根、茎、枝、葉みな、同生し同死し、同悉有なる仏性なるべし。

仏、言、
欲、知、仏性義、当、観、時節因縁。
時節、若、至、仏性、現前。

いま、仏性義をしらんとおもわば、というは、ただ知のみにあらず、行ぜんとおもわば、証せんとおもわば、とかんとおもわばとも、わすれんとおもわばとも、いうなり。
かの説、行、証、忘、錯、不錯、等も、しかしながら、時節の因縁なり。

時節の因縁を観ずるには、時節の因縁をもって観ずるなり、払子、拄杖、等をもって相観ずるなり。
さらに有漏智、無漏智、本覚、始覚、無覚、正覚、等の智をもちいるには観ぜられざるなり。
当、観というは、能観、所観にかかわれず、正観、邪観、等に準ずべきにあらず、これ当、観なり。
当、観なるがゆえに不自観なり、不他観なり、時節因縁聻なり、超越、因縁なり、仏性聻なり、脱体、仏性なり、仏仏聻なり、性性聻なり。
時節、若、至の道を、古今のやから、往往に、おもわく、仏性の現前する時節の向後にあらんずる( or あらわるる)をまつなり、とおもえり。
かくのごとく修行しゆくところに、自然に仏性、現前の時節にあう。
時節、いたらざれば、参師問法するにも、弁道、功夫するにも、現前せず、という。
恁麼、見取して、いたずらに紅塵にかえり、むなしく雲漢をまもる。
かくのごとくのたぐい、おそらくは天然外道の流類なり。
いわゆる、欲、知、仏性義は、たとえば当、知、仏性義というなり。
当、観、時節因縁というは、当、知、時節因縁というなり。
いわゆる、仏性をしらんとおもわば、しるべし、時節因縁、これ、なり。
時節、若、至というは、すでに時節いたれり、なにの疑著すべきところか、あらん？　となり。
疑著、時節、さもあらばあれ、還、我、仏性、来なり。
しるべし。
時節、若、至は、十二時中、不、空、過なり。
若、至は、既、至といわんがごとし。
時節、若、至すれば、仏性、不至なり。
しかあれば、すなわち、時節、すでにいたれば、これ、仏性の現前なり。
あるいは、其理、自、彰なり。
おおよそ、時節の、若、至せざる時節いまだあらず、仏性の、現前せざる仏性あらざるなり。

第十二祖、馬鳴、尊者、十三祖のために仏性海をとくに、いわく、
山河大地、皆、依、建立。
三昧、六通、由、茲、発現。

しかあれば、この山河大地みな、仏性海なり。
皆、依、建立というは、建立せる正当恁麼時、これ、山河大地なり。

すでに皆、依、建立という。
しるべし。
仏性海のかたちは、かくのごとし。
さらに内外、中間にかかわるべきにあらず。
恁麼ならば、山河をみるは、仏性をみるなり。
仏性をみるは驢腮、馬觜をみるなり。
皆、依は全、依なり、依、全なり、と会取し、不会取するなり。
三昧、六通、由、玆、発現。
しるべし。
諸三昧の発現、来、現、おなじく、皆、依、仏性なり。
全六通の由、玆、不由、玆、ともに、皆、依、仏性なり。
六神通は、ただ阿笈摩教にいう六神通にあらず。
六というは、前三三後三三を六神通波羅蜜という。
しかあれば、六神通は明明百草頭、明明仏祖意なり、と参究することなかれ。
六神通に滞累せしむといえども、仏性海の朝宗に罣礙するものなり。

五祖、大満禅師、蘄州、黄梅、人、也。
無父、而、生。
童児、得道。
乃、栽松道者、也。
初、在、蘄州、西山、栽、松。
遇、四祖出遊。
告、道者、
吾、欲、伝法、与、汝。
汝、已、年、邁。
若、(待、)汝、再来、吾、尚、遅、汝。
師、諾。
遂、往、周氏家女、托生。
因、抛、濁港中。
神物、護持、七日、不損、因、収、養、矣。
至、七歳、為、童児、於、黄梅路上、逢、四祖、大医禅師。
祖、見、師、雖、是、小児、骨相、奇秀、異、乎、常、童。
祖、見、問、曰、
汝、何姓？
師、答、曰、
姓、即、有。

不、是、常、姓。
祖、曰、
是、何姓？
師、答、曰、
是、仏性。
祖、曰、
汝、無、仏性。
師、答、曰、
仏性、空、故、所以、言、無。
祖、識、其法器、俾、為、侍者。
(
至、其家、於、父母所、乞、令、出家。
父母、以、宿縁、故、殊、無、難色、捨。
為、弟子。
)
後、付、正法眼蔵。
居、黄梅、東山、大、振、玄風。

しかあれば、すなわち、祖師の道取を参究するに、四祖いわく、汝、何性？
は、その宗旨あり。
むかしは何国人の人あり、何姓の姓あり。
なんじは何姓？　と為説するなり。
たとえば、吾、亦、如是。汝、亦、如是。と道取するがごとし。

五祖いわく、姓、即、有。不、是、常、姓。
いわゆるは、有、即、姓は常、姓にあらず。
常、姓は即、有に不是なり。

四祖、いわく、是、何姓？　は、何は是なり、是を何しきたれり。
これ、姓なり。
何ならしむるは、是のゆえなり。
是ならしむるは、何の能なり。
姓は是、也、何、也なり。
これを蒿湯にも点ず、茶湯にも点ず、家常の茶飯ともするなり。
五祖、いわく、是、仏性。
いわくの宗旨は、是は仏性なりとなり。

何のゆえに、仏なるなり。
是は何姓のみに究取しきたらんや？
是、すでに不是のとき、仏性なり。
しかあれば、すなわち、是は、何なり、仏なりといえども、脱落しきたり、透脱しきたるに、かならず、姓なり。
その姓、すなわち、周なり。
しかあれども、父にうけず、祖にうけず、母氏に相似ならず、傍観に斉肩ならんや？

四祖、いわく、汝、無、仏性。
いわゆる、道取は、汝は、だれにあらず、汝に一任すれども、無仏性なり、と開演するなり。
しるべし。
学すべし。
いまは、いかなる時節にして無仏性なるぞ？
仏頭にして無仏性なるか？
仏向上にして無仏性なるか？
七通を逼塞することなかれ。
八達を模索することなかれ。
無仏性は一時の三昧なり、と修習することもあり。
仏性、成仏のとき無仏性なるか？
仏性、発心のとき無仏性なるか？
と問取すべし。
道取すべし。
露柱をしても問取せしむべし。
露柱にも問取すべし。
仏性をしても問取せしむべし。
しかあれば、すなわち、無仏性の道、はるかに四祖の祖室より、きこゆるものなり。
黄梅に見聞し、趙州に流通し、大潙に挙揚す。
無仏性の道、かならず、精進すべし。
趦趄することなかれ。
無仏性、たどりぬべしといえども、何なる標準あり、汝なる時節あり、是なる投機あり、周なる同姓あり、直趣なり。

五祖、いわく、仏性、空、故、所以、言、無。

あきらかに道取す。
空は無にあらず。
仏性、空を道取するに、半斤といわず、八両といわず、無と言取するなり。
空なるゆえに空といわず、無なるゆえに無といわず、仏性、空なるゆえに無という。
しかあれば、無の片片は空を道取する標榜なり、空は無を道取する力量なり。
いわゆるの空は、色即是空の空にあらず。
色即是空というは、色を強為して空とするにあらず、空をわかちて色を作家せるにあらず。
空是空の空なるべし。
空是空の空というは、空裏、一片石なり。
しかあれば、すなわち、仏性無と、仏性空と、仏性有と、四祖、五祖、問取、道取。

震旦第六祖、曹谿山、大鑑禅師、そのかみ、黄梅山に参ぜしはじめ、五祖、とう、
なんじ、いずれのところよりか、きたれる？
六祖、いわく、
嶺南人なり。
五祖、いわく、
きたりて、なにごとをか、もとむる？
六祖、いわく、
作仏をもとむ。
五祖、いわく、
嶺南人、無仏性。
いかにしてか、作仏せん？

この嶺南人、無仏性という、嶺南人は仏性なしというにあらず、嶺南人は仏性ありというにあらず、嶺南人、無仏性となり。

いかにしてか、作仏せん？　というは、いかなる作仏をか期する？　というなり。
おおよそ、仏性の道理、あきらむる先達、すくなし。
諸阿笈摩教、および、経、論師の、しるべきにあらず。
仏祖の児孫のみ単伝するなり。

仏性の道理は、仏性は成仏よりさきに具足せるにあらず、成仏よりのちに具足するなり。
仏性、かならず、成仏と同参するなり。
この道理、よくよく参究、功夫すべし。
三、二十年も功夫、参学すべし。
十聖三賢のあきらむるところにあらず。
衆生、有仏性。衆生、無仏性。と道取する、この道理なり。
成仏已来に具足する法なり、と参学する、正的なり。
かくのごとく学せざるは、仏法にあらざるべし。
かくのごとく学せずば、仏法、あえて、今日にいたるべからず。
もし、この道理あきらめざるには、成仏をあきらめず見聞せざるなり。
このゆえに、五祖は向、他、道するに、嶺南人、無仏性と為道するなり。
見仏聞法の最初に、難得難聞なるは、衆生、無仏性なり。
或、従、知識、或、従、経巻するに、きくことのよろこぶべきは、衆生、無仏性なり。
一切衆生、無仏性を見聞覚知に参飽せざるものは、仏性、いまだ見聞覚知せざるなり。
六祖、もっぱら作仏をもとむるに、五祖よく六祖を作仏せしむるに、他の道取なし、善巧なし。
ただ嶺南人、無仏性という。
しるべし、無仏性の道取、聞取、これ、作仏の直道なり、ということを。
しかあれば、無仏性の正当恁麼時、すなわち、作仏なり。
無仏性、いまだ見聞せず、道取せざるは、いまだ作仏せざるなり。

六祖、いわく、人、有、南北なりとも、仏性、無、南北なり。
この道取を挙して、句裏を功夫すべし。
南北の言、まさに、赤心に照顧すべし。
六祖、道得の句に宗旨あり。
いわゆる、人は作仏すとも、仏性は作仏すべからず、という一隅の搆得あり。
六祖、これをしるや？　いなや？
四祖、五祖の道取する無仏性の道得、はるかに罣礙の力量ある一隅をうけて、迦葉仏、および、釈迦牟尼仏、等の諸仏は作仏し転法するに、悉、有、仏性と道取する力量あるなり。
悉、有の有、なんぞ無無の無に嗣法せざらん？
しかあれば、無仏性の語、はるかに四祖、五祖の室より、きこゆるなり。
このとき、六祖、その人ならば、この無仏性の語を功夫すべきなり。

有無の無は、しばらくおく、いかならんか、これ、仏性？　と問取すべし、なにものか、これ、仏性？　とたずぬべし。
いまの人も、仏性とききぬれば、さらに、いかなるか、これ、仏性？　と問取せず、仏性の有無、等の義をいうがごとし。
これ、倉卒なり。
しかあれば、諸無の無は、無仏性の無に学すべし。
六祖の道取する人、有、南北。仏性、無、南北。の道、ひさしく再三、撈摝すべし。
まさに、撈波子に力量あるべきなり。
六祖の道取する人、有、南北。仏性、無、南北。の道、しずかに拈放すべし。
おろかなるやから、おもわくは、人間には質礙すれば、南北あれども、仏性は虚融にして南北の論におよばずと六祖は道取せりけるか？　と推度するは、無分の愚蒙なるべし。
この邪解を抛却して、直須、勤学すべし。

六祖、示、門人、行昌、云、
無常、者、即、仏性、也。
有常、者、即、善悪一切諸法分別心、也。

いわゆる、六祖、道の無常は、外道、二乗、等の測度にあらず。
二乗、外道の鼻祖鼻末、それ、無常なりというとも、かれら、窮尽すべからざるなり。
しかあれば、無常の、みずから無常を説著、行著、証著せんは、みな、無常なるべし。
今、以、現、自身、得度者、即、現、自身、而、為、説法なり。
これ、仏性なり。
さらに、或、現、長法身、或、現、短法身なるべし。
常、聖、これ、無常なり。
常、凡、これ、無常なり。
常、凡、聖ならんは、仏性なるべからず。
小量の愚見なるべし。
測度の管見なるべし。
仏、者、小量身、也。
性、者、小量、作、也。
このゆえに、六祖、道取す、無常、者、仏性、也。
常、者、未転なり。

未転というは、たとえ能断と変ずとも、たとえ所断と化すれども、かならずしも去来の蹤跡にかかわれず、ゆえに、常なり。
しかあれば、草木、叢林の無常なる、すなわち、仏性なり。
人物、身心の無常なる、これ、仏性なり。
国土、山河の無常なる、これ、仏性なるによりてなり。
阿耨多羅三藐三菩提、これ、仏性なるがゆえに、無常なり。
大般涅槃、これ、無常なるがゆえに、仏性なり。
もろもろの二乗の小見、および、経、論師の三蔵、等は、この六祖の道を驚疑、怖畏すべし。
(もし)驚疑せんことは、魔、外の類なり。

第十四祖、龍樹、尊者、
梵、云、那伽閼刺樹那。
唐、云、龍樹、亦、龍勝、亦、云、龍猛。
西天竺国人、也。

至、南天竺国。
彼国之人、多、信、福業。
尊者、為、説、妙法。

聞者、遞相、謂、曰、
人、有、福業、世間第一。
徒、言、仏性、誰、能、覩、之？

尊者、曰、
汝、欲、見、仏性、先、須、除、我慢。

彼人、曰、
仏性、大、耶？　小、耶？

尊者、曰、
仏性、
非、大。非、小。
非、広。非、狭。
無、福。無、報。
不死不生。

彼、聞、理、勝、悉、回、初心。
尊者、復、於、座上、現、自在身、如、満月輪。
一切衆会、唯聞、法音、不覩、師相。

於、彼衆中、有、長者子、迦那提婆、謂、衆会、曰、
識、此相？　否？

衆会、曰、
而今、我等、目所、未見、耳所、未聞、心、無所、識、身、無所、住。

提婆、曰、
此、是、尊者、現、仏性相、以、示、我等。
何、以、知、之？
蓋、以、無相三昧、形、如、満月。
仏性之義、廓然、虚明。

言、訖、輪相、即、隠、復、居、本座、而、説、偈、言、
身、現、円月相。
以、表、諸仏、体。
説法、無、其形。
用弁、非、声色。

しるべし。
真箇の用弁は声色の即、現にあらず。
真箇の説法は無、其形なり。

尊者、かつて、ひろく仏性を為説する、不可数量なり。
いまは、しばらく、一隅を略挙するなり。

汝、欲、見、仏性、先、須、除、我慢。
この為説の宗旨、すごさず弁肯すべし。
見は、なきにあらず。
その見、これ、除、我慢なり。
我も、ひとつにあらず、慢も多般なり。
除法、また、万差なるべし。
しかあれども、これら、みな、見、仏性なり。
眼、見、目、覩にならうべし。

仏性、非、大。非、小。等の道取、よのつねの凡夫、二乗に例諸することなかれ。
偏枯に、仏性は広大ならん、とのみおもえる邪念をたくわえきたるなり。
大にあらず、小にあらざらん正当恁麼時の道取に罣礙せられん道理、いま、聴取するがごとく思量すべきなり。
思量なる聴取を使得するがゆえに。
しばらく、尊者の道著する偈を聞取すべし。
いはゆる、身、現、円月相。以、表、諸仏、体。なり。
すでに諸仏、体を以、表しきたれる身、現なるがゆえに、円月相なり。
しかあれば、一切の長短、方、円、この身、現に学習すべし。
身と現とに転、疎なるは、円月相にくらきのみにあらず、諸仏、体にあらざるなり。
愚者、おもわく、尊者、かりに化身を現せるを円月相という、とおもうは、仏道を相承せざる党類の邪念なり。
いずれのところの、いずれのときか、非身の他現( or 化現)ならん？
まさに、しるべし。
このとき、尊者は高座せるのみなり。
身、現の儀は、いまの、だれ人も坐せるがごとくありしなり。
この身、これ、円月相、現なり。
身、現は方、円にあらず、有無にあらず、隠、顕にあらず、八万四千蘊にあらず、ただ身、現なり。
円月相という、這裏、是、甚麼、所在、説、細、説、麤月？　なり。
この身、現は、先、須、除、我慢なるがゆえに、龍樹にあらず、諸仏、体なり。
以、表するがゆえに、諸仏、体を透脱す。
しかあるがゆえに、仏辺にかかわれず。
仏性の満月を形、如する虚明ありとも、円月相を排列するにあらず。
いわんや、用弁も声色にあらず、身、現も色身にあらず、蘊処界にあらず。
蘊処界に一似なりといえども、以、表なり、諸仏、体なり。
これ、(説)法蘊なり。それ、無、其形なり。
無、其形、さらに、無相三昧なるとき、身、現なり。
一衆、いま、円月相を望見すといえども、目所、未見なるは、説法蘊の転機なり。
現、自在身の、非、声色なり。
即、隠、即、現は、輪相の進歩、退歩なり。

復、於、座上、現、自在身の正当恁麼時は、一切衆会、唯聞、法音するなり、不覩、師相なるなり。
尊者の嫡嗣、迦那提婆、尊者、あきらかに満月相を識、此し、円月相を識、此し、身、現を識此し、諸仏性を識、此し、諸仏、体を識此せり。
入室、瀉瓶の衆、たとえ、おおしといえども、提婆と斉肩ならざるべし。
提婆は半座の尊なり、衆会の導師なり、全座の分座なり、正法眼蔵、無上大法を正伝せること、霊山に摩訶迦葉尊者の座元なりしがごとし。
龍樹、未回心のさき、外道の法にありしときの弟子、おおかりしかども、みな、謝遣しきたれり。
龍樹、すでに仏祖となれりしときは、ひとり提婆を付法の正嫡として、大法眼蔵を正伝す。
これ、無上仏道の単伝なり。
しかあるに、僭偽の邪群、ままに自称すらく、われらも龍樹大士の法嗣なり。
論をつくり、義をあつむる、おおく、龍樹の手をかれり、龍樹の造にあらず。
むかし、すてられし群徒の、人、天を惑乱するなり。
仏弟子は、ひとすじに、提婆の所伝にあらざらんは龍樹の道にあらず、としるべきなり。
これ、正信、得及なり。
しかあるに、偽なりとしりながら稟受するもの、おおかり。
謗、大般若の衆生の愚蒙、あわれみ、かなしむべし。
迦那提婆、尊者、ちなみに、龍樹尊者の身、現をさして衆会につげて、いわく、
此、是、尊者、現、仏性相、以、示、我等。
何、以、知、之？
蓋、以、無相三昧、形、如、満月。
仏性之義、廓然、虚明。
なり。
いま、天上、人間、大千法界に流布せる仏法を見聞せる前後の皮袋、だれが道取せる？　身、現、相は仏性なり、と。
大千界には、ただ提婆、尊者のみ道取せるなり。
余者は、ただ、仏性は眼見、耳聞、心識、等にあらずとのみ道取するなり。
身、現は仏性なり、としらざるゆえに、道取せざるなり。
祖師の、おしむにあらざれども、眼、耳、ふさがれて、見聞すること、あたわざるなり。
身識、いまだ、おこらずして、了別すること、あたわざるなり。

無相三昧の形、如、満月なるを望見し礼拝するに、目、未、所、覩なり。
仏性之義、廓然、虚明なり。
しかあれば、身、現の説、仏性なる、虚明なり、廓然なり。
説、仏性の身、現なる、以、表、諸仏、体なり。
いずれの一仏、二仏か、この以、表を仏、体せざらん。
仏、体は身、現なり。
身、現なる仏性あり。
四大、五蘊と道取し会取する仏量祖量も、かえりて、身、現の造次なり。
すでに諸仏、体という。
蘊処界の、かくのごとくなるなり。
一切の功徳、この功徳なり。
仏功徳は、この身、現を究尽し、嚢括するなり。
一切、無量、無辺の功徳の往来は、この身、現の一造次なり。
しかあるに、龍樹、提婆、師資よりのち、三国の諸方にある、前代後代、ままに仏学する人物、いまだ龍樹、提婆のごとく道取せず。
いくばくの経師。論師、等が、仏祖の道を蹉過する？
大宋国、むかしより、この因縁を画せんとするに、身に画し、心に画し、空に画し、壁に画すること、あたわず。
いたずらに筆頭に画するに、法座上に如、鏡なる一輪相を図して、いま、龍樹の身、現、円月相とせり。
すでに数百歳の霜華も開、落して、人眼の金屑をなさんとすれども、あやまる、という人なし。
あわれむべし。
万事の蹉、跎たること、かくのごときなる。
もし身、現、円月相は一輪相なりと会取せば、真箇の画餅一枚なり。
弄他せん。
笑、也。
笑、殺、人なるべし。
かなしむべし、大宋一国の在家、出家、いずれの一箇も、龍樹のことばをきかず、しらず、提婆の道を通ぜず、みざること。
いわんや、身、現に親切ならんや？
円月にくらし、満月を虧闕せり。
これ、稽古のおろそかなるなり、慕古、いたらざるなり。
古仏、新仏、さらに真箇の身、現にあうて、画餅を賞翫することなかれ。
しるべし。

身、現、円月相の相を画せんには、法座上に身、現、相あるべし。
揚眉瞬目、それ、端直なるべし。
皮肉骨髄、正法眼蔵、かならず、兀坐すべきなり。
破顔微笑、つたわるべし。
作仏作祖するがゆえに。
この画、いまだ月相ならざるには、形、如なし、説法せず、声色なし、用弁なきなり。
もし身、現をもとめば、円月相を図すべし。
円月相を図せば、円月相を図すべし。
身、現、円月相なるがゆえに。
円月相を画せんとき、満月相を図すべし、満月相を現すべし。
しかあるを、身、現を画せず、円月を画せず、満月相を画せず、諸仏、体を図せず、以、表を体せず、説法を図せず、いたずらに画餅一枚を図す、用、作什麼？
これを急著眼看せん。
だれが直、至、如今、不飢ならん？
月は円形なり。
円は身、現なり。
円を学するに一枚銭のごとく学することなかれ、一枚餅に相似することなかれ。
身、相、円月身なり、形、如、満月形なり。
一枚銭、一枚餅は、円に学習すべし。

予、雲遊の、そのかみ、大宋国にいたる。
嘉定十六年癸未、秋のころ、はじめて阿育王山、広利禅寺にいたる。
西廊、壁間に、西天、東地、三十三祖の変相を画せるをみる。
このとき、領覧なし。

のちに、宝慶元年乙酉、夏安居のなかに、かさねていたるに、西蜀の成桂、知客と廊下を行歩するついでに、予、知客に、とう、
這箇、是、什麼、変相？
知客、いわく、
龍樹、身、現、円月相。

かく道取する顔色に鼻孔なし。
声裏に語句なし。

予、いわく、
真箇、是、一枚画餅、相似。

ときに、知客、大笑すといえども、笑裏、無、刀、破、画餅、不得なり。
すなわち、知客と予と、舎利殿、および、六殊勝地、等にいたるあいだ、数番、挙揚すれども、疑著するにもおよばず。
おのずから下語する僧侶も、おおく、都、不是なり。
予、いわく、
堂頭に、とうてみん。

ときに、堂頭は大光和尚なり。
知客、いはく、
佗(かれ)、無、鼻孔。
対、不得。
如何、得、知？

ゆえに、光、老に、とわず。
恁麼、道取すれども、桂、兄も会すべからず。
聞、説する皮袋も、道取せる、なし。
前後の粥飯頭、みるに、あやしまず、あらため、なおさず。
また、画すること、うべからざらん法は、すべて、画せざるべし。
画すべくば、端直に画すべし。
しかあるに、身、現の円月相なる、かつて画せる、なきなり。
おおよそ、仏性は、いまの慮知念覚ならん、と見解すること、さめざるによりて、有仏性の道にも、無仏性の道にも、通達の端を失せるがごとくなり。
道取すべき、と学習するも、まれなり。
しるべし。
この疎怠は廃せるによりてなり。
諸方の粥飯頭、すべて、仏性という道得を、一生いわずして、やみぬるも、あるなり。
あるいは、いう、聴教のともがら仏性を談ず、参禅の雲衲はいうべからず。
かくのごとくのやからは、真箇、是、畜生なり。
なにという魔党の、わが仏、如来の道にまじわり、けがさんとするぞ！
聴教ということの、仏道にあるか？
参禅ということの、仏道にあるか？
いまだ聴教、参禅ということ、仏道には、なし、としるべし。

杭州、塩官県、斉安国師は、馬祖下の尊宿なり。
ちなみに、衆に、しめして、いわく、
一切衆生、有、仏性。

いわゆる、一切衆生の言、すみやかに参究すべし。
一切衆生、その業道、依正、ひとつにあらず、その見、まちまちなり。
凡夫、外道、三乗、五乗、等、おのおのなるべし。
いま、仏道にいう一切衆生は、有心者みな、衆生なり。
心、是、衆生なるがゆえに。
無心者、おなじく、衆生なるべし。
衆生、是、心なるがゆえに。
しかあれば、心みな、これ、衆生なり。
衆生みな、これ、有仏性なり。
草木、国土、これ、心なり。心なるがゆえに、衆生なり。衆生なるがゆえに、有仏性なり。
日月星辰、これ、心なり、心なるがゆえに、衆生なり。衆生なるがゆえに、有仏性なり。
国師の道取する有仏性、それ、かくのごとし。
もし、かくのごとくにあらずば、仏道に道取する有仏性にあらざるなり。
いま、国師の道取する宗旨は、一切衆生、有仏性のみなり。
さらに、衆生にあらざらんは、有仏性にあらざるべし。
しばらく、国師に、とうべし、
一切諸仏、有仏性、也？　無？

かくのごとく問取し試験すべきなり。
一切衆生、即、仏性といわず、一切衆生、有仏性という、と参学すべし。
有仏性の有、まさに、脱落すべし。
脱落は一条鉄なり。
一条鉄は鳥道なり。
しかあれば、一切仏性、有、衆生なり。
これ、その道理は、衆生を説透するのみにあらず、仏性をも説透するなり。
国師、たとえ会得を道得に承当せずとも、承当の期、なきにあらず。
今日の道得、いたずらに宗旨なきにあらず。
また、自己に具する道理、いまだ、かならずしも、みずから会取せざれども、四大、五陰もあり、皮肉骨髄もあり。

しかあるがごとく、道取も、一生に道取することもあり、道取にかかれる生生もあり。

大潙山、大円禅師、あるとき、衆にしめして、いわく、
一切衆生、無、仏性。

これをきく人、天のなかに、よろこぶ大機あり、驚疑のたぐいなきにあらず。
釈尊の説道は、一切衆生、悉、有、仏性なり。
大潙の説道は、一切衆生、無、仏性なり。
有無の言理、はるかにことなるべし。
道得の当、不、うたがいぬべし。
しかあれども、一切衆生、無、仏性のみ仏道に長なり。
塩官、有仏性の道、たとえ古仏とともに一隻の手をいだすににたりとも、なお、これ、一条拄杖、両人、舁なるべし。
いま、大潙は、しかあらず。一条拄杖、呑、両人なるべし。
いわんや、国師は馬祖の子なり、大潙は馬祖の孫なり。
しかあれども、法孫は師翁の道に老大なり、法子は師父の道に年少なり。
いま、大潙、道の理致は、一切衆生、無仏性を理致とせり。
いまだ曠然、縄墨外といわず。
自家屋裏の経典、かくのごとくの受持あり。
さらに模索すべし。
一切衆生、なにとしてか、仏性ならん？　仏性あらん？
(もし)仏性あるは、これ、魔党なるべし。
魔子一枚を将来して、一切衆生にかさねんとす。
仏性、これ、仏性なれば、衆生、これ、衆生なり。
衆生、もとより仏性を具足せるにあらず。
たとえ、具せん、と、もとむとも、仏性、はじめて、きたるべきにあらざる宗旨なり。
張公、喫、酒、李公、酔ということなかれ。
もし、おのずから仏性あらんは、さらに、衆生にあらず。
すでに衆生あらんは、ついに、仏性にあらず。
このゆえに、百丈いわく、
説、衆生有仏性、亦、謗、仏法僧。
説、衆生無仏性、亦、謗、仏法僧。

しかあれば、すなわち、有仏性といい、無仏性という、ともに謗となる。

謗となるというとも、道取せざるべきにはあらず。
且、問、爾、大潙、百丈、しばらく、きくべし。
謗は、すなわち、なきにあらず。
仏性は説得すや？　いまだしや？
たとえ説得せば、説著を罣礙せん。
説著あらば、聞著と同参なるべし。
また、大潙にむかいて、いうべし。
一切衆生、無仏性は、たとえ道得すというとも、一切仏性、無衆生といわず、
一切仏性、無仏性といわず、いわんや、一切諸仏、無仏性は夢也未見在なり。
試、挙看。

百丈山、大智禅師、示、衆、云、
仏、
是、最上乗。
是、上上智。
是、仏道、立、此人。
是、仏、有、仏性。
是、導師。

是、使得、無所礙、風。
是、無礙慧。
於、後、能、使得、因果、福智、自由。
是、作、車、運載、因果。
処、於、生、不被、生之所留。
処、於、死、不被、死之所礙。
処、於、五陰、如、門、開、不被、五陰礙。
去住、自由、出入、無難。
若、能、恁麼、不論、階梯、勝劣。
乃至、蟻子之身、但、能、恁麼、尽、是、浄妙国土、不可思議。

これ、すなわち、百丈の道所なり。
いわゆる、五蘊は、いまの不壊身なり。
いまの造次は門、開なり、不被、五陰礙なり。
生を使得するに生にとどめられず、死を使得するに死にさえられず。
いたずらに生を愛することなかれ。
みだりに死を恐怖することなかれ。

すでに仏性の所在なり。
動著し厭却するは外道なり。
現前の衆縁と認ずるは使得、無礙、風なり。
これ、最上乗なる、是、仏なり。
この、是、仏の所在、すなわち、浄妙国土なり。

黄檗、在、南泉、茶堂内、坐。
南泉、問、黄檗、
定、慧、等、学、明、見、仏性。此理、如何？
黄檗、曰、
十二時中、不依倚、一物、始、得。
南泉、云、
莫、便、是、長老、見所、麼？
黄檗、曰、
不敢。
南泉、云、
醤水銭、且、致。草鞋銭、教、什麼人、還。
(黄檗、便、休。)

いわゆる、定、慧、等、学の宗旨は、
定学の慧学をさえざれば、等、学するところに明、見、仏性のあるにはあらず。
明、見、仏性のところに、定、慧、等、学の学あるなり。
此理、如何？と道取するなり。
たとえば、明、見、仏性は、だれが所作なるぞ？　と道取せんも、おなじかるべし。
仏、性、等、学、明、見、仏性。此理、如何？　と道取せんも道得なり。

黄檗、いわく、十二時中、不依倚、一物？　(と)いう宗旨は、
十二時中、たとえ十二時中に所在せりとも、不依倚なり。
不依倚、一物、これ、十二時なるがゆえに、仏性、明、見なり。
この十二時中、いずれの時節、到来なりとかせん？　いずれの国土なりとかせん？
いま、いう十二時は、人間の十二時なるべきか？　他那裏に十二時のあるか？　白銀世界の十二時の、しばらく、きたれるか？
たとえ此土なりとも、たとえ他界なりとも、不依倚なり。

すでに十二時中なり、不依倚なるべし。
莫、便、是、長老、見所、麼？　というは、これを見所とは、いうまじや？　というがごとし。
長老、見所、麼？　と道取すとも、自己なるべし、と回頭すべからず。
自己に的当なりとも、黄檗にあらず。
黄檗、かならずしも自己のみにあらず。
長老、見所は露回回なるがゆえに。

黄檗、いわく、不敢。
この言は、宋土に、おのれにある能を問取せらるるには、能を能といわんとても、不敢というなり。
しかあれば、不敢の道は不敢にあらず。
この道得は、この道取なること、はかるべきにあらず。
長老、見所、たとえ長老なりとも、長老、見所たとえ黄檗なりとも、道取するには不敢なるべし。
一頭、水牛、出来、道、吽吽なるべし。
かくのごとく道取するは、道取なり。
道取する宗旨、さらにまた道取なる道取、こころみに道取してみるべし。

南泉、いわく、醤水銭、且、致。草鞋銭、教、什麼人、還。
いわゆるは、こんず、のあたいは、しばらくおく。草鞋のあたいは、だれをしてか、かえさしめん、となり。
この道取の意旨、ひさしく、生生をつくして参究すべし。
醤水銭、いかなればか、しばらく不管なる？　留心、勤学すべし。
草鞋銭、なにとしてか、管得する？
行脚の年月に、いくばくの草鞋をか、踏破しきたれる？　となり。
いま、いうべし、
若、不還、銭、未、著、草鞋。
また、いうべし、
両、三輪。
この道得なるべし、この宗旨なるべし。

黄檗、便、休。
これは休するなり。
不肯せられて休し、不肯にて休するにあらず。
本色衲子、しかあらず。

しるべし。
休裏、有、道は、笑裏、有、刀のごとくなり。
これ、仏性、明、見の粥足飯足なり。

この因縁を挙して、潙山、仰山に、とうて、いわく、
莫、是、黄檗、搆、彼南泉、不得、麼？
仰山、いわく、
不然。須、知、黄檗、有、陥虎之機。
潙山、いわく、
子、見所、得、恁麼、長。

大潙の道は、そのかみ、黄檗は南泉を搆、不得なりや？　という。
仰山、いわく、黄檗は陥、虎の機あり。
すでに陥、虎することあらば、捋、虎頭なるべし。
陥、虎、捋、虎、異類中行。
明、見、仏性、也、開、一隻眼。
仏性、明、見、也、失、一隻眼。
速、道。
速、道。
仏性、見所、得、恁麼、長？
なり。
このゆえに、半物、全物、これ、不依倚なり。
百、千物、不依倚なり。
百、千時、不依倚なり。
このゆえに、いわく、
羅籠、一枚。
時中、十二。
依倚、不依倚、如、葛藤、倚、樹。
天中、及、全天、後頭、未有語。
なり。

趙州真際大師に、ある僧、とう、
狗子、還、有仏性、也？(　無？)

この問の意趣、あきらむべし。
狗子とは、いぬなり。

かれに仏性あるべしと問取せず、なかるべしと問取するにあらず。
これは、鉄漢、また学道するか？　と問取するなり。
あやまりて毒手にあう、うらみふかしといえども、三十年より、このかた、さらに半箇の聖人をみる風流なり。

趙州いわく、無。

この道をききて、習学すべき方路あり。
仏性の自称する無も恁麼、道なるべし。
狗子の自称する無も恁麼、道なるべし。
傍観者の喚、作の無も恁麼、道なるべし。
その無、わずかに消石の日あるべし。

僧、いわく、
一切衆生、皆、有、仏性。
狗子、為、甚麼、無？

いわゆる宗旨は、一切衆生、無ならば、仏性も無なるべし、狗子も無なるべしという、その宗旨、作麼生？　となり。
狗子、仏性、なにとして無をまつことあらん？

趙州、いわく、
為、他、有、業識、在。

この道旨は、為、他、有は業識なり。
業識、有、為、他、有なりとも、狗子、無、仏性、無なり。
業識、いまだ狗子を会せず。
狗子、いかでか、仏性にあわん？
たとえ双放、双収すとも、なお、これ、業識の始終なり。

趙州、有、僧、問、
狗子、還、有、仏性、也？　無？
この問取は、この僧、搆得、趙州の道理なるべし。
しかあれば、仏性の道取、問取は、仏祖の家常茶飯なり。

趙州、いわく、
有。

この有の様子は、教家の論師、等の有にあらず、有部の論有にあらざるなり。
すすみて仏有を学すべし。
仏有は趙州有なり。
趙州有は狗子有なり。
狗子有は仏性有なり。

僧、いはく、
既、有、為、甚麼、却、撞入、這皮袋？

この僧の道得は、今有なるか？　古有なるか？　既有なるか？　と問取するに、既有は諸有に相似せりというとも、既有は孤明なり。
既有は撞入すべきか？　撞入すべからざるか？
撞入、這皮袋の行履、いたずらに蹉過の功夫あらず。

趙州、いわく、
為、佗(かれ)、知、而、故、犯。

この語は、世俗の言語として、ひさしく途中に流布せりといえども、いまは、趙州の道得なり。
いうところは、しりて、ことさら、おかす、となり。
この道得は、疑著せざらん、すくなかるべし。
いま一字の入、あきらめがたしといえども、入之一字も不用得なり。
いわんや、欲、識、庵中、不死人、豈、離、只今、這皮袋なり。
不死人は、たとえ阿誰なりとも、いずれのときか、皮袋に莫、離なる？
故、犯は、かならずしも入、皮袋にあらず。
撞入、這皮袋、かならずしも知、而、故、犯にあらず。
知、而のゆえに、故、犯あるべきなり。
しるべし。
この故、犯、すなわち、脱体の行履を覆蔵せるならん。
これ、撞入と説著するなり。
脱体の行履、その正当覆蔵のとき、自己にも覆蔵し、他人にも覆蔵す。
しかも、かくのごとくなりといえども、いまだ、のがれず、ということなかれ。
驢前、馬後、漢。

いわんや、雲居高祖、いわく、

たとえ仏法、辺、事を学得する、はやく、これ、錯用、心、了、也。

しかあれば、半枚学仏法辺事、ひさしく、あやまりきたること、日深月深なりといえども、これ、這皮袋に撞入する狗子なるべし。
知、而、故、犯なりとも、有仏性なるべし。

長沙景岑和尚の会に、竺尚書、とう、
蚯蚓、斬、為、両段、両頭、倶、動。未審、仏性、在、阿那箇頭？
師、云、
莫、妄想。
書、曰、
爭奈、動、何？
師、云、
只是、風、火、未散。

いま、尚書、いわくの蚯蚓、斬、為、両段は、未斬時は一段なりと決定するか？
仏祖の家常に不、恁麼なり。
蚯蚓、もとより一段にあらず、蚯蚓きれて両段にあらず。
一、両の道取、まさに、功夫、参学すべし。
両頭、倶、動という両頭は、未斬よりさきを一頭とせるか？　仏向上を一頭とせるか？
両頭の語、たとえ尚書の会、不会にかかわるべからず。
語話をすつることなかれ。
きれたる両段は一頭にして、さらに一頭の、あるか？
その動というに倶、動という、定動智抜ともに動なるべきなり。

未審、仏性、在、阿那箇頭？
仏性、斬、為、両段、未審、蚯蚓、在、阿那箇頭？　というべし。
この道得は審細にすべし。
両頭、倶、動。仏性、在、阿那箇頭？　というは、倶、動ならば、仏性の所在に不堪なりというか？
倶、動なれば、動は、ともに動ずというとも、仏性の所在は、そのなかに、いずれなるべきぞ？　というか？

師、いはく、莫、妄想。

この宗旨は、作麼生なるべきぞ？
妄想することなかれ、というなり。
しかあれば、両頭、倶、動ずるに、妄想なし、妄想にあらず、というか？
ただ、仏性は妄想なし、というか？
仏性の論におよばず、両頭の論におよばず、ただ、妄想なし、と道取するか？　とも参究すべし。

動ずるは、いかがせん？　というは、動ずれば、さらに仏性、一枚をかさぬべし、と道取するか？
動ずれば、仏性にあらざらん、と道著するか？

風、火、未散というは、仏性を出現せしむるなるべし。
仏性なりとやせん？
風、火なりとやせん？
仏性と風、火と、倶、出づ、というべからず、一出、一不出、というべからず。風、火、すなわち、仏性、というべからず。
ゆえに、長沙は蚯蚓、有仏性といわず、蚯蚓、無仏性といわず。
ただ莫、妄想と道取す。
風、火、未散と道取す。
仏性の活計は、長沙の道を卜度すべし。
風、火、未散という言語、しずかに功夫すべし。
未散というは、いかなる道理か、ある？
風、火のあつまれりけるが、散ずべき期いまだしき、と道取するに、未散というか？
しかあるべからざるなり。
風、火、未散は、ほとけ、法をとく。
未散、風、火は、法、ほとけをとく。
たとえば、一音の法をとく時節、到来なり。
説法の一音なる到来の時節なり。
法は一音なり。一音の法なるゆえに。
また、仏性は生のときのみにありて、死のときは、なかるべし、とおもう、もっとも少聞薄解なり。
生のときも、有仏性なり、無仏性なり。
死のときも、有仏性なり、無仏性なり。
風、火の散、未散を論ずることあらば、仏性の散、不散なるべし。
たとえ散のときも、仏性有なるべし、仏性無なるべし。

たとえ未散のときも、有仏性なるべし、無仏性なるべし。
しかあるを、仏性は動、不動によりて在、不在し、識、不識によりて神、不神なり、知、不知に性、不性なるべき、と邪執せるは外道なり。
無始劫来は、痴人、おおく、識、神を認じて仏性とせり、本来人とせる。
笑、殺、人なり。
さらに仏性を道取するに、拕泥帯水なるべきにあらざれども、牆壁、瓦礫なり。
向上に道取するとき、作麼生ならんか、これ、仏性？
還、委、悉、麼、三頭八臂。

正法眼蔵　仏性
爾時、仁治二年辛丑、十月十四日、在、雍州、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 行仏威儀

諸仏、かならず、威儀を行足す。
これ、行仏なり。
行仏、それ、
報仏にあらず。
化仏にあらず。
自性身仏にあらず。
他性身仏にあらず。
始覚、本覚にあらず。
性覚、無覚にあらず。
如是等仏、たえて行仏に斉肩すること、うべからず。
しるべし。
諸仏の仏道にある、覚をまたざるなり。
仏向上の道に行履を通達せること、唯、行仏のみなり。
自性仏等、夢也未見在なるところなり。
この行仏は、頭頭に威儀、現成するゆえに、身前に威儀、現成す、道前に化機、漏泄すること、亙時なり、亙方なり、亙仏なり、亙行なり。
行仏にあらざれば、仏縛、法縛、いまだ解脱せず、仏魔、法魔に党類せらるるなり。
仏縛というは、菩提を菩提と知見、解会する、即、知見、即、解会に即、縛せられぬるなり。
一念を経歴するに、なお、いまだ解脱の期を期せず、いたずらに錯解す。
菩提を、すなわち、菩提なりと見解せん、これ、菩提、相応の知見なるべし。
だれが、これを邪見といわん？　想憶す、これ、すなわち、無縄自縛なり。
縛縛、綿綿として樹、倒、藤、枯にあらず。
いたずらに仏辺の窠窟に活計せるのみなり。
法身の、やまうをしらず。
報身の窮をしらず。
教家、(経師、)論師、等の仏道を遠聞せる、なおし、いわく、
即、於、法性、起、法性見、即是、無明。

この教家の、いわくは、法性に法性の見おこるに、法性の縛をいわず、さらに無明の縛をかさぬ。
法性の縛、あることをしらず。

あわれむべしといえども、無明縛のかさなれるをしれるは、発菩提心の種子となりぬべし。
いま、行仏、かつて、かくのごとくの縛に縛せられざるなり。
かるがゆえに、我、本、行、菩薩道。所成、寿命、今猶、未尽、復、倍、上数なり。
しるべし。
菩薩の寿命、いまに連綿とあるにあらず、仏寿命の過去に布遍せるにあらず。
いま、いう、上数は、全所成なり。
いいきたる、今猶は、全寿命なり。
我、本、行、たとえ万里、一条鉄なりとも、百年、抛却、任、縦横なり。
しかあれば、すなわち、
修、証は無にあらず。
修、証は有にあらず。
修、証は染汚にあらず。
無仏、無人の所在に百、千、万ありといえども、行仏を染汚せず。
ゆえに、行仏の修、証に染汚せられざるなり。
修、証の不染汚なるにはあらず。
この不染汚、それ、不無なり。

曹谿、いわく、
祗、此不染汚、是、諸仏之所護念。
汝、亦、如是。
吾、亦、如是。
乃至、西天、諸祖、亦、如是。

しかあれば、すなわち、汝、亦、如是のゆえに諸仏なり(、吾、亦、如是のゆえに諸仏なり)。
まことに、われにあらず、なんじにあらず。
この不染汚に、
如、吾、是、吾、諸仏所護念、これ、行仏、威儀なり。
如、汝、是、汝、諸仏所護念、これ、行仏、威儀なり。
吾、亦のゆえに、師勝なり。
汝、亦のゆえに、資強なり。
師勝資強、これ、行仏の明、行足なり。
しるべし。
是、諸仏之所護念と、吾、亦なり、汝、亦なり。

曹谿古仏の道得、たとえ、われにあらずとも、なんじにあらざらんや？
行仏之所護念、行仏之所通達、それ、かくのごとし。
かるがゆえに、しりぬ。
修、証は性、相、本末、等にあらず。
行仏の去就、これ、果然として仏を行ぜしむるに、仏、すなわち、行ぜしむ。
ここに( or さらに)、
為、法、捨、身あり。
(為、身、捨、法あり。)
不惜、身命あり( or なり)。
但惜、身命あり( or なり)。
法のために法をすつるのみにあらず、心のために法をすつる威儀あり。
捨は、無量なること、わするべからず。
仏量を拈来して大道を測量し度量すべからず。
仏量は一隅なり。
たとえば、華開のごとし。
心量を挙来して威儀を摸索すべからず、擬議すべからず。
心量は一面なり。
たとえば、世界のごとし。
一茎草量、あきらかに、仏祖心量なり。
これ、行仏の蹤跡を認ぜる( or 認ずる)一片なり。
一心量、たとえ無量仏量を包含せりと見徹すとも、行仏の容止動静を量せんと擬するには、もとより、過量の面目あり。
過量の行履なるがゆえに、即、不中なり、使、不得なり、量、不及なり。
しばらく、行仏威儀に一究あり。
即、仏、即、自と恁麼来せるに、吾、亦、汝、亦の威儀、それ、唯、我、能にかかわれりというとも、すなわち、十方仏然の脱落、これ、同条のみにあらず。
かるがゆえに、
古仏、いわく、
体取、那辺事、却、来、這裏、行履。

すでに恁麼、保任するに、諸法、諸身、諸行、諸仏、これ、親切なり。
この行法身仏、おのおの承当に罣礙あるのみなり。
承当に罣礙あるがゆえに、承当に脱落あるのみなり。
眼礙の明明百草頭なる、不見、一法。不見、一物。と動著することなかれ。
這法に若、至なり、那法に若、至なり。

拈来拈去、出入同門に行履する、遍界、不曾蔵なるがゆえに、世尊の密語、密証、密行、密付、等あるなり。
出門、便是、草。入門、便是、草。万里、無寸、草。(なり。)
入之一字、出之一字、這頭、也、不用得、那頭、也、不用得。なり。
いまの把捉は放行をまたざれども、これ、夢幻、空華なり。
だれが、これを夢幻、空華と将錯就錯せん。
進歩、也、錯。退歩、也、錯。一歩、也、錯。両歩、也、錯。なるがゆえに錯錯なり。
天地懸隔するがゆえに至道、無難なり。
威儀、儀威。大道体寛と究竟すべし。
しるべし。
出生、合道、出なり。
入死、合道、入なり。
その頭正尾正に玉転珠回の威儀、現前するなり。
仏威儀の一隅を遣有するは尽乾坤大地なり尽生死去来なり、塵刹なり、蓮華なり。
(これ、)塵刹、蓮華、おのおの一隅なり。
学人、おおく、おもわく、尽乾坤というは、この南瞻部洲をいうならん、と擬せられ、また、この一四洲をいうならん、と擬せられ、ただ、また、神丹一国、おもいにかかり、日本一国、おもいにめぐるがごとし。
また、尽大地というも、ただ三千大千世界、とおもうがごとし、わずかに一洲、一県をおもいにかくるがごとし。
尽大地、尽乾坤の言句を参学せんこと、三次、五次もおもいめぐらすべし、ひろきにこそは、とて、やみぬることなかれ。
この得道は極大同小、極小同大の超仏越祖なるなり。
大の有にあらざる、小の有にあらざる、疑著ににたりといえども、威儀行仏なり。
仏仏、祖祖の道取する尽乾坤の威儀、尽大地の威儀、ともに、不曾蔵を遍界と参学すべし。
遍界、不曾蔵なるのみには、あらざるなり。
これ、行仏一中の威儀なり。
仏道を説著するに、胎生、化生、等は仏道の行履なりといえども、いまだ湿生、卵生、等を道取せず。
いわんや、この胎卵湿化生のほかに、なお生あること、夢也未見在なり。

いかに、いわんや、胎卵湿化生のほかに、胎卵湿化生あることを見聞覚知せんや？
いま、仏仏、祖祖の大道には胎卵湿化生のほかの胎卵湿化生あること、不曾蔵に正伝せり、親密に正伝せり。
この道得、きかず、ならわず、しらず、あきらめざらんは、なにの党類なりとかせん？
すでに四生は、きくところなり、死は、いくばくか、ある？
四生には四死あるべきか？
また、三死、二死あるべきか？
また、五死、六死、千死、万死あるべきか？
この道理、わずかに疑著せんも参学の分なり。
しばらく、功夫すべし。
この四生衆類のなかに、生はありて死なきもの、あるべしや？
また、死のみ単伝にして生を単伝せざる、ありや？
単生単死の(類の)有無、かならず、参学すべし。
わずかに無生の言句をききて、あきらむることなく、身心の功夫をさしおくがごとくするもの(も)あり。
これ、愚鈍の、はなはだしきなり。
信、法、頓、漸の論にもおよばざる畜類といいぬべし。
ゆえ、いかんとなれば、たとえ無生ときくというとも、この道得の意旨、作麼生？　なるべし。
さらに無仏、無道、無心、無滅なるべしや？　無無生なるべしや？　無法界、無法性なるべしや？　無死なるべしや？　と功夫せず、いたずらに水、草の但、念なるがゆえなり。
しるべし。
生死は仏道の行履なり。
生死は仏家の調度なり。
使、也、要、使なり。
明、也、明、得なり。
ゆえに、諸仏は、この通塞に明明なり、この要使に得得なり。
この生死の際にくらからん、だれが、なんじをなんじ、と、いわん？
だれが、なんじを了生達死の漢といわん？
生死にしずめり( or しずむ)、ときくべからず。
生死にあり、としるべからず。
生死を生死なりと信受すべからず、不会すべからず、不知すべからず。

あるいは、いう、ただ人道のみに諸仏、出世す。
さらに余方余道には出現せず。とおもえり。
いうがごとくならば、仏在のところ、みな、人道なるべきか？
これは人仏の唯我独尊の道得なり。
さらに天仏もあるべし。
仏仏もあるべきなり。
諸仏は唯、人間のみに出現す、と、いわんは、仏祖の閫奥にいらざるなり。
祖宗、いわく、
釈迦牟尼仏、自、従、迦葉仏、所伝、正法、往、兜率天、化、兜率陀天、于、今、有在。

まことに、しるべし。
人間の釈迦は、このとき滅度、現の化をしけりといえども、上天の釈迦は于、今、有在にして化、天するものなり。
学人、しるべし。
人間の釈迦の千変万化の道著あり、行取あり、説著あるは、人間一隅の放光、現、瑞なり。
おろかに、上天の釈迦、その化、さらに千品万門ならん、しらざるべからず。
仏仏正伝する大道の断絶を超越し、無始無終を脱落せる宗旨、ひとり仏道のみに正伝せり。
自余の諸類、しらず、きかざる功徳なり。
行仏の設、化するところには、四生にあらざる衆生あり、天上、人間、法界、等にあらざるところ、あるべし。
行仏の威儀を覷見せんとき、天上、人間のまなこをもちいることなかれ( or もちいるべからず)。
天上、人間の情量をもちいるべからず。
これを挙して測量せんと擬することなかれ。
十聖三賢、なお、これをしらず、あきらめず。
いわんや、人中、天上の測量のおよぶことあらんや？
人量、短小なるには識、智も短小なり。
寿命、短促なるには思慮も短促なり。
いかにしてか、行仏の威儀を測量せん？
しかあれば、すなわち、ただ人間を挙して仏法とし、人法を挙して仏法を局量せる家門、かれ、これ、ともに、仏子と許可することなかれ。
これ、ただ業報の衆生なり。
いまだ身心の聞法あるにあらず。

いまだ行道せる身心なし。
従、法、生にあらず。
従、法、滅にあらず。
従、法、見にあらず。
従、法、聞にあらず。
従、法、行住坐臥にあらず。
かくのごとくの党類、かつて法の潤益なし。
行仏は、本覚を愛せず、始覚を愛せず、無覚にあらず、有覚にあらず、という、すなわち、この道理なり。
いま、凡夫の活計する有念、無念、有覚、無覚、始覚、本覚、等、ひとえに凡夫の活計なり、仏仏、相承せるところにあらず。
凡夫の有念と諸仏の有念と、はるかにことなり、比擬することなかれ。
凡夫の本覚と活計すると、諸仏の本覚と証せると、天地懸隔なり、比論の所及にあらず。
十聖三賢の活計、なお、諸仏の道におよばず。
いたずらなる算、沙の凡夫、いかでか、はかることあらん？
しかあるを、わずかに凡夫、外道の本末の邪見を活計して、諸仏の境界とおもえるやから、おおし。
諸仏、いわく、此輩、罪根、深重なり、可憐愍者なり。

深重の罪根、たとえ無端なりとも、此輩の深重、担なり。
この深重、担、しばらく、放行して著眼看すべし。
把定して自己を礙すというとも、起首にあらず。
いま、行仏威儀の無礙なる、ほとけに礙せらるるに、拕泥帯水の活路を通達しきたるゆえに、無罣礙なり。
上天にしては化、天す。
人間にしては化、人す。
華開の功徳あり、世界起の功徳あり。
かつて間隙なきものなり。
このゆえに、自他に迥脱あり、往来に独抜あり。
即、往、兜率天なり。
即、来、兜率天なり。
即即、兜率天なり。
即、往、安楽なり.
即、来、安楽なり。
即即、安楽なり。

即、迴脱、兜率なり。
即、迴脱、安楽なり。
即、打破、百雑砕、安楽、兜率なり。
即、把定、放行、安楽、兜率なり。
一口、呑尽なり。
しるべし。
安楽、兜率というは、浄土、天堂、ともに、輪回することの同般なるとなり。
行履なれば、浄土、天堂、おなじく、行履なり。
大悟なれば、おなじく、大悟なり。
大迷なれば、おなじく、大迷なり。
これ、しばらく、行仏の鞋裏の動指なり。
あるときは、一道の放屁声なり、放屎香なり、鼻孔あるは嗅得す、耳処、身処、行履処あるに聴取するなり。
また、得、吾皮肉骨髄するときあり、さらに行得に他より、えざるものなり。
了生達死の大道すでに豁達するに、ふるくよりの道取あり。
大聖は、
生死を心にまかす。
生死を身にまかす。
生死を道にまかす。
生死を生死にまかす。

この宗旨、あらわるる、古今のときにあらずといえども、行仏の威儀、忽爾として行尽するなり。
道、環として、生死、身心の宗旨、すみやかに弁肯するなり。
行尽、明尽、これ、強為の為にあらず、迷頭認影に大似なり、回光返照に一如なり。
その明上又明の明は、行仏に弥綸なり。
これ、行取に一任せり。
この任任の道理、すべからく、心を参究すべきなり。
その参究の兀爾は、万回、これ、心の明白なり。
三界、ただ心の大隔なり、と知及し会取す。
この知及会取、さらに万法なりといえども、自己の家郷を行取せり、当人の活計を便是なり。
しかあれば、句中取則し、言外求巧する再三撈漉、それ、把定にあまれる把定あり、放行にあまれる放行あり。
その功夫は、

いかなるか、これ、生？
いかなるか、これ、死？
いかなるか、これ、身心？
いかなるか、これ、与、奪？
いかなるか、これ、任、違？
それ、
同門出入の不相逢なるか？
一著落在に蔵身露角なるか？
大慮而解なるか？
老思而知なるか？
一顆明珠なるか？
一大蔵教なるか？
一条、拄杖なるか？
一枚、面目なるか？
三十年後なるか？
一念万年なるか？
子細に検点し、検点を子細にすべし。
検点の子細にあたりて、満眼聞声、満耳見色、さらに沙門、一隻眼の開明なるに、不是、目前法なり、不是、目前事なり。
雍容の破顔あり、瞬目あり。
これ、行仏の威儀の暫爾なり。
被物牽にあらず、不牽物なり。
縁起の無生、無作にあらず。
本性、法性にあらず。
住法位にあらず。
本有然にあらず。
如是を是するのみにあらず。
ただ威儀、行仏なるのみなり。
しかあれば、すなわち、為法、為身の消息、よく、心にまかす。
脱生脱死の威儀、しばらく、ほとけに一任せり。
ゆえに、道取あり。
万法、唯心。
三界、唯心。

さらに向上に道得するに、唯心の道得あり、いわゆる、牆壁、瓦礫なり。
唯心にあらざるがゆえに、牆壁、瓦礫にあらず。

これ、行仏の威儀なる、任心、任法、為法、為身の道理なり。
さらに、始覚、本覚、等の所及にあらず。
いわんや、外道、二乗、三賢十聖の所及ならんや？
この威儀、ただ、これ、面面の不会なり、枚枚の不会なり。
たとえ活鱍々地も条条聻なり。
一条、鉄か？
両頭、動？
一条、鉄は、長短にあらず。
両頭、動は、自他にあらず。
この展事投機のちから、功夫をうるに、
威掩万法なり。
眼高一世なり。
収放をさえざる光明あり、僧堂、仏殿、廚庫、三門。
さらに収放にあらざる光明あり、僧堂、仏殿、廚庫、三門なり。
さらに十方通のまなこ、あり。
大地全収のまなこ、あり。
心のまえ、あり。
心のうしろ、あり。
かくのごとくの眼耳鼻舌身意、光明、功徳の熾然なるゆえに、
不知有を保任せる三世諸仏あり。
却知有を投機せる貍奴、白牯( or 白狗)あり。
この巴鼻あり、この眼睛あるは、法の行仏のとき、法の行仏をゆるすなり。

雪峰山、真覚大師、示、衆、云、
三世諸仏、在、火焔裏、転、大法輪。

玄沙院、宗一大師、曰、
火焔、為、三世諸仏、説、法。
三世諸仏、立、地、聴。

圜悟禅師、曰、
将、謂、猴、白。
更、有、猴、黒。
互換、投機。
神出鬼没。
烈焔亙天、仏、説、法。

亙天烈焔、法、説、仏。
風前、剪断、葛藤窠、
一言、勘破、維摩詰。

いま三世諸仏というは、一切諸仏なり。
行仏は、すなわち、三世諸仏なり。
十方諸仏ともに、三世にあらざるなし。
仏道は、三世をとくに、かくのごとく説尽するなり。
いま、行仏をたずぬるに、すなわち、三世諸仏なり。
たとえ知有なりといえども、たとえ不知有なりといえども、かならず、三世諸仏なる行仏なり。
しかあるに、三位の古仏、おなじく、三世諸仏を道得するに、かくのごとくの道あり。

しばらく、雪峰のいう、三世諸仏、在、火焔裏、転、大法輪という、この道理、ならうべし。
三世諸仏の転法輪の道場は、かならず、火焔裏なるべし。
火焔裏、かならず、仏道場なるべし。
経師、論師、きくべからず。
外道、二乗、しるべからず。
しるべし。
諸仏の火焔は、諸類の火焔なるべからず。
また、諸類は火焔あるか？　なきか？　とも照顧すべし。
三世諸仏の在、火焔裏の化儀、ならうべし。
火焔裏に所在する時は、
火焔と諸仏と、親切なるか？　転、疎なるか？
依正一如なるか？
依報正報あるか？
依正同条なるか？
依正同隔なるか？
転大法輪は転自転機あるべし。
展事、投機なり。
転、法。法、転。あるべし。
すでに転、法輪という。
たとえ尽大地、これ、尽火焔なりとも、
転、火輪の法輪あるべし。

転、諸仏の法輪あるべし。
転、法輪の法輪あるべし。
転、三世の法輪あるべし。
しかあれば、すなわち、火焔は、諸仏の転、大法輪の大道場なり。
これを界量、時量、人量、凡聖量、等をもって測量( or 測度)するは、あたらざるなり。
これらの量に量せられざれば、すなわち、三世諸仏、在、火焔裏、転、大法輪なり。
すでに三世諸仏という。
これ、量を超越せるなり。
三世諸仏、転法輪の道場なるがゆえに、火焔、あるなり。
火焔あるがゆえに、諸仏の道場、あるなり。

玄沙、いわく、火焔の、三世諸仏のために説法するに、三世諸仏は立、地、聴法す。
この道をききて、玄沙の道は雪峰の道よりも道得是なり、という(が)、かならずしも、しかあらざるなり。
しるべし。
雪峰の道は、玄沙の道と別なり。
いわゆる、雪峰は三世諸仏の転大法輪の所在を道取し、玄沙は三世諸仏の聴法を道取するなり。
雪峰の道、まさしく、転法を道取すれども、転法の所在、かならずしも、聴法、不聴法を論ずるにあらず。
しかあれば、転法に、かならず、聴法あるべし、ときこえず。
また、三世諸仏、為、火焔、説法といわず、三世諸仏、為、三世諸仏、転、大法輪といわず、火焔、為、火焔、転、大法輪といわざる宗旨あるべし。
転法輪といい、転大法輪という、その別あるか？
転法輪は説法にあらず。
説法、かならずしも、為、他あらんや？
しかあれば、雪峰の道の、道取すべき道を道取しつくさざる道にあらず。
雪峰の在、火焔裏、転、大法輪、かならず、委悉に参学すべし。
玄沙の道に混乱することなかれ。
雪峰の道を通ずるは、仏威儀を威儀するなり。
火焔の三世諸仏を在裏せしむる、一無尽法界、二無尽法界の周遍のみにあらず、
一微塵、二微塵の通達のみにあらず。

転大法輪を量として、大小、広、狭の量に擬することなかれ。
転大法輪は、為自、為他にあらず、為説、為聴にあらず。
玄沙の道に火焔、為、三世諸仏、説、法、三世諸仏、立、地、聴という。
これは火焔、たとえ為、三世諸仏、説、法すとも、いまだ、転法輪す、といわず、また、三世諸仏の法輪を転ず、といわず。
三世諸仏は立、地、聴すとも、三世諸仏の法輪、いかでか、火焔、これを転ずることあらん？
為、三世諸仏、説、法する火焔、また、転、大法輪すや？　いなや？
玄沙も、いまだ、いわず、転法輪は、このときなり、と。
転法輪なし、といわず。
しかあれども、想料すらくは、玄沙、おろかに転、法輪は説、法輪ならんと会取せるか？
もし、しかあらば、なお、雪峰の道にくらし。
火焔の三世諸仏のために説、法のとき、三世諸仏、立、地、聴法す、とはしれりといえども、
火焔、転、法輪のところに、火焔、立、地、聴法す、としらず。
火焔、転、法輪のところに、火焔、同、転、法輪す、といわず。
三世諸仏の聴法は、諸仏の法なり、他より、こうむらしむるにあらず。
火焔を法と認ずることなかれ。
火焔を仏と認ずることなかれ。
火焔を火焔と認ずることなかれ。
まことに、師資の道、なおざりなるべからず。
将、謂、赤髭、胡のみならんや？
さらに、これ、胡髭、赤なり。
玄沙の道、かくのごとくなりといえども、参学の力量とすべきところあり。
いわゆる、経師、論師の大乗、小乗の局量の性、相にかかわれず、仏仏、祖祖、正伝せる性、相を参学すべし。
いわゆる、三世諸仏の聴法なり。
これ大、小乗の性、相にあらざるところなり。
諸仏は機縁に逗する説法あり、とのみしりて、諸仏、聴法す、としらず( or いはず)、諸仏、修行す、といわず、諸仏、成仏す、といわず。
いま玄沙の道には、すでに三世諸仏、立、地、聴法という、諸仏、聴法する性、相あり。
かならずしも能説をすぐれたりとし、能聴是法者を劣なりということなかれ。
説者、尊なれば、聴者も尊なり。

釈迦牟尼仏、言、
若、説、此経、則、為、見、我。
為、一人、説、是則、為、難。

しかあれば、能説法は見、釈迦牟尼仏なり。則、為、見、我は釈迦牟尼なるがゆえに。
また、いわく、
於、我、滅後、聴受、此経、問、其義趣、是則、為、難。

しるべし。
聴受者も、おなじく、これ( or 是則)、為、難なり。
勝劣あるにあらず。
立、地、聴、これ、最尊なる諸仏なりというとも、立、地、聴法あるべきなり。
立、地、聴法、これ、三世諸仏なるがゆえに。
諸仏は果上なり。
因中の聴法をいうにあらず。
すでに、三世諸仏、とあるがゆえに。
しるべし。
三世諸仏は、火焔の説法を立、地、聴法して諸仏なり。
一道の化儀、たどるべきにあらず。
たどらんとするに、箭鋒相拄せり。
火焔は、決定して、三世諸仏のために説法す。
赤心片片として、鉄樹、華開世界香なるなり。
且道すらくは、火焔の説法を立、地、聴しもってゆくに、畢竟じて、現成、箇、什麼？
いわゆるは、智、勝、于、師なるべし、智、等、于、師なるべし。
(さらに)師資の閫奥に参究して三世諸仏なるなり。

圜悟、いわくの猴、白と将、謂する、さらに猴、黒をさえざる。
互換の投機、それ、神出鬼没なり。
これは玄沙と同条出すれども、玄沙に同条入せざる一路もあるべしといえども、火焔の諸仏なるか？　諸仏を火焔とせるか？
黒、白、互換のこころ、玄沙の神、鬼に出没すといえども、雪峰の声色、いまだ、黒、白の際に、のこらず。
しかも、かくのごとくなりといえども、玄沙に道、是あり、道、不是あり。

雪峰に道拈あり、道放あることをしるべし。
いま圜悟、さらに玄沙に同ぜず、雪峰に同ぜざる道あり。
いわゆる、
烈焔、亙天は、ほとけ、法をとくなり。
亙天、烈焔は、法、ほとけをとくなり。
この道は、真箇、これ、晩進の光明なり。
たとえ烈焔にくらしというとも、亙天におおわれば、われ、その分あり、他、この分あり。
亙天のおおうところ、すでに、これ、烈焔なり。
這箇をきらうて用、那頭は作麼生？　なるのみなり。
よろこぶべし。
この皮袋子、うまれたるところは去聖方遠なり、いける、いまは去聖時遠なりといえども、亙天の化導、なお、きこゆるに、あえり。
いわゆる、ほとけ、法をとく事は、きくところなりといえども、法、ほとけをとくことは、いくかさなりの不知をか、わずらいこし。
しかあれば、すなわち、三世の諸仏は三世に法にとかれ、三世の諸法は三世に仏にとかるるなり。
葛藤窠の風前に剪断する亙天のみあり。
一言は、かくるることなく、勘破しきたる、維摩詰をも、非維摩詰をも。
しかあれば、すなわち、
法、説、仏なり、法、行、仏なり、法、証、仏なり。
仏、説、法なり、仏、行、仏なり、仏、作仏なり。
(かくのごとくなる、)ともに、行仏の威儀なり。
亙天亙地、亙古亙今にも、得者、不軽微、明者、不賤用なり。

正法眼蔵　行仏威儀
仁治二年辛丑、十月中旬、記、于、観音導利興聖宝林寺、沙門、道元。

# 仏教

諸仏の道、現成、これ、仏教なり。
これ、仏祖の、仏祖のためにするゆえに、教の、教のために正伝するなり。
これ、転法輪なり。
この法輪の眼睛裏に、諸仏祖を現成せしめ、諸仏祖を般涅槃せしむ。
その諸仏祖、かならず、
一塵の出現あり、一塵の涅槃あり、
尽界の出現あり、尽界の涅槃あり、
一須臾の出現あり、
多劫海の出現あり。
しかあれども、
一塵、一須臾の出現、さらに不具足の功徳なし。
尽界、多劫海の出現、さらに補虧闕の経営にあらず。
このゆえに、朝に成道して夕に涅槃する諸仏、いまだ、功徳かけたり、といわず。
もし、一日は功徳すくなし、といわば、人間の八十年、ひさしきにあらず。
人間の八十年をもって十劫、二十劫に比せんとき、一日と八十年とのごとくならん。
此仏彼仏の功徳、わきまえがたからん。
長劫寿量の所有の功徳と、八十年の功徳とを挙して比量せんとき、疑著するにもおよばざらん。
このゆえに、仏教は、すなわち、教、仏なり、仏祖、究尽の功徳なり。
諸仏は高、広にして、法教は狭、少なるにあらず。
まさに、しるべし。
仏、大なれば、教、大なり。
仏、小なれば、教、小なり。
このゆえに、しるべし。
仏、および、教は、大小の量にあらず、善、悪、無記、等の性にあらず、自教、教他のためにあらず。

ある漢、いわく、
釈迦、老漢、かつて一代の教典を宣説するほかに、さらに、上乗、一心の法を摩訶迦葉に正伝す。
嫡嫡、相承しきたれり。

しかあれば、教は赴機の戯論なり。
心は理性の真実なり。
この正伝せる一心を教外別伝という。
三乗十二分教の所談に、ひとしかるべきにあらず。
一心、上乗なるゆえに、直指、人心、見性、成仏なりという。

この道取、いまだ仏法の家業にあらず。
出身の活路なし、通身の威儀、あらず。
かくのごとくの漢、たとえ数百、千年のさきに、先達、と称すとも、恁麼の説話あらば、仏法、仏道はあきらめず、通ぜざりける、としるべし。
ゆえは、いかん？
仏をしらず、
教をしらず、
心をしらず、
内をしらず、外をしらざるがゆえに。
その、しらざる道理は、かつて仏法をきかざるによりてなり。
いま、諸仏という本末、いかなる？　としらず。
去来の辺際、すべて学せざれば、仏弟子と称するにたらず。
ただ一心を正伝して、仏教を正伝せず、というは、仏法をしらざるなり。
仏教の一心をしらず、一心の仏教をきかず。
一心のほかに仏教あり、という、なんじが一心、いまだ一心ならず。
仏教のほかに一心あり、という、なんじが仏教、いまだ仏教ならざらん。
たとえ教外別伝の謬説を相伝すというとも、なんじ、いまだ内外をしらざれば、言理の符合あらざるなり。
仏正法眼蔵を単伝する仏祖、いかでか、仏教を単伝せざらん？
いわんや、釈迦、老漢、なにとしてか、仏家の家業にあるべからざらん教法を施設することあらん？
釈迦、老漢、すでに単伝の教法をあらしめん。
いずれの仏祖か、なからしめん？
このゆえに、上乗、一心というは、三乗十二分教、これなり、大蔵、小蔵、これなり。
しるべし。
仏心というは、仏の、眼睛なり、破木杓なり、諸法なり、三界なるがゆえに、山海、国土、日月星辰なり。
仏教というは、万像森羅なり。
外というは、這裏なり、這裏来なり。

正伝は、自己より自己に正伝するがゆえに、正伝のなかに自己あるなり。
一心より一心に正伝するなり、正伝に一心あるべし。
上乗、一心は、土石、砂礫なり。
土石、砂礫は一心なるがゆえに、土石、砂礫は土石、砂礫なり。
もし上乗、一心の正伝といわば、かくのごとくあるべし。
しかあれども、教外別伝を道取する漢、いまだ、この意旨をしらず。
かるがゆえに、教外別伝の謬説を信じて、仏教をあやまることなかれ。
もし、なんじがいうがごとくならば、教をば心外別伝というべきか？
(
もし心外別伝といわば、一句、半偈、つたわるべからざるなり。
もし心外別伝といわずば、教外別伝というべからざるなり。
)
摩訶迦葉、すでに釈尊の嫡子として法蔵の教主たり。
正法眼蔵を正伝して仏道の住持なり。
しかありとも、仏教は正伝すべからず、というは、学道の偏局なるべし。
しるべし。
一句を正伝すれば、一法の正伝せらるるなり。
一句を正伝すれば、山伝水伝あり。
不能、離却、這裏(伝)なり。
釈尊の正法眼蔵、無上菩提は、ただ摩訶迦葉に正伝せしなり。
余子に正伝せず。
正伝は、かならず、摩訶迦葉なり。
このゆえに、古今に仏法の真実を学する箇箇、ともに、みな、従来の教学を
決択するには、かならず、仏祖に参究するなり。
決を余輩にとぶらわず。
もし仏祖の正決をえざるは、いまだ正決にあらず。
依教の正、不を決せんとおもわんは、仏祖に決すべきなり。
そのゆえは、尽法輪の本主は仏祖なるがゆえに。
道有、道無、道空、道色、ただ仏祖のみ、これをあきらめ、正伝しきたりて、
古仏今仏なり。

巴陵、因、僧、問、
祖意、教意、是、同？　是、別？
師、云、
鶏、寒、上、樹。
鴨、寒、入水。

この道取を参学して、仏道の祖宗を相見し、仏道の教法を見聞すべきなり。
いま、祖意、教意と問取するは、祖意は祖意と是、同？　是、別？　と問取するなり。
いま、鶏、寒、上、樹。鴨、寒、入水。というは、同、別を道取すといえども、同、別を見取するともがらの見聞に一任する同、別にあらざるべし。
しかあれば、すなわち、同、別の論にあらざるがゆえに、同、別と道取すつべきなり。
このゆえに、同、別と問取すべからずというがごとし。

玄沙、因、僧、問、
三乗十二分教、即、不要。
如何、是、祖師西来意？

師、云、
三乗十二分教、総、不要。

いわゆる、僧、問の三乗十二分教、即、不要。如何、是、祖師西来意？　という。
よのつねに、おもうがごとく、三乗十二分教は条条の岐路なり。
そのほか祖師西来意あるべし、と問するなり。
三乗十二分教、これ、祖師西来意なり、と認ずるにあらず。
いわんや、八万四千法門蘊、すなわち、祖師西来意としらんや？
しばらく、参究すべし。
三乗十二分教、なにとしてか、即、不要なる？
もし要せんときは、いかなる規矩が、ある？
三乗十二分教を不要なるところに、祖師西来意の参学を現成するか？
いたずらに、この問の出現するにあらざらん。

玄沙、いわく、三乗十二分教、総、不要。
この道取は、法輪なり。
この法輪の転ずるところ、仏教の仏教に所在することを参究すべきなり。
その宗旨は、三乗十二分教は、仏祖の法輪なり。
有、仏祖の時、所にも転ず。
無、仏祖の時、所にも転ず。
祖前、祖後、おなじく、転ずるなり。

さらに仏祖を転ずる功徳あり。
祖師西来意の正当恁麼時は、この法輪を総、不要なり。
総、不要というは、もちいざるにあらず、やぶるるにあらず。
この法輪、このとき、総不要輪の転ずるのみなり。
三乗十二分教なし、といわず。
総、不要の時節を覰見すべきなり。
総、不要なるがゆえに、三乗十二分教なり。
三乗十二分教なるがゆえに、三乗十二分教にあらず。
このゆえに、三乗十二分教、総、不要と道取するなり。
その三乗十二分教、そこばくあるなかの一隅をあぐるには、すなわち、これなり。

三乗。

一、者、声聞乗。

四諦によりて得道す。
四諦というは、苦諦、集諦、滅諦、道諦なり。
これをきき、これを修行するに、生老病死を度(脱)し、般涅槃を究竟す。
この四諦を修行するに、苦、集は俗なり、滅、道は第一義なり。というは、論師の見解なり。
もし仏法によりて修行するがごときは、
四諦ともに、唯仏与仏なり。
四諦ともに、法住法位なり。
四諦ともに、実相なり。
四諦ともに、仏性なり。
このゆえに、さらに、無性、無作、等の論におよばず。
四諦ともに、総、不要なるゆえに。

二、者、縁覚乗。

十二因縁によりて般涅槃す。
十二因縁というは、
一、者、無明。
二、者、行。
三、者、識。

四、者、名色。
五、者、六入。
六、者、触。
七、者、受。
八、者、愛。
九、者、取。
十、者、有。
十一、者、生。
十二、者、老死。
この十二因縁を修行するに、過去、現在、未来に因縁せしめて、能観、所観を論ずといえども、一一の因縁を挙して参究するに、すなわち、総不要輪転なり、総不要因縁なり。
しるべし。
無明、これ、一心なれば、行、識、等も一心なり。
無明、これ、滅なれば、行、識、等も滅なり。
無明、これ、涅槃なれば、行、識、等も涅槃なり。
生も滅なるがゆえに、恁麼いうなり。
無明も道著の一句なり。
識、名色、等も、また、かくのごとし。
しるべし。
無明、行、等は、吾、有、箇斧子、与、汝、住、山なり。
無明、行、識、等は、発時、蒙和尚、許、斧子、便、請取なり。

三、者、菩薩乗。

六波羅蜜の教行証によりて阿耨多羅三藐三菩提を成就す。
その成就というは、
造作にあらず。
無作にあらず。
始起にあらず。
新成にあらず。
久成にあらず。
本行にあらず。
無為にあらず。
ただ成就、阿耨多羅三藐三菩提なり。
六波羅蜜というは、

檀波羅蜜、
尸羅波羅蜜、
羼提波羅蜜、
毘梨耶波羅蜜、
禅那波羅蜜、
般若波羅蜜なり。
これは、ともに、無上菩提なり。
無生、無作の論にあらず。
かならずしも檀をはじめとし般若をおわりとせず。
経、云、
利根菩薩、般若、為、初、檀、為、終。
鈍根菩薩、檀、為、初、般若、為、終。
しかあれども、羼提も、はじめなるべし、禅那も、はじめなるべし。
三十六波羅蜜の現成あるべし。
羅籠より羅籠をうるなり。
波羅蜜というは、彼岸、到なり。
彼岸は、去来の相貌、蹤跡にあらざれども、到は、現成するなり、到は、公案なり。
修行の彼岸へいたるべし、とおもうことなかれ。
彼岸に修行あるがゆえに、修行すれば、彼岸、到なり。
この修行、かならず、遍界、現成の力量を具足せるがゆえに。

十二分教。

一、者、素呾纜。(此、云、契経。)
二、者、祇夜。(此、云、重頌。)
三、者、和伽羅那。(此、云、授記。)
四、者、伽陀。(此、云、諷誦。)
五、者、憂陀那。(此、云、無問自説。)
六、者、尼陀那。(此、云、因縁。)
七、者、(阿)波陀那。(此、云、譬喩。)
八、者、伊帝目多伽。(此、云、本事。)
九、者、闍陀迦。(此、云、本生。)
十、者、毘仏略。(此、云、方広。)
十一、者、阿浮陀達磨。(此、云、未曾有。)
十二、者、優婆提舎。(此、云、論議。)

如来、則、為、直、説、陰界入、等、仮実之法、是、名、修多羅。
或、四、五、六、七、八、九言偈、重頌。
世界、陰入、等、事、是、名、祇夜。
或、直、記、衆生、未来事、乃至、記、鴿、雀、成仏、等、是、名、和伽羅那。
或、孤起偈、記、世界、陰入、等、事、是、名、伽陀。
或、無、人、問、自、説、世界事、是、名、優陀那。
或、約、世界不善事、而、結、禁戒、是、名、尼陀那。
或、以、譬喩、説、世界事、是、名、阿波陀那。
或、説、本、昔、世界事、是、名、伊帝目多伽。
或、説、本、昔、受、生事、是、名、闍陀伽。
或、説、世界、広大事、是、名、毘仏略。
或、説、世界、未曾有事、是、名、阿浮達摩。
或、問、難、世界事、是、名、優婆提舎。

此、是、世界悉檀、為、悦、衆生、故、起、十二部経。

十二部経の名、きくこと、まれなり。
仏法の、よのなかに、ひろまれるとき、これをきく。
仏法、すでに滅するときは、きかず。
仏法、いまだ、ひろまらざるとき、また、きかず。
ひさしく善根をうえて仏をみたてまつるべきもの、これをきく。
すでにきくものは、ひさしからずして阿耨多羅三藐三菩提をうべきなり。
この十二、おのおの経と称す。
十二分教ともいい、十二部経ともいうなり。
十二分教、おのおの十二分教を具足せるゆえに、一百四十四分教なり。
十二分教、おのおの十二分教を兼、含せるゆえに、ただ一分教なり。
しかあれども、億前、億後の数量にあらず。
これ、みな、
仏祖の眼睛なり。
仏祖の骨髄なり。
仏祖の家業なり。
仏祖の光明なり。
仏祖の荘厳なり。
仏祖の国土なり。

十二分教をみるは、仏祖をみるなり。
仏祖を道取するは、十二分教を道取するなり。
しかあれば、すなわち、青原の垂一足、すなわち、三乗十二分教なり。
南嶽の説、似、一物、即、不中、すなわち、三乗十二分教なり。

いま、玄沙の道取する総、不要の意趣、それ、かくのごとし。
この宗旨、挙拈するときは、ただ仏祖のみなり。
さらに半人なし、一物なし、一事、未起なり。
正当恁麼時、如何？
いうべし、総、不要。

あるいは、九部という、あり。
九分教というべきなり。

九部

一、者、修多羅。
二、者、伽陀。
三、者、本事。
四、者、本生。
五、者、未曾有。
六、者、因縁。
七、者、譬喩。
八、者、祇夜。
九、者、優婆提舎。

この九部、おのおの九部を具足するがゆえに、八十一部なり。
九部、おのおの一部を具足するゆえに、九部なり。
帰、一部の功徳あらずは、九部なるべからず。
帰、一部の功徳あるがゆえに、一部、帰、一部なり。
このゆえに、八十一部なり。
此部なり、我部なり、払子部なり、拄杖部なり、正法眼蔵部なり。
釈迦牟尼仏、言、
我此九部法、随順、衆生、説。
入、大乗、為、本。
以、故、説、是経。

しるべし。
我此は如来なり。
面目、身心、あらわれきたる。
(この)我此、すでに九部法なり。
九部法、すなわち、我此なるべし。
いまの一句、一偈は、九部法なり。
我此なるがゆえに、随順、衆生、説なり。
しかあれば、すなわち、一切衆生の生、従、這裏、生、すなわち、説、是経なり。
死、従、這裏、死は、すなわち、説、是経なり。
乃至、造次動容、すなわち、説、是経なり。
化、一切衆生、皆、令、入、仏道、すなわち、説、是経なり。
この衆生は、我此九部法の随順なり。
この随順は、
随他去なり。随自去なり。
随衆去なり。随生去なり。
随我去なり。随此去なり。
その衆生、かならず、我此なるがゆえに、九部法の条条なり。
入、大乗、為、本というは、
証、大乗といい、行、大乗といい、
聞、大乗といい、説、大乗という。
しかあれば、衆生は天然として得道せりというにあらず。
その一端なり。
入は、本なり。
本は、頭正尾正なり。
ほとけ、法をとく。
(法、ほとけをとく。)
法、ほとけに、とかる。
ほとけ、法に、とかる。
火焔、ほとけをとき、法をとく。
ほとけ、火焔をとき、
法、火焔をとく。
是経、すでに説、故の良以あり、故、説の良以あり。
是経、とかざらんと擬するに不可なり。
このゆえに、以、故、説、是経という。

故、説は亙天なり。
亙天は、故、説なり。
此仏彼仏、ともに、是経と一称し、
自界他界、ともに、是経と故、説す。
このゆえに、説、是経なり。
是経、これ、仏教なり。
しるべし。
恒沙の仏教は、竹篦、払子なり。
仏教の恒沙は、拄杖、拳頭なり。
おおよそ、しるべし。
三乗十二分教、等は、仏祖の眼睛なり。
これを開眼( or 開明)せざらんもの、いかでか、仏祖の児孫ならん？
これを拈来せざらんもの、いかでか、仏祖の正眼を単伝せん？
正法眼蔵を体達せざるは、七仏の法嗣にあらざるなり。

正法眼蔵　仏教
(于、時、仁治二年辛丑、十一月十四日、在、雍州、興聖精舎、示、衆。)

# 神通

かくのごとくなる神通は、仏家の茶飯なり。
諸仏、いまに懈倦せざるなり。
これに、六神通あり、一神通あり、無神通あり、最上神通あり。
朝打、三千なり、暮打、八百なるを為体とせり。
与、仏、同生せりといえども、仏にしられず、
与、仏、同滅すといえども、仏をやぶらず。
上天に同条なり、下天にも同条なり。
修行、取、証、みな、同条なり。
同、雪山なり、如、木、石なり。
過去の諸仏は、釈迦牟尼仏の弟子なり、袈裟をささげてきたり、塔をささげきたる。
このとき、釈迦牟尼仏、いわく、諸仏、神通、不可思議なり。
しかあれば、しりぬ。
現在、未来も、亦復、如是なり。

大潙禅師は、釈迦如来より直下三十七世の祖なり。
百丈、大智の嗣法なり。
いまの仏祖、おおく、十方に出興せる、大潙の遠孫にあらざるなし。
すなわち、大潙の遠孫なり。

大潙、あるとき、臥せるに、仰山、来参す。
大潙、すなわち、転面、向壁、臥す。
仰山、いわく、
慧寂、これ、和尚の弟子なり。
形跡、もちいざれ。

大潙、おくる勢をなす。
仰山、すなわち、いづるに、大潙、召して、
寂子。
と、めす。

仰山、かえる。
大潙、いわく、

老僧、ゆめをとかんをきくべし。

仰山、こうべをたれて、聴勢をなす。
大潙、いわく、
わがために原、夢せよ、みん。

仰山、一盆の水、一条の手巾をとりて、きたる。
大潙、ついに洗面す。
洗面しおわりて、わずかに坐するに、香厳きたる。
大潙、いわく、
われ、適来、寂子と、一上の神通をなす。
不同、小小なり。

香厳、いわく、
智閑、下面にありて、了了に得知す。

大潙いわく、
子、
こころみに道取すべし。

香厳、すなわち、一碗の茶を点来す。
大潙、ほめて、いわく、
二子の神通、智慧、はるかに、鶖子、目連よりも、すぐれたり。

仏家の神通をしらんとおもわば、大潙の道取を参学すべし。
不同、小小のゆえに、作、是、学、者、名、為、仏学。不、是、学、者、不、名、仏学なるべし。
嫡嫡、相伝せる神通、智慧なり。
さらに、西天竺国の外道、二乗の神通、および、論師、等の所学を学することなかれ。
いま、大潙の神通を学するに、無上なりといえども、一上の見聞あり。
いわゆる、臥次より、このかた、転面、向壁、臥あり、起勢あり、召、寂子あり、説、箇夢あり、洗面了、纔坐あり、仰山、又、低頭、聴あり、盆、水、来、手巾、来あり。
しかあるを、大潙、いわく、われ、適来、寂子と、一上の神通をなす、と。
この神通を学すべし。
仏法正伝の祖師、かくのごとく、いう。

説夢洗面といわざることなかれ。
一上の神通なり、と決定すべし。
すでに不同、小小という。
小乗、小量、小見におなじかるべからず。
十聖三賢、等に同ずべきにあらず。
かれら、みな、小神通をならい、小身量のみをえたり。
仏祖の大神通におよばず。
これ、仏神通なり。
仏向上神通なり。
この神通をならわん人は、魔、外にうごかざるべからざるなり。
経師、論師、いまだ、きかざるところ、きくとも信受しがたきなり。
二乗、外道、経師、論師、等は小神通をならう、大神通をならわず。
諸仏は大神通を住持す、大神通を相伝す。
これ、仏神通なり。
仏神通にあらざれば、
盆、水、来、手巾、来せず。
転面、向壁、臥なし。
洗面了、纔坐なし。
この大神通のちからにおおわれて、小神通、等もあるなり。
大神通は小神通を接す。
小神通は大神通をしらず。
小神通というは、いわゆる、毛、呑、巨海。芥、納、須弥。なり。
また、身上、出水。身下、出火。等なり。
また、五通、六通、みな、小神通なり。
これらのやから、仏神通は夢也未見聞在なり。
五通、六通を小神通ということは、五通、六通は、
修、証に染汚せられ、
際断を時、所にうるなり。
在生にありて、身後に現ぜず。
自己にありて、他人にあらず。
此土に現ずといえども、他土に現ぜず。
不現に現ずといえども、現時に現ずることをえず。
この大神通は、しかあらず。
諸仏の教行証、おなじく、神通に現成せしむるなり。
ただ諸仏の辺に現成するのみにあらず、仏向上にも現成するなり。

神通仏の化儀、まことに、不可思議なるなり。
有身よりさきに現ず。
現の三際にかかわ(ら)れぬあり。
仏神通にあらざれば、諸仏の発心、修行、菩提、涅槃、いまだ、あらざるなり。
いまの無尽法界海の常、不変なる、みな、これ、仏神通なり。
毛、呑、巨海のみにあらず。
毛、保任、巨海なり。
毛、現、巨海なり。
毛、吐、巨海なり。
毛、使、巨海なり。
一毛に尽法界を呑却し吐却するとき、ただし、一尽法界、かくのごとくなれば、さらに尽法界あるべからず、と学することなかれ。
芥、納、須弥、等も、また、かくのごとし。
芥、吐、須弥、および、芥、現、法界無尽蔵海にてもあるなり。
毛、吐、巨海、芥、吐、巨海するに、一念にも吐却す、万劫にも吐却するなり。
万劫、一念、おなじく、毛、芥より吐却せるがゆえに、毛、芥は、さらに、なによりか、得せる？
すなわち、これ、神通より得せるなり。
この得、すなわち、神通なるがゆえに、ただ、まさに、神通の、神通を出生するのみなり。
さらに、三世の存没、あらず、と学すべきなり。
諸仏は、この神通のみに遊戯するなり。

龐居士、蘊公は、祖席の偉人なり。
江西、石頭の両席に参学せるのみにあらず。
有道の宗師に、おおく、相見し、相逢しきたる。
あるとき、いわく、
神通、並妙用、運水、及、搬柴。

この道理、よくよく参究すべし。
いわゆる、運水とは、水を運載しきたるなり。
自作自為あり、他作教他ありて、水を運載せしむ。
これ、すなわち、神通仏なり。
しることは有時なりといえども、神通は、これ、神通なり。

人のしらざるには、その法の廃するにあらず、その法の滅するにあらず。
人はしらざれども、法は法爾なり。
運水の、神通なり、としらざれども、神通の、運水なるは、不退なり。
搬柴とは、たきぎをはこぶなり。
たとえば、六祖のむかしのごとし。
朝打、三千にも神通としらず、暮打、八百にも神通とおぼえざれども、神通の現成なり。
まことに、諸仏、如来の神通、妙用を見聞するは、かならず、得道すべし。
このゆえに、一切諸仏の得道、かならず、この神通力に成就せるなり。
しかあれば、いま、小乗の出水、たとえ小神通なりというとも、運水の大神通なることを学すべし。
運水、搬柴は、いまだ、すたれざるところ、人、さしおかず。
ゆえに、むかしより、いまにおよぶ、これより、かれに、つたわれり。( or つたわりて、)
須臾も退転せざるは、神通、妙用なり。
これは大神通なり。
小小と、おなじかるべきにあらず。

洞山、悟本大師、そのかみ、雲巌に侍せりしとき、雲巌、とう、
いかなるか、これ、价子、神通、妙用？
ときに、洞山、叉手、近前、而、立。
また、雲巌、とう、
いかならんか、神通、妙用？
洞山、ときに、珍重、而、出。

この因縁、まことに、神通の承、言、会、宗なるあり。
神通の事、存、函、蓋、合なるあり。
まさに、しるべし。
神通、妙用は、
まさに、児孫あるべし、不退なるものなり。
まさに、高祖あるべし、不進なるものなり。
いたずらに外道、二乗に、ひとしかるべき、とおもわざれ。
仏道に身上、身下の神変、神通あり。
いま、尽十方界は、沙門、一隻の真実、体なり。
九山八海、乃至、性海、薩婆若海水、しかしながら、身上、身下(、身中)の出水なり。

また、非身上、非身下、非身中の出水なり。
乃至、出火も、また、かくのごとし。
ただ水、火、風、等のみにあらず。
身上、出仏なり、身下、出仏なり。
身上、出祖なり、身下、出祖なり。
身上、出、無量、阿僧祇劫なり、身下、出、無量、阿僧祇劫なり。
身上、出、法界海なり。
身上( or 身下)、入、法界海なるのみにあらず。
さらに、世界、国土を吐却、七、八箇し、呑却、両、三箇せんことも、また、かくのごとし。
いま、四大、五大、六大、諸大、無量大、おなじく、出なり、没なる、神通なり、呑なり、吐なる神通なり。
いまの、大地、虚空の面面なる、呑却なり、吐却なり、芥に転ぜらるるを力量とせり、毛にかかれるを力量とせり。
識、知のおよばざるより、同生して、識、知のおよばざるを住持し、識、知のおよばざるに実帰す。
まことに、短長にかかわれざる、仏神通の変相、ひとえに測量を挙して擬するのみならんや？

むかし、五通仙人、ほとけに事奉せしとき、仙人、とう、
仏、有、六通。
我、有、五通。
如何、是、那一通？

ほとけ、ときに、仙人を召して、いう、
五通仙人。
仙人、応諾す。
仏、言、
那一通、爾、問、我。

この因縁、よくよく参究すべし。
仙人、いかでか、仏、有、六通としる？
仏、有、無量、神通、智慧なり。
ただ六通のみにあらず。
たとえ六通のみをみるというとも、六通も、きわむべきにあらず。
いわんや、その余の神通におきて、いかでか、ゆめにもみん？

しばらく、とう、仙人、たとえ釈迦、老師をみるというとも、見仏すや？
いまだしや？　というべし。
たとえ見仏すというとも、釈迦、老師をみるや？　いまだしや？
たとえ釈迦、老師をみることをえ、たとえ見仏すというとも、五通仙人をみるや？　いまだしや？
と問著すべきなり。
この問所に用、葛藤を学すべし、葛藤、断を学すべし。
いわんや、仏、有、六通、しばらく、隣、珍を算数するに、およばざるか？( or およばざるなり。)
いま、釈迦、老師、道の那一通、爾、問、我のこころ、いかん？
仙人に那一通ありといわず、仙人になしといわず。
那一通の通塞は、たとえ、とくとも、仙人、いかでか、那一通を通ぜん？
いかんとなれば、仙人に五通あれど、仏、有、六通のなかの五通にあらず。
仙人通は、たとえ仏通の所通に通破となるとも、仙通、いかでか、仏通を通ずることをえん？
もし仙人、仏の一通をも通ずることあらば、この通より仏を通ずべきなり。
仙人をみるに仏通に相似せるあり、仏儀をみるに仙通に相似せることあるは、仏儀なりといえども、仏神通にあらず、としるべきなり。
通ぜざれば、五通みな、仏と、おなじからざるなり。
たちまちに那一通をとう、なにの用か、ある？　となり。
釈迦、老師のこころは、一通をも、とうべし、となり。
那一通をとい、那一通をとうべし、一通も仙人は、およぶところなし、となり。
しかあれば、仏神通と余者通とは、神通の名字、おなじといえども、神通の名字、はるかに殊異なり。

ここをもって、
臨済院、慧照大師、云、
古人、云、
如来、挙、身相、為、順、世間情。
恐、人、生、断見、権、且、立、虚名。
仮、言、三十二、八十、也、空声。
有身、非、覚体。
無相、乃、真形。
爾、道、仏、有、六通、是、不可思議。
一切諸天、神仙、阿修羅、大力鬼、亦、有、神通、応、是、仏？　否？

道流、
莫、錯。
祗、如、阿修羅、与、天帝釈、戦、戦敗、領、八万四千眷属、入、藕孔中、蔵、莫、是、聖？　否？
如、山僧、所挙、皆、是、業通(、依通)。
夫、如、仏六通、者、不然。
入、色界、不被、色惑。
入、声界、不被、声惑。
入、香界、不被、香惑。
入、味界、不被、味惑。
入、触界、不被、触惑。
入、法界、不被、法惑。
所以、達、六種、色声香味触法、皆、是、空相、不能、繫縛。
此、無依道人。雖、是、五蘊漏質、便是、地、行、神道。
道流、
真仏、無形。
真法、無相。
爾、祗、麼、幻化上頭、作模作様。
設、求得、者、皆、是、野狐精、魅、並、不是、真仏、是、外道、見解。

しかあれば、諸仏の六神通は、一切諸天、鬼神、および、二乗、等の、およぶべきにあらず、はかるべきにあらざるなり。
仏道の六通は、仏道の仏弟子のみ、単伝せり。
余人の相伝せざるところなり。
仏六通は仏道に単伝す。
単伝せざるは、仏六通をしるべからざるなり。
仏六通を単伝せざらんは、仏道人なるべからず、と参学すべし。

百丈、大智禅師、云、
眼耳鼻舌、各各、不貪染、一切有無諸法、是、名、受持四句偈、亦、名、四果。
六入、無、跡、亦、名、六神通。
祗、如今、但、不被、一切有無諸法礙、亦、不依住、知、解、是、名、神通。
不守、此神通、是、名、無神通。
如、云、無神通菩薩、蹤跡、不可得尋、是、仏向上人、最不可思議人、是、自己、天。

いま、仏仏、祖祖、相伝せる神通、かくのごとし。
諸仏神通は、仏向上人なり、最不可思議人なり、是、自己、天なり、無神通菩薩なり。
知、解、不依住なり、神通、不守、此なり、一切諸法、不被、礙なり。
いま仏道に六神通あり。
諸仏の伝持しきたれること、ひさし。
一仏も、伝持せざる、なし。
伝持せざれば、諸仏にあらず。
その六神通は、六入を、無、跡に、あきらむるなり。
無、跡というは、古人の、いわく、六般神用、空、不空、一顆、円光、非、内外。
非、内外は無、跡なるべし。
無、跡に、修行し、参学し、証入するに、六入を動著せざるなり。
動著せずというは、動著するもの、三十棒分あるなり。
しかあれば、すなわち、六神通、かくのごとく参究すべきなり。
仏家の嫡嗣にあらざらん、だれが、このことわりあるべし、とも、きかん？
いたずらに向外の馳走を帰家の行履とあやまれるのみなり。
また、四果は、仏道の調度なりといえども、正伝せる三蔵なし。
算、沙のやから、跉跰のたぐい、いかでか、この果実をうることあらん？
得、小、為、足の類、いまだ参究の、達せるにあらず。
ただ、まさに、仏仏、相承せるのみなり。
いわゆる、四果は、受持、四句偈なり。
受持、四句偈というは、一切有無諸法におきて、眼耳鼻舌、各各、不貪染なるなり。
不貪染は、不染汚なり。
不染汚というは、平常心なり、吾、常、於、此、切なり。
六通、四果を仏道に正伝せる、かくのごとし。
これと相違あらん( or せん)は、仏法にあらざらん( or あらず)、としるべきなり。
しかあれば、仏道は、かならず、神通より達するなり。
その達する、涓滴の、巨海を呑吐する、微塵の、高嶽を拈放する、だれが疑著することをえん？
これ、すなわち、神通なるのみなり。

正法眼蔵　神通

爾時、仁治二年辛丑、十一月十六日、在、於、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 大悟

仏仏の大道つたわれて綿密なり。
祖祖の功業あらわれて平展なり。
このゆえに、
大悟、現成し、
不悟、至道し、
省悟、弄悟し、
失悟、放行す。
これ、仏祖、家常なり。
挙拈する使得十二時あり。
抛却する被使十二時あり。
さらに、この関棙子を跳出する弄泥団もあり、弄精魂もあり。
大悟より、仏祖、かならず、恁麼、現成する参学を究竟すといえども、大悟の渾悟を仏祖とせるにはあらず、仏祖の渾仏祖を渾大悟なりとにはあらざるなり。
仏祖は、大悟の辺際を跳出し、
大悟は、仏祖より向上に跳出する面目なり。
しかあるに、人根に多般あり。

いわく、生知。

これは、生じて生を透脱するなり。
いわゆるは、生の初中後際に体究なり。

いわく、学而知。

これは、学して自己を究竟す。
いわゆるは、学の皮肉骨髄を体究するなり。

いわく、仏知者あり。

これは、生知にあらず、学知にあらず。
自他の際を超越して、遮裏に無端なり、自他知に無拘なり。

いわく、無師知者あり。

善知識によらず、経巻によらず、性によらず、相によらず、自を撥転せず、
他を回互せざれども露、堂堂なり。

これらの数般、ひとつを利と認じ、ふたつを鈍と認ぜざるなり。
多般、ともに、多般の功業を現成するなり。
しかあれば、いずれの情、無情か、生知にあらざらん？　と参学すべし。
生知あれば、生悟あり、生証明あり、生修行あり。
しかあれば、仏祖、すでに調御丈夫なる。
これを生悟と称しきたれり。
悟を拈来せる生なる(が)ゆえに、かくのごとし。
参飽、大悟する生悟なるべし。
拈悟の学なるゆえに、かくのごとし。
しかあれば、すなわち、
三界を拈じて大悟す。
百草を拈じて大悟す。
四大を拈じて大悟す。
仏祖を拈じて大悟す。
公案を拈じて大悟す。
みな、ともに、大悟を拈来して、さらに大悟するなり。
その正当恁麼時は、而今なり。

臨済院、慧照大師、云、
大唐国裏、覓、一人不悟者、難得。

いま、慧照大師の道取するところ、正脈しきたれる皮肉骨髄なり。
不是( or 不足)あるべからず。
大唐国裏というは、自己眼睛裏なり、尽界にかかわれず、塵刹にとどまらず。
遮裏に不悟者の一人をもとむるに難得なり。
自己の昨、自己も不悟者にあらず。
他己の今、自己も不悟者にあらず。
山人水人の古今、もとめて不悟を要するに、いまだ、えざるべし。
学人、かくのごとく臨済の道を参学せん。
虚、度、光陰なるべからず。
しかも、かくのごとくなりといえども、さらに祖宗の懐業を参学すべし。
いわく、しばらく、臨済に問すべし。

不悟者、難得のみをしりて、悟者、難得をしらずば、未、足、為、是なり。
不悟者、難得をも参究せると、いいがたし。
たとえ一人の不悟者をもとむるには難得なりとも、半人の不悟者ありて面目、雍容、巍巍、堂堂なる、相見しきたるや？　いまだしや？
たとえ大唐国裏に一人の不悟者をもとむるに難得なるを究竟とすることなかれ。
一人、半人のなかに両、三箇の大唐国をもとめ、こころみるべし。(難得なりや？　難得にあらずや？)

この眼目をそなえんとき、参飽の仏祖なり、とゆるすべし。

京兆、華厳寺、宝智大師、(嗣、洞山。諱、休静。)
因、僧、問、
大悟底人、却迷時、如何？
師、曰、
破鏡、不重、照。
落華、難、上、樹( or 枝)。

いまの問所は、問所なりといえども、示衆のごとし。
華厳の会にあらざれば、開演せず。
洞山の嫡子にあらざれば、加被すべからず。
まことに、これ、参飽、仏祖の方席なるべし。
いわゆる、大悟底人は、もとより大悟なりとにはあらず、余外に大悟して、たくわうるにあらず。
大悟は、公界におけるを、末上の老年に相見するにあらず。
自己より強為して牽挽、出来するにあらざれども、かならず、大悟するなり。
不迷なるを大悟とするにあらず。
大悟の種草のために、はじめて迷者とならん、と擬すべきにもあらず。
大悟人、さらに大悟す。
大迷人、さらに大悟す。
大悟人あるがごとく、大悟仏あり、大悟地水火風空あり、大悟露柱灯籠あり。
いまは、大悟底人と問取するなり。
大悟底人、却迷時、如何？　の問取、まことに、問取すべきを問取するなり。
華厳、きらわず叢席に慕古す。
仏祖の勲業なるべきなり( or べし)。
しばらく、功夫すべし。

大悟底人の却迷は、不悟底人と一等なるべしや？
大悟底人、却迷の時節は、
大悟を拈来して、迷を造作するか？
他那裏より迷を拈来して、大悟を蓋覆して却迷するか？
また、大悟底人は、一人にして、大悟をやぶらずといえども、さらに却迷を参ずるか？
また、大悟底人の却迷というは、さらに一枚の大悟を拈来するを却迷とするか？
と、かたがた参究すべきなり。
また、大悟、也、一隻手なり、却迷、也、一隻手なるか？
いかようにても、大悟底人の却迷ありと聴取するを参来の究徹なりとしるべし。
却迷を親曾ならしむる大悟ありとしるべきなり。
しかあれば、
認、賊、為、子を却迷とするにあらず。
認、子、為、賊を却迷とするにあらず。
大悟は、認、賊、為、賊なるべし。
却迷は、認、子、為、子なり。
多所、添、些子を大悟とす。
少所、減、些子、これ、却迷なり。
しかあれば、却迷者を摸著して把定了に大悟底人に相逢すべし。
而今の自己、これ、却迷なるか？　不迷なるか？　換点、将来すべし。
これを参見、仏祖とす。

師、云、破鏡、不重、照。落華、難、上、樹。
この示衆は、破鏡の正当恁麼時を道取するなり。
しかあるを、未破鏡の時節にこころをつかわして、しかも、破鏡のことばを参学するは、不是なり。
いま、華厳、道の破鏡、不重、照。落華、難、上、樹。の宗旨は、
大悟底人、不重、照といい、
大悟底人、難、上、樹といいて、
大悟底人、さらに却迷せず、
と道取する、と会取しつべし。
しかあれども、恁麼の参学にあらず。
人の、おもうがごとくならば、大悟底人、家常、如何？　とら、問取すべし。
これを答話せんに、有、却迷時とら、いわん。

而今の因縁、しかにはあらず。
大悟底人、却迷時、如何？　と問取するがゆえに、正当却迷時を未審するなり。
恁麼時節の道取、現成は、破鏡、不重、照なり、落華、難、上、樹なり。
落華の、まさしく、落華なるときは、百尺の竿頭に昇進するとも、なお、これ、落華なり。
破鏡の正当破鏡なるゆえに、そこばくの活計、見成すれども、おなじく、これ、不重、照の照なるべし。
破鏡と道取し、落華と道取する宗旨を拈来して、大悟底人、却迷の時節を参取すべきなり。
これは、大悟は作仏のごとし、却迷は衆生のごとし、還、作衆生といい、従、本、垂迹とら、いうがごとく、学すべきにはあらざるなり。
かれは、大覚をやぶりて衆生となるがごとく、いう。
これは、大悟やぶる(る)といわず、大悟うせぬるといわず、迷きたるといわざるなり。
かれらに、ひとしむべからず。
まことに、大悟、無端なり、却迷、無端なり。
大悟を罣礙する迷あらず。
大悟、三枚を拈来して、小迷、半枚をつくるなり。
ここをもって、
雪山の、雪山のために大悟するあり。
木、石は、木、石をかりて大悟す。
諸仏の大悟は、衆生のために大悟す。
衆生の大悟は、諸仏の大悟を大悟す。
前後にかかわれざるべし。
而今の大悟は、
自己にあらず。
他己にあらず。
きたるにあらざれども、填、溝、塞、壑なり。
さるにあらざれども、切、忌、随他覓なり。
なにとしてか、恁麼なる？
いわゆる、随他去なり。

京兆米胡、和尚、令、僧、問、仰山、
今時人、還、仮、悟？　否？
仰山、云、

悟、即、不無。
爭奈、落、第二頭、何？
僧、回、挙似、米胡。
胡、深、肯、之。

いわくの、今時は、人人の而今なり。
令、我、念、過去、未来、現在、いく千、万なりとも、今時なり、而今なり。
人の分上は、かならず、今時なり。
あるいは、眼睛を今時とせるあり。
あるいは、鼻孔を今時とせるあり。

還、仮、悟？　否？
この道をしずかに参究して、胸襟にも換却すべし、頂𩕳にも換却すべし。
(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)

近日、大宋国、禿子、等、いわく、悟道、是、本、期。
かくのごとく、いいて、いたずらに待、悟す。
しかあれども、仏祖の光明にてらされざるがごとし。
ただ真善知識に参取すべきを、懶堕にして蹉過するなり。
古仏の出世にも、度脱せざりぬべし。
いまの、還、仮、悟？　否？　の道取は、
さとりなしといわず。
ありといわず。
きたるといわず。
かるや？　いなや？　という。
今時人の悟りは、いかにして、悟れるぞ？　と道取せんがごとし。
たとえば、悟りを得といわば、日頃は、無かりつるか？　とおぼゆ。
悟り、来たれりと言わば、日頃は、その悟り、いずれの所にありけるぞ？
とおぼゆ。
悟りと成れりと言わば、悟り、初め有り、とおぼゆ。
かくのごとく言わず、かくのごとくならずといえども、悟りのありようを言う時に、悟りをかるや？　とは言うなり。
しかあるを、悟りというは、第二頭へ堕つるを、いかんがすべき？　と言いつれば、第二頭も悟りなり、と言うなり。
第二頭というは、
悟りに成りぬると言いや？

悟りを得と言いや？( or 言うや？)
悟り来たれりと言わんがごとし。
成りぬと言うも、来たれりと言うも、悟りなりと言うなり。
しかあれば、第二頭に堕つる事をいたみながら、第二頭を無からしむるがごとし。
悟りの成れらん第二頭は、また、真の第二頭なりとも、おぼゆ。
しかあれば、たとえ第二頭なりとも、たとえ百、千頭なりとも、悟りなるべし。
第二頭あれば、これより上に第一頭の有るを残せるにはあらぬなり。
たとえば、昨日の我を我とすれども、昨日は今日を第二人と言わんがごとし。
而今のさとり、昨日にあらずと言わず、今、始めたるにあらず、かくのごとく参取するなり。
しかあれば、大悟頭、黒なり、大悟頭、白なり。

正法眼蔵　大悟
爾時、仁治三年壬寅、春、正月二十八日、住、観音導利院興聖宝林寺、示、衆。
而今、寛元二年甲辰、春、正月二十七日、駐錫、越宇、吉峰古寺、而、書、示、於、人、天、大衆。
同二年甲辰、春、三月二十日、侍、越宇、吉峰精舎、堂奥次、書写、之
懐弉。

# 坐禅箴

薬山、弘道大師、坐次、有、僧、問、
兀兀地、思量、什麼？
師、云、
思量、箇不思量底。
僧、曰、
不思量底、如何、思量？
師、云、
非思量。

大師の道、かくのごとくなるを証して、兀坐を参学すべし。
兀坐、正伝すべし。
兀坐の仏道につたわれる参究なり。
兀兀地の思量、ひとりにあらずといえども、薬山の道は其一なり。
いわゆる、思量、箇不思量底なり。
思量の皮肉骨髄なるあり。
不思量の皮肉骨髄なるあり。
僧のいう、不思量底、如何、思量？
まことに、不思量底、たとえ、ふるくとも、さらに、これ、如何、思量？
なり。
兀兀地に思量なからんや？
兀兀地の向上、なにによりてか、通ぜざる？
賤近の愚にあらずば、兀兀地を問著する力量あるべし。
思量あるべし。
大師、いわく、非思量。
いわゆる、非思量を使用すること玲瓏なりといえども、不思量底を思量するには、かならず、非思量をもちいるなり。
非思量に、だれ、あり？
だれ、我を保任す？
兀兀地、たとえ我なりとも、思量のみにあらず、兀兀地を挙頭するなり。
兀兀地、たとえ兀兀地なりとも、兀兀地、いかでか、兀地を思量せん？
しかあれば、すなわち、兀兀地は、
仏量にあらず。
法量にあらず。

悟量にあらず。
会量にあらざるなり。
薬山、かくのごとく単伝すること、すでに、釈迦牟尼仏より直下、三十六代なり。
薬山より向上をたずぬるに、三十六代に釈迦牟尼仏あり。
かくのごとく正伝せる、すでに、思量、箇不思量底、あり。

しかあるに、近年、おろかなる杜撰、いわく、
功夫、坐禅、得、胸襟、無事、了。
便是、平穏地、也。

この見解、なお小乗の学者におよばず、人、天乗よりも、劣なり。
いかでか、学仏法の漢といわん？
見在、大宋国に恁麼の功夫人、おおし。
祖道の荒蕪、かなしむべし。
又、一類の漢あり、坐禅、弁道は、これ、初心、晩学の要機なり、かならずしも仏祖の行履にあらず、行、亦、禅。坐、亦、禅。語、黙。動、静。体、安然。なり。
ただいまの功夫のみにかかわることなかれ。
臨済の余流と称するともがら、おおく、この見解なり。
仏法の正命つたわれること、おろそかなるによりて、恁麼、道するなり。

なにか、これ、初心？
いずれが初心にあらざる？
初心、いずれのところにか、おく？

しるべし。
学道の、さだまれる参究には、坐禅、弁道するなり。
その榜様の宗旨は、作仏をもとめざる行仏あり。
行仏、さらに、作仏にあらざるがゆえに、公案、見成なり。
身仏、さらに、作仏にあらず。
羅籠を打破すれば、坐仏、さらに、作仏をさえず。
正当恁麼のとき、千古万古、ともに、もとより、仏にいり、魔にいる、ちからあり。
進歩、退歩、したしく溝にみち、壑にみつ量あるなり。

江西、大寂禅師、ちなみに、南嶽、大慧禅師に参学するに、密受、心印より、このかた、つねに坐禅す。
南嶽、あるとき、大寂のところにゆきて、とう、
大徳、
坐禅、図、箇、什麼？

この問、しずかに功夫、参究すべし。
そのゆえは、
坐禅より向上にあるべき図のあるか？
坐禅より格外に図すべき道の、いまだしきか？
すべて図すべからざるか？
当時、坐禅せるに、いかなる図か現成する？　と問著するか？
審細に功夫すべし。
彫龍を愛するより、すすみて、真龍を愛すべし。
彫龍、真龍、ともに、雲、雨の能あること学習すべし。
遠を貴することなかれ。遠を賤することなかれ。遠に慣熟なるべし。
近を賤することなかれ。近を貴することなかれ。近に慣熟なるべし。
目をかろくすることなかれ。目をおもくすることなかれ。
耳をおもくすることなかれ。耳をかろくすることなかれ。
耳、目をして聡明ならしむべし。

江西、いわく、図、作仏。

この道、あきらめ、達すべし。
作仏と道取するは、いかに、あるべきぞ？
仏に作仏せらるるを、作仏と道取するか？
仏を作仏するを、作仏と道取するか？
仏の一面出、両面出するを、作仏と道取するか？
図、作仏は脱落にして、脱落なる図、作仏か？
作仏、たとえ万般なりとも、この図に葛藤しもってゆくを、図、作仏と道取するか？
しるべし。
大寂の道は、坐禅、かならず、図、作仏なり、坐禅、かならず、作仏の図なり。
図は作仏より前なるべし、作仏より後なるべし、作仏の正当恁麼時なるべし。
且問すらくは、この一図、いくそばくの作仏を葛藤す、とかせん？

この葛藤、さらに葛藤をまつうべし。
このとき、尽作仏の条条なる葛藤、かならず、尽作仏の端的なる、みな、ともに、条条の図なり。
一図を回避すべからず。
一図を回避するときは、喪身失命するなり。
喪身失命するとき、一図の葛藤なり。

南嶽、ときに、一瓦をとりて、石上にあてて、とぐ。
大寂、ついに、とうに、いわく、師、作、什麼？

まことに、
だれが、これを磨、瓦とみざらん？
だれが、これを磨、瓦とみん？
しかあれども、磨、瓦は、かくのごとく、作、什麼？　と問せられきたるなり。
作、什麼？　なるは、かならず、磨、瓦なり。
此土、他界、ことなりといえども、磨、瓦、いまだ、やまざる宗旨あるべし。
自己の所見を自己の所見と決定せざるのみにあらず、万般の作業に、参学すべき宗旨あることを一定するなり。
しるべし。
仏をみるに仏をしらず、会せざるがごとく、
水をみるをも、しらず、
山をみるをも、しらざるなり。
眼前の法、さらに通路あるべからず、と倉卒なるは、仏学にあらざるなり。

南嶽、いわく、磨、作、鏡。

この道旨、あきらむべし。
磨、作、鏡は、道理、かならず、あり。
見成の公案あり。虚設なるべからず。
瓦は、たとえ瓦なりとも、鏡は、たとえ鏡なりとも、磨の道理を力究するに、許多の榜様あることをしるべし。
古鏡も、明鏡も、磨、瓦より作鏡をうるなるべし。
もし諸鏡は、磨、瓦より、きたるとしらざれば、仏祖の道得なし、仏祖の開口なし、仏祖の出気を見聞せず。

大寂、いわく、磨、瓦、豈、得、成、鏡、耶？

まことに、磨、瓦の鉄漢なる、他の力量をからざれども、磨、瓦は、成、鏡にあらず。
成、鏡、たとえ聻なりとも、すみやかなるべし。

南嶽、いわく、坐禅、豈、得、作仏、耶？

あきらかに、しりぬ。
坐禅の、作仏をまつにあらざる道理あり。
作仏の、坐禅にかかわれざる宗旨かくれず。

大寂、いわく、如何、即、是？

いまの道取、ひとすじに這頭の問著に相似せりといえども、那頭の是をも問著するなり。
たとえば、親友の、親友に相見する時節をしるべし。
われに親友なるは、かれに親友なり。
如何、即、是、すなわち、一時の出現なり。

南嶽、いわく、如、人、駕、車、車、若、不行、打、車、即、是？　打、牛、即、是？

しばらく、車、若、不行というは、
いかならんか、これ、車、行？
いかならんか、これ、車、不行？
たとえば、
水、流は、車、行なるか？
水、不流は、車、行なるか？
流は、水の不行というつべし。
水の行は、流にあらざるもあるべきなり。
しかあれば、車、若、不行の道を参究せんには、不行ありとも参ずべし、不行なしとも参ずべし。時なるべきがゆえに。
若、不行の道、ひとえに不行と道取せるにあらず。
打、車、即、是？　打、牛、即、是？　という。
打、車もあり、打、牛もあるべきか？
打、車と打、牛と、ひとしかるべきか？　ひとしからざるべきか？

世間に打、車の法なし、凡夫に打、車の法なくとも、仏道に打、車の法あることをしりぬ、参学の眼目なり。
たとえ打、車の法あることを学すとも、打、牛と一等なるべからず。
審細に功夫すべし。
打、牛の法、たとえ、よのつねにありとも、仏道の打、牛は、さらに、たずね、参学すべし。
水牯牛を打、牛するか？
鉄牛を打、牛するか？
泥牛を打、牛するか？
鞭、打なるべきか？
尽界、打なるべきか？
尽心、打なるべきか？
打、併、髄なるべきか？
拳頭、打なるべきか？
拳、打、拳あるべし。
牛、打、牛あるべし。

大寂、無対なる。

いたずらに蹉過すべからず。
抛、瓦、引、玉あり。
回頭、換面あり。
この無対、さらに攙奪すべからず。

南嶽、また、しめして、いわく、汝、学、坐禅、為、学、坐仏。

この道取を参究して、まさに祖宗の要機を弁取すべし。
いわゆる、学、坐禅の端的、いかなり？　としらざるに、学、坐仏としりぬ。
正嫡の児孫にあらずよりは、いかでか、学、坐禅の、学、坐仏なる、と道取せん？
まことに、しるべし。
初心の坐禅は、最初の坐禅なり。
最初の坐禅は、最初の坐仏なり。

坐禅を道取するに、いわく、若、学、坐禅、禅、非、坐臥。

いまいうところは、坐禅は、坐禅なり、坐臥にあらず。

坐臥にあらずと単伝するより、このかた、無限の坐臥は自己なり。
なんぞ、親、疎の命脈をたずねん？
いかでか、迷、悟を論ぜん？
だれが智断をもとめん？

南嶽、いわく、若、学、坐仏、仏、非、定相。

いわゆる、道取を道取せんには恁麼なり。
坐仏の一仏、二仏のごとくなるは、非定相を荘厳とせるによりてなり。
いま、仏、非、定相と道取するは、仏相を道取するなり。
非定相仏なるがゆえに、坐仏、さらに回避しがたきなり。
しかあれば、すなわち、仏、非、定相の、荘厳なるゆえに、若、学、坐禅、すなわち、坐仏なり。
だれが、無住法におきて、ほとけにあらずと取捨し、ほとけなりと取捨せん？
取捨、さきより脱落せるによりて、坐仏なるなり。

南嶽、いわく、汝、若、坐仏、即是、殺仏。
いわゆる、さらに坐仏を参究するに、殺仏の功徳あり。
坐仏の正当恁麼時は、殺仏なり。
殺仏の相好光明は、たずねんとするに、かならず、坐仏なるべし。
殺の言、たとえ凡夫のごとくにひとしくとも、ひとえに凡夫と同ずべからず。
また、坐仏の、殺仏なるは、有、什麼、形段？　と参究すべし。
仏功徳、すでに殺仏あるを拈挙して、われらが殺人、未殺人をも参学すべし。

若、執、坐相、非、達、其理。

いわゆる、執、坐相とは、坐相を捨し、坐相を触するなり。
この道理は、すでに坐仏するには、不執、坐相なること、えざるなり。
不執、坐相なること、えざるがゆえに、執、坐相は、たとえ玲瓏なりとも、非、達、其理なるべし。
恁麼の功夫を脱落、身心という。
いまだ、かつて、坐せざるものに、この道のあるにあらず。
打坐時にあり、打坐人にあり、打坐仏にあり、学坐仏にあり。
ただ人の坐臥する坐の、この打坐仏なるにあらず。

人坐の、おのずから坐仏、仏坐に相似なりといえども、人、作仏あり、作仏人あるがごとし。
作仏人ありといえども、一切人は作仏にあらず。
ほとけは、一切人にあらず。
一切仏は、一切人のみにあらざるがゆえに、人、かならず仏にあらず。
仏、かならず、人にあらず。
坐仏も、かくのごとし。

南嶽、江西の師勝資強、かくのごとし。
坐仏の、作仏を証する、江西、これなり。
作仏のために坐仏をしめす、南嶽、これなり。
南嶽の会に恁麼の功夫あり。

薬山の会に向来の道取あり。

しるべし、仏仏、祖祖、要機とせるは、これ、坐仏なり、ということを。
すでに仏仏、祖祖とあるは、この要機を使用せり。
いまだしきは、夢也未見在なるのみなり。
おおよそ、西天、東地に仏法つたわるというは、かならず、坐仏のつたわるなり。
それ、要機なるによりてなり。
仏法、つたわれざるには、坐禅、つたわれず。
嫡嫡、相承せるは、この坐禅の宗旨のみなり。
この宗旨、いまだ単伝せざるは、仏祖にあらざるなり。
この一法、あきらめざれば、万法、あきらめざるなり、万行、あきらめざるなり。
法法、あきらめざらんは、明眼というべからず、得道にあらず、いかでか仏祖の今古ならん？
ここをもって、仏祖、かならず坐禅を単伝する、と一定すべし。
仏祖の光明に照臨せらるというは、この坐禅を功夫、参究するなり。
おろかなるともがらは、仏光明をあやまりて、日、月の光明のごとく、珠、火の光耀のごとくあらんずる、とおもう。
日、月、光耀は、わずかに六道輪廻の業相なり、さらに仏光明に比すべからず。
仏光明というは、一句を受持、聴聞し、一法を保任、護持し、坐禅を単伝するなり。

光明にてらさるるにおよばざれば、この保任なし、この信受なきなり。
しかあれば、すなわち、古来なりといえども、坐禅を坐禅なり、としれる、すくなし。
いま、現在、大宋国の諸山に甲刹の主人とあるもの、坐禅をしらず、学せざる、おおし。
あきらめ、しれる、ありといえども、すくなし。
諸寺に、もとより坐禅の時節、さだまれり。
住持より諸僧、ともに、坐禅するを本分の事とせり。
学者を勧誘するにも坐禅をすすむ。
しかあれども、しれる住持人は、まれなり。
このゆえに、
古来より近代にいたるまで、
坐禅銘を記せる老宿、一、両位あり、
坐禅儀を撰せる老宿、一、両位あり、
坐禅箴を記せる老宿、一、両位あるなかに、
坐禅銘、ともにとるべきところなし。
坐禅儀、いまだ、その行履にくらし。
坐禅をしらず、坐禅を単伝せざるともがらの記せるところなり。
景徳伝灯録にある坐禅箴、および、嘉泰普灯録にあるところの坐禅銘、等なり。
あわれむべし、
十方の叢林に経歴して一生をすごすといえども、一坐の功夫あらざることを。
打坐、すでに、なんじにあらず、功夫、さらに、おのれと相見せざることを。
これ、坐禅の、おのが身心をきらうにあらず。
真箇の功夫をこころざさず、倉卒に迷、酔せるによりてなり。
かれらが所集は、ただ還源返本の様子なり、いたずらに息慮凝寂の経営なり。
観練薫修の階級におよばず。
十地等覚の見解におよばず。
いかでか、仏仏、祖祖の坐禅を単伝せん？
宋朝の録者、あやまりて録せるなり。
晩学、すてて、みるべからず。
坐禅箴は、大宋国、慶元府、太白名山、天童、景徳寺、宏智禅師、正覚和尚の撰せるのみ、
仏祖なり。
坐禅箴なり。

道得、是なり。
ひとり法界の表裏に光明なり。
古今の仏祖に仏祖なり。
前仏、後仏、この箴に箴せられもってゆき、
今祖、古祖、この箴より現成するなり。
かの坐禅箴は、すなわち、これなり。

坐禅箴　勅謚、宏智禅師、正覚、撰。

仏仏、要機、祖祖、機要、
不触、事、而、知。
不対、縁、而、照。
不触、事、而、知。其知、自、微。
不対、縁、而、照。其照、自、妙。
其知、自、微、曾、無、分別之思。
其照、自、妙、曾、無、毫忽之兆。
曾、無、分別之思。其知、無偶、而、奇。
曾、無、毫忽之兆。其照、無取、而、了。
水、清、徹底、兮、魚、行、遅遅。
空、闊、莫、涯、兮、鳥、飛、杳杳。

いわゆる、坐禅箴の箴は、
大用、現前なり。
声色、向上の威儀なり。
父母未生前の節目なり。
莫、謗、仏祖、好なり。
未免、喪身失命なり。
頭長、三尺、頸短、二寸なり。

仏仏、要機。
仏仏は、かならず、仏仏を要機とせる。
その要機、現成せり、これ、坐禅なり。

祖祖、機要。
先師、無、此語なり。
この道理、これ、祖祖なり。

法伝、衣伝あり。

おおよそ、
回頭、換面の面面、これ、仏仏の要機なり。
換面、回頭の頭頭、これ、祖祖の機要なり。

不触、事、而、知。
知は、覚知にあらず。
覚知は、小量なり。
了知の知にあらず。
了知は、造作なり。
かるがゆえに、
知は、不触、事なり。
不触、事は、知なり。
遍知と度量すべからず。
自知と局量すべからず。
その不触、事というは、
明頭来、明頭打、暗頭来、暗頭打なり。
坐、破、孃、生、皮なり。

不対、縁、而、照。
この照は、照了の照にあらず、霊照にあらず。
不対、縁を照とす。
照の、縁と化せざるあり。
縁、これ、照なるがゆえに。
不対というは、
遍界、不曾蔵なり。
破界、不出頭なり。
微なり。
妙なり。
回互、不回互なり。

其知、自、微、曾、無、分別之思。
思の、知なる、かならずしも、他力をからず。
其知は、形なり。
形は、山河なり。

この山河は、微なり。
この微は、妙なり。
使用するに、活鱍々なり。
龍を作するに、禹門の内外にかかわれず。
いまの一知、わずかに使用するは、尽界、山河を拈来し尽力して、知するなり。
山河の親切に、わが知なくば、一知、半解、あるべからず。
分別思量の、おそく来到する、となげくべからず。
已、曾、分別なる仏仏、すでに現成しきたれり。
曾、無は、已、曾なり。
已、曾は、現成なり。
しかあれば、すなわち、曾、無、分別は、不逢、一人なり。

其照、自、妙、曾、無、毫忽之兆。
毫忽というは、尽界なり。
しかあるに、自、妙なり、自、照なり。
このゆえに、いまだ将来せざるがごとし。
目をあやしむことなかれ。
耳を信ずべからず。
直、須、旨外、明、宗、莫、向、言中、取、則なるは、照なり。
このゆえに、無偶なり。
このゆえに、無取なり。
これを奇なりと住持しきたり、了なりと保任しきたるに、我、却、疑著なり。

水、清、徹底、兮、魚、行、遲遲。
水、清というは、空にかかれる水は清水に不徹底なり。
いわんや、器界に泓澄する、水、清の水にあらず。
辺際に涯、岸なき、これを徹底の清水とす。
魚、もし、この水をゆくは、行なきにあらず。
行は、いく万程となくすすむといえども、不測なり、不窮なり。
はかる岸なし、うかぶ空なし、しずむそこなきがゆえに、測度する、だれ、なし。
測度を論ぜんとすれば、徹底の清水のみなり。
坐禅の功徳、かの魚、行のごとし。
千程、万程、だれが、卜度せん？
徹底の行程は、挙体の不行、鳥道なり。

空、闊、莫、涯、兮、鳥、飛、杳杳。
空、闊というは、天にかかれるにあらず。
天にかかれる空は闊、空にあらず。
いわんや、彼此に普遍なるは闊、空にあらず。
隠、顕に表裏なき、これを闊、空という。
鳥、もし、この空をとぶは、飛空の一法なり。
飛空の行履、はかるべきにあらず。
飛空は尽界なり。
尽界、飛空なるがゆえに。
この飛、いくそばくということしらずといえども、卜度のほかの道取を道取するに、杳杳と道取するなり。
直、須、足下、無糸、去なり。
空の、飛去するとき、鳥も飛去するなり。
鳥の、飛去するに、空も飛去するなり。
飛去を参究する道取に、いわく、只、在、這裏なり。
これ、兀兀地の箴なり。
いく万程か、只、在、這裏をきおい、いう？

宏智禅師の坐禅箴、かくのごとし。
諸代の老宿のなかに、いまだ、いまのごとくの坐禅箴あらず。
諸方の臭皮袋、もし、この坐禅箴のごとく道取せしめんに、一生、二生のちからをつくすとも、道取せんこと、うべからざるなり。
いま、諸方にみえず。
ひとり、この箴のみ、あるなり。
先師、上堂の時、よのつねに、いわく、宏智、古仏なり。
自余の漢を恁麼いうこと、すべてなかりき。
知、人の眼目あらんとき、仏祖をも知、音すべきなり。
まことに、しりぬ、洞山に仏祖あることを。
いま、宏智禅師よりのち八十余年なり。
かの坐禅箴をみて、この坐禅箴を撰す。
いま、仁治三年壬寅、三月十八日なり。
今年より紹興二十七年十月八日にいたるまで、前後を算数するに、わずかに八十五年なり。
いま、撰する坐禅箴、これなり。

坐禅箴。

仏仏、要機、祖祖、機要、
不思量、而、現。
不回互、而、成。
不思量、而、現。其現、自、親。
不回互、而、成。其成、自、証。
其現、自、親、曾、無、染汚。
其成、自、証、曾、無、正、偏。
曾、無、染汚之親。其親、無委、而、脱落。
曾、無、正、偏之証。其証、無図、而、功夫。
水、清、徹、地、兮、魚、行、似、魚。
空、闊、透、天、兮、鳥、飛、如、鳥。

宏智禅師の坐禅箴、それ、道、未、是にあらざれども、さらに、かくのごとく道取すべきなり。
おおよそ、仏祖の児孫、かならず、坐禅を一大事なりと参学すべし。
これ単伝の正、印なり。

正法眼蔵　坐禅箴
仁治三年壬寅、三月十八日、記、興聖宝林寺。
同、四年癸卯、仁、冬、十一月、在、越州、吉田県、吉峰精舎、示、衆。

# 仏向上事

高祖、筠州、洞山、悟本大師は、潭州、雲巌山、無住大師の親嫡嗣なり。
如来より三十八位の祖向上なり、
自己より向上、三十八位の祖なり。

大師、有時、示、衆、云、
体得、仏向上事、方、有、些子語話分。
僧、便、問、
如何、是、語話？
大師、云、
語話時、闍梨、不聞。
僧、曰、
和尚、還、聞？　否？
大師、云、
待、我不語話時、即、聞。

いま、いうところの、仏向上事の道、大師、その本祖なり。
自余の仏祖は、大師の道を参学しきたり、仏向上事を体得するなり。
まさに、しるべし。
仏向上事は、在因にあらず、果満にあらず。
しかあれども、語話時の不聞を体得し参徹することあるなり。
仏向上にいたらざれば、仏向上を体得することなし。
語話にあらざれば、
仏向上事を体得せず。
相顕にあらず。相隠にあらず。
相与にあらず。相奪にあらず。
このゆえに、語話、現成のとき、これ、仏向上事なり。
仏向上事、現成のとき、闍梨、不聞なり。
闍梨、不聞というは、仏向上事、自、不聞なり。
(すでに)語話時、闍梨、不聞なり。
しるべし。
語話、それ、聞に染汚せず、不聞に染汚せず。
このゆえに、聞、不聞に不相干なり。
不聞裏、蔵、闍梨なり。

語話裏、蔵、闍梨なりとも、逢、人、不逢、人。恁麼、不、恁麼。なり。
闍梨、語話時、すなわち、闍梨、不聞なり。
その不聞たらくの宗旨は、
舌骨に罣礙せられて不聞なり。
耳裏に罣礙せられて不聞なり。
眼睛に照穿せられて不聞なり。
身心に塞却せられて不聞なり。
しかあるゆえに、不聞なり。
これらを拈じて、さらに語話とすべからず。
不聞、すなわち、語話なるにあらず。
語話時、不聞なるのみなり。
高祖、道の語話時、闍梨、不聞は、
語話の道頭、道尾は、如、藤、倚、藤。なりとも、語話、纏、語話。なるべし、語話に罣礙せらる。

僧、いわく、和尚、還、聞？　否？
いわゆるは、
和尚を挙して聞、語話？　と擬するにあらず。
挙問( or 挙聞)さらに和尚にあらず。
語話にあらざるがゆえに。
しかあれども、いま、僧の擬議するところは、語話時に即、聞を参学すべしや？　いなや？　と咨参するなり。
たとえば、
語話、すなわち、語話なりや？　と聞取せんと擬し、
還、聞、これ、還、聞なりや？　と聞取せんと擬するなり。
しかも、かくのごとくいうとも、なんじが舌頭にあらず。

洞山高祖、道の待、我不語話時、即、聞、あきらかに参究すべし。
いわゆる、正当語話のとき、さらに即、聞あらず。
即、聞の現成は、不語話のときなるべし。
いたずらに不語話のときをさしおきて、不語話をまつにはあらざるなり。
即、聞のとき、語話を傍観とするにあらず。
真箇に傍観なるがゆえに。
即、聞のとき、語話、さりて、一辺の那裏に存取せるにあらず。
語話のとき、即、聞、したしく語話の眼睛裏に蔵、身して霹靂するにあらず。
しかあれば、すなわち、たとえ闍梨にても、語話時は不聞なり。

たとえ我にても、不語話時、即、聞なる、
これ、方、有、些子語話分なり。
これ、体得、仏向上事なり。
たとえば、語話時、即、聞を体得するなり。
このゆえに、待、我不語話時、即、聞なり。
しかありといえども、仏向上事は、七仏已前事にあらず、七仏向上事なり。

高祖、悟本大師、示、衆、云、
須、知、有、仏向上人。
時、有、僧、問、
如何、是、仏向上人？
大師、云、
非、仏。

雲門、曰、
名、不得、状、不得、所以、言、非。

保福、曰、
仏、非。

法眼、曰、
方便、呼、為、仏。

おおよそ、仏祖の向上に仏祖なるは、高祖、洞山なり。
そのゆえは、余外の仏面祖面、おおしといえども、いまだ仏向上の道は夢也未見なり。
徳山、臨済、等には、為、説すとも、承当すべからず。
巌頭、雪峰、等は、粉砕其身すとも、喫、拳すべからず。
高祖、道の体得、仏向上事、方、有、些子語話分、および、須、知、有、仏向上人、等は、ただ一、二、三、四、五の三阿僧祇、百大劫の修、証のみにては証究すべからず。
まさに、玄路の参学あるもの、その分、ありぬべし( or あるべし)。
すべからく、仏向上人あり、としるべし。
いわゆるは、弄精魂の活計なり。
しかありといえども、古仏を挙して、しり、拳頭を挙起して、しる。

すでに恁麼、見得するがごときは、有、仏向上人をしり、無、仏向上人をしる。
而今の示衆は、
仏向上人となるべしとにあらず。
仏向上人と相見すべしとにあらず。
ただ、しばらく、仏向上人あり、としるべしとなり。
この関棙子を使得するがごときは、まさに、有、仏向上人を不知するなり、無、仏向上人を不知するなり。
その仏向上人、これ、非、仏なり。
いかならんか、非、仏？　と疑著せられんとき、思量すべし。
仏より以前なるゆえに、非、仏といわず。
仏よりのちなるゆえに、非、仏といわず。
仏をこゆるゆえに、非、仏なるにあらず。
ただ、ひとえに仏向上なるゆえに、非、仏なり。
その非、仏というは、
脱落、仏面目なるゆえにいう。
脱落、仏身心なるゆえにいう。

東京、浄因、枯木禅師。(嗣、芙蓉。諱、法成。)
示、衆、云、
知、有、仏祖向上事、方、有、説話分。
諸禅徳、
且、道、
那箇、是、仏祖向上事？
有、箇人家、児子、
六根、不具。
七識、不全。
是、大、闡提。
無、仏種性。
逢、仏、殺、仏。
逢、祖、殺、祖。
天堂、収不得。
地獄、摂、無、門。
大衆、還、識、此人、麼？

良、久、曰、

対面、不、仙陀。
睡、多、饒、寐語。

いわゆる、六根、不具というは、
眼睛、被、人、換却、木槵子、了、也。
鼻孔、被、人、換却、竹筒、了、也。
髑髏、被、人、借作、屎杓、了、也。
作麼生、是、換却底、道理？
このゆえに、六根、不具なり。
不具、六根なるゆえに、
炉、鞴裏を透過して金仏となれり。
大海裏を透過して泥仏となれり。
火焔裏を透過して木仏となれり。

七識、不全というは、破木杓なり。

殺、仏すといえども、逢、仏す。
逢、仏せるゆえに、殺、仏す。

天堂にいらんと擬すれば、天堂、すなわち、崩壊す。

地獄にむかえば、地獄、たちまちに破裂す。

このゆえに、対面すれば、破顔す。さらに、仙陀なし。

睡、多なるにも、なお、寐語、おおし。

しるべし。
この道理は、
挙山、匝地、両、知、己。
玉、石、全身( or 金身)、百雑砕なり。
枯木禅師の示衆、しずかに参究、功夫すべし。
卒爾にすることなかれ。

雲居山、弘覚大師、参、高祖、洞山。
山、問、
闍梨、名、什麼？

雲居、曰、
道膺。
高祖、又、問、
向上、更、道。
雲居、曰、
向上、道、即、不名、道膺。
洞山、道、
吾、在、雲巌時、祗対、無異、也。

いま、師資の道、かならず、審細にすべし。
いわゆる、向上、不名、道膺は、道膺の向上なり。
適来の道膺に向上の不名、道膺あることを参学すべし。
向上、不名、道膺の道理、現成するより、このかた、真箇道膺なり。
しかあれども、向上にも道膺なるべしということなかれ。
たとえ高祖、道の向上、更、道をきかんとき、領話を呈するに向上、更、名、道膺と道著すとも、すなわち、向上道なるべし。
なにとしてか、しか、いう？
いわく、道膺、たちまちに頂󠄀に跳入して蔵身するなり。(「󠄀」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
蔵身すといえども、露影なり。

曹山本寂禅師、参、高祖、洞山。
山、問、
闍梨、名、什麼？
曹山、曰、
本寂。
高祖、云、
向上、更、道。
曹山、曰、
不道。
高祖、云、
為、甚麼、不道？
師、曰、
不名、本寂。
高祖、然、之。

いわく、向上に道なきにあらず。
これ、不道なり。
為、甚麼、不道？
いわゆる、不名、本寂なり。
しかあれば、
向上の道は、不道なり。
向上の不道は、不名なり。
不名の本寂は、向上の道なり。
このゆえに、本寂、不名なり。
しかあれば、
非、本寂あり。
脱落の不名あり。
脱落の本寂あり。

盤山宝積禅師、云、
向上一路、千聖、不伝。

いわくの、向上一路は、ひとり盤山の道なり。
向上事といわず、向上人といわず、向上一路というなり。
その宗旨は、千聖、競頭して出来すといえども、向上一路は不伝なり。
不伝というは、千聖は不伝の分を保護するなり。
かくのごとくも学すべし。
さらに、また、いうべきところあり。
いわゆる、千聖、千賢は、なきにあらず、たとえ賢、聖なりとも、向上一路は賢、聖の境界にあらず、と。

智門山、光祚禅師、因、僧、問、
如何、是、仏向上事？
師、云、
拄杖、頭上、挑、日、月。

いわく、拄杖の日、月に罣礙せらるる、これ、仏向上事なり。
日、月の拄杖を参学するとき、尽乾坤くらし、これ、仏向上事なり。
日、月、これ、拄杖とにあらず。
拄杖、頭上とは、全拄杖(上)なり。

石頭、無際大師の会に、天皇寺の道悟禅師、とう、
如何、是、仏法、大意？
師、云、
不得、不知。
道悟、曰、
向上、更、有、転所、也？　無？
師、云、
長空、不礙、白雲飛。

いわく、石頭は、曹谿の二世なり。
天皇寺の道悟和尚は、薬山の師弟なり。

あるとき、とう、いかならんか、仏法、大意？
この問は、初心、晩学の所堪にあらざるなり。
大意をきかば、大意を会取しつべき時節にいうなり。

石頭、いわく、不得、不知。
しるべし。
仏法は、初一念にも大意あり、究竟位にも大意あり。
その大意は、不得なり。
発心、修行、取証は、なきにあらず、不得なり。
その大意は、不知なり。
修、証は無にあらず、修、証は有にあらず、不知なり、不得なり。
また、その大意は、不得、不知なり。
聖諦、修、証なきにあらず、不得、不知なり。
聖諦、修、証あるにあらず、不得、不知なり。

道悟、いわく、向上、更、有、転所、也？(　無？)
いわゆるは、転所、もし現成することあらば、向上、現成す。
転所というは、方便なり。
方便というは、諸仏なり、諸祖なり。
これを道取するに、更、有？　なるべし。
たとえ更、有なりとも、更、無をもらすべきにあらず、道取あるべし。

長空、不礙、白雲飛は、石頭の道なり。
長空、さらに長空を不礙なり。

長空、これ、長空飛を不礙なりといえども、さらに白雲みずから白雲を不礙なり。
白雲飛、不礙なり。
白雲飛、さらに長空飛を礙せず。
他に不礙なるは、自にも不礙なり。
面面の不礙を要するにはあらず、各各の不礙を存するにあらず。
このゆえに、不礙なり。
長空、不礙、白雲飛の性、相を挙拈するなり。
正当恁麼時、この参学眼を揚眉して、仏来をも覰見し、祖来をも相見す。
自来をも相見し、他来をも相見す。
これを問、一、答、十の道理とせり。
いま、いう、問、一、答、十は、問、一も、その人なるべし、答、十も、その人なるべし。

黄檗、云、
夫、出家人、
須、知、有、従上来事分。
且、如、四祖下、牛頭法融大師、横説竪説、猶、未知、向上、関棙子。
有、此眼、脳、方、弁得、邪正、宗、党。

黄檗、恁麼道の従上来事は、従上、仏仏、祖祖、正伝しきたる事なり。
これを正法眼蔵、涅槃妙心という。
自己にありというとも、須、知なるべし。
自己にありといえども、猶、未知なり。
仏仏、正伝せざるは夢也未見なり。
黄檗は、百丈の法子として、百丈よりも、すぐれ、馬祖の法孫として、馬祖よりも、すぐれたり。
おおよそ、祖宗、三、四世のあいだ、黄檗に斉肩なる、なし。
ひとり黄檗のみありて牛頭の両角なきことをあきらめたり。
自余の仏祖、いまだ、しらざるなり。
牛頭山の法融禅師は、四祖下の尊宿なり。
横説竪説、まことに、経師、論師に比するには、西天、東地のあいだ、不、為、不足なりといえども、うらむらくは、いまだ向上の関棙子をしらず、向上の関棙子を道取せざることを。
もし従上来の関棙子をしらざらんは、いかでか仏法の邪正を弁、会することあらん？

ただ、これ、学言語の漢なるのみなり。
しかあれば、向上の関棙子をしること、向上の関棙子を修行すること、向上の関棙子を証すること、庸流のおよぶところにあらざるなり。
真箇の功夫あるところには、かならず、現成するなり。

いわゆる、仏向上事というは、仏にいたりて、すすみて、さらに仏をみるなり。
衆生の、仏をみるに、おなじきなり。
しかあれば、すなわち、見仏、もし衆生の見仏とひとしきは、見仏にあらず。
見仏、もし衆生の見仏のごとくなるは、見仏、錯なり。
いわんや、仏向上事ならんや？
しるべし。
黄檗、道の向上事は、いまの杜撰のともがら、領覧におよばざらん。
ただ、まさに、法道、もし法融におよばざるあり、法道、おのずから法融にひとしきありとも、法融に法兄弟なるべし。
いかでか、向上の関棙子をしらん？
自余の十聖三賢、等、いかにも向上の関棙子をしらざるなり。
いわんや、向上の関棙子を開閉せんや？
この宗旨は、参学の眼目なり。
もし向上の関棙子をしるを、仏向上人とするなり、仏向上事を体得せるなり。

正法眼蔵　仏向上事
爾時、仁治三年壬寅、三月二十三日、在、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 恁麼

雲居山、弘覚大師は、洞山の嫡子なり。
釈迦牟尼仏より第三十九世の法孫なり。
洞山宗の嫡祖なり。
一日、示、衆、云、
欲、得、恁麼事、須、是、恁麼人。
既、是、恁麼人、何、愁、恁麼事？

いわゆるは、恁麼事をえんとおもうは、すべからく、これ、恁麼人なるべし。
すでに、これ、恁麼人なり、なんぞ恁麼事をうれえん？

この宗旨は、直趣、無上菩提、しばらく、これを恁麼という。

この無上菩提の体たらくは、すなわち、尽十方界も無上菩提の少許なり。
さらに、菩提の、尽界よりも、あまるべし。
われらも、かの尽十方界のなかに、あらゆる調度なり。
なにによりてか、恁麼ある、としる？
いわゆる、身心ともに尽界にあらわれて、われにあらざるゆえに、しかあり、としるなり。
身、すでに、わたくしにあらず。
いのちは光陰にうつされて、しばらくも、とどめがたし。
紅顔、いずくへか、さりにし。たずねん、とするに蹤跡なし。
つらつら観ずるところに、往事の、ふたたびあうべからざる、おおし。
赤心もとどまらず、片片として往来す。
たとえ、まことありというとも、吾我のほとりに、とどこおるものにはあらず。
恁麼なるに、無端に発心するものあり。
この心、おこるより、向来もてあそぶところをなげすてて、所未聞をきかんとねがい、所未証を証せんともとむる。
ひとえに、わたくしの所為にあらず。
しるべし。
恁麼人なるゆえに、しかあるなり。
なにをもってか、恁麼人にてあり、としる？
すなわち、恁麼事をえんとおもうによりて、恁麼人なり、としるなり。

すでに恁麼人の面目あり、いまの恁麼事をうれうべからず。
うれうるも、これ、恁麼事なるがゆえに、うれえにあらざるなり。
また、恁麼事の恁麼あるにも、おどろくべからず。
たとえ、おどろき、あやしまるる恁麼ありとも、さらに、これ、恁麼なり。
おどろくべからずという恁麼あるなり。
これ、ただ仏量にて量ずべからず。
心量にて量ずべからず。
法界量にて量ずべからず。
尽界量にて量ずべからず。
ただ、まさに、既、是、恁麼人、何、愁、恁麼事？　なるべし。
このゆえに、
声色の恁麼は、恁麼なるべし。
身心の恁麼は、恁麼なるべし。
諸仏の恁麼は、恁麼なるべきなり。
たとえば、因、地、倒者のときを恁麼なりと恁麼、会なるに、必、因、地、起の恁麼のとき、因、地、倒をあやしまざるなり。
古昔より、いいきたり、西天より、いいきたり、天上より、いいきたれる道あり。
いわゆる、
若、因、地、倒、還、因、地、起。
離、地、求、起、終、無、其理。

いわゆる道は、
地によりて、たうるるものは、かならず、地によりて、おく。
地によらずして、おきんことをもとむるは、さらに、うべからず。
となり。

しかあるを挙拈して、大悟をうる、はしとし、身心をも、ぬくる道とせり。
このゆえに、もし、いかなるか、諸仏、成道の道理なる？　と問著するにも、地に、たうるるものの、地によりて、おくるがごとし、という。
これを参究して向来をも透脱すべし、末上をも透脱すべし、正当恁麼時をも透脱すべし。
大悟、不悟、却迷、失迷、被悟礙、被迷礙、ともに、これ、地に、たうるるものの、地によりて、おくる道理なり。
これ、
天上、天下の道得なり。

西天、東地の道得なり。
古往今来の道得なり。
古仏、新仏の道得なり。
この道得、さらに道未尽あらず、道虧闕あらざるなり。
しかあれども、恁麼、会のみにして、さらに不、恁麼、会なきは、このことばを参究せざるがごとし。
たとえ古仏の道得は、恁麼つたわれりというとも、さらに古仏として古仏の道を聞著せんとき、向上の聞著あるべし。
いまだ西天に道取せず、天上に道取せずといえども、さらに道著の道理あるなり。
いわゆる、
地によりて、たうるるもの、もし地によりて、おきんことをもとむるには、無量劫をふるに、さらに、おくべからず。

まさに、ひとつの活路より、おくることをうるなり。
いわゆる、
地によりて、たうるるものは、かならず、空によりて、おき、
空によりて、たうるるものは、かならず、地によりて、おくるなり。

もし恁麼あらざらんは、ついに、おくることあるべからず。
諸仏、諸祖みな、かくのごとく、ありしなり。
もし人ありて恁麼とわん、
空と地と、あいさること、いくそばくぞ？
恁麼、問著せんに、かれにむかいて恁麼いうべし、
空と地と、あいさること、十万八千里なり。

若、因、地、倒、必、因、空、起。
離、空、求、起、終、無、其理。
若、因、空、倒、必、因、地、起。
離、地、求、起、終、無、其理。

もし、いまだ、かくのごとく道取せざらんは、仏道の地、空の量、いまだ、しらざるなり、いまだ、みざるなり。

第十七代の祖師、僧伽難提、尊者、ちなみに、伽耶舎多、これ、法嗣なり。

あるとき、殿にかけてある鈴鐸の、風にふかれて、なるをききて、伽耶舎多に、とう、
風のなるとやせん？　鈴のなるとやせん？
伽耶舎多、もうさく、
風の鳴にあらず、鈴の鳴にあらず、我心の鳴なり。
僧伽難提、尊者、いわく、
心は、また、なにぞや？
伽耶舎多、もうさく、
ともに寂静なるがゆえに。
僧伽難提、尊者、いわく、
善哉。善哉。わが道をつぐべきこと、子にあらずよりは、だれぞや？
ついに正法眼蔵を伝付す。

これは風の鳴にあらざるところに、我心鳴を学す。
鈴の、なるにあらざるとき、我心鳴を学す。
我心鳴は、たとえ恁麼なりといえども、倶、寂静なり。
西天より東地につたわれ、古代より今日にいたるまで、この因縁を学道の標準とせるに、あやまるたぐい、おおし。
伽耶舎多の道取する、風のなるにあらず、鈴のなるにあらず、心のなるなり、というは、
能聞の恁麼時の正当に念起あり。
この念起を心という。
この心念、もし、なくば、いかでか鳴響を縁ぜん。
この念によりて聞を成ずるによりて、聞の根本といいぬべきによりて、心のなる。
というなり。
これは邪解なり。
正師のちからをえざるによりて、かくのごとし。
たとえば、依主隣近の論師の釈のごとし。
かくのごとくなるは、仏道の玄学にあらず。
しかあるを、仏道の嫡嗣に学しきたれるには、無上菩提、正法眼蔵、これを寂静といい、無為といい、三昧といい、陀羅尼という道理は、一法、わずかに寂静なれば、万法ともに寂静なり。
風吹、寂静なれば、鈴鳴、寂静なり。
このゆえに、倶、寂静というなり。

心鳴は風鳴にあらず、心鳴は鈴鳴にあらず、心鳴は心鳴にあらず、と道取するなり。
親切の恁麼なるを究弁せんよりは、さらに、ただ、いうべし、風鳴なり、鈴鳴なり、吹鳴なり、鳴鳴なりともいうべし。
何、愁、恁麼事？　のゆえに、恁麼あるにあらず、何、関、恁麼事？　なるによりて恁麼なるなり。

第三十三祖、大鑑禅師、未剃髪のとき、広州、法性寺に宿するに、二僧ありて相論するに、
一僧、いわく、播の、動ずるなり。
一僧、いわく、風の、動ずるなり。
かくのごとく相論、往来して休歇せざるに、六祖、いわく、
風、動にあらず、播、動にあらず、仁者、心、動なり。
二僧、ききて、すみやかに信受す。

この二僧は、西天より、きたれりけるなり。
しかあれば、すなわち、この道著は、風も幡も動も、ともに、心にてあると、六祖は道取するなり。
まさに、いま、六祖の道をきくといえども、六祖の道をしらず。
いわんや、六祖の道得を道取することをえんや？
為、甚麼、恁麼、道？
いわゆる、仁者、心、動の道をききて、すなわち、仁者、心、動といわんとしては、仁者、心、動と道取するは、六祖をみず、六祖をしらず、六祖の法孫にあらざるなり。
いま、六祖の児孫として、六祖の道を道取し、六祖の身体髪膚をえて道取するには、恁麼いうべきなり。
いわゆる、
仁者、心、動は、さもあらばあれ、さらに、仁者、動。
というべし。
為、甚麼、恁麼、道？
いわゆる、
動者、動なるがゆえに、仁者、仁者なるによりてなり。
既、是、恁麼人なるがゆえに、恁麼、道なり。

六祖のむかしは新州の樵夫なり。
山をも、きわめ、水をも、きわむ。

たとえ青松の下に功夫して根源を截断せりとも、なにとしてか、明窓のうちに従容して照心の古教ありとしらん？
澡雪、だれにか、ならう？
いちにありて経をきく。
これ、みずから、まちしところにあらず、他のすすむるにあらず。
いとけなくして父を喪し、長じて(は)母をやしなう。
しらず、このころもにかかれりける一顆珠の、乾坤を照破することを。
たちまちに発明せしより、老母をすてて知識をたずぬ、人の、まれなる儀なり。
恩愛の、だれが、かろからん？
法をおもくして恩をかろくするによりて棄恩せしなり。
これ、すなわち、有、智、若、聞、即、能、信解の道理なり。
いわゆる、智は、人に学せず、みずから、おこすにあらず。
智、よく智につたわれ、智、すなわち、智をたずぬるなり。
五百の蝙蝠は、智、おのずから身をつくる。
さらに、身なし、心なし。
十千の游魚は、智、したしく身にてあるゆえに、縁にあらず、因にあらずといえども、聞法すれば、即、解するなり。
来にあらず、入にあらず。
たとえば、東君の春にあうがごとし。
智は有念にあらず。
智は無念にあらず。
智は有心にあらず。
智は無心にあらず。
いわんや、大小にかかわらんや？
いわんや、迷悟の論ならんや？
いうところは、仏法は、いかにあること、ともしらず、さきより聞取するにあらざれば、したうにあらず、ねがうにあらざれども、聞法するに、恩をかろくし身をわするるは、有智の身心、すでに自己にあらざるがゆえに、しかあらしむるなり。
これを即、能、信解という。
しらず、いくめぐりの生死にか、この智をもちながら、いたずらなる塵労にめぐる。
なおし、石の、玉をつつめるが、玉も石につつまれりともしらず、石も玉をつつめりともしらざるがごとし。

人、これをしる。
人、これをとる。
これ、すなわち、玉の期せざるところ、石のまたざるところ、石の知見によらず、玉の思量にあらざるなり。
すなわち、人と智と、あいしらざれども、道、かならず、智にきかるるがごとし。
無、智、疑怪、即、為、永、失という道あり。
智、かならずしも有にあらず、智、かならずしも無にあらざれども、一時の春松なる有あり、秋菊なる無あり。
この無智のとき、三菩提みな疑怪となる、尽諸法みな疑怪なり。
このとき、永、失、即、為なり。
所聞すべき道、所証なるべき法、しかしながら、疑怪なり。
われにあらず、遍界、かくるるところなし。
だれにあらず、万里、一条、鉄なり。
たとえ恁麼して抽枝なりとも、十方仏土中、唯有一乗法なり。
たとえ恁麼して葉落すとも、是法住法位、世間相常住なり。
既、是、恁麼事なるによりて、有智と無智と、日面と月面となり。
恁麼人なるがゆえに、六祖も発明せり。
ついに、すなわち、黄梅山に参じて、大満禅師を拝するに、行堂に投下せしむ。
昼夜に米を碓こと、わずかに八箇月をふるほどに、あるとき、夜ふかく、更たけて、大満みずから、ひそかに碓房にいりて、六祖にとう、米、白、也？　未？　と。
六祖、いわく、白、也、未、有、篩、在。
大満、つえにて臼をうつこと三下するに、六祖、箕にいれる米をみたび簸。
このときを、師資の道、あいかなう、という。
みずからもしらず、他も不会なりといえども、伝法、伝衣、まさしく、恁麼の正当時節なり。

南嶽山、無際大師、ちなみに、薬山、とう、
三乗十二分教、某甲、粗、知。
嘗、聞、南方、直指、人心、見性、成仏、実、未、明、了。
伏望、和尚、慈悲、指示。

これ、薬山の問なり。
薬山は、本、為、講者なり。

三乗十二分教は通利せりけるなり。
しかあれば、仏法、さらに昧然なきがごとし。
むかしは別宗、いまだ、おこらず、ただ三乗十二分教をあきらむるを教学の家風とせり。
いまの人、おおく、鈍致にして、各各の宗旨をたてて、仏法を度量する、仏道の法度にあらず。

大師、いわく、
恁麼、也、不得。
不恁麼、也、不得。
恁麼、不恁麼、総、不得。
汝、作麼生？

これ、すなわち、大師の、薬山のためにする道なり。
まことに、それ、恁麼、不恁麼、総、不得なるゆえに、恁麼、不得なり、不恁麼、不得なり。
恁麼は、恁麼をいうなり。
有限の道用にあらず。
無限の道用にあらず。
恁麼は、不得に参学すべし。
不得は、恁麼に問取すべし。
這箇の恁麼、および、不得、ひとえに仏量のみにかかわれるにあらざるなり。
会、不得なり。
悟、不得なり。

曹谿山、大鑑禅師、ちなみに、南嶽、大慧禅師にしめすに、いわく、
是、什麼物、恁麼来。

この道は、
恁麼は、これ、不疑なり。
不会なるがゆえに。
是、什麼物なるがゆえに。
万物、まことに、かならず、(是、)什麼物なると参究すべし。
一物、まことに、かならず、什麼物なると参究すべし。
什麼物は、疑著にあらざるなり、恁麼、来なり。

正法眼蔵　恁麼

(爾時、仁治三年壬寅、三月二十六日、在、観音導利興聖宝林寺、示、衆。)

# 行持

仏祖の大道、かならず、無上の行持あり。
道、環して断絶せず。
発心、修行、菩提、涅槃、しばらくの間隙あらず。
行持、道、環なり。
このゆえに、みずからの強為にあらず、他の強為にあらず、不曾染汚の行持なり。
この行持の功徳、われを保任し、他を保任す。
その宗旨は、わが行持、すなわち、十方の帀地漫天みな、その功徳をこうむる。
他もしらず、われもしらずといえども、しかあるなり。
このゆえに、
諸仏、諸祖の行持によりて、われらが行持、見成し、われらが大道、通達するなり。
われらが行持によりて、諸仏の行持、見成し、諸仏の大道、通達するなり。
われらが行持によりて、この道環の功徳あり。
これによりて、仏仏、祖祖、仏住し、仏非し、仏心し、仏成して断絶せざるなり。
この行持によりて、日月星辰あり。
行持によりて、大地、虚空あり。
行持によりて、依正身心あり。
行持によりて、四大、五蘊あり。
行持、これ、世人の愛所にあらざれども、諸人の実帰なるべし。
過去、現在、未来の諸仏の行持によりて、過去、現在、未来の諸仏は現成するなり。
その行持の功徳、ときに、かくれず。かるがゆえに、発心、修行す。
その功徳、ときに、あらわれず。かるがゆえに、見聞、覚知せず。
あらわれざれども、かくれず、と参学すべし。
隠顕、存没に染汚せられざるがゆえに、われを見成する行持、いまの当隠に、これ、いかなる縁起の諸法ありて行持する？　と不会なるは、行持の会取、さらに新条の特地にあらざるによりてなり。
縁起は、行持なり。行持は、縁起せざるがゆえに。
と、功夫、参学を審細にすべし。

かの行持を見成する行持は、すなわち、これ、われらが、いまの行持なり。
行持の、いまは、自己の本有元住にあらず。
行持の、いまは、自己に( or 自己の)去来、出入するにあらず。
いま、という道は、行持よりさきにあるにはあらず。
行持、現成( or 現前)するをいまという。
しかあれば、すなわち、一日の行持、これ、諸仏の種子なり、諸仏の行持なり。
この行持に諸仏、見成せられ、行持せらるるを、行持せざるは、諸仏をいとい、諸仏を供養せず、行持をいとい、諸仏と同生同死せず同学同参せざるなり。
いまの華開、葉落、これ、行持の見成なり。
磨鏡、破鏡、それ、行持にあらざるなし。
このゆえに、行持をさしおかんと擬するは、行持をのがれんとする邪心をかくさんがために、行持をさしおくも行持なるによりて行持におもむかんとするは、なお、これ、行持をこころざすにたれども、真父の家郷に宝財をなげすてて、さらに他国跉跰の窮子となる。
跉跰のときの風水、たとえ身命を喪失せしめずというとも、真父の宝財なげすつべきにあらず。
真父の法財、なお、失誤するなり。
このゆえに、行持は、しばらくも、懈倦なき、法なり。

慈父、大師、釈迦牟尼仏、十九歳の仏寿より、深山に行持して、三十歳の仏寿にいたりて、大地、有情、同時、成道の行持あり。
八旬の仏寿にいたるまで、なお、山林に行持し、精藍に行持す。
王宮にかえらず、国利を領せず、布僧伽梨を衣持し在世に一経するに互換せず、一盂、在世に互換せず。
一時、一日も独処することなし。
人、天の閑供養を辞せず。
外道の訕謗を忍辱す。
おおよそ、一化は、行持なり。
浄衣、乞食の仏儀、しかしながら、行持にあらずということなし。

第八祖、摩訶迦葉、尊者は、釈尊の嫡嗣なり。
生前、もっぱら十二頭陀を行持して、さらに、おこたらず。
十二頭陀というは、
一、者、不受、人、請。日、行、乞食。亦、不受、比丘一食分銭財。

二、者、止宿、山上。不宿、人舎、郡、県、聚落。
三、者、不得、従、人、乞、衣被。人、与、衣被、亦、不受。但、取、丘、塚間、死人、所棄、衣、補治、衣之。
四、者、止宿、野田中、樹下。
五、者、一日一食。一、名、僧迦僧泥。
六、者、昼夜、不臥。但、坐睡、経行。一、名、僧泥沙者傴。
七、者、有、三領衣、無有、余衣。亦、不臥、被中。
八、者、在、塚間。不在、仏寺中。亦、不在、人間。目視、死人、骸骨、坐禅、求道。
九、者、但、欲、独処。不欲、見、人。亦、不欲、与、人、共、臥。
十、者、先、食、果蓏、却、食、飯。食、已、不得、復、食、果蓏。
十一、者、但、欲、露、臥。不在、樹下、屋宿。
十二、者、不食、肉。亦、不食、醍醐。麻油、不塗、身。
これを十二頭陀という。
摩訶迦葉、尊者、よく一生に不退不転なり。
如来の正法眼蔵を正伝すといえども、この頭陀を退すること、なし。

あるとき、仏、言すらく、
なんじ、すでに年老なり。
僧食を食すべし。

摩訶迦葉、尊者、いわく、
われ、もし如来の出世にあわずば、辟支仏となるべし、生前に山林に居すべし。
さいわいに、如来の出世にあう。
法のうるおいあり。
しかありというとも、ついに、僧食を食すべからず。

如来、称讃しまします。

あるいは、迦葉、頭陀、行持のゆえに、形体、憔悴せり。
衆みて軽忽するがごとし。
ときに、如来、ねんごろに迦葉をめして、半座をゆずりまします。
迦葉、尊者、如来の座に坐す。

しるべし。

摩訶迦葉は、仏会の上座なり。
生前の行持、ことごとく、あぐべからず。

第十祖、波栗湿縛、尊者は、一生、脇、不至席なり。
これ、八旬、老年の弁道なりといえども、当時、すみやかに大法の単伝す。
これ、光陰をいたずらにもらさざるによりて、わずかに三箇年の功夫なりといえども、三菩提の正眼を単伝す。
尊者の在胎、六十年なり、出胎、髪白なり。
誓、不屍臥、名、脇尊者。
乃至、暗中、手放光明、以、取、経法。
これ、生得の奇相なり。
脇尊者、生年八十、垂、捨家、染衣。
域中( or 城中)、少年、便、誚、之、曰、
愚夫、朽老。
一、何、浅智？
夫、出家、者、有、二業、焉。
一、則、習定。
二、乃、誦経。
而、今、衰耄、無所、進取。
濫跡、清流。
徒、知、飽食。

時、脇尊者、聞、諸譏議、因、謝、時人、而、自、誓、曰、
我、若、不通、三蔵理、不断、三界欲、不得、六神通、不具、八解脱、終、不、以、脇、至、於、席。

自爾之後、唯日不足、経行、宴坐、住立、思惟。
昼、則、研習、理教。
夜、乃、静慮、凝神。
綿歴三歳、学通、三蔵、断、三界欲、得、三明智。
時人、敬仰、因、号、脇尊者。

しかあれば、脇尊者、処胎、六十年、はじめて出胎せり。
胎内に功夫なからんや？
出胎よりのち八十にならんとするに、はじめて出家、学道をもとむ。
託胎よりのち一百四十年なり。

まことに、不群なりといえども、朽老は阿誰よりも朽老ならん。
処胎にて老年なり、出胎にても老年なり。
しかあれども、時人の譏嫌をかえりみず、誓願の一志、不退なれば、わずかに三歳をふるに、弁道、現成するなり。
だれが見賢、思斉をゆるくせん？
年老耄及をうらむることなかれ。
この生、しりがたし。
生か？　生にあらざるか？
老か？　老にあらざるか？
四見、すでに、おなじからず。
諸類の見、おなじからず。
ただ志気を専修にして弁道、功夫すべきなり。
弁道に生死をみるに相似せりと参学すべし。
生死に弁道するにはあらず。
いまの人、あるいは、五旬、六旬におよび、七旬、八旬におよぶに、弁道をさしおかんとするは至愚なり。
生来、たとえ、いくばくの年月と覚知すとも、これは、しばらく、人間の精魂の活計なり、学道の消息にあらず。
壮齢、耄及をかえりみることなかれ。
学道究弁を一志すべし。
脇尊者に斉肩なるべきなり。
塚間の一堆の塵土、あながちに、おしむことなかれ、あながちに、かえりみることなかれ。
一志に度取せずば、だれが、だれをあわれまん？
無主の形骸、いたずらに遍野せんとき、眼睛をつくるがごとく正観すべし。

六祖は、新州の樵夫なり、有識と称しがたし。
いとけなくして父を喪す、老母に養育せられて長ぜり。
樵夫の業を養母の活計とす。
十字の街頭にして一句の聞経よりのち、たちまちに老母をすてて大法をたずぬ。
これ、奇代の大器なり、抜群の弁道なり。
断臂、たとえ容易なりとも、この割愛は大難なるべし。
この棄恩は、かろかるべからず。
黄梅の会に投じて八箇月、ねむらず、やすまず、昼夜に米をつく。
夜半に衣、鉢を正伝す。

得法已後、なお石臼をおい、ありきて、米をつくこと、八年なり。
出世、度人、説法するにも、この石臼をさしおかず、希世の行持なり。

江西、馬祖の坐禅することは、二十年なり。
これ、南嶽の密印を稟受するなり。
伝法、済人のとき、坐禅をさしおくと道取せず。
参学の、はじめて、いたるには、かならず、心印を密受せしむ。
普請、作務のところに、かならず、先赴す。
老にいたりて懈倦せず。
いまの臨済は、江西の流なり。

雲巌和尚は、道悟と、おなじく、薬山に参学して、ともに、ちかいをたてて、四十年、わきを席につけず、一味、参究す。
法を洞山の悟本大師に伝付す。
洞山、いわく、
われ、欲、打成、一片、坐禅、弁道、已、二十年なり。

いま、その道、あまねく伝付せり。

雲居山、弘覚大師、そのかみ、三峰庵に住せしとき、天厨送食す。
大師、あるとき、洞山に参じて、大道を決択して、さらに庵にかえる。
天使、また食を再送して師を尋見( or 尋覓)するに、三日をへて、師をみること、えず。
天厨をまつこと、なし。
大道を所宗とす弁肯の志気、おもいやるべし。

百丈山、大智禅師、そのかみ、馬祖の侍者とありしより、入寂のゆうべにいたるまで、一日も為衆為人の勤仕なき日あらず。
かたじけなく、一日不作、一日不食のあとをのこすというは、
百丈禅師、すでに年老臘高なり。
なお、普請、作務のところに、壮齢と同、励力す。
衆、これをいたむ。
人、これをあわれむ。
師、やまざるなり。
ついに、作務のとき、作務の具をかくして師にあたえざりしかば、師、その日一日、不食なり。

衆の作務にくわわらざることをうらむる意旨なり。
これを百丈の一日不作、一日不食のあと、という。
いま、大宋国に流伝せる臨済の玄風、ならびに、諸方、叢林、おおく、百丈の玄風を行持するなり。

鏡清和尚、住院のとき、土地神、かつて師顔をみること、えず。
たよりをえざるによりてなり。

三平山、義忠禅師、そのかみ、天厨送食す。
大巓をみてのちに、天神、また師をもとむるに、みること、あたわず。

後大潙和尚、いわく、
我、二十年、在、潙山、喫、潙山飯、屙、潙山屙、不参、潙山道。
只、牧、得、一頭、水牯牛、終日、露、回回、也。

しるべし。
一頭の水牯牛は、二十年、在、潙山の行持より、牧、得せり。
この師、かつて百丈の会下に参学しきたれり。
しずかに二十年中の消息、おもいやるべし。
わするるとき、なかれ。
たとえ参、潙山道する人ありとも、不参、潙山道の行持は、まれなるべし。

趙州、観音院、真際大師、従諗和尚、とし六十一歳なりしに、はじめて発心、求道をこころざす。
瓶、錫をたずさえて行脚し、遍歴、諸方するに、つねに、みずから、いわく、
七歳童児、若、勝、我者、我、即、問、伊。
百歳老翁、不及、我者、我、即、教、他。

かくのごとくして南泉の道を学得する功夫、すなわち、二十年なり。
年、至、八十のとき、はじめて趙州、城東、観音院に住して、人、天を化導すること、四十年来なり。
いまだかつて一封の書をもって檀那につけず。
僧堂、おおきならず、前架なし、後架なし。
あるとき、牀脚、おれき。
一隻の焼断の燼木を縄をもって、これをゆいつけて年月を経歴し修行するに、知事、この牀脚をかえんと請するに、趙州、ゆるさず。
古仏の家風、きくべし。

趙州の、趙州に住することは八旬よりのちなり、伝法より、このかたなり。
正法、正伝せり。
諸人、これを古仏という。
いまだ正法、正伝せざらん余人は師よりも、かろかるべし。
いまだ八旬にいたらざらん余人は師よりも、強健なるべし。
壮年にして軽爾ならん、われら、なんぞ老年の崇重なると、ひとしからん？
はげみて弁道、行持すべきなり。
四十年のあいだ世財をたくわえず、常住に米、穀なし。
あるいは、栗子、椎子をひろうて食物にあつ。
あるいは、旋転飯食す。
まことに、上古、龍象の家風なり、恋慕すべき操行なり。
あるとき、衆にしめして、いわく、
爾、若、一生、不離、叢林、不語、十年、五載、
無、人、喚、爾、作、唖漢、
已後、諸仏、也、不奈、爾、何？

これ、行持をしめすなり。
しるべし。
十年、五載の不語、おろかなるに相似せりといえども、不離、叢林の功夫によりて、不語なりといえども、唖漢にあらざらん。
仏道、かくのごとし。
仏道声をきかざらんは、不語の不唖漢なる道理あるべからず。
しかあれば、行持の至妙は、不離、叢林なり。
不離、叢林は、脱落なる全語なり。
至愚の、みずからは、不唖漢をしらず、不唖漢をしらせず。
阿誰か遮障せざれども、しらせざるなり。
不唖漢なるを得、恁麼なりときかず、得、恁麼なりとしらざらんは、あわれむべき自己なり。
不離、叢林の行持、しずかに行持すべし。
東西の風に東西することなかれ。
十年、五載の春風秋月しらざれども、声色透脱の道あり。
その道得、われに不知なり、われに不会なり。
行持の寸陰を可惜許なりと参学すべし。
不語を空然なると、あやしむことなかれ。
入之、一叢林なり。
出之、一叢林なり。

鳥路、一叢林なり。
遍界、一叢林なり。

大梅山は、慶元府にあり。
この山に護聖寺を草創す、法常禅師、その本元なり。
禅師は襄陽人なり。
かつて馬祖の会に参じて、とう、如何、是、仏？　と。
馬祖、云、即心是仏、と。
法常、このことばをききて、言下、大悟す。
因に、大梅山の絶頂にのぼりて人倫に不群なり、草庵に独居す。
松実を食し、荷葉を衣とす。
かの山に小池あり。
池に荷、おおし。
坐禅、弁道すること、三十余年なり。
人事たえて見聞せず、年暦、おおよそ、おぼえず、四山、青、又、黄のみをみる。
おもいやるには、あわれむべき風霜なり。
師の坐禅には、八寸の鉄塔、一基を頂上におく、如、載、宝冠なり。
この塔を落地却せしめざらんと功夫すれば、ねむらざるなり。
その塔、いま、本山にあり、庫下に交割す。
かくのごとく弁道すること、死にいたりて懈倦なし。
かくのごとくして年月を経歴するに、塩官の会より一僧きたりて、山にいりて拄杖をもとむる、ちなみに、迷、山路して、はからざるに師の庵所にいたる。
不期のなかに師をみる。
すなわち、とう、
和尚、この山に住してより、このかた、多少、時、也？
師、いわく、
只、見、四山、青、又、黄。
この僧、また、とう、
出山、路、向、什麼所、去？
師、いわく、
随流、去。
この僧、あやしむこころあり。
かえりて塩官に挙似するに、塩官、いわく、
そのかみ、江西にありしとき、一僧を曾、見す。

それよりのち消息をしらず。
莫、是、此僧？　否？

ついに僧に令( or 命)じて、師を請するに出山せず。
偈をつくりて答するに、いわく、
摧残枯木、倚、寒林。
幾度、逢、春、不変、心。
樵客、遇、之、猶、不顧。
郢人、那、得、苦、追尋？

ついに、おもむかず。
これよりのち、なお山奥へいらんとせしちなみに、有頌するに、いわく、
一池、荷葉衣、無尽。
数樹、松華、食、有、余。
剛、被、世人、知、住所。
更、移、茅舎、入、深居。

ついに、庵を山奥にうつす。
あるとき、馬祖、ことさら僧をつかわして、とわしむ、
和尚、そのかみ、馬祖を参見せしに、得、何道理、便、住、此山なる？
師、いわく、
馬祖、われにむかいて、いう、即心是仏。すなわち、この山に住す。
僧、いわく、
近日、仏法、また別なり。
師、いわく、
作麼生、別なる？
僧、いわく、
馬祖、いわく、非心非仏とあり。
師、いわく、
這老漢、ひとを惑乱すること、了期あるべからず。
任、他、非心非仏。
我、祇管、即心是仏。

この道をもちて馬祖に挙似す。
馬祖、云、
梅子、熟、也。

この因縁は、人、天みな、しれるところなり。
天龍は、師の神足なり。
倶胝は、師の法孫なり。
高麗の迦智は、師の法を伝持して本国の初祖なり。
いま、高麗の諸師は、師の遠孫なり。
生前には一虎、一象、よのつねに給侍す。
あいあらそわず。
師の円寂ののち、虎、象、石をはこび、泥をはこびて師の塔をつくる。
その塔、いま、護聖寺に現在せり。
師の行持、むかし、いまの知識とあるは、おなじく、ほむるところなり。
劣慧のものは、ほむべしとしらず。
貪名愛利のなかに仏法あらましと強為するは小量の愚見なり。

五祖山の法演禅師、いわく、
師翁、はじめて楊岐に住せしとき、老屋敗椽して、風雨の敝はなはだし。
ときに、冬暮なり。
殿堂ことごとく旧損せり。
そのなかに、僧堂、ことにやぶれ、雪霰満牀、居不遑処なり。
雪頂の耆宿、なお澡雪し、厖眉の尊年、皺眉のうれえ、あるがごとし。
衆僧、やすく坐禅することなし。
衲子、投誠して修造せんことを請ぜしに、師翁、却、之、いわく、
我仏、有、言、
時、当、減劫、高岸、深谷、遷変、不常。
安、得、円満如意、自、求、称、足？

古往の聖人、おおく、樹下、露地に経行す。
古来の勝躅なり、履空の玄風なり。
なんだち、出家、学道する、做手脚なおいまだ、おだやかならず。
わずかに、これ、四、五十歳なり。
だれが、いたずらなる、いとま、ありて豊屋をこととせん？

ついに、不従なり。
翌日に、上堂して、衆にしめして、いわく、
楊岐、乍、住、屋、壁、疎、満牀尽、撒、雪珍珠。
縮、却項、暗、嗟嘘、翻、憶、古人、樹下居。

ついに、ゆるさず。
しかあれども、四海五湖の雲衲霞袂、この会に掛錫するを、ねがうところとせり。
耽道の人、おおきことをよろこぶべし。
この道、こころにそむべし。
この語、みに銘ずべし。
演和尚、あるとき、しめして、いわく、
行、無越、思。
思、無越、行。

この語、おもくすべし。
日夜、思、之、朝夕、行、之。
いたずらに東西南北の風にふかるるがごとくなるべからず。
いわんや、この日本国は、王臣の宮殿なお、その豊屋、あらず。
わずかに、おろそかなる白屋なり。
出家、学道の、いかでか、豊屋に幽棲する、あらん？
もし豊屋をえたるは、邪命にあらざるなし、清浄なる、まれなり。
もとより、あらんは論にあらず。
はじめて、さらに、経営することなかれ。
草庵、白屋は、古聖の所住なり、古聖の所愛なり。
晩学、したい参学すべし、たがゆることなかれ。
黄帝、堯、舜、等は、俗なりといえども、草屋に居す、世界の勝躅なり。
尸子、曰、
欲、観、黄帝之行、於、合宮。
欲、観、堯、舜之行、於、総章。
黄帝、明堂、以、草蓋、之、名、曰、合宮。
舜之明堂、以、草蓋、之、名、曰、総章。

しるべし。
合宮、総章は、ともに、草を(もって)ふくなり。
いま、黄帝、堯、舜をもって、われらにならべんとするに、なお天地の論にあらず。
これ、なお、草蓋を明堂とせり。
俗、なお、草屋に居す。
出家人、いかでか高堂、大観を所居に擬せん？
慚愧すべきなり。

古人の樹下に居し、林間にすむ、在家、出家、ともに、愛する所住なり。
黄帝は、崆峒道人、広成の弟子なり。
広成は、崆峒という巌のなかに、すむ。
いま、大宋国の国王、大臣、おおく、この玄風をつたうるなり。
しかあれば、すなわち、塵労中人、なお、かくのごとし。
出家人、いかでか塵労中人よりも劣ならん？　塵労中人よりも、にごれらん？
向来の仏祖のなかに、天の供養をうくる、おおし。
しかあれども、すでに得道のとき、天眼およばず、鬼神たよりなし。
そのむね、あきらむべし。
天衆神道もし仏祖の行履をふむときは、仏祖にちかづくみちあり。
仏祖、あまねく天衆神道を超証するには、天衆神道、はるかに見上のたよりなく、仏祖のほとりにちかづきがたきなり。
南泉、いわく、
老僧、修行のちからなくして鬼神に覰見せらる。

しるべし。
無修の鬼神に覰見せらるるは、修行のちからなきなり。

太白山、宏智禅師、正覚和尚の会に、護伽藍神、いわく、
われ、きく、覚和尚、この山に住すること、十余年なり。
つねに寝堂にいたりて、みんとするに、不能前なり、未之識也。

まことに、有道の先蹤にあいあうなり。
この天童山は、もとは小院なり。
覚和尚の住裏に、道士観、尼寺、教院、等を掃除して、いまの景徳寺となせり。
師、遷化の後、左朝奉、大夫、侍御史、王伯庠、因に、師の行業記を記するに、ある人、いわく、
かの道士観、尼寺、教院をうばいて、いまの天童寺となせることを記すべし。
御史、いわく、
不可なり。此事、非、僧徳、矣。
ときの人、おおく、侍御史をほむ。
しるべし。
かくのごときの事は、俗の能なり、僧の徳にあらず。

おおよそ、仏道に登入する最初より、はるかに三界の人、天をこゆるなり。
三界の所使にあらず、三界の所見にあらざること、審細に咨問すべし。
身口意、および、依正をきたして功夫、参究すべし。
仏祖、行持の功徳、もとより、人、天を済度する巨益ありとも、人、天、さらに仏祖の行持にたすけらるると覚知せざるなり。
いま仏祖の大道を行持せんには、大隠、小隠を論ずることなく、聡明、鈍痴をいとうことなかれ。
ただ、ながく名利をなげすてて、万縁に繫縛せらるることなかれ。
光陰をすごさず、頭燃をはらうべし。
大悟をまつことなかれ。
大悟は、家常の茶飯なり。
不悟をねがうことなかれ。
不悟は髻中の宝珠なり。
ただ、まさに、
家郷あらんは、家郷をはなれ、
恩愛あらんは、恩愛をはなれ、
名あらんは、名をのがれ、
利あらんは、利をのがれ、
田園あらんは、田園をのがれ、
親族あらんは、親族をはなるべし。
名利、等なからんも、また、はなるべし。
すでにあるをはなる、なきをもはなるべき道理あきらかなり。
それ、すなわち、一条の行持なり。
生前に名利をなげすてて一事を行持せん、仏寿長遠の行持なり。
いま、この行持、さだめて、行持に行持せらるるなり。
この行持あらん身心、みずからも愛すべし、みずからも、うやまうべし。

大慈寰中禅師、いわく、
説得、一丈、不如、行取、一尺。
説得、一尺、不如、行取、一寸。

これは、時人の行持、おろそかにして仏道の通達をわすれたるがごとくなるをいましむるににたりといえども、一丈の説は不是とにはあらず。
一尺の行は一丈の説よりも大功なり、というなり。
なんぞ、ただ、丈、尺の度量のみならん。
はるかに須弥と芥子との論功もあるべきなり。

須弥に全量あり、芥子に全量あり。
行持の大節、これ、かくのごとし。
いまの道得は、寰中の自為道にあらず、寰中の自為道なり。

洞山、悟本大師、道、
説取、行不得底。
行取、説不得底。

これ、高祖の道なり。
その宗旨は、行は説に通ずるみちをあきらめ、説の行に通ずるみちあり。
しかあれば、終日とくところに、終日おこなうなり。
その宗旨は、行不得底を行取し、説不得底を説取するなり。

雲居山、弘覚大師、この道を七通八達するに、いわく、
説時、無行路。
行時、無説路。

この道得は、行、説なきにあらず。
その説時は、一生、不離、叢林なり。
その行時は、洗頭、到、雪峰前なり。
説時、無行路。行時、無説路。さしおくべからず。みだらざるべし。

古来の仏祖、いいきたれることあり。
いわゆる、
若、人、生、百歳、
不会、諸仏機、
未、若、生、一日、而、能、決了、之。

これは、一仏、二仏のいうところにあらず、諸仏の道取しきたれるところ、諸仏の行取しきたれるところなり。
百、千、万劫の回生回死( or 同生同死)のなかに、行持ある一日は、髻中の明珠なり、同生同死の古鏡なり、よろこぶべき一日なり、行持力、みずから、よろこばるるなり。
行持のちから、いまだいたらず、仏祖の骨髄うけざるがごときは、仏祖の身心をおしまず、仏祖の面目をよろこばざるなり。
仏祖の面目、骨髄、これ、不去なり、如去なり、如来なり、不来なりといえども、かならず、一日の行持に稟受するなり。

しかあれば、一日は、おもかるべきなり。
いたずらに百歳いけらんは、うらむべき日月なり、かなしむべき形骸なり。
たとえ百歳の日月は声色の奴婢と馳走すとも、そのなか一日の行持を行取せば、一生の百歳を行取するのみにあらず、百歳の他生をも度取すべきなり。
この一日の身命は、とうとぶべき身命なり、とうとぶべき形骸なり。
かるがゆえに、いけらんこと一日ならんは、諸仏の機を会せば、この一日を曠劫多生にも、すぐれたりとするなり。
このゆえに、いまだ決了せざらんときは、一日をいたずらに、つかうことなかれ。
この一日は、おしむべき重宝なり。
尺璧の価直に擬すべからず、驪珠にかうることなかれ。
古賢、おしむこと、身命よりも、すぎたり。
しずかに、おもうべし。
驪珠は、もとめつべし、尺璧は、うることもあらん。
一生の百歳のうちの一日は、ひとたび、うしなわん、ふたたび、うること、なからん。
いずれの善巧方便ありてか、すぎにし一日をふたたび、かえし、えたる？
紀事( or 記事)の書にしるさざるところなり。
もし、いたずらに、すごさざるは、日月を皮袋に包含して、もらさざるなり。
しかあるを、古聖、先賢は、日月をおしみ、光陰をおしむこと、眼睛よりも、おしむ、国土よりも、おしむ。
その、いたずらに蹉過するというは、名利の浮世に濁乱しゆくなり。
いたずらに蹉過せずというは、道にありながら、道のために、するなり。
すでに決了することをえたらん、また一日をいたずらにせざるべし。
ひとえに道のために行取し、道のために説取すべし。
このゆえに、しりぬ。
古来の仏祖、いたずらに一日の功夫をついやさざる儀、よのつねに観想すべし。
遅遅、華日も明窓に坐して、おもうべし。
蕭蕭、雨夜も白屋に坐して、わするることなかれ。
光陰、なにとしてか、わが功夫をぬすむ？
一日をぬすむのみにあらず、多劫の功徳をぬすむ。
光陰と、われと、なんの怨家ぞ？
うらむべし。
わが不修の、しかあらしむるなるべし。

われ、われと、したしからず。
われ、われをうらむるなり。
仏祖も恩愛なきにあらず。
しかあれども、なげすてきたる。
仏祖も諸縁なきにあらず。
しかあれども、なげすてきたる。
たとえ、おしむとも、自他の因縁、おしまるべきにあらざるがゆえに。
われ、もし恩愛をなげすてずば、恩愛かえりて、われをなげすつべき云為あるなり。
恩愛をあわれむべくば、恩愛をあわれむべし。
恩愛をあわれむ、というは、恩愛をなげすつるなり。

南嶽、大慧禅師、懐譲和尚、そのかみ、曹谿に参じて、執侍すること、十五秋なり。
しこうして、伝道受業すること、一器水、瀉、一器なることをえたり。
古先の行履、もっとも慕古すべし。
十五秋の風霜、われをわずらわす、おおかるべし。
しかあれども、純一に究弁す。
これ、晩進の亀鏡なり。
寒炉に炭なく、ひとり虚堂にふせり。
涼夜に燭なく、ひとり明窓に坐する。
たとえ一知、半解なくとも、無為の絶学なり。
これ、行持なるべし。
おおよそ、ひそかに貪名愛利をなげすてきたりぬれば、日日に行持の積功のみなり。
このむね、わするることなかれ。
説、似一物、即、不中は、八箇年の行持なり。
古今、まれなりとするところ、賢、不肖、ともに、こいねがう行持なり。

香厳の智閑禅師は、大潙に耕道せしとき、一句を道得せんとするに数番、ついに道不得なり。
これをかなしみて、書籍を火にやきて、行粥飯僧となりて年月を経歴しき。
のちに武当山にいりて、大証の旧趾をたずねて結草為庵し、放下、幽棲す。
一日、わずかに道路を併浄するに、礫のほとばしりて竹にあたりて声をなすによりて、忽然として悟道す。
のちに香厳寺に住して、一盂、一衲を平生に不換なり。

奇巌、清泉をしめて、一生偃息の幽棲とせり。
行跡、おおく、本山にのこれり。
平生に山をいでざりける、という。

臨済院、慧照大師は、黄檗の嫡嗣なり。
黄檗の会にありて三年なり。
純一に弁道するに、睦州、陳尊宿の教訓によりて、仏法の大意を黄檗にとうこと、三番するに、かさねて六十棒を喫す。
なお、励志、たゆむことなし。
大愚にいたりて大悟することも、すなわち、黄檗、睦州、両尊宿の教訓なり。
祖席の英雄は臨済、徳山、という。
しかあれども、徳山、いかにしてか臨済におよばん？
まことに、臨済のごときは群に群せざるなり。
そのときの群は、近代の抜群よりも抜群なる。
行業、純一にして、行持、抜群せりという。
幾枚、幾般の行持なりとおもい擬せんとするに、あたるべからざるものなり。

師、在、黄檗、与、黄檗、栽、杉、松、次、黄檗、問、師、曰、
深山裏、栽、許多樹、作麼？
師、曰、
一、
与、山門、為、境、致。
二、
与、後人、作、標榜。

乃、将、鍬、拍、地、両下。
黄檗、拈、起、拄杖、曰、
雖然如是、汝、已、喫、我三十棒、了、也。

師、作、嘘嘘声。
黄檗、曰、
吾宗、到、汝、大興、於、世。

しかあれば、すなわち、得道ののちも杉、松などをうえけるに、てずから、みずから鍬柄をたずさえける、としるべし。
吾宗、到、汝、大興、於、世、これによるべきものならん。

栽松道者の古蹤、まさに、単伝直指なるべし。
黄檗も臨済とともに栽樹するなり。
黄檗のむかしは、捨衆して、大安精舎の労侶に混迹して、殿堂を掃灑する行持あり。
仏殿を掃灑し、法堂を掃灑す。
心を掃灑する、と、行持をまたず。
ひかりを掃灑する、と、行持をまたず。
裴相国と相見せし、この時節なり。

唐、宣宗、皇帝は、憲宗皇帝、第二の子なり。
少而より敏黠なり。
よのつねに結跏趺坐を愛す。
宮にありて、つねに坐禅す。
穆宗は、宣宗の兄なり。
穆宗、在位のとき、早朝罷に、宣宗、すなわち、戯而して、龍牀にのぼりて、揖、群臣の勢をなす。
大臣、これをみて、心風なり、とす。
すなわち、穆宗に奏す。
穆宗、みて、宣宗を撫而して、いわく、
我弟、乃、吾宗之英冑、也。
ときに、宣宗、とし、はじめて十三なり。
穆宗は、長慶四年、晏駕あり。
穆宗に三子あり。
一は敬宗、二は文宗、三は武宗なり。
敬宗、父位をつぎて、三年に崩ず。
文宗継位するに、一年というに、内臣、謀而、これを易す。
武宗、即位するに、宣宗、いまだ即位せずして、おいのくににあり。
武宗、つねに宣宗をよぶに痴叔という。
武宗は、会昌の天子なり。
仏法を廃せし人なり。
武宗、あるとき、宣宗をめして、昔日、ちちのくらいにのぼりしことを罰して、一頓打殺して、後華園のなかにおきて、不浄を灌するに、復生す。
ついに、父王の邦をはなれて、ひそかに香厳禅師の会に参じて、剃頭して沙弥となりぬ。
しかあれども、いまだ不具戒なり。
志閑禅師をともとして、遊方するに、盧山にいたる。

因に、志閑、みずから瀑布を題して、いわく、
穿崖透石、不辞、労。
遠地方、知、出処、高。

この両句をもって、沙弥を釣他して、これ、いかなる人ぞ？　とみんとするなり。
沙弥、これを続して、いわく、
谿澗、豈、能、留、得、住？
終、帰、大海、作、波濤。

この両句をみて、沙弥は、これ、つねの人にあらず、としりぬ。
のちに、杭州、塩官斉安国師の会にいたりて書記に充するに、黄檗禅師、ときに、塩官の首座に充す。
ゆえに、黄檗と連単なり。
黄檗、ときに、仏殿にいたりて礼仏するに、書記いたりて、とう、
不著、仏、求、
不著、法、求、
不著、僧、求、
長老、用、礼、何、為？

かくのごとく問著するに、黄檗、便、掌して、沙弥書記にむかいて、道す、
不著、仏、求、
不著、法、求、
不著、僧、求、
常、礼、如是事。

かくのごとく道しおわりて、又、掌すること、一掌す。
書記、いわく、
太麤生なり。
黄檗、いわく、
這裏、是、什麼、所在、更、説、什麼、麤、細？
また書記を掌すること、一掌す。
書記、ちなみに、休去す。
武宗ののち、書記、ついに還俗して即位す。
武宗の廃仏法を廃して、宣宗、すなわち、仏法を中興す。
宣宗は、即位、在位のあいだ、つねに坐禅をこのむ。

未即位のとき、父王のくにをはなれて、遠地の谿澗に遊方せしとき、純一に弁道す。
即位ののち、昼夜に坐禅す、という。
まことに、父王、すでに崩御す、兄弟、また、晏駕す、おいのために打殺せらる。
あわれむべき窮子なるがごとし。
しかあれども、励志、うつらず、弁道、功夫す。
奇代の勝躅なり。
天真の行持なるべし。

雪峰山、真覚大師、義存和尚、かつて発心より、このかた、掛錫の叢林、および、行程の接待、みち、はるかなりといえども、ところをきらわず日夜の坐禅、おこたることなし。
雪峰草創の露堂堂にいたるまで、おこたらずして坐禅と同死す。
咨参のそのかみは九上、洞山、三到、投子する。
奇世の弁道なり。
行持の清厳をすすむるには、いまの人、おおく、雪峰高行という。
雪峰の昏昧は諸人と、ひとしといえども、雪峰の伶俐は、諸人の、およぶところにあらず。
これ、行持の、しかあるなり。
いまの道人、かならず、雪峰、澡雪をまなぶべし。
しずかに雪峰の諸方に参学せし筋力をかえりみれば、まことに、宿有霊骨の功徳なるべし。
いま、有道の宗匠の会をのぞむに、真実に請参せんとするとき、そのたより、もっとも難弁なり。
ただ、二十、三十箇の皮袋にあらず、百、千人の面面なり。
おのおの実帰をもとむ。
授手の、日、くれなんとす。
打春の夜、あけなんとす。
あるいは、師の普説するときは、わが耳目なくして、いたずらに見聞をへだつ。
耳目そなわるときは、師、また、道取おわりぬ。
耆宿尊年の老古錐、すでに拊掌、笑呵呵のとき、新戒、晩進の、おのれとしては、むしろのすえを接するたより、なお、まれなるがごとし。
堂奥にいると、いらざると、師決をきくと、きかざると、あり。
光陰は、矢よりも、すみやかなり。

露命は、身よりも、もろし。( or 身命は、露よりも、もろし。)
師は、あれども、われ、参、不得なる、うらみあり。
参ぜんとするに、師、不得なる、かなしみあり。
かくのごとくの事、まのあたり、見聞せしなり。
大善知識、かならず、人をしる徳あれども、耕道、功夫のとき、あくまで親近する良縁、まれなるものなり。
雪峰の、むかし、洞山にのぼれりけんにも、投子にのぼれりけんにも、さだめて、この事煩をしのびけん。
この行持の法操、あわれむべし。
参学せざらんは、かなしむべし。

真丹、初祖の西来東土は、般若多羅尊者の教勅なり。
航海、三載の霜華、その風雪、いたましきのみならんや？
雲煙、いくかさなりの嶮浪なりとかせん？
不知のくににいらんとす。
身命をおしまん凡類、おもいよるべからず( or おもいたつべからず)。
これ、ひとえに伝法救迷情の大慈より、なれる、行持なるべし。
伝法の自己なるがゆえに、しかあり。
伝法の遍界なるがゆえに、しかあり。
尽十方界は真実道なるがゆえに、しかあり。
尽十方界、自己なるがゆえに、しかあり。
尽十方界、尽十方界なるがゆえに、しかあり。
いずれの生縁か、王宮にあらざらん？
いずれの王宮か、道場をさえん？
このゆえに、かくのごとく西来せり。
救迷情の自己なるゆえに、驚疑なく、怖畏せず。
救迷情の遍界なるゆえに、驚疑せず、怖畏なし。
ながく父王の国土を辞して、大舟をよそおうて、南海をへて広州にと、つく。
使船( or 便、船)の人、おおく、巾瓶の僧、あまたありといえども、史者、失録せり。
著岸より、このかた、しれる人なし。
すなわち、梁代の普通八年丁未歳、九月二十一日なり。
広州の刺史、蕭昂というもの、主礼をかざりて迎接したてまつる。
ちなみに、表を修して武帝にきこゆる、蕭昂が勤恪なり。
武帝、すなわち、奏を覧じて、欣悦して、使に詔をもたせて迎請したてまつる。

すなわち、そのとし、十月一日なり。
初祖、金陵にいたりて、梁武と相見するに、梁武とう、
朕、即位已来、造寺、写経、度僧、不可、勝、紀。
有、何、功徳？

師、曰、
並、無、功徳。

帝、曰、
以、何、無、功徳？( or 何、以、無、功徳？)

師、曰、
此、但、人、天、小果。
有漏之因。
如、影、随、形。
雖、有、非、実。

帝、曰、
如何、是、真功徳？

師、曰、
浄智、妙円。
体、自、空寂。
如是、功徳、不、以、世、求。

帝、又、問、
如何、是、聖諦、第一義諦？

師、曰、
廓然、無聖。

帝、曰、
対、朕、者、誰？

師、曰、
不識。

帝、不領悟。
師、知、機、不契。
ゆえに、この十月十九日、ひそかに江北にゆく。
そのとし、十一月二十三日、洛陽にいたりぬ。
嵩山、少林寺に寓止して、面壁、而、坐、終日、黙然なり。
しかあれども、魏主も不肖にして、しらず、はじつべき理も、しらず。
師は、南天竺の刹利種なり。
大国の皇子なり。
大国の王宮、その法、ひさしく慣熟せり。
小国の風俗は、大国の帝者に為見の、はじつべきあれども、初祖、うごかしむる、こころあらず。
くにをすてず、人をすてず。
ときに、菩提流支の訕謗を救せず、にくまず。
光統律師が邪心をうらむるにたらず、きくにおよばず。
かくのごとくの功徳おおしといえども、東地の人物、ただ、尋常の三蔵、および、経論師のごとくにおもうは、至愚なり。
小人なるゆえなり。
あるいは、おもう、禅宗とて一途の法門を開演するが、自余の論師等の所云も初祖の正法も、おなじかるべき、とおもう。
これは仏法を濫穢せしむる小畜なり。
初祖は、釈迦牟尼仏より二十八世の嫡嗣なり。
父王の大国をはなれて東地の衆生を救済する。
だれの、かたをひとしくするか、あらん？
もし祖師、西来せずば、東地の衆生、いかにしてか、仏正法を見聞せん？
いたずらに名相の沙、石にわずらうのみならん。
いま、われらがごときの辺地、遠方の披毛戴角までも、あくまで正法をきくことをえたり。
いまは、田夫、農父、野老、村童までも見聞する。
しかしながら、祖師、航海の行持にすくわるるなり。
西天と中華と、土風、はるかに勝劣せり、方俗、はるかに邪正あり。
大忍力の大慈にあらずよりは、伝持、法蔵の大聖、むかうべき所在にあらず。
住すべき道場なし。
知人の人、まれなり。
しばらく、嵩山に掛錫すること、九年なり。
人、これを壁観婆羅門という。

史者、これを習禅の列に編集すれども、しかにはあらず。
仏仏、嫡嫡、相伝する正法眼蔵、ひとり祖師のみなり。

石門林間録、云、
菩提達磨、初、自梁之魏、経行、於、嵩山之下、倚杖( or 倚仗)、於、少林。
面壁、燕坐、而已、非、習禅、也。
久、之人、莫、測、其、故、因、以、達磨、為、習禅。
夫、禅那、諸行之一、耳。
何、足、以、尽、聖人？
而、当時之人、以、之、為、史者、又、従、而、伝、於、習禅之列、使、与、枯木死灰之徒、為、伍。
雖然、聖人、非、止、於、禅那。
而、亦、不違、禅那。
如、易、出、于、陰陽、而、亦、不違、乎、陰陽。

梁武、初見達磨之時、即、問、
如何、是、聖諦、第一義？

答、曰、
廓然、無聖。

進、曰、
対、朕、者、誰？

又、曰、
不識。

使、達磨、不通、方言、則、何、於、是時、使、能、爾、耶？

しかあれば、すなわち、梁より魏へゆくこと、あきらけし。
嵩山に経行して少林に倚杖す。
面壁、燕坐す、といえども、習禅にはあらざるなり。
一巻の経書を将来せざれども、正法、伝来の正主なり。
しかあるを、史者、あきらめず、習禅の篇につらぬるは、至愚なり。
かなしむべし。
かくのごとくして、嵩山に経行するに、犬あり、堯をほゆ。
あわれむべし。

至愚なり。
だれのこころあらんが、この慈恩をかろくせん？
だれのこころあらんが、この恩を報ぜざらん？
世恩、なお、わすれず、おもくする人、おおし。
これを人という。
祖師の大恩は、父母にも、すぐるべし。
祖師の慈愛は、親子にも、たくらべざれ。
われらが卑賤、おもいやれば、驚怖しつべし。
中土をみず、中華にうまれず。
聖をしらず、賢をみず。
天上にのぼれる人、いまだなし。
人心、ひとえに、おろかなり。
開闢より、このかた、化、俗の人、なし。
国をすますときをきかず。
いわゆるは、いかなるが清？　いかなるが濁？　としらざるによる。
二柄三才の本末にくらきによりて、かくのごとくなり。
いわんや、五才の盛衰をしらんや？
この愚は、眼前の声色にくらきによりてなり。
くらきことは、経書をしらざるによりてなり、経書に師なきによりてなり。
その師なしというは、この経書、いく十巻ということをしらず、この経、いく百偈、いく千言としらず、ただ文の説相をのみ、よむ。
いく千偈、いく万言ということをしらざるなり。
すでに古経をしり古書をよむがごときは、すなわち、慕古の意旨あるなり。
慕古のこころあれば、古経、きたり、現前するなり。
漢高祖、および、魏太祖、これら、天象の偈をあきらめ、地形の言をつたえし帝者なり。
かくのごときの経典あきらむるとき、いささか三才、あきらめきたるなり。
いまだ、かくのごとくの聖君の化にあわざる百姓のともがらは、いかなるを事君とならい、いかなるを事親とならう、としらざれば、君子としても、あわれむべきものなり。
親族としても、あわれむべきなり。
臣となれるも子となれるも、尺璧も、いたずらにすぎぬ、寸陰も、いたずらにすぎぬるなり。
かくのごとくなる家門にうまれて、国土のおもき職、なお、さずくる人なし、かろき官位、なお、おしむ。

にごれるとき、なお、しかあり。
すめらんときは、見聞も、まれならん。
かくのごときの辺地、かくのごときの卑賤の身命をもちながら、あくまで如来の正法をきかん、みちに、いかでか、この卑賤の身命をおしむこころあらん？
おしんでのちに、なにもののためにか、すてんとする？
おもく、かしこからん、なお、法のために、おしむべからず。
いわんや、卑賤の身命をや？
たとえ卑賤なりというとも、為道、為法のところに、おしまず、すつることあらば、上天よりも貴なるべし、輪王よりも貴なるべし、おおよそ、天神地祇、三界衆生よりも貴なるべし。
しかあるに、初祖は、南天竺国、香至王の第三皇子なり。
すでに、天竺国の帝胤なり、皇子なり。
高貴の、うやまうべき、東地、辺国には、かしづきたてまつるべき儀も、いまだ、しらざるなり。
香なし、華なし、坐褥おろそかなり、殿台つたなし。
いわんや、わがくには、遠方の絶岸なり。
いかでか、大国の皇をうやまう儀をしらん？
たとえ、ならうとも、迂曲して、わきまうべからざるなり。
諸侯と帝者と、その儀、ことなるべし。
その礼も軽重あれども、わきまえしらず。
自己の貴賤をしらざれば、自己を保任せず。
自己を保任せざれば、自己の貴賤、もっとも、あきらむべきなり。
初祖は、釈尊、第二十八世の付法なり。
道にありてより、このかた、いよいよ、おもし。
かくのごとくなる大聖至尊、なお、師勅によりて、身命をおしまざるは、伝法のためなり、救生のためなり。
真丹国には、いまだ、初祖西来よりさきに嫡嫡、単伝の仏子をみず、嫡嫡、面授の祖面を面授せず、見仏、いまだしかりき。
のちにも、初祖の遠孫のほか、さらに西来せざるなり。
曇華の一現は、やすかるべし。
年月をまちて算数しつべし。
初祖の西来は、ふたたびあるべからざるなり。
しかあるに、祖師の遠孫と称するともがらも、楚国の至愚にようて玉石いまだわきまえず、経師、論師も斉肩すべき、とおもえり。

少聞薄解によりて、しかあるなり。
宿殖般若の正種なきやからは、祖道の遠孫とならず、いたずらに名相の邪路に跉跰するもの、あわれむべし。
梁の普通よりのち、なお西天にゆくものあり。
それ、なにのためぞ？
至愚の、はなはだしきなり。
悪業の、ひくによりて、他国に跉跰するなり。
歩歩に謗法の邪路におもむく、歩歩に親父の家郷を逃逝す。
なんだち、西天にいたりて、なんの所得か、ある？
ただ山水に辛苦するのみなり。
西天の、東来する宗旨を学せず、仏法の東漸をあきらめざるによりて、いたずらに西天に迷路するなり。
仏法をもとむる名称ありといえども、仏法をもとむる道念なきによりて、西天にしても正師にあわず、いたずらに論師、経師にのみあえり。
そのゆえは、正師は西天にも現在せんとも、正法をもとむる正心なきによりて、正法、なんだちが手にいらざるなり。
西天にいたりて正師をみたる、という、だれか、その人、いまだ、きこえざるなり。
もし正師にあわば、いくそばくの名称をも自称せん。
なきによりて自称、いまだ、あらず。
また、真丹国にも、祖師西来よりのち、経論に倚解して、正法をとぶらわざる僧侶、おおし。
これ、経論を披閲すといえども、経論の旨趣に、くらし。
この黒業は今日の業力のみにあらず、宿生の悪業力なり。
今生、ついに、如来の真訣をきかず、如来の正法をみず、如来の面授にてらされず、如来の仏心を使用せず、諸仏の家風をきかざる。
かなしむべき一生ならん。
隋、唐、宋の諸代、かくのごときのたぐい、おおし。
ただ宿殖般若の種子ある人は、不期に入門せるもあるは、算沙の業を解脱して、祖師の遠孫となれりしは、ともに、利根の機なり、上上の機なり、正人の正種なり。
愚蒙のやから、ひさしく経論の草庵に止宿するのみなり。
しかあるに、かくのごとくの嶮難ある、さかいを辞せずといわず( or 辞せず、いとわず)、初祖、西来する玄風、いまなお、あふぐところに、われらが臭皮袋をおしんで、ついに、なににか、せん？

香厳禅師、いわく、
百計千方、只、為、身。
不知、身、是、塚中、塵。
莫、言、白髪、無、言語。
此、是、黄泉、伝、語、人。

しかあれば、すなわち、おしむに、たとえ百計千方をもってす、というとも、ついに、これ、塚中、一堆の塵と化するものなり。
いわんや、いたずらに小国の王民につかわれて東西に馳走いるあいだ、千辛万苦、いくばくの身心をか、くるしむる。
義によりては、身命をかろくす。
殉死の礼、わすれざるがごとし。
恩につかわるる前途、ただ暗頭の雲霧なり。
小臣につかわれ民間に身命をすつるもの、むかしより、おおし。
おしむべき人身なり。
道器となりぬべきゆえに。
いま、正法にあう。
百、千、恒沙の身命をすてても正法を参学すべし。
いたずらなる小人と、広大深遠の仏法と、いずれのためにか、身命をすつべき？
賢、不肖、ともに、進退にわずらうべからざるものなり。
しずかに、おもうべし。
正法、よに流布せざらんときは、身命を正法のために抛捨せんことをねがうとも、あうべからず。
正法にあう今日のわれらをねがうべし。
正法にあうて身命をすてざる、われらを慚愧せん。
はずべくば、この道理をはずべきなり。
しかあれば、祖師の大恩を報謝せんことは、一日の行持なり。
自己の身命をかえりみることなかれ。
禽獣よりも、おろかなる、恩愛、おしんで、すてざることなかれ。
たとえ愛惜すとも、長年のともなるべからず。
あくたのごとくなる家門、たのみて、とどまることなかれ。
たとえ、とどまるとも、ついの幽棲にあらず。
むかし、仏祖の、かしこかりし、みな、七宝千子をなげすて、玉殿、朱楼をすみやかに、すつ。
涕唾のごとく、みる。

糞土のごとく、みる。
これら、みな、古来の仏祖の、古来の仏祖を報謝しきたれる知恩、報恩の儀なり。
病雀、なお、恩をわすれず。
三府の環、よく、報謝あり。
窮亀、なお、恩をわすれず。
余不の印、よく、報謝あり。
かなしむべし、人面ながら、畜類よりも愚劣ならんことは。
いまの見仏聞法は、仏祖、面面の行持より、きたれる、慈恩なり。
仏祖もし単伝せずば、いかにしてか、今日にいたらん？
一句の恩、なお、報謝すべし。
一法の恩、なお、報謝すべし。
いわんや、正法眼蔵、無上大法の大恩、これを報謝せざらんや？
一日に無量、恒河沙の身命すてんこと、ねがうべし。
法のために、すてん、かばねは、世世の、われら、かえりて礼拝、供養すべし。
諸天、龍神、ともに、恭敬、尊重し、守護、讃歎するところなり。
道理、それ、必然なるがゆえに。
西天竺国には、髑髏をうり髑髏をかう婆羅門の法、ひさしく風聞せり。
これ、聞法の人の髑髏、形骸の功徳、おおきことを尊重するなり。
いま、道のために身命をすてざれば、聞法の功徳いたらず。
身命をかえりみず聞法するがごときは、その聞法、成熟するなり。
この髑髏は、尊重すべきなり。
いま、われら、道のために、すてざらん髑髏は、他日に、さらされて野外にすてらるとも、だれが、これを礼拝せん？　だれが、これを売買せん？
今日の精魂、かえりて、うらむべし。
鬼の先骨をうつ、ありき。
天の先骨を礼せし、あり。
いたずらに塵、土に化するときをおもいやれば、いまの愛惜なし、のちの、あわれみあり。
もよおさるるところは、みん人の、なみだのごとくなるべし。
いたずらに塵、土に化して、人に、いとわれん髑髏をもって、よく、さいわいに、仏正法を行持すべし。
このゆえに、寒苦をおづることなかれ。
寒苦、いまだ、人をやぶらず。

寒苦、いまだ、道をやぶらず。
ただ不修をおづべし。
不修、それ、人をやぶり、道をやぶる。
暑熱をおづることなかれ。
暑熱、いまだ、人をやぶらず。
暑熱、いまだ、道をやぶらず。
不修、よく、人をやぶり、道をやぶる。
麦をうけ、蕨をとるは、道俗の勝躅なり。
血をもとめ、乳をもとめて、鬼畜にならわざるべし。
ただ、まさに、行持なる一日は、諸仏の行履なり。

真丹、第二祖、大祖、正宗普覚大師は、神、鬼、ともに嚮慕す。
道、俗、おなじく尊重せし高徳の師なり。
曠達の士なり。
伊洛に久居して群書を博覧す。
くにの、まれなりとするところ、人の、あいがたきなり。
法高徳重のゆえに、神物、倐見して、祖にかたりて、いう、
将、欲、受、果、何、滞、此、耶？
大道、匪、遠。
汝、其、南、矣。

あくる日、にわかに頭痛すること刺がごとし。
其師、洛陽、龍門、香山宝静禅師、これを治せんとするときに、空中、有、声、曰、
此、乃、換、骨。
非、常痛、也。

祖、遂、以、見、神、事、白、于、師。
師、視、其頂骨、即、如、五峰、秀、出、矣。
乃、曰、
汝相、吉祥。
当、有、所証。
神、(令、)汝、南、者、斯、則、少林寺、達磨大士、必、汝之師、也。

この教をききて、祖、すなわち、少室峰に参ず。
神は、みずからの久遠修道の守道神なり。

このとき、窮臘、寒天なり。
十二月、初九夜、という。
天、大雨雪ならずとも、深山、高峰の冬夜は、おもいやるに、人物の窓前に立地すべきにあらず。
竹節、なお、破す。
おそれつべき時候なり。
しかあるに、大雪、帀地、埋山没峰なり。
破雪して道をもとむ、いくばくの嶮難なりとかせん？
ついに祖室にと、つくといえども、入室ゆるされず、顧聘せざるがごとし。
この夜、ねむらず、坐せず、やすむことなし。
堅立、不動にして、あくるをまつに、夜雪、なさけなきがごとし。
やや、つもりて腰をうずむあいだ、おつる、なみだ、滴滴こぼる。
なみだをみるに、なみだをかさぬ。
身をかえりみて、身をかえりみる。
自、惟すらく、
昔人、求、道、
敲、骨、取、髄。
刺、血、済、飢。
布、髪、淹、泥。
投、崖、飼、虎。
古、尚、若此。
我、又、何人？

かくのごとく、おもうに、志気、いよいよ励志あり。
いま、いう、古、尚、若此。我、又、何人？　を晩進も、わすれざるべきなり。
しばらく、これをわするるとき、永劫の沈溺あるなり。
かくのごとく自、惟して、法をもとめ、道をもとむる志気のみ、かさなる。
澡雪の操を操とせざるによりて、しかありけるなるべし。
遅明のよるの消息、はからんとするに、肝膽も、くだけぬるがごとし。
ただ身毛の寒怕せらるるのみなり。
初祖、あわれみて、昧旦に、とう、
汝、久立、雪中、当、求、何事？
かくのごとく、きくに、二祖、悲涙、ますます、おとして、いわく、
惟、願、和尚、慈悲、開、甘露門、広、度、群品。
かくのごとく、もうすに、初祖、曰、

諸仏、無上、妙道、曠劫、精勤、難行、能行、非忍、而、忍。
豈、以、小徳、小智、軽心、慢心、欲、冀、真乗、徒労、勤苦。

このとき、二祖、ききて、いよいよ誨励す。
ひそかに利刀をとりて、みずから左臂を断て、置、于、師前するに、初祖、ちなみに、二祖、これ、法器なり、としりぬ。乃、曰、
諸仏、最初、求、道、為、法、忘、形。
汝、今、断、臂、吾前、求、亦、可、在。

これより堂奥にいる。
執侍、八年。
勤労、千万。
まことに、これ、人、天の大依怙なるなり、人、天の大導師なるなり。
かくのごときの勤労は、西天にもきかず、東地はじめて、あり。
破顔は古をきく、得髄は祖に学す。
しずかに観想すらくば、初祖、いく千万の西来ありとも、二祖もし行持せずば、今日の飽学措大、あるべからず。
今日、われら、正法を見聞するたぐいとなれり、祖の恩、かならず、報謝すべし。
その報謝は、余外の法は、あたるべからず。
身命も不足なるべし。
国城も、おもきにあらず。
国城は、他人にも、うばわる、親子にも、ゆずる。
身命は、無常にも、まかす、主君にも、まかす、邪道にも、まかす。
しかあれば、これを挙して報謝に擬するに不道なるべし。
ただ、まさに、日日の行持、その報謝の正道なるべし。
いわゆるの道理は、日日の生命を等閑にせず、わたくしに、ついやさざらんと行持するなり。
そのゆえは、いかん？
この生命は、前来の行持の余慶なり、行持の大恩なり。
いそぎ報謝すべし。
(かなしむべし、はずべし、)仏祖、行持の功徳分より生成せる形骸をいたずらなる妻子のつぶねとなし、妻子のもちあそびにまかせて、破落をおしまざらんことは。
邪狂にして身命を名利の羅刹にまかす。
名利は、一頭の大賊なり。

名利をおもくせば、名利をあわれむべし。
名利をあわれむ、というは、仏祖となりぬべき身命を、名利にまかせて、やぶらしめざるなり。
妻子、親族、あわれまんことも、また、かくのごとくすべし。
名利は、夢幻、空華、と学することなかれ。衆生のごとく学すべし。
名利をあわれまず、罪報をつもらしむることなかれ。
参学の正眼、あまねく諸方をみんこと、かくのごとくなるべし。
世人の、なさけある、金、銀、珍玩の蒙恵、なお、報謝す。
好語、好声のよしみ、こころあるは、みな、報謝のなさけをはげむ。
如来、無上の正法を見聞する大恩、だれの人面か、わするるときあらん？
これをわすれざらん、一生の珍宝なり。
この行持を不退転ならん形骸、髑髏は、生時、死時、おなじく、七宝塔におさめ、一切、人、天、皆、応、供養の功徳なり。
かくのごとく、大恩あり、としりなば、かならず、草露の命をいたずらに零落せしめず、如山の(功)徳をねんごろに報ずべし。
これ、すなわち、行持なり。
この行持の功は、祖仏として行持する、われありしなり。

おおよそ、初祖、二祖、かつて精藍を草創せず、薙草の繁務なし。
および、三祖、四祖もまた、かくのごとし。
五祖、六祖の、寺院を自草せず。
青原、南嶽も、また、かくのごとし。

石頭大師は、草庵を大石にむすびて石上に坐禅す。
昼夜に、ねむらず、坐せざるときなし。
衆務を虧闕せずといえども、十二時の坐禅、かならず、つとめきたれり。
いま青原の一派の天下に流通すること、人、天を利潤せしむることは、石頭、大力の行持、堅固の、しかあらしむるなり。
いまの雲門、法眼の、あきらむるところある、みな、石頭大師の法孫なり。

第三十一祖、大医禅師は、十四歳の、そのかみ、三祖大師をみしより、服労、九載なり。
すでに仏祖の祖風を嗣続するより、摂心、無寐にして脇、不至、席なること、僅、六十年なり。
化、怨、親にこうむらしめ、徳、人、天にあまねし。
真丹の(第)四祖なり。

貞観癸卯歳、太宗、嚮師道味、欲、瞻、風彩、詔、赴京。
師、上表、遜謝、前後三返、竟、以、疾、辞。
第四度、命、使、曰、
如、果、不赴、即、取、首、来。
使、至、山、諭、旨。
師、乃、引、頸、就、刃、神色儼然。
使、異、之、回、以、状、聞。
帝、弥加、歎、慕。
就、賜、珍、以、遂、其志

しかあれば、すなわち、四祖禅師は身命を身命とせず、王、臣に親近せざらんと行持せる行持、これ、千歳の一遇なり。
太宗は有義の国主なり、相見の、ものうかるべきにあらざれども、かくのごとく先達の行持はありける、と参学すべきなり。
人主としては、引、頸、就、刃して身命をおしまざる人物をも、なお、歎、慕するなり。
これ、いたずらなるにあらず。
光陰をおしみ、行持を専一にするなり。
上表、三返、奇代の例なり。
いま、澆季には、もとめて帝者にまみえんとねがう、あり。
高宗、永徽辛亥歳、閏九月四日、忽、垂、誡、門人、曰、
一切諸法、悉皆、解脱。
汝等、各自、護念、流化、未来。
言、訖、安坐、而、逝。
寿七十有二。
塔、于、本山。
明年、四月八日、
塔、戸、無、故、自、開、儀相、如、生。
爾後、門人、不敢、復、閉。

しるべし。
一切諸法、悉皆、解脱なり。
諸法の、空なるにあらず。
諸法の、諸法ならざるにあらず。
悉皆、解脱なる諸法なり。
いま、四祖には、未入塔時の行持あり、既在塔時の行持あるなり。

生者、かならず、滅あり、と見聞するは小見なり。
滅者は無思覚、と知見せるは小聞なり。
学道には、これらの小聞、小見をならうことなかれ。
生者の、滅なきも、あるべし。
滅者の、有思覚なるも、あるべきなり。

福州、玄沙、宗一大師、法名、師備、福州、閩県人、也。
姓、謝、氏。
幼年より垂釣をこのむ。
小艇を南台江にうかべて、もろもろの漁者になれきたる。
唐の咸通のはじめ、年甫、三十なり。
たちまちに出塵をねがう。
すなわち、釣舟をすてて、芙蓉山、霊訓禅師に投じて落髪す。
豫章、開元寺、道玄律師に具足戒をうく。
布衲。
芒履。
食、纔、接、気。
常、終日、宴坐。
衆、皆、異、之。
与、雪峰義存、本、法門、昆仲、而、親近、若、師資。
雪峰、以、其苦行、呼、為、頭陀。
一日、雪峰、問、曰、
阿那箇、是、備頭陀？
師、対、曰、
終、不敢、誑、於、人。
異日、雪峰、召、曰、
備頭陀、何、不、遍参、去？
師、曰、
達磨、不来、東土。
二祖、不往、西天。
雪峰、然、之。
ついに、象骨山にのぼるにおよんで、すなわち、師と同力締搆するに、玄徒、臻萃せり。
師の入室、咨決するに、晨昏にかわることなし。
諸方の玄学のなかに、所未決あるは、かならず、師にしたがいて請益するに、雪峰和尚、いわく、

備頭陀にとうべし。
師、まさに、仁にあたりて不譲にして、これをつとむ。
抜群の行持にあらずよりは、恁麼の行履あるべからず。
終日、宴坐の行持、まれなる行持なり。
いたずらに声色に馳騁することは、おおしといえども、終日の宴坐は、つとむる人、まれなるなり。
いま、晩学としては、のこりの光陰の、すくなきことをおそりて、終日、宴坐、これをつとむべきなり。

長慶の慧稜和尚は、雪峰下の尊宿なり。
雪峰と玄沙とに往来して参学すること僅二十九年なり。
その年月に蒲団二十枚を坐破す。
いまの人の坐禅を愛するあるは、長慶をあげて、慕古の勝躅とす。
したうは、おおし。
およぶ、すくなし。
しかあるに、三十年の功夫むなしからず、あるとき、涼簾を巻起せしちなみに、忽然として大悟す。
三十年来かつて郷土にかえらず、親族にむかわず、上下肩と談笑せず、専一に功夫す。
師の行持は、三十年なり。
疑滞を疑滞とせること三十年、さしおかざる利機というべし、大根というべし。
励志の堅固なる、伝聞するは或、従、経巻なり。
ねがうべきをねがい、はずべきをはじとせん、長慶に相逢すべきなり。
実を論ずれば、ただ、道心なく、操行つたなきによりて、いたずらに名利には繋縛せらるるなり。

大潙山、大円禅師は、百丈の授記より、直に潙山の峭絶にゆきて、鳥獣、為、伍して結、草、修練す。
風雪を辞労することなし。
橡、栗、充、食せり。
堂宇なし、常住なし。
しかあれども、行持の見成すること、四十年来なり。
のちには、海内の名藍として龍象、蹴踏するものなり。
梵刹の現成を願ぜんにも、人情をめぐらすことなかれ。
仏法の行持を堅固にすべきなり。

修練ありて堂閣なきは古仏の道場なり、露地、樹下の風、とおくきこゆ(るなり)。
この所在、ながく結界となる。
まさに、一人の行持あれば、諸仏の道場につたわるべきなり( or つたわるる)。
末世の愚人、いたずらに堂閣の結構につかるることなかれ。
仏祖、いまだ堂閣をねがわず。
自己の眼目、いまだあきらめず、いたずらに殿堂、精藍を結構する、まったく諸仏に仏宇を供養せんとにはあらず、おのれが名利の窟宅とせんがためなり。
潙山の、そのかみの行持、しずかに、おもいやるべきなり。
おもいやる、というは、わが、いま潙山にすめらんがごとく、おもうべし。
深夜のあめの声、こけをうがつのみならんや？
巌石を穿却するちからもあるべし。
冬天のゆきの夜は、禽獣も、まれなるべし。
いわんや、人煙の、われをしる、あらんや？
命をかろくし法をおもくする行持にあらずば、しかあるべからざる活計なり。
薙草すみやかならず、土木いとなまず。
ただ行持、修練し、弁道、功夫あるのみなり。
あわれむべし。
正法、伝持の嫡祖、いくばくか山中の嶮岨にわずらう。
潙山をつたえきくには、池あり、水あり、こおり、かさなり、きり、かさなるらん。
人物の堪忍すべき幽棲にあらざれども、仏道と玄奥と、化、成ずること、あらたなり。
かくのごとく行持しきたれりし道得を見聞す、身をやすくしてきくべきにあらざれども、行持の勤労すべき報謝をしらざれば、たやすくきくというとも、こころあらん晩学、いかでか、そのかみの潙山を目前の、いまのごとく、おもいやりて、あわれまざらん？
この潙山の行持の道力、化功によりて、風輪うごかず、世界やぶれず、天衆の宮殿おだやかなり、人間の国土も保持せるなり。
潙山の遠孫にあらざれども、潙山は祖宗なるべし。

のちに、仰山きたり、侍奉す。
仰山、もとは、百丈先師のところにして、問十答百の鶖子なりといえども、潙山に参侍して、さらに看、牛、三年の功夫となる。
近来は、断絶し、見聞することなき行持なり。

三年の看、牛、よく道得を人にもとめざらしむ。

芙蓉山の楷祖、もっぱら行持、見成の本源なり。
国主より定照禅師号、ならびに、紫袍をたまうに、祖、うけず、修表具辞す。
国主、とがめあれども、師、ついに、不受なり。
米湯の法味つたわれり。
芙蓉山に庵せしに、道俗の川湊するもの、僅、数百人なり。
日、食、粥一杯なるゆえに、おおく、引去す。
師、ちかうて、赴斎せず。
あるとき、衆にしめすに、いわく、

夫、出家、者、為、厭、塵労。
求、脱、生死、休心息念、断絶、攀、縁。
故、名、出家。
豈、可、以、等閑、利養、埋没、平生？
直、須、両頭、撒開、中間、放下。
遇、声、遇、色、如、石上栽華。
見、利、見、名、似、眼中著屑。
況、従、無始、已来、不是、不曾、経歴。
又、不是、不知、次第。
不過、翻、頭、作、尾。
止、於、如此、何、須、苦苦、貪恋？
如今、不歇、更、待、何時？
所以、先聖、教、人、只、要、尽却。
今時、能、尽、今時、更、有、何事？
若、得、心中無事、仏祖、猶、是、冤家。
一切世事、自然、冷淡、方、始、那辺、相応。

不見？
隠山、至、死、不肯、見、人。
趙州、至、死、不肯、告、人。
匾担、拾、橡、栗、為、食。
大梅、以、荷葉、為、衣。
紙衣道者、只、披、紙。
玄太上座、只、著、布。
石霜、置、枯木、堂、与、衆、坐臥。只、要、死了、爾心。

投子、使、人、弁、米、同煮共餐。要、得、省、取、爾事。
且、従上、諸聖、有、如、此榜様。
若、無、長所、如何、甘、得？
諸仁者、
若、也、於、斯、体究、的、不虧人。
若、也、不肯、承当、向後、深、恐、費、力。

山僧、行業、無取、忝、主、山門。
豈、可、坐、費、常住、頓忘、先聖、付属。
今、者、輒、欲、略、学、古人、為、住持、体例。
与、諸人、議、定、更、不、下山、不、赴斎、不、発化主。
唯、将、本院、荘、課、一歳、所得、均、作、三百六十分、日、取、一分、
用、之、更、不随人、添、減。
可、以、備、飯、則、作、飯。
作、飯、不足、則、作、粥。
作、粥、不足、則、作、米湯。
新、到、相見、茶湯、而、已、更、不、煎点。
唯、置、一茶堂、自、去、取、用。
務、要、省、縁、専一、弁道。
又、況、活計、具足。

風景、不、疎。
華、解、笑。
鳥、解、啼。
木馬、長鳴。
石牛、善、走。
天外之青山、寡色。
耳畔之鳴泉、無声。
嶺上猿、啼。
露、湿、中霄之月。
林間、鶴、唳。
風、回、清暁、之、松。
春風起時、枯木龍吟。
秋、葉、凋。
而、寒林、華、散。
玉階、鋪、苔蘚之紋。

人面、帯、煙霞之色。

音塵、寂爾。
消息、宛然。
一味、蕭条。
無、可、趣向。

山僧、今日、向、諸人、面前、説、家門。
已、是、不著便。
豈、可、更、
去、陞堂、入室、拈、槌、竪、払、
東、喝、西、棒、
張眉怒目、
如、癇病発、相似？
不、唯、屈沈、上座、
況、亦、辜、負、先聖。

爾、不見？
達磨西来、到、少室山下、面壁、九年。
二祖、至、於、立雪、断臂。
可、謂、受、艱辛。
然而、
達磨、不、曾、措了、一詞。
二祖、不、曾、問著、一句。
還、喚、達磨、作、不、為人、得、麼？
喚、二祖、做、不、求、師、得、麼？

山僧、毎至説著、古聖、做、処、便、覚、無、地、容、身。
慚愧、後人、軟弱。
又、況、百味珍飠差、遁相、供養、道、(「飠差」は一文字の漢字とみなしてください。)
我、四事、具足、方、可、発心。

只、恐、做、手脚、不迄、便是、隔生、隔世、去、也。
時、光、似、箭。深、為、可、惜。
雖然、如是。

更、在、他人、従、長相、度。
山僧、也、強、教、不得。

諸仁者、
還、見、古人偈、麼？
山田、脱、粟飯。
野菜、淡黄、齏。
喫、則、従、君、喫。
不喫、任、東西。

伏、惟、同道、各自、努力。
珍重。

これ、すなわち、祖宗、単伝の骨髄なり。
高祖の行持、おおしといえども、しばらく、この一枚を挙するなり。
いま、われらが晩学なる、芙蓉高祖の芙蓉山に修練せし行持、したい、参学すべし。
それ、すなわち、祇園の正儀なり。

洪州、江西、開元寺、大寂禅師、諱、道一、漢州、十方県人なり。
南嶽に参侍すること、十余載なり。
あるとき、郷里にかえらんとして半路にいたる。
半路より、かえりて焼香、礼拝するに、南嶽、ちなみに偈をつくりて馬祖にたまうに、いわく、
勧、君、莫、帰、郷。
帰、郷、道、不行。
並、舎老婆子、説、汝、旧時、名。

この法語をたまうに、馬祖、うやまいたまわりて、ちかいて、いわく、
われ、生生にも、漢州にむかわざらん。
と誓願して、漢州にむかいて一歩をあゆまず。
江西に一住して、十方を往来せしむ。
わずかに、即心即仏を道得するほかに、さらに一語の為人なし。
しかありといえども、南嶽の嫡嗣なり、人、天の命脈なり。
いかなるか、これ、莫、帰、郷？
莫、帰、郷とは、いかにあるべきぞ？

東西南北の帰、去来、ただ、これ、自己の倒起なり。
まことに、帰、郷、道、不行なり。
道、不行なる帰、郷なりとや？　行持する。
帰、郷にあらざるとや？　行持する。
帰、郷、なにによりてか道、不行なる？
不行にさえらるとやせん？
自己にさえらるとやせん？
並、舎老婆子は、説、汝、旧時、名なりとは、いわざるなり。
並、舎老婆子、説、汝、旧時、名なりという道得なり。
南嶽、いかにしてか、この道得ある？
江西、いかにしてか、この法語をうる？
その道理は、われ向、南、行ずるときは、大地、おなじく、向、南、行ずるなり。
余方も、また、しかあるべし。
須弥、大海を量として、しかあらずと疑殆し、日月星辰に格量して猶、滞するは、小見なり。

第三十二祖、大満禅師は、黄梅人なり。
俗姓は、周、氏なり。
母の姓を称なり。
師は無、父、而、生なり。
たとえば、李、老君のごとし。
七歳伝法よりのち、七十有四にいたるまで、仏祖、正法眼蔵、よく、これを住持し、ひそかに衣、法を慧能行者に付属する、不群の行持なり。
衣、法を神秀にしらせず、慧能に付属するゆえに、正法の寿命、不断なるなり。

先師、天童和尚は、越上人事なり。
十九歳にして教学をすてて参学するに、七旬におよんで、なお、不退なり。
嘉定の皇帝より紫衣、師号をたまわるといえども、ついに、うけず、修表辞謝す。
十方の雲衲、ともに、崇重す。
遠近の有識、ともに、随喜するなり。
皇帝、大悦して、御茶をたまう。
しれるものは、奇代の事、と讃歎す。
まことに、これ、真実の行持なり。

そのゆえは、愛名は、犯禁よりも、あし(し)。
犯禁は、一事の非なり。
愛名は、一生の累なり。
おろかにして、すてざることなかれ。
くらくして、うくることなかれ。
うけざるは、行持なり。
すつるは、行持なり。
六代の祖師おのおの師号あるは、みな、滅後の勅諡なり、在世の愛名にあらず。
しかあれば、すみやかに生死の愛名をすてて、仏祖の行持をねがうべし。
貪愛して禽獣にひとしきことなかれ。
おもからざる吾我をむさぼり愛するは、禽獣も、そのおもいあり、畜生も、そのこころあり。
名利をすつることは人、天も、まれなりとするところ、仏祖、いまだ、すてざるはなし。
あるが、いわく、
衆生、利益のために貪名愛利す。
という。
おおきなる邪説なり。
付仏法の外道なり。
謗、正法の魔党なり。
なんじ、いうがごとくならば、不貪名利の仏祖は利、生なきか？
わらうべし、わらうべし。
又、不貪の利生あり。いかん？
又、そこばくの利生あることを学せず、利生にあらざるを利生と称する、魔類なるべし。
なんじに利益せられん衆生は、堕獄の種類なるべし。
一生のくらきことをかなしむべし。
愚蒙を利生に称することなかれ。
しかあれば、師号を恩賜すとも、上表辞謝する、古来の勝躅なり、晩学の参究なるべし。
まのあたり、先師をみる、これ、人にあうなり。
先師は十九歳より離、郷、尋師、弁道、功夫すること、六十五載にいたりて、なお、不退不転なり。
帝者に親近せず、帝者にみえず。

丞相と親厚ならず、官員と親厚ならず。
紫衣、師号を表辞するのみにあらず。
一生、まだらなる袈裟を搭せず。
よのつねに、上堂、入室、みな、くろき袈裟裰子をもちいる。
衲子を教訓するに、いわく、
参禅、学道は、第一、有道心、これ、学道のはじめなり。
いま、二百年来、祖師道すたれたり。
かなしむべし。
いわんや、一句を道得せる皮袋すくなし。
某甲、そのかみ、径山に掛錫するに、光仏照、そのときの粥飯頭なりき。
上堂して、いわく、
仏法、禅道、かならずしも他人の言句をもとむべからず。
ただ、各自、理、会。
かくのごとく、いいて、
僧堂裏、都、不管なりき。
雲水兄弟、也、都、不管なり。
祗管、与、官、客、相見、追尋するのみなり。
仏照、ことに、仏法の機関をしらず、ひとえに貪名愛利のみなり。
仏法もし各自、理、会ならば、いかでか尋師訪道の老古錐あらん？
真箇、是、光仏照、不、曾、参禅、也。
いま、諸方、長老、無道心なる、ただ光仏照箇児子、也。
仏法、那、得、他手裏、有？
可、惜、可、惜。

かくのごとく、いうに、仏照児孫、おおく、きくものあれど、うらみず。
又、いわく、
参禅、者、身心脱落、也。
不用、焼香、礼拝、念仏、修懺、看経。
祗管、打坐、始、得。

まことに、いま大宋国の諸方に、参禅に名字をかけ、祖宗の遠孫と称する皮袋、ただ一、二百のみにあらず、稲麻竹葦なりとも、打坐を打坐に勧誘するともがら、たえて風聞せざるなり。
ただ四海五湖のあいだ、先師、天童のみなり。
諸方も、おなじく、天童をほむ。
天童、諸方をほめず。

又、すべて天童をしらざる大刹の主もあり。
これは、中華にうまれたりといえども、禽獣の流類ならん。
参ずべきを参ぜず、いたずらに光陰を蹉過するがゆえに。
あわれむべし。
天童をしらざるやからは、胡説乱道をかまびすしくするを仏祖の家風と錯認せり。
先師、よのつねに、普説す、
われ、十九載より、このかた、あまねく諸方の叢林をふるに、為人師なし。
十九載より、このかた、一日一夜も、不礙、蒲団の日夜あらず。
某甲、未住院より、このかた、郷人と、ものがたりせず。
光陰、おしきによりてなり。
掛錫の所在にあり、庵裏、寮舎、すべて、いりて、みることなし。
いわんや遊山、翫水に功夫をついやさんや？
雲堂、公界の坐禅のほか、あるいは、閣上、あるいは、屏所をもとめて、独子ゆきて、穏便のところに坐禅す。
つねに袖裏に蒲団をたずさえて、あるいは、巌下にも坐禅す。
つねに、おもいき、金剛座を座破せん、と。
これ、もとむる所期なり。
臀肉の爛壊するときどきもありき。
このとき、いよいよ坐禅をこのむ。
某甲、今年六十五載、老骨、頭、懶、不会、坐禅なれども、十方兄弟をあわれむによりて、住持、山門、暁諭、方来、為衆、伝道なり。
諸方、長老、那裏、有、什麼、仏法？　なるゆえに。

かくのごとく上堂し、かくのごとく普説するなり。
又、諸方の雲水の人事の産をうけず。

趙提挙は、嘉定聖主の胤孫なり。
知、明州軍、州事、管内、勧農使なり。
先師を請して州府につきて陞座せしむるに、銀子一万鋌を布施す。
先師、陞座了に、提挙にむかうて謝して、いわく、
某甲、依、例、出山、陞座、開演、正法眼蔵、涅槃妙心、謹、以、薦、先公、冥府。
但、是銀子、不敢、拝領。
僧家、不要、這般物子。
千、万、賜恩、依、旧、拝、還。

提挙、いわく、
和尚、
下官、悉、以、皇帝陛下、親族、到所、且、貴、宝貝、見多。
今、以、先父冥福之日、欲、資、冥府。
和尚、
如何、不納？
今日、多幸。
大慈大悲、卒、留、小、嚫。

先師、曰、
提挙、
台、命、且、厳、不敢、遜謝。
只、有、道理。
某甲、陞座、説法。
提挙、聡、聴、得？　否？

提挙、曰、
下官、
只、聴、歓喜。

先師、いわく、
提挙、聡明、照鑑山語。
不勝、皇、恐。
更、望、台、臨、鈞候、万福。
山僧、陞座時、説、得、甚麼、法？
試、道、看。
若、道得、拝領、銀子一万鋌。
若、道不得、便、府使、収、銀子。

提挙、起、向、先師、曰、
即、辰、伏惟、和尚、法候、動止、万福。

先師、いわく、
這箇、是、挙来底。
那箇、是、聴得底？

提挙、擬議。
先師、いわく、
先公、冥福、円成。
嚫、施は、且、待、先公、台、判。

かくのごとく、いいて、すなわち請、暇するに、提挙、いわく、
未、恨、不領。
且、喜、見、師。

かくのごとく、いいて、先師をおくる。
浙東、浙西の道、俗、おおく、讃歎す。
このこと、平侍者が日録にあり。
平侍者、いわく、
這老和尚、不可得人。
那裏、容易、得見？

だれが、諸方にうけざる人あらん、一万鋌の銀子？
ふるき人の、いわく、
金、銀、珠玉、これをみんこと糞土のごとくみるべし。

たとえ金、銀のごとくみるとも、不受ならんは、衲子の風なり。
先師に、この事あり。
余人に、このことなし。
先師、つねに、いわく、
三百年より、このかた、わがごとくなる知識、いまだ、いでず。
諸人、
審細に弁道、功夫すべし。

先師の会に、西蜀の綿州人にて、道昇とてありしは道家流なり。
徒党五人、ともに、ちかうて、いわく、
われら、一生に仏祖の大道を弁取すべし。
さらに、郷土にかえるべからず。

先師、ことに随喜して、経行、道業、ともに、衆僧と一如ならしむ。
その排列のときは、比丘尼のしもに排立す。
奇代の勝躅なり。

又、福州の僧、その名、善如、ちかいて、いわく、
善如、平生、さらに一歩をみなみにむかいて、うつすべからず。
もっぱら仏祖の大道を参ずべし。

先師の会に、かくのごとくのたぐい、あまたあり。
まのあたり、みしところなり。
余師のところに、なしといえども、大宋国の僧宗の行持なり。
われらに、この心、操なし。
かなしむべし。
仏法にあうとき、なお、しかあり。
仏法にあわざらんときの身心、はじても、あまりあり。
しずかに、おもうべし。
一生、いくばくにあらず。
仏祖の語句、たとえ三三両両なりとも、道得せんは仏祖を道得せるならん。
ゆえは、いかん？
仏祖は身心如一なるがゆえに、一句、両句、みな、仏祖のあたたかなる身心なり。
かの身心きたりて、わが身心を道得す。
正当道取時、これ、道得きたりて、わが身心を道取するなり。
此生、道取、累生身なるべし。
かるがゆえに、ほとけとなり、祖となるに、仏をこえ、祖をこゆるなり。
三三両両の行持の句、それ、かくのごとし。
いたずらなる声色の名利に馳騁することなかれ。
馳騁せざれば、仏祖、単伝の行持なるべし。
すすむらくは、大隠、小隠、一箇、半箇なりとも、万事、万縁をなげすてて、行持を仏祖に行持すべし。

正法眼蔵　行持
仁治三年壬寅、四月五日、書、于、観音導利興聖宝林寺。

# 海印三昧

諸仏、諸祖とあるに、かならず、海印三昧なり。
この三昧の遊泳に、説時あり、証時あり、行時あり。
海上行の功徳、その徹底行あり。
これを深深、海底行なりと海上行するなり。
流浪、生死を還源せしめんと願求する、是、什麼、心行にはあらず。
従来の透関破節、もとより、諸仏、諸祖の面面なりといえども、これ、海印三昧の朝宗なり。
仏、言、
但、以、衆法、合成、此身。
起時、唯、法、起。
滅時、唯、法、滅。
此法、起時、不言、我、起。
此法、滅時、不言、我、滅。
前念、後念、念念、不相待。
前法、後法、法法、不相対。
是即、名、為、海印三昧。

この仏、道を、くわしく参学、功夫すべし。
得道、入証は、かならずしも多聞によらず、多語によらざるなり。
多聞の広学は、さらに四句に得道し、恒沙の遍学、ついに一句偈に証入するなり。
いわんや、いまの道は、本覚を前途にもとむるにあらず、始覚を証中に拈来するにあらず。
おおよそ、本覚、等を現成せしむるは、仏祖の功徳なりといえども、始覚、本覚、等の諸覚を仏祖とせるにはあらざるなり。

いわゆる、海印三昧の時節は、すなわち、但、以、衆法の時節なり、但、以、衆法の道得なり。
このときを合成、此身という。
衆法を合成せる一合相、すなわち、此身なり。
此身を一合相とせるにあらず、衆法、合成なり。
合成、此身を此身と道得せるなり。
起時、唯、法、起。

この法、起、かつて起をのこすにあらず。
このゆえに、起は知覚にあらず、知見にあらず、これを不言、我、起という。
我、起を不言するに、別人は此法、起と見聞覚知し思量分別するにはあらず。
さらに向上の相見のとき、まさに、相見の落便宜あるなり。
起は、かならず時節、到来なり。
時は起なるがゆえに。
いかならんか、これ、起なる？
起、也なるべし。
すでに、これ、時なる起なり。
皮肉骨髄を独露せしめずということなし。
起、すなわち、合成の起なるがゆえに、起の此身なる、起の我、起なる、但、以、衆法なり。
声色と見聞するのみにあらず。
我、起なる衆法なり。
不言なる我、起なり。
不言は不道にはあらず。
道得は言得にあらざるがゆえに。
起時は、此法なり。十二時にあらず。
此法は、起時なり。三界の競起にあらず。
古仏、いわく、忽然、火、起。
この起の相待にあらざるを火、起と道取するなり。
古仏、いわく、起、滅、不停時、如何？
しかあれば、起滅は我我、起、我我、滅なるに不停なり。
この不停の道取、かれに一任して弁肯すべし。
この起、滅、不停時を仏祖の命脈として断続せしむ。
起、滅、不停時は是、誰、起、滅？　なり。
是、誰、起、滅？　は、応、以、此身、得度、者なり、即、現、此身なり、而、為、説法なり。
過去心、不可得なり。
汝、得、吾髄なり、汝、得、吾骨なり。
是、誰、起、滅なるゆえに。
此法、滅時、不言、我、滅。
まさしく、不言、我、滅のときは、これ、此法、滅時なり。
滅は、法の滅なり。
滅なりといえども法なるべし。

法なるゆえに、客塵にあらず。
客塵にあらざるゆえに、不染汚なり。
ただ、この不染汚、すなわち、諸仏、諸祖なり。
汝も、かくのごとし、という。
だれが、汝にあらざらん？
前念、後念あるは、みな、汝なるべし。
吾も、かくのごとし、という。
だれが、吾にあらざらん？
前念、後念は、みな、吾なるがゆえに。
この滅に多般の手眼を荘厳せり。
いわゆる、無上大涅槃なり。
いわゆる、謂、之、死なり。
いわゆる、執、為、断なり。
いわゆる、為、所住なり( or 為、無作なり)。
いわゆる、かくのごとくの許多、手眼、しかしながら滅の功徳なり。
滅の我なる時節に不言なると、起の我なる時節に不言なるとは、不言の同生ありとも、同死の不言にはあらざるべし。
すでに前法の滅なり、後法の滅なり。
法の前念なり、法の後念なり。
為、法の前後法なり、為、法の前後念なり。
不相待は、為、法なり。
不相対は、法、為なり。
不相対ならしめ、不相待ならしむるは、八、九成の道得なり。
滅の四大、五蘊を手眼とせる、拈あり、収あり。
滅の四大、五蘊を行程とせる、進歩あり、相見あり。
このとき、
通身、是、手眼、還、是、不足なり。
遍身、是、手眼、還、是、不足なり。
おおよそ、滅は、仏祖の功徳なり。
いま不相対と道取あり、不相待と道取あるは、しるべし、起は、初中後、起なり。
官、不容、針、私、通、車馬なり。
滅を初中後に相待するにあらず、相対するにあらず。
従来の滅所に忽然として起、法すとも、滅の起にはあらず、法の起なり。
法の起なるゆえに、不対待相なり。

また、滅と滅と、相待するにあらず、相対するにあらず。
滅も、初中後、滅なり。
相逢、不拈出、挙、意、便、知、有なり。
(起を初中後に相対するにあらず、相待するにあらず。)
従来の起所に忽然として滅すとも、起の滅にあらず、法の滅なり。
法の滅なるがゆえに、不相対待なり。
たとえ滅の是即にもあれ、たとえ起の是即にもあれ、但、以、海印三昧、名、為、衆法なり。
是即の修、証は、なきにあらず、只、此不染汚、名、為、海印三昧なり。
三昧は、現成なり、道得なり。
背、手、摸、枕子の夜間なり。
夜間の、かくのごとく背、手、摸、枕子なる。
摸、枕子は億億万劫のみにあらず。
我、於、海中、唯、常、宣説、妙法華経なり。
不言、我、起なるがゆえに、我、於、海中なり。
前面も、一波、纔、動、万波、随なる唯、常、宣説なり。
後面も、万波、纔、動、一波、随の妙法華経なり。
たとえ千尺、万尺の糸綸を巻舒せしむとも、うらむらくは、これ、直下、垂なることを。
いわゆる、前面、後面は、我、於、海面なり。
前頭、後頭と、いわんがごとし。
前頭、後頭というは、頭上、安、頭なり。
海中は、有人にあらず。
我、於、海は、世人の住所にあらず、聖人の愛所にあらず。
我、於、ひとり海中にあり。
これ、唯、常の宣説なり。
この海中は中間に属せず、内外に属せず、鎮、常在、説、法華経なり。
東西南北に不居なりといえども、満船、空、載、月明、帰なり。
この実帰は、便、帰来なり。
だれが、これを滞水の行履なりと、いわん？
ただ仏道の剤限に現成するのみなり。
これを印水の印とす。
さらに道取す、印空の印なり。
さらに道取す、印泥の印なり。
印水の印、かならずしも印海の印にはあらず。

向上さらに印海の印なるべし。
これを海印といい、水印といい、泥印といい、心印というなり。
心印を単伝して印水し、印泥し、印空するなり。

曹山、元証大師、因、僧、問、
承、教、有、言、
大海、不宿、死屍。
如何、是、海？

師、云、
包含、万有。

僧、曰、
為、什麼、不宿、死屍？

師、云、
絶気者、不著。

僧、曰、
是、包含、万有。
為、什麼、絶気者、不著？

師、云、
万有、非、其功、絶気。

この曹山は、雲居の兄弟なり。
洞山の宗旨、このところに正的なり。
いま、承、教、有、言というは、仏祖の正教なり。
凡、聖の教にあらず。
付仏法の小教にあらず。

大海、不宿、死屍。
いわゆる、大海は、内海、外海、等にあらず、八海、等にはあらざるべし。
これらは学人のうたがうところにあらず。
海にあらざるを海と認ずるのみにあらず、海なるを海と認ずるなり。
たとえ海と強為すとも、大海というべからざるなり。
大海は、かならずしも八功徳水の重淵にあらず。

大海は、かならずしも鹹水、等の九淵にあらず。
衆法は合成なるべし。
大海、かならずしも深水のみにてあらんや？
このゆえに、いかなるか、海？　と問著するは、大海の、いまだ人、天にしられざるゆえに、大海を道著するなり。
これを問著( or 聞著)せん人は、海執を動著せんとするなり。
不宿、死屍というは、不宿は、明頭、来、明頭、打、暗頭、来、暗頭、打なるべし。
死屍は、死灰なり、幾度、逢、春、不変、心なり。
死屍というは、すべて、人人、いまだ、みざるものなり。
このゆえに、しらざるなり。

師、いわくの包含、万有は、海を道著するなり。
宗旨の道得するところは、阿誰なる一物の万有を包含する、とはいわず、包含、万有なり。
大海の、万有を包含する、というにあらず。
包含、万有を道著するは、大海なるのみなり。
なにもの、としれるにあらざれども、しばらく、万有なり。
仏面祖面と相見することも、しばらく、万有を錯認するなり。
包含のときは、たとえ山なりとも、高高、峰頭、立のみにあらず。
たとえ水なりとも、深深、海底行のみにあらず。
収は、かくのごとくなるべし。
放は、かくのごとくなるべし。
仏性海といい、毘盧蔵海という、ただ、これ、万有なり。
海面、みえざれども、遊泳の行履に疑著することなし。
たとえば、多福、一叢竹を道取するに、一茎、両茎、曲なり、三茎、四茎、斜なるも、万有を錯失せしむる行履なりとも、なにとしてか、いまだ、いはざる、千、曲、万、曲なりと？
なにとしてか、いわざる、千、叢、万、叢なりと？
一叢の竹、かくのごとくある道理、わすれざるべし。
曹山の包含、万有の道著、すなわち、なお、これ、万有なり。
僧、曰、為、什麼、絶気者、不著？　は、あやまりて疑著の面目なりというとも、是、什麼、心行？　なるべし。
従来、疑著、這漢なるときは、従来、疑著、這漢に相見するのみなり。
什麼、所在に、
為、什麼、絶気者、不著？　なり。

為、什麼、不宿、死屍？　なり。
這頭に、すなわち、既是、包含、万有、為、什麼、絶気者、不著？　なり。
しるべし。
包含は、著にあらず。
包含は、不宿なり。
万有、たとえ死屍なりとも、不宿の直、須、万年なるべし。
不著の這老僧、一著子なるべし。
曹山の道すらく、万有、非、其功、絶気。
いわゆるは、万有は、たとえ絶気なりとも、たとえ不絶気なりとも、不著なるべし。
死屍、たとえ死屍なりとも、万有に同参する行履あらんがごときは、包含すべし、包含なるべし。
万有なる前程、後程、その功あり。
これ、絶気にあらず。
いわゆる、一盲、引、衆盲なり。
一盲、引、衆盲の道理は、さらに、一盲、引、一盲なり、衆盲、引、衆盲なり。
衆盲、引、衆盲なるとき、包含、万有、包含、于、包含、万有なり。
さらに、いく大道にも万有にあらざる、いまだ、その功夫、現成せず、海印三昧なり。

正法眼蔵　海印三昧
仁治三年壬寅、孟夏、二十日、記、于、観音導利興聖宝林寺。

# 授記

仏祖、単伝の大道は、授記なり。
仏祖の参学なきものは、夢也未見なり。
その授記の時節は、いまだ菩提心をおこさざるものにも授記す。
無仏性に授記す。有仏性に授記す。
有身に授記し、無身に授記す。
諸仏に授記す。
諸仏は、諸仏の授記を保任するなり。
得授記ののちに作仏すと参学すべからず。
作仏ののちに得授記すと参学すべからず。
授記時に作仏あり。
授記時に修行あり。
このゆえに、
諸仏に授記あり。
仏向上に授記あり。
自己に授記す。
身心に授記す。
授記に飽学措大なるとき、仏道に飽学措大なり。
身前に授記あり。
身後に授記あり。
自己にしらるる授記あり。
自己にしられざる授記あり。
他をして、しらしむる授記あり。
他をして、しらしめざる授記あり。
まさに、しるべし。
授記は、自己を現成せり。
授記、これ、現成の自己なり。
このゆえに、仏仏、祖祖、嫡嫡、相承せるは、これ、ただ授記のみなり。
さらに、一法としても授記にあらざるなし。
いかに、いわんや、山河大地、須弥巨海あらんや？
さらに一箇、半箇の張三李四なきなり。
かくのごとく参究する授記は、
道得、一句なり。

聞得、一句なり。
不会、一句なり。
会取、一句なり。
行取(、一句)なり。
説取(、一句)なり。
退歩を教令せしめ、進歩を教令せしむ。
いま、得坐、披衣、これ、古来の得、授記にあらざれば、現成せざるなり。
合掌、頂戴なるがゆえに、現成は、授記なり。
仏、言、
それ、授記に多般あれども、しばらく、要略するに、八種あり。
いわゆる、
一、者、自己、知。他、不知。
二、者、衆人、尽、知。自己、不知。
三、者、自己、衆人、倶、知。
四、者、自己、衆人、倶、不知。
五、者、近、覚。遠、不覚。
六、者、遠、覚。近、不覚。
七、者、倶、覚。
八、者、倶、不覚。

(
余経、又、云、
近、知、者。
遠、知、者。
遠、近、倶、知、者。
近、遠、倶、不知、者。
)

かくのごとくの授記あり。
しかあれば、いま、この臭皮袋の精魂に識度せられざるには授記あるべからず、と活計することなかれ。
未悟の人面に、たやすく授記すべからず、ということなかれ。
よのつねに、おもうには、修行功満して作仏、決定するとき授記すべし、と学しきたるといえども、仏道は、しかにはあらず。
或、従、知識して一句をきき、或、従、経巻して一句をきくことあるは、すなわち、得、授記なり。

これ、諸仏の本行なるがゆえに、百草の善根なるがゆえに。
もし授記を道取するには、得記人、みな、究竟人なるべし。
しるべし。
一塵、なお、無上なり。
一塵、なお、向上なり。
授記、なんぞ一塵ならざらん？
授記、なんぞ一法ならざらん？
授記、なんぞ万法ならざらん？
授記、なんぞ修、証ならざらん？
授記、なんぞ仏祖ならざらん？
授記、なんぞ功夫、弁道ならざらん？
授記、なんぞ大悟、大迷ならざらん？
授記は、これ、吾宗、到、汝、大興、于、世なり。
授記は、これ、汝、亦、如是。吾、亦、如是。なり。
授記、これ、標榜なり。
授記、これ、何必なり。
授記、これ、破顔微笑なり。
授記、これ、生死、去来なり。
授記、これ、尽十方界なり。
授記、これ、遍界、不曾、蔵なり。

玄沙院、宗一大師、侍、雪峰、行、次、雪峰、指、面前地、云、
這一片田地、好、造、箇、無縫塔。
玄沙、曰、
高、多少？
雪峰、乃、上下、顧視。
玄沙、曰、
人、天、福報、即、不無。
和尚、
霊山、授記、未夢見在。

雪峰、云、
爾、作麼生？
玄沙、曰、
七尺、八尺。

いま、玄沙のいう和尚、霊山、授記、未夢見在は、雪峰に霊山の授記なしというにあらず、雪峰に霊山の授記ありというにあらず、和尚、霊山、授記、未夢見在というなり。
霊山の授記は、高著眼なり。
吾、有、正法眼蔵、涅槃妙心、付属、摩訶迦葉なり。
しるべし。
青原の、石頭に授記せしときの同参は、摩訶迦葉も青原の授記をうく、青原も釈迦の授記をさずくるがゆえに、仏仏、祖祖の面面に正法眼蔵、付属、有在なること、あきらかなり。
ここをもって、曹谿、すでに青原に授記す、青原、すでに六祖の授記をうくるとき、授記に保任せる青原なり。
このとき、六祖、諸祖の参学、正直に、青原の授記によりて行取しきたれるなり。
これを明明、百草頭、明明、仏祖意という。
しかあれば、すなわち、仏祖、いずれが百草にあらざらん？
百草、なんぞ吾、汝にあらざらん？
至愚にして、おもうことなかれ、みずからに具足する法は、みずから、かならず、しるべし、と。みるべし、と。
恁麼にあらざるなり。
自己の知する法、かならずしも自己の有にあらず。
自己の有、かならずしも自己の、みるところならず。自己の、しるところならず。
しかあれば、いまの知見思量分( or 知見思量分了 or 知見思量分別)に、あたわざれば、自己にあるべからず、と疑著することなかれ。
いわんや、霊山の授記というは、釈迦牟尼仏の授記なり。
この授記は、釈迦牟尼仏の釈迦牟尼仏に授記しきたれるなり。
授記の未合なるには、授記せざる道理なるべし。
その宗旨は、すでに授記あるに授記するに罣礙なし。
授記なきに授記するに剰法せざる道理なり。
虧闕なく、剰法にあらざる、これ、諸仏祖の、諸仏祖に授記しきたれる道理なり。
このゆえに、古仏、いわく、
古今、挙、払、示、東西。
大意、幽微、肯、易、参？
此理、若、無、師、教授、欲、将、何見、語、玄談？

いま、玄沙の宗旨を参究するに、無縫塔の高、多少？　を量するに、高、多少？　の道得あるべし。
さらに、五百由旬にあらず、八万由旬にあらず。
これによりて、上下を顧視するをきらうにあらず。
ただ、これ、人、天の福報は即、不無なりとも、無縫塔、高を顧視するは、釈迦牟尼仏の授記には、あらざるのみなり。
釈迦牟尼仏の授記をうるは、七尺、八尺の道得あるなり。
真箇の釈迦牟尼仏の授記を点検することは、七尺、八尺の道得をもって換点(or 点換)すべきなり。
しかあれば、すなわち、七尺、八尺の道得を是、不是せんことは、しばらく、おく。
授記は、さだめて雪峰の授記あるべし、玄沙の授記あるべきなり。
いわんや、授記を挙して無縫塔、高の多少を道得すべきなり。
授記にあらざらんを挙して仏法を道得するは、道得には、あらざるべきなり。
自己の、真箇に自己なるを会取し聞取し道取すれば、さだめて授記の、現成する公案あるなり。
授記の当陽に、授記と同参する功夫きたるなり。
授記を究竟せんために、如許多の仏祖は現成、正覚しきたれり。
授記の功夫するちから、諸仏を推出するなり。
このゆえに、唯、以、一大事、因縁、故、出現というなり。
その宗旨は、向上には、非自己、かならず非自己の授記をうるなり。
このゆえに、諸仏は、諸仏の授記をうるなり。
おおよそ、授記は、一手を挙して授記し、両手を挙して授記し、千手眼を挙して授記し、授記せらる。
あるいは、優曇華を挙して授記す。
あるいは、金襴衣を拈じて授記する。
ともに、これ、強為にあらず、授記の云為なり。
内より、うる、授記あるべし。
外より、うる、授記あるべし。
内外を参究せん道理は、授記に参学すべし。
授記の学道は、万里、一条、鉄なり。
授記の兀坐は、一念、万年なり。

古仏、いわく、
相継、得、成仏。
転次、而、授記。

いわくの成仏は、かならず相継するなり。
相継する少許を成仏するなり。
これを授記の転次するなり。
転次は、転得転なり。
転次は、次得次なり。
たとえば、造次なり。
造次は、施為なり。
その施為は、局量の造身にあらず、局量の造境にあらず、度量の造作にあらず、造心にあらざるなり。
まさに、
造境、不造境、ともに、転次の道理に一任して究弁すべし。
造作、不造作、ともに、転次の道理に一任して究弁すべし。
いま、諸仏、諸祖の現成するは、施為に転次せらるるなり。
五仏六祖の西来する施為に転次せらるるなり。
いわんや、運水、般柴は、転次しきたるなり。
即心是仏の現生する転次なり。
即心是仏の滅度する、一滅度、二滅度をめずらしくするにあらず。
如許多の滅度を滅度すべし。
如許多の成道を成道すべし。
如許多の相好を相好すべし。
これ、すなわち、
相継、得、成仏なり。
相継、得、滅度、等なり。
相継、得、授記なり。
相継、得、転次なり。
転次は、本来にあらず、ただ七通八達なり。
いま、仏面祖面の面面に相見し、面面に相逢するは、相継なり。
仏授記祖授記の転次する、回避のところ、間隙あらず。
古仏、いわく、
我、今、従、仏、聞、授記荘厳事、及、転次受決、身心遍歓喜。

いうところは、授記荘厳事、かならず、我、今、従、仏、聞なり。
我、今、従、仏、聞の及、転次受決するというは、身心遍歓喜なり。
及、転次は、我、今なるべし。
過、現、当の自他にかかわるべからず。

従、仏、聞なるべし。
従、他、聞にあらず。
迷、悟にあらず。
衆生にあらず。
草木、国土にあらず。
従、仏、聞なる授記荘厳事なり、及、転次受決なり。
転次の道理、しばらくも一隅にとどまりぬることなし。
身心遍歓喜しもってゆくなり。
歓喜なる及、転次受決、かならず、身と同参して遍参し、心と同参して遍参す。
さらに、また、身は、かならず、心に遍ず、心は、かならず、身に遍ずるゆえに、身心遍という。
すなわち、これ、遍界、遍方、遍身、遍心なり。
これ、すなわち、特地一条の歓喜なり。
その歓喜、あらわに寐寤を歓喜せしめ、迷、悟を歓喜せしむるに、おのおのと親切なりといえども、おのおのと不染汚なり。
かるがゆえに、転次、而、受決なる授記荘厳事なり。

釈迦牟尼仏、因、薬王菩薩、告、八万大士、
薬王、
汝、見、是大衆中、無量諸天、龍王、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、与、非人、及、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、求声聞者、求辟支仏者、求仏道者、
如是等類、咸、於、仏前、聞、妙法華経、一偈、一句、乃至、一念随喜者、我、皆、与、授記。
当、得、阿耨多羅三藐三菩提。

しかあれば、すなわち、いまの無量なる衆会、あるいは、天王、龍王、四部、八部、所求、所解、ことなりといえども、だれが妙法にあらざらん一句、一偈をきかしめん？
いかならん、なんじが乃至、一念も他法を随喜せしめん？
如是等類というは、これ、法華類なり。
咸、於、仏前というは、咸、於、仏中なり。
人、与、非人の万像に錯認するありとも、百草に下種せるありとも、如是等類なるべし。
如是等類は、我、皆、与、授記なり。

我、皆、与、授記の頭正尾正なる、すなわち、当、得、阿耨多羅三藐三菩提なり。

釈迦牟尼仏、告、薬王、
又、如来、滅度之後、若、有、人、聞、妙法華経、乃至、一偈、一句、一念随喜者、我、亦、与、授阿耨多羅三藐三菩提記。

いま、いう、如来、滅度之後は、いずれの時節、到来なるべきぞ？
四十九年なるか？
八十年中なるか？
しばらく、八十年中なるべし。
若、有、人、聞、妙法華経、乃至、一偈、一句、一念随喜というは、
有智の所聞なるか？
無智の所聞なるか？
あやまりて、きくか？
あやまらずして、きくか？
為、他、道せば、若、有、人、所聞なるべし。
さらに、有智、無智、等の諸類なりとすることなかれ。
いうべし。
聞、法華は、たとえ甚深無量なる、いく諸仏智慧なりとも、きくには、かならず、一句なり、きくには、かならず、一偈なり、きくには、かならず、一念随喜なり。
このとき、我、亦、与、授阿耨多羅三藐三菩提記なるべし。
亦、与、授記あり。
皆、与、授記あり。
蹉過の張三に一任せしむることなかれ。
審細の功夫に同参すべし。
句、偈、随喜を若、有、人、聞なるべし。
皮肉骨髄を頭上、安、頭するに、いとまあらず。
見、授阿耨多羅三藐三菩提記は、我願、既、満なり、如許(多)皮袋なるべし、衆、望、亦、足なり、如許(多)、若、有、人、聞ならん。
拈、松枝の授記あり。
拈、優曇華の授記あり。
拈、瞬目の授記あり。
拈、破顔の授記あり。
[illegible]鞋を転、授せし蹤跡あり。

そこばくの是法、非、思量分別之所能解なるべし。
我身、是、也の授記あり。
汝身、是、也の授記あり。
この道理、よく、過去、現在、未来を授記するなり。
授記中の過去、現在、未来なるがゆえに。
自授記に現成し、他授記に現成するなり。

維摩詰、謂、弥勒、言、
弥勒、
世尊、授、仁者、記。
一生、当、得、阿耨多羅三藐三菩提。
為、用、何生、得、受記、乎？
過去、耶？
未来、耶？
現在、耶？
若、過去生、過去生、已滅。
若、未来生、未来生、未至。
若、現在生、現在生、無住。
如、仏所説、比丘、汝、今、即、時、亦、生、亦、老、亦、滅。
若、以、無生、得、受記、者、無生、即是、正位。
於、正位中、亦、無、受記、亦、無、得、阿耨多羅三藐三菩提。
云何、弥勒、授一生記、乎？
為、従、如、生、得、受記、耶？
為、従、如、滅、得、受記、耶？
若、以、如、生、得、受記、者、如、無有、生。
若、以、如、滅、得、受記、者、如、無有、滅。
一切衆生、皆、如、也。
一切法、亦、如、也。
衆聖、賢、亦、如、也。
至、於、弥勒、亦、如、也。
若、弥勒、得、受記、者、一切衆生、亦、応、受記。
所以、者、何？
夫、如、者、不二、不異。
若、弥勒、得阿耨多羅三藐三菩提、者、一切衆生、皆、亦、応、得。
所以、者、何？
一切衆生、即、菩提相。

維摩詰の道取するところ、如来、これを不是といわず。
しかあるに、弥勒の得、受記、すでに決定せり。
かるがゆえに、一切衆生の得、受記、おなじく、決定すべし。
衆生の受決あらずば、弥勒の受記あるべからず。
すでに一切衆生、即、菩提相なり。
菩提の、菩提の授記をうるなり。
授記は、今日の命なり。
しかあれば、一切衆生は弥勒と同、発心するゆえに、同、受記なり、同、成道なるべし。
ただし、維摩、道の於、正位中、亦、無、受記は、正位、即、授記をしらざるがごとし、正位、即、菩提といわざるがごとし。
また、過去生、已、滅。未来生、未至。現在生、無住とらいう。
過去、かならずしも已、滅にあらず。
未来、かならずしも未至にあらず。
現在、かならずしも無住にあらず。
無住、未至、已、滅、等を過、未、現と学すというとも、未至の、すなわち、過、現、未なる道理、かならず、道取すべし。
しかあれば、生、滅、ともに、得、記する道理あるべし。
生、滅、ともに、得、菩提の道理あるなり。
一切衆生の、授記をうるとき、弥勒も授記をうるなり。
しばらく、なんじ、維摩にとう、
弥勒は、衆生と、同なりや？　異なりや？
試、道、看。
すでに若、弥勒、得、記せば、一切衆生も得、記せんという。
弥勒は、衆生にあらずといわば、衆生は、衆生にあらず、弥勒も弥勒にあらざるべし。
いかん？
正当恁麼時、また、維摩にあらざるべし。
維摩にあらずば、この道得、用不著ならん。

しかあれば、いうべし。
授記の、一切衆生をあらしむるとき、一切衆生、および、弥勒は、あるなり。
授記、よく、一切をあらしむべし。

正法眼蔵　授記

仁治三年壬寅、夏、四月二十五日、記、于、観音導利興聖宝林寺。
寛元二年甲辰、正月二十日、書写、于、越州、吉峰寺、侍者寮。

# 観音

雲巌、無住大師、問、道吾山、修一大師、
大悲菩薩、用、許多手眼、作麼？
道吾、云、
如、人、夜間、背、手、摸、枕子。
雲巌、曰、
我、会、也。我、会、也。
道吾、云、
汝、作麼生、会？
雲巌、曰、
遍身、是、手眼。
道吾、云、
道、也、太殺道。祇、道得、八、九成。
雲巌、曰、
某甲、祇、如此。師兄、作麼生？
道吾、云
通身、是、手眼。

道得、観音は、前後の聞声、ままに、おおしといえども、雲巌、道吾にしかず。
観音を参学せんとおもわば、雲巌、道吾の、いまの道也( or 道取)を参究すべし。
いま、道取する、大悲菩薩というは、観世音菩薩なり、観自在菩薩ともいう。
諸仏の父母とも参学す。
諸仏よりも未得道なりと学することなかれ。
過去、正法明如来なり。
しかあるに、雲巌、道の大悲菩薩、用、許多手眼、作麼？　の道を挙拈して参究すべきなり。
観音を保任せしむる家門あり。
観音を未夢見なる家門あり。
雲巌に観音あり、道吾と同参せり。
ただ一、両の観音のみにあらず。
百、千の観音、おなじく雲巌に同参す。
観音を真箇に観音ならしむるは、ただ雲巌会のみなり。

所以は、いかん？
雲巌、道の観音と、余仏、道の観音と、道得、道不得なり。
余仏、道の観音は、ただ十二面なり。雲巌、しかあらず。
余仏、道の観音は、わずかに千手眼なり。雲巌、しかあらず。
余仏、道の観音は、しばらく、八万四千手眼なり。雲巌、しかあらず。
なにをもってか、しかありとしる。
いわゆる、雲巌、道の大悲菩薩、用、許多手眼？　は、許多の道、ただ八万四千手眼のみにあらず。
いわんや、十二、および、三十二、三の数般のみならんや？
許多は、いくそばく、というなり。
如、許多の道なり。
種般、かぎらず。
種般、すでに、かぎらずば、無辺際量にも、かぎるべからざるなり。
用、許多のかず、その宗旨、かくのごとく参学すべし。
すでに無量、無辺の辺量を超越せるなり。
いま、雲巌、道の許多手眼の道を拈来するに、道吾、さらに道不著といわず、宗旨あるべし。
雲巌、道吾は、かつて薬山に同参の斉肩より、すでに四十年の同行として、古今の因縁を商量するに、不是所は剗却し、是所は証明す。
恁麼しきたれるに、今日は許多手眼と道取するに、雲巌、道取し、道吾、証明する。
しるべし。
両位の古仏、おなじく道取せる許多手眼なり。
許多手眼は、あきらかに雲巌、道吾、同参なり。
いまは、用、作麼？　を道吾に問取するなり。
この問取を経師、論師、ならびに、十聖三賢、等の問取に、ひとしめざるべし。
この問取は、道取を挙来せり、手眼を挙来せり。
いま、用、許多手眼、作麼？　と道取するに、この功業をちからとして成仏する古仏、新仏あるべし。
使、許多手眼、作麼？　とも道取しつべし。
作、什麼？　とも道取し、
動、什麼？　とも道取し、
道、什麼？　とも道取ありぬべし。

道吾、いわく、如、人、夜間、背、手、摸、枕子。

いわゆる宗旨は、たとえば、人の、夜間に手をうしろにして枕子を模索するがごとし。
模索するというは、さぐり、もとむるなり。
夜間は、くらき道得なり。
なお、日裏、看、山と道取せんがごとし。
用、手眼は、如、人、夜間、背、手、摸、枕子なり。
これをもって用、手眼を学すべし。
夜間を日裏より、おもいやると、夜間にして夜間なるときと換点すべし。
すべて昼夜にあらざらんときと換点すべきなり。
人の、摸、枕子せん、たとえ、この儀、すなわち、観音の、用、手眼のごとくなる、会取せざるとも、かれがごとくなる道理、のがれ、のがるべきにあらず。
いま、いう、如、人の人は、ひとえに譬喩の言なるべきか？
また、この人は、平常の人にして、平常の人なるべからざるか？
もし仏道の平常人なりと学して譬喩のみにあらずば、摸、枕子に学すべきところあり。
枕子も、咨問すべき何形段あり。
夜間も、人、天、昼夜の夜間のみなるべからず。
しるべし。
いま、道取するは、
取得、枕子にあらず。
牽挽、枕子にあらず。
推出、枕子にあらず。
夜間、背、手、摸、枕子と道取する道吾の道底を換点せんとするに、眼の夜間をうる。みるべし。すごさざれ。
手の、まくらをさぐる、いまだ剤限を著手( or 著取)せず。
背、手の機要なるべくは、背、眼すべき機要のあるか？
夜間をあきらむべし。
手眼、世界なるべきか？
人、手眼の、あるか？
ひとり手眼のみ飛、霹靂するか？
頭正尾正なる手眼の一条、両条なるか？
もし、かくのごとくの道理を換点すれば、用、許多手眼は、たとえありとも、だれが、これ、大悲菩薩、ただ手眼菩薩のみきこゆるがごとし？
恁麼いわば、手眼菩薩、用、許多大悲菩薩、作麼？　と問取しつべし。

しるべし。
手眼は、たとえ、あい罣礙せずとも、用、作麼？　は恁麼用なり、用恁麼なり。
恁麼道得するがごときは、遍手眼は不曾蔵なりとも、遍手眼と道得する期をまつべからず。
不曾蔵の那手眼ありとも、這手眼ありとも、自己にはあらず、山海にはあらず、日面、月面にあらず、即心是仏にあらざるなり。
雲巌、道の我、会、也。我、会、也。は、道吾の道を我、会するというにあらず。
用恁麼の手眼を道取に道得ならしむるには、我、会、也。我、会、也。なり。
無端、用、這裏なるべし。
無端、須、入、今日なるべし。
道吾、道の汝、作麼生、会？　は、いわゆる我、会、也。たとえ我、会、也。なるを罣礙するにあらざれども、道吾に汝、作麼生、会？　の道取あり。
すでに、これ、我、会。汝、会。なり。
眼、会。手、会。なからんや？
現成の会なるか？
未現成の会なるか？
我、会、也。の会を我なりとすとも、汝、作麼生、会？　に汝あることを功夫ならしむべし。
雲巌、道の遍身、是、手眼の出現せるは、夜間、背、手、摸、枕子を講誦するに、遍身、これ、手眼なりと道取せると参学する観音のみ、おおし。
この観音、たとえ観音なりとも、未道得なる観音なり。
雲巌、道の遍身、是、手眼というは、手眼、是、身、遍というにあらず。
遍は、たとえ遍界なりとも、身、手眼の正当恁麼は、遍の所遍なるべからず。
身、手眼に、たとえ遍の功徳ありとも、攙奪、行市の手眼にあらざるべし。
手眼の功徳は、是と認ずる見取、行取、説取あらざるべし。
手眼、すでに許多という。
千にあまり、万にあまり、八万四千にあまり、無量、無辺にあまる。
ただ遍身、是、手眼の、かくのごとくあるのみにあらず、度生説法も、かくのごとくなるべし。
国土、放光も、かくのごとくなるべし。
かるがゆえに、雲巌、道は遍身、是、手眼なるべし、手眼を遍身ならしむるにはあらずと参学すべし。

遍身、是、手眼を使用すというとも、動容進止せしむというとも、動著することなかれ。

道吾、道取す、道、也、太殺道。祗、道得、八、九成。
いはくの宗旨は、道得は太殺道なり。
太殺道というは、いいあて、いいあらわす、のこれる未道得なし、というなり。
いま、すでに未道得の、ついに道不得なるべき、のこりあらざるを道取するときは、祗、道得、八、九成なり。
いう意旨の参学は、たとえ十成なりとも、道未尽なる力量にてあらば、参究にあらず。
道得は、八、九成なりとも、道取すべきを八、九成に道取すると、十成に道取するとなるべし。
当恁麼の時節に、百、千、万の道得に道取すべきを力量の妙なるがゆえに、些子の力量を挙して、わずかに八、九成に道得するなり。
たとえば、尽十方界を百、千、万力に拈来する、あらんも、拈来せざるには、すぐるべし。
しかあるを、一力に拈来せんは、よのつねの力量なるべからず。
いま、八、九成のこころ、かくのごとし。
しかあるを、仏祖の祗、道得、八、九成の道をききては、道得、十成なるべきに、道得いたらずして、八、九成という、と会取す。
仏法もし、かくのごとくならば、今日にいたるべからず。
いわゆるの八、九成は、百、千といわんがごとし。
許多といわんがごとく参学すべきなり。
すでに八、九成と道取す。
はかりしりぬ。
八、九にかぎるべからずというなり。
仏祖の道話、かくのごとく参学するなり。

雲巌、道の某甲、祗、如是。師兄、作麼生？　は、道吾のいう道得、八、九成の道を道取せしむるがゆえに、祗、如是と道取するなり。
これ、不留、朕、跡なりといえども、すなわち、臂、長、衫袖、短なり。
わが適来の道を道未尽ながら、さしおくを某甲、祗、如是というにはあらず。

道吾、いわく、通身、是、手眼。
いわゆる道は、手眼、たがいに手眼として通身なりというにあらず。

手眼の通身を通身、是、手眼というなり。
しかあれば、身は、これ、手眼なりというにはあらず。
用、許多手眼は、用、手、用、眼の許多なるには、手眼、かならず、通身、是、手眼なるなり。
用、許多身心、作麼？　と問取せんには、通身、是、作麼？　なる道得もあるべし。
いわんや、雲巌の遍と道吾の通と、道得尽、道未尽にはあらざるなり。
雲巌の遍と道吾の通と、比量の論にあらずといえども、おのおの許多手眼は恁麼の道取あるべし。
しかあれば、釈迦老師の道取する観音は、わずかに千手眼なり、十二面なり、三十三身、八万四千なり。
雲巌、道吾の観音は許多手眼なり。
しかあれども、多少の道にはあらず。
雲巌、道吾の許多手眼の観音を参学するとき、一切諸仏は観音の三昧を成、八、九成するなり。

正法眼蔵　観音
爾時、仁治三年壬寅、四月二十六日、示衆。

いま、仏法西来より、このかた、仏祖、おおく観音を道取するといえども、雲巌、道吾におよばざるゆえに、ひとり、この観音を道取す。
永嘉、真覚大師に、不見、一法、名、如来。方、得、名、為、観自在。の道あり。
如来と観音と、即、現、此身なりといえども、他身にはあらざる証明なり。
麻谷、臨済に正手眼の相見あり。
許多の一一( or 一、二)なり。
雲門に見色明心、聞声悟道の観音あり。
いずれの声色か、見聞の観世音菩薩にあらざらん？
百丈に入理の門あり。
楞厳会に円通観音あり。
法華会に普門示現、観音あり。
みな、与、仏、同参なり、与、山河大地、同参なりといえども、なお、これ、許多手眼の一、二なるべし。

# 阿羅漢

諸漏、已、尽。
無、復、煩悩。
逮得、己利。
尽、諸有結。
心、得、自在。

これ、大阿羅漢なり。
学仏者の極果なり。
第四果となづく。
仏阿羅漢あり。
諸漏は、没柄破木杓なり。
用来すでに多時なりというとも、已、尽は木杓の渾身跳出なり。
逮得、己利は、頂□に出入するなり。(「□」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
尽、諸有結は、尽十方界、不曾蔵なり。
心、得、自在の形段、これを高所、自、高平。低所、自、低平と参究す。
このゆえに、牆壁、瓦礫あり。
自在というは、心、也、全機、現なり。
無、復、煩悩は未生、煩悩なり、煩悩、被、煩悩、礙をいう。
阿羅漢の神通、智慧、禅定、説法、化導、放光、等、さらに外道、天魔、等の論に、ひとしかるべからず。
見、百仏世界、等の論、かならず、凡夫の見解に準ずべからず。
将、謂、胡鬚、赤。更、有、赤鬚胡。の道理なり。
入涅槃は、阿羅漢の入拳頭裏の行業なり。
このゆえに、涅槃妙心なり、無、回避所なり。
入鼻孔の阿羅漢を真阿羅漢とす。
いまだ鼻孔に出入せざるは、阿羅漢にあらず。

古、云、
我等、今日、真阿羅漢。
以、仏道声、令、一切、聞。

いま、令、一切、聞という宗旨は、令、一切諸法、仏声なり。

あに、ただ諸仏、及、弟子のみを挙拈せんや？
有識、有知、有皮有肉、有骨有髄のやから、みな、きかしむるを令、一切という。
有識、有知というは、国土、草木、牆壁、瓦礫なり。
揺落盛衰、生死去来、みな、聞著なり。
以、仏道声、令、一切、聞の由来は、渾界を耳根と参学するのみにあらず。

釈迦牟尼仏、言、
若、我弟子、自、謂、阿羅漢、辟支仏、者、不聞、不知、諸仏、如来、但、教化、菩薩、事、此、非、仏弟子、非、阿羅漢、非、辟支仏。

仏、言の但、教化、菩薩、事は、
我、及、十方仏、乃、能、知、是事なり。
唯、仏、与、仏、乃、能、究尽、諸法実相なり。
阿耨多羅三藐三菩提なり。
しかあれば、菩薩、諸仏の自、謂も、自、謂、阿羅漢、辟支仏、者に一斉なるべし。
そのゆえは、いかん？
自、謂、すなわち、聞、知、諸仏、如来、但、教化、菩薩、事なり。

古、云、
声聞経中、称、阿羅漢、名、為、仏地。

いまの道著、これ、仏道の証明なり。
論師、胸臆の説のみにあらず、仏道の通軌あり。
阿羅漢を称して仏地とする道理をも参学すべし。
仏地を称して阿羅漢とする道理をも参学すべきなり。
阿羅漢果のほかに、一塵、一法の剰法あらず。
いわんや、三藐三菩提あらんや？
阿耨多羅三藐三菩提のほかに、さらに一塵、一法の剰法あらず。
いわんや、四向四果あらんや？
阿羅漢の担来する諸法の正当恁麼時、この諸法、まことに、八両にあらず、半斤にあらず。
不是心、不是仏、不是物なり。
仏眼、也、覰不見なり。
八万劫の前後を論ずべからず。

抉出、眼睛の力量を参学すべし。
剩法は渾法剰なり。

釈迦牟尼仏、言、
是諸比丘、比丘尼、
自、謂、已得阿羅漢、是、最後身、究竟、涅槃、
便、不、復、志求、阿耨多羅三藐三菩提、
当、知、此輩、皆、是、増上慢人。
所以、者、何？
若、有、比丘、実、得、阿羅漢、若、不信、此法、無有、是所。

いわゆる、阿耨多羅三藐三菩提を能、信するを阿羅漢と証す。
必、信、此法は、
付属、此法なり。
単伝、此法なり。
修、証、此法なり。
実、得、阿羅漢は、是、最後身、究竟、涅槃にあらず。
阿耨多羅三藐三菩提を志求するがゆえに。
志求、阿耨多羅三藐三菩提は、
弄、眼睛なり。
壁面、打坐なり。
面壁、開眼なり。
遍界なりといえども、神出鬼没なり。
亙時なりといえども、互換、投機なり。
かくのごとくなるを志求、阿耨多羅三藐三菩提という。
このゆえに、志求、阿羅漢なり。
志求、阿羅漢は、粥足飯足なり。

夾山、圜悟禅師、曰、
古人、
得旨之後、向、深山、茆茨、石室、
折脚、鐺子( or 鍋子)、煮、飯、喫、
十年、二十年、大、忘、人世、永、謝、塵寰。
今時、
不敢、望、如此。
但只、韜、名、晦、跡、

守、本分、
作、箇、骨律錐、老衲。
以、自、契、所証。
随、己力量、受用。
消、遣、旧業。
融通、宿習。
或、有、余力、推、以、及、人、結、般若縁、練磨、自己脚跟、純熟。
譬( or 正)、如、荒草裏、撥剔、一箇、半箇。
同、知、有。
共、脱、生死。
転、益、未来。
以、報、仏祖、深恩。
抑不得已、霜露、果、熟、推、将、出世、応、縁、順適、開、托、人、天。
終、不、操、心、於、有、求。
何、況、
依倚、貴勢？
作、流、俗阿師？
挙止、欺、凡、罔、聖？
苟利図名？
作、無間業？
縦、無、機縁、
只、恁(麼)、度、世、
亦、無、業果、
真、出塵、羅漢、耶( or 也)。

しかあれば、すなわち、而今の本色の衲僧、これ、真、出塵、阿羅漢なり。
阿羅漢の性、相をしらんことは、かくのごとく、しるべし。
西天の論師、等のことばを妄計することなかれ。
東地の圜悟禅師は、正伝の嫡嗣ある仏祖なり。

洪州、百丈山、大智禅師、云、
眼耳鼻舌身意、各各、不貪染、一切、有無、諸法、
是、名、受持四句偈、
亦、名、四果。

而今の自他にかかわれざる眼耳鼻舌身意、その頭正尾正、はかり、きわむべからず。
このゆえに、渾身、おのれずから、不貪染なり。
渾、一切、有無、諸法に不貪染なり。
受持四句偈、おのれずからの渾渾を不貪染という。
これをまた、四果となづく。
四果は、阿羅漢なり。
しかあれば、而今、現成の眼耳鼻舌身意、すなわち、阿羅漢なり。
搆本宗末、おのずから透脱なるべし。
始、到、牢関なるは受持四句偈なり。
すなわち、四果なり。
透頂、透底、全体、現成。
さらに、糸毫の遺漏あらざるなり。
畢竟じて道取せん。
作麼生、道？
いわゆる、
羅漢、在、凡、諸法、教、他、罣礙。
羅漢、在、聖、諸法、教、他、解脱。
須、知、羅漢、与、諸法、同参、也。
既、証、阿羅漢、被、阿羅漢、礙、也。
所以、空王已前、老拳頭、也。

正法眼蔵　阿羅漢
爾時、仁治三年壬寅、夏、五月十五日、住、于、雍州、宇治郡、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 栢樹子

趙州真際大師は、釈迦如来より第三十七世なり。
六十一歳にして、はじめて発心し、いえをいでて学道す。
このとき、ちかいて、いわく、
たとえ百歳なりとも、われよりも、おとれらんは、われ、かれをおしうべし。
たとえ七歳なりとも、われよりも、すぐれば、われ、かれに、とうべし。
恁麼ちかいて南方に雲遊す。
道をとぶらいゆく、ちなみに、南泉にいたりて、願和尚を礼拝す。
ちなみに、南泉もとより方丈内にありて臥せるついでに、師、来参するに、
すなわち、とう、
近、離、什麼、所？
師、いわく、
瑞像院。
南泉、いわく、
還、見、瑞像、麼？
師、いわく、
瑞像、即、不見。
即、見、臥如来。
ときに、南泉、いま、しい、起して、とう、
爾は、これ、有主沙弥なりや？　無主沙弥なりや？
師、対して、いわく、
有主沙弥。
南泉、いわく、
那箇、是、爾、主？
師、いわく、
孟春、猶、寒。
伏、惟、和尚、尊体、起居、万福。
南泉、すなわち、維那をよんで、いわく、
此沙弥、別所、安排。

かくのごとくして南泉に寓直( or 寓止)し、さらに余方にゆかず。
弁道、功夫すること、三十年なり。
寸陰をむなしくせず、雑用あることなし。
ついに、伝道受業よりのち、趙州の観音院に住すること、また、三十年なり。

その住持の事形、つねの諸方に、ひとしからず。
あるとき、いわく、
煙火、徒労、望、四隣、
饅頭、餡子、前年、別。
今日、思量、空、嚥、津。
持念、少。嗟歎、頻。
一百家中、無、善人。
来者、祗、道、覓、茶、喫。
不得、茶、噇、去、又、嗔。

あわれむべし。
煙火、まれなり。
一味、すくなし。
雑味は前年より、あわず。
一百家人きたんは茶をもとむ。
茶をもとめざるは、きたらず。
将来、茶、人は一百家人にあらざらん。
これ、見、賢の雲水ありとも、思斉の龍象なからん。

あるとき、また、いわく、
思量、天下、出家人、似、我、住持、能、有、幾？
土榻牀、破蘆籧。
老楡木枕、全無、被。
尊像、不、焼、安息香。
灰裏、唯、聞、牛糞気。

これらの道得をもって院門の潔白しりぬべし。
いま、この蹤跡を学習すべし。
僧衆、おおからず。
不満二十衆というは、よくすることの、かたきによりてなり。
僧堂、おおきならず。前架、後架なし。
夜間は、灯光あらず。
冬天には炭火なし。
あわれむべき老後の生涯といいぬべし。
古仏の操行、それ、かくのごとし。

あるとき、連牀のあしの、おれたりけるに、燼木をなわに、ゆいつけて、年月をふるに、知事、つくりかえんと報ずるに、師、ゆるさざりけり。
希代の勝躅なり。
よのつねには、
解斎粥米、全無、粒。
空、対、閑窓、与、隙、塵。
なり。
あるいは、このみをひろいて、僧衆も、わがみも、茶飯の日用に活計す。
いまの晩進、この操行を讃頌する。
師の操行におよばざれども、慕古を心術とするなり。

あるとき、衆にしめして、いわく、
われ、南方にありしこと、三十年。
ひとすじに坐禅す。
なんだち、諸人、
この一段の大事をえんとおもわば、究、理、坐禅してみるべし。
三年、五年、二十年、三十年せんに道をえずといわば、老僧が頭をとりて杓につくりて小便をくむべし。

かくのごとく、ちかいける。
まことに、坐禅、弁道は、仏道の直路なる。
究、理、坐、看すべし。
のちに、人、いわく、
趙州、古仏なり。

大師、因、有、僧、問、
如何、是、祖師西来意？
師、云、
庭前、栢樹子。
僧、曰、
和尚、莫、以、境、示、人。
師、云、
吾、不、以、境、示、人。
僧、曰、
如何、是、祖師西来意？
師、云、

庭前、栢樹子。

この一則、公案は、趙州より起首せりといえども、必竟じて諸仏の渾身に作家しきたれるところなり。
だれが、これ、主人公なり？
いま、しるべき道理は、庭前、栢樹子、これ、境にあらざる宗旨なり。
(祖師西来意、これ、境にあらざる宗旨なり。)
栢樹子、これ、自己にあらざる宗旨なり。
和尚、莫、以、境、示、人なるがゆえに。
吾、不、以、境、示、人なるがゆえに。
いずれの和尚が、和尚にさえられん？
さえられずば、吾なるべし。
いずれの吾が、吾にさえられん？
たとえ、さえらるとも、人なるべし。
いずれの境が、西来意に罣礙せられざらん？
境は、かならず、西来意なるべきがゆえに。
しかあれども、西来意の境をもちて相待せるにあらず。
祖師西来意、かならずしも正法眼蔵、涅槃妙心にあらざるなり。
不是心なり、不是仏なり、不是物なり。
いま、如何、是、祖師西来意？　と道取せるは、問取のみにあらず、両人、同、得見のみにあらざるなり。
正当恁麼問時は、一人、也、未可、相見なり、自己、也、能、得、幾？　なり。
さらに道取するに、渠、無、不是なり。
このゆえに、錯錯なり。
錯錯なるがゆえに、将錯就錯なり。
承、虚、接、響にあらざらんや？
豁達、霊根、無、向、背なるがゆえに、庭前、栢樹子なり。
境にあらざれば、栢樹子にあるべからず。
たとえ境なりとも、吾、不、以、境、示、人なり、和尚、莫、以、境、示、人なり。
古祠にあらず。
すでに古祠にあらざれば、埋没しもってゆくなり。
すでに埋没しもってゆくことあれば、還、吾功、夫、来なり。
還、吾功、夫、来なるがゆえに、吾、不、以、境、示、人なり。
さらに、なにをもってか、示、人する？

吾、亦、如是なるべし。

大師、有、僧、問、
栢樹、還、有、仏性、也？　無？
大師、云、
有。
僧、曰、
栢樹、幾時、成仏？
大師、云、
待、虚空、落、地。
僧、曰、
虚空、幾時、落、地？
大師、云、
待、栢樹子、成仏。

いま、大師の道取を聴取し、這僧の問取をすてざるべし。
大師、道の虚空落地時、および、栢樹成仏時は、互相の相待なる道得にあらざるなり。
栢樹を問取し、仏性を問取す。
成仏を問取し、時節を問取す。
虚空を問取し、落地を問取するなり。
いま、大師の向、僧、道するに、有と道取するは、栢樹、仏性、有なり。
この道を通達して、仏祖の命脈を通暢すべきなり。
いわゆる、栢樹に仏性ありということ、尋常に道不得なり、未曾道なり。
すでに有仏性なり。
その為体あきらむべし。
有仏性なり。
栢樹、いま、その次位( or 地位)の高低、いかん？
寿命、身量の長短、たずぬべし。
種姓類族、きくべし。
さらに、百、千の栢樹、みな、同種姓なるか？　別種胤なるか？
成仏する栢樹あり、修行する栢樹あり、発心する栢樹あるべきか？
栢樹は成仏あれども、修行、発心、等を具足せざるか？
栢樹と虚空と、有、甚麼、因縁なるぞ？
栢樹の成仏、さだめて、待爾落地時なるは、栢樹の樹功、かならず、虚空なるか？

栢樹の地位は、虚空、それ、初地か？　果位か？
審細に功夫、参究すべし。

我、還、問、汝、趙州老、
爾、亦、一根、枯栢樹なれば、恁麼の活計を消息せるか？

おおよそ、栢樹、有仏性は、外道、二乗、等の境界にあらず、経師、論師、等の見聞にあらざるなり。
いわんや、枯木死灰の言華に開演せられんや？
ただ趙州の種類のみ参学、参究するなり。
いま、趙州、道の栢樹、有仏性は、栢樹、被、栢樹、礙、也？　無？　なり。
仏性、被、仏性、礙、也？　無？　なり。
この道取、いまだ、一仏、二仏の究尽するところにあらず。
仏面あるもの、かならずしも、この道得を究尽すること、うべからず。
たとえ諸仏のなかにも、道得する諸仏あるべし、道不得なる諸仏あるべし。
いわゆる、待、虚空、落、地は、あるべからざることをいうにあらず。
栢樹子の成仏する毎度に、虚空、落、地するなり。
その落、地、響、かくれざること、百、千の雷よりも、すぎたり。
栢樹、成仏の時は、しばらく、十二時中なれども、さらに、十二時中なり。
その落地の虚空は、凡、聖、所見の虚空のみにはあらず。
このほかに一片の虚空あり。
余人、所不見なり。
趙州、一箇、見なり。
虚空のおつるところの地、また、凡、聖、所領の地にあらず。
さらに一片の地あり。
陰陽、所不到なり。
趙州、一箇、到なり。
虚空、落、地の時節、たとえ日月、山河なりとも、待なるべし。
だれが道取する？　仏性、かならず、成仏すべし、と。
仏性は成仏以後の荘厳なり。
さらに、成仏と同生、同参する仏性もあるべし。
しかあれば、すなわち、栢樹と仏性と、異音同調にあらず。
為、道すらくは、何必なり。
作麼生？　と参究すべし。

正法眼蔵　栢樹子

爾時仁治三年壬寅、五月菖節二十一日、在、雍州、宇治郡、観音導利院、示、衆。

# 光明

大宋国、湖南、長沙、招賢大師、上堂、示、衆、云、
尽十方界、是、沙門眼。
尽十方界、是、沙門家常語。
尽十方界、是、沙門全身。
尽十方界、是、自己光明。
尽十方界、在、自己光明裏。
尽十方界、無、一人、不是、自己。

仏道の参学、かならず、勤学すべし。
転疎転遠なるべからず。
これによりて光明を学得せる作家、まれなるものなり。
震旦国、後漢の孝明皇帝、(帝)諱は荘なり、廟号は顕宗皇帝ともうす。
光武皇帝の第四の御子なり。
孝明皇帝の御宇、永平十年戊辰のとし、摩騰迦、竺法蘭、はじめて仏教を漢国に伝来す。
焚経台のまえに、道士の邪徒を降伏し、諸仏の神力をあらわす。
それよりのち、梁武帝の御宇、普通年中にいたりて、初祖、みずから西天より南海の広州に幸す。
これ、正法眼蔵、正伝の嫡嗣なり。
釈迦牟尼仏より二十八世の法孫なり。
ちなみに、嵩山の少室峰、少林寺に掛錫しまします。
法を二祖、大祖禅師に正伝せりし。
これ、仏祖、光明の親曾なり。
それよりさきは、仏祖の光明を見聞せる、なかりき。
いわんや、自己の光明をしれるあらんや？
たとえ、その光明は頂[illegible]より担来して相逢すといえども、自己の眼睛に参学せず。(「[illegible]」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
このゆえに、光明の長短、方、円をあきらめず。
光明の巻、舒、斂、放をあきらめず。
光明の相逢を厭却するゆえに、光明と光明と、転疎転遠なり。
この疎遠、たとえ光明なりとも、疎遠に罣礙せらるるなり。

転疎転遠の臭皮袋、おもわくは、仏光も自己光明も、赤、白、青、黄にして火光、水光のごとく、珠光玉光のごとく、龍、天の光のごとく、日月の光のごとくなるべし、と見解す。
或、従、知識し、或、従、経巻すといえども、光明の言教をきくには、蛍光のごとくならん、とおもう。
さらに眼睛、頂□の参学にあらず。(「□」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
漢より隋、唐、宋、および、而今にいたるまで、かくのごとくの流類、おおきのみなり。
文字の法師に習学することなかれ。
禅師、胡乱の説、きくべからず。
いわゆる、仏祖の光明は、尽十方界なり、尽仏尽祖なり、唯仏与仏なり、仏光なり、光仏なり。
仏祖は、仏祖を光明とせり。
この光明を修、証して、作仏し、坐仏し、証仏す。
このゆえに、此光、照、東方、万八千仏土の道著あり。
これ、話頭、光なり。
此光は仏光なり。
照、東方は東方、照なり。
東方は、彼此の俗論にあらず、法界の中心なり、拳頭の中央なり。
東方を罣礙すといえども、光明の八両なり。
此土に東方あり。
他土に東方あり。
東方に東方ある宗旨を参学すべし。
万八千というは、万は半拳頭なり、半即心なり。
かならずしも、十千にあらず、万万、百万、等にあらず。
仏土というは、眼睛裏なり。
照、東方のことばを見聞して、一条、白練、去を東方へひきわたせらんがごとくに憶想、参学するは、学道にあらず。
尽十方界は、東方のみなり。
東方を尽十方界という。
このゆえに、尽十方界あるなり。
尽十方界と開演する話頭、すなわち、万八千仏土の聞声するなり。

唐、憲宗皇帝は、穆宗、宣宗、両皇帝の帝父なり。
敬宗、文宗、武宗、三皇帝の祖父なり。

仏舎利を拝請して、入内供養のちなみに、夜、放光明あり。
皇帝、大悦し、早朝の群臣、みな、賀表をたてまつるに、いわく、陛下の聖徳、聖、感なり。
ときに、一臣あり。
韓愈文公なり。
字は退之という。
かつて仏祖の席末に参学しきたれり。
文公ひとり、賀表せず。
憲宗皇帝、宣問す、
群臣、みな、賀表をたてまつる。
卿、
なんぞ賀表せざる？

文公、奏対す、
微臣、かつて仏書をみるに、いわく、仏光は青、黄、赤、白にあらず。
いまのは、これ、龍神、衛護の光明なり。

皇帝、宣問す、
いかにあらんが、これ、仏光なる？
文公、無対なり。

いま、この文公、これ、在家の士俗なりといえども、丈夫の志気あり。
回天転地の才といいぬべし。
かくのごとく参学せん、学道の初心なり。
不、如是、学は、非道なり。
たとえ講経して天華をふらすとも、いまだ、この道理にいたらずば、いたずらの功夫なり。
たとえ十聖三賢なりとも、文公と同口の長舌を保任せんとき、発心なり、修、証なり。
しかありといえども、韓文公、なお、仏書を見聞せざるところあり。
いわゆる、仏光、非、青、黄、赤、白、等の道、いかにあるべしとか学しきたれる？
卿、もし青、黄、赤、白をみて、仏光にあらずと参学するちからあらば、さらに仏光をみて青、黄、赤、白とすることなかれ。
憲宗皇帝もし仏祖ならんには、かくのごとくの宣問ありぬべし。
しかあれば、明明の光明は百草なり。

百草の光明、すでに根、茎、枝、葉、華、菓、光、色、いまだ与、奪あらず。
五道の光明あり。
六道の光明あり。
這裏、是、什麽、所在なればか、説光説明する？
云何、忽、生、山河大地？　なるべし。

(今、)長沙、道の尽十方界、是、自己光明の道取を審細に参学すべきなり。
光明、自己、尽十方界を参学すべきなり。
生死去来は、光明の去来なり。
超凡越聖は、光明の藍、朱なり。
作仏作祖は、光明の玄、黄なり。
修、証は、なきにあらず、光明の染汚なり。
草木、牆壁、皮肉骨髄、これ、光明の赤、白なり。
煙霞、水石、鳥道、玄路、これ、光明の回環なり。
自己の光明を見聞するは、値仏( or 諸仏)の証験なり、見仏の証験なり。
尽十方界は、是、自己なり。
是自己は、尽十方界なり。
回避の余地あるべからず。
たとえ回避の(余)地ありとも、これ、出身の活路なり。
而今の髑髏、七尺、すなわち、尽十方界の形なり、象なり。
仏道に、修、証する尽十方界は、髑髏形骸、皮肉骨髄なり。

雲門山、大慈雲匡真大師は、如来、世尊より三十九世の児孫なり。
法を雪峰、真覚大師に嗣す。
仏衆の晩進なりといえども、祖席の英雄なり。
だれが雲門山に光明仏の未曾出世と道取せん？
あるとき、上堂、示、衆、云、
人人、尽有、光明在。
看時、不見、暗、昏昏。
作麽生、是、諸人光明在？

衆、無対。
自、代、云、
僧堂、仏殿、廚庫、三門。

いま、大師、道の人人、尽有、光明在は、のちに出現すべしといわず、往世にありしといわず、傍観の現成といわず。
人人、自有、光明在と道取するをあきらかに聞持すべきなり。
百、千の雲門をあつめて同参せしめ、一口同音に道取せしむるなり。
人人、尽有、光明在は、雲門の自搆にあらず。
人人の光明、みずから拈、光、為、道なり。
人人、尽有、光明とは、渾人、自、是、光明在なり。
光明というは、人人なり。
光明を拈得して依報正報とせり。
光明、尽有、人人在なるべし。
光明、自、是、人人在なり。
人人、自、有、人人在なり。
光光、自、有、光光在なり。
有有、尽有、有有在なり。
尽尽有有、尽尽在なり。
しかあれば、しるべし。
人人、尽有の光明は、現成の人人なり。
光光、尽有の人人なり。
しばらく、雲門にとう、
なんじ、
なにをよんでか人人とする？
なにをよんでか光明とする？

雲門、みずから、いわく、
作麼生、是、光明在？

この問著は、疑殺、話頭の光明なり。
しかあれども、恁麼道著すれば、人人、光光なり。

ときに、衆、無対。
たとえ百、千の道得ありとも、無対を拈じて道著するなり。
これ、仏祖、正伝の正法眼蔵、涅槃妙心なり。

雲門、自、代、云、
僧堂、仏殿、廚庫、三門。

いま、道取する自、代は、
雲門に自、代するなり。
大衆に自、代するなり。
光明に自、代するなり。
僧堂、仏殿、廚庫、三門に自、代するなり。
しかあれども、雲門、なにをよんでか僧堂、仏殿、廚庫、三門とする？
大衆、および、人人をよんで僧堂、仏殿、廚庫、三門とすべからず。
いくばくの僧堂、仏殿、廚庫、三門かある？
雲門なりとやせん？
七仏なりとやせん？
四七なりとやせん？
二三なりとやせん？
拳頭なりとやせん？
鼻孔なりとやせん？
いわくの、僧堂、仏殿、廚庫、三門、たとえ、いずれの仏祖なりとも、人人をまぬがれざるものなり。
このゆえに、人人にあらず。
しかありしより、このかた、有仏殿の無仏なるあり、無仏殿の無仏なるあり。
有光仏あり。
無光仏あり。
無仏光あり。
有仏光あり。

雪峰山、真覚大師、示、衆、云、
僧堂前、与、諸人、相見、了、也。

これ、すなわち、雪峰の通身、是、眼睛のときなり。
雪峰の、雪峰を覷見する時節なり。
僧堂の、僧堂と相見するなり。

保福、挙、問、鵝湖、
僧堂前、且置。
什麼所、望州亭、烏石嶺、相見？

鵝湖、驟歩、帰、方丈。
保福、便、入、僧堂。

いま、帰、方丈。入、僧堂。これ、話頭、出身なり。
相見底の道理なり。
相見、了、也、僧堂なり。

地蔵院、真応大師、云、
典座、入、庫堂。

この話頭は、七仏已前事なり。

正法眼蔵　光明
仁治三年壬寅、夏、六月二日、夜、三更四点、示、衆、于、観音導利興聖宝林寺。于、時、梅雨、霖霖。
簷頭、滴滴。
作麼生、是、光明在？
大衆、未、免、雲門、道、覷破。

# 身心学道

仏道は、不道を擬するに不得なり、不学を擬するに転遠なり。

南嶽、大慧禅師の、いわく、
修、証は、なきにあらず。染汚すること、えじ。

仏道を学せざれば、すなわち、外道、闡提、等の道に堕在す。
このゆえに、前仏、後仏、かならず、仏道を修行するなり。
仏道を学習するに、しばらく、ふたつあり。
いわゆる、心をもって学し、身をもって学するなり。

心をもって学する、とは、あらゆる諸心をもって学するなり。
その諸心というは、質多心、汗栗駄心、矣栗駄心、等なり。
また、感応道交して菩提心をおこしてのち、仏祖の大道に帰依し、発菩提心の行李を習学するなり。
たとえ、いまだ真実の菩提心おこらずというとも、さきに菩提心をおこせりし仏祖の法をならうべし。
これ、
発菩提心なり。
赤心片片なり。
古仏心なり。
平常心なり。
三界一心なり。
これらの心を放下して学道するあり、拈挙して学道するあり。
このとき、思量して学道す、不思量して学道す。
あるいは、金襴衣を正伝し、金襴衣を稟受す。
あるいは、汝、得、吾髄あり、三拝、依位而立あり。
碓、米、伝衣する、以、心、学、心あり。
剃髪、染衣、すなわち、回心なり、明、心なり。
踰城し入山する、出、一心。入、一心。なり。
山の所入なる思量、箇不思量底なり。
世の所捨なる非思量なり。
これを眼睛に団じきたること、二、三斛、これを業識に弄しきたること、千、万端なり。

かくのごとく学道するに、有功に賞、おのずから、きたり。
有賞に功いまだ、いたらざれども、ひそかに仏祖の鼻孔をかりて出気せしめ、驢馬の脚蹄を拈じて印証せしむる。
すなわち、万古の榜様なり。
しばらく、山河大地、日月星辰、これ、心なり。
この正当恁麼時、いかなる保任か現前する？
山河大地というは、山河は、たとえば、山水なり。
大地は、このところのみにあらず。
山も、おおかるべし。
大須弥、小須弥あり。
横に処せるあり、竪に処せるあり。
三千界あり。
無量国あり。
色にかかるあり、空にかかるあり。
河も、さらに、おおかるべし。
天河あり。
地河あり。
四大河あり。
無熱池あり。
北倶盧州には、四阿耨達池あり。
海あり。
池あり。
地は、かならずしも土にあらず。
土、かならずしも地にあらず。
土地もあるべし。
心地もあるべし。
宝地もあるべし。
万般なりというとも、地なかるべからず。
空を地とせる世界もあるべきなり。
日月星辰は、人、天の所見、不同あるべし、諸類の所見、おなじからず。
恁麼なるがゆえに、一心の所見、これ、一斉なるなり。
これら、すでに心なり。
内なりとやせん？
外なりとやせん？
来なりとやせん？

去なりとやせん？
生時は一点を増するか？　増せざるか？
死には一塵をさるか？　さらざるか？
この生死、および、生死の見、いずれのところにか、おかんとする？
向来は、ただ、これ、心の一念、二念なり。
一念、二念は、一山河大地なり、二山河大地なり。
山河大地、等、これ、有無にあらざれば、
大小にあらず。
得、不得にあらず。
識、不識にあらず。
通、不通にあらず。
悟、不悟に変ぜず。
かくのごとくの心、みずから学道することを慣習するを心学道というと決定、
信受すべし。
この信受、それ、大小、有無にあらず。
いまの、知、家、非、家。捨、家、出家の学道、それ、
大小の量にあらず。
遠近の量にあらず。
鼻祖鼻末にあまる。
向上、向下にあまる。
展事あり、七尺、八尺なり。
投機あり、為、自、為、他なり。
恁麼なる、すなわち、学道なり。
学道は、恁麼なるがゆえに、牆壁、瓦礫、これ、心なり。
さらに、三界唯心にあらず。
法界唯心にあらず。
牆壁、瓦礫なり。
咸通年前につくり、咸通年後にやぶる。
拕泥帯水なり。
無縄自縛なり。
玉をひくちからあり、水にいる能あり。
とくる日あり、くだくる時あり、極微に、きわまるときあり。
露柱と同参せず。
灯籠と交肩せず。
かくのごとくなるゆえに、赤脚走して学道するなり。

だれが著眼看せん？
翻筋斗して学道するなり。
おのおの随、他、去あり。
このとき、
壁落、これ、十方を学せしむ。
無門、これ、四面を学せしむ。
発菩提心は、
あるいは、生死にして、これをうることあり。
あるいは、涅槃にして、これをうることあり。
あるいは、生死、涅槃のほかにして、これをうることあり。
ところをまつにあらざれども、発心のところに、さえられざるあり。
境発にあらず、智発にあらず、菩提心発なり、発菩提心なり。
発菩提心は、
有にあらず。無にあらず。
善にあらず。悪にあらず。無記にあらず。
報地によりて縁起するにあらず。
天有情は、さだめて、うべからざるにあらず。
ただ、まさに、時節とともに、発菩提心するなり。
依にかかわれざるがゆえに。
発菩提心の正当恁麼時には、法界、ことごとく、発菩提心なり。
依を転ずるに相似なりといえども、依にしらるるにあらず。
共、出、一隻手なり。
自、出、一隻手なり。
異類中行なり。
地獄、餓鬼、畜生、修羅、等のなかにしても、発菩提心するなり。
赤心片片というは、片片なるは、みな、赤心なり。
一片、両片にあらず、片片なるなり。
荷葉、団団、団、似、鏡。
菱角、尖尖、尖、似、錐。
かがみに、にたりというとも、片片なり。
錐に、にたりというとも、片片なり。
古仏心というは、むかし、僧ありて、大証国師に、とう、
いかにあらんか、これ、古仏心？
ときに、国師、いわく、
牆壁、瓦礫。

しかあれば、しるべし。
古仏心は、牆壁、瓦礫にあらず。
牆壁、瓦礫を古仏心というにあらず。
古仏心、それ、かくのごとく学するなり。

平常心というは、此界、他界といわず、平常心なり。
昔日は、このところより、さり、今日は、このところより、きたる。
さるときは、漫天、さり。
きたるときは、尽地、きたる。
これ、平常心なり。
平常心、この屋裏に開閉す、千門万戸、一時、開閉なるゆえに、平常なり。
いま、この蓋天蓋地は、おぼえざる、ことばのごとし。
噴地の一声のごとし。
語、等なり。
心、等なり。
法、等なり。
寿行生滅の刹那に生滅するあれども、最後身よりさきは、かつて、しらず。
しらざれども、発心すれば、かならず、菩提の道にすすむなり。
すでに、このところあり。
さらに、あやしむべきにあらず。
すでに、あやしむことあり。
すなわち、平常なり。

身学道というは、身にて学道するなり。
赤肉団の学道なり。
身は学道より、きたり。
学道より、きたれるは、ともに、身なり。
尽十方界、是、箇真実人体なり。
生死去来、真実人体なり。
この身体をめぐらして、十悪をはなれ、八戒をたもち、三宝に帰依して、捨、家、出家する、真実の学道なり。
このゆえに、真実人体という。
後学、かならず、自然見の外道に同ずることなかれ。
百丈、大智禅師の、いわく、
若、執、本清浄、本解脱、自、是、仏、自、是、禅道解者、即、属、自然外道。

これら、閑家の破具にあらず。
学道の積功累徳なり。
☒跳して玲瓏八面なり。(「☒」は「⻊ 孛」という一文字の漢字です。)
脱落して如、藤、倚、樹なり。
或、現、此身、得度、而、為、説法なり。
或、現、他身、得度、而、為、説法なり。
或、不現、此身、得度、而、為、説法なり。
或、不現、他身、得度、而、為、説法なり。
乃至、不、為、説法なり。
しかあるに、
棄、身するところに、揚声止響することあり。
捨、命するところに、断腸得髄( or 断臂得髄)することあり。
たとえ威音王よりさきに発足、学道すれども、なお、これ、みずからが児孫として増長するなり。
尽十方世界というは、十方面、ともに、尽界なり。
東西南北、四維、上下を十方という。
かの表裏、縦横の究尽なる時節を思量すべし。
思量するというは、人体は、たとえ自他に罣礙せらるというとも、尽十方なりと諦観し決定するなり。
これ、未曾聞をきくなり。
方、等なるゆえに。
界、等なるゆえに。
人体は四大、五蘊なり、大塵( or 六塵)、ともに、凡夫の究尽するところにあらず、聖者の参究するところなり。
また、
一塵に十方を諦観すべし。
十方は一塵に嚢括するにあらず。
あるいは、一塵に僧堂、仏殿を建立し、
あるいは、僧堂、仏殿に尽界を建立せり。
これより建立せり。
建立、これより、なれり。
恁麼の道理、すなわち、尽十方界、真実人体なり。
自然、天然の邪見をならうべからず。
界量にあらざれば、広、狭にあらず。
尽十方界は、

八万四千の説法蘊なり。
八万四千の三昧なり。
八万四千の陀羅尼なり。
八万四千の説法蘊、これ、転法輪なるがゆえに。
法輪の転所は、亙界なり、亙時なり。
方域なきにあらず。
真実人体なり。
いまの、なんじ、いまの、われ、尽十方界、真実人体なる人なり。
これらを蹉過することなく学道するなり。
たとえ三大阿僧祇劫、十三大阿僧祇劫、無量阿僧祇劫までも、捨、身、受、身しもってゆく、かならず、学道の時節なる進歩、退歩、学道なり。
礼拝、問訊する、すなわち、動止、威儀なり。
枯木を画図し、死灰を磨、瓦す。
しばらくの間断あらず。
暦日は、短促なりといえども、学道は、幽遠なり。
捨、家、出家せる風流、たとえ蕭然なりとも、樵夫に混同することなかれ。
活計、たとえ競頭すとも、佃戸に一斉なるにあらず。
迷、悟、善悪の論に比することなかれ。
邪正、真偽の際に、とどむることなかれ。
生死去来、真実人体というは、いわゆる、生死は凡夫の流転なりといえども、大聖の所脱なり。
超凡越聖せん、これを真実体とするのみにあらず。
これに、二種、七種のしな、あれども、究尽するに、面面、みな、生死なるゆえに、恐怖すべきにあらず。
ゆえ、いかん？　となれば、
いまだ生をすてざれども、いま、すでに死をみる。
いまだ死をすてざれども、いま、すでに生をみる。
生は、死を罣礙するにあらず。
死は、生を罣礙するにあらず。
生、死、ともに、凡夫のしるところにあらず。
生は、栢樹(子)のごとし。
死は、鉄漢のごとし。
栢樹は、たとえ栢樹に礙せらるとも、生は、いまだ死に礙せられざるがゆえに、学道なり。
生は、一枚にあらず。

死は、両匹にあらず。
死の、生に相対する、なし。
生の、死に相待する、なし。

圜悟禅師、曰、
生、也、全機、現。
死、也、全機、現。
逼塞、太虚空。
赤心、常、片片。

この道著、しずかに功夫、点換すべし。
圜悟禅師、かつて、恁麼いうといえども、なお、いまだ、生、死の、全機にあまれることをしらず。
去来を参学するに、
去に生死あり。
来に生死あり。
生に去来あり。
死に去来あり。
去来は、
尽十方界を両翼、三翼として飛去、飛来し、
尽十方界を三足、五足として進歩、退歩するなり。
生死を頭、尾として尽十方界、真実人体は、よく、翻身回脳するなり。
翻身回脳するに、
如、一銭大なり。
似、微塵裏なり。
平坦坦地、それ、壁立千仭なり。
壁立千仭所、それ、平坦坦地なり。
このゆえに、南洲、北洲の面目あり。
これを換して学道す。
非想非非想の骨髄あり。
これを抗して学道するのみなり。

正法眼蔵　身心学道
爾時、仁治三年壬寅、重陽日、在、于、宝林寺、示、衆。

# 夢中説夢

諸仏、諸祖、出興之道、それ、朕兆已前なるゆえに旧窠の所論にあらず。
これによりて仏祖辺、仏向上、等の功徳あり。
時節にかかわれざるがゆえに、寿者命者、なお、長遠にあらず、頓息( or 頓速)にあらず。
はるかに凡界の測度にあらざるべし。
法輪転、また、朕兆已前の規矩なり。
このゆえに、大功不賞、千古榜様なり。
これを夢中説夢す。
証中見証なるがゆえに、夢中説夢なり。
この夢中説夢所、これ、仏祖国なり、仏祖会なり。
仏国、仏会、祖道、祖席は、証上而証、夢中説夢なり。
この道取、説取にあいながら、仏会にあらずとすべからず。
これ、仏転法輪なり。
この法輪、十方、八面なるがゆえに、大海、須弥、国土、諸法、現成せり。
これ、すなわち、諸夢已前の夢中説夢なり。
遍界の弥露は夢なり。
この夢、すなわち、明明なる百草なり。
擬著せんとする正当なり。
粉紜なる正当なり。
このとき、夢草、中草( or 中夢)、説草、等なり。
これを参学するに、根、茎、枝、葉、華、果、光、色、ともに、大夢なり。
夢然なりと、あやまるべからず。
しかあれば、仏道をならわざらんと擬する人は、この夢中説夢にあいながら、いたずらに、あるまじき夢草の、あるにもあらぬをあらしむるをいうならんとおもい、まどいにまどいをかさぬるがごとくにあらんとおもえり。
しかにはあらず。
たとえ迷中又迷というとも、まどいのうえのまどいと道取せられゆく、道取の通霄の路、まさに、功夫、参学すべし。
夢中説夢は、諸仏なり。
諸仏は、風、雨、水、火なり。
この名号を受持し、かの名号を受持す。
夢中説夢は、古仏なり。

乗、此宝乗、直、至、道場なり。
直、至、道場は、乗、此宝乗中なり。
夢曲、夢直、把定、放行、逞、風流なり。
正当恁麼の法輪、あるいは、大法輪界を転ずること、無量、無辺なり。
あるいは、一微塵にも転ず。
塵中に、消息、不休なり。
この道理、いずれの恁麼事を転法するにも、怨家、笑、点頭なり。
いずれの所所も恁麼事を転法するゆえに、転、風流なり。
このゆえに、尽地、みな、驀地の無端なる法輪なり。
遍界、みな、不昧の因果なり、諸仏の無上なり。
しるべし。
諸仏、化道、および、説法蘊、ともに、無端に建化し、無端に住位せり。
去来の端をもとむることなかれ。
尽、従、這裏、去なり。
尽、従、這裏、来なり。
このゆえに、葛藤をうえて葛藤をまつう、無上菩提の性、相なり。
菩提の、無端なるがごとく、衆生、無端なり、無上なり。
羅籠、無端なりといえども、解脱、無端なり。
公案、現成は、放、爾、三十棒、これ、見成の夢中説夢なり。
しかあれば、すなわち、無根樹、不陰陽地、喚不響谷、すなわち、見成の夢中説夢なり。
これ、人、天の境界にあらず、凡夫の測度にあらず。
夢の、菩提なる、だれが疑著せん？
疑著の所管にあらざるがゆえに。
認著する、だれか、あらん？
認著の所転にあらざるがゆえに。
この無上菩提、これ、無上菩提なるがゆえに、夢、これを夢という。
中夢あり、夢説あり、説夢あり、夢中あるなり。
夢中にあらざれば、説夢なし。
説夢にあらざれば、夢中なし。
説夢にあらざれば、諸仏なし。
夢中にあらざれば、諸仏、出世し転、妙法輪することなし。
その法輪は、唯仏与仏なり、夢中説夢なり。
ただ、まさに、夢中説夢に無上菩提衆の諸仏、諸祖あるのみなり。
さらに、法身向上事、すなわち、夢中説夢なり。

ここに唯仏与仏の奉覲あり。
頭、目、髄、脳、身肉、手、足を愛惜すること、あたわず。
愛惜せられざるがゆえに、売、金、須、是、買、金、人なるを、玄之玄といい、妙之妙といい、証之証といい、頭上、安、頭ともいうなり。
これ、すなわち、仏祖の行履なり。
これを参学するに、頭をいうには人の頂上とおもうのみなり。
さらに、毘盧の頂上とおもわず。
いわんや、明明、百草頭とおもわんや？
頭聻をしらず。
むかしより、頭上、安、頭の一句、つたわれきたれり。
愚人、これをききて、剰法をいましむる言語とおもう。
あるべからずと、いわんとては、いかでか頭上、安、頭することあらん、というをよのつねのならいとせり。
まことに、それ、あやまらざるか？
説と現成する、凡、聖、ともに、もちいるに相違あらず。
このゆえに、凡、聖、ともに、夢中説夢なる、きのうにても生ずべし、今日にても長ずべし。
しるべし。
きのうの夢中説夢は、夢中説夢を夢中説夢と認じきたる。
如今の夢中説夢は、夢中説夢を夢中説夢と参ずる。
すなわち、これ、値、仏の慶快なり。
かなしむべし。
仏祖、明明、百草の夢あきらかなること、百、千の日月よりも、あきらかなりといえども、生盲の、みざること、あわれむべし。
いわゆる、頭上、安、頭という、その頭は、すなわち、
百草頭なり。
千種頭なり。
万般頭なり。
通身頭なり。
全界不曾蔵頭なり。
尽十方界頭なり。
一句合頭なり。
百尺竿頭なり。
安も上も頭頭なると参ずべし、究すべし。

しかあれば、すなわち、一切諸仏、及、諸仏阿耨多羅三藐三菩提、皆、従、此経、出も、頭上、安、頭しきたれる夢中説夢なり。
此経、すなわち、夢中説夢するに、阿耨菩提の諸仏を出興せしむ。
菩提の諸仏、さらに、此経をとく。
さだまれる夢中説夢なり。
夢因くらからざれば、夢果、不昧なり。
ただ、まさに、
一椎、千当、万当なり。
千椎、万椎は、一当、半当なり。
かくのごとくなるによりて、
恁麼事なる夢中説夢あり。
恁麼人なる夢中説夢あり。
不恁麼事なる夢中説夢あり。
不恁麼人なる夢中説夢あり、としるべし。
しられきたる道理、顕赫なり。
いわゆる、ひめもすの夢中説夢、すなわち、夢中説夢なり。
このゆえに、古仏、いわく、
我、今、為、汝、夢中説夢。
三世諸仏、也、夢中説夢。
六代祖師、也、夢中説夢。

この道、あきらめ学すべし。
いわゆる、
拈華瞬目、すなわち、夢中説夢なり。
礼拝得髄、すなわち、夢中説夢なり。
おおよそ、道得、一句、不会、不識、夢中説夢なり。
千手千眼、用、許多、作麼？　なるがゆえに、見色見声、聞色聞声の功徳、具足せり。
現身なる夢中説夢あり。
説夢説法蘊なる夢中説夢なり。
把定、放行なる夢中説夢なり。
直指は、説夢なり。
的当は、説夢なり。
把定しても、放行しても、平常の秤子を学すべし。
学得するに、かならず、目銖機金兩あらわれて、夢中説夢し、いづるなり。
(「金兩」は一文字の漢字として見てください。)

銖金兩を論ぜず、平にいたらざれば、平の見成なし。(「金兩」は一文字の漢字として見てください。)
平をうるに、平をみるなり。
すでに平をうるところ、物によらず、秤によらず、機によらず。
空にかかれりといえども、平をえざれば、平をみず、と参究すべし。
みずから空にかかれるがごとく、物を接取して空に遊化せしむる夢中説夢なり。
空裏に平を現身す。
平は秤子の大道なり。
空をかけ、物をかく、たとえ空なりとも、たとえ色なりとも、平にあう夢中説夢なり。
解脱の、夢中説夢にあらずということなし。
夢、これ、尽大地なり。
尽大地は、平なり。
このゆえに、回頭転脳の無窮尽、すなわち、夢裏、証、夢する信受、奉行なり。

釈迦牟尼仏、言、
諸仏身、金色、
百福相、荘厳。
聞、法、為、人、説、常、有、是好夢。
又、
夢、作、国王、捨、宮殿、眷属、及、上妙五欲、行詣、於、道場。
在、菩提樹下、
而、処、獅子座、
求道、過、七日、得、諸仏之智、
成、無上道、已、起、而、転、法輪。
為、四衆、説、法、逕、千、万、億劫。
説、無漏妙法、度、無量衆生。
後、当、入涅槃、如、煙、尽、灯、滅。
若、後、悪世中、説、是第一法、是人、得、大利、如、上諸功徳。

而今の仏説を参学して、諸仏の仏会を究尽すべし。
これ、譬喩にあらず。
諸仏の妙法は、ただ唯仏与仏なるゆえに、夢、覚の諸法、ともに、実相なり。
覚中の発心、修行、菩提、涅槃あり。

夢裏の発心、修行、菩提、涅槃あり。
夢、覚、おのおの、実相なり。
大小せず。
勝劣せず。
しかあるを、又、夢、作、国王、等の前後の道著を見聞する古今、おもわくは、説、是第一法のちからによりて、夜、夢の、かくのごとくなる、と錯会せり。
かくのごとく会取するは、いまだ仏説を暁了せざるなり。
夢、覚、もとより如一なり、実相なり。
仏法は、たとえ譬喩なりとも、実相なるべし。
すでに譬喩にあらず。
夢、作、これ、仏法の真実なり。
釈迦牟尼仏、および、一切の諸仏、諸祖、みな、夢中に発心、修行し、成、等正覚するなり。
しかあるゆえに、而今の娑婆世界の一化の仏道、すなわち、夢、作なり。
七日というは、得、仏智の量なり。
転、法輪、度、衆生、すでに逕、千、万、億劫という。
夢中の消息、たどるべからず。
諸仏身、金色、百福相、荘厳。聞、法、為、人、説、常、有、是好夢という。
あきらかに、しりぬ。
好夢は、諸仏なりと証明せらるるなり。
常、有の如来、道あり。
百年の夢のみにあらず。
為、人、説は、現、身なり。
聞、法は、
眼処、聞、声なり。
心処、聞、声なり。
旧巣処、聞、声なり。
空劫已前、聞、声なり。
諸仏身、金色、百福相、荘厳という。
好夢は諸仏身なりということ、直、至、如今、更、不疑なり。
覚中に仏化やまざる道理ありといえども、仏祖、現成の道理、かならず、夢、作、夢中なり。
莫、謗、仏法の参学すべし。
莫、謗、法の参学するとき、而今の如来、道、たちまちに現成するなり。

正法眼蔵　夢中説夢
爾時、仁治三年壬寅、秋、九月二十一日、在、雍州、宇治郡、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 道得

諸仏、諸祖は、道得なり。
このゆえに、仏祖の、仏祖を選するには、かならず、道得、也？　未？　と問取するなり。
この問取、
こころにても問取す。
身にても問取す。
拄杖、払子にても問取す。
露柱、灯籠にても問取するなり。
仏祖にあらざれば、問取なし、道得なし。
そのところ、なきがゆえに。
その道得は、他人にしたがいて、うるにあらず。
わがちからの能にあらず。
ただ、まさに、仏祖の究弁あれば、仏祖の道得あるなり。
かの道得のなかに、むかしも修行し証究す、いまも功夫し弁道す。
仏祖の、仏祖を功夫して、仏祖の道得を弁肯するとき、この道得、おのずから、三年、八年、三十年、四十年の功夫となりて、尽力、道得するなり。
(
裏書、云、
三十年、二十年は、道得のなれる年月なり。
この年月、ちからをあわせて道得せしむるなり。
)
このときは、その、なん十年のあいだも、道得の間隙なかりけるなり。
しかあれば、すなわち、証究のときの見得、それ、まことなるべし。
かのときの見得をまこととするがゆえに、いまの道得なることは、不疑なり。
ゆえに、いまの道得、かのときの見得をそなえたるなり。
かのときの見得、いまの道得をそなえたり。
このゆえに、いま、道得あり、いま、見得あり。
いまの道得と、かのときの見得と、一条なり、万里なり。
いまの功夫、すなわち、道得と見得とに功夫せられゆくなり。
この功夫の把定の月、ふかく、年、おおくかさなりて、さらに従来の年月の功夫を脱落するなり。
脱落せんとするとき、皮肉骨髄、おなじく、脱落を弁肯す。
国土、山河、ともに、脱落を弁肯するなり。

このとき、脱落を究竟の宝所として、いたらんと擬しゆくところに、この擬到は、すなわち、現出にてあるゆえに、正当脱落のとき、またざるに現成する道得あり。
心のちからにあらず、身のちからにあらずといえども、おのずから道得あり。
すでに道得せらるるに、めずらしく、あやしく、おぼえざるなり。
しかあれども、この道得を道得するとき、不道得を不道するなり。
道得に道得すると認得せるも、いまだ不道得底を不道得底と証究せざるは、なお、仏祖の面目にあらず、仏祖の骨髄にあらず。
しかあれば、三拝依位而立の道得底、いかにしてか皮肉骨髄のやからの道得底と、ひとしからん？
皮肉骨髄のやからの道得底、さらに三拝依位而立の道得に接するにあらず、そなわれるにあらず。
いま、われと他と、異類中行と相見するは、いま、かれと他と、異類中行と相見するなり。
われに道得底あり、不道得底あり。
かれに道得底あり、不道得底あり。
道底に自他あり、不道底に自他あり。

趙州真際大師、示、衆、云、
爾、若、一生、不離、叢林、兀坐、不道、十年五載、無、人、喚、作、爾、唖漢。
已後、諸仏、也、不、及、爾、哉。

しかあれば、十年五載の在、叢林、しばしば霜華を経歴するに、一生、不離、叢林の功夫、弁道をおもうに、坐断せし兀坐は、いくばくの道得なり。
不離、叢林の経行坐臥、そこばくの無、人、喚、作、爾、唖漢なるべし。
一生は所従来をしらずといえども、不離、叢林ならしむれば、不離、叢林なり。
一生と叢林の、いかなる通霄路かある？
ただ兀坐を弁肯すべし。
不道をいとうことなかれ。
不道は、道得の頭正尾正なり。
兀坐は、一生、二生なり。
一時、二時にあらず。
兀坐して不道なる十年五載あれば、諸仏も爾をないがしろにせんことあるべからず。

まことに、この兀坐、不道は、仏眼、也、覰不見なり、仏力、也、牽、不、及なり。
諸仏、也、不奈、爾、何なるがゆえに。
趙州のいうところは、兀坐、不道の道取は、諸仏も、これを唖漢というにおよばず、不唖漢というにおよばず。
しかあれば、一生、不離、叢林は、一生、不離、道得なり。
兀坐、不道、十年五載は、
道得、十年五載なり。
一生、不離、不道得なり。
道不得、十年五載なり。
坐断、百、千、諸仏なり。
百、千、諸仏、坐断、爾なり。
しかあれば、すなわち、仏祖の道得底は、一生、不離、叢林なり。
たとえ唖漢なりとも、道得底あるべし。
唖漢は、道得なかるべしと学することなかれ。
道得あるもの、かならずしも唖漢にあらざるにあらず。
唖漢、また、道得あるなり。
唖声、きこゆべし。
唖語、きくべし。
唖にあらずば、いかでか唖と相見せん？　いかでか唖と相談せん？
すでに、これ、唖漢なり。
作麼生、相見？
作麼生、相談？
かくのごとく参学して、唖漢を弁究すべし。

雪峰の真覚大師の会に一僧ありて山のほとりにゆきて草をむすびて庵を卓す。
とし、つもりぬれども、かみをそらざりけり。
庵裏の活計、だれが、しらん？
山中の消息、悄然なり。
みずから一柄の木杓をつくりて谿のほとりにゆきて水をくみて、のむ。
まことに、これ、飲、谿のたぐいなるべし。
かくて日往月来するほどに、家風、ひそかに漏泄せりけるによりて、あるとき、僧きたりて庵主にとう、
いかにあらんか、これ、祖師西来意？
庵主、いわく、
谿、深、杓、柄、長。

という。
僧、おくことあらず、礼拝せず、請益せず、山にのぼりて雪峰に挙似す。
雪峰、ちなみに、挙をききて、いわく、
也、甚、奇怪。
雖然、如是、老僧、自、去、勘過、始、得。

雪峰のいうこころは、
よさは、すなわち、あやしきまでに、よし。
しかあれども、老僧みずからゆきて、かんがえみるべし、となり。
かくてあるて、ある日、雪峰、たちまちに侍者に剃刀をもたせて卒し、ゆく。
直に、庵にいたりぬ。
わずかに庵主をみるに、すなわち、とう、
道得ならば、なんじが頭をそらじ。

この問、こころうべし。
道得、不剃、汝頭とは、不剃頭は、道得なり、ときこゆ。
いかん？
この道得もし道得ならんには、畢竟じて不剃ならん。
この道得、きくちからありて、きくべし。
きくべきちからあるもののために開演すべし。

ときに、庵主、かしらをあらいて雪峰のまえにきたれり。

これも道得にて、きたれるか？
不道得にて、きたれるか？

雪峰、すなわち、庵主のかみをそる。

この一段の因縁、まことに、優曇の一現のごとし。
あいがたきのみにあらず、ききがたかるべし。
七聖、十聖の境界にあらず、三賢、七賢の覰見にあらず。
経師、論師のやから、神通変化のやから、いかにも、はかるべからざるなり。
仏、出世にあうというは、かくのごとくの因縁をきくをいうなり。

しばらく、雪峰のいう、道得、不剃、汝頭、いかにあるべきぞ？
未道得の人、これをききて、ちからあらんは、驚疑すべし。
ちからあらざらんは、茫然ならん。

仏と問著せず、道といわず、三昧と問著せず、陀羅尼といわず、かくのごとく問著する。
問に相似なりといえども、道に相似なり。
審細に参学すべきなり。
しかあるに、庵主、まことあるによりて、道得に助発せられて茫然ならざるなり。
家風かくれず、洗頭して、きたる。
これ、仏自智恵、不得、其辺の法度なり。
現、身なるべし、説、法なるべし、度、生なるべし、洗、頭、来なるべし。
ときに、雪峰、もし、その人にあらずば、剃刀を放下して呵呵、大笑せん。
しかあれども、雪峰、そのちからあり、その人なるによりて、すなわち、庵主のかみをそる。
まことに、これ、雪峰と庵主と、唯仏与仏にあらずよりは、かくのごとく、ならじ。
一仏、二仏にあらずよりは、かくのごとく、ならじ。
龍と龍とにあらずよりは、かくのごとく、ならじ。
驪珠は、驪龍のおしむこころ、懈倦なしといえども、おのずから解収の人の手にいるなり。
しるべし。
雪峰は、庵主を勘過す。
庵主は、雪峰をみる。
道得、不道得。
かみをそられ、かみをそる。
しかあれば、すなわち、道得の良友は、期せざるに、とぶらう、みちあり。
道不得のとも、またざれども、知、己のところありき。
知、己の参学あれば、道得の現成あるなり。

正法眼蔵　道得
仁治三年壬寅、十月五日、書、于、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 画餅

諸仏、これ、証なるゆえに、諸物、これ、証なり。
しかあれども、一性にあらず、一心にあらず。
一性にあらず、一心にあらざれども、証のとき、証、証さまたげず現成するなり。
現成のとき、現、現、あい接することなく現成すべし。
これ、祖宗の端的なり。
一異の測度を挙して参学の力量とすることなかれ。
このゆえに、いわく、
一法、纔通、万法、通。

いうところの一法通は、
一法の従来せる面目を奪却するにあらず。
一法を相対せしむるにあらず。
一法を無対ならしむるにあらず。
無対ならしむるは、これ、相礙なり。
通をして通の礙なからしむるに、一通、これ、万通なり。
一通は、一法なり。
一法通、これ、万法通なり。

古仏、言、
画餅、不、充、飢。

この道を参学する雲衲霞袂、この十方より、きたれる菩薩、声聞の名位をひとつにせず。
かの十方より、きたれる神頭鬼面の皮肉、あつく、うすし。
これ、古仏今仏の学道なりというとも、樹下、草庵の活計なり。
このゆえに、家業を正伝するに、
あるいは、いわく、経、論の学業は、真智を熏修せしめざるゆえに、しかのごとくいう、といい、
あるいは、三乗、一乗の教、学、さらに三菩提のみちにあらず、といわんとして恁麼いうなり、と見解せり。
おおよそ、仮立なる法は、真に用不著なるをいわんとして、恁麼の道取あり、と見解する、おおきに、あやまるなり。

祖宗の功業を正伝せず、仏祖の道取にくらし。
この一言をあきらめざらん、だれが余仏の道取を参究せりと聴許せん？
画餅、不能、充、飢と道取するは、たとえば、
諸悪莫作、衆善奉行と道取するがごとし。
是、什麼物、恁麼来と道取するがごとし。
吾、常、於、是、切というがごとし。
しばらく、かくのごとく参学すべし。
画餅という道取、かつて見来せるともがら、すくなし、知及せるもの、まったくあらず。
なにとしてか恁麼しる？
従来の一枚、二枚の臭皮袋を勘過するに、疑著におよばず、親覲におよばず、ただ隣談に側耳せずして、不管なるがごとし。
画餅というは、しるべし、父母所生の面目あり、父母未生の面目あり。
米麺をもちいて作法せしむる正当恁麼、かならずしも生、不生にあらざれども、現成、道成の時節なり。
去来の見聞に拘牽せらるると参学すべからず。
餅を画する丹雘は、山水を画する丹雘と、ひとしかるべし。
いわゆる、山水を画するには、青丹をもちいる。
画餅を画するには、米麺をもちいる。
恁麼なるゆえに、その所用、おなじく、功夫、ひとしきなり。
しかあれば、すなわち、いま、道著する画餅というは、一切の糊餅、菜餅、乳餅、焼餅、糍餅、等、みな、これ、画図より現成するなり。
しるべし。
画、等、
餅、等、
法、等なり。
このゆえに、いま、現成するところの諸餅、ともに、画餅なり。
このほかに画餅をもとむるには、ついに、いまだ相逢せず、未拈出なり。
一時、現なりといえども、一時、不現なり。
しかあれども、老、少の相にあらず、去来の跡にあらざるなり。
しかある這頭に、画餅、国土あらわれ、成立するなり。
不、充、飢というは、飢は、十二時、使にあらざれども、画餅に相見する便宜あらず。
画餅を喫著するに、ついに飢をやむる功なし。
飢に相待せらるる餅なし。

餅に相待せらるる餅あらざるがゆえに、活計、つたわれず、家風、つたわれず。
飢も、一条、拄杖なり、横担竪担、千変万化なり。
餅も、一身心、現なり、青、黄、赤、白、長短、方、円なり。
いま、山水を画するには、青、緑、丹、雘をもちい、奇巌怪石をもちい、七宝、四宝をもちいる。
餅を画する経営も、また、かくのごとし。
人を画するには、四大、五蘊をもちいる。
仏を画するには、泥龕、土塊をもちいるのみにあらず、三十二相をもちいる、一茎草をもちいる、三祇、百劫の熏修をもちいる。
かくのごとくして、一軸の画仏を図しきたれるゆえに、一切諸仏は、みな、画仏なり。
一切画仏は、みな、諸仏なり。
画仏と画餅と、検点すべし。
いずれが石烏亀、いずれが鉄拄杖なる？
いずれが色法、いずれが心法なる？
と審細に功夫、参究( or 参学)すべきなり。
恁麼、功夫するとき、生死、去来は、ことごとく、画図なり。
無上菩提、すなわち、画図なり。
おおよそ、法界、虚空、いずれも画図にあらざるなし。

古仏、言、
道成、白雪、千扁、去。
画得、青山、数軸、来。

これ、大悟、話なり。
弁道、功夫の現成せし道底なり。
しかあれば、得道の正当恁麼時は、青山、白雪を数軸となづく、画図しきたれるなり。
一動一静、しかしながら、画図にあらざるなし。
われらが、いまの功夫、ただ画より、えたるなり。
十号、三明、これ、一軸の画なり。
根、力、覚、道、これ、一軸の画なり。
もし画は実にあらずといわば、万法、みな、実にあらず。
万法、みな、実にあらずば、仏法も実にあらず。
仏法もし実なるには、画餅、すなわち、実なるべし。

雲門、匡真大師、ちなみに、僧、とう、
いかにあらんか、これ、超仏越祖之談？
師、いわく、
糊餅。

この道取、しずかに功夫すべし。
糊餅、すでに現成するには、超仏越祖の談を説著する祖師あり、聞著せざる鉄漢あり、聴得する学人あるべし、現成する道著あり。
いま、糊餅の展事、投機、かならず、これ、画餅の二枚、三枚なり。
超仏越祖の談あり。
入仏入魔の分あり。

先師、道、
修竹、芭蕉、入、画図。

この道取は、長短を超越せるものの、ともに、画図の参学ある道取なり。
修竹は長竹なり。
陰陽の運なりといえども、陰陽をして運ならしむるに、修竹の年月あり。
その年月、陰陽、はかること、うべからざるなり。
大聖は陰陽を覷見すといえども、大聖、陰陽を測度すること、あたわず。
陰陽、ともに、法、等なり、測度、等なり。
道、等なるがゆえに。
いま、外道、二乗、等の心目にかかわる陰陽にはあらず。
これは、修竹の陰陽なり、修竹の歩暦なり、修竹の世界なり。
修竹の眷属として、十方諸仏あり。
しるべし。
天地乾坤は、修竹の根、茎、枝、葉なり。
このゆえに、天地乾坤をして長久ならしむ。
大海、須弥、尽十方界をして堅牢ならしむ。
拄杖、竹篦をして一老、一不老ならしむ。
芭蕉は、地水火風、空、心、意、識、智慧を根、茎、枝、葉、華、果、光、色とせるゆえに、秋風を帯して秋風にやぶる。
のこる一塵なし、浄潔といいぬべし。
眼裏に筋骨なし。
色裏に膠月离あらず。(「月离」は一文字の漢字として見てください。)

当所の解脱あり。
なお、速疾に拘牽せられざれば、須臾、刹那、等の論におよばず。
この力量を挙して、地水火風を活計ならしめ、心、意識、智を大死ならしむ。
かるがゆえに、この家業に春秋冬夏を調度として受業しきたる。
いま、修竹、芭蕉の全消息、これ、画図なり。
これによりて、竹声を聞著して大悟せんものは、龍、蛇、ともに、画図なるべし。
凡、聖の情量と疑著すべからず。
那竿、得、恁麼長なり。
這竿、得、恁麼短なり。
這竿、得、恁麼長なり。
那竿、得、恁麼短なり。
これ、みな、画図なるがゆえに、長短の図、かならず、相符するなり。
長画あれば、短画なきにあらず。
この道理、あきらかに参究すべし。
ただ、まさに、尽界、尽法は画図なるがゆえに、人法は画より現じ、仏祖は画より成ずるなり。
しかあれば、すなわち、画餅にあらざれば、充、飢の薬なし。
画、飢にあらざれば、人に相逢せず。
画、充にあらざれば、力量あらざるなり。
おおよそ、飢に充し、不飢に充し、飢を充せず、不飢を充せざること、画、飢にあらざれば、不得なり、不道なるなり。
しばらく、這箇は、画餅なることを参学すべし。
この宗旨を参学するとき、いささか転、物。物、転。の功徳を身心に究尽するなり。
この功徳、いまだ現前せざるがごときは、学道の力量、いまだ現成せざるなり。
この功徳を現成せしむる、証、画、現成なり。

正法眼蔵　画餅
爾時、仁治三年壬寅、十一月初五日、在、于、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 全機

諸仏の大道、その究尽するところ、透脱なり、現成なり。
その透脱というは、あるいは、生も生を透脱し、死も死を透脱するなり。
このゆえに、出、生死あり、入、生死あり。
ともに、究尽の大道なり。
捨、生死あり、度、生死あり。
ともに、究尽の大道なり。
現成、これ、生なり。
生、これ、現成なり。
その現成のとき、生の全、現成にあらずということなし、死の全、現成にあらずということなし。
この機関、よく、生ならしめ、よく、死ならしむ。
この機関の現成する正当恁麼時、
かならずしも大にあらず。
かならずしも小にあらず。
遍界にあらず。
局量にあらず。
長遠にあらず。
短促にあらず。
いまの生は、この機関にあり。
この機関は、いまの生にあり。
生は、来にあらず。
生は、去にあらず。
生は、現にあらず。
生は、成にあらざるなり。
しかあれども、
生は、全機、現なり。
死は、全機、現なり。
しるべし。
自己に無量の法あるなかに、生あり、死あるなり。
しずかに思量すべし。
いま、この生、および、生と同生せるところの衆法は、生にともなりとやせん？　生にともならずとやせん？

一時、一法としても、生にともならざることなし。
一事、一心としても、生にともならざるなし。
生というは、たとえば、人の、ふねにのれるときのごとし。
このふねは、われ、帆をつかい、われ、かじをとれり、われ、さおをさすといえども、ふね、われをのせて、ふねのほかに、われなし。
われ、ふねにのりて、このふねをも、ふねならしむ。
この正当恁麼時を功夫、参学すべし。
この正当恁麼時は、舟の、世界にあらざることなし。
天も、水も、岸も、みな、舟の時節となれり。
さらに、舟にあらざる時節と、おなじからず。
このゆえに、生は、わが生ぜしむるなり、われをば、生の、われ、ならしむるなり。
舟にのれるには、身心依正、ともに、舟の機関なり。
尽大地、尽虚空、ともに、舟の機関なり。
生なる、われ、われなる生、それ、かくのごとし。

圜悟禅師、克勤和尚、云、
生、也、全機、現。
死、也、全機、現。

この道取、あきらめ参究すべし。
参究す、というは、生、也、全機、現の道理、はじめ、おわりに、かかわれず。
尽大地、尽虚空なりといえども、生、也、全機、現をあい罣礙せざるのみにあらず、死、也、全機、現をも罣礙せざるなり。
死、也、全機、現のとき、尽大地、尽虚空なりといえども、死、也、全機、現をあい罣礙せざるのみにあらず、生、也、全機、現をも罣礙せざるなり。
このゆえに、
生は、死を罣礙せず。
死は、生を罣礙せざるなり。
尽大地、尽虚空、ともに、生にもあり、死にもあり。
しかあれども、一枚の尽大地、一枚の尽虚空を、生にも全機し、死にも全機するにはあらざるなり。
一にあらざれども、異にあらず。
異にあらざれども、即にあらず。
即にあらざれども、多にあらず。

このゆえに、
生にも、全機、現の衆法あり。
死にも、全機、現の衆法あり。
生にあらず、死にあらざるにも、全機、現あり。
全機、現に、生あり、死あり。
このゆえに、生死の全機は、壮士の臂を屈伸するがごとくにもあるべし。
如、人、夜間、背、手、摸、枕子にてもあるべし。
これに許多の神通、光明ありて現成するなり。
正当現成のときは、現成に全機せらるるによりて、現成よりさきに現成あらざりつると見解するなり。
しかあれども、この現成よりさきは、さきの全機、現なり。
さきの全機、現ありといえども、いまの全機、現を罣礙せざるなり。
このゆえに、しかのごとくの見解、きおい現成するなり。

正法眼蔵　全機
爾時、仁治三年壬寅、十二月十七日、在、雍州、六波羅蜜寺、側、雲州刺史、幕下、示、衆。
同四年癸卯、正月十九日、書写、之。　　　　懐弉

# 都機

諸月の円成すること、前三三のみにあらず、後三三のみにあらず。
円成の諸月なる、前三三のみにあらず、後三三のみにあらず。
このゆえに、

釈迦牟尼仏、言、
仏、真法身、猶、若、虚空。
応、物、現、形、如、水中、月。

いわゆる、如、水中、月の如如は、水、月なるべし、水如、月如、如中、中如なるべし。
相似を如と道取するにあらず。
如は、是なり。
仏、真法身は虚空の猶、若なり。
この虚空は、猶、若の仏、真法身なり。
仏、真法身なるがゆえに、尽地、尽界、尽法、尽現、みずから虚空なり。
現成せる百草、万像の猶、若なる、しかしながら、仏、真法身なり、如、水中、月なり。
月のときは、かならず、夜にあらず。
夜、かならずしも暗にあらず。
ひとえに人間の小量にかかわることなかれ。
日、月なきところにも昼夜あるべし。
日、月は昼夜のためにあらず。
日、月、ともに、如如なるがゆえに、一月、両月にあらず、千月、万月にあらず。
月の自己、たとえ一月、両月の見解を保任すというとも、これは月の見解なり、かならずしも仏道の道取にあらず、仏道の知見にあらず。
しかあれば、昨夜、たとえ月ありというとも、今夜の月は昨月にあらず。
今夜の月は、初中後、ともに、今夜の月なりと参究すべし。
月は月に相嗣するがゆえに、月ありといえども、新旧にあらず。

盤山宝積禅師、云、
心月、孤円。
光、呑、万象。

光、非、照、境。
境、亦、非、存。
光、境、倶、亡。
復、是、何物？

いま、いうところは、仏祖、仏子、かならず、心月あり。
月を心とせるがゆえに。
月にあらざれば、心にあらず。
心にあらざる月なし。
孤円というは、虧闕せざるなり。
両、三にあらざるを万象という。
万象、これ、月光にして、万象にあらず。
このゆえに、光、呑、万象なり。
万象、おのずから月光を呑尽せるがゆえに、光の、光を呑却するを光、呑、万象というなり。
たとえば、月、呑、月なるべし、光、呑、月なるべし。
ここをもって、光、非、照、境。境、亦、非、存。と道取するなり。
得、恁麼なるゆえに、
応、以、仏身、得度者のとき、即、現、仏身、而、為、説、法なり。
応、以、普現色身、得度者のとき、即、現、普現色身、而、為、説、法なり。
これ、月中の転法輪にあらずということなし。
たとえ陰精、陽精の光象するところ、火珠、水珠の所成なりとも、即、現、現成なり。
この心、すなわち、月なり。
この月、おのずから心なり。
仏祖、仏子の、心を究、理、究、事すること、かくのごとし。

古仏、いわく、
一心、一切法。
一切法、一心。

しかあれば、
心は、一切法なり。
一切法は、心なり。
心は月なるがゆえに、月は月なるべし。
心なる一切法、これ、ことごとく月なるがゆえに、遍界は、遍月なり。

通身、ことごとく通月なり。
たとえ直、須、万年の前後三三、いずれが月にあらざらん？
いまの身心依正なる日面仏、月面仏、おなじく、月中なるべし。
生死去来、ともに、月にあり。
尽十方界は、月中の上下左右なるべし。
いまの日用、すなわち、月中の明明、百草頭なり、月中の明明、祖師心なり。

舒州、投子山、慈済大師、因、僧、問、
月、未円時、如何？
師、云、
呑却、三箇、四箇。
僧、曰、
円後、如何？
師、云、
吐却、七箇、八箇。

いま、参究するところは、未円なり、円後なり、ともに、それ、月の造次なり。
月に三箇、四箇あるなかに、未円の一枚あり。
月に七箇、八箇あるなかに、円後の一枚あり。
呑却は三箇、四箇なり。
このとき、月、未円時の見成なり。
吐却は七箇、八箇なり。
このとき、円後の見成なり。
月の、月を呑却するに、三箇、四箇なり。
呑却に月ありて現成す。
月は、呑却の見成なり。
月の、月を吐却するに、七箇、八箇あり。
吐却に月ありて現成す。
月は、吐却の現成なり。
このゆえに、呑却尽なり、吐却尽なり。
尽地、尽天、吐却なり、蓋天、蓋地、呑却なり。
呑、自、呑、他すべし、吐、自、吐、他すべし。

釈迦牟尼仏、告、金剛蔵菩薩、言、
譬、如、動、目、能、揺、湛水。

又、如、定、眼、猶、回転、火。
雲、駛、月、運。
舟、行、岸、移。
亦復、如是。

いま、仏、演説の雲、駛、月、運。舟、行、岸、移。あきらめ参究すべし。
倉卒に学すべからず。
凡情に順ずべからず。
しかあるに、この仏説を仏説のごとく見聞するもの、まれなり。
もし、よく、仏説のごとく学習する、というは、
円覚、かならずしも身心にあらず、菩提、涅槃にあらず。
菩提、涅槃、かならずしも円覚にあらず、身心にあらざるなり。
いま、如来、道の雲、駛、月、運。舟、行、岸、移。は、
雲、駛のとき、月、運なり。
舟、行のとき、岸、移なり。
いう宗旨は、
雲と月と、同時同道して同歩同運すること、始終にあらず、前後にあらず。
舟と岸と、同時同道して同歩同運すること、起止にあらず、流転にあらず。
たとえ人の行を学すとも、
人の行は、起止にあらず。
起止の行は、人にあらざるなり。
起止を挙揚して人の行に比量することなかれ。
雲の駛も、月の運も、舟の行も、岸の移も、みな、かくのごとし。
おろかに小量の見に局量することなかれ。
雲の駛は、東西南北をとわず、月の運は、昼夜、古今に休息なき宗旨わすれざるべし。
舟の行、および、岸の移、ともに、三世にかかわれず、よく、三世を使用するものなり。
このゆえに、直、至、如今、飽、不飢なり。
しかあるを、愚人、おもわくは、
雲の、はしるによりて、うごかざる月をうごくとみる。
舟の、ゆくによりて、うつらざる岸をうつるとみゆる。
と見解せり。
もし愚人のいうがごとくならんは、いかでか如来の道ならん？
仏法の宗旨、いまだ人、天の小量にあらず。
ただ不可量なりといえども、随、機の修行あるのみなり。

だれが舟、岸を再三、撈漉せざらん？
だれが雲、月を急著眼看せざらん？
しるべし。
如来、道は、
雲を什麼法に譬せず、
月を什麼法に譬せず、
舟を什麼法に譬せず、
岸を什麼法に譬せざる道理、しずかに功夫、参究すべきなり。
月の一歩は、如来の円覚なり。
如来の円覚は、月の運為なり。
動止にあらず。
進退にあらず。
すでに月、運は譬喩にあらざれば、孤円の性、相なり。
しるべし。
月の運度は、たとえ駛なりとも、初中後にあらざるなり。
このゆえに、第一月、第二月あるなり。
第一、第二、おなじく、これ、月なり。
正、好、修行、これ、月なり。
正、好、供養、これ、月なり。
払、袖、便、行、これ、月なり。
円、尖は去、来の輪転にあらざるなり。
去、来、輪転を使用し、使用せず、放行し、把定し、逞、風流するがゆえに、
かくのごとくの諸月なるなり。

正法眼蔵　都機(つき)
仁治癸卯、端月六日、書、于、観音導利興聖宝林寺。
　　　　沙門　道元

# 空華

高祖、道、
一華、開、五葉、結、果、自然、成。

この華開の時節、および、光明、色、相を参学すべし。
一華の重は、五葉なり。
五葉の開は、一華なり。
一華の道理の通ずるところ、吾、本、来、此土、伝、法、救、迷情なり。
光、色の尋所は、この参学なるべきなり。
結、果、任、爾、結、果なり。
自然、成をいう。
自然、成というは、修因感果なり。
公界の因あり、公界の果あり。
この公界の因果を修し、公界の因果を感ずるなり。
自は、己なり。
己は、必定、これ爾なり。
四大、五蘊をいう。
使得、無位真人のゆえに、われにあらず、だれにあらず。
このゆえに、不必なるを自というなり。
然は、聴許なり。
自然、成、すなわち、華開、結、果の時節なり、伝、法、救、迷の時節なり。
たとえば、優鉢羅華の開敷の時、所は、火裏、火時なるがごとし。
鑽火、焔火、みな、優鉢羅華の開敷所なり、開敷時なり。
もし優鉢羅華の時、所にあらざれば、一星火の出生するなし、一星火の活計なきなり。
しるべし。
一星火に百、千朶の優鉢羅華ありて、空に開敷し、地に開敷するなり。
過去に開敷し、現在に開敷するなり。
火の現時、現所を見聞するは、優鉢羅華を見聞するなり。
優鉢羅華の時、所をすごさず見聞すべきなり。

古先、云、
優鉢羅華、火裏、開。

しかあれば、優鉢羅華は、かならず、火裏に開敷するなり。
火裏をしらんとおもわば、優鉢羅華、開敷のところなり。
人見、天見を執して、火裏をならわざるべからず。
疑著せんことは、水中に蓮華の生ぜるも疑著しつべし。
枝条に諸華あるをも疑著しつべし。
また、疑著すべくば、器世間の安立も疑著しつべし。
しかあれども、疑著せず。
仏祖にあらざれば、華開世界起をしらず。
華開というは、前三三後三三なり。
この員数を具足せんために、森羅をあつめて、いよよかにせるなり。
この道理を到来せしめて、春、秋をはかりしるべし。
ただ春、秋に華、果あるにあらず。
有時、かならず、華、果あるなり。
華、果、ともに、時節を保任せり。
時節、ともに、華、果を保任せり。
このゆえに、
百草、みな、華、果あり。
諸樹、みな、華、果あり。
金、銀、銅、鉄、珊瑚、頗梨樹、等、みな、華、果あり。
地水火風空樹、みな、華、果あり。
人樹に華あり。
人華に華あり。
枯木に華あり。
かくのごとくあるなかに、世尊、道、虚空華あり。
しかあるを、少聞少見のともがら、空華の彩、光、葉、華、いかなるとしらず、わずかに空華と聞取するのみなり。
しるべし。
仏道に空華の談あり。
外道は、空華の談をしらず。
いわんや、覚了せんや？
ただし、諸仏、諸祖ひとり、空華、地華の開、落をしり、世界華、等の開、落をしれり。
空華、地華、世界華、等の、経典なりとしれり。
これ、学仏の規矩なり。

仏祖の所乗は空華なるがゆえに、仏世界、および、諸仏の法、すなわち、これ、空華なり。
しかあるに、如来、道の瞖眼、所見は空華とあるを伝聞する凡愚おもわくは、瞖眼というは、衆生の顛倒のまなこをいう。
病眼、すでに顛倒なるゆえに、浄虚空に空華を見聞するなり。
と消息す。
この理致を執するによりて、三界、六道、有仏、無仏、みな、あらざるをありと妄見する。
とおもえり。
この迷妄の眼瞖もし、やみなば、この空華、みゆべからず。
このゆえに、空、本、無、華と道取する。
と活計するなり。
あわれむべし。
かくのごとくのやから、如来、道の空華の時節、始終をしらず。
諸仏、道の瞖眼、空華の道理、いまだ凡夫、外道の所見にあらざるなり。
諸仏、如来、この空華を修行して衣座室をうるなり、得道、得果するなり。
拈華し瞬目する、みな、瞖眼、空華の、現成する公案なり。
正法眼蔵、涅槃妙心、いまに正伝して断絶せざるを瞖眼、空華というなり。
菩提、涅槃、法身、自性、等は、空華の開、五葉の両、三葉なり。

釈迦牟尼仏、言、
亦、如、瞖人、見、空中華。
瞖病、若、除、華、於、空、滅。

この道著あきらむる学者いまだあらず。
空をしらざるがゆえに、空華をしらず。
空華をしらざるがゆえに、瞖人をしらず、瞖人をみず、瞖人にあわず、瞖人ならざるなり。
瞖人と相見して、空華をもしり、空華をもみるべし。
空華をみてのちに、華、於、空、滅をもみるべきなり。
ひとたび空華やみなば、さらにあるべからず、とおもうは、小乗の見解なり。
空華みえざらんときは、なににてあるべきぞ？
ただ空華は所捨となるべし、とのみしりて、空華ののちの大事をしらず、空華の種熟脱をしらず。
いま凡夫の学者、おおくは、
陽気のすめるところ、これ、空ならん、とおもい、

日月星辰のかかれるところを空ならん、とおもえるによりて、
仮令すらくは、空華といわんは、この清気のなかに浮雲のごとくして飛、華の風にふかれて東西し、および、昇降するがごとくなる彩色のいできたらんずるを空華といわんずる、とおもえり。
能造、所造の四大、あわせて、器世間の諸法、ならびに、本覚、本性、等を空華というとは、ことに、しらざるなり。
また、諸法によりて能造の四大、等ありとしらず。
諸法によりて器世間は住、法位なりとしらず。
器世間によりて諸法あり、とばかり知見するなり。
眼、瞖によりて空華あり、とのみ覚了して、空華によりて眼、瞖あらしむる道理を覚了せざるなり。
しるべし。
仏道の瞖人というは、
本覚人なり。
妙覚人なり。
諸仏人なり。
三界人なり。
仏向上人なり。
おろかに瞖を妄法なりとして、このほかに真法あり、と学することなかれ。
しかあらんは、小量の見なり。
華華もし妄法ならんば、これを妄法と邪執する能作、所作、みな、妄法なるべし。
ともに、妄法ならんがごときは、道理の成立すべきなし。
成立する道理なくば、瞖華の妄法なること、しかあるべからざるなり。
悟の瞖なるには、悟の衆法、ともに、瞖荘厳の法なり。
迷の瞖なるには、迷の衆法、ともに、瞖荘厳の法なり。
しばらく、道取すべし。
瞖眼、平等なれば、空華、平等なり。
瞖眼、無生なれば、空華、無生なり。
諸法実相なれば、瞖眼、実相なり。
過、現、未( or 過、現、来)を論ずべからず。
初中後にかかわれず( or かかわらず)。
生、滅に罣礙せざるゆえに、よく、生、滅をして生、滅せしむるなり。
空中に生じ、空中に滅す。
瞖中に生じ、瞖中に滅す。

華中に生じ、華中に滅す。
乃至、諸余の時、所も、またまた、かくのごとし。
空華を学せんこと、まさに、衆品あるべし。
瞖眼の所見あり。
明眼の所見あり。
仏眼の所見あり。
祖眼の所見あり。
道眼の所見あり。
瞎眼の所見あり。
三千年の所見あり。
八百年の所見あり。
百劫の所見あり。
無量劫の所見あり。
これら、ともに、みな、空華をみるといえども、空、すでに品品なり、華、また、重重なり。
まさに、しるべし。
空は一草なり。
この空、かならず、華さく。百草に華さくがごとし。
この道理を道取するとして、如来、道は、空、本、無、華と道取するなり。
本、無、華なりといえども、今、有、華なることは、桃、李も、かくのごとし、梅、柳も、かくのごとし。
梅、昨、無、華。梅、春、有、華。と道取せんがごとし。
しかあれども、時節到来すれば、すなわち、華さく華時なるべし、華到来なるべし。
この華到来の正当恁麼時、みだりなること、いまだあらず。
梅、柳の華は、かならず、梅、柳にさく。
華をみて梅、柳をしる。
梅、柳をみて華をわきまう。
桃、李の華、いまだ梅、柳にさくことなし。
梅、柳の華は、梅、柳にさき、桃、李の華は、桃、李にさくなり。
空華の、空にさくも、またまた、かくのごとし。
さらに余草にさかず、余樹にさかざるなり。
空華の諸色をみて、空果の無窮なるを測量するなり。
空華の開、落をみて、空華の春、秋を学すべきなり。
空華の春と余華の春と、ひとしかるべきなり。

空華の、いろいろなるがごとく、春時も、おおかるべし。
このゆえに、古今の春、秋あるなり。
空華は、実にあらず、余華は、これ、実なり、と学するは、仏教を見聞せざるものなり。
空、本、無、華の説をききて、もとより、なかりつる空華の、いま、ある、と学するは、短慮少見なり。
進歩して、遠慮あるべし。

祖師、いわく、
華、亦、不曾生。

この宗旨の現成、たとえば、華、亦、不曾生。華、亦、不曾滅。なり。
華、亦、不曾華なり。
空、亦、不曾空の道理なり。
華時の前後を胡乱して、有無の戯論あるべからず。
華は、かならず、諸色にそめたるがごとし。
諸色、かならずしも華にかぎらず。
諸時、また、青、黄、赤、白、等のいろあるなり。
春は、華をひく。
華は、春をひくものなり。

張拙秀才は、石霜の俗弟子なり。
悟道の頌をつくるに、いわく、
光明、寂、照、遍、河沙。

この光明、あらたに、僧堂、仏殿、廚庫、山門を現成せり。
遍、河沙は、光明、現成なり、現成、光明なり。

凡聖含霊、共、我家。

凡夫、賢、聖、なきにあらず。
これによりて凡夫、賢、聖を謗ずることなかれ。

一念、不生、全体、現。

念念一一なり。
これは、かならず、不生なり。

これ、全体、全、現なり。
このゆえに、一念、不生と道取す。

六根、纔動、被、雲、遮。

六根は、たとえ眼耳鼻舌身意なりとも、かならずしも二三にあらず、前後三三なるべし。
動は、如、須弥山なり、如、大地なり、如、六根なり、如、纔動なり。
動、すでに如、須弥山なるがゆえに、不動、また、如、須弥山なり。
たとえば、雲をなし、水をなすなり。

断除、煩悩、重増、病。

従来、やまう、なきにあらず。
仏病祖病あり。
いまの智断は、やまうをかさね、やまうをます。
断除の正当恁麼時、かならず、それ、煩悩なり、同時なり、不同時なり。
煩悩、かならず、断除の法を帯せるなり。

趣向、真如、亦、是、邪。

真如を背する、これ、邪なり。
真如に向する、これ、邪なり。
真如は、向背なり。
向背の各各に、これ、真如なり。
だれが、しらん？　この邪の亦、是、真如なることを。

随順、世縁、無、罣礙。

世縁と世縁と随順し、随順と随順と世縁なり。
これを無罣礙という。
罣礙、不罣礙は、被、眼、礙に慣習すべきなり。

涅槃、生死、是、空華。

涅槃というは、阿耨多羅三藐三菩提なり。
仏祖、および、仏祖の弟子の、所住、これなり。

生死は、真実人体なり。
この涅槃、生死は、その法なりといえども、これ、空華なり。
空華の根、茎、枝、葉、華、果、光、色、ともに、空華の華開なり。
空華、かならず、空果をむすぶ、空種をくだすなり。
いま、見聞する三界は、空華の五葉、開なるゆえに、不如、三界、見、於、三界なり。
この諸法、実相なり。
この諸法、華相なり。
乃至、不測の諸法、ともに、空華、空果なり、梅、柳、桃、李とひとしきなり、と参学すべし。

大宋国、福州、芙蓉山、霊訓禅師、初、参、帰宗寺、至真禅師、而、問、
如何、是、仏？
帰宗、云、
我、向、汝、道、汝、還、信、否……。
師、曰、
和尚、誠言、何、敢、不信？
帰宗、云、
即、汝、便、是。
師、曰、
如何、保任？
帰宗、云、
一瞖、在、眼、空華、乱墜。

いま、帰宗、道の一瞖、在、眼、空華、乱墜は、保任、仏の道取なり。
しかあれば、しるべし。
瞖華の乱墜は、諸仏の現成なり。
眼空の華、果は、諸仏の保任なり。
瞖をもって、眼を現成せしむ、眼中に空華を現成し、空華中に眼を現成せり。
空華、在、眼、一瞖、乱墜。
一眼、在、空、衆瞖、乱墜。なるべし。
ここをもって、
瞖、也、全機、現。
眼、也、全機、現。
空、也、全機、現。
華、也、全機、現。なり。

乱墜は、千眼なり、通身眼なり。
おおよそ、一眼の在時、在所、かならず、空華あり、眼華あるなり。
眼華を空華とはいう。
眼華の道取、かならず、開明なり。

このゆえに、
瑯琊山、広照大師、云、
奇、哉、十方仏。
元、是、眼中華。
欲、識、眼中華、元、是、十方仏。
欲、識、十方仏、不是、眼中華。
欲、識、眼中華、不是、十方仏。
於、此、明得、過、在、十方仏。
若、未明得、声聞、作、舞、独覚、臨、粧。

しるべし。
十方仏の、実ならざるにあらず。
もと、これ、眼中の華なり。
十方諸仏の住、位せるところは、眼中なり。
眼中にあらざれば、諸仏の住所にあらず。
眼中華は、無にあらず、有にあらず、空にあらず、実にあらず、おのずから、これ、十方仏なり。
いま、ひとえに十方諸仏と欲、識すれば、眼中華にあらず。
ひとえに眼中華と欲、識すれば、十方諸仏にあらざるがごとし。
かくのごとくなるゆえに、明得、未明得、ともに、眼中華なり、十方仏なり。
欲、識、および、不是、すなわち、現成の奇、哉なり、大奇なり。
仏仏、祖祖の道取する、空華、地華の宗旨、それ、恁麼の逞、風流なり。
空華の名字は、経師、論師もなお聞及すとも、地華の命脈は、仏祖にあらざれば見聞の因縁あらざるなり。
地華の命脈を知及せる仏祖の道取あり。

大宋国、石門山の慧徹禅師は、梁山下の尊宿なり。
ちなみに、僧ありて、とう、
如何、是、山中宝？

この問取の宗旨は、たとえば、如何、是、仏？　と問取するにおなじ、如何、是、道？　と問取するがごとくなり。

師、云、
空華、従、地、発。
盍国( or 蓋国)、買、無、門。

この道取、ひとえに自余の道取に準的すべからず。
よのつねの諸方は、空華の空華を論ずるには、於、空に生じて、さらに於、空に滅するとのみ道取す。
従、空しれる、なお、いまだあらず。
いわんや、従、地としらんや？
ただひとり石門のみしれり。
従、地というは、初中後、ついに、従、地なり。
発は、開なり。
この正当恁麼のとき、従、尽大地、発なり、従、尽大地、開なり。
盍国( or 蓋国)、買、無、門は、盍国( or 蓋国)、買は、なきにあらず、買、無、門なり。
従、地、発の空華あり、従、華、開の尽地あり。
しかあれば、しるべし。
空華は、地、空、ともに、開発せしむる宗旨あり。

正法眼蔵　空華
于、時、寛元元年癸卯、三月十日、在、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 古仏心

祖宗の嗣法するところ、七仏より曹谿にいたるまで四十祖なり。
曹谿より七仏にいたるまで四十仏なり。
七仏、ともに、向上、向下の功徳あるがゆえに、曹谿にいたり、七仏にいたる。
曹谿に向上、向下の功徳あるがゆえに、七仏より正伝し、曹谿より正伝し、後仏に正伝す。
ただ前後のみにあらず。
釈迦牟尼仏のとき、十方諸仏あり。
青原のとき、南嶽あり。
南嶽のとき、青原あり。
乃至、石頭のとき、江西あり。
あい罣礙せざるは、不礙にあらざるべし。
かくのごとくの功徳あること参究すべきなり。
向来の四十位の仏祖、ともに、これ、古仏なりといえども、
心あり。
身あり。
光明あり。
国土あり。
過去、久、矣あり。
未曾過去あり。
たとえ未曾過去なりとも、たとえ過去、久、矣なりとも、おなじく、これ、古仏の功徳なるべし。
古仏の道を参学するは、古仏の道を証するなり。
代代の古仏なり。
いわゆる、古仏は、新古の古に一斉なりといえども、さらに古今を超出せり、古今に正直なり。

先師、曰、
与、宏智古仏、相見。

はかりしりぬ、天童の屋裏に古仏あり、古仏の屋裏に天童あることを。

圜悟禅師、曰、

稽首、曹谿真古仏。

しるべし。
釈迦牟尼仏より第三十三世は、これ、古仏なり、と稽首すべきなり。
圜悟禅師に古仏の荘厳、光明あるゆえに、古仏と相見しきたるに、恁麼の礼拝あり。
しかあれば、すなわち、曹谿の頭正尾正を草料して、古仏は、かくのごとくの巴鼻なることをしるべきなり。
この巴鼻あるは、これ、古仏なり。

疎山、曰、
大庾嶺頭、有、古仏。
放、光、射、到、此間。

しるべし、疎山、すでに古仏と相見す、ということを。
ほかに参尋すべからず。
古仏の在所は、大庾嶺頭なり。
古仏にあらざる自己は、古仏の出所をしるべからず。
古仏の在所をしるは、古仏なるべし。

雪峰、曰、
趙州、古仏。

しるべし。
趙州、たとえ古仏なりとも、雪峰もし古仏の力量を分奉せられざらんは、古仏に奉覲する骨法を了達しがたからん。
いまの行履は、古仏の加被によりて、古仏に参学するには、不答話の功夫あり。
いわゆる、雪峰老漢、大丈夫なり。
古仏の家風、および、古仏の威儀は、古仏にあらざるには、相似ならず、一等ならざるなり。
しかあれば、趙州の初中後善を参学して、古仏の寿量を参学すべし。

西京、光宅寺、大証国師は、曹谿の法嗣なり。
人帝、天帝、おなじく、恭敬、尊重するところなり。
まことに、神丹国に、見聞まれなるところなり。

四代の帝師なるのみにあらず、皇帝てずから、みずから車をひきて参内せしむ。
いわんや、また、帝釈宮の請をえて、はるかに上、天す。
諸天衆のなかにして、帝釈のために説法す。

国師、因、僧、問、
如何、是、古仏心？

師、云、
牆壁、瓦礫。

いわゆる、問所は、這頭、得、恁麼といい、那頭、得、恁麼というなり。
この道得を挙して問所とせるなり。
この問所、ひろく古今の道得となれり。
このゆえに、
華開の万木百草、これ、古仏の道得なり、古仏の問所なり。
世界起の九山八海、これ、古仏の日面、月面なり、古仏の皮肉骨髄なり。
さらに、また、
古心の行仏なるあるべし。
古心の証仏なるあるべし。
古心の作仏なるあるべし。
仏古の為、心なるあるべし。
古心というは、心、古なるがゆえなり。
心仏は、かならず、古なるべきがゆえに、古心は椅子、竹、木なり。
尽大地、覓、一箇、会仏法人、不可得なり。
和尚、喚、這箇、作、甚麼？　なり。
いまの時節、因縁、および、塵刹、虚空、ともに、古心にあらずということなし。
古心を保任する、古仏を保任する、一面目にして両頭、保任なり、両頭、画図なり。

師、いわく、
牆壁、瓦礫。

いわゆる宗旨は、
牆壁、瓦礫にむかいて道取する一進あり、牆壁、瓦礫なり。

道出する一途あり。
牆壁、瓦礫の、牆壁、瓦礫の許裏に道著する一退あり。
これらの道取の現成するところの円成、十成に、
千仭、万仭の壁、立あり。
帀地、帀天の牆、立あり。
一片、半片の瓦、蓋あり。
乃大乃小の礫尖あり。
かくのごとくあるは、ただ心のみにあらず、すなわち、これ、身なり、乃至、依正なるべし。
しかあれば、作麼生、是、牆壁、瓦礫？　と問取すべし、道取すべし。
答話せんには、古仏心と答取すべし。
かくのごとく保任して、さらに参究すべし。
いわゆる、牆壁は、いかなるべきぞ？
なにをか牆壁という？
いま、いかなる形段をか具足せる？　と審細に参究すべし。
造作より牆壁を出現せしむるか？
牆壁より造作を出現せしむるか？
造作か？　造作にあらざるか？
有情なりとやせん？　無情なりや？
現前すや？　不現前なりや？
かくのごとく功夫、参学して、たとえ天上、人間にもあれ、此土、他界の出現なりとも、古仏心は牆壁、瓦礫なり。
さらに一塵の出頭して染汚する、いまだあらざるなり。

漸源仲興大師、因、僧、問、
如何、是、古仏心？
師、云、
世界、崩壊。
僧、曰、
為、甚麼、世界、崩壊？
師、云、
寧、無、我身。

いわゆる、世界は、十方、みな、仏世界なり。
非仏世界、いまだあらざるなり。
崩壊の形段は、この尽十方界に参学すべし。

自己に学することなかれ。
自己に参学せざるゆえに、崩壊の当恁麼時は、一条、両条、三、四、五条なるがゆえに、無尽条なり。
かの条条、それ、寧、無、我身なり。
我身は、寧、無なり。
而今を自惜して、我身を古仏心ならしめざることなかれ。
まことに、
七仏以前に、古仏心、壁、竪す。
七仏以後に、古仏心、才、生す。
諸仏以前に、古仏心、華開す。
諸仏以後に、古仏心、結果す。
古仏心以前に、古仏心、脱落なり。

正法眼蔵　古仏心
爾時、寛元元年癸卯、四月二十九日、在、六波羅蜜寺、示、衆。

# 菩提薩埵四摂法

一、者、布施。
二、者、愛語。
三、者、利行。
四、者、同事。

その布施というは、不貪なり。
不貪というは、むさぼらざるなり。
むさぼらず、というは、よのなかにいう、へつらわざるなり。
たとえ四州を統領すれども、正道の教化をほどこすには、かならず、不貪なるのみなり。
たとえば、すつる、たからをしらぬ人にほどこさんがごとし。
遠山のはなを如来に供し、前生のたからを衆生にほどこさん。
法におきても、物におきても、面面に布施に相応する功徳を本、具せり。
我物にあらざれども、布施をさえざる道理あり。
そのものの、かろきをきらわず。
その功の実なるべきなり。
道を道にまかするとき、得道す。
得道のときは、道、かならず、道にまかせられゆくなり。
財のたからにまかせらるるとき、財、かならず、布施となるなり。
自を自にほどこし、他を他にほどこすなり。
この布施の因縁力、とおく天上、人間までも通じ、証果の賢聖までも通ずるなり。
そのゆえは、布施の能受となりて、すでに縁をむすぶがゆえに。
ほとけの、のたまわく、
布施する人の、衆会のなかにきたるときは、まず、その人を諸人、のぞみみる。

しるべし、ひそかに、そのこころの通ずるなり、と。
しかあれば、すなわち、一句、一偈の法をも布施すべし。
此生、他生の善種となる。
一銭、一草の財をも布施すべし。
此世、他世の善根をきざす。
法も、たからなるべし。

財も、法なるべし。
願楽によるべきなり。
まことに、すなわち、
ひげをほどこしては、もののこころをととのえ、
いさごを供しては、王位をうるなり。
ただ、かれが報謝をむさぼらず、みずからがちからをわかつなり。
舟をおき、橋をわたすも、布施の檀度なり。
もし、よく、布施を学するときは、受身、捨身、ともに、これ、布施なり。
治生産業、もとより布施にあらざることなし。
はなを風にまかせ、鳥をときにまかするも、布施の功業なるべし。
阿育大王の半菴羅果、よく、数百の僧衆に供養せし、広大の供養なりと証明する道理、よくよく能受の人も学すべし。
身力をはげますのみにあらず、便宜をすごさざるべし。
まことに、みずからに布施の功徳の、本、具なるゆえに、いまの、みずからは、えたるなり。
ほとけの、のたまわく、
於、其自身、尚、可、受用。
何況、能、与、父母、妻子？

しかあれば、しりぬ。
みずから、もちいるも、布施の一分なり。
父母、妻子にあたうるも、布施なるべし。
もし、よく、布施に一塵を捨せんときは、みずからが所作なりというとも、しずかに随喜すべきなり。
諸仏のひとつの功徳をすでに正伝し、つくれるがゆえに。
菩薩の一法をはじめて修行するがゆえに。
転じがたきは、衆生のこころなり。
一財をきざして衆生の心地を転じはじむるより、得道にいたるまでも、転ぜん、とおもうなり。
そのはじめ、かならず、布施をもってすべきなり。
かるがゆえに、六波羅蜜のはじめに檀波羅蜜あるなり。
心の大小は、はかるべからず。
物の大小も、はかるべからざれども、心、転、物のときあり、物、転、心の布施あるなり。

愛語というは、衆生をみるに、まず、慈愛の心をおこし、顧愛の言語をほどこすなり。
おおよそ、暴悪の言語なきなり。
世俗には、安否をとう礼儀あり。
仏道には、珍重のことばあり。
不審の孝行あり。
慈念、衆生、猶、如、赤子のおもいをたくわえて言語するは、愛語なり。
徳あるは、ほむべし。
徳なきは、あわれむべし。
愛語をこのむよりは、ようやく愛語を増長するなり。
しかあれば、ひごろ、しられず、みえざる愛語も現前するなり。
現在の身命の存せらんあいだ、このんで愛語すべし。
世世、生生にも、不退転ならん。
怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること、愛語を根本とするなり。
むかいて愛語をきくは、おもてをよろこばしめ、こころをたのしくす。
むかわずして愛語をきくは、肝に銘じ、魂に銘ず。
しるべし。
愛語は、愛心より、おこる。
愛心は、慈心を種子とせり。
愛語、よく、回天のちからあることを学すべきなり。
ただ能を賞するのみにあらず。

利行というは、貴賤の衆生におきて、利益の善巧をめぐらすなり。
たとえば、遠近の前途をまもりて、利他の方便をいとなむ。
窮亀をあわれみ、病雀をやしなうし、窮亀をみ、病雀をみしとき、かれが報謝をもとめず、ただ、ひとえに利行に、もよおさるるなり。
愚人、おもわくは、利他をさきとせば、みずからが利、はぶかれぬべし、と。
しかには、あらざるなり。
利行は、一法なり。
あまねく自他を利するなり。
むかしの人、ひとたび沐浴するに、みたび、かみをゆい、ひとたび飡食するに、みたび、はきいだせしは、ひとえに他を利せし、こころなり。
ひとのくにの民なれば、おしえざらんとには、あらざりき。
しかあれば、怨、親、ひとしく、利すべし。
自他、おなじく、利するなり。

もし、このこころをうれば、草木、風水にも利行の、おのれずから不退不転なる道理、まさに、利行せらるるなり。
ひとえに愚をすくわん、と、いとなむべし。

同事というは、不違なり。
自にも、不違なり。
他にも、不違なり。
たとえば、人間の如来は、人間に同ぜるがごとし。
人界に同ずるをもって、しりぬ、同、余界なるべし。
同事をしるとき、自他一如なり。
かの琴、詩、酒は、人をともとし、天をともとし、神をともとす。
人は、琴、詩、酒をともとす。
琴、詩、酒は、琴、詩、酒をともとし、
人は、人をともとし、
天は、天をともとし、
神は、神をともとする、ことわり、あり。
これ、同事の習学なり。
たとえば、事というは、儀なり、威なり、態なり。
他をして自に同ぜしめてのちに、自をして他に同ぜしむる道理あるべし。
自他は、ときにしたがうて、無窮なり。

管子、云、
海、不辞、水。
故、能、成、其大。
山、不辞、土。
故、能、成、其高。
明主、不厭、人。
故、能、成、其衆。

しるべし。
海の、水を辞せざるは、同事なり。
さらに、しるべし。
水の、海を辞せざる徳も具足せるなり。
このゆえに、よく、水、あつまりて、海となり、土、かさなりて、山となるなり。
ひそかに、しりぬ。

海は、海を辞せざるがゆえに、海をなし、おおきなることをなす。
山は、山を辞せざるがゆえに、山をなし、たかきことをなすなり。
明主は、人をいとわざるがゆえに、その衆をなす。
衆とは、国なり。
いわゆる明主は、帝王をいうなるべし。
帝王は、人をいとわざるなり。
人をいとわずといえども、賞罰なきにあらず。
賞罰ありといえども、人をいとうこと、なし。
むかし、すなおなりしときは、国に賞罰なかりき。
かのときの賞罰は、いまと、ひとしからざればなり。
いまも、賞をまたずして、道をもとむる人も、あるべきなり。
愚夫の思慮のおよぶべきにあらず。
明主は、あきらかなるがゆえに、人をいとわず。
人、かならず、国をなし、明主をもとむるこころあれども、明主の明主たる道理をことごとくしること、まれなるゆえに、明主に、いとわれず、とのみ、よろこぶといえども、わが明主をいとわざる、としらず。
このゆえに、明主にも、暗人にも、同事の道理あるがゆえに、同事は薩埵の行願なり。
ただ、まさに、やわらかなる容顔をもって一切にむかうべし。

この四摂、おのおの四摂を具足せるがゆえに、十六摂なるべし。

正法眼蔵　菩提薩埵四摂法
仁治癸卯、端午日、入宋、伝法、沙門、道元、記。

# 葛藤

釈迦牟尼仏の正法眼蔵、無上菩提を証、伝せること、霊山会には、迦葉大士のみなり。
嫡嫡、正証、二十八世、菩提達磨尊者にいたる。
尊者、みずから、震旦国に、祖儀して、正法眼蔵、無上菩提を大祖、正宗普覚大師に付属し、二祖とせり。
第二十八祖、はじめて、震旦国に、祖儀あるを、初祖と称す、第二十九祖を二祖と称するなり。
すなわち、これ、東土の俗なり。
初祖、かつて般若多羅尊者のみもとにして、仏訓道骨、まのあたり、証、伝しきたれり。
根源をもって根源を証取しきたれり。
枝葉の本とせるところなり。
おおよそ、諸聖、ともに、葛藤の根源を截断する参学に趣向すといえども、葛藤をもって葛藤をきるを截断というと参学せず、葛藤をもって葛藤をまつうとしらず。
いかに、いわんや、葛藤をもって葛藤に嗣続することをしらんや？
嗣、法、これ、葛藤としれる、まれなり。
きけるもの、なし。
道著せる、いまだあらず。
証著せる、おおからんや？

先師、古仏、云、
胡蘆、藤種、纏、胡蘆。

この示衆、かつて古今の諸方に見聞せざるところなり。
はじめて先師ひとり、道示せり。
胡蘆、藤の、胡蘆、藤をまつうは、仏祖の、仏祖を参究し、仏祖の、仏祖を証契するなり。
たとえば、これ、以心伝心なり。

第二十八祖、謂、門人、云、
時、将、至、矣。
汝等、盍、言、所得、乎？

時、門人、道副、曰、
如、我今所見、不執、文字、不離、文字、而、為、道用。
祖、云、
汝、得、吾皮。

尼、総持、曰、
如、我今所解、如、慶喜、見、阿閦仏国、一見、更不再見。
祖、云、
汝、得、吾肉。

道育、曰、
四大、本、空。
五陰、非、有。
而、我見所、無、一法、可得。
祖、云、
汝、得、吾骨。

最後、慧可、礼三拝後、依位而立。
祖、云、
汝、得、吾髄。
果、為、二祖、伝法、伝衣。

いま、参学すべし。
初祖、道の汝、得、吾皮肉骨髄は、祖、道なり。
門人四員、ともに、得所あり、聞著あり。
その聞著、ならびに、得所、ともに、跳出、身心の皮肉骨髄なり、脱落、身心の皮肉骨髄なり。
知見、解会の一著子をもって、祖師を見聞すべきにあらざるなり。
能、所、彼此の十現成にあらず。
しかあるを、正伝なきともがら、おもわく、
四子おのおの所解に親、疎あるによりて、祖、道、また、皮肉骨髄の浅、深、不同なり。
皮肉は骨髄よりも疎なり、とおもい、
二祖の見解、すぐれたるによりて、得髄の印をえたり、という。

かくのごとく、いい、いうは、いまだかつて仏祖の参学なく、祖、道の正伝あらざるなり。
しるべし。
祖、道の皮肉骨髄は、浅、深にあらざるなり。
たとえ見解に殊劣ありとも、祖、道は得、吾なるのみなり。
その宗旨は、得、吾髄の為、示、ならびに、得、吾骨の為、示、ともに、為、人、接、人。拈、草、落、草。に足、不足あらず。
たとえば、拈華のごとし。
たとえば、伝衣のごとし。
四員のために道著するところ、はじめより、一等なり。
祖、道は、一等なりといえども、四解、かならずしも一等なるべきにあらず。
四解、たとえ片片なりとも、祖、道は、ただ祖、道なり。
おおよそ、道著と見解と、かならずしも相委なるべからず。
たとえば、祖師の、四員の門人にしめすには、なんじ、わが皮、吾をえたり、と道取するなり。
もし二祖よりのち、百、千人の門人あらんにも、百、千道の説著あるべきなり。
窮尽あるべからず。
門人、ただ四員あるがゆえに、しばらく、皮肉骨髄の四道取ありとも、のこりて、いまだ道取せず、道取すべき道取おおし。
しるべし。
たとえ二祖に為、道せんにも、汝、得、吾皮と道取すべきなり。
たとえ汝、得、吾皮なりとも、二祖として正法眼蔵を伝、付すべきなり。
得、皮、得、髄の殊劣によれるにあらず。
また、道副、道育、総持、等に為、道せんにも、汝、得、吾髄と道取すべきなり。
吾皮なりとも、伝法すべきなり。
祖師の身心は、皮肉骨髄、ともに、祖師なり。
髄は、したしく、皮は、うとき、にあらず。
いま、参学の眼目をそなえたらんに、汝、得、吾皮の印をうるは、祖師をうる参究なり。
通身、皮の祖師あり。
通身、肉の祖師あり。
通身、骨の祖師あり。
通身、髄の祖師あり。

通身、心の祖師あり。
通身、身の祖師あり。
通心、心の祖師あり。
通祖師の祖師あり。
通身、得、吾、汝等の祖師あり。
これらの祖師、ならびに現成して、百、千の門人に為、道せんとき、いまのごとく汝、得、吾皮と説著するなり。
百、千の説著、たとえ皮肉骨髄なりとも、傍観、いたずらに皮肉骨髄の説著と活計すべきなり。
もし祖師の会下に六、七の門人あらば、
汝、得、吾心の道著すべし、
汝、得、吾身の道著すべし、
汝、得、吾仏の道著すべし、
汝、得、吾眼睛の道著すべし、
汝、得、吾証の道著すべし。
いわゆる、汝は、祖なる時節あり、慧可なる時節あり、得の道理を審細に参究すべきなり。
しるべし。
汝、得、吾あるべし。
吾、得、汝あるべし。
得、吾、汝あるべし。
得、汝、吾あるべし。
祖師の身心を参見するに、内外一如なるべからず、渾身は通身なるべからず、といわば、仏祖、現成の国土にあらず。
皮をえたらんは、骨肉髄をえたるなり。
骨肉髄をえたるは、皮肉、面目をえたり。
ただ、これを尽十方界の真実体と暁了するのみならんや？　さらに皮肉骨髄なり。
このゆえに、得、吾衣なり、汝、得法なり。
これによりて、
道著も、跳出の条条なり、師資、同参す。
聞著も、跳出の条条なり、師資、同参す。
師資、同参究は、仏祖の葛藤なり。
仏祖の葛藤は、皮肉骨髄の命脈なり。
拈華瞬目、すなわち、葛藤なり。

破顔微笑、すなわち、皮肉骨髄なり。
さらに参究すべし。
葛藤、種子、すなわち、脱体の力量あるによりて、葛藤を纏、遶する枝、葉、華、果ありて、回互、不回互なるがゆえに、仏祖、現成し、公案、現成するなり。

趙州真際大師、示、衆、云、
迦葉、伝、与、阿難。
且、道、
達磨、伝、与、什麼人？

因、僧、問、
且、如、二祖、得髄、又、作麼生？

師、云、
莫、謗、二祖。

師、又、云、
達磨、也、有、語、
在外者、得、皮。
在裏者、得、骨。
且、道、
更在裏者、得、什麼？

僧、問、
如何、是、得髄底、道理？

師、云、
但、識取、皮。
老僧、這裏、髄、也、不立。

僧、問、
如何、是、髄？
師、云、
与麼、即、皮、也、摸、未著。

しかあれば、しるべし。

皮、也、摸、未著のときは、髄、也、摸、未著なり。
皮を摸、得するは、髄も、うるなり。
与麼、即、皮、也、摸、未著の道理を功夫すべし。
如何、是、得髄底、道理？　と問取するに、但、識取、皮。老僧、這裏、髄、也、不立と道取、現成せり。
識取、皮のところ、髄、也、不立なるを真箇の得髄底の道理とせり。
かるがゆえに、二祖、得髄、又、作麼生？　の問取、現成せり。
迦葉、伝、与、阿難の時節を当、観するに、阿難、蔵、身、於、迦葉なり、迦葉、蔵、身、於、阿難なり。
しかあれども、伝与裏の相見時節には、換、面目、皮肉骨髄の行李をまぬがれざるなり。
これによりて、且、道、達磨、伝、与、什麼人？　としめすなり。
達磨、すでに伝、与するときは、達磨なり。
二祖、すでに得、髄するには、達磨なり。
この道理の参究によりて、仏法、なお、今日にいたるまで、仏法なり。
もし、かくのごとくならざらんは、仏法の、今日にいたるにあらず。
この道理、しずかに功夫、参究して、自、道取すべし、教、他、道取すべし。
在外者、得、皮。在裏者、得、骨。且、道、更在裏者、得、什麼？
いま、いう、外、いま、いう、裏、その宗趣、もっとも端的なるべし。
外を論ずるとき、皮肉骨髄、ともに、外あり。
裏を論ずるとき、皮肉骨髄、ともに、裏あり。
しかあれば、すなわち、四員の達磨、ともに、百、千、万の皮肉骨髄の向上を条条に参究せり。
髄よりも向上あるべからず、と、おもうことなかれ。
さらに三、五枚の向上あるなり。
趙州古仏の、いまの示衆、これ、仏道なり。
自余の臨済、徳山、大潙、雲門、等のおよぶべからざるところ、いまだ夢見せざるところなり。
いわんや、道取あらんや？
近来の杜撰の長老、等、あり、と、だにも、しらざるところなり。
かれらに為、説せば、驚怖すべし。

雪竇、明覚禅師、云、
趙、睦、二州、是、古仏、也。

しかあれば、古仏の道は、仏法の証験なり。

自己の曾道取なり。

雪峰、真覚大師、云、
趙州、古仏。

さきの仏祖も、古仏の讃歎をもって讃歎す。
のちの仏祖も、古仏の讃歎をもって讃歎す。
しりぬ、古今の向上に超越の古仏なりということを。

しかあれば、皮肉骨髄の葛藤する道理は、古仏の示衆する汝、得、吾の標準なり。
この標格を功夫、参究すべきなり。

また、初祖は西帰する、という。
これ、非なりと参学するなり。
宋雲が所見、かならずしも実なるべからず。
宋雲、いかでか祖師の去就をみん？
ただ祖師、帰寂ののち熊耳山に、おさめたてまつりぬる、と、ならい、しるを正学とするなり。

正法眼蔵　葛藤
爾時、寛元元年癸卯、七月七日、在、雍州、宇治郡、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

# 三界唯心

釈迦、大師、道、
三界、唯一心。
心外、無、別法。
心、仏、及、衆生、是三、無、差別。

一句の道著は、一代の挙力なり。
一代の挙力は、尽力の全挙なり。
たとえ強為の為なりとも、云為の為なるべし。
このゆえに、いま、如来、道の三界唯心は、全如来の全現成なり。
全一代は、全一句なり。
三界は、全界なり。
三界は、すなわち、心、というにあらず。
そのゆえは、三界は、いく玲瓏八面も、なお、三界なり。
三界にあらざらんと誤錯すというとも、総不著なり。
内外、中間、初中後際、みな、三界なり。
三界は、三界の所見のごとし。
三界にあらざるものの所見は、三界を見不正なり。
三界には、三界の所見を旧窠とし、三界の所見を新条とす。
旧窠、也、三界見。新条、也、三界見。なり。
このゆえに、

釈迦、大師、道、
不如、三界、見、於、三界。

この所見、すなわち、三界なり。
この三界は、所見のごとくなり。
三界は、本有にあらず。
三界は、今有にあらず。
三界は、新成にあらず。
三界は、因縁生にあらず。
三界は、初中後際にあらず。
出離、三界あり。
今、此三界あり。

これ、
機関の、機関と相見するなり。
葛藤の、葛藤を生長するなり。
今、此三界は、三界の所見なり。
いわゆる、所見は、見、於、三界なり。
見、於、三界は、
見成、三界なり。
三界、見成なり。
見成、公案なり。
よく、三界をして、発心、修行、菩提、涅槃ならしむ。
これ、すなわち、皆、是、我有なり。
このゆえに、

釈迦、大師、道、
今、此三界、皆、是、我有。
其中、衆生、悉、是、吾子。

いま、この三界は、如来の我有なるがゆえに、尽界、みな、三界なり。
三界は、尽界なるがゆえに、今、此は過、現、当来なり。
過、現、当来の現成は、今、此を罣礙せざるなり。
今、此の現成は、過、現、当来を罣礙するなり。
我有は、
尽十方界、真実人体なり。
尽十方界、沙門、一隻眼なり。
衆生は、尽十方界、真実体なり。
一一衆生の、生衆なるゆえに、衆生なり。
悉、是、吾子は、子、也、全機、現の道理なり。
しかあれども、吾子、かならず、身体髪膚を慈父にうけて、毀破せず、虧闕せざるを子、現成とす。
而今は、父前子後にあらず、子先父後にあらず。
父、子、あいならべるにあらざるを吾子の道理というなり。
与授にあらざれども、これをうく。
奪取にあらざれども、これをえたり。
去来の相にあらず。
大小の量にあらず。
老少の論にあらず。

老少を仏祖、老少のごとく保任すべし。
父少子老あり。
父老子少あり。
父老子老あり。
父少子少あり。
父の老を学するは、子にあらず。
子の少をえざらんは、父にあらざらん。
子の老少と、父の老少と、かならず、審細に功夫、参究すべし。
倉卒なるべからず。
父、子、同時に生現する父子あり。
父、子、同時に現滅する父子あり。
父、子、不同時に現生する父子あり。
父、子、不同時に現滅する父子あり。
慈父を罣礙せざれども、吾子と現成せり。
吾子を罣礙せずして、慈父、現成せり。
有心、衆生あり。
無心、衆生あり。
有心、吾子あり。
無心、吾子あり。
かくのごとく、吾子。子、吾。ことごとく釈迦、慈父の令嗣なり。
十方尽界に、あらゆる過、現、当来の諸衆生は、十方尽界の過、現、当の諸仏なり。
諸仏の吾子は、衆生なり。
衆生の慈父は、諸仏なり。
しかあれば、すなわち、
百草の華、果は、諸仏の我有なり。
巌石の大小は、諸仏の我有なり。
安所は、林野なり。
林野は、已、離なり。
しかも、かくのごとくなりというとも、如来、道の宗旨は、吾子の道のみなり。
其父の道、いまだあらざるなり、と参究すべし。

釈迦牟尼仏、道、
諸仏、応化法身、亦、不出、三界。
三界外、無、衆生。

仏、何、所化？
是故、我、言、
三界外、別、有、一衆生界蔵、者、外道、大有経中説。
非、七仏之所説。

あきらかに参究すべし。
諸仏、応化法身は、みな、これ、三界なり。
三界は、無、外なり。
たとえば、
如来の無、外なるがごとし。
牆壁の無、外なるがごとし。
三界の無、外なるがごとく、衆生、無、外なり。
無衆生のところ、仏、何、所化？　なり。
仏、所化は、かならず、衆生なり。
しるべし。
三界外に一衆生界蔵を有せしむるは、外道大有経なり。
七仏経にあらざるなり。
唯心は、
一、二にあらず、三界にあらず。
出、三界にあらず。
無有、錯謬なり。
有、慮知念覚なり。
無、慮知念覚なり。
牆壁、瓦礫なり。
山河大地なり。
心、これ、皮肉骨髄なり。
心、これ、拈華、破顔なり。
有心あり。
無心あり。
有身の心あり。
無身の心あり。
身先の心あり。
身後の心あり。
身を生ずるに、胎卵湿化の種品あり。
心を生ずるに、胎卵湿化の種品あり。
青、黄、赤、白、これ、心なり。

長短、方、円、これ、心なり。
生死去来、これ、心なり。
年月、日時、これ、心なり。
夢幻、空華、これ、心なり。
水沫、泡、焔、これ、心なり。
春華、秋月、これ、心なり。
造次顛沛、これ、心なり。
しかあれども、毀破すべからず。
かるがゆえに、
諸法実相、心なり。
唯仏与仏、心なり。

玄沙院、宗一大師、問、地蔵院、真応大師、云
三界、唯心。
汝、作麼生、会？

真応、指、椅子、曰、
和尚、
喚、遮箇、作、什麼？

大師、云、
椅子。

真応、曰、
和尚、
不会、三界、唯心。

大師、云、
我、喚、遮箇、作、竹、木。
汝、喚、作、什麼？

真応、曰、
桂、亦、喚、作、竹、木。

大師、云、
尽大地、覓、一箇、会仏法人、不可得。

いま、大師の問取する三界、唯心。汝、作麼生、会？　は、作麼生、会？
未、作麼生、会？　おなじく、三界、唯心なり。
このゆえに、未、三界、唯心なるべし。
真応、このゆえに、椅子をさして、いわく、
和尚、喚、遮箇、作、什麼？
しるべし。
汝、作麼生、会？　は、喚、遮箇、作、什麼？　なり。
大師、道の椅子は、
且、道すべし。
これ、会、三界語なりや？　不会、三界語なりや？
三界語なりや？　非三界語なりや？
椅子、道なりや？　大師、道なりや？
かくのごとく試、道、看の、道究( or 参究)すべし。
試、会、看の、会取あり。
試、参、看の、参究あるべし。
真応、いわく、
和尚、不会、三界、唯心。
この道、たとえば、道、趙州するなかの東門、南門なりといえども、さらに西門、北門あるべし。
さらに、東趙州、南趙州あり。
たとえ会、三界、唯心ありとも、さらに、不会、三界、唯心を参究すべきなり。
さらに、また、会、不会にあらざる三界、唯心あり。
大師、道、我、喚、遮箇、作、竹、木。
この道取、かならず、声前句後に光前絶後の節目を参徹すべし。
いわゆる、我、喚、遮箇、作、竹、木、いまの喚、作よりさきは、いかなる喚、作なりとかせん？
従来の八面玲瓏に、初中後、ともに、竹、木なりとやせん？
いまの喚、作、竹、木は、
道、三界、唯心なりとやせん？
不道、三界、唯心なりとやせん？
しるべし。
あしたに三界、唯心を道取するには、たとえ椅子なりとも、たとえ唯心なりとも、たとえ三界なりとも、暮に三界、唯心を道取するには、我、喚、遮箇、作、竹、木と道取せらるるなり。

真応、道の桂、亦、喚、作、竹、木。
しるべし。
師資の対面、道なりというとも、同参の頭正尾正なるべし。
しかありといえども、大師、道の喚、遮箇、作、竹、木と、真応、道の亦、喚、作、竹、木と、同なりや？　不同なりや？　是なりや？　不是なりや？　と参究すべきなり。
大師、云、
尽大地、覓、一箇、会仏法人、不可得。
この道取をも審細に弁肯すべし。
しるべし。
大師も、ただ喚、作、竹、木なり。
真応も、ただ喚、作、竹、木なり。
さらに、いまだ、
三界、唯心を会取せず。
三界、唯心を不会取せず。
三界、唯心を道取せず。
三界、唯心を不道取せず。
しかも、かくのごとくなりといえども、宗一大師に問著すべし。
覓、一箇、会仏法人、不可得は、たとえ道著すとも、
試、道、看。
なにを喚、作してか尽大地とする？

おおよそ、恁麼、参究、功夫すべきなり。

正法眼蔵　三界唯心
爾時、寛元元年癸卯、閏七月初一日、在、越宇、禅師峰頭、示、衆。

# 説心説性

神山僧密禅師、与、洞山、悟本大師、行、次、
悟本大師、指、傍、院、曰、
裏面、有、人、説心説性。

僧密、師伯、曰、
是、誰？

悟本大師、曰、
被、師伯、一問、直、得、去死、十分。

僧密、師伯、曰、
説心説性底、誰？

悟本大師、曰、
死中、得、活。

説心説性は、仏道の大本なり。
これより仏仏、祖祖を現成せしむるなり。
説心説性にあらざれば、
転、妙法輪することなし。
発心、修行することなし。
大地、有情、同時、成道することなし。
一切衆生、無仏性なることなし。
拈華瞬目は、説心説性なり。
破顔微笑は、説心説性なり。
礼拝、依位而立は、説心説性なり。
祖師入梁は、説心説性なり。
夜半伝衣は、説心説性なり。
拈、拄杖、これ、説心説性なり。
横、払子、これ、説心説性なり。
おおよそ、仏仏、祖祖のあらゆる功徳は、ことごとく、これ、説心説性なり。
平常の説心説性あり。
牆壁、瓦礫の説心説性あり。

いわゆる、
心、生、種種法、生の道理、現成し、
心、滅、種種法、滅の道理、現成する、
しかしながら、心の説なる時節なり、性の説なる時節なり。
しかあるに、心を通ぜず、性に達せざる庸流、くらくして、説心説性をしらず、談玄談妙をしらず、仏祖の道にあるべからざるといい、あるべからざるとおしう。
説心説性を説心説性としらざるによりて、説心説性を説心説性とおもうなり。
これ、ことに、大道の通塞を批判せざるによりてなり。
後来、径山、大慧禅師、宗杲というありて、いわく、
いまのともがら、説心説性をこのみ、談玄談妙をこのむによりて、得道おそし。
ただ、まさに、心、性、ふたつながら、なげすてきたり、玄、妙、ともに、忘じきたりて、二相、不生のとき、証契するなり。

この道取、いまだ仏祖の縑緗をしらず、仏の列辟をきかざるなり。
これによりて、心は、ひとえに慮知念覚なりとしりて、慮知念覚も心なることを学せざるによりて、かくのごとく、いう。
性は澄湛、寂静なるとのみ妄計して、仏性、法性の有無をしらず、如是性をゆめにもいまだみざるによりて、しかのごとく仏法を僻見せるなり。
仏祖の道取する心は、皮肉骨髄なり。
仏祖の保任せる性は、竹篦、拄杖なり。
仏祖の証契する玄は、露柱、灯籠なり。
仏祖の挙拈する妙は、知見、解会なり。
仏祖の、真実に仏祖なるは、はじめより、この心、性を聴取し、説取し、行取し、証取するなり。
この玄妙を保任取し、参学取するなり。
かくのごとくなるを学仏祖の児孫という。
しかのごとくに、あらざれば、学道にあらず。
このゆえに、得道のとき、得道せず、不得道のとき、不得道ならざるなり。
得、不の時節、ともに、蹉過するなり。
たとえ、なんじがいうがごとく、心、性、ふたつながら忘ず、というは、心の、説あらしむる分なり。
百、千、万、億分の少分なり。
玄、妙、ともに、なげすてきたる、という、談玄の、談ならしむる分なり。

この関棙子を学せず、おろかに、忘ずといわば、手をはなれんずるとおもい、身に、のがれぬるとしれり。
いまだ小乗の局量を解脱せざるなり。
いかでか大乗の奥玄におよばん？
いかに、いわんや、向上の関棙子をしらんや？
仏祖の茶飯を喫しきたるといいがたし。
参師勤恪するは、ただ説心説性を身心の正当恁麼時に体究するなり、身先身後に参究するなり。
さらに、二、三の、ことなることなし。

爾時、初祖、謂、二祖、曰、
汝、
但、外、息、諸縁、内心、無、喘、心、如、牆壁、可、以、入、道。

二祖、
種種、説心説性、倶、不証契。
一日、忽然、省、得。
果、白、初祖、曰、
弟子、此回、始、息、諸縁、也。

初祖、知、其已悟、更不窮詰、只、曰、
莫、成、断滅？　否？

二祖、曰、
無。

初祖、曰、
子、
作麼生？

二祖、曰、
了了、常、知。
故、言、之、不可及。

初祖、曰、
此、乃、従上、諸仏諸祖、所伝、心体。
汝、今、既得。

善、自、護持。

この因縁、疑著するものあり、挙拈するあり。
二祖の、初祖に参侍せし因縁のなかの一因縁、かくのごとし。
二祖、しきりに説心説性するに、はじめは、相契せず。
ようやく、積功累徳して、ついに、初祖の道を得道しき。

庸愚、おもうらくは、
二祖、はじめに、説心説性せしときは、証契せず。
その、とが、説心説性するにあり。
のちには、説心説性をすてて証契せり。
と、おもえり。
心、如、牆壁、可、以、入、道の道を参徹せざるによりて、かくのごとくいうなり。
これ、ことに、学道の区別に、くらし。
ゆえ、いかん？　となれば、
菩提心をおこし、仏道修行におもむくのちよりは、難行をねんごろにおこなうとき、おこなうといえども、百行に一当なし。
しかあれども、或、従、知識、或、従、経巻して、ようやく、あたることをうるなり。
いまの一当は、むかしの百不当のちからなり、百不当の一老なり。
聞教、修道、得証、みな、かくのごとし。
きのうの説心説性は百不当なりといえども、きのうの説心説性の百不当、たちまちに今日の一当なり。
行、仏道の初心のとき、未練にして、通達せざればとて、仏道をすてて余道をへて仏道をうること、なし。
仏道修行の始終に達せざるともがら、この通塞の道理なることをあきらめがたし。
仏道は、初、発心のときも仏道なり、成、正覚のときも仏道なり、初中後、ともに、仏道なり。
たとえば、万里をゆくものの、一歩も千里のうちなり、千歩も千里のうちなり。
初、一歩と千歩と、ことなれども、千里のおなじきがごとし。
しかあるを、至愚のともがらは、おもうらく、
学仏道の時は、仏道にいたらず。
果上の時のみ、仏道なり。と。

挙、道、説、道をしらず、
挙、道、行、道をしらず、
挙、道、証、道をしらざるによりて、かくのごとし。
迷人のみ、仏道修行して大悟す、と学して、不迷人も、仏道修行して大悟す、としらず、きかざるともがら、かくのごとくいうなり。
証契よりさきの説心説性は、仏道なりといえども、説心説性して証契するなり。
証契は、迷者の、はじめて大悟するをのみ証契という、と参学すべからず。
迷者も、大悟し、
悟者も、大悟し、
不悟者も、大悟し、
不迷者も、大悟し、
証契者も、証契するなり。
しかあれば、説心説性は、仏道の正直なり。
杲公、この道理に達せず、説心説性すべからずという、仏道の道理にあらず。
いまの大宋国には、杲公におよべるも、なし。
高祖、悟本大師ひとり、諸祖のなかの尊として、説心説性の説心説性なる道理に通達せり。
いまだ通達せざる諸方の祖師、いまの因縁のごとくなる道取なし。
いわゆる、僧密、師伯と大師と、行、次に、傍、院をさして、いわく、
裏面、有、人、説心説性。
この道取は、高祖、出世より、このかた、法孫、かならず、祖風を正伝せり。
余門の、夢にも見聞せるところにあらず。
いわんや、夢にも領覧の方をしらんや？
ただ嫡嗣たるもの、正伝せり。
この道理もし正伝せざらんは、いかでか仏道に達、本ならん？
いわゆる、いまの道理は、
或、裏、或、面、有、人、人有、説心説性なり。
面、裏、心、説、面、裏、性、説なり。
これを参究、功夫すべし。
性にあらざる説、いまになし。
説にあらざる心、いまだあらず。
仏性というは、一切の説なり。
無仏性というは、一切の説なり。

仏性の性なることを参学すというとも、有仏性を参学せざらんは、学道にあらず。
無仏性を参学せざらんは、参学にあらず。
説の、性なることを参学する、これ、仏祖の嫡孫なり。
性は、説なることを信受する、これ、嫡孫の仏祖なり。
心は、疎動し、性は、恬静なり、と道取するは、外道の見なり。
性は、澄湛にして、相は、遷移する、と道取するは、外道の見なり。
仏道の学心学性、しかあらず。
仏道の行心行性は、外道に、ひとしからず。
仏道の明心明性は、外道、その分あるべからず。
仏道には、
有人の説心説性あり。
無人の説心説性あり。
有人の不説心不説性あり。
無人の不説心不説性あり。
説心、未説心、説性、未説性あり。
無人のときの説心を学せざれば、説心、未到、田地なり。
有人のときの説心を学せざれば、説心、未到、田地なり。
説心、無人を学し、
無人、説心を学し、
説心、是、人を学し、
是、人、説心を学するなり。
臨済の道取する尽力は、わずかに無位真人なりといえども、有位真人をいまだ道取せず。
のこれる参学、のこれる道取、いまだ現成せず。
未到、参徹地というべし。
説心説性は、説仏説祖なるがゆえに、耳処に相見し、眼処に相見すべし。
ちなみに、僧密、師伯、いわく、
是、誰？
この道取を現成せしむるに、僧密、師伯、さきにも、この道取に乗ずべし、のちにも、この道取に乗ずべし。
是、誰？　は、那裏の説心説性？　なり。
しかあれば、是、誰？　と道取せられんとき、是、誰？　と思量取せられんときは、すなわち、説心説性なり。
この説心説性は、余力のともがら、かつて、しらざるところなり。

子をわすれて賊とするゆえに、賊を認じて子とするなり。
大師、いわく、
被、師伯、一問、直、得、去死、十分。
この道をきく参学の庸流、おおく、おもう、
説心説性する有人の是、誰？　といわれて、直、得、去死、十分なるべし。
そのゆえは、是、誰？　のことば、対面、不相識なり。
全無所見なるがゆえに、死句なるべし。

かならずしも、しかにはあらず。
この説心説性は、徹者、まれなりぬべし。
十分の去死は、一二分の去死にあらず。
このゆえに、去死の十分なり。
被、問の正当恁麼時、だれが、これを遮、天、蓋、地にあらずとせん？
照、古、也、際、断なるべし。
照、今、也、際、断なるべし。
照、来、也、際、断なるべし。
照、正当恁麼時、也、際、断なるべし。
僧密、師伯、いわく、
説心説性底、誰？
さきの是、誰？　と、いまの是、誰？　と、その名は、張三なりとも、その人は、李四なり。
大師、いわく、
死中、得、活。
この死中は、直、得、去死を直指すとおもい、説心説性底を直指して是、誰？　とは、みだりに道取するにあらず。
是、誰？　は、説心説性の有人を差排す。
かならず、十分の去死を万期せずというと参学することありぬべし。
大師、道の死中、得、活は、有人、説心説性の声色、現前なり。
また、さらに、十分の去死のなかの一、両分なるべし。
活は、たとえ全活なりとも、死の、変じて活と現ずるにあらず。
得、活の頭正尾正に脱落なるのみなり。
おおよそ、仏道祖道には、かくのごとくの説心説性ありて参究せらるるなり。
又、且のときは、十分の死を死して、得、活の活計を現成するなり。
しるべし。
唐代より今日にいたるまで、説心説性の仏道なることをあきらめず、教行証の説心説性にくらくて、胡説乱道する可憐憫者、おおし。

身先身後に、すくうべし。
為、道すらくは、説心説性は、これ、七仏、祖師の要機なり。

正法眼蔵　説心説性
爾時、寛元元年癸卯、在、于、日本国、越州、吉田県、吉峰寺、示、衆。

# 仏道

曹谿古仏、あるとき、衆にしめして、いわく、
慧能より七仏にいたるまで四十祖あり。

この道を参究するに、七仏より慧能にいたるまで四十仏なり。
仏仏、祖祖を算数するには、かくのごとく算数するなり。
かくのごとく算数すれば、七仏は七祖なり、三十三祖は三十三仏なり。
曹谿の宗旨、かくのごとし。
これ、正嫡の仏訓なり。
正伝の嫡嗣のみ、その算数の法を正伝す。
釈迦牟尼仏より曹谿にいたるまで三十四祖あり。
この仏祖、相承、ともに、迦葉の、如来にあいたてまつれりしがごとく、如来の、迦葉をえましますがごとし。
釈迦牟尼仏の、迦葉仏に参学しましますがごとく、師資、ともに、于、今、有在なり。
このゆえに、正法眼蔵、まのあたり、嫡嫡、相承しきたれり。
仏法の正命、ただ、この正伝のみなり。
仏法は、かくのごとく正伝するがゆえに、付属の嫡嫡なり。
しかあれば、仏道の功徳、要機、もらさず、そなわれり。
西天より東地につたわれて、十万八千里なり。
在世より今日につたわれて、二千余載。
この道理を参学せざるともがら、みだりに、あやまりて、いわく、仏祖、正伝の正法眼蔵、涅槃妙心、みだりに、これを禅宗と称す。
祖師を禅祖と称す。
学者を禅子と号す。あるいは、禅和子と称し、あるいは、禅家流の自称あり。
これ、みな、僻見を根本とせる枝葉なり。
西天、東地、従、古、至、今、いまだ禅宗の称あらざるを、みだりに自称するは、仏道をやぶる魔なり、仏祖のまねかざる怨家なり。

石門、林間録、云、
菩提達磨、初、自、梁之魏、経行、於、嵩山之下、倚杖、於、少林。
面壁、燕坐、而、已、非、習禅、也。
久、之、人、莫、測、其故。
因、以、達磨、為、習禅。

夫、禅那、諸行之一耳。
何、足、以、尽、聖人？
而、当時之人、以、之、為。
史者、又、従而、伝、於、習禅之列、使、与、枯木死灰之徒、為、伍。
雖然、聖人、非、止、於、禅那。而、亦、不違、禅那。
如、易、出、乎、陰陽。而、亦、不違、乎、陰陽。

第二十八祖と称するは、迦葉大士を初祖として称するなり。
毘婆尸仏よりは第三十五祖なり。
七仏、および、二十八代、かならずしも禅那をもって証、道をつくすべからず。
このゆえに、古先、いわく、
禅那は、諸行のひとつならくのみ。
なんぞ、もって、聖人をつくすにたらん？

この古先、いささか人をみきたれり、祖宗の堂奥にいれり。
このゆえに、この道あり。
近日は、大宋国の天下に難得なるべし。
ありがたかるべし。
たとえ禅那なりとも、禅宗と称すべからず。
いわんや、禅那、いまだ仏法の総要にあらず。
しかあるを、仏仏、正伝の大道を、ことさら禅宗と称するともがら、仏道は未夢見在なり、未夢聞在なり、未夢伝在なり。
禅宗を自号するともがらにも仏法あるらん、と聴許することなかれ。
禅宗の称、だれが称しきたる？
諸仏、祖師の、禅宗と称する、いまだあらず。
しるべし。
禅宗の称は、魔波旬の、称するなり。
魔波旬の称を称しきたらんは、魔党なるべし。
仏祖の児孫にあらず。

世尊、霊山、百万衆前、拈、優曇華、瞬目。
衆、皆、黙然。
唯、迦葉尊者、破顔、微笑。
世尊、云、
吾有、正法眼蔵、涅槃妙心、並、以、僧伽梨衣、付属、摩訶迦葉。

世尊の、迦葉大士に付属しまします、吾有、正法眼蔵、涅槃妙心なり。
このほか、さらに、吾有、禅宗、付属、摩訶迦葉にあらず。
並、付、僧伽梨衣といいて、並、付、禅宗といわず。
しかあれば、すなわち、世尊、在世に禅宗の称、まったく、きこえず。

初祖、そのとき、二祖にしめして、いわく、
諸仏、無上妙道、曠劫、精勤、難行、苦行、難忍、能忍。
豈、以、小徳、小智、軽心、慢心、欲、冀、真乗？

また、いわく、
諸仏、法印、匪、従、人、得。

また、いわく、
如来、以、正法眼蔵、付属、迦葉大士。

いま、しめすところ、諸仏、無上妙道、および、正法眼蔵、ならびに、諸仏、法印なり。
当時、すべて、禅宗と称することなし。
禅宗と称すべき因縁きこえず。
いま、この正法眼蔵は、揚眉瞬目して面授しきたる。
身心、骨髄をもって、さずけきたる。
身心、骨髄に稟受しきたるなり。
身先身後に伝授し稟受しきたり、心上心外に伝授し稟受するなり。
世尊、迦葉の会に、禅宗の称きこえず。
初祖、二祖の会に、禅宗の称きこえず。
五祖、六祖の会に、禅宗の称きこえず。
青原、南嶽の会に、禅宗の称きこえず。
いずれのときより、だれ人の、称しきたる、と、なし。
学者のなかに、学者のかずにあらずして、ひそかに壊、法、盗、法のともがら、称しきたるならん。
仏祖、いまだ聴許せざるを、晩学、みだりに称するは、仏祖の家門を損するならん。
また、仏仏、祖祖の法のほかに、さらに禅宗と称する法のあるに、にたり。
もし仏祖の道のほかにあらんは、外道の法なるべし。
すでに仏祖の児孫としては、仏祖の骨髄、面目を参学すべし。

仏祖の道に投ぜるなり。
這裏を逃逝して、外道を参学すべからず。
まれに人間の身心を保任せり。古来の弁道力なり。
この恩力をうけて、あやまりて外道を資せん、仏祖を報恩するにあらず。

大宋の近代、天下の庸流、この妄称、禅宗の名をききて、俗徒、おおく、禅宗と称し、達磨宗と称し、仏心宗と称する、妄称、きおい風聞して、仏道をみだらんとす。
これは、仏祖の大道、いまだかつてしらず、正法眼蔵ありとだにも見聞せず、信受せざるともがらの乱道なり。
正法眼蔵をしらん、だれが、仏道をあやまり称することあらん？
このゆえに、
南嶽山、石頭庵、無際大師、上堂、示、大衆、言、
吾之法門、先仏、伝受、不論、禅定、精進、唯、達、仏之知見。

しるべし。
七仏、諸仏より正伝ある仏祖、かくのごとく道取するなり。
ただ吾之法門、先仏、伝受と道、現成す。
吾之禅宗、先仏、伝受と道、現成なし。
禅定、精進の条条をわかず、仏之知見を唯、達せしむ。
精進、禅定をきらわず、唯、達せる仏之知見なり。
これを吾有、正法眼蔵、付属とせり。
吾之は、吾有なり。
法門は、正法なり。
吾之、吾有、吾髄は、汝、得の付属なり。
無際大師は、青原高祖の一子なり。
ひとり堂奥にいたれり。
曹谿古仏の剃髪の法子なり。
しかあれば、
曹谿古仏は、祖なり、父なり。
青原高祖は、兄なり、師なり。
仏道祖席の英雄は、ひとり、石頭庵、無際大師のみなり。
仏道の正伝、ただ無際のみ唯、達なり。
道、現成の果果条条、みな、古仏の不古なり、古仏の長今なり。
これを正法眼蔵の眼睛とすべし。
自余に比準すべからず。

しらざるもの、江西、大寂に比するは、非なり。
しかあれば、しるべし。
先仏、伝受の仏道は、なお、禅定といわず。
いわんや、禅定の称論ならんや？
あきらかに、しるべし。
禅宗と称するは、あやまりの、はなはだしきなり。
つたなきともがら、有宗、空宗のごとくならん、と思量して、宗の称なからんは所学なきがごとく、なげくなり。
仏道、かくのごとくなるべからず。
かつて禅宗と称せずと一定すべきなり。
しかあるに、近代の庸流、おろかにして古風をしらず。
先仏の伝受なきやから、あやまりて、いわく、仏法のなかに五宗の門風あり、という。
これ、自然の衰微なり。
これを拯済する一箇、半箇、いまだあらず。
先師、天童古仏、はじめて、これをあわれまんとす。
人の運なり。
法の達なり。

先師、古仏、上堂、示、衆、云、
如今、箇箇、祗管、道、雲門、法眼、潙仰、臨済、曹洞、等、家風、有、別、者、不是、仏法、也。不是、祖師道、也。

この道、現成は、千歳にあいがたし。
先師ひとり、道取す。
十方にききがたし。
円席ひとり、聞取す。
しかあれば、一千(人)の雲水のなかに、聞著する耳朶なし、見取する眼睛なし。
いわんや、心を挙して、きく、あらんや？
いわんや、身処に聞著する、あらんや？
たとえ自己の渾身心に聞著する、億、万劫にありとも、先師の通身心を挙拈して聞著し、証著し、信著し、脱落著する、なかりき。
あわれむべし。
大宋一国の十方、ともに、先師をもって諸方の長老、等に斉肩なり、とおもえり。

かくのごとく、おもう、ともがらを具、眼なりとやせん？　未、具、眼なりとやせん？
また、あるいは、先師をもって臨済、徳山に斉肩なり、とおもえり。
このともがらも、いまだ先師をみず、いまだ臨済にあわず、というべし。
先師、古仏を礼拝せざりしさきは、五宗の玄旨を参究せんと擬す。
先師、古仏を礼拝せしよりのちは、あきらかに五宗の乱称なるむねをしりぬ。
しかあれば、すなわち、大宋国の仏法、さかりなりしときは、五宗の称なし。
また、五宗の称を挙揚して、家風をきこゆる古人、いまだあらず。
仏法の澆薄より、このかた、みだりに五宗の称あるなり。
これ、人の、参学おろかにして、弁道を親切にせざるによりて、かくのごとし。
雲箇水箇、真箇の参究を求覓せんは、切忌すらくは、五家の乱称を記持することなかれ。
五家の門風を記号することなかれ。
いわんや、三玄、三要、四料簡、四照用、九帯、等あらんや？
いわんや、三句、五位、十同真智あらんや？
釈迦老師の道、しかのごとくの小量ならず。
しかのごとくを大量とせず。
道、現成せず。
少林、曹谿に、きこえず。
あわれむべし。
いま、末代の不聞法の禿子、等、その身心、眼睛、くらくして、いうところなり。
仏祖の児孫、種子、かくのごとくの言語なかれ。
仏祖の住持に、この狂言、かつて、きこゆることなし。
後来の阿師、等、かつて仏法の全道をきかず、祖道の全靠なく、本分にくらきともがら、わずかに一、両の少分に矜高して、かくのごとく宗称を立するなり。
立、宗称より、このかたの小児子、等は、本をたずぬべき道を学せざるによりて、いたずらに末にしたがうなり。
慕古の志気なく、混俗の操行あり。
俗、なお、世俗にしたがうことをいやしとして、いましむるなり。

文王、問、太公、曰、
君、務、挙、賢。
而、不獲、其功。

世乱、愈甚。
以、致、危亡、者、何、也？

太公、曰、
挙、賢、而、不用、是、以、有、挙賢之名、也、無得、賢之実、也。

文王、曰、
其失、安、在？

太公、曰、
其失、在、好、用、世俗之所誉。
不得、其真賢。

文王、曰、
好、用、世俗之所誉、者、何、也？

太公、曰、
好、聴、世俗之所誉、者、以、非賢、為、賢。
或、以、非智、為、智。
或、以、非忠、為、忠。
或、以、非信、為、信。
君、
以、世俗所誉者、為、賢智。
以、世俗之所毀者、為、不肖。
則、多党者、進。
少党者、退。
是以、群邪、比周、而、蔽、賢。
忠臣、死、於、無罪。
邪臣、虚誉、以、求、爵位。
是以、世乱、愈甚。
故、其国、不免、於、危亡。

俗、なお、その国、その道の危亡することをなげく。
仏法、仏道の危亡せん、仏子、かならず、なげくべし。
危亡のもといは、みだりに世俗にしたがうなり。
世俗に、ほむるところをきく時は、真賢をうることなし。
真賢をえんとおもわば、照後観前の智略あるべし。

世俗のほむるところ、いまだ、かならずしも賢にあらず、聖にあらず。
世俗のそしるところ、いまだ、かならずしも賢にあらず、聖にあらず。
しかありといえども、賢にして、そしりをまねく、と、偽にして、ほまれある、と、三察するところ、混ずべからず。
賢をもちいざらんは、国の損なり。
不肖をもちいんは、国のうらみなり。
いま、五宗の称を立するは、世俗の混乱なり。
この世俗にしたがうものは、おおしといえども、俗を俗としれる人、すくなし。
俗を化するを聖人とすべし。
俗にしたがうは、至愚なるべし。
この俗にしたがわんともがら、いかでか仏正法をしらん？　いかにしてか仏となり祖とならん？
七仏、嫡嫡、相承しきたれり。
いかでか西天にある依文解義のともがら、律の、五部を立するがごとくならん？
しかあれば、しるべし。
仏法の正命を正命とせる祖師は、五宗の家門ある、と、かつて、いわざるなり。
仏道に五宗あり、と学するは、七仏の正嗣にあらず。

先師、示、衆、云、
近年、祖師道、廃、魔党、畜生、多。
頻頻、挙、五家、門風。
苦、哉。苦、哉。

しかあれば、はかりしりぬ。
西天二十八代、東地二十二祖、いまだ五宗の家門を開演せざるなり。
祖師とある祖師は、みな、かくのごとし。
五宗を立して、各各の宗旨あり、と称するは、誑惑世間人のともがら、少聞薄解のたぐいなり。
仏道におきて、各各の道を自立せば、仏道、いかでか今日にいたらん？
迦葉も自立すべし、阿難も自立すべし。
もし自立する道理を正道とせば、仏法、はやく、西天に、滅しなまし。
各各、自立せん宗旨、だれが、これに慕古せん？
各各、自立せん宗旨、だれが正邪を決択せん？

正邪、いまだ決択せずば、だれが、これを仏法なりとし、仏法にあらずとせん？
この道理あきらめずば、仏道と称しがたし。
五宗の称は、各各、祖師の現在に立せるにあらず。
五宗の祖師と称する祖師、すでに円寂ののち、あるいは、門下の庸流、まなこ、いまだ、あきらかならず、あし、いまだ、あゆまざるもの、父にとわず、祖に違して、立称しきたるなり。
そのむね、あきらかなり。
だれ人もしりぬべし。

大潙山、大円禅師は、百丈、大智の子なり。
百丈と同時に潙山に住す。
いまだ、仏法を潙仰宗と称すべし、といわず。
百丈も、なんじがときより潙山に住して潙仰宗と称すべし、と、いわず。
師と祖と称せず。
しるべし、妄称ということを。
たとえ宗号をほしきままにすというとも、あながちに仰山をもとむべからず。
自称すべくば、自称すべし。
自称すべからざるによりて、前来も自称せず、いまも自称なし。
曹谿宗といわず、南嶽宗といわず、江西宗といわず、百丈宗といわず。
潙山にいたりて、曹谿に、ことなるべからず。
曹谿よりも、すぐるべからず。
曹谿に、およぶべからず。
大潙の道取する一言、半句、かならずしも仰山と一条、拄杖、両人、舁せず。
宗の称を立せんとき、潙山宗というべし、大潙宗というべし、潙仰宗と称すべき道理いまだあらず。
潙仰宗と称すべくば、両位の尊宿の在世に称すべし。
在世に称すべからんを称せざらんは、なにの、さわりによりてか称せざらん？
すでに両位の在世に称せざるを父祖の道を違して潙仰宗と称するは、不孝の児孫なり。
これ、大潙禅師の本懐にあらず、仰山老人の素意にあらず。
正師の正伝なし。
邪党の邪称なること、あきらけし。
これを尽十方界に風聞することなかれ。

慧照大師は、講経の家門をなげすてて、黄檗の門人となれり。
黄檗の棒を喫すること、三番、あわせて六十、拄杖なり。
大愚のところに参じて省悟せり。
ちなみに、鎮州、臨済院に住せり。
黄檗のこころを究尽せずといえども相承の仏法を臨済宗となづくべし、という一句の道取なし、半句の道取なし。
竪、拳せず。
拈、払せず。
しかあるを、門人のなかの庸流、たちまちに父業をまもらず、仏法をまもらず、あやまりて臨済宗の称を立す。
慧照大師の、平生に、結搆せん。
なお曩祖の道に違せば、その称を立せんこと、予議あるべし。

いわんや、
臨済、将、示、滅、属、三聖慧然禅師、云、
吾遷化後、不得、滅却、吾正法眼蔵。
慧然、云、
争、敢、滅却、和尚正法眼蔵。
臨済、云、
忽、有、人、問、汝、作麼生、対？
慧然、便、喝。
臨済、云、
誰、知、吾正法眼蔵、向、這瞎驢辺、滅却？

かくのごとく師資、道取するところなり。
臨済、
いまだ、吾禅宗を滅却することえざれ、と、いわず、
吾臨済宗を滅却することえざれ、と、いわず、
吾宗を滅却することえざれ、と、いわず、
ただ、吾正法眼蔵を滅却することえざれ、という。
あきらかに、しるべし、仏祖、正伝の大道を禅宗と称すべからず(、ということ)、臨済宗と称すべからず、ということを。
さらに禅宗と称すること、ゆめゆめ、あるべからず。
たとえ滅却は、正法眼蔵の理象なりとも、かくのごとく付属するなり。
向、這瞎驢辺、滅却、まことに、付属の誰、知？　なり。
臨済門下には、ただ三聖のみなり。

法兄、法弟におよぼし、一列せしむべからず。
まさに、明窓下、安排なり。
臨済、三聖の因縁は、仏祖なり。
今日、臨済の付属は、昔日、霊山の付属なり。
しかあれば、臨済宗と称すべからざる道理、あきらけし。

雲門山、匡真大師、そのかみは陳尊宿に学す、黄檗の児孫なりぬべし、のちに雪峰に嗣す。
この師、また、正法眼蔵を雲門宗と称すべし、と、いわず。
門人、また、潙仰、臨済の妄称を妄称としらず、雲門宗の称を新立せり。
匡真大師の宗旨、もし立宗の称をこころざさば、仏法の身心なり、とゆるしがたからん。
いま、宗の称を称するときは、たとえば、帝者を匹夫と称せんがごとし。

清涼院、大法眼禅師は、地蔵院の嫡嗣なり。
玄沙院の法孫なり。
宗旨あり。
あやまりなし。
大法眼は、署する師号なり。
これを正法眼蔵の号として法眼宗の称を立すべし、といえることを千言のなかに一言なし、万句のうちに一句なし。
しかあるを、門人、また、法眼宗の称を立す。
法眼、もし、いまを化せば、いまの妄称、法眼宗の道をけずるべし。
法眼禅師、すでに、ゆきて、この患をすくう人なし。
たとえ千、万年ののちなりとも、法眼禅師に孝せん人は、この法眼宗の称を称とすることなかれ。
これ、本、孝、大法眼禅師なり。

おおよそ、雲門、法眼、等は、青原高祖の遠孫なり。
道骨つたわれ、法髄つたわれり。

高祖、悟本大師は、雲巌に嗣法す。
雲巌は、薬山大師の正嫡なり。
薬山は、石頭大師の正嫡なり。
石頭大師は、青原高祖の一子なり。
斉肩の二、三あらず。

道業、ひとり正伝せり。
仏道の正命、なお、東地にのこれるは、石頭大師、もらさず正伝せりし、ちからなり。
青原高祖は、曹谿古仏の同時に、曹谿の化儀を青原に化儀せり。
在世に出世せしめて、出世を一世に見聞するは、正嫡のうえの正嫡なるべし、高祖のなかの高祖なるべし。
雄、参学、雌、出世にあらず。
そのときの斉肩、いま、抜群なり。
学者、ことに、しるべきところなり。
曹谿古仏、ちなみに、現、般涅槃をもって人、天を化せし席末に、石頭、すすみて、所依の師を請す。
古仏、ちなみに、尋、思、去としめして尋、譲、去といわず。
しかあれば、すなわち、古仏の正法眼蔵、ひとり青原高祖の正伝なり。
たとえ同、得道の神足をゆるすとも、高祖は、なお、正、神足の独歩なり。
曹谿古仏、すでに青原を、わが子を子ならしむ。
子の父の、父の、父とある、得髄、あきらかなり。
祖宗の正嗣なること、あきらかなり。
洞山大師、まさに、青原、四世の嫡嗣として、正法眼蔵を正伝し、涅槃妙心、開眼す。
このほか、さらに別伝なし、別宗なし。
大師、かつて、曹洞宗と称すべし、と示衆する拳頭なし、瞬目なし。
また、門人のなかに庸流、まじわらざれば、洞山宗と称する門人なし。
いわんや、曹洞宗といわんや？
曹洞宗の称は、曹山を称し、くわうるならん。
もし、しかあらば、雲居、同安をも、くわえ、のすべきなり。
雲居は、人中、天上の導師なり、曹山よりも尊、崇なり。
はかり、しりぬ。
この曹洞の称は、傍輩の臭皮袋、おのれに斉肩ならんとて、曹洞宗の称を称するなり。
まことに、白日、あきらかなれども、浮雲、しもをおおうがごとし。

先師、いわく、
いま、諸方、獅子の座にのぼるもの、おおし、人、天の師とあるもの、おおしといえども、知得仏法道理箇、渾無。

このゆえに、きおうて五宗の宗を立し、あやまりて言句の句にとどこおれるは、真箇に仏祖の怨家なり。
あるいは、黄龍の南禅師の一派を称して黄龍宗と称しきたれりといえども、その派、とおからず、あやまりをしるべし。
おおよそ、世尊、在世、かつて、仏宗と称しましまさず。
霊山宗と称せず。
祇園宗といわず。
我心宗といわず。
仏心宗といわず。
いずれの仏語にか、仏宗と称する？
いまのひと、なにをもってか、仏心宗と称する？
世尊、なにのゆえにか、あながちに心を宗と称せん？
宗、なにによりてか、かならずしも心ならん？
もし仏心宗あらば、
仏身宗あるべし。
仏眼宗あるべし。
仏耳宗あるべし。
仏鼻舌、等、宗あるべし。
仏髄宗、仏骨宗、仏脚宗、仏国宗、等あるべし。
いま、これ、なし。
しるべし、仏心宗の称は偽称なりということ。
釈迦牟尼仏、ひろく十方仏土中の諸法実相を挙拈し、十方仏土中をとくとき、十方仏土のなかに、いずれの宗を建立せり、と、とかず。
宗の称、もし仏祖の法ならば、仏国にあるべし。
仏国にあらば、仏、説すべし。
仏、不説なり。
しりぬ。
仏国の調度にあらず。
祖、道せず。
しりぬ、祖域の家具にあらずということを。
ただ人に、わらわるるのみにあらざらん。
諸仏のために制禁せられん。
また、自己のために、わらわれん。
つつしんで、宗称することなかれ。
仏法に五家あり、ということなかれ。

後来、智聡という小児子ありて、祖師の一道、両道をひろいあつめて、五家の宗派といい、人天眼目となづく。
人、これをわきまえず、初心、晩学のやから、まこととおもいて、衣領にかくしもてるも、あり。
人天眼目にあらず、人、天の眼目をくらますなり。
いかでか瞎却、正法眼蔵の功徳あらん？
かの人天眼目は、智聡上座、淳煕戊申、十二月のころ、天台山、万年寺にして編集せり。
後来の所作なりとも、道、是あらば、聴許すべし。
これは狂乱なり、愚暗なり、参学眼なし、行脚眼なし。
いわんや、見仏祖眼あらんや？
もちいるべからず。
智聡というべからず、愚蒙というべし。
その人をしらず、人にあわざるが、言句をあつめて、その人とある人の言句をひろわず。
しりぬ、人をしらずということを。

震旦国の教学のともがら、宗称するは、斉肩の彼彼あるによりてなり。
いま、仏祖、正法眼蔵の付属、嫡嫡せり。
斉肩あるべからず。
混ずべき彼彼なし。
かくのごとくなるに、いまの杜撰の長老、等、みだりに宗の称をもっぱらする自専のくわだて、仏道をおそれず。
仏道は、なんじが仏道にあらず。
諸仏祖の仏道なり。
仏道の仏道なり。

太公、謂、文王、曰、
天下、者、非、一人之天下。天下之天下、也。

しかあれば、俗士、なお、これ、智あり、この道あり。
仏祖屋裏児、みだりに仏祖の大道をほしきままに愚蒙にしたがえて、立、宗の自称することなかれ。
おおきなる、おかしなり。
仏道人にあらず。
宗称すべくば、世尊、みずから称しましますべし。

世尊、すでに自称しましまさず。
児孫として、なにゆえか、滅後に称すること、あらん？
だれ人が、世尊よりも、善巧ならん？
善巧あらずば、その益なからん。
もし、また、仏祖、古来の道に違背して、自宗を自立せば、だれが、なんじが宗を宗とする仏児孫あらん？
照古観今の参学すべし。
みだりなることなかれ。
世尊、在世に、一毫も、たがわざらんとする、なお百、千、万分の一分におよばざることをうれえ、およべるをよろこび、違せざらんとねがうを、遺弟の畜念とせるのみなり。
これをもって、多生の値遇、奉覲をちぎるべし。
これをもって、多生の見仏聞法をねがうべし。
ことさら、世尊、在世の化儀にそむきて宗の称を立せん、如来の弟子にあらず、祖師の児孫にあらず。
重逆よりも、おもし。
たちまちに如来の無上菩提をおもくせず、自宗を自専する、前来を軽忽し、前来をそむくなり。
前来もしらずというべし。
世尊、在日の功徳を信ぜざるなり。
かれらが屋裏に仏法あるべからず。
しかあれば、すなわち、学仏の道業を正伝せんには、宗の称を見聞すべからず。
仏仏、祖祖、付属し正伝するは、正法眼蔵、無上菩提なり。
仏仏、所有の法は、みな、仏、付属しきたれり。
さらに剰法の、あらたなる、あらず。
この道理、すなわち、法骨道髄なり。

正法眼蔵　仏道
爾時、寛元元年癸卯、九月十六日、在、越州、吉田県、吉峰寺、示、衆。

# 諸法実相

仏祖の現成は、究尽の実相なり。
実相は、諸法なり。
諸法は、
如是相なり。
如是性なり。
如是身なり。
如是心なり。
如是世界なり。
如是雲雨なり。
如是行住坐臥なり。
如是憂喜動静なり。
如是拄杖払子なり。
如是拈華破顔なり。
如是嗣法授記なり。
如是参学弁道なり。
如是松操竹節なり。

釈迦牟尼仏、言、
唯仏与仏、乃、能、究尽、諸法実相。
所謂、諸法、如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等。

いわゆる、如来、道の本末究竟等は、
諸法実相の自道取なり、闍梨自道取なり、一等の参学なり。
参学は、一等なるがゆえに、唯仏与仏は、諸法実相なり。
諸法実相は、唯仏与仏なり。
唯仏は、実相なり。
与仏は、諸法なり。
諸法の道を聞取して、一と参じ、多と参ずべからず。
実相の道を聞取して、虚にあらずと学し、性にあらずと学すべからず。
実は、唯仏なり。
相は、与仏なり。
乃能は、唯仏なり。

究尽は、与仏なり。
諸法は、唯仏なり。
実相は、与仏なり。
諸法の、まさに、諸法なるを唯仏と称す。
諸法の、いまし実相なるを与仏と称す。
しかあれば、諸法のみずから諸法なる如是相あり、如是性あり。
実相の、まさしく、実相なる如是相あり、如是性あり。
唯仏与仏と出現、於、世するは、諸法実相の説取なり、行取なり、証取なり。
その説取は、乃能究尽なり。
究尽なりといえども、乃能なるべし。
初中後にあらざるゆえに、如是相なり、如是性なり。
このゆえに、初中後善という。
乃能究尽というは、諸法実相なり。
諸法実相は、如是相なり。
如是相は、乃能究尽、如是性なり。
如是性は、乃能究尽、如是体なり。
如是体は、乃能究尽、如是力なり。
如是力は、乃能究尽、如是作なり。
如是作は、乃能究尽、如是因なり。
如是因は、乃能究尽、如是縁なり。
如是縁は、乃能究尽、如是果なり。
如是果は、乃能究尽、如是報なり。
如是報は、乃能究尽、本末究竟等なり。
本末究竟等の道取、まさに、現成の如是なるがゆえに、果果の果は、因果の果にあらず。
このゆえに、因果の果は、すなわち、果果の果なるべし。
この果、すなわち、相、性、体、力をあい罣礙するがゆえに、諸法の相、性、体、力、等、いく無量、無辺も実相なり。
この果、すなわち、相、性、体、力を罣礙せざるがゆえに、諸法の相、性、体、力、等、ともに、実相なり。
この相、性、体、力、等を、果報、因縁、等のあい罣礙するに一任するとき、八、九成の道あり。
この相、性、体、力、等を、果報、因縁、等のあい罣礙せざるに一任するとき、十成の道あり。
いわゆるの如是相は、一相にあらず。

如是相は、一如是にあらず。
無量、無辺、不可道、不可測の如是なり。
百、千の量を量とすべからず。
諸法の量を量とすべし。
実相の量を量とすべし。
そのゆえは、
唯仏与仏、乃能究尽、諸法実相なり。
唯仏与仏、乃能究尽、諸法実性なり。
唯仏与仏、乃能究尽、諸法実体なり。
唯仏与仏、乃能究尽、諸法実力なり。
唯仏与仏、乃能究尽、諸法実作なり。
唯仏与仏、乃能究尽、諸法実因なり。
唯仏与仏、乃能究尽、諸法実縁なり。
唯仏与仏、乃能究尽、諸法実果なり。
唯仏与仏、乃能究尽、諸法実報なり。
唯仏与仏、乃能究尽、諸法実本末究竟等なり。
かくのごとくの道理あるがゆえに、十方仏土は、唯仏与仏のみなり。
さらに一箇、半箇の唯仏与仏にあらざるなし。
唯と与とは、たとえば、体に体を具し、相の相を証せるなり。
また、性を体として性を存せるがごとし。
このゆえに、いわく、
我、及、十方仏、乃、能、知、是事。

しかあれば、乃能究尽の正当恁麼時と、乃能知是の正当恁麼時と、おなじく、
これ、面面の有時なり。
我もし十方仏に同異せば、いかでか及十方仏の道取を現成せしめん？
這頭に十方なきがゆえに、十方は、這頭なり。
ここをもって、実相の、諸法に相見す、というは、
春は、華にいり、
人は、春にあう、
月は、月をてらし、
人は、おのれにあう。
あるいは、人の、水をみる、
おなじく、これ、相見底の道理なり。
このゆえに、実相の、実相に参学するを仏祖の、仏祖に嗣法するとす。
これ、諸法の、諸法に授記するなり。

唯仏の、唯仏のために伝法し、与仏の、与仏のために嗣法するなり。
このゆえに、生死去来あり。
このゆえに、発心、修行、菩提、涅槃あり。
発心、修行、菩提、涅槃を挙して、生死去来、真実人体を参究し接取するに、把定し、放行す。
これを命脈として華開、結果す。
これを骨髄として迦葉、阿難あり。
風、雨、水、火の如是相、すなわち、究尽なり。
青、黄、赤、白の如是性、すなわち、究尽なり。
この体、力によりて転凡入聖す。
この果、報によりて超仏越祖す。
この因、縁によりて握、土、成、金あり。
この果、報によりて伝法、付、衣あり。

如来、道、
為、説、実相印。

いわゆるをいうべし。
為、行、実相印。
為、聴、実性印。
為、証、実体印。
かくのごとく参究し、かくのごとく究尽すべきなり。
その宗旨、たとえば、珠の、盤をはしるがごとく、盤の、珠をはしるがごとし。

日月灯明仏、言、
諸法実相義、已、為、汝等、説。

この道取を参学して、仏祖は、かならず、説、実相義を一大事とせりと参究すべし。
仏祖は、十八界、ともに、実相義を開説す。
身心先、身心後、正当身心時、説、実相、性、体、力、等なり。
実相を究尽せず、実相をとかず、実相を会せず、実相を不会せざらんは、仏祖にあらざるなり。
魔党、畜生なり。

釈迦牟尼仏、道、
一切菩薩、阿耨多羅三藐三菩提、皆、属、此経。
此経、開、方便門、示、真実相。

いわゆる、一切菩薩は、一切諸仏なり。
諸仏と菩薩と、異類にあらず。
老少なし、勝劣なし。
此菩薩と彼菩薩と、二人にあらず、自他にあらず。
過、現、当来箇にあらざれども、作仏は、行、菩薩道の法儀なり。
初発心に成仏し、妙覚地に成仏す。
無量、百、千、万、億度、作仏せる菩薩あり。
作仏よりのちは、行を廃して、さらに所作あるべからず、というは、いまだ仏祖の道をしらざる凡夫なり。
いわゆる、一切菩薩は、一切諸仏の本祖なり。
一切諸仏は、一切菩薩の本師なり。
この諸仏の無上菩提、
たとえ過去に修、証するも、
現在に修、証するも、
未来に修、証するも、
身先に修、証するも、
心後に修、証するも、
初中後、ともに、此経なり。
能属、所属、おなじく、此経なり。
この正当恁麼時、これ、此経の、一切菩薩を証するなり。
経は、有情にあらず。
経は、無情にあらず。
経は、有為にあらず。
経は、無為にあらず。
しかあれども、菩提を証し、人を証し、実相を証し、此経を証するとき、開、方便門するなり。
方便門は、仏果の無上功徳なり、法住法位なり、世相常住なり。
方便門は、暫時の伎倆にあらず、尽十方界の参学なり。
諸法実相を拈じ参学するなり。
この方便門、あらわれて、尽十方界に蓋十方界すといえども、一切菩薩にあらざれば、その境界にあらず。

雪峰、いわく、
尽大地、是、解脱門。
曳、人、不、肯、入。

しかあれば、しるべし。
尽地、尽界、たとえ門なりとも、出入、たやすかるべきにあらず。
出入箇のおおきにあらず。
曳、人するに、いらず、いでず。
不曳に、いらず、いでず。
進歩のもの、あやまりぬべし。
退歩のもの、とどこおりぬべし。
又、且、いかん？
人を挙して門に出入せしむれば、いよいよ門と、とおざかる。
門を挙して人にいるるには、出入の分あり。
開、方便門というは、示、真実相なり。
示、真実相は、蓋時にして、初中後際断なり。
その開、方便門の正当開の道理は、尽十方界に開、方便門するなり。
この正当時、まさしく、尽十方界を覰見すれば、未曾見の様子あり。
いわゆる、尽十方界を一枚、二枚、三箇、四箇、拈来して、開、方便門ならしむるなり。
これによりて、一等に開、方便門とみゆといえども、如許多の尽十方界は、開、方便門の少許を得分して、現成の面目とせり、とみゆるなり。
かくのごとくの風流、しかしながら、属、経のちからなり。
示、真実相というは、
諸法実相の言句を尽界に風聞するなり。
尽界に成道するなり。
実相諸法の道理を尽人に領覧せしむるなり。
尽法に現出せしむるなり。
しかあれば、すなわち、四十仏、四十祖の無上菩提、みな、此経に属せり。
属、此経なり。
此経、属なり。
蒲団、禅板の阿耨菩提なる、みな、此経に属せり。
拈華、破顔、礼拝得髄、ともに、皆、
属、此経なり。
此経之属なり。
開、方便門、示、真実相なり。

しかあるを、近来、大宋国、杜撰のともがら、落所をしらず、宝所をみず。
実相の言を虚設のごとくし、さらに老子、荘子の言句を学す。
これをもって、仏祖の大道に一斉なり、という。
また、三教は、一致なるべし、という。
あるいは、三教は、鼎の三脚のごとし、ひとつも、なければ、くつがえるべし、という。
愚痴のはなはだしき、たとえをとるに物あらず。
かくのごときのことばあるともがらも仏法をきけり、とゆるすべからず。
ゆえ、いかん？　となれば、仏法は、西天を本とせり。
在世、八十年、説法、五十年、さかりに人、天を化す。
化、一切衆生、皆、令、入、仏道なり。
それより、このかた、二十八祖、正伝せり。
これをさかりなるとし、微妙、最尊なるとせり。
もろもろの外道、天魔、ことごとく降伏せられ、おわりぬ。
成仏作祖する人、天、かずをしらず。
しかあれども、いまだ儒教、道教を震旦国にとぶらわざれば、仏道の不足、といわず。
もし決定して三教一致ならば、仏法、出現せんとき、西天に儒宗、道教、等も同時に出現すべし。
しかあれども、仏法は、天上天下、唯我独尊なり。
かのときの事をおもいやるべし。
わすれ、あやまるべからず。
三教一致のことば、小児子の言音におよばず。
壊、仏法のともがらなり。
かくのごとくのともがらのみ、おおきなり。
あるいは、人、天の導師なる、よしを現じ、あるいは、帝王の師匠となれり。
大宋、仏法、衰薄の時節なり。
先師古仏、ふかく、このことをいましめき。
かくのごときのともがら、二乗、外道の種子なり。
しかのごときの種類は、実相のあるべしとだにもしらずして、すでに二、三百年をへたり。
仏祖の正法を参学しては、流転、生死を出離すべし、とのみいう。
あるいは、仏祖の正法を参学するは、いかなるべし？　とも、しらざる、おおし。
ただ住院の稽古とおもえり。

あわれむべし、祖師道、廃せることを。
有道の尊宿、おおきに、なげくところなり。
しかのごときのともがら、所出の言句をきくべからず。
あわれむべし。

圜悟禅師、いわく、
生死去来、真実人体。

この道取を拈挙して、みずからをしり、仏法を商量すべし。

長沙、いわく、
尽十方界、真実人体。
尽十方界、自己光明裏。

かくのごとくの道取、いまの大宋国の諸方、長老、等、おおよそ参学すべき道理と、なお、しらず。
いわんや、参学せんや？
もし挙しきたりしかば、ただ赤面、無言するのみなり。

先師古仏、いわく、
いま、諸方、長老は、照古なし、照今なし。
仏法道理、不曾有なり。
尽十方界、等、恁麼、挙、那、得知？
佗那裏、也、未曾聴、相似。

これをききてのち、諸方、長老に問著するに、真箇に聴来せる、すくなし。
あわれむべし、虚設にして職をけがせることを。

応庵曇華、禅師、ちなみに、徳徽、大徳にしめして、いわく、
若、要、易、会、祇、向、十二時中、起心動念所。
但、即、此動念、直下、頓、豁了、不可得、如、大虚空。
亦、無、虚空、形段。
表裏一如。
智、境、双、泯。
玄、解、倶、亡。
三際、平等。
到、此田地、謂、之、絶学、無為閑道人、也。

これは、応庵老人、尽力、道得底、句なり。
これ、ただ影をおうて休歇をしらざるがごとし。
表裏一如ならざらんときは、仏法あるべからざるか？
なにか、これ、表裏？
また、虚空、有、形段を仏祖の道取とす。
なにをか虚空とする？
おもいやるに、
応庵、いまだ虚空をしらざるなり。
虚空をみざるなり。
虚空をとらざるなり。
虚空をうたざるなり。
起心動念という。
心は、いまだ動ぜざる道理あり。
いかでか十二時中に起心あらん？
十二時中には、心、きたり、いるべからず。
十二心中に、十二時きたらず。
いわんや、起心あらんや？
動念とは、いかん？
念は動、不動するか？　動、不動せざるか？
作麼生なるか、動？
また、作麼生なるか、不動？
なにをよんでか念とする？
念は、十二時中にあるか？
念裏に十二時あるか？
両頭にあらざらんとき、あるべきか？
十二時中に祗、向せば、易、会ならんという。
なにごとを易、会すべきぞ？
易、会という。
もし、仏祖の道をいうか？
しかあらば、仏道は、易会、難会にあらざるゆえに、南嶽、江西、ひさしく師にしたがいて弁道するなり。
頓、豁了、不可得という。
仏道、未夢見なり。
恁麼の力量、いかでか要、易、会の所堪ならん？
はかりしりぬ、仏祖の大道をいまだ参究しきたらず、ということを。

仏法もし、かくのごとくならば、いかでか今日にいたらん？
応庵、なお、かくのごとし。
いま、現在せる諸山の長老のなかに、応庵のごとくなるものをもとめんに、歴劫にも、あうべからず。
まなこは、うげなんとすとも、応庵とひとしき長老をば、みるべからざるなり。
ちかくの人は、おおく、応庵をゆるす。
しかあれども、応庵に、仏法およべり、とゆるしがたし。
ただ叢席の晩進なり。
尋常なりというべし。
ゆえは、いかん？
応庵は、人をしりぬべき気力あるゆえなり。
いまあるともがらは、人をしるべからず。
みずからをしらざるゆえに。
応庵は、未達なりといえども、学道あり。
いまの長老、等は、学道あらず。
応庵は、よきことばをきくといえども、
みみに、いらず。
みみに、みず。
まなこに、いらず。
まなこに、きかざるのみなり。
応庵、そのかみは、恁麼なりとも、いまは、自悟在なるらん。
いまの大宋、諸山の長老、等は、応庵の内外をうかがわず、音容、すべて、境界にあらざるなり。
しかのごとくのともがら、仏祖の道取せる実相は、仏祖の道なり、仏祖の道にあらず、とも、しるべからず。
このゆえに、二、三百年来の長老、杜撰のともがら、すべて、不見道来、実相なり。

先師、天童古仏、ある夜間に方丈にして普説するに、いわく、
天童、今夜、有、牛児、黄面、瞿曇、拈、実相。
要、買、那、堪、無、定、価？
一声、杜宇、孤雲上。

かくのごとくあれば、尊宿の仏道に長ぜるは、実相をいう。
仏法をしらず、仏道の参学なきは、実相をいわざるなり。

この道取は、大宋、宝慶二年丙戌、春、三月のころ、夜間やや四更になりなんとするに、上方に鼓声、三下きこゆ。
坐具をとり、搭、袈裟して、雲堂の前門より、いづれば、入室牌、かかれり。
まず、衆にしたがうて法堂上にいたる。
法堂の西壁をへて、寂光堂の西階をのぼる。
寂光堂の西壁のまえをすぎて、大光明蔵の西階をのぼる。
大光明蔵は、方丈なり。
西の屏風の、みなみより、香台のほとりにいたりて焼香、礼拝す。
入室、このところに雁列すべし、とおもうに、一僧も、みえず。
妙高台は、下、簾せり。
ほのかに堂頭、大和尚の法音きこゆ。
ときに、西川の祖坤、維那きたりて、おなじく、焼香、礼拝しおわりて、妙高台をひそかに、のぞめば、満衆、たちかさなれり、東辺、西辺をいわず。
ときに、普説あり。
ひそかに衆のうしろに、いり、たちて聴取す。
大梅の法常禅師、住、山の因縁、挙せらる。
衣、荷、食、松のところに、衆家、おおく、なみだをながす。
霊山、釈迦牟尼仏の安居の因縁、くわしく挙せらる。
きくもの、なみだをながす、おおし。

天童山、安居、ちかきにあり。
如今、春間、不寒、不熱、好坐禅時節、也。
兄弟、如何、不坐禅？

かくのごとく普説して、いまの頌あり。
頌おわりて、右手にて禅椅のみぎのほとりをうつこと一下して、いわく、
入室すべし。

入室話に、いわく、
杜鵑、啼、山竹、裂。

かくのごとく入室語( or 入室話)あり、別の話なし。
衆家、おおしといえども、下語せず、ただ惶恐せるのみなり。
この入室の儀は、諸方に、いまだあらず。
ただ先師、天童古仏のみ、この儀を儀せり。
普説の時節は、椅子、屏風を周帀して、大衆、雲立せり。

そのままにて、雲立しながら、便宜の僧家より入室すれば、入室おわりぬる人は、例のごとく方丈門をいでぬ。
のこれる人は、ただ、もとのごとく、たてれば、入室する人の威儀進止、ならびに、堂頭、和尚の容儀、および、入室話、ともに、みな見聞するなり。
この儀、いまだ他那裏の諸方にあらず。
他長老は、儀、不得なるべし。
他時の入室には、人よりは、さきに入室せんとす。
この入室には、人よりも、のちに入室せんとす。
この人心道別、わすれざるべし。
それより、このかた、日本、寛元元年癸卯にいたるに、始終一十八年、すみやかに風、光のなかにすぎぬ。
天童より、このやまにいたるに、いくそばくの山水とおぼえざれども、美言奇句の実相なる、身心骨髓に銘じきたれり。
かのときの普説、入室は、衆家、おおく、わすれがたし、とおぼえり。
この夜は、微月、わずかに楼閣より、もりきたり、杜鵑、しきりになくといえども、静間の夜なりき。

玄沙院、宗一大師、参、次、聞、燕子、声、云、
深談、実相。
善説、法要。

下座。

尋後、有、僧、請益、曰、
某甲、不会。

師、云、
去。
無、人、信、汝。

いわゆる、深談、実相というは、燕子ひとり実相を深談する、と玄沙の道ききぬべし。
しかあれども、しかには、あらざるなり。
参、次に聞、燕子、声あり。
燕子の、実相を深談するにあらず。
玄沙の、実相を深談するにあらず。

両頭にわたらざれども、正当恁麼、すなわち、深談、実相なり。
しばらく、この一段の因縁を参究すべし。
参、次あり。
聞、燕子、声あり。
深談、実相。善説、法要。の道取あり。
下座あり。
尋後、有、僧、請益、曰、某甲、不会。あり。
師、云、去。無、人、信、汝。あり。
某甲、不会、かならずしも請益、実相なるべからざれども、これ、仏祖の命脈なり、正法眼蔵の骨髄なり。
しるべし。
この僧、たとえ請益して某甲、会得と道取すとも、某甲、説得と道取すとも、玄沙は、かならず、去。無、人、信、汝。と為、道すべきなり。
会せるを不会と請益するゆえに、去。無、人、信、汝。というには、あらざるなり。
まことに、この僧にあらざらん張三李四なりとも、諸法実相なりとも、仏祖の命脈の正直に通ずる時、所には、実相の参学、かくのごとく現成するなり。
青原の会下に、これ、すでに現成せり。
しるべし。
実相は、嫡嫡、相承の正脈なり。
諸法は、究尽、参究の唯仏与仏なり。
唯仏与仏は、如是相好なり。

正法眼蔵　諸法実相
爾時、寛元元年癸卯、九月日、在、于、日本、越州、吉峰寺、示、衆。

# 密語

諸仏之所護念の大道を見成、公案するに、汝、亦、如是。吾、亦、如是。善、自、護持。いまに証契せり。

雲居山、弘覚大師、因、官人、送、供、問、曰、
世尊、有、密語、迦葉、不覆蔵。
如何、是、世尊、密語？

大師、召、云、
尚書。

其人、応諾。

大師、云、
会、麼？

尚書、曰、
不会。

大師、云、
汝、若、不会、世尊、密語。
汝、若、会、迦葉、不覆蔵。

大師は、青原、五世の嫡孫と現成して、天人師なり、尽十方界の大善知識なり。
有情を化し、無情を化す。
四十六仏の仏嫡として、仏祖のために説法す。
三峰庵主の住裏には、天厨送供す。
伝法、得道のときより、送供の境界を超越せり。
いまの道取する世尊、有、密語、迦葉、不覆蔵は、四十六仏の相承といえども、四十六代の本来、面目として、匪、従、人、得なり。
不、従、外、来なり。
不是、本、得なり。
未嘗、新条なり。

この一段事の密語の現成なる、ただ釈迦牟尼世尊のみ密語あるにあらず、諸仏祖、みな、密語あり。
すでに世尊なるは、かならず、密語あり。
密語あれば、さだめて、迦葉、不覆蔵あり。
百、千の世尊あれば、百、千の迦葉ある道理をわすれず参学すべきなり。
参学す、というは、一時、会取せん、とおもわず、百回、千回も審細、功夫して、かたきものをきらんと経営するがごとくすべし。
かたる人あらば、たちどころに会取すべし、とおもうべからず。
いま、雲居山、すでに世尊ならんに密語そなわり、不覆蔵の迦葉あり。
喚、尚書、書、応諾は、すなわち、密語なり、と参学することなかれ。
大師、ちなみに、尚書にしめすに、いわく、
汝、若、不会、世尊、密語。
汝、若、会、迦葉、不覆蔵。
いまの道取、かならず、多劫の弁道、功夫を立志すべし。
なんじ、もし不会なるは、世尊の密語なり。という。
いまの茫然とあるを不会というにあらず。
不知を不会というにあらず。
なんじ、もし不会、という道理、しずかに参学すべき処分を聴許するなり。
功夫、弁道すべし。
さらに、また、なんじ、もし会ならんは、と道取する。
いま、すでに会なるとにはあらず。
仏法を参学するに多途あり。
そのなかに、仏法を会し、仏法を不会する、関棙子あり。
正師をみざれば、ありとだにもしらず。
いたずらに絶見聞の眼処、耳処におおせて、密語あり、と乱会せり。
なんじ、もし会なる、ゆえに、迦葉、不覆蔵なる、というにあらず。
不会の不覆蔵もあるなり。
不覆蔵は、だれ人も見聞すべし、と学すべからず。
すでに、これ、不覆蔵なり。
無所不覆蔵ならん正恁麼時、こころみに参究すべし。
しかあれば、みずから、しらざらん境界を密語と参学しきたるにあらず。
仏法を不会する正当恁麼時、これ、一分の密語なり。
これ、かならず、世尊有なり、有世尊なり。
しかあるを、正師の訓教をきかざるともがら、たとえ獅子座上にあれども、夢也未見、者、箇道理なり。

かれら、みだりに、いわく、
世尊、有、密語とは、霊山、百万衆前に拈華瞬目せしなり。
そのゆえは、有言の仏説は浅薄なり。
名、相にわたれるがごとし。
無言説にして拈華瞬目する、これ、密語、施設の時節なり。
百万衆は不得、領覧なり。
このゆえに、百万衆のために、密語なり。
迦葉、不覆蔵というは、世尊の拈華瞬目を、迦葉、さきより、しれるがごとく破顔微笑するゆえに、迦葉におおせて不覆蔵というなり。
これ、真訣なり、と箇箇、相伝しきたれるなり。

これをききて、まこととおもうともがら、稲麻竹葦のごとく九州に叢林をなせり。
あわれむべし。
仏祖の道の破廃せること、もととして、これより、おこる。
明眼漢、まさに、一一に勘破すべし。
もし世尊の有言を浅薄なりとせば、拈華瞬目も浅薄なるべし。
世尊の有言もし名、相なりとせば、学仏法の漢にあらず。
有言は、名、相なることをしれりといえども、世尊に名、相なきことをいまだしらず。
凡情の未脱なるなり。
仏祖は、
身心の所通、みな、脱落なり。
説法なり。
有言説なり。
転法輪す。
これを見聞して得益するもの、おおし。
信行、法行のともがら、有仏祖所に化をこうむり、無仏祖所に化にあずかるなり。
百万衆、かならずしも拈華瞬目を拈華瞬目と見聞せざらんや？
迦葉と斉肩なるべし。
世尊と同生なるべし。
百万衆と、
同参なるべし。
同時、発心なるべし。
同道なり。

同国土なり。
有知の智をもって見仏聞法し、無知の智をもって見仏聞法す。
はじめて一仏をみるより、すすみて恒沙仏をみる。
一一の仏会上、ともに、百万億衆なるべし。
各各の諸仏、ともに、拈華瞬目の開演、おなじときなるを見聞すべし。
眼処、くらからず。
耳処、聡利なり。
心眼あり。
身眼あり。
心耳あり。
身耳あり。
迦葉の破顔微笑、爾、作麼生、会？
試、道、看。
なんだちが、いうがごとくならば、これも密語といいぬべし。
しかあれども、これを不覆蔵という。
至愚の、かさなれるなり。

のちに、世尊、いわく、
吾有、正法眼蔵、涅槃妙心、付属、摩訶迦葉。

かくのごとくの道取、これ、有言なりや？　無言なりや？
世尊もし有言をきらい、拈華を愛せば、のちにも拈華すべし。
迦葉なんぞ会取せざらん？
衆会なんぞ聴取せざらん？
かくのごときともがらの説話、もちいるべからず。
おおよそ、世尊に密語あり、密行あり、密証あり。
しかあるを、愚人、おもわく、
密は、他人の、しらず、みずからは、しり、しれる人あり、しらざる人あり、と。

西天、東地、古往今来、おもい、いうは、いまだ仏道の参学あらざるなり。
もし、かくのごとくいわば、世間、出世間の学業なきもののうえには密は、おおく、遍学のものは、密は、すくなかりぬべし。
広聞のともがらは、密あるべからざるか？
いわんや、天眼、天耳、法眼、法耳、仏眼、仏耳、等を具せんときは、すべて、密語、密意あるべからず、というべし。

仏法の密語、密意、密行、等は、この道理にあらず。
人にあう時節、まさに、密語をきき、密語をとく。
おのれをしるとき、密行をしるなり。
いわんや、仏祖、よく、上来の密意、密語を究弁す。
しるべし。
仏祖なる時節、まさに、密語、密行、きおい現成するなり。
いわゆる、密は、
親密の道理なり。
無間断なり。
蓋、仏祖なり。
蓋、汝なり。
蓋、自なり。
蓋、行なり。
蓋、代なり。
蓋、功なり。
蓋、密なり。
密語の、密人に相逢する、仏眼、也、覰、不見なり。
密行は、自他の所知にあらず。
密我、ひとり、能、知す。
密他、おのおの不会す。
密却、在、汝辺のゆえに、全靠密なり、一、半靠密なり。
かくのごとくの道理、あきらかに功夫、参学すべし。
おおよそ、為、人の所所、弁肯の時節、かならず、挙似、密なる、それ、仏仏、祖祖の正嫡なり。
而今、是、甚麼時節のゆえに、自己にも密なり、他己にも密なり、仏祖にも密なり、異類にも密なり。
このゆえに、密頭上、あらたに密なり。
かくのごとくの教行証、すなわち、仏祖なるがゆえに、透過、仏祖密なり。
しかあれば、透過、密なり。

雪竇師翁、示、衆、曰、
世尊、有、密語、迦葉、不覆蔵。
一夜、落華。
雨、満、城、流、水、香。

而今、雪竇、道の一夜、落華、雨、満、城、流、水、香。それ、親密なり。

これを挙似して、仏祖の眼睛、鼻孔を換点すべし。
臨済、徳山のおよぶべきところにあらず。
眼睛裏の鼻孔を参開すべし。
耳処の鼻頭を尖聡ならしむるなり。
いわんや、耳、鼻、眼睛裏、ふるきにあらず、あらたなるにあらざる、渾身心ならしむ。
これを華雨、世界起の道理とす。
師翁、道の満、城、流、水、香。それ、蔵、身、影、弥、露なり。
かくのごとくあるがゆえに、仏祖家裏の家常には、世尊、有、密語、迦葉、不覆蔵を参究、透過するなり。
七仏、世尊、ほとけごとに而今のごとく参学す。
迦葉、釈迦、おなじく、而今のごとく究弁しきたれり。

正法眼蔵　密語
爾時、寛元元年癸卯、九月二十日、在、越州、吉田県、吉峰古精舎、示、衆。

# 仏経

このなかに、教菩薩法あり、教諸仏法あり。
おなじく、これ、大道の調度なり。
調度、ぬしにしたがう。
ぬし、調度をつかう。
これによりて、西天、東地の仏祖、かならず、或、従、知識、或、従、経巻の正当恁麼時、おのおの発意、修行、証果、かつて間隙あらざるものなり。
発意も、経巻、知識により、
修行も、経巻、知識による。
証果も、経巻、知識に一親なり。
機先句後、おなじく、経巻、知識に同参なり。
機中句裏、おなじく、経巻、知識に同参なり。
知識は、かならず、経巻を通利す。
通利す、というは、
経巻を国土とし、経巻を身心とす。
経巻を為、他の施設とせり。
経巻を坐臥、経行とせり。
経巻を父母とし、経巻を児孫とせり。
経巻を行、解とせるがゆえに、これ、知識の、経巻を参究せるなり。
知識の洗面、喫茶、これ、古経なり。
経巻の、知識を出生する、というは、黄檗の六十、拄杖、よく、児孫を生長せしめ、黄梅の打、三杖、よく、伝衣、付、法せしむるのみにあらず。
桃華をみて悟道し、竹、響をききて悟道する、および、見、明星、悟道、みな、これ、経巻の、知識を生長せしむるなり。
あるいは、まなこをえて、経巻をうる、皮袋、拳頭あり。
あるいは、経巻をえて、まなこをうる、木杓、漆桶あり。
いわゆる、経巻は、尽十方界、これなり。
経巻にあらざる時、所なし。
勝義諦の文字をもちい、
世俗諦の文字をもちい、
あるいは、天上の文字をもちい、
あるいは、人間の文字をもちい、
あるいは、畜生道の文字をもちい、

あるいは、修羅道の文字をもちい、
あるいは、百草の文字をもちい、
あるいは、万木の文字をもちいる。
このゆえに、尽十方界に森森として羅列せる長短、方、円、青、黄、赤、白、しかしながら、経巻の文字なり、経巻の表面なり。
これを大道の調度とし、仏家の経巻とせり。
この経巻、よく、蓋時に流布し、蓋国に流通す。
教、人の門をひらきて、尽地の人家をすてず。
教、物の門をひらきて、尽地の物類をすくう。
教諸仏し、教菩薩するに、尽地、尽界なるなり。
開、方便門し、開、住位門して、一箇、半箇をすてず、示、真実相するなり。
この正恁麼時、あるいは、諸仏、あるいは、菩薩の、慮知念覚と無慮知念覚と、みずから、おのおの強為にあらざれども、この経巻をうるを各面の大期とせり。
必、得、是経のときは、古今にあらず。
古今は、得、経の時節なるがゆえに。
尽十方界の目前に現前せるは、これ、得、是経なり。
この経を読誦、通利するに、仏智、自然智、無師智、こころよりさきに現成し、身よりさきに現成す。
このとき、新条の特地、とあやしむことなし。
この経の、われらに受持、読誦せらるるは、経の、われらを摂取するなり。
文先、句外、向下、節上の消息、すみやかに散華、貫華なり。
この経を、すなわち、法となづく。
これに八万四千の説法蘊あり。
この経のなかに、成、等正覚の諸仏なる文字あり、現住、世間の諸仏なる文字あり、入、般涅槃の諸仏なる文字あり。
如来、如去、ともに、経中の文字なり、法上の法文なり。
拈華瞬目、微笑破顔、すなわち、七仏、正伝の古経なり。
腰雪断臂、礼拝得髄、まさしく、師資、相承の古経なり。
ついに、すなわち、伝法、付、衣する、これ、すなわち、広文全巻を付属せしむる時節、至なり。
みたび臼をうち、みたび箕の米をひる、経の、経を出、手せしめ、経の、経に正嗣するなり。
しかのみにあらず、是、什麼物、恁麼、来、これ、教諸仏の千経なり、教菩薩の万経なり。

説、似、一物、即、不中、よく、八万蘊をとき、十二部をとく。
いわんや、拳頭、脚跟、拄杖、払子、すなわち、古経、新経なり、有経、空経なり。
在、衆、弁道、功夫、坐禅、もとより、頭正、也、仏経なり、尾正、也、仏経なり。
菩提葉に経し、虚空面に経す。
おおよそ、仏祖の一動、両静、あわせて把定、放行、おのれずから仏経の巻、舒なり。
窮極あらざるを窮極の標準と参学するゆえに、鼻孔より受経、出経す。
脚尖よりも、受経、出経す。
父母未生前にも、受経、出経あり。
威音王以前にも、受経、出経あり。
山河大地をもって、経をうけ、経をとく。
日月星辰をもって、経をうけ、経をとく。
あるいは、空劫以前の自己をして、経を持し、経をさずく。
あるいは、面目以前の身心をもって、経を持し、経をさずく。
かくのごとくの経は、微塵を破して出現せしむ、法界を破して、いださしむるなり。

第二十七祖、般若多羅、尊者、道、
貧道、
出息、不随、衆縁。
入息、不居、蘊界。
常、転、如是経、百、千、万、億巻。
非、但、一巻、両巻。

かくのごとくの祖師、道を聞取して、出息、入息のところに転、経せらるることを参学すべし。
転、経をしるがごときは、在、経のところをしるべきなり。
能転、所転、転経、経転なるがゆえに、悉、知、悉、見なるべきなり。

先師、尋常、道、
我箇裏、不用、焼香、礼拝、念仏、修懺、看経。
祗管、打坐、弁道、功夫、身心脱落。

かくのごとくの道取、あきらむるともがら、まれなり。

ゆえは、いかん？
看経をよんで看経とすれば、触す。
よんで看経とせざれば、そむく。
不得、有語。
不得、無語。
速、道。
速、道。
この道理、参学すべし。
この宗旨あるゆえに、
古人、云、
看経、須、具、看経眼。

まさに、しるべし。
古今に、もし経なくば、かくのごときの道取あるべからず。
脱落の看経あり、不用の看経あること、参学すべきなり。
しかあれば、すなわち、参学の一箇、半箇、かならず、仏経を伝持して仏子なるべし。
いたずらに外道の邪見をまなぶことなかれ。
いま、現成せる正法眼蔵は、すなわち、仏経なるがゆえに、あらゆる仏経は、正法眼蔵なり。
一異にあらず。
自他にあらず。
しるべし。
正法眼蔵、そこばく、おおしといえども、なんだち、ことごとく開明せず。
しかあれども、正法眼蔵を開演す、信ぜざることなし。
仏経も、しかあるべし。
そこばく、おおしといえども、信受、奉行せんこと、一偈、一句なるべし。
八万を解会すべからず、仏経の達者にあらざればとて、みだりに、仏経は仏法にあらず、ということなかれ。
なんだちが仏祖の骨髄を称し、きこゆるも、正眼をもって、これをみれば、依、文の晩進なり。
一句、一偈を受持せるに、ひとしかるべし。
一句、一偈の受持におよばざることも、あるべし。
この薄解をたのんで、仏正法を謗ずることなかれ。
声、色の、仏経よりも功徳なる、あるべからず。
声、色の、なんじを惑乱する、なお、もとめ、むさぼる。

仏経の、なんじを惑乱せざる。
信ぜずして謗ずることなかれ。
しかあるに、大宋国の一、二百余年の前後に、あらゆる杜撰の臭皮袋、いわく、
祖師の言句、なお、こころにおくべからず。
いわんや、経教は、ながく、みるべからず、もちいるべからず。
ただ身心をして枯木死灰のごとくなるべし。
破木杓、脱底桶のごとくなるべし。

かくのごとくのともがら、いたずらに外道、天魔の流類となれり。
もちいるべからざるをもとめて、もちいる。
これによりて、仏祖の法、むなしく狂顛の法となれり。
あわれむべし。
かなしむべし。
たとえ破木杓、脱底桶も、すなわち、仏祖の古経なり。
この経の巻数、部、帙、きわむる仏祖、まれなるなり。
仏経を仏法にあらずというは、仏祖の、経をもちいし時節をうかがわず、仏祖の、従、経、出の時節を参学せず、仏祖と仏経との親、疎の量をしらざるなり。
かくのごとくの杜撰のやから、稲麻竹葦のごとし。獅子の座にのぼり、人、天の師として、天下に叢林をなせり。
杜撰は、杜撰に学せるがゆえに、杜撰にあらざる道理をしらず。
しらざれば、ねがわず。
従、冥、入、於、冥。
あわれむべし。
いまだかつて仏法の身心なければ、身儀、心操、いかにあるべし、としらず。
有、空のむね、あきらめざれば、人もし問取するとき、みだりに拳頭をたつ。
しかあれども、たつる宗旨にくらし。
正、邪のみち、あきらめざれば、人もし問取すれば、払子をあぐ。
しかあれども、あぐる宗旨にあきらかならず。
あるいは、為、人の手をさずけんとするには、臨済の四料簡、四照用、雲門の三句、洞山の三路、五位、等を挙して、学道の標準とせり。

先師、天童和尚、よのつねに、これをわらうて、いわく、
学、仏、あに、かくのごとくならんや？
仏祖、正伝する大道、おおく心にこうむらしめ、身にこうむらしむ。

これを参学するに、参究せんと擬するに、いとまあらず。
なんの間暇ありてか晩進の言句をいれん？
まことに、しるべし。
諸方、長老、無道心にして、仏法の身心を参学せざること、あきらけし。

先師の示衆、かくのごとし。
まことに、臨済は、黄檗の会下に後生なり。
六十、拄杖をこうむりて、ついに、大愚に参ず。
老婆心話のしたに、従来の行履を照顧して、さらに、黄檗にかえる。
このこと、雷聞せるゆえに、黄檗の仏法は臨済ひとり相伝せり、とおもえり。
あまりさえ、黄檗にも、すぐれたり、とおもえり。
まったく、しかにはあらざるなり。
臨済は、わずかに黄檗の会にありて随衆すといえども、陳尊宿、すすむるとき、なにごとをとうべし、としらず、という。
大事、未明のとき、参学の玄侶として、立地、聴法せんに、あに、しかのごとく茫然とあらんや？
しるべし、上上の機にあらざることを。
また、臨済、かつて勝、師の志気あらず、過、師の言句きこえず。
黄檗は、勝、師の道取あり、過、師の大智あり。
仏、未道の道を道得せり。
祖、未会の法を会得せり。
黄檗は、超越、古今の古仏なり。
百丈よりも、尊長なり。
馬祖よりも、英俊なり。
臨済に、かくのごとくの秀気あらざるなり。
ゆえは、いかん？
古来、未道の句、ゆめにもいまだ、いわず。
ただ多を会して一をわすれ、一を達して多にわずらうがごとし。
あに、四料簡、等に道味ありとして、学、法の指南とせんや？
雲門は、雪峰の門人なり。
人天の大師に堪為なりとも、なお、学地というつべし。
これらをもって得、本とせん、ただ、これ、愁、末なるべし。
臨済、いまだきたらず、雲門、いまだいでざりしときは、仏祖、なにをもってか学道の標準とせし？
かるがゆえに、しるべし。
かれらが屋裏に仏家の道業つたわれざるなり。

憑拠すべきところなきがゆえに、みだりに、かくのごとく胡乱説道するなり。
このともがら、みだりに仏経をさみす。
人、これに、したがわざれ。
もし仏経、なげすつべくば、臨済、雲門をも、なげすつべし。
仏経もし、もちいるべからずば、のむべき水もなし、くむべき杓もなし。
また、高祖の三路、五位は、節目にて、杜撰のしるべき境界にあらず。
宗旨、正伝し、仏業、直指せり。
あえて余門に、ひとしからざるなり。

また、杜撰のともがら、いわく、
道教、儒教、釈教、ともに、その極致は、一揆なるべし。
しばらく、入門の別あるのみなり。

あるいは、これを鼎の三脚にたとう。
これ、いまの大宋国の諸僧の、さかりに談ずるむねなり。
もし、かくのごとく、いわば、これらのともがらがうえには、仏法、すでに地をはらうて滅没せり。
また、仏法、かつて微塵のごとくばかりも、きたらず、というべし。
かくのごとくのともがら、みだりに仏法の通塞を道取せんとして、あやまりて、仏経は、不中用なり。祖師の門下に別伝の宗旨あり。という。
小量の機根なり。
仏道の辺際をうかがわざるゆえなり。
仏経、もちいるべからず、といわば、祖経あらんとき、もちいるや？　もちいるべからずや？
祖道に仏経のごとくなる法、おおし。
用、捨、いかん？
もし、仏道のほかに祖道あり。といわば、だれが祖道を信ぜん？
祖師の、祖師とあることは、仏道を正伝するによりてなり。
仏道を正伝せざらん祖師、だれが祖師といわん？
初祖を崇敬することは、第二十八祖なるゆえなり。
仏道のほかに祖道をいわば、十祖、二十祖、たてがたからん。
嫡嫡、相承するによりて、祖師を恭敬するゆえは、仏道の、おもきによりてなり。
仏道を正伝せざらん祖師は、なんの面目ありてか人、天と相見せん？
いわんや、仏を慕う、深き志を翻して、あらたに仏道にあらざらん祖師にしたがいがたきなり。

いま、杜撰の狂者、いたずらに仏道を軽忽するは、仏道、所有の法を決択すること、あたわざるによりてなり。
しばらく、かの道教、儒教をもって仏教に比する愚痴の、かなしむべきのみにあらず、罪業の因縁なり、国土の衰弊なり。
三宝の陵夷なるがゆえに。
孔、老の道、いまだ阿羅漢に同ずべからず。
いわんや、等覚、妙覚におよばんや？
孔、老の教は、わずかに聖人の視聴を天地、乾坤の大象にわきまうとも、大聖の因果を一生、多生に、あきらめがたし。
わずかに身心の動静を無為の為にわきまうとも、尽十方界の真実を無尽際断に、あきらむべからず。
おおよそ、孔、老の教の、仏教よりも、劣なること、天地懸隔の論におよばざるなり。
これをみだりに一揆に論ずるは、謗、仏法なり、謗、孔、老なり。
たとえ孔、老の教に精微ありとも、近来の長老、等、いかにしてか、その少分をも、あきらめん？
いわんや、万期に大柄をとらんや？
かれにも教訓あり、修練あり。
いまの庸流、たやすくすべきにあらず。
修し、こころむるともがら、なお、あるべからず。
一微塵、なお、他塵に同ずべからず。
いわんや、仏道の奥玄ある、いまの晩進、いかでか弁肯することあらん？
両頭、ともに、あきらかならざるに、いたずらに一致の胡説乱道するのみなり。
大宋、いま、かくのごとくのともがら、師号に署し、師職におり、古今に無慚なるをもって、おろかに仏道を乱弁す。
仏法ありと聴許しがたし。
しかのごとくの長老、等、かれこれ、ともに、いわく、
仏経は、仏道の本意にあらず。
祖伝、これ、本意なり。
祖伝に奇特玄妙つたわれり。

かくのごとくの言句は、至愚の、はなはだしきなり、狂顛の、いうところなり。
祖師の正伝に、まったく、一言、半句としても、仏経に違せる奇特あらざるなり。

仏経と祖、道と、おなじく、これ、釈迦牟尼仏より正伝、流布しきたれるのみなり。
ただし、祖伝は、嫡嫡、相承せるのみなり。
しかあれども、
仏経をいかでか、しらざらん？
いかでか、あきらめざらん？
いかでか読誦せざらん？

古徳、いわく、
なんじ、経にまどう。
経、なんじをまよわさず。

古徳、看経の因縁、おおし。
杜撰にむかうて、いうべし、
なんぢが、いうがごとく、仏経もし、なげすつべくば、仏心も、なげすつべし。仏身も、なげすつべし。
仏身心なげすつべくば、仏子なげすつべし。
仏子なげすつべくば、仏道なげすつべし。
仏道なげすつべくば、祖、道なげすてざらんや？
仏道、祖、道、ともに、なげすてば、一枚の禿子の百姓ならん。
だれが、なんじを喫、棒の分なし、と、いわん？
ただ王臣の駆使のみにあらず、閻老のせめ、あるべし。
近来の長老、等、わずかに王、臣の帖をたずさえて、梵刹の主人というをもって、かくのごとくの狂言あり。
是非を弁ずるに人なし。
ひとり先師のみ、このともがらをわらう。
余山の長老、等、すべて、しらざるところなり。

おおよそ、異域の僧侶なれば、あきらむる道かならず、あるらん、とおもい、大国の帝師なれば、達せるところ、さだめて、あるらん、とおもうべからず。
異域の衆生、かならずしも僧種にたえず。
善、衆生は、善なり。
悪、衆生は、悪なり。
法界の、いく三界も、衆生の種品、おなじかるべきなり。
また、大国の帝師となること、かならずしも有道をえらばれず。
帝者、また、有道をしりがたし。

わずかに臣の挙をききて登用するのみなり。
古今に有道の帝師あり。
有道にあらざる帝師、おおし。
にごれる代に登用せらるるは、無道の人なり。
にごれる世に登用せられざるは、有道の人なり。
そのゆえは、いかん？
知、人のとき、不知、人のとき、あるゆえなり。
黄梅のむかし、神秀あることをわすれざるべし。
神秀は、帝師なり。
簾前に講、法す。
箔前に説法す。
しかのみにあらず、七百高僧の上座なり。
黄梅のむかし、盧行者あること、信ずべし。
樵夫より行者にうつる。
搬、柴をのがるとも、なお、碓、米を職とす。
卑賤の身うらむべしといえども、出俗、越僧、得法、伝衣、かつて、いまだ、むかしも、きかざるところ、西天にも、なし。
ひとり東地にのこれる希代の高躅なり。
七百の高僧も、かたを比せず。
天下の龍象、あとをたずぬる分なきがごとし。
まさしく、第三十三代の祖位を嗣続して仏嫡なり。
五祖、知、人の知識にあらずば、いかでか、かくのごとくならん？
かくのごとくの道理、しずかに思惟すべし。
卒爾にすることなかれ。
知、人のちからをえんことをこいねがうべし。
人をしらざるは、自他の大患なり、天下の大患なり。
広学、措大は、要にあらず。
知、人のまなこ、知、人の力量、いそぎて、もとむべし。
もし知、人のちからなくば、曠劫に沈淪すべきなり。
しかあれば、すなわち、仏道に、さだめて仏経あることをしり、広文深義を山海に参学して、弁道の標準とすべきなり。

正法眼蔵　仏経
爾時、寛元元年癸卯、秋、九月、庵居、于、越州、吉田県、吉峰寺、示、衆。

# 無情説法

説法、於、説法するは、仏祖、付属、於、仏祖の見成公案なり。
この説法は、法、説なり。
有情にあらず。
無情にあらず。
有為にあらず。
無為にあらず。
有為、無為の因縁にあらず。
従、縁起の法にあらず。
しかあれども、鳥道に不行なり、仏衆に為与す。
大道、十成するとき、説法、十成す。
法蔵、付属するとき、説法、付属す。
拈華のとき、拈、説法あり。
伝衣のとき、伝、説法あり。
このゆえに、諸仏、諸祖、おなじく、威音王以前より、説法に奉覲しきたり、諸仏以前より、説法に本、行しきたれるなり。
説法は、仏祖の理しきたるとのみ参学することなかれ。
仏祖は、説法に理せられたるなり。
この説法、わずかに八万四千門の法蘊を開演するのみにあらず、無量、無辺門の説法蘊あり。
先仏の説法を後仏は説法すと参学することなかれ。
先仏きたりて後仏なるにあらざるがごとく、説法も先説法を後説法とするにはあらず。
このゆえに、
釈迦牟尼仏、道、
如、三世諸仏、説法之儀式、我、今、亦、如是、説、無分別法。

しかあれば、すなわち、諸仏の、説法を使用するがごとく、諸仏は、説法を使用するなり。
諸仏の、説法を正伝するがごとく、諸仏は、説法を正伝するによりて、古仏より七仏に正伝し、七仏より、いまに正伝して、無情説法あり。
この無情説法に、諸仏あり、諸祖あるなり。
我、今、説、法は、正伝にあらざる新条と学することなかれ。
古来、正伝は、旧窠の鬼窟と証することなかれ。

大唐国、西京、光宅寺、大証国師、因、僧、問、
無情、還、解、説法？　否？

国師、云、
常、説、熾然。
説、無間歇。

僧、曰、
某甲、為、甚麼、不聞？

国師、云、
汝、
自、不聞。
不可、妨、他聞者、也。

僧、曰、
未審。
什麼人、得、聞？

国師、云、
諸聖、得、聞。

僧、曰、
和尚、還、聞？　否？

国師、云、
我、不聞。

僧、曰、
和尚、既、不聞。
争、知、無情、解、説法？

国師、云、
頼、我、不聞。
我、若、聞、則、斉、於、諸聖。汝、即、不聞、我説法。

僧、曰、

恁麼、則、衆生、無、分、也。

国師、云、
我、
為、衆生、説。
不、為、諸聖、説。

僧、曰、
衆生、聞後、如何？

国師、云、
即、非、衆生。

無情説法を参学せん初心、晩学、この国師の因縁を直、須、勤学すべし。
常、説、熾然。説、無間歇。とあり。
常は、諸時の一分時なり。
説、無間歇は、説、すでに現出するがごときは、さだめて無間歇なり。
無情説法の儀、かならずしも、有情のごとくにあらんずると参学すべからず。
有情の音声、および、有情説法の儀のごとくなるべきがゆえに、有情界の音声をうばうて、無情界の音声に擬するは、仏道にあらず。
無情説法、かならずしも声塵なるべからず。
たとえば、有情の説法、それ、声塵にあらざるがごとくなり。
しばらく、いかなるか有情？　いかなるか無情？　と問自、問他、功夫、参学すべし。
しかあれば、無情説法の儀、いかにか、あるらん？　と審細に留心、参学すべきなり。
愚人、おもわくは、樹林の鳴条する、葉、華の開、落するを無情説法と認ずるは、学、仏法の漢にあらず。

もし、しかあらば、だれが無情説法をしらざらん？　だれが無情説法をきかざらん？
しばらく回光すべし。
無情界には、草木、樹林ありや？　なしや？
無情界は、有情界にまじわれりや？　いなや？
しかあるを、草木、瓦礫を認じて無情とするは、不、遍学なり。
無情を認じて草木、瓦礫とするは、不、参飽なり。

たとえ、いま、人間の所見の草木、等を認じて無情に擬せんとすとも、草木、等も、凡慮のはかるところにあらず。
ゆえ、いかん？　となれば、
天上、人間の樹林、はるかに殊異あり。
中国、辺地の所生、ひとしきにあらず。
海裏、山間の草木、みな、不同なり。
いわんや、
空におうる樹木あり。
雲におうる樹木あり。
風、火、等のなかに、所生長の百草、万樹、おおよそ、有情と学しつべき、あり。無情と認ぜられざる、あり。
草木の人畜のごとくなる、あり。
有情、無情、いまだ、あきらめざるなり。
いわんや、仙家の樹、石、華、果、湯、水、等、みるに疑著およばずとも、説著せんに、かたからざらんや？
ただ、わずかに神州一国の草木をみ、日本一州の草木を慣習して、万方、尽界も、かくのごとくあるべし、と擬議、商量することなかれ。
国師、道、
諸聖、得、聞。
いわく、無情説法の会下には、諸聖、立地、聴するなり。
諸聖と無情と、聞を現成し、説を現成せしむ。
無情、すでに諸聖のために説法す。
聖なりや？
凡なりや？
あるいは、無情説法の儀をあきらめおわりなば、諸聖の所聞かくのごとくありと体達すべし。
すでに体達することをえては、聖者の境界をはかりしるべし。
さらに、超凡越聖の通霄路の行履を参学すべし。
国師、いわく、
我、不聞。
この道も、容易、会なりと擬することなかれ。
超凡越聖にして不聞なりや？
擘破凡聖窠窟のゆえに、不聞なりや？
恁麼、功夫して、道取を現成せしむべし。
国師、いわく、

頼、我、不聞。
我、若、聞、則、斉、於、諸聖。
この挙似、これ、一道、両道にあらず。
頼、我は、凡、聖にあらず。
頼、我は、仏祖なるべきか？
仏祖は、超凡越聖するゆえに、諸聖の所聞には一斉ならざるべし。
国師、道の汝、即、不聞、我説法の理道を修、理して、諸仏、諸聖の菩提を料理すべきなり。
その宗旨は、いわゆる、無情説法、諸聖、得、聞。
国師説法、這僧、得、聞なり。
この理道を参学、功夫の日深月久とすべし。
しばらく、国師に問著すべし。
衆生、聞後は、とわず。
衆生、正当聞説法時、如何？

高祖、洞山、悟本大師、参、曩祖、雲巌大和尚、問、曰、
無情説法、什麼人、得、聞？

雲巌、曩祖、云、
無情説法、無情、得、聞。

高祖、曰、
和尚、聞？　否？

曩祖、云、
我、若、聞、汝、即、不得、聞、吾説法、也。

高祖、曰、
若、恁麼、即、某甲、不聞、和尚説法、也。

曩祖、云、
我説法、汝、尚、不聞。
何、況、無情説法、也。

高祖、乃、述、偈、呈、曩祖、曰、
也、太奇。
也、太奇。

無情説法、不思議。
若、将、耳、聴、終、難、会。
眼処、聞、声、方、得、知。

いま、高祖、道の無情説法、什麼人、得、聞？　の道理、よく、一生、多生の功夫を審細にすべし。
いわゆる、この問著、さらに、道著の功徳を具すべし。
この道著の皮肉骨髄あり、以心伝心のみにあらず。
以心伝心は、初心、晩学の弁肯なり。
衣を挙して正伝し、法を拈じて正伝する、関棙子、あり。
いまの人、いかでか三秋四月の功夫に究竟することあらん？
高祖、かつて大証、道の無情説法、諸聖、得、聞の宗旨を見聞せりといえども、いま、さらに、無情説法、什麼人、得、聞？　の問著あり。
これ、
肯、大証道なりとやせん？
不肯、大証道なりとやせん？
問著なりとやせん？
道著なりとやせん？
もし総、不肯、大証、争、得、恁麼道？
もし総、肯、大証、争、解、恁麼道？　なり。
曩祖、雲巌、云、
無情説法、無情、得、聞。
この血脈を正伝して、身心脱落の参学あるべし。
いわゆる、無情説法、無情、得、聞は、諸仏説法、諸仏、得、聞の性、相なるべし。
無情説法を聴取せん衆会、たとえ有情、無情なりとも、たとえ凡夫、賢、聖なりとも、これ、無情なるべし。
この性、相によりて、古今の真偽を批判すべきなり。
たとえ西天より将来すとも、正伝、まことの祖師にあらざらんは、もちいるべからず。
たとえ千、万年より習学すること連綿なりとも、嫡嫡、相承にあらずは、嗣続しがたし。
いま、正伝、すでに東土に通達せり。
真偽の通塞、わきまえやすからん。
たとえ衆生説法、衆生、得、聞の道取を聴取しても、諸仏、諸祖の骨髄を稟受しつべし。

雲巌、曩祖の道を聞取し、大証国師の道を聴取して、まさに与、奪せば、諸聖、得、聞の道取する諸聖は無情なるべし。
無情、得、聞と道取する無情は、諸聖なるべし。
無情所説、無情なり。
無情説法、即、無情なるがゆえに。
しかあれば、すなわち、無情説法なり、説法、無情なり。
高祖、道の若、恁麼、則、某甲、不聞、和尚説法、也。
いま、きくところの若、恁麼は、無情説法、無情、得、聞の宗旨を挙拈するなり。
無情説法、無情、得、聞の道理によりて、某甲、不聞、和尚説法、也なり。
高祖、このとき、無情説法の席末を接するのみにあらず、為、無情、説法の志気あらわれて衝、天するなり。
ただ無情説法を体達するのみにあらず、無情説法の聞、不聞を体究せり。
すすみて、有情説法の説、不説、已説、今説、当説にも体達せしなり。
さらに、聞、不聞の説法の、これは有情なり、これは無情なる道理、あきらめおわりぬ。
おおよそ、聞法は、ただ耳根、耳識の境界のみにあらず。
父母未生已前、威音以前、乃至、尽未来際、無尽未来際にいたるまでの挙力、挙心、挙体、挙道をもって聞法するなり。
身先心後の聞法あるなり。
これらの聞法、ともに、得、益あり。
心識に縁せざれば、聞法の益あらず、ということなかれ。
心滅、身没のもの、聞法、得、益すべし。
無心、無身のもの、聞法、得、益すべし。
諸仏、諸祖、かならず、かくのごとくの時節を経歴して、作仏し成祖するなり。
法力の身心を接する、凡慮、いかにしてか覚知しつくさん？
身心の際限、みずから、あきらめつくすこと、えざるなり。
聞法功徳の、身心の田地に下種する、くつる時節あらず。
ついに、生長、ときとともにして、果、成、必然なるものなり。
愚人、おもわくは、
たとえ聞法おこたらずとも、解路に進歩なく、記持に不敢ならんは、その益あるべからず。
人、天の身心を挙して、博記、多聞ならん。
これ、至要なるべし。

即座に忘記し、退席に茫然とあらん、なにの益が、あらん？
と、おもい、
なにの学功か、あらん？
というは、正師にあわず、その人をみざるゆえなり。
正伝の面授あらざるを正師にあらず、とはいう。

仏仏、正伝しきたれるは、正師なり。
愚人のいう心識に記持せられて、しばらく、わすれざるは、聞法の功、いささか心識にも蓋心蓋識する時節なり。
この正当恁麼時は、蓋身、蓋身先、蓋心、蓋心先、蓋心後、蓋因縁報業相性体力、蓋仏、蓋祖、蓋自他、蓋皮肉骨髄、等の功徳あり。
蓋言説、蓋坐臥、等の功徳、現成して、弥綸、弥天なるなり。
まことに、かくのごとくある聞法の功徳、たやすく、しるべきにあらざれども、仏祖の大会に会して、皮肉骨髄を参究せん、説法の功力、ひかざる時節あらず。
聞法の法力、こうむらしめざるところ、あるべからず。
かくのごとくして時節、劫波を頓漸ならしめて、結果の現成をみるなり。
かの多聞、博記も、あながちに、なげすつべきにあらざれども、その一隅をのみ要機とするには、あらざるなり。
参学、これをしるべし。
高祖、これを体達せしなり。
曩祖、道、
我説法、汝、尚、不聞。
何、況、無情説法、也。
これは、高祖、たちまちに証上に、なお、証契を証しもってゆく現成を曩祖、ちなみに、開襟して父祖の骨髄を印証するなり。
なんじ、なお、我説に不聞なり。
これ、凡流の、しかあるにあらず。
無情説法、たとえ万端なりとも、為、慮あるべからず、と証明するなり。
このときの嗣続、まことに、秘要なり。
凡、聖の境界、たやすく、および、うかがうべきにあらず。
高祖、ときに、偈を理して、雲巌、曩祖に呈するに、いわく、
無情説法、不思議は、也、太奇。也、太奇。なり。
しかあれば、無情、および、無情説法、ともに、思議すべきこと、かたし。
いわくの無情、なにものなりとかせん？
凡、聖にあらず、情、無情にあらず、と参学すべし。

凡、聖、情、無情は、説、不説、ともに、思議の境界およびぬべし。
いま、不思議にして太奇なり、また、太奇ならん。
凡夫、賢、聖の智慧、心識、およぶべからず。
天衆、人間の籌量にかかわるに、あらざるべし。
若、将、耳、聴、終、難、会は、たとえ天耳なりとも、たとえ弥界、弥時の法耳なりとも、将、耳、聴を擬するには、終、難、会なり。
壁上耳、棒頭耳ありとも、無情説法を会すべからず。
声塵にあらざるがゆえに。
若、将、耳、聴は、なきにあらず。
百、千劫の功夫をついやすとも、終、難、会なり。
すでに声色のほかの一道の威儀なり。
凡、聖のほとりの窠窟にあらず。
眼処、聞、声、方、得、知。
この道取を箇箇、おもわくは、いま、人眼の所見する草木、華、鳥の往来を眼処の聞声というならん、とおもう。
この見所は、さらに、あやまりぬ。
まったく仏法にあらず。
仏法は、かくのごとくいう道理なし。
高祖、道の眼処、聞、声の参学するには、聞、無情説法声のところ、これ、眼処なり。
現、無情説法声のところ、これ、眼処なり。
眼処、さらに、ひろく参究すべし。
眼処の聞、声は、耳処の聞、声に、ひとしかるべきがゆえに、眼処の聞、声は、耳処の聞、声に、ひとしからざるなり。
眼処に耳根あり、と参学すべからず。
眼、即、耳と参学すべからず。
眼裏、声、現と参学すべからず。

古、云、
尽十方界、是、沙門、一隻眼。

この眼処に聞、声せば、高祖、道の眼処、聞、声ならんと擬議、商量すべからず。
たとえ古人、道の尽十方界、一隻眼の道を学すとも、尽十方は、これ、一隻眼なり。
さらに、

千手頭眼あり。
千正法眼あり。
千耳眼あり。
千舌頭眼あり。
千心頭眼あり。
千通心眼あり。
千通身眼あり。
千棒頭眼あり。
千身先眼あり。
千心先眼あり。
千死中死眼あり。
千活中活眼あり。
千自眼あり。
千他眼あり。
千眼頭眼あり。
千参学眼あり。
千竪眼あり。
千横眼あり。
しかあれば、尽眼を尽界と学すとも、なお、眼処に体究あらず。
ただ聞、無情説法を眼処に参究せんことを急務すべし。
いま、高祖、道の宗旨は、
耳処は、無情説法に難、会なり。
眼処は、聞、声す。
さらに、
通身処の聞、声あり。
遍身処の聞、声あり。
たとえ眼処、聞、声を体究せずとも、無情説法、無情、得、聞を体達すべし、
脱落すべし。
この道理、つたわれるゆえに、
先師、天童古仏、道、
胡蘆、藤種、纏、胡蘆。

これ、曩祖の正眼のつたわれ、骨髄のつたわれる、説法、無情なり。
一切説法、無情なる道理によりて、無情説法なり。
いわゆる、典故なり。
無情は、為、無情、説法なり。

喚、什麼、作、無情？
しるべし。
聴無情説法者、是なり。
喚、什麼、作、説法？
しるべし。
不知吾無情者、是なり。

舒州、投子山、慈済大師、(嗣、翠微無学禅師。諱、大同。明覚、云、投子、古仏。)、因、僧、問、
如何、是、無情説法？
師、云、
莫、悪口。

いま、この投子の道取するところ、まさしく、これ、古仏の法謨なり、祖宗の治象なり。
無情説法、ならびに、説法、無情、等、おおよそ、莫、悪口なり。
しるべし。
無情説法は、仏祖の総章、これなり。
臨済、徳山のともがら、しるべからず。
ひとり仏祖なるのみ参究す。

正法眼蔵　無情説法
爾時、寛元元年癸卯、十月二日、在、越州、吉田県、吉峰寺、示、衆。

# 法性

あるいは、経巻にしたがい、あるいは、知識にしたがいて、参学するに、無師独悟するなり。
無師独悟は、法性の施為なり。
たとえ生知なりとも、かならず、尋師訪道すべし。
たとえ無生知なりとも、かならず、功夫、弁道すべし。
いずれの箇箇が生知にあらざらん？
仏果、菩提にいたるまでも、経巻、知識にしたがうなり。
しるべし。
経巻、知識にあうて法性三昧をうるを法性三昧にあうて法性三昧をうる生知という。
これ、
宿住智をうるなり。
三明をうるなり。
阿耨菩提を証するなり。
生知にあうて生知を習学するなり。
無師智、自然智にあうて、無師智、自然智を正伝するなり。
もし生知にあらざれば、経巻、知識にあうといえども、法性をきくこと、えず、法性を証すること、えざるなり。
大道は、如、人、飲、水、冷暖、自、知の道理には、あらざるなり。
一切諸仏、および、一切菩薩、一切衆生は、みな、生知のちからにて、一切法性の大道をあきらむるなり。
経巻、知識にしたがいて法性の大道をあきらむるをみずから法性をあきらむるとす。
経巻、これ、法性なり、自己なり。
知識、これ、法性なり、自己なり。
法性、これ、知識なり。
法性、これ、自己なり。
法性、自己なるがゆえに、外道、魔党の邪計せる自己にはあらざるなり。
法性には、外道、魔党なし。
ただ喫粥来、喫飯来、点茶来のみなり。
しかあるに、三、二十年の久学と自称するもの、法性の談を見聞するとき、茫然のなかに一生を蹉過す。

飽、叢林と自称して曲木の牀にのぼるもの、法性の声をきき、法性の色をみるに、身心依正、よのつねに紛然の窟坑に昇降するのみなり。
その、ていたらくは、いま、見聞する三界、十方、撲落してのち、さらに法性あらわるべし。かの法性は、いまの万象森羅にあらず、と邪計するなり。
法性の道理、それ、かくのごとくなるべからず。
この森羅万象と法性と、はるかに同異の論を超越せり。
離、即の談を超越せり。
過、現、当来にあらず。
断常にあらず。
色受想行識にあらざるゆえに、法性なり。

洪州、江西、馬祖、大寂禅師、云、
一切衆生、従、無量劫来、不出、法性三昧。
長、在、法性三昧中、
著、衣、
喫、飯、
言談、祇対、
六根、運用、
一切施為、
尽、是、法性。

馬祖、道の法性は、法性、道の法性なり。
馬祖と同参す、法性と同参なり。
すでに聞著あり。
なんぞ道著なからん？
法性、騎、馬祖なり。
人、喫、飯。
飯、喫、人。なり。
法性より、このかた、かつて法性三昧をいでず。
法性よりのち、法性をいでず。
法性よりさき、法性をいでず。
法性と、ならびに、無量劫は、これ、法性三昧なり。
法性を無量劫という。
しかあれば、即、今の遮裏は、法性なり。
法性は、即、今の遮裏なり。
著、衣、喫、飯は、法性三昧の著、衣、喫、飯なり。

衣、法性、現成なり。
飯、法性、現成なり。
喫、法性、現成なり。
著、法性、現成なり。
もし著、衣、喫、飯せず、言談、祇対せず、六根、運用せず、一切施為せざれば、法性三昧にあらず。
不入、法性なり。
即、今の道、現成は、諸仏、相授して釈迦牟尼仏にいたり、諸祖、正伝して馬祖にいたれり。
仏仏、祖祖、正伝、授手して、法性三昧に正伝せり。
仏仏、祖祖、不入にして法性を活鱍鱍ならしむ。
文字の法師、たとえ法性の言ありとも、馬祖、道の法性にはあらず。
不出、法性の衆生、さらに法性にあらざらんと擬するちから、たとえ得所ありとも、あらたに、これ、法性の三、四枚なり。
法性にあらざらんと言談、祇対、運用、施為する、これ、法性なるべきなり。
無量劫の日月は、法性の経歴なり。
現在、未来も、また、かくのごとし。
身心の量を身心の量として、法性にとおし、と思量する、この思量、これ、法性なり。
身心量を身心量とせずして、法性にあらず、と思量する、この思量、これ、法性なり。
思量、不思量、ともに、法性なり。
性といいぬれば、水も流通すべからず、樹も栄枯なかるべしと学するは、外道なり。

釈迦牟尼仏、道、
如是相、如是性。

しかあれば、開華、葉落、これ、如是性なり。
しかあるに、愚人、おもわくは、法性界には開華、葉落あるべからず、と。
しばらく、他人に疑問すべからず。
なんじが疑著を道著に依模すべし。
他人の説著のごとく挙して、三復、参究すべし。
さきより脱出あらん。
向来の思量、それ、邪思量なるにあらず。
ただ、あきらめざるときの思量なり。

あきらめんとき、この思量をして失せしむるにあらず。
開華、葉落、おのれずから開華、葉落なり。
法性に開華、葉落あるべからずと思量せらるる思量、これ、法性なり。
依模、脱落しきたれる思量なり。
このゆえに、如、法性の思量なり。
思量、法性の渾思量、かくのごとくの面目なり。
馬祖、道の尽、是、法性、まことに、八、九成の道なりといえども、馬祖、
いまだ道取せざるところ、おおし。
いわゆる、
一切法性、不出、法性といわず。
一切法性、尽、是、法性といわず。
一切衆生、不出、衆生といわず。
一切衆生、法性之少分といわず。
一切衆生、一切衆生之少分といわず。
一切法性、是、衆生之少分といわず。
半箇衆生、半箇法性といわず。
無衆生、是、法性といわず。
法性、不是、衆生といわず。
法性、脱出、法性といわず。
衆生、脱落、衆生といわず。
ただ衆生は、法性三昧をいでず、とのみ、きこゆ。
法性は、衆生三昧をいづべからず、と、いわず。
法性三昧の、衆生三昧に出入する、道著なし。
いわんや、
法性の成仏、きこえず。
衆生、証、法性、きこえず。
法性、証、法性、きこえず。
無情、不出、法性の道なし。
しばらく、馬祖に、とうべし。
なにをよんでか衆生とする？
もし法性をよんで衆生とせば、是、什麼物、恁麼来なり。
もし衆生をよんで衆生とせば、説、似、一物、即、不中なり。
速、道。
速、道。

正法眼蔵　法性

于時、日本寛元元年癸卯、孟冬、在、越州、吉峰精舎、示、衆。

# 陀羅尼

参学眼あきらかなるは、正法眼あきらかなり。
正法眼あきらかなるがゆえに、参学眼あきらかなることをうるなり。
この関棙(子)を正伝すること、必然として大善知識に奉覲するちからなり。
これ、大因縁なり。
これ、大陀羅尼なり。
いわゆる、大善知識は、仏祖なり。
かならず、巾瓶に勤恪すべし。
しかあれば、すなわち、擎茶来、点茶来、心要、現成せり、神通現成せり。
盌水来、瀉水来、不動著、境なり、下面、了知なり。
仏祖の心要を参学するのみにあらず、心要裏の一、両位の仏祖に相逢するなり。
仏祖の神通を受用するのみにあらず、神通裏の七、八員の仏祖をえたるなり。
これによりて、あらゆる仏祖の神通は、この一束に究尽せり。
あらゆる仏祖の心要は、この一拈に究尽せり。
このゆえに、仏祖を奉覲するに、天華、天香をもってする、不是にあらざれども、三昧陀羅尼を拈じて奉覲、供養する、これ、仏祖の児孫なり。
いわゆる、大陀羅尼は、人事、これなり。
人事は、大陀羅尼なるがゆえに、人事の現成に相逢するなり。
人事の言は、震旦の言音を依模して、世諦に流通せること、ひさしというとも、梵天より相伝せず、西天より相伝せず、仏祖より正伝せり。
これ、声、色の境界にあらざるなり。
威音王仏の前後を論ずることなかれ。
その人事は、焼香、礼拝なり。
あるいは、出家の本師、あるいは、伝法の本師あり。
伝法の本師、すなわち、出家の本師なるも、あり。
これらの本師に、かならず、依止、奉覲する、これ、咨参の陀羅尼なり。
いわゆる、時時をすごさず、参侍すべし。
安居のはじめ、おわり、冬年、および、月旦、月半、さだめて、焼香、礼拝す。
その法は、あるいは、粥前、あるいは、粥罷をその時節とせり。
威儀を具して師の堂に参ず。

威儀を具す、というは、袈裟を著し、坐具をもち、鞋襪を整理して、一片の沈香、箋香、等を帯して参ずるなり。
師前にいたりて問訊す。
侍僧、ちなみに、香炉を装し燭をたて、師もし、さきより椅子に坐せば、すなわち、焼香すべし。
師もし帳裏にあらば、すなわち、焼香すべし。
師、もしは臥し、もしは食し、かくのごときの時節ならば、すなわち、焼香すべし。
師もし地にたちてあらば、請、和尚、坐と問訊すべし。
請、和尚、穏便とも請す。
あまた請、坐の辞あり。
和尚を椅子に請し、坐せしめてのちに問訊す。
曲躬、如法なるべし。
問訊しおわりて、香台の前面にあゆみよりて、帯せる一片香を香炉にたつ。
香をたつるには、香、
あるいは、衣襟に、さしはさめることも、あり。
あるいは、懐中に、もてるも、あり。
あるいは、袖裏に、帯せることも、あり。
おのおの、人のこころにあり。
問訊ののち、香を拈出して、もし、かみにつつみたらば、右手へむかいて肩を転じて、つつめる紙をさげて、両手に香をささげて香炉にたつるなり。
すぐに、たつべし。
かたむかしむることなかれ。
香をたておわりて、叉手して、みぎへめぐりて、あゆみて、正面にいたりて、和尚にむかい曲躬、如法、問訊しおわりて、展、坐具、礼拝するなり。
拝は、九拝、あるいは、十二拝するなり。
拝しおわりて、収、坐具して問訊す。
あるいは、一展、坐具、礼三拝して、寒暄をのぶることも、あり。
いまの九拝は、寒暄をのべず、ただ一展、三拝を三度あるべきなり。
その儀、はるかに七仏より、つたわれるなり。
宗旨、正伝しきたれり。
このゆえに、この儀をもちいる。
かくのごとくの礼拝、そのときをむかうるごとに廃することなし。
そのほか、法益をこうむるたびごとには、礼拝す。
因縁を請益せんとするにも、礼拝するなり。

二祖、そのかみ見所を初祖にたてまつりしとき、礼三拝するがごとき、これなり。
正法眼蔵の消息を開演するに三拝す。
しるべし、礼拝は、正法眼蔵なり。
正法眼蔵は、大陀羅尼なり。
請益のときの拝は、近来、おおく、頓一拝をもちいる。
古儀は、三拝なり。
法益の謝拝、かならずしも九拝、十二拝にあらず。
あるいは、三拝、あるいは、触礼一拝なり。
あるいは、六拝あり。
ともに、これ、稽首拝なり。
西天には、これを最上礼拝となづく。
(あるいは、六拝あり。)
頭をもって地をたたく。
いわく、額をもって地にあてて、うつなり。
血の、いづるまでもす。
これにも展、坐具せるなり。
一拝、三拝、六拝、ともに、額をもって地をたたくなり。
あるいは、これを頓首拝となづく。
世俗にも、この拝あるなり。
世俗には、九品の拝あり。
法益のとき、また、不住拝あり。
いわゆる、礼拝して、やまざるなり。
百、千拝までも、いたるべし。
ともに、これら、仏祖の会に、もちいきたれる拝なり。
おおよそ、これらの拝、ただ和尚の指揮をまもりて、その拝を如法にすべし。
おおよそ、礼拝の住世せるとき、仏法、住世す。
礼拝もし、かくれぬれば、仏法、滅するなり。
伝法の本師を礼拝することは、時節をえらばず、処所を論ぜず、拝するなり。
あるいは、臥時、食時にも、拝す。
行、大小時にも、拝す。
あるいは、牆壁をへだて、あるいは、山川をへだてても、遥望、礼拝するなり。
あるいは、劫波をへだてて礼拝す。
あるいは、生死去来をへだてて礼拝す。

あるいは、菩提、涅槃をへだてて礼拝す。
弟子、小師、しかのごとく種種の拝をいたすといえども、本師、和尚は、答拝せず、ただ合掌するのみなり。
おのずから奇拝をもちいることあれども、おぼろげの儀には、もちいず。
かくのごとくの礼拝のとき、かならず、北面、礼拝するなり。
本師、和尚は、南面して端坐せり。
弟子は、本師、和尚の面前に立地して、おもてをきたにして、本師にむかいて、本師を拝するなり。
これ、本儀なり。
みずから帰依の正信おこれば、かならず、北面の礼拝、そのはじめに、おこなわる、と正伝せり。
このゆえに、世尊の在日に、帰仏の人衆、天衆、龍衆、ともに、北面にして世尊を恭敬、礼拝したてまつる。
最初には、阿若 憍陳如(亦、曰、拘隣)、阿湿卑(亦、曰、阿陛)、摩訶摩南(亦、曰、摩訶拘利)、波提(亦、曰、跋提)、婆敷(亦、曰、十力迦葉)、この五人のともがら、如来、成道ののち、おぼえずして起立し、如来にむかいたてまつりて、北面の礼拝を供養したてまつる。
外道、魔党、すでに邪をすてて帰仏するときは、必定して、自搆、他搆せざれども、北面、礼拝するなり。
それより、このかた、西天二十八代、東土の諸代の祖師の会にきたりて、正法に帰する、みな、おのずから、北面の礼拝するなり。
これ、正法の肯然なり。
師弟の搆意にあらず。
これ、すなわち、大陀羅尼なり。

有、大陀羅尼、名、為、円覚。
有、大陀羅尼、名、為、人事。
有、大陀羅尼、現成、礼拝なり。
有、大陀羅尼、其名、袈裟なり。
有、大陀羅尼、是名、正法眼蔵なり。

これを誦呪して尽大地を鎮、護しきたる。
尽方界を鎮、成しきたる。
尽時界を鎮、現しきたる。
尽仏界を鎮、作しきたる。
庵中、庵外を鎮、通しきたる。

大陀羅尼、かくのごとくなると参学、究弁すべきなり。
一切の陀羅尼は、この陀羅尼を字母とせり。
この陀羅尼の眷属として、一切の陀羅尼は、現成せり。
一切の仏祖、かならず、この陀羅尼門より、発心、弁道、成道、転法輪あるなり。
しかあれば、すでに仏祖の児孫なり。
この陀羅尼を審細に参究すべきなり。
おおよそ、
為、釈迦牟尼仏衣之所覆は、為、十方一切仏祖衣之所覆なり。
為、釈迦牟尼仏衣之所覆は、為、袈裟之所覆なり。
袈裟は、標幟の仏衆なり。
この弁肯、難値、難遇なり。
まれに、辺地の人身をうけて、愚蒙なりといえども、宿殖、陀羅尼の善根力、現成して、釈迦牟尼仏の法にうまれ、あう。
たとえ百草のほとりに自成、他成の諸仏祖を礼拝すとも、これ、釈迦牟尼仏の成道なり、釈迦牟尼仏の弁道、功夫なり、陀羅尼、神変なり。
たとえ無量、億、千劫に、古仏、今仏を礼拝する、これ、釈迦牟尼仏衣之所覆時節なり。
ひとたび袈裟を身体におおうは、すでに、これ、得、釈迦牟尼仏之身肉、手足、頭、目、髄、脳、光明、転法輪なり。
かくのごとくして袈裟を著するなり。
これは、現成、著、袈裟、功徳なり。
これを保任し、これを好楽して、ときとともに守護し搭著して、礼拝、供養、釈迦牟尼仏したてまつるなり。
このなかに、いく三阿僧祇劫の修行をも弁肯、究尽するなり。
釈迦牟尼仏を礼拝したてまつり、供養したてまつる、というは、あるいは、伝法の本師を礼拝し供養し、剃髪の本師を礼拝し供養するなり。
これ、すなわち、
見、釈迦牟尼仏なり。
以、法、供養、釈迦牟尼仏なり。
陀羅尼をもって釈迦牟尼仏を供養したてまつるなり。

先師、天童古仏、しめすに、いわく、
あるいは、雪のうえにきたりて礼拝し、
あるいは、糠のなかにありて礼拝する。
勝躅なり。

先蹤なり。
大陀羅尼なり。

正法眼蔵　陀羅尼
爾時、寛元元年癸卯、在、越宇、吉峰寺、示、衆。

# 洗面

法華経、云、
以、油、塗、身、
澡浴、塵穢、
著、新浄衣、
内外、倶、浄。

いわゆる、この法は、如来、まさに、法華会上にして、四安楽行の行人のために、ときまします、ところなり。
余会の説に、ひとしからず。
余経に、おなじかるべからず。
しかあれば、身心を澡浴して、香油をぬり、塵穢をのぞくは、第一の仏法なり。
新浄の衣を著する、ひとつの浄法なり。
塵穢を澡浴し、香油を身に塗するに、内外、倶、浄なるべし。
内外、倶、浄なるとき、依報、正報、清浄なり。

しかあるに、仏法をきかず、仏道を参ぜざる愚人、いわく、
澡浴は、わずかに、みのはだえをすすぐといえども、身内に五臓六腑あり。
かれらを一一に澡浴せざらんは、清浄なるべからず。
しかあれば、あながちに身表を澡浴すべからず。

かくのごとくいうともがらは、仏法、いまだ、しらず、きかず、いまだ正師にあわず、仏祖の児孫に、あわざるなり。
しばらく、かくのごとくの邪見のともがらのことばをなげすてて、仏祖の正法を参学すべし。
いわゆる、
諸法の辺際、いまだ決断せず。
諸大の内外、また、不可得なり。
かるがゆえに、身心の内外、また、不可得なり。
しかあれども、最後身の菩薩、すでに、いまし道場に坐し成道せんとするとき、まず、袈裟を洗浣し、つぎに、身心を澡浴す。
これ、三世、十方の諸仏の威儀なり。
最後身の菩薩と余類と、諸事、みな、おなじからず。

その功徳、智慧、身心、荘厳、みな、最尊、最上なり。
澡浴、洗浣の法も、また、かくのごとくなるべし。
いわんや、諸人の身心、その辺際、ときにしたがうて、ことなることあり。
いわゆる、一坐のとき、三千界、みな、坐断せらるる。
このとき、かくのごとくなりといえども、自他の測量にあらず、仏法の功徳なり。
その身心量、また、五尺、六尺にあらず。
五尺、六尺は、さだまれる五尺、六尺にあらざるゆえなり。
所在も、此界、他界、尽界、無尽界、等の有辺、無辺にあらず。
遮裏、是、什麼、所在、説、細、説、麤？　のゆえに。
心量、また、思量分別の、よく、しるべきにあらず。
不思量、不分別の、よく、きわむべきにあらず。
身心量、かくのごとくなるがゆえに、澡浴量も、かくのごとし。
この量を拈得して修、証する、これ、仏仏、祖祖の護念するところなり。
計、我をさきとすべからず。
計、我を実とすべからず。
しかあれば、すなわち、かくのごとく澡浴し浣洗するに、身量、心量を究尽して清浄ならしむるなり。
たとえ四大なりとも、たとえ五蘊なりとも、たとえ不壊性なりとも、澡浴する、みな、清浄なることをうるなり。
これ、すなわち、ただ水をきたし、すすぎてのち、そのあとは、清浄なる、とのみしるべきにあらず。
水、なにとして、本、浄ならん？　本、不浄ならん？
本、浄、本、不浄なりとも、来著のところをして浄、不浄ならしむ、と、いわず。
ただ仏祖の修、証を保任するとき、用、水、洗浣。以、水、澡浴。等の仏法、つたわれり。
これによりて修、証するに、浄を超越し、不浄を透脱し、非、浄。非、不浄。を脱落するなり。
しかあれば、すなわち、いまだ染汚せざれども澡浴し、すでに大清浄なるにも澡浴する法は、ひとり仏祖道のみに保任せり。
外道のしるところにあらず。
もし愚人のいうがごとくならば、五臓六腑を細塵に抹して即、空ならしめて、大海水をつくして、あらうとも、塵中、なお、あらわずば、いかでか清浄ならん？

空中をあらわずば、いかでか内外の清浄を成就せん？
愚夫、また、空を澡浴する法、いまだ、しらざるべし。
空を拈来して空を澡浴し、空を拈来して身心を澡浴す。
澡浴を如法に信受するもの、仏祖の修、証を保任すべし。
いわゆる、仏仏、祖祖、嫡嫡、正伝する正法には、澡浴をもちいるに、身心内外、五臓六腑、依正二報、法界、虚空の内外、中間、たちまちに清浄なり。
香、華をもちいて、きよむるとき、過去、現在、未来、因縁、行業、たちまちに清浄なり。

仏、言、
三沐、三薫、身心、清浄。

しかあれば、身をきよめ、心をきよむる法は、かならず一沐しては一薫し、かくのごとく、あいつらなれて、三沐、三薫して、礼、仏し、転経し、坐禅し、経行するなり。
経行おわりて、さらに端坐、坐禅せんとするには、かならず、洗足する、という。
足、けがれ、触せるにあらざれども、仏祖の法、それ、かくのごとし。
それ、三沐、三薫す、というは、一沐とは、一沐浴なり。
通身、みな、沐浴す。
しこうしてのち、つねのごとくして、衣裳を著してのち、小炉に名香をたきて、ふところのうち、および、袈裟、坐所、等に薫するなり。
しこうしてのち、また、沐浴して、また、薫す。
かくのごとく、三番するなり。
これ、如法の儀なり。
このとき、六根、六塵、あらたに、きたらざれども、清浄の功徳ありて現前す。
うたがうべきにあらず。
三毒四倒、いまだ、のぞこうらざれども、清浄の功徳、たちまちに現前するは、仏法なり。
だれが凡慮をもって測度せん？
なにびとが凡眼をもって覰見せん？
たとえば、沈香をあらい、きよむるとき、片片におりて、あらうべからず。
塵塵に抹して、あらうべからず。
体をあらいて清浄をうるなり。
仏法に、かならず、浣洗の法、さだまれり。

あるいは、
身をあらい、
心をあらい、
足をあらい、
面をあらい、
目をあらい、
口をあらい、
大小二行をあらい、
手をあらい、
鉢盂をあらい、
袈裟をあらい、
頭をあらう。
これら、みな、三世の諸仏、諸祖の正法なり。
仏法僧を供養したてまつらんとするには、もろもろの香をとりきたりては、まず、みずからが両手をあらい、漱、口、洗面して、きよき、ころもを著し、きよき盤に浄水をうけて、この香をあらい、きよめて、しこうしてのちに仏法僧の境界には供養したてまつるなり。
ねがわくば、摩黎山の栴檀香を阿那婆達池の八功徳水にて、あらいて、三宝に供養したてまつらんことを。
洗面は、西、天竺国より、つたわれて、東、震旦国に流布せり。
諸部の律に、あきらかなりというとも、なお、仏祖の伝持、これ、正嫡なるべし。
数百歳の仏仏、祖祖、おこないきたれるのみにあらず、億、千、万劫の前後に流通せり。
ただ垢、膩をのぞくのみにあらず、仏祖の命脈なり。

いわく、
もし、おもてをあらわざれば、礼をうけ、他を礼する、ともに、罪あり。

自礼、礼他、能礼、所礼、性、空寂なり、性、脱落なり。
かるがゆえに、かならず、洗面すべし。
洗面の時節、あるいは、五更、あるいは、昧旦、その時節なり。
先師の、天童に住せしときは、三更の三点をその時節とせり。
裙、褊衫(、あるいは、直綴を著しながら、手巾)をたずさえて洗面架におもむく。
手巾は、一幅の布、ながさ、一丈二尺なり。

そのいろ、しろかるべからず。しろきは制す。

三千威儀経、云、
当、用、手巾、有、五事。
一、者、当、拭、上下頭。
二、者、当、用、一頭、拭、手、以、一頭、拭、面。
三、者、不得、持、拭、鼻。
四、者、以、用、拭、膩、汚、当、即、浣、之。
五、者、不得、拭、身体。若、澡浴、各、当、自、有、巾。

まさに、手巾を持せんに、かくのごとく護持すべし。
手巾をふたつに、おりて、左のひじにあたりて、そのうえに、かく。
手巾は半分は、おもてをのごい、半分にては手をのごう。
はなをのごうべからず、とは、はなのうち、および、鼻涕をのごわず。
わき、せなか、はら、へそ、もも、はぎを手巾をして、のごうべからず。
垢、膩に、けがれたらんに、洗浣すべし。
ぬれ、しめれらんは、火に烘し、日に、ほして、かわかすべし。
手巾をもって、沐浴のとき、もちいるべからず。
雲堂の洗面所は、後架なり。
後架は、照堂の西なり。その屋図つたわれり。
庵内、および、単寮は、便宜のところに、かまう。
住持人は、方丈にて洗面す。
耆年、老宿、居所に、便宜に洗面架をおけり。
住持人もし雲堂に宿するときは、後架にして洗面すべし。
洗面架にいたりて、手巾の中分をうなじにかく。
ふたつのはしを左右のかたより、まえにひき、こして、左右の手にて左右のわきより手巾の左右のはしをうしろへ、いだして、うしろにて、おのおの、ひきちがえて、左のはしは右にきたし、右のはしは左にきたして、むねのまえにあたりて、むすぶなり。
かくのごとくすれば、褊衫のくびは手巾におおわれ、両袖は手巾にゆいあげられて、ひじより、かみに、あがりぬるなり。
ひじより、しも、うで、たなごころ、あらわなり。
たとえば、たすき、かけたらんがごとし。
そののち、もし後架ならば、面桶をとりて、かまのほとりにいたりて、一桶の湯をとりて、かえりて、洗面架のうえに、おく。
もし余所にては、打湯桶の湯を面桶に、いる。

つぎに、楊枝をつかうべし。
今、大宋国、諸山には、嚼、楊枝の法、ひさしく、すたれて、つたわれざれば、嚼、楊枝のところ、なしといえども、今、吉祥山、永平寺、嚼、楊枝のところ、あり。
すなわち、今案なり。
これによれば、まず、嚼、楊枝すべし。
楊枝を右手にとりて呪願すべし。

華厳経、浄行品、云、
手、執、楊枝、当、願、
衆生、心得、正法、自然、清浄。

この文を誦しおわりて、さらに、楊枝をかまんとするに、すなわち、誦すべし。

晨、嚼、楊枝、当、願、
衆生、得、調伏牙、噬、諸煩悩。

この文を誦しおわりて、また、嚼、楊枝すべし。
楊枝のながさ、あるいは、四指、あるいは、八指、あるいは、十二指、あるいは、十六指なり。

摩訶僧祇律、第三十四、云、
歯木、応、量、用。
極長、十六指。
極短、四指。

しるべし。
四指よりも、みじかくすべからず。
十六指よりも、ながき、量に応ぜず。
ふとさは、手小指大なり。
しかいえども、それより、ほそき、さまたげなし。
そのかたち、手小指形なり。
一端は、ふとく、一端、ほそし。
ふとき、はしを微細に、かむなり。

三千威儀経、云、
嚼、頭、不得、過、三分。

よく、かみて、はのうえ、はのうら、みがくがごとく、とぎ、あらうべし。
たびたび、とぎ、みがき、あらい、すすぐべし。
はのもとの、ししのうえ、よく、みがき、あらうべし。
はのあいだ、よく、かきそろえ、きよく、あらうべし。
漱、口、たびたび、すれば、すすぎ、きよめらる。
しこうしてのち、したをこそぐべし。

三千威儀経、云、
刮、舌、有、五事。
一、者、不得、過、三返。
二、者、舌上、血、出、当、止。
三、者、不得、大、振、手、汚、僧伽梨衣、若、足。
四、者、棄、楊枝、莫、当、人道。
五、者、常、当、屏所。

いわゆる、刮、舌、三返というは、水を口にふくみて舌をこそげ、こそげ、すること、三返するなり。
三、刮には、あらず。
血、いでば、まさに、やむべし、というに、こころうべし。
よくよく刮、舌すべしということは、

三千威儀経、云、
浄、口、者、嚼、楊枝、漱、口、刮、舌。

しかあれば、楊枝は、仏祖、ならびに、仏祖、児孫の護持しきたるところなり。

仏、在、王舎城、竹園之中、与、千二百五十比丘、倶。
臘月一日、波斯匿王、是日、設、食。
清晨、躬、手、授、仏、楊枝。
仏、受、嚼、竟、擲、残、
著、地、便、生、蓊鬱、而、起。
根、茎、涌出、高、五百由旬。
枝、葉、雲、布。

周帀、亦、爾。
漸、復、生、華、大、如、車輪。
遂、復、有、菓、大、如、五斗瓶。
根、茎、枝、葉、純、是、七宝。
若干種、色、映、殊、麗妙。
随、色、発、光、掩蔽、日、月。
食、其菓、者、美、逾、甘露。
香気、四塞、聞者情、悦。
香風、来、吹、更、相撐角、枝、葉、皆、出、和雅之音、暢演、法要、聞者、無厭。
一切人民、覩、茲樹、変、敬信之心、倍益、純厚。
仏乃説法、応、適、其意、心、皆、開解。
志求仏者、得、果、生、天、数、甚衆多。

仏、および、衆僧を供養する法は、かならず、晨旦に楊枝をたてまつるなり。
そののち、種種の供養をもうく。
仏に楊枝をたてまつれること、おおく、ほとけ楊枝をもちいさせたまうこと、おおけれども、しばらく、この波斯匿王、みずから、てずから供養しましまず因縁、ならびに、この高樹の因縁、しるべきゆえに、挙するなり。
また、この日、すなわち、外道六師、ともに、ほとけに降伏せられたてまつりて、おどろき、おそりて、にげはしる。
ついに、六師、ともに、投、河、而、死。
六師、徒類、九億人、皆、来、師、仏、求、為、弟子。
仏、言、
善来、比丘。

鬚、髪、自、落、法衣、在、身。
皆、成、沙門。
仏、為、説法、示、其法要、漏尽、結解、悉、得、羅漢。

しかあれば、すなわち、如来、すでに楊枝をもちいましますゆえに、人、天、これを供養したてまつるなり。
あきらかに、しりぬ、又、嚼、楊枝、これ、諸仏、菩薩、ならびに、仏弟子の、かならず、所持なり、ということを。
もし、もちいざらんは、その法、失墜せり。かなしまざらんや？

梵網菩薩戒経、云、
若、仏子、常、応、二時、頭陀、冬、夏、坐禅、結、夏安居。
常、用、
楊枝、
澡豆、
三衣、
瓶、
鉢、
坐具、
錫杖、
香炉、
漉水嚢、
手巾、
刀子、
火燧、
鑷子、
縄牀、
経、
律、
仏像、
菩薩形像。
而、菩薩、行頭陀時、及、遊方時、行来、百里、千里、此十八種物、常、随、其身。
頭陀、者、従、正月十五日、至、三月十五日、従、八月十五日、至、十月十五日。
是二時中、此十八種物、常、随、其身、如、鳥、二翼。

この十八種物、ひとつも虧闕すべからず。
もし虧闕すれば、鳥の一翼、おちたらんがごとし。
一翼、のこれりとも、飛行すること、あたわじ。
鳥道の機縁にあらざらん。
菩薩も、また、かくのごとし。
この十八種の羽、翼、そなわらざれば、行、菩薩道、あたわず。
十八種のうち、楊枝、すでに第一に居せり。最初に具足すべきなり。
この楊枝の用、不をあきらめんともがら、すなわち、仏法をあきらむる菩提薩埵なるべし。

いまだ、かつて、あきらめざらんは、仏法、也、未夢見在ならん。
しかあれば、すなわち、見、楊枝は、見、仏祖なり。

或、有、人、問、
意旨、如何？

幸、値、永平老漢、嚼、楊枝。

この梵網菩薩戒は、過去、現在、未来の諸仏、菩薩、かならず、過、現、当に受持しきたれり。
しかあれば、楊枝、また、過、現、当に受持しきたれり。

禅苑清規、云、
大乗梵網経、十重、四十八軽、並、須、読誦、通利、善、知、持犯開遮。
但、依、金口、聖言。
莫、擅、随、於、庸輩。

まさに、しるべし。
仏仏、祖祖、正伝の宗旨、それ、かくのごとし。
これに違せんは、仏道にあらず、仏法にあらず、祖道にあらず。
しかあるに、大宋国、いま、楊枝、たえて、みえず。
嘉定十六年癸未、四月のなかに、はじめて大宋に、諸山、諸寺をみるに、僧侶の、楊枝をしれる、なく、朝野の貴賤、おなじく、しらず。
僧家、すべて、しらざるゆえに、もし楊枝の法を問著すれば、失、色して、度を失す。
あわれむべし、白法の失墜せることを。
わずかに、くちをすすぐともがらは、馬の尾を寸余にきりたるを牛の角の、おおきさ三分ばかりにて方につくりたるが、ながさ、六、七寸なる、そのはし二寸ばかりに、うまのたちがみのごとくに、うえて、これをもちて牙歯をあらうのみなり。
僧家の器に、もちいがたし。
不浄の器ならん。
仏法の器にあらず。
俗人の祠天するにも、なお、きらいぬべし。
かの器、また、俗人、僧家、ともに、くつのちりをはらう器にもちいる。
また、梳、鬢のとき、もちいる。

いささかの大小あれども、すなわち、これ、ひとつなり。
かの器をもちいるも、万人が一人なり。
しかあれば、天下の出家、在家、ともに、その口気、はなはだ、くさし。
二、三尺をへだてて、ものいうとき、口臭きたる。
かぐもの、たえがたし。
有道の尊宿と称し、人、天の導師と号するともがらも、漱、口、刮、舌、嚼、楊枝の法、ありとだにも、しらず。
これをもって推するに、仏祖の大道、いま、陵夷をみるらんこと、いくそばく、ということ、しらず。
いま、われら、露命を万里の蒼波におしまず、異域の山川をわたり、しのぎて、道をとぶらうとすれども、澆運、かなしむべし。
いくばくの白法か、さきだちて滅没しぬらん。
おしむべし。
おしむべし。
しかあるに、日本一国、朝野の道俗、ともに、楊枝を見聞す、仏光明を見聞するならん。
しかあれども、嚼、楊枝、それ、如法ならず。
刮、舌の法、つたわれず。
倉卒なるべし。
しかあれども、宋人の、楊枝をしらざるに、たくらぶれば、楊枝をもちいるべし、としれるは、おのずから上人の法をしれり。
仙人の法にも、楊枝をもちいる。
しるべし、みな、出塵の器なり、清浄の調度なり、ということを。

三千威儀経、云、
用、楊枝、有、五事。
一、者、断、当、如、度。
二、者、破、当、如法。
三、者、嚼、頭、不得、過、三分。
四、者、疎、歯、当、中、三、噛。
五、者、当、汁、澡、目、用。

いま、嚼、楊枝、漱、口の水を右手にうけて、もって、目をあらうこと、みな、もと、三千威儀経の説なり。
いま、日本国の往代の庭訓なり。
刮、舌の法は、僧正、栄西、つたう。

楊枝、つかいて、のち、すてんとするとき、両手をもって楊枝のかみたる、かたより、二片に擘破す。
その破口のとき、かたをよこさまに舌上にあてて、こそぐ。
すなわち、右手に水をうけて口にいれて漱、口し、刮、舌す。
漱、口、刮、舌、たびたびし、擘、楊枝の角にて、こそげ、こそげして、血、出を度とせんとするがごとし。
漱、口のとき、この文を密誦すべし。

華厳経、云、
澡、漱、口、歯、当、願、
衆生、向、浄法門、究竟、解脱。

たびたび漱、口して、くちびるのうちと、したのした、あぎ、にいたるまで、右手の第一指、第二指、第三指、等をもって、指のはらにて、よくよく、なめりたるがごとくなること、あらい、そぐべし。
油あるもの食せらんこと、ちかからんには、皀莢をもちいるべし。
楊枝、つかいおわりて、すなわち、屛所に、すつべし。
楊枝、すててのち、三弾指すべし。
後架にしては、棄、楊枝をうくる斗、あるべし。
余所にては、屛所に、すつべし。
漱、口の水は、面桶のほかに、はきすつべし。

つぎに、まさしく、洗面す。
両手に面桶の湯を掬して、額より、両眉毛、両目、鼻孔、耳中、顱、頬、あまねく、あらう。
まず、よくよく湯をすくい、かけて、しこうしてのち、摩沐すべし。
涕唾、鼻涕を面桶の湯におとしいるることなかれ。
かくのごとく、あらうとき、湯を無、度についやして、面桶のほかに、もらし、おとし、ちらして、はやく、うしなうことなかれ。
あか、おち、あぶら、のぞこうりぬるまで、あらうなり。
耳裏、あらふべし。著、水、不得なるがゆえに。
眼裏、あらうべし。著、沙、不得なるがゆえに。
あるいは、頭髪、頂𩕄までも、あらう、すなわち、威儀なり。(「𩕄」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
洗面おわりて、面桶の湯をすてての ちも、三弾指すべし。
つぎに、手巾の、おもてをのごう、はしにて、のごい、かわかすべし。

しこうしてのち、手巾、もとのごとく脱し、とりて、ふたえにして左臂に、かく。
雲堂の後架には、公界の拭面あり。
いわゆる、一匹布をもうけたり。
烘櫃あり。
衆家、ともに、拭、面するに、たらざる、わずらい、なし。
かれにても頭、面、のごうべし。
また、自己の手巾をもちいるも、ともに、これ、法なり。
洗面のあいだ、桶、杓、ならして、おとをなすこと、かまびすしくすることなかれ。
湯水を狼藉にして近辺をぬらすことなかれ。
ひそかに観想すべし。
後五百歳にうまれて、辺地、遠島に処すれども、宿善、くちずして、古仏の威儀を正伝し、染汚せず修、証する、随喜、歓喜すべし。

雲堂にかえらんに軽歩、低声なるべし。
耆年、宿徳の草庵、かならず、洗面架あるべし。
洗面せざるは、非法なり。
洗面のとき、面薬をもちいる法あり。

おおよそ、嚼、楊枝、洗面、これ、古仏の正法なり。
道心、弁道のともがら、修、証すべきなり。
あるいは、湯をえざるには、水をもちいる、旧例なり、古法なり。
湯、水、すべて、えざらんときは、早晨、よくよく拭、面して、香草、抹香、等をぬりてのち、礼、仏、誦経、焼香、坐禅すべし。
いまだ洗面せずば、もろもろのつとめ、ともに、無礼なり。

正法眼蔵　洗面
延応元年己亥、十月二十三日、在、観音導利興聖宝林寺、示、衆。

天竺国、震旦国、者、国王、王子、大臣、百官、在家、出家、朝野男女、百姓万民、みな、洗面す。
家宅の調度にも、面桶あり。あるいは、銀、あるいは、鑞なり。
天祠、神廟にも、毎朝に洗面を供す。
仏祖の搭頭にも、洗面をたてまつる。

在家、出家、洗面ののち、衣裳をただしくして、天をも拝し、神をも拝し、祖宗をも拝し、父母をも拝す。
師匠を拝し、三宝を拝し、三界、万霊、十方、真宰を拝す。
いまは、農夫、田夫、漁、樵翁までも、洗面わするることなし。
しかあれども、嚼、楊枝なし。

日本国は、国王、大臣、老少朝野、在家、出家の貴賤、ともに、嚼、楊枝、漱、口の法をわすれず。
しかあれども、洗面せず。

一得一失なり。

いま、洗面、嚼、楊枝、ともに、護持せん、補、虧闕の興隆なり、仏祖の照臨なり。

寛元元年癸卯、十月二十日、在、越州、吉田県、吉峰寺、重、示、衆。

建長二年庚戌、正月十一日、越州、吉田郡、吉祥山、永平寺、示、衆。

# 面授

爾時、釈迦牟尼仏、西、天竺国、霊山、会上、百万衆中、拈、優曇華、瞬目。
於、時、摩訶迦葉尊者、破顔、微笑。
釈迦牟尼仏、言、
吾有、正法眼蔵、涅槃妙心、付属、摩訶迦葉。

これ、すなわち、仏仏、祖祖、面授、正法眼蔵の道理なり。
七仏の、正伝して迦葉尊者にいたる。
迦葉尊者より二十八授して菩提達磨尊者にいたる。
菩提達磨尊者、みずから震旦国に降儀して、正宗太祖普覚大師、慧可尊者に面授す。
五伝して曹谿山、大鑑、慧能大師にいたる。
一十七授して先師、大宋国、慶元府、太白名山、天童古仏にいたる。
大宋宝慶元年乙酉、五月一日、道元、はじめて先師、天童古仏を妙高台に焼香、礼拝す。
先師古仏、はじめて道元をみる。
そのとき、道元に指授、面授するに、いわく、
仏仏、祖祖、面授の法門、現成せり。

これ、すなわち、霊山の拈華なり。
嵩山の得髄なり。
黄梅の伝衣なり。
洞山の面授なり。
これは、仏祖の眼蔵、面授なり。
吾屋裏のみ、あり。
余人は、夢也未見聞在なり。
この面授の道理は、釈迦牟尼仏、まのあたり、迦葉仏の会下にして面授し護持しきたれるがゆえに、仏祖面なり。
仏面より面授せざれば、諸仏にあらざるなり。
釈迦牟尼仏、まのあたり、迦葉尊者をみること親付なり。
阿難、羅睺羅といえども、迦葉の親付におよばず。
諸大菩薩といえども、迦葉の親付におよばず、迦葉尊者の座に座すること、えず。
世尊と迦葉と、同座し同衣しきたるを一代の仏儀とせり。

迦葉尊者、したしく、世尊の面授を面授せり、心授せり、身授せり、眼授せり。
釈迦牟尼仏を供養、恭敬、礼拝、奉覲したてまつれり。
その粉骨砕身、いく千、万変ということをしらず。
自己の面目は、面目にあらず。
如来の面目を面授せり。
釈迦牟尼仏、まさしく、迦葉尊者をみまします。
迦葉尊者、まのあたり、阿難尊者をみる。
阿難尊者、まのあたり、迦葉尊者の仏面を礼拝す。
これ、面授なり。
阿難尊者、この面授を住持して、商那和修を接して面授す。
商那和修尊者、まさしく、阿難尊者を奉覲するに、唯面与面、面授し面受す。
かくのごとく、代代、嫡嫡の祖師、ともに、弟子は師にまみえ、師は弟子をみるによりて、面授しきたれり。
一祖、一師、一弟子としても、あい面授せざるは、仏仏、祖祖にあらず。
たとえば、水を朝宗せしめて宗派を長ぜしめ、灯を続して光明つねならしむるに、億、千、万法するにも、本、枝、一如なるなり。
また、啐啄の迅機なるなり。
しかあれば、すなわち、まのあたり、釈迦牟尼仏をまもりたてまつりて一期の日夜をつめり。
仏面に照臨せられたてまつりて一代の日夜をつめり。
これ、いく無量(劫)を往来せりとしらず。
しずかに、おもいやりて随喜すべきなり。
釈迦牟尼仏の仏面を礼拝したてまつり、釈迦牟尼仏の仏眼をわがまなこにうつしたてまつり、わがまなこを仏眼にうつしたてまつりし、仏眼睛なり、仏面目なり。
これをあいつたえて、いまにいたるまで、一世も間断せず面授しきたれるは、この面授なり。
而今の数十代の嫡嫡は、面面なる仏面なり。
本初の仏面に面受なり。
この正伝、面授を礼拝する、まさしく、
七仏、釈迦牟尼仏を礼拝したてまつるなり。
迦葉尊者、等の二十八仏祖を礼拝、供養したてまつるなり。
仏祖の面目、眼睛、かくのごとし。
この仏祖にまみゆるは、釈迦牟尼仏、等の七仏にみえたてまつるなり。

仏祖、したしく自己を面授する正当恁麼時なり。
面授仏の、面授仏に面授するなり。
葛藤をもって葛藤に面授して、さらに断絶せず。
眼を開して眼に眼授し眼受す。
面をあらわして面に面授し面受す。
面授は、面所の受授なり。
心を拈じて心に心授し心受す。
身を現して身を身授するなり。
他方、他国も、これを本祖とせり。
震旦国以東、ただ、この仏、正伝の屋裏のみ、面授、面受、あり。
あらたに如来をみたてまつる正眼をあいつたえきたれり。
釈迦牟尼仏面を礼拝するとき、五十一世、ならびに、七仏、祖宗、ならべるに、あらず、つらなるに、あらざれども、倶、時の面授あり。
一世も師をみざれば、弟子にあらず。
弟子をみざれば、師にあらず。
さだまりて、あいみ、あいみえて、面授しきたれり。
嗣法しきたれるは、祖宗の面授所、道、現成なり。
このゆえに、如来の面光を直拈しきたれるなり。
しかあれば、すなわち、千年、万年、百劫、億劫といえども、この面授、これ、釈迦牟尼仏の面、現成、授なり。
この仏祖、現成せるには、世尊、迦葉、五十一世、七代祖宗の影、現成なり、光、現成なり、身、現成なり、心、現成なり、尖脚来なり、尖鼻来なり。
一言、いまだ領覧せず、半句、いまだ不会せずというとも、師、すでに裏頭より弟子をみ、弟子すでに頂𩕳より師を拝しきたれるは、正伝の面授なり。
(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
かくのごとくの面授を尊重すべきなり。
わずかに心跡を心田にあらわせるがごとくならん、かならずしも大尊貴生なるべからず。
換面に面授し、回頭に面授あらんは、面皮、厚、三寸なるべし、面皮、薄、一丈なるべし。
すなわちの面皮、それ、諸仏大円鏡なるべし。
大円鑑を面皮とせるがゆえに、内外、無、瑕、翳なり。
大円鑑の、大円鑑を面授しきたれるなり。
まのあたり、釈迦牟尼仏をみたてまつる正法を正伝しきたれるは、釈迦牟尼仏よりも親曾なり。

眼尖より前後三三の釈迦牟尼仏を見、出現せしむるなり。
かるがゆえに、釈迦牟尼仏をおもくしたてまつり、釈迦牟尼仏を恋慕したてまつらんは、この面授、正伝をおもくし尊崇し難値、難遇の敬重、礼拝すべし。
すなわち、如来を礼拝したてまつるなり。
如来に面授せられたてまつるなり。
あらたに面授、如来の正伝、参学の宛然なるを拝見するは、自己なりとおもいきたりつる自己なりとも、他己なりとも、愛惜すべきなり、護持すべきなり。
屋裏に正伝し、いわく、
八塔を礼拝するものは、罪障、解脱し、道果、感得す。

これ、釈迦牟尼仏の道現成所を生所に建立し、転法輪所に建立し、成道所に建立し、涅槃所に建立し、曲女城辺にのこり、菴羅衛林にのこれる。
大地を成じ、大空を成ぜり。
乃至、声香味触法、色処、等に塔、成ぜるを礼拝するによりて、道果、現感す。
この八塔を礼拝するを西、天竺国のあまねき勤修として在家、出家、天衆、人衆、きおうて礼拝、供養するなり。
これ、すなわち、一巻の経典なり。
仏経は、かくのごとし。
いわんや、また、三十七品の法を修行して、道果を箇箇生生に成就するは、釈迦牟尼仏の亙古亙今の修行、修治の蹤跡を所所の古路に流布せしめて古今に歴然せるがゆえに、成道す。
しるべし。
かの八塔の層層なる、霜華、いくばくか、あらたまる。
風雨、しばしば、おかさんとすれど、空にあとせり、色にあとせる、その功徳をいまの人に、おしまざること、減少せず。
かの根、力、覚、道、いま、修行せんとするに、煩悩あり、惑障ありといえども、修、証するに、そのちから、なお、いま、あらたなり。
釈迦牟尼仏の功徳、それ、かくのごとし。
いわんや、いまの面授は、かれらに比準すべからず。
かの三十七品菩提分法は、この仏面、仏心、仏身、仏道、仏光、仏舌、等を根元とせり。
かの八塔の功徳集、また、仏面、等を本、基とせり。

いま、学仏法の漢として透脱の活路に行履せんに、閑静の昼夜、つらつら思量、功夫すべし、歓喜、随喜すべきなり。
いわゆる、わがくには、他国よりも、すぐれ、わが道は、ひとり無上なり。
他方には、われらがごとくならざるともがら、おおかり。
わがくに、わが道の無上独尊なる、というは、霊山の衆会、あまねく十方を化導すといえども、少林の正嫡、まさしく、震旦の教主なり。
曹谿の児孫、いまに面授せり。
このとき、これ、仏法、あらたに入泥入水の好時節なり。
このとき証果せずば、いずれのときか、証果せん？
このとき断、惑せずば、いずれのときか、断、惑せん？
このとき作仏ならざらんば、いずれのときか、作仏ならん？
このとき坐仏ならざらんば、いずれのときか、行仏ならん？
審細の功夫なるべし。

釈迦牟尼仏、かたじけなく迦葉尊者に付属、面授するに、いわく、
吾有、正法眼蔵、付属、摩訶迦葉。
とあり。

嵩山、会上には、菩提達磨尊者、まさしく、二祖にしめして、いわく、
汝、得、吾髄。

はかりしりぬ。
正法眼蔵を面授し、汝、得、吾髄の面授なるは、ただ、この面授のみなり。
この正当恁麼時、なんじが、ひごろの骨髄を透脱するとき、仏祖、面授あり。
大悟を面授し、心印を面授するも、一隅の特地なり。
伝尽にあらずといえども、いまだ欠悟の道理を参究せず。
おおよそ、仏祖、大道は、唯、面授、面受、受面、授面のみなり。
さらに、剰法あらず、虧闕あらず。
この面授の、あうに、あえる、自己の面目をも、随喜、歓喜、信受、奉行すべきなり。
道元、大宋宝慶元年乙酉、五月一日、はじめて先師、天童古仏を礼拝、面授す。
やや堂奥を聴許せらる。
わずかに身心を脱落するに、面授を保任することありて、日本国に本来せり。

正法眼蔵　面授

爾時、寛元元年癸卯、十月二十日、在、越宇、吉田県、吉峰精舎、示、衆。

仏道の面授、かくのごとくなる道理をかつて見聞せず、参学なきともがら、あるなかに、大宋国、仁宗皇帝の御宇、景祐年中に、薦福寺の承古禅師というものあり、上堂、曰、
雲門、匡真大師、如今、現在。
諸人、
還、見、麼？
若、也、見得、便、是、山僧、同参。
見、麼？
見、麼？
此事、直、須、諦当、始、得。
不可、自、謾。

且、如、往古、黄檗、聞、
百丈和尚、挙、
馬大師、下、喝、因縁、
佗、因、大省。

百丈、問、
子、
向後、莫、承嗣、大師？　否？

黄檗、云、
某、雖、識、大師、要、且、不見、大師。
若、承嗣、大師、恐、喪、我児孫。

大衆、
当時、馬大師、遷化、未得、五年。

黄檗、自、言、
不見。

当、知、
黄檗、見所、不円。
要、且、祗、具、一隻眼。
山僧、即、不然。

識得、雲門大師。
亦、見得、雲門大師。
方、可、承嗣、雲門大師。
祇、如、雲門、入滅、已得、一百余年。
如今、作麼生、説、箇親見底道理？
会、麼？
通人達士、方、可、証明。
眇劣之徒、心、生、疑謗。
見得、不在、言、之。
未見者、如今、看取？　不？
久立。
珍重。

いま、なんじ、雲門大師をしり、雲門大師をみることをたとえゆるすとも、雲門大師、まのあたり、なんじをみるや？　いまだしや？
雲門大師、なんじをみずば、なんじ、承嗣、雲門大師、不得ならん。
雲門大師、いまだ、なんじをゆるさざるがゆえに、なんじも、また、雲門大師、われをみる、と、いわず。
しりぬ、なんじ、雲門大師と、いまだ相見せざり、ということを。
七仏、諸仏の過去、現在、未来に、いずれの仏祖が師資、相見せざるに嗣法せる？
なんじ、黄檗を見所、不円、ということなかれ。
なんじ、いかでか黄檗の行季をはからん？　黄檗の言句をはからん？
黄檗は、古仏なり。嗣法に、究参なり。
なんじは、嗣法の道理、かつて夢、也、未、見聞、参学、在なり。
黄檗は、師に嗣法せり。祖を保任せり。
黄檗は、師にまみえ、師をみる。
なんじは、すべて、師をみず、祖をしらず。
自己をしらず、自己をみず。
なんじをみる師なし、なんじ、師眼、いまだ参開せず。
真箇、なんじ、見所、不円なり。嗣法、未円なり。
なんじ、しるや？　いなや？　雲門大師は、これ、黄檗の法孫なることを。
なんじ、いかでか百丈、黄檗の道所を測量せん？
雲門大師の道所、なんじ、なお、測量すべからず。
百丈、黄檗の道所は、参学のちからあるもの、これを拈挙するなり。直指の落所あるもの、測量すべし。

なんじは、参学なし、落所なし。しるべからず。はかるべからざるなり。
馬大師、遷化、未得、五年なるに、馬大師に嗣法せずという、まことに、わらうにも、たらず。
たとえ嗣法すべくば、無量劫ののちなりとも、嗣法すべし。
嗣法すべからざらんば、半日なりとも、須臾なりとも、嗣法すべからず。
なんじ、すべて仏道の日面、月面をみざる。暗者、愚蒙なり。
雲門大師、入滅、已得、一百余年なれども、雲門に承嗣す、という。
なんじに、ゆゆしきちからありて雲門に承嗣するか？
三歳の孩児より、はかなし。
一千年ののち、雲門に嗣法せんものは、なんじに十倍せる、ちから、あらん。
われ、いま、なんじをすくう。
しばらく、話頭を参学すべし。
百丈の道取する、子、向後、莫、承嗣、大師？　否？　の道取は、馬大師に嗣法せよ、というには、あらぬなり。
しばらく、なんじ、
獅子奮迅話を参学すべし。
烏亀倒上樹話を参学して、進歩、退歩の活路を参学すべし。
嗣法に恁麼の参学力あるなり。
黄檗のいう恐、喪、我児孫のことば、すべて、なんじ、はかるべからず。
我の道取、および、児孫の人、これ、だれなり、とか、しれる？
審細に参学すべし。
かくれず、あらわして、道、現成せり。
しかあるを、仏国禅師、惟白という、仏祖の嗣法にくらきによりて承古を雲門の法嗣に排列せり。あやまりなるべし。
晩進、しらずして、承古も、参学あらん、とおもうことなかれ。
なんじがごとく文字によりて嗣法すべくば、経書をみて発明するものは、みな、釈迦牟尼仏に嗣法するか？　さらに、しかあらざるなり。
経書によれる発明、かならず、正師の印可をもとむるなり。
なんじ、承古が、いうごとくには、なんじ、雲門の語録、なお、いまだ、みざるなり。
雲門の語をみしともがらのみ、雲門には、嗣法せり。
なんじ、
自己眼をもって、いまだ雲門をみず。
自己眼をもって、自己をみず。
雲門眼をもって、雲門をみず。

雲門眼をもって、自己をみず。
かくのごとくの未参究、おおし。
さらに、草鞋を買来買去して正師をもとめて、嗣法すべし。
なんじ、雲門大師に承嗣す、ということ、なかれ。
もし、かくのごとくいわば、すなわち、外道の流類なるべし。
たとえ百丈なりとも、なんじがいうがごとくいわば、おおきなる、あやまりなるべし。

# 坐禅儀

参禅は、坐禅なり。
坐禅は、静所、よろし。
坐蓐、あつく、しくべし。
風、煙をいらしむることなかれ。
雨、露をもらしむることなかれ。
容身の地を護持すべし。
かつて、金剛のうえに坐し、盤石のうえに坐する蹤跡あり。
かれら、みな、草をあつく、しきて、坐せしなり。
坐所、あきらかなるべし。昼夜、くらからざれ。
冬、暖、夏、涼をその術とせり。
諸縁を放捨し、万事を休息すべし。
善、也、不思量なり。
悪、也、不思量なり。
心、意、識にあらず。
念、想、観にあらず。
作仏を図することなかれ。
坐臥を脱落すべし。
飲食を節量すべし。
光陰を護惜すべし。
頭燃をはらうがごとく坐禅をこのむべし。
黄梅山の五祖、ことなる、いとなみ、なし。唯、務、坐禅のみなり。
坐禅のとき、袈裟をかくべし。蒲団をしくべし。
蒲団は、
全跏に、しくには、あらず。
跏趺のなかばよりは、うしろに、しくなり。
しかあれば、累、足のしたは、坐蓐に、あたれり。
脊骨のしたは、蒲団にてあるなり。
これ、仏仏、祖祖の、坐禅のとき、坐する法なり。
あるいは、半跏趺坐し、あるいは、結跏趺坐す。
結跏趺坐は、
右の足を左のももの上に置く。
左の足を右のももの上に置く。

足の先、各々、ももと、ひとしくすべし。
参差なることをえざれ。
半跏趺坐は、ただ左の足を右のももの上に置くのみなり。
衣衫を寛繋して斉整ならしむべし。
右手を左足の上に置く。
左手を右手の上に置く。
ふたつの大指先、相、支う。
両手、かくのごとくして身に近づけて置くなり。
ふたつの大指の指し合わせたる先をほぞに対して置くべし。
正身端坐すべし。
左へそばだち、右へ傾き、前にくぐまり、後ろにあうぐこと、なかれ。
かならず、耳と肩と対し、鼻と臍(へそ)と対すべし。
舌は上の腭(あご)に掛くべし。
息は、鼻より通ずべし。
唇、歯、相、付くべし。
目は、開すべし。不張、不微なるべし。
かくのごとく身心をととのえて、欠気一息あるべし。
兀兀と坐、定して思量、箇不思量底なり。
不思量底、如何、思量？　これ、非思量なり。
これ、すなわち、坐禅の法術なり。
坐禅は、習禅にはあらず、大安楽の法門なり、不染汚の修、証なり。

正法眼蔵　坐禅儀
爾時、寛元元年癸卯、冬、十一月、在、越州、吉田県、吉峰精舎、示、衆。

# 梅華

先師、天童古仏、者、大宋、慶元府、太白名山、天童、景徳寺、第三十代、堂上、大和尚、也。
上堂、示、衆、云、
天童、仲冬、第一句。
槎槎牙牙、老梅樹。
忽、開華、一華、両華、三、四、五華、無数華。
清、不可、誇。
香、不可、誇。
散、作、春容、吹、草木、衲僧、箇箇、頂門、禿。
驀箚、変、怪、狂風暴雨。
乃至、交、袞、大地、雪、漫漫。
老梅樹、太、無端。
寒、凍、挲。
鼻孔、酸。

いま、開演ある老梅樹、それ、太、無端なり、忽、開華す、自、結、果す。
あるいは、春をなし、あるいは、冬をなす。
あるいは、狂風をなし、あるいは、暴雨をなす。
あるいは、衲僧の頂門なり。
あるいは、古仏の眼睛なり。
あるいは、草木となれり。
あるいは、清、香となれり。
驀箚なる神変、神怪、きわむべからず。
乃至、大地、高天、明、日、清月、これ、老梅樹の樹功より樹功せり。
葛藤の、葛藤を結、纏するなり。
老梅樹の忽、開華のとき、華開、世界起なり。
華開、世界起の時節、すなわち、春、到なり。
この時節に、開、五葉の一華あり。
この一華時、よく、三華、四華、五華あり。
百華、千華、万華、億華あり。
乃至、無数華あり。
これらの華開、みな、老梅樹の一枝、両枝、無数枝の、不可、誇なり。
優曇華、優鉢羅華、等、おなじく、老梅樹華の一枝、両枝なり。

おおよそ、一切の華開は、老梅樹の恩給なり。
人中、天上の老梅樹あり。
老梅樹中に、人間、天堂を樹功せり。
百、千華を人、天華と称す。
万、億華は、仏祖華なり。
恁麼の時節を諸仏、出現、於、世と喚、作するなり。
祖師、本、来、茲土と喚、作するなり。

先師古仏、上、堂、示、衆、云、
瞿曇、打失眼睛時、雪裏、梅華、只一枝。
而、今、到所、成、荊棘。
却、笑、春風、繚乱、吹。

いま、この古仏の法輪を尽界の最極に転ずる。
一切、人、天の得道の時節なり。
乃至、雲、雨、風、水、および、草木、昆虫にいたるまでも、法益をこうむらずということなし。
天地、国土も、この法輪に転ぜられて活鱍鱍地なり。
未曾聞の道をきく、というは、いまの道を聞著するをいう。
未曾有をうる、というは、いまの法を得著するを称するなり。
おおよそ、おぼろげの福徳にあらずば、見聞すべからざる法輪なり。
いま現在、大宋国、一百八十州の内外に、山寺あり、人里の寺あり、そのかず、称計すべからず。
そのなかに、雲水、おおし。
しかあれども、先師古仏をみざるは、おおく、みたるは、すくなからん。
いわんや、ことばを見聞するは少分なるべし。
いわんや、相見、問訊のともがら、おおからんや？
堂奥をゆるさるる、いくばくにあらず。
いかに、いわんや、先師の皮肉骨髄、眼睛、面目を礼拝することを聴許せられんや？
先師古仏、たやすく僧家の謝掛搭をゆるさず。
よのつねに、いわく、
無道心、慣、頭、我箇裏、不可、也。

すなわち、おい、いだす。
出了、いわく、

不、一、本分人、要、作、甚麼？
かくのごときの狗子は、騒、人なり。
掛搭、不得。
という。

まさしく、これをみ、まのあたり、これをきく。
ひそかに、おもうらくは、
かれら、いかなる罪根ありてか、このくにの人なりといえども、共住をゆるされざる？
われ、なにの、さいわい、ありてか、遠方、外国の種子なりといえども、掛搭をゆるさるるのみにあらず、ほしきままに堂奥に出入して尊儀を礼拝し法道をきく？

愚暗なりといえども、むなしかるべからざる結、良縁なり。
先師の、宋朝を化せしとき、なお、参得人あり、参不得人ありき。
先師古仏、すでに宋朝をさりぬ。暗夜よりも、くらからん。
ゆえは、いかん？
先師古仏より前後に、先師古仏のごとくなる古仏なきがゆえに、しか、いうなり。
しかあれば、いま、これを見聞せんときの晩学、おもうべし。
自余の諸方の人、天も、いまのごとくの法輪を見聞すらん、参学すらん、
とおもうことなかれ。

雪裏の梅華は、一現の曇華なり。
ひごろは、いくめぐりか我、仏、如来の正法、眼睛を拝見しながら、いたずらに瞬目を蹉過して破顔せざる。
而今、すでに雪裏の梅華、まさしく、如来の眼睛なり、と正伝し承当す。
これを拈じて頂門眼とし眼中睛とす。
さらに、梅華裏に参到して梅華を究尽するに、さらに疑著すべき因縁、いまだ、きたらず。
これ、すでに天上天下、唯我独尊の眼睛なり、法界中尊なり。
しかあれば、すなわち、天上の天華、人間の天華、天、雨、曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華、および、十方無尽国土の諸華は、みな、雪裏、梅華の眷属なり。
梅華の恩徳分をうけて華開せるがゆえに、百、億華は、梅華の眷属なり、小梅華と称すべし。

乃至、空華、地華、三昧華、等、ともに、梅華の大小の眷属群華なり。
華裏に百、億国をなす。国土に開華せる。みな、この梅華の恩分なり。
梅華の恩分のほかは、さらに一恩の雨露あらざるなり。
命脈、みな、梅華より、なれるなり。
ひとえに、嵩山、少林の雪、漫漫地、と参学することなかれ。
如来の眼睛なり。
頭上をてらし、脚下をてらす。
ただ、雪山、雪宮のゆき、と参学することなかれ。
老瞿曇の正法、眼睛なり。
五眼の眼睛、このところに究尽せり。
千眼の眼睛、この眼睛に円成すべし。
まことに、老瞿曇の身心、光明は、究尽せざる諸法実相の一微塵あるべからず。
人、天の見、別ありとも、凡、聖の情、隔すとも、雪漫漫は、大地なり。
大地は、雪漫漫なり。
雪漫漫にあらざれば、尽界に大地あらざるなり。
この雪漫漫の表裏団欒、これ、瞿曇老の眼睛なり。
しるべし。
華、地、悉、無生なり。
華、無生なり。
華、無生なるゆえに、地、無生なり。
華、地、悉、無生のゆえに、眼睛、無生なり。
無生というは、無上菩提をいう。
正当恁麼時の見取は、梅華、只一枝なり。
正当恁麼時の道取は、雪裏、梅華、只一枝なり。
地、華、生生なり。
これをさらに雪漫漫というは、全表裏、雪漫漫なり。
尽界は、心地なり。
尽界は、華情なり。
尽界、華情なるゆえに、尽界は、梅華なり。
尽界、梅華なるがゆえに、尽界は、瞿曇の眼睛なり。
而今の到所は、山河大地なり。
到事、到時、みな、吾、本、来、茲土、伝法、救、迷情。一華、開、五葉、結、果、自然、成。の到所、現成なり。
西来、東漸ありといえども、梅華、而今の到所なり。

而今の現成、かくのごとくなる、成、荊棘という。
大枝に旧枝、新枝の而今あり。
小条に旧条、新条の到所あり。
所は、到に参学すべし。
到は、今に参学すべし。
三、四、五、六華裏は、無数華裏なり。
華に、裏功徳の深広なる具足せり、表功徳の高大なるを開闡せり。
この表裏は、一華の華発なり。
只一枝なるがゆえに、異枝あらず、異種あらず。
一枝の到所を而今と称する、瞿曇老漢なり。
只一枝のゆえに、付属、嫡嫡なり。
このゆえに、吾有の正法眼蔵、付属、摩訶迦葉なり。
汝、得は、吾髄なり。
かくのごとく、到所の現成、ところとしても大尊貴生にあらずということなきがゆえに、開、五葉なり。
五葉は、梅華なり。
このゆえに、七仏祖あり。
西天二十八祖、東土六祖、および、十九祖あり。
みな、只一枝の開、五葉なり。
五葉の只一枝なり。
一枝を参究し、五葉を参究しきたれば、雪裏、梅華の正伝、付属、相見なり。
只一枝の語脈裏に転身転心しきたるに、雲、月、是、同なり、谿、山、各、別なり。
しかあるを、かつて参学眼なきともがら、いわく、
五葉というは、東地の五代と初祖とを一華として、五世をならべて、古今、前後にあらざるがゆえに、五葉という、
と。

この言は、挙して勘破するに、たらざるなり。
これらは、参仏参祖の皮袋にあらず。
あわれむべきなり。
五葉、一華の道、いかでか五代のみならん？
六祖よりのちは、道取せざるか？
小児子の説話におよばざるなり。
ゆめゆめ見聞すべからず。

先師古仏、歳旦、上、堂、曰、
元正、啓、祚。
万物、咸、新。
伏、惟、
大衆、
梅、開、早春。

しずかに、おもいみれば、過、現、当来の老古錐、たとえ尽十方に脱体なりとも、いまだ梅、開、早春の道あらずば、だれが、なんじを道尽箇といわん？
ひとり先師古仏のみ、古仏中の古仏なり。
その宗旨は、梅、開に帯せられて万春、はやし。
万春は、梅裏、一、両の功徳なり。
一春、なお、よく、万物を咸、新ならしむ、万法を元正ならしむ。
啓、祚は、眼睛、正なり。
万物というは、過、現、来のみにあらず、威音王以前、乃至、未来なり。
無量、無尽の過、現、来、ことごとく、新なり、というがゆえに、この新は、新を脱落せり。
このゆえに、伏、惟、大衆なり。
伏、惟、大衆は、恁麼なるがゆえに。

先師、天童古仏、上、堂、示、衆、云、
一言、相契、万古、不移。
柳眼、発、新条。
梅華、満、旧枝。

いわく、百大劫の弁道は、終始、ともに、一言、相契なり。
一念頃の功夫は、前後、おなじく、万古、不移なり。
新条を繁茂ならしめて眼睛を発明する、新条なりといえども、眼睛なり。
眼睛の他にあらざる道理なりといえども、これを新条と参究す。
新は、万物、咸、新に参学すべし。
梅華、満、旧枝というは、梅華、全旧枝なり、通旧枝なり。
旧枝、是、梅華なり。
たとえば、
華、枝、同条、参。
華、枝、同条、生。

華、枝、同条、満。
なり。
華、枝、同条、満のゆえに、
吾有、正法、付属、迦葉なり。
面面、満、拈華。
華華、満、破顔。
なり。

先師古仏、上、堂、示、大衆、云、
楊柳、粧、腰帯。
梅華、絡、臂韝。

かの臂韝は、蜀錦、和璧にあらず、梅華、開なり。
梅華、開は、髄、吾、得、汝なり。

波斯匿王、請、賓頭盧尊者、斎、次、王、問、
承聞、
尊者、親、見仏、来。
是？　不？

尊者、以、手、策起、眉毛、示、之。

先師古仏、頌、云、
策起、眉毛、答、問、端。
親、曾、見仏、不、相瞞。
至、今、応供、四天下。
春、在、梅梢。
帯、雪、寒。

この因縁は、波斯匿王、ちなみに、尊者の見仏、未見仏を問取するなり。
見仏というは、作仏なり。
作仏というは、策起、眉毛なり。
尊者もし、ただ阿羅漢果を証すとも、真阿羅漢にあらずば、見仏すべからず。
見仏にあらずば、作仏すべからず。
作仏にあらずば、策起、眉毛、仏、不得ならん。
しかあれば、しるべし。

釈迦牟尼仏の面授の弟子として、すでに四果を証して、後仏、出世をまつ尊者、いかでか釈迦牟尼仏をみざらん？
この見、釈迦牟尼仏は、見仏にあらず。
釈迦牟尼仏のごとく見、釈迦牟尼仏なるを見仏と参学しきたれり。
波斯匿王、この参学眼を得、開せるところに、策起、眉毛の好手にあうなり。
親、曾、見仏の道、旨、しずかに参学眼あるべし。
この春は、人間にあらず、仏国にかぎらず、梅梢にあり。
なにとしてか、しかあると、しる？　雪、寒の眉毛、策なり。

先師古仏、云、
本来、面目、無、生死。
春、在、梅華、入、画図。

春を画図するに、楊、梅、桃、李を画すべからず。
まさに、春を画すべし。
楊、梅、桃、李を画するは、楊、梅、桃、李を画するなり、いまだ春を画せるにあらず。
春は、画せざるべきにあらず。
しかあれども、先師古仏のほかは、西天、東地のあいだ、春を画せる人、いまだあらず。
ひとり先師古仏のみ、春を画する尖筆頭なり。
いわゆる、いまの春は、画図の春なり。
入、画図のゆえに。
これ、余外の力量をとぶらわず、ただ梅華をして春をつかわしむるゆえに、画にいれ、木にいるるなり。
善巧、方便なり。
先師古仏、正法眼蔵、あきらかなるによりて、この正法眼蔵を過去、現在、未来の十方に集会する仏祖に正伝す。
このゆえに、眼睛を究徹し、梅華を開明せり。

正法眼蔵　梅華
爾時、日本国仁治四年癸卯、十一月六日、在、越州、吉田県、吉嶺寺、深雪、三尺、大地、漫漫。

もし、おのずから自魔きたりて、梅華は、瞿曇の眼睛ならず、とおぼえば、思量すべし。

このほかに、何法の、梅華よりも眼睛なりぬべきを挙しきたらんにか、眼睛とみん？
そのときも、これよりほかに眼睛をもとめば、いずれのときも対面、不相識なるべし、相逢、未拈出なるべきがゆえに。
今日は、わたくしの今日にあらず、大家の今日なり。
直に梅華、眼睛を開明なるべし。
さらに、もとむること、やみね。

先師古仏、云、
明、歴歴。
梅華影裏、休、相覓。
為、雨、為、雲、自、古今。
古今、寥寥、有、何極？

しかあれば、すなわち、くもをなし、あめをなすは、梅華の云為なり。
行、雲、行、雨は、梅華の千曲、万重色なり、千功万徳なり。
自、古今は、梅華なり。
梅華を古今と称するなり。

古来、法演禅師、云、
朔風、和、雪、振、谿林。
万物、潜蔵、恨、不深。
唯、有、嶺、梅、多、意気。
臘前、吐出、歳寒心。

しかあれば、梅華の消息を通ぜざるほかは、歳寒心をしりがたし。
梅華、小許の功徳を朔風に和合して雪となせり。
はかりしりぬ。
風をひき、雪をなし、歳を序あらしめ、および、谿林、万物をあらしむる、みな、梅華のちからなり。

太原、孚上座、頌、悟道、云、
憶、昔、当初、未悟時、一声、画、角、一声、悲。
如今、枕上、無、閑夢、一任、梅華、大小、吹。

孚上座は、もと、講者なり。
夾山の典座に開発せられて大悟せり。

これ、梅華の、春風を大小、吹せしむるなり。

# 十方

拳頭、一隻、只、箇十方なり。
赤心、一片、玲瓏、十方なり。
敲出、骨裏、髄、了、也。

釈迦牟尼仏、告、大衆、言、
十方仏土中、唯、有、一乗法。

いわゆる、十方は、仏土を把来して、これをなせり。
このゆえに、仏土を拈来せざれば、十方、いまだ、あらざるなり。
仏土なるゆえに、以、仏、為、主なり。
この娑婆国土は、釈迦牟尼仏土なるがごとし。
この娑婆世界を挙拈して、八両、半斤をあきらかに記して、十方仏土の七尺、八尺なることを参学すべし。
この十方は、一方にいり、一仏にいる。
このゆえに、現、十方せり。
十方、一方、是方、自方、今方なるがゆえに、眼睛方なり、拳頭方なり、露柱方なり、灯籠方なり。
かくのごとくの十方仏土の十方仏、いまだ、大小あらず、浄穢あらず。
このゆえに、十方の唯仏与仏、あい称揚、讃歎するなり。
さらに、あい誹謗して、その長短、好悪をとくを転法輪とし説法とせず。
諸仏、および、仏子として助発、問訊するなり。
仏祖の法を稟受するには、かくのごとく参学するなり。
外道、魔党のごとく是非、毀辱すること、あらざるなり。
いま真丹国につたわれる仏経を披閲して一化の始終を覰見するに、釈迦牟尼仏、いまだかつて、他方の諸仏、それ、劣なり、と、とかず、他方の諸仏、それ、勝なり、と、とかず。
また、他方の諸仏は、諸仏にあらず、と、とかず。
おおよそ、一代の説教に、すべて、みえざるところは、諸仏の、あい是非する仏語なり。
他方の諸仏、また、釈迦牟尼仏を是非したてまつる仏語、つたわれず。
このゆえに、

釈迦牟尼仏、告、大衆、言、

唯我、知、是相。
十方仏、亦、然。

しるべし、唯我、知、是相の相は、打円相なり。
円相は、遮竿、得、恁麼長。那竿、得、恁麼短。なり。
十方仏道は、唯我、知、是相。釈迦牟尼仏、亦、然。の説著なり。
唯我、証、是相。自方仏、亦、然。なり。
我相、知相、是相、一切相、十方相、娑婆国土相、釈迦牟尼仏相なり。
この宗旨は、これ、仏経なり。
諸仏、ならびに、国土は、
両頭にあらず。
有情にあらず。無情にあらず。
迷悟にあらず。
善、悪、無記、等にあらず。
浄にあらず。穢にあらず。
成にあらず。住にあらず。壊にあらず。空にあらず。
常にあらず。無常にあらず。
有にあらず。無にあらず。
自にあらず。他にあらず。
離、四句なり。絶、百非なり。
ただ、これ、十方なるのみなり。
仏土なるのみなり。
しかあれば、十方は、有頭無尾漢なるのみなり。

長沙景岑禅師、告、大衆、言、
尽十方界、是、沙門、一隻眼。

いま、いうところは、瞿曇沙門眼の一隻なり。
瞿曇沙門眼は、吾有、正法眼蔵なり。
阿難に付属すれども、瞿曇沙門眼なり。
尽十方界の角角尖尖、瞿曇の眼処なり。
この尽十方界は、沙門眼のなかの一隻なり。
これより向上に如許多眼あり。

尽十方界、是、沙門、家常語。

家常は、尋常なり。
日本国の俗のことばに、よのつね、という。
しかあるに、沙門、家常の、よのつねの言語は、これ、尽十方界なり、言端語端なり。
家常語は、尽十方界なるがゆえに、尽十方界は、家常語なる道理、あきらかに参学すべし。
この十方、無尽なるがゆえに、尽十方なり。
家常に、この語をもちいるなり。
かの、索馬、索塩、索水、索器のごとし。奉水、奉器、奉塩、奉馬のごとし。
だれが、しらん、没量、大人、この語脈裏に転身転脳することを？
語脈裏に転語するなり。
海口山舌、言端語直の家常なり。
しかあれば、掩口し掩耳する、十方の真箇、是なり。

尽十方界、沙門、全身。

一手、指、天、是、天。
一手、指、地、是、地。
雖然、如是、天上天下、唯我独尊。
これ、沙門全身なる十方尽界なり。
頂𩕳、眼睛、鼻孔、皮肉骨髄の箇箇、みな、透脱、尽十方の沙門身なり。
(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
尽十方を動著せず、かくのごとくなり。
擬議量をまたず。
尽十方界、沙門身を拈来して、見、尽十方界、沙門身するなり。

尽十方界、是、自己光明。

自己とは、父母未生以前の鼻孔なり。
鼻孔、あやまりて自己の手裏にあるを尽十方界という。
しかあるに、自己、現成して現成公案なり、開殿見仏なり。
しかあれども、眼睛、被、別人、換却、木槵子、了、也。
しかあれども、劈面来、大家、相見することをうべし。
さらに、呼、則、易。遣、則、難。なりといえども、
喚、得、回頭、自、回頭。堪、作、何用？　便、著、這漢、回頭。なり。
飯、待、喫人。衣、待、著人。のとき、摸索、不著なるがごとくなりとも、

可惜許。曾、与、爾、三十棒。

尽十方界、在、自己光明裏。

眼皮、一枚、これを自己の光明とす。
忽然として打綻するを在、裏とす。
見、由、在眼を尽十方界という。
しかも、かくのごとくなりといえども、同牀、眠、知、被、穿。

尽十方界、無、一人、不自己。

しかあれば、すなわち、箇箇の作家、箇箇の拳頭、ひとりの十方としても、自己にあらざるなし。
自己なるがゆえに、自自己己、みな、これ、十方なり。
自自己己の十方、したしく十方を罣礙するなり。
自自己己の命脈、ともに、自己の手裏にあるがゆえに、還、他、本分、草料なり。
いま、なにとしてか達磨眼睛、瞿曇鼻孔、あらたに露柱の胎裏にある？
いわく、出入、也、十方、十面、一任。なり。

玄沙院、宗一大師、云、
尽十方界、是、一顆明珠。

あきらかに、しりぬ。
一顆明珠は、これ、尽十方界なり。
神頭鬼面、これを窟宅とせり。
仏祖児孫、これを眼睛とせり。
人家男女、これを頂𩕳、拳頭とせり。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
初心、晩学、これを著衣、喫飯とせり。
先師、これを泥団子として兄弟を打著す。
しかも、これ、単伝の一著子なりといえども、祖宗の眼睛を抉出しきたれり。
抉出するとき、祖宗、ともに一隻手をいだす。
さらに、眼睛裏、放光するのみなり。

乾峰和尚、因、僧、問、
十方薄伽梵、一路、涅槃門。

未審、路頭、在、什麼所？

乾峰、以、拄杖、画、一画、云、
在、遮裏。

いわゆる、在、遮裏は、十方なり。
薄伽梵とは、拄杖なり。
拄杖とは、在、遮裏なり。
一路は、十方なり。
しかあれども、瞿曇の鼻孔裏に拄杖をかくすことなかれ。
拄杖の鼻孔に拄杖をかくすことなかれ。
拄杖の鼻孔に拄杖を撞著することなかれ。
しかも、かくのごとくなりとも、乾峰老漢、すでに十方薄伽梵、一路、涅槃門を料理する、と認ずることなかれ。
ただ在、遮裏と道著するのみなり。
在、遮裏は、なきにあらず。
乾峰老漢、はじめより拄杖に瞞ぜられざらん、よし。
おおよそ、活鼻孔を十方と参学するのみなり。

正法眼蔵　十方
爾時、寛元元年癸卯、十一月十三日、在、日本国、越州、吉峰精舎、示、衆。

# 見仏

釈迦牟尼仏、告、大衆、言、
若、見、諸相、非相、即、見、如来。

いまの見、諸相と見、非相と、透脱せる体達なり。
ゆえに、見、如来なり。
この見仏眼、すでに参開なる現成を見仏とす。
見仏眼の活路、これ、参仏眼なり。
自仏を他方にみ、仏外に自仏をみるとき、条条の蔓枝なりといえども、
見仏を参学せると、
見仏を弁肯すると、
見仏を脱落すると、
見仏を得、活すると、
見仏を使得すると、
日面仏見なり、月面仏見なり。
恁麼の見仏、ともに、無尽面、無尽身、無尽心、無尽手眼の見仏なり。
而今、脚尖に行履する発心、発足より、このかた、弁道、功夫、および、証契、究徹、みな、見仏裏に走入する活眼睛なり、活骨髄なり。
しかあれば、自尽界、他尽方、遮箇頭、那箇頭、おなじく、見仏、功夫なり。
如来、道の若、見、諸相、非相を拈来するに、参学眼なきともがら、おもわくは、諸相を相にあらずとみる、すなわち、見、如来、という。
そのおもむきは、諸相は、相にはあらず、如来なりとみる、というとおもう。

まことに、小量の一辺は、しかのごとくも参学すべしといえども、仏意は、道成は、しかにはあらざるなり。
しるべし。
諸相を見取し、非相を見取する、即、見、如来なり。
如来あり、非如来あり。

清涼院、大法眼禅師、云、
若、見、諸相、非相、不見、如来。

いま、この大法眼、道は、見仏、道なり。

これに法眼、道あり、見仏、道ありて、通語するに、競頭来なり、共出手なり。
法眼、道は、耳処に、聞著すべし。
見仏、道は、眼処に、聞、声すべし。
しかあるを、この宗旨を参学する従来の、おもわくは、
諸相は、如来相なり。
一相の如来相にあらざる、まじわれること、なし。
この相をかりにも非相とすべからず。
もし、これを非相とするは、捨、父、逃逝なり。
この相、すなわち、如来相なるがゆえに、諸相は、諸相なるべし、と道取するなり、
といいきたれり。

まことに、これ、大乗の極談なり、諸方の所証なり。
しかのごとく、決定、一定して、信受、参受すべし。
さらに、随、風、東西の軽毛なることなかれ。
諸相は、如来相なり、非相にあらず、と参究、見仏し、決定、証信して受持すべし、諷誦、通利すべし。
かくのごとくして、自己の耳、目に見聞、ひま、なからしむべし。
自己の身心、骨髄に、脱落ならしむべし。
自己の山河、尽界に、透脱ならしむべし。
これ、参学、仏祖の行履なり。
自己の云為にあれば、自己の眼睛を発明せしむべからず、とおもうことなかれ。
自己の一転語に転ぜられて、自己の一転、仏祖を見、脱落するなり。
これ、仏祖の家常なり。
このゆえに、参取する隻条、道あり。
いわゆる、
諸相、すでに非相にあらず。
非相、すなわち、諸相なり。
非相、これ、諸相なるがゆえに、非相、まことに、非相なり。
喚、作、非相の相、ならびに、喚、作、諸相の相、ともに、如来相なり、と参学すべし。
参学の屋裏に両部の典籍あり。
いわゆる、参見典と参不見典となり。
これ、活眼睛の所参学なり。

もし、いまだ、これらの典籍を著眼看の参徹せざれば、参徹眼にあらず。
参徹眼にあらざれば、見仏にあらず。
見仏に、諸相所見、非相所見あり。
吾、不会、仏法なり。
不見仏に諸相所不見、非相所不見あり。
会仏法人、得なり。
法眼、道の八、九成、それ、かくのごとし。
しかありといえども、この一大事、因縁、さらに、いうべし、若、見、諸相、実相、即、見、如来。
かくのごとくの道取、みな、これ、釈迦牟尼仏之所加被力なり。
異面目の皮肉骨髄にあらず。

爾時、釈迦牟尼仏、在、霊鷲山。
因、薬王菩薩、告、大衆、言、
若、親近、法師、即、得、菩薩道。
随順、是師、学、得見、恒沙仏。

いわゆる、親近、法師というは、二祖の八載、事、師のごとし。
しこうしてのち、全臂得髄なり。
南嶽の十五年の弁道のごとし。
師の髄をうるを親近という。
菩薩道というは、吾、亦、如是。汝、亦、如是。なり。
如許多の蔓枝、行履を即、得するなり。
即、得は、
古来より現ぜるを引、得するにあらず、
未生を発、得するにあらず、
現在の漫漫を策把するにあらず、
親近、得を脱落するを即、得という。
このゆえに、一切の得は、即、得なり。
随順、是師、学は、猶、是、侍者の古蹤なり。
参究すべし。
この正当恁麼行履時、すなわち、得見の承当あり。
そのところ、見、恒沙仏なり。
恒沙仏は、頭頭、活鱍鱍聻なり。
あながちに見、恒沙仏をはしり、へつらうことなかれ。
まず、すべからく、随、師、学をはげむべし。

随、師、学、得、仏見なり。

釈迦牟尼仏、告、一切証菩提衆、言、
深入、禅定、見、十方仏。

尽界は、深なり。
十方仏土中なるがゆえに。
これ、広にあらず、大にあらず、小にあらず、窄にあらず。
挙すれば、随、他、挙す。
これを全収と道す。
これ、七尺にあらず、八尺にあらず、一丈にあらず。
全収、無外にして入之一字なり。
この深入は、禅定なり。
深入、禅定は、見、十方仏なり。
深入、裏許、無、人、接、渠にして得、在なるがゆえに、見、十方仏なり。
設使、将来、他、亦、不受のゆえに、仏、十方、在なり。
深入は、長長出、不得なり。
見、十方仏は、只、見、臥如来なり。
禅定は、入来、出頭、不得なり。
真龍をあやしみ恐怖せずば、見仏の而今、さらに疑著を抛捨すべからず。
見仏より見仏するゆえに、禅定より禅定に深入す。
この禅定、見仏、深入、等の道理、さきより閑功夫漢ありて造作しおきて、いまの漢に伝授するにあらず。
而今の新条にあらざれども、恁麼の道理、必然なり。
一切の伝道受業、かくのごとし。
修因、得果、かくのごとし。

釈迦牟尼仏、告、普賢菩薩、言、
若、有、受持、読誦、正憶念、修習、書写、是法華経、者、当、知、是人、則、見、釈迦牟尼仏。
如、従、仏口、聞、此経典。

おおよそ、一切諸仏は、見、釈迦牟尼仏、成、釈迦牟尼仏するを成道、作仏というなり。
かくのごとくの仏儀、もとより、この七種の行所の条条より、うるなり。
七種行人は、当、知、是人なり、如、是当人なり。

これ、すなわち、見、釈迦牟尼仏所なるがゆえに、したしく、これ、如、従、仏口、聞、此経典なり。
釈迦牟尼仏は、見、釈迦牟尼仏より、このかた、釈迦牟尼仏なり。
これによりて舌相、あまねく三千を覆す。
いずれの山海か仏経にあらざらん？
このゆえに、書写の当人ひとり、見、釈迦牟尼仏なり。
仏口は、よのつねに万古を開す。
いずれの時節か経典にあらざらん？
このゆえに、受持の行者のみ、見、釈迦牟尼仏なり。
乃至、眼耳鼻、等の功徳も、また、かくのごとくなるべきなり。
および、前後左右、取捨、造次、かくのごとくなり。
いまの此経典にうまれ、あう、見、釈迦牟尼仏をよろこばざらんや？
生、値、釈迦牟尼仏なり。
身心をはげまして受持、読誦、正憶念、修習、書写、是法華経者、則、見、釈迦牟尼仏なるべし。
如、従、仏口、聞、此経典。
だれが、これをきおい、きかざらん？
いそがず、つとめざるは、貧窮、無福慧の衆生なり。
修習するは、当、知、是人、則、見、釈迦牟尼仏なり。

釈迦牟尼仏、告、大衆、言、
若、善男子、善女人、聞、我、説、寿命、長遠、深心、信解、
則、為、見、仏、常在、耆闍崛山、共、大菩薩、諸声聞衆、囲遶、説法。
又、見、此娑婆世界、其地、瑠璃、坦然平正。

この深心というは、娑婆世界なり。
信解というは、無回避所なり。
誠諦の仏語、だれが信解せざらん？
この経典にあいたてまつれるは、信解すべき機縁なり。
深心、信解、是法華、深心、信解、寿命、長遠のために、願、生、此娑婆国土しきたれり。
如来の神力、慈悲力、寿命長遠力、よく、
心を拈じて信解せしめ、
身を拈じて信解せしめ、
尽界を拈じて信解せしめ、
仏祖を拈じて信解せしめ、

諸法を拈じて信解せしめ、
実相を拈じて信解せしめ、
皮肉骨髄を拈じて信解せしめ、
生死去来を拈じて信解せしむるなり。
これらの信解、これ、見仏なり。
しかあれば、しりぬ。
心頭眼ありて見仏す。
信解眼をえて見仏す。
ただ見仏のみにあらず。
常在、耆闍崛山をみる、というは、耆闍崛山の常在は、如来、寿命と一斉なるべし。
しかあれば、見、仏、常在、耆闍崛山は、
前頭来も、如来、および、耆闍崛山、ともに、常在なり。
後頭来も、如来、および、耆闍崛山、ともに、常在なり。
菩薩、声聞も、おなじく、常在なるべし。
説法も、また、常在なるべし。
娑婆世界、其地、瑠璃、坦然平正をみる。
娑婆世界をみること、動著すべからず。
高所、高平。
低所、低平。なり。
この地は、これ、瑠璃地なり。
これを坦然平正なるとみる目をいやしくすることなかれ。
瑠璃、為、地の地は、かくのごとし。
この地を瑠璃にあらずとせば、耆闍崛山は、耆闍崛山にあらず、釈迦牟尼仏は、釈迦牟尼仏にあらざらん。
其地、瑠璃を信解する、すなわち、深、信解、相なり。
これ、見仏なり。

釈迦牟尼仏、告、大衆、言、
一心、欲、見仏、不自惜、身命、時、我、及、衆僧、倶、出、霊鷲山。

いうところの一心は、凡夫、二乗、等のいう一心にあらず。
見仏の一心なり。
見仏の一心というは、霊鷲山なり、及、衆僧なり。
而今の箇箇、ひそかに欲、見仏をもよおすは、霊鷲山心をこらして欲、見仏するなり。

しかあれば、一心、すでに霊鷲山なり。
一身、それ、心に倶、出せざらんや？
倶、一身心ならざらんや？
身心、すでに、かくのごとし。
寿者命者、また、かくのごとし。
かるがゆえに、自惜を霊鷲山の但、惜、無上道に一任す。
このゆえに、我、及、衆僧、霊鷲山、倶、出なるを見仏の一心と道取す。

釈迦牟尼仏、告、大衆、言、
若、説、此経、則、為、見、我、多宝如来、及、諸化仏。

説、此経は、我、常住、於、此、以、諸神通力、令、顛倒衆生、雖近、而、不見なり。
この表裏の神力如来に則、為、見、我等の功徳そなわる。

釈迦牟尼仏、告、大衆、言、
能、持、是経、者、則、為、已、見、我。
亦、見、多宝仏、及、諸分身者。

この経を持すること、かたきゆえに、如来、よのつねに、これをすすむ。
もし、おのずから持是経者あるは、すなわち、見仏なり。
はかりしりぬ。
見仏すれば、持経す。
持経のもの、見仏のものなり。
しかあれば、すなわち、乃至、聞、一偈、一句、受持するは、
得見、釈迦牟尼仏なり。
亦、見、多宝仏なり。
見、諸分身仏なり。
伝、仏法蔵なり。
得、仏正眼なり。
得見、仏命なり。
得、仏向上眼なり。
得、仏頂􏰀眼なり。(「􏰀」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
得、仏鼻孔なり。

雲雷音宿王華智仏、告、妙荘厳王、言、

大王、
当、知、
善知識者、是、大因縁。
所謂、化導、令、得見、仏、発、阿耨多羅三藐三菩提心。

いま、この大会は、いまだ、むしろをまかず。
過去、現在、未来の諸仏と称すといえども、凡夫の三世に準的すべからず。
いわゆる、過去は心頭なり、現在は拳頭なり、未来は脳後なり。
しかあれば、雲雷音宿王華智仏は、心頭、現成の見仏なり。
見仏の通語、いまのごとし。
化導は、見仏なり。
見仏は、発、阿耨多羅三藐三菩提心なり。
発菩提心は、見仏の頭正尾正なり。

釈迦牟尼仏、言、
諸有、修、功徳、柔和、質直者、則、皆、見、我身、在、此、而、説法。

あらゆる功徳と称するは、拕泥帯水なり、随、波、逐、浪なり。
これを修するを吾、亦、如是。汝、亦、如是。の柔和、質直者という。
これを泥裏に見仏しきたり、波心に見仏しきたる、在、此、而、説法にあずかる。

しかあるに、近来、大宋国に禅師と称するともがら、おおし。
仏法の縦横をしらず。
見聞、いとすくなし。
わずかに臨済、雲門の両、三語を諳誦して仏法の全道とおもえり。
仏法もし臨済、雲門の両、三語に道尽せられば、仏法、今日にいたるべからず。
臨済、雲門を仏法の為尊と称しがたし。
いかに、いわんや、いまのともがら、臨済、雲門におよばず。
不足、言のやからなり。
かれら、おのれが愚鈍にして仏経のこころ、あきらめがたきをもって、みだりに仏経を謗す。
さしおきて修習せず。
外道の流類といいぬべし。
仏祖の児孫にあらず。

いわんや、見仏の境界におよばんや？
孔子、老子の宗旨に、なお、いたらざるともがらなり。
仏祖の屋裏児、かの禅師と称するやからに、あいあうことなかれ。
ただ見仏眼の眼睛を参究、体達すべし。

先師、天童古仏、挙。

波斯匿王、問、賓頭盧尊者、
承聞、
尊者、親、見仏来。
是？　否？

尊者、以、手、策起、眉毛、示、之。

先師、頌、云、
策起、眉毛、答、問端。
親、曾、見仏、不相瞞。
至、今、応供、四天下。
春、在、梅梢。
帯、雪、寒。

いわゆる、見仏は、見、自仏にあらず、見、他仏にあらず、見仏なり。
一枝、梅は、見、一枝、梅のゆえに、開華、明明なり。
いま、波斯匿王の問取する宗旨は、尊者、すでに見仏なりや？　作仏なりや？　と問取するなり。
尊者、あきらかに眉毛を策起せり。
見仏の証験なり。
相瞞すべからず。
至、今して、いまだ、休罷せず。
応供、あらわれて、かくるることなし。
親、曾の見仏、たどるべからず。
かの三億家の見仏というは、この見仏なり。
見、三十二相には、あらず。
見、三十二相は、だれが境界をへだてん？
この見仏の道理をしらざる人、天、声聞、縁覚の類、おおかるべし。

たとえば、払子を竪、起する、おおしといえども、払子を竪、起するは、おおきにあらず、というがごとし。
見仏は、被、仏、見成なり。
たとえ自己は覆蔵せんことをおもうとも、見仏、さきだちて漏泄せしむるなり。
これ、見仏の道理なり。
如、恒河沙、数量の身心を功夫して審細に、この策起、眉毛の面目を参究すべし。
たとえ百、千、万劫の昼夜、つねに釈迦牟尼仏に共住せりとも、いまだ策起、眉毛の力量なくば、見仏にあらず。
たとえ二千余載より、このかた、十万余里の遠方にありとも、策起、眉毛の力量、したしく見成せば、空王已前より、見、釈迦牟尼仏なり、見、一枝、梅なり、見、梅梢、春なり。
しかあれば、親、曾、見仏は、
礼三拝なり。
合掌、問訊なり。
破顔微笑なり。
拳頭、飛、霹靂なり。
跏趺坐、蒲団なり。

賓頭盧尊者、赴、阿育王宮、大会、斎。
行、香、次、王、作、礼、問、尊者、曰、
承聞、
尊者、親、見仏来。
是？　否？

尊者、以、手、撥、開、眉毛、曰、
会、麼？
王、曰、
不会。
尊者、曰、
阿那婆達多龍王、請、仏、斎、時、貧道、亦、預、其数。

いわゆる、阿育王、問の宗旨は、尊者、親、見仏来、是？　否？　の言、これ、尊者、すでに尊者なりや？　と問著するなり。
ときに、尊者、すみやかに眉毛を撥、開す。

これ、見仏を出現、於、世せしむるなり、作仏を親、見せしむるなり。
阿那婆達多龍王、請、仏、斎、時、貧道、亦、預、其数という。
しるべし。
請、仏の会には、唯仏与仏、稲麻竹葦すべし。
四果、支仏の、あずかるべきにあらず。
たとえ四果、支仏、きたれりとも、かれを挙して請、仏のかずに、あずかるべからず。
尊者、すでに自称す、請、仏、斎、時、貧道、また、そのかずなりき、と。
無端にきたれる自道取なり。
見仏なる道理あきらかなり。
請、仏というは、請、釈迦牟尼仏のみにあらず、請、無量、無尽、三世、十方、一切諸仏なり。
請、諸仏の数にあずかる、無諱、不諱の親、曾、見仏なり。
見仏、見師、見自、見汝の指示、それ、かくのごとくなるべし。
阿那婆達多龍王というは、阿耨達池、龍王なり。
阿耨達池、ここには、無熱悩池という。

保寧仁勇禅師、頌、曰、
我仏、親、見、賓頭盧、
眉、長。
髪、短。
双眉、麤。
阿育王、猶、狐疑、
唵、摩尼、悉哩、蘇嚧。

この頌は、十成の道にあらざれども、趣向の参学なるがゆえに、拈来するなり。

趙州真際大師、因、僧、問、
承聞、
和尚、親、見、南泉。
是？　否？

師、曰、
鎮州、出、大、蘿蔔、頭。

いまの道、現成は、親、見、南泉の証験なり。
有語にあらず。無語にあらず。
下語にあらず。通語にあらず。
策起、眉毛にあらず。撥、開、眉毛にあらず。
親、見、眉毛なり。
たとえ軼才の独歩なりとも、親、見にあらずよりは、かくのごとくなるべからず。
この鎮州、出、大、蘿蔔、頭の語は、真際大師の鎮州、竇家園、真際院に住持なりしときの道なり。
のちに、真際大師の号をたてまつれり。

かくのごとくなるがゆえに、見仏眼を参開するより、このかた、仏祖、正法眼蔵を正伝せり。
正法眼蔵の正伝あるとき、仏、見、雍容の威儀、現成し、見仏、ここに巍巍堂堂なり。

正法眼蔵　見仏
爾時、寛元元年癸卯、冬、十一月朔十九日、在、禅師峰山、示、衆。

# 遍参

仏祖の大道は、究竟、参徹なり。
足下、無糸、去なり。
足下、雲、生なり。
しかも、かくのごとくなりといえども、華開、世界起なり、吾、常、於、此、切なり。
このゆえに、
甜瓜、徹蔕、甜なり。
苦瓠、連根、苦なり。
甜甜、徹蔕、甜なり。
かくのごとく、参学しきたれり。

玄沙山、宗一大師、因、雪峰、召、師、曰、
備頭陀、
何、不、遍参、去？

師、云、
達磨、不来、東土。
二祖、不往、西天。

雪峰、深、然、之。

いわゆる、遍参底の道理は、
翻巾斗、参なり。
聖諦の亦、不為なり。
何階級之有？　なり。

南嶽、大慧禅師、はじめて曹谿古仏に参ずるに、古仏、いわく、
是、甚麼物、恁麼来。

この泥団子を遍参すること、始終、八年なり。

末上に遍参する一著子を古仏に白して、もうさく、
懐譲、会得、
当初、来時、和尚、接、懐譲、是、甚麼物、恁麼来。

ちなみに、曹谿古仏、道、
爾、作麼生、会？

ときに、大慧、もうさく、
説、似、一物、即、不中。

これ、遍参、現成なり。
八年、現成なり。

曹谿古仏、とう、
還、仮、修、証？　否？

大慧、もうさく、
修、証、不無。
染汚、即、不得。

すなわち、曹谿、いわく、
吾、亦、如是。
汝、亦、如是。
乃至、西天、諸仏、諸祖、亦、如是。

これより、さらに八載、遍参す。

頭正尾正、かぞうるに、十五白の遍参なり。
恁麼来は、遍参なり。
説、似、一物、即、不中に、諸仏、諸祖を開殿、参見する、すなわち、亦、如是、参なり。
入、画、看より、このかた、六十五百千万億の転身、遍参す。
等閑の入、一叢林、出、一叢林を遍参とするにあらず。
全眼睛の参見を遍参とす。
打得徹を遍参とす。
面皮、厚、多少を見徹する、すなわち、遍参なり。
雪峰、道の遍参の宗旨、もとより出嶺をすすむるにあらず、北往南来をすすむるにあらず。
玄沙、道の達磨、不来、東土。二祖、不往、西天。の遍参を助発するなり。
たとえば、なんぞ遍参にあらざらん？　と、いわんがごとし。

玄沙、道の達磨、不来、東土は、来、而、不来の乱道にあらず、大地、無、寸土の道理なり。
いわゆる、達磨は、命脈、一尖なり。
たとえ東土の全土、たちまちに極涌して参侍すとも、転身にあらず。
さらに語脈の翻身にあらず。
不来、東土なるゆえに、東土に見、面するなり。
東土たとえ仏面祖面、相見すとも、来、東土にあらず。
拈得、仏祖、失却、鼻孔なり。
おおよそ、
土は、東西にあらず。
東西は、土にかかわれず。
二祖、不往、西天は、西天を遍参するには、不往、西天なり。
二祖もし西天にゆかば、一臂、落、了、也。
しばらく、二祖、なにとしてか西天にゆかざる？
いわゆる、碧眼の眼睛裏に跳入するゆえに、不往、西天なり。
もし碧眼裏に跳入せずば、必定して西天にゆくべし。
抉出、達磨、眼睛を遍参とす。
西天にゆき、東土にきたる、遍参にあらず。
天台、南嶽にいたり、五台、上天にゆくをもって遍参とするにあらず。
四海五湖もし透脱せざらんは、遍参にあらず。
四海五湖に往来するは、
四海五湖をして遍参せしめず。
路頭を滑ならしむ。
脚下を滑ならしむ。
ゆえに、遍参を打失せしむ。
おおよそ、
尽十方界、是、箇真実人体の参徹を遍参とするゆえに、達磨、不来、東土。
二祖、不往、西天。の参究あるなり。
遍参は、
石頭、大、底、大。
石頭、小、底、小。なり。
石頭を動著せしめず、大参小参ならしむるなり。
百、千、万箇を百、千、万頭に参見するは、いまだ遍参にあらず。
半語脈裏に百、千、万、転身なるを遍参とす。
たとえば、打地、唯、打地は、遍参なり。

一番、打地、一番、打空、一番、打四方八面来は、遍参にあらず。
倶胝、参、天龍、得、一指頭は、遍参なり。
倶胝、唯、竪、一指は、遍参なり。

玄沙、示、衆、云、
我、与、釈老老師、同参。

時、有、僧、出、問、
未審。
参見、甚麼人？

師、云、
釣魚船上、謝三郎。

釈迦老師、参底の頭正尾正、おのずから釈迦老師と同参なり。
玄沙老漢、参底の頭正尾正、おのずから玄沙老漢と同参なるゆえに、
釈迦老師と玄沙老漢と、同参なり。
釈迦老師と玄沙老漢と、参足、参不足を究竟するを遍参の道理とす。
釈迦老師は、玄沙老漢と同参するゆえに、古仏なり。
玄沙老漢は、釈迦老師と同参なるゆえに、児孫なり。
この道理、審細に遍参すべし。
釣魚船上、謝三郎。
この宗旨、あきらめ参学すべし。
いわゆる、釈迦老師と玄沙老漢と、同時、同参の時節を遍参、功夫するなり。
釣魚船上、謝三郎を参見する玄沙老漢ありて同参す。
玄沙山上、禿頭漢を参見する謝三郎ありて同参す。
同参、不同参、みずから功夫せしめ、他ずから功夫ならしむべし。
玄沙老漢と釈迦老師と、同参す、遍参す。
謝三郎、与、我、参見、甚麼人？　の道理を遍参すべし、同参すべし。
いまだ遍参の道理、現在前せざれば、
参、自、不得なり。参、自、不足なり。
参、他、不得なり。参、他、不足なり。
参、人、不得なり。
参、我、不得なり。
参、拳頭、不得なり。
参、眼睛、不得なり。

自釣自上、不得なり。
未釣、先上、不得なり。
すでに遍参、究尽なるには、
脱落、遍参なり。
海枯、不見、底なり。
人死不留心なり。
海枯というは、全海、全、枯なり。
しかあれども、海もし枯竭しぬれば、不見、底なり。
不留、全留、ともに、人心なり。
人死のとき、心、不留なり。
死を拈来せるがゆえに、心、不留なり。
このゆえに、
全人は、心なり。
全心は、人なり。
と、しりぬべし。
かくのごとくの一方の表裏を参究するなり。

先師、天童古仏、あるとき、諸方の長老の道旧なる、いたり、あつまりて、上堂を請するに、上堂、云、
大道、無門。
諸方、頂𩕳上、跳出。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
虚空、絶路。
清涼、鼻孔裏、入来。
恁麼、相見、瞿曇、賊種。臨済、禍胎。
咦！
大家、顛倒、舞、春風。
驚、落、杏、華、飛、乱、紅。

而今の上堂は、先師古仏、ときに、建康府の清涼寺に住持のとき、諸方の長老、きたれり。
これらの道旧とは、
あるときは、賓、主とありき。
あるいは、隣単なりき。
諸方にして、かくのごとくの旧友なり。おおからざらめやは？
あつまりて、上堂を請するときなり。
渾、無、箇話の長老は、交友ならず。請する友の数にあらず。

大尊貴なるをかしづき、請するなり。
おおよそ、先師の遍参は、諸方の、きわむるところにあらず。
大宋国、二、三百年来は、先師のごとくなる古仏あらざるなり。
大道、無門は、四、五千条、華柳、巷。二、三万座、管絃、楼。なり。
しかあるを、渾身、跳出するに、余外をもちいず、頂□上に跳出するなり、鼻孔裏に入来するなり、ともに、これ、参学なり。(「□」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
頂□上の跳脱、いまだあらず、鼻孔裏の転身、いまだあらざるは、参学人ならず、遍参漢にあらず。
遍参の宗旨、ただ玄沙に参学すべし。

四祖、かつて三祖に参学すること、九載せし。
すなわち、遍参なり。
南泉、願禅師、そのかみ、池陽に一住して、やや三十年、やまをいでざる。
遍参なり。
雲巌道吾、等、在、薬山、四十年のあいだ、功夫、参学する。
これ、遍参なり。
二祖、そのかみ、嵩山に参学すること、八載なり。
皮肉骨髄を遍参しつくす。

遍参は、ただ只管、打坐、身心、脱落なり。
而今の去、那辺、去。来、遮裏、来。
その間隙あらざるがごとくなる。
渾体、遍参なり。
大道の渾体なり。
毘盧、頂上、行は、無情三昧なり。
決得、恁麼は、毘盧、行なり。
跳出の遍参を参徹する。
これ、葫蘆の、葫蘆を跳出する。
葫蘆、頂上を選仏、道場とせること、ひさし。
命、如、糸なり。
葫蘆、遍参、葫蘆なり。
一茎草を建立するを遍参とせるのみなり。

正法眼蔵　遍参
爾時、寛元元年癸卯、十一月二十七日、在、越宇、禅師峰下、茅庵、示、衆。

# 眼睛

億、千、万劫の参学を拈来して団欒せしむるは、八万四千の眼睛なり。

先師、天童古仏、住、瑞巌、時、上、堂、示、衆、云、
秋風、清。
秋月、明。
大地山河、露、眼睛。
瑞巌、点瞎、重、相見。
棒、喝、交、馳、験、衲僧。

いま、衲僧を験す、というは、古仏なりや？　と験するなり。
その要機は、棒、喝の交、馳せしむるなり。
これを点瞎とす。
恁麼の見成、活計は、眼睛なり。
山河大地、これ、眼睛、露の朕兆、不打なり。
秋風、清なり、一老なり。
秋月、明なり、一不老なり。
秋風、清なる、四大海も比すべきにあらず。
秋月、明なる、千、日、明よりも、あきらかなり。
清、明は、眼睛なる山河大地なり。
衲僧は、仏祖なり。
大悟をえらばず、不悟をえらばず、朕兆前後をえらばず、眼睛なるは、仏祖なり。
験は、
眼睛、露なり。
瞎、現成なり。
活眼睛なり。
相見は、相逢なり。
相逢、相見は、眼頭尖なり、眼睛、霹靂なり。
おおよそ、渾身は、おおきに、渾眼は、ちいさかるべし、とおもうことなかれ。
往往に、老老大大なりとおもうも、渾身、大なり、渾眼、小なり、と解会せり、これ、未具、眼睛のゆえなり。

洞山、悟本大師、在、雲巌会、時、遇、雲巌、作、鞋、次、師、白、雲巌、曰、
就、和尚、乞、眼睛。

雲巌、云、
汝、底、与、阿誰、去、也？

師、曰、
某甲、無。

雲巌、云、
有。
汝、向、什麼所、著？

師、無語。

雲巌、云、
乞、眼睛、底、是、眼睛？　否？

師、曰、
非、眼睛。

雲巌、咄、之。

しかあれば、すなわち、全彰の参学は、乞、眼睛なり。
雲堂に弁道し、法堂に上参し、寝堂に入室する、乞、眼睛なり。
おおよそ、随衆参去、随衆参来、おのれずからの乞、眼睛なり。
眼睛は、自己にあらず、他己にあらざる道理、あきらかなり。
いわく、洞山、すでに、就、師、乞、眼睛の請益あり。
はかりしりぬ。
自己ならんは、人に乞請せらるべからず。
他己ならんは、人に乞請すべからず。
汝、底、与、誰、去、也？　と指示す。
汝、底の時節あり、与、誰の処分あり。
某甲、無。
これ、眼睛の自道取なり。
かくのごとくの道、現成、しずかに究理、参学すべし。

雲巌、いわく、有。向、什麼所、著？
この道、眼睛は、某甲、無の無は、有。向、什麼所、著？　なり。
向、什麼所、著？　は、有。なり。
その恁麼、道なりと参究すべし。
洞山、無語。
これ、茫然にあらず。
業識独竪の標的なり。
雲巌、為、示するに、いわく、乞、眼睛、底、是、眼睛？　否？
これ、点瞎、眼睛の節目なり、活砕眼睛なり。
いわゆる、雲巌、道の宗旨は、
眼睛、乞、眼睛なり。
水、引、水なり。
山、連、山なり。
異類中行なり。
同類中生なり。
洞山、いわく、非、眼睛。
これ、眼睛の自挙唱なり。
非、眼睛の身心慮知、形段あらんところをば、自挙の活眼睛なりと相見すべきなり。
三世諸仏は、眼睛の転大法輪、説大法輪を立地、聴しきたれり。
畢竟じて参究する堂奥には、眼睛裏に跳入して、発心、修行、証、大菩提するなり。
この眼睛、もとより、このかた、自己にあらず、他己にあらず。
もろもろの罣礙なきがゆえに、かくのごとくの大事も、罣礙あらざるなり。
このゆえに、
古先、いわく、
奇哉。
十方仏、元、是、眼中華。

いわゆる、十方仏は、眼睛なり。
眼中華は、十方仏なり。
いまの進歩、退歩する、打坐、打睡する、しかしながら、眼睛ずからのちからを承嗣して恁麼なり。
眼睛裏の把定、放行なり。

先師古仏、云、

抉出、達磨眼睛、作、泥団子、打、人。

高声、云、
著、
海枯、徹底過、波浪、拍、天、高。

これは、清涼寺の方丈にして、海衆に為、示するなり。
しかあれば、打、人というは、作、人といわんがごとし。
打のゆえに、人人は、箇箇の面目あり。
たとえば、達磨の眼睛にて人人をつくれりというなり。
つくれるなり。
その打、人の道理、かくのごとし。
眼睛にて打坐せる人人なるがゆえに、いま、雲堂打人の拳頭、法堂打人の拄杖、方丈打人の竹篦、払子、すなわち、達磨眼睛なり。
達磨眼睛を抉出しきたりて、泥団子につくりて打、人するは、いまの人、これを参請、請益、朝上朝参、打坐、功夫とらいうなり。
打著、什麼人？　いわく、海枯、徹底、浪、高、拍、天なり。

先師古仏、上、堂、讃歎、如来成道、云、
六年、落草、野狐精。
跳出、渾身、是、葛藤。
打失、眼睛、無所覓、
誑、人、剛、道、
悟、明星。

その明星にさとる、というは、打失、眼睛の正当恁麼時の傍観人、話なり。
これ、渾身の葛藤なり。
ゆえに、容易、跳出なり。
覓、所覓は、現成をも無所覓す、未現成にも無所覓なり。

先師古仏、上、堂、云、
瞿曇、打失眼睛時、雪裏、梅華、只一枝。
而今、到所、成、荊棘、
却、笑、春風、繚乱、吹。

且、道すらくは、瞿曇眼睛は、ただ一、二、三のみにあらず。
いま、打失するは、いずれの眼睛なりとかせん？

打失眼睛と称する眼睛の、あるならん。
さらに、かくのごとくなる、なかに、雪裏、梅華、只一枝なる眼睛あり。
はるに、さきだちて、はるのこころを漏泄するなり。

先師古仏、上、堂、云、
霖霪、大雨。
豁達、大晴。
蝦蟆、啼。
蚯蚓、鳴。
古仏、
不、曾、過、去。
発揮、金剛眼睛。
咄！
葛藤。
葛藤。

いわくの金剛眼睛は、霖霪、大雨なり、豁達、大晴なり、蝦蟆、啼なり、蚯蚓、鳴なり。
不、曾、過、去なるゆえに、古仏なり。
古仏、たとえ過、去すとも、不古仏の過、去に、一斉なるべからず。

先師古仏、上、堂、云、
日、
南、長、至。
眼睛裏、放、光。
鼻孔裏、出、気。

いま、綿綿なる一陽、三陽、日、月、長、至、連底脱落なり。
これ、眼睛裏、放、光なり、日裏、看、山なり。
このうちの消息、威儀、かくのごとし。

先師古仏、ちなみに、臨安府、浄慈寺にして、上堂するに、いわく、
今朝、二月初一、
払子、眼睛、凸出。
明、似、鏡。
黒、如、漆。

驀然、□跳、呑却、乾坤、一色。(「□」は「⻊ 孛」という一文字の漢字です。)
衲僧門下、猶、是、撞、牆、撞、壁。
畢竟、如何？
尽、情、拈却、笑、呵呵、一任、春風。
没奈何。

いま、いう、撞、牆、撞、壁は、渾牆、撞なり、渾壁、撞なり。
この眼睛あり。
今朝、および、二月、ならびに、初一、ともに、条条の眼睛なり、いわゆる、払子、眼睛なり。
驀然として□跳するゆえに、今朝なり。(「□」は「⻊ 孛」という一文字の漢字です。)
呑却、乾坤、いく千、万箇するゆえに、二月なり。
尽、情、拈却のとき、初一なり。
眼睛の見成、活計、かくのごとし。

正法眼蔵　眼睛
于、時、寛元元年癸卯、十二月十七日、在、越州、禅師峰下、示、衆。

# 家常

おおよそ、仏祖の屋裏には、茶飯、これ、家常なり。
この茶飯の儀、ひさしく、つたわれて而今の現成なり。
このゆえに、仏祖、茶飯の活計きたれるなり。

大陽山、楷和尚、問、投子、曰、
仏祖、意、句、如、家常、茶飯。
離此之余、還、有、為、人、言句、也？　無？

投子、曰、
汝、道、
寰中、天子勅、還、仮、禹、湯、堯、舜、也？　無？

大陽、擬、開口。

投子、拈、払子、掩、師口、曰、
汝、発意来時、早、有、三十棒分、也。

大陽、
於、此、開悟。
礼拝、便、行。

投子、曰、
且、来、闍梨。

大陽、竟、不回頭。

投子、曰、
子、
到、不疑之地、耶？

大陽、以、手、掩、耳、而、去。

しかあれば、あきらかに保任すべし。
仏祖、意、句は、仏祖、家常の茶飯なり。

家常の麤茶、淡飯は、仏祖、意、句なり。
仏祖は、茶飯をつくる。
茶飯、仏祖を保任せしむ。
しかあれども、このほかの茶飯力をからず。
このうちの仏祖力をついやさざるのみなり。
還、仮、堯、舜、禹、湯、也？　無？　の見示を功夫、参学すべきなり。
離此之余、還、有、為、人、言句、也？　無？
この問頭の頂□を参跳すべし。(「□」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
跳、得、也？　跳、不得、也？　と試、参、看すべし。

南嶽山、石頭庵、無際大師、曰、
吾、結、草庵、無、宝貝。
飯、了、従容、図、睡快。

道、来。道、去。道、来去する飯、了は、参飯、仏祖、意、句なり。
未飯なるは、未飽参なり。
しかあるに、この飯、了、従容の道理は、飯先にも現成す、飯中にも現成す、飯後にも現成す。
飯、了の屋裏に喫、飯ありと錯認する、四、五升の参学なり。

先師古仏、示、衆、曰、
記得、

僧、問、百丈、
如何、是、奇特事？

百丈、曰、
独坐、大雄峰。

大衆、不得、動著。
且、教、坐殺、這漢。

今日、忽、有、人、問、浄上座、

如何、是、奇特事？
只、向、佗、道、
有、甚、奇特事？

畢竟、如何？
浄慈、鉢盂、移過、
天童、喫、飯。

仏祖の家裏に、かならず、奇特事あり。
いわゆる、独坐、大雄峰なり。
いま、坐殺、這漢せしむるに、あうとも、なお、これ、奇特事なり。
さらに、かれよりも、奇特なる、あり。
いわゆる、浄慈、鉢盂、移過、天童、喫、飯なり。
奇特事は、条条面面、みな、喫、飯なり。
しかあれば、独坐、大雄峰、すなわち、これ、喫、飯なり。
鉢盂は、喫飯用なり。
喫飯用は、鉢盂なり。
このゆえに、浄慈、鉢盂なり、天童、喫、飯なり。
飽、了、知、飯あり。
喫、飯、了、飽あり。
知、了、飽、飯あり。
飽、了、更、喫、飯あり。
しばらく、作麼生ならんか、これ、鉢盂？
おもわくは、祗、是、木頭にあらず、黒、如、漆にあらず。
頑石ならんや？
鉄漢ならんや？
無底なり。
無鼻孔なり。
一口、呑、虚空、虚空、合掌、受なり。

先師古仏、ちなみに、台州、瑞巌浄土禅院の方丈にして、示衆するに、いわく、
飢、来、喫、飯。
困、来、打眠。
炉、鞴、亙、天。

いわゆる、飢、来は、喫飯来人の活計なり。
未曾喫飯人は、飢、不得なり。
しかあれば、しるべし。
飢、一家常ならん、われは、飯了人なり、と決定すべし。
困、来は、困中又困なるべし。
困の頂⿰上より全跳しきたれり。(「⿰」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
このゆえに、渾身の活計に、都、撥、転渾身せらるる而今なり。
打眠は、仏眼、法眼、慧眼、祖眼、露柱灯籠眼を仮借して打眠するなり。

先師古仏、ちなみに、台州、瑞巌寺より臨安府、浄慈寺の請に、おもむきて、上堂に、いわく、
半年、喫、飯、坐、鞔峰。
鎖断、煙雲、千万重。
忽地、一声、轟、霹靂、
帝郷、春色、杏華、紅。

仏代、化儀の仏祖、その化、みな、これ、坐、鞔峰、喫、飯なり。
続、仏慧、命の参究、これ、喫、飯の活計、見成なり。
坐、鞔峰の半年、これを喫、飯という。
鎖断する煙雲、いくかさなり、ということをしらず。
一声の霹靂、たとえ忽地なりとも、杏華の春色、くれない、なるのみなり。
帝郷というは、いまの赤赤条条なり。
これらの恁麼は、喫、飯なり。
鞔峰は、瑞巌寺の峰の名なり。

先師古仏、ちなみに、明州、慶元府の瑞巌寺の仏殿にして、示衆するに、いわく、
黄金妙相、著衣、喫飯。
因、我、礼、爾。
早眠、晏起。
咦？
談玄説妙、太無端。
切、忌、拈華、自、熱、瞞。

たちまちに透、担来すべし。
黄金妙相というは、著衣、喫飯なり。
著衣、喫飯は、黄金妙相なり。
さらに、だれ人の著衣、喫飯する？　と摸索せざれ。
だれ人の黄金妙相なる？　ということなかれ。
かくのごとくすれば、この道著なり。
因、我、礼、爾の、しかあるなり。
我、既、喫飯。爾、揖、喫飯。なり。
切、忌、拈華のゆえに、しかあるなり。

福州、長慶院、円智禅師、大安和尚、上堂、示衆、云、
大安、在、潙山、三十年来。
喫、潙山飯。
屙、潙山屎。
不学、潙山禅。
只、看、一頭水牯牛。
若、落、路、入、草、便、牽出。
若、犯、人苗稼、即、鞭撻。
調伏、既、久、可憐生、受、人言語。
如今、変作、箇露地白牛。
常在、面前、終日、露回回地。
趁、亦、不去、也。

あきらかに、この示衆を受持すべし。
仏祖の会下に、功夫なる三十年来は、喫、飯なり。
さらに、雑用心あらず。
喫、飯の活計、見成すれば、おのずから看、一頭水牯牛の標格なり。

趙州真際大師、問、新到僧、曰、
曾、到、此間？　否？

僧、曰、
曾、到。

師、曰、
喫茶、去。

又、問、一僧、
曾、到、此間？　否？

僧、曰、
不、曾、到。

師、曰、
喫茶、去。

院主、問、師、
為、甚、
曾、到、此間、也、喫茶、去？
不、曾、到、此間、也、喫茶、去？

師、召、院主、

主、応諾。

師、曰、
喫茶、去。

いわゆる、此間は、
頂□にあらず。(「□」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
鼻孔にあらず。
趙州にあらず。
此間を跳脱するゆえに、曾、到、此間なり、不、曾、到、此間なり。
這裏、是、甚麼、所在、祗管、道、曾到、不曾到？　なり。
このゆえに、

先師、いわく、
誰、在、画楼、沽酒所、相邀、来、喫、趙州茶？

しかあれば、仏祖の家常は、喫茶、喫飯のみなり。

正法眼蔵　家常
于、時、寛元元年癸卯、十二月十七日、在、越宇、禅師峰下、示、衆。

# 龍吟

舒州、投子山、慈済大師、因、僧、問、
枯木裏、還、有、龍吟、也？　無？

師、曰、
我、道、
髑髏裏、有、獅子吼。

枯木死灰の談は、もとより、外道の所教なり。
しかあれども、外道のいうところの枯木と、仏祖のいうところの枯木と、はるかに、ことなるべし。
外道は、枯木を談ずといえども、枯木をしらず。
いわんや、龍吟をきかんや？
外道は、枯木は朽木ならん、とおもえり、不可、逢、春、と学せり。

仏祖、道の枯木は、海枯の参学なり。
海枯は、木枯なり。
木枯は、逢、春なり。
木の不動著は、枯なり。
いまの山木、海木、空木、等、これ、枯木なり。
萌芽も、枯木、龍吟なり。
百、千、万囲とあるも、枯木の児孫なり。
枯の相、性、体、力は、仏祖、道の枯椿なり、非、枯椿なり。
山谷木あり、田里木あり。
山谷木、よのなかに、松栢と称す。
田里木、よのなかに、人、天と称す。
依、根、葉、分布、これを仏祖と称す。
本、末、須、帰、宗、すなわち、参学なり。
かくのごとくなる、枯木の長、法身なり、枯木の短、法身なり。
もし枯木にあらざれば、いまだ龍吟せず。
枯木にあらざれば、龍吟を打失せず。
幾度、逢、春、不変、心は、渾枯の龍吟なり。
宮商角徴羽に不群なりといえども、宮商角徴羽は、龍吟の前後、二、三子なり。

しかあるに、這僧、道の枯木裏、還、有、龍吟、也？　無？　は、無量劫のなかに、はじめて問頭に現成せり、話頭の現成なり。
投子、道の我、道、髑髏裏、有、獅子吼は、
有、甚麼掩所？　なり。
屈、己、推、人、也、未休なり。
髑髏、遍、野なり。

香厳寺、襲燈大師、因、僧、問、
如何、是、道？

師、云、
枯木裏、龍吟。

僧、曰、
不会。

師、云、
髑髏裏、眼睛。

後、有、僧、問、石霜、
如何、是、枯木裏、龍吟？

霜、云、
猶、帯、喜、在。

僧、曰、
如何、是、髑髏裏、眼睛？

霜、云、
猶、帯、識、在。

又、有、僧、問、曹山、
如何、是、枯木裏、龍吟？

山、云、
血脈、不断。

僧、曰、

如何、是、髑髏裏、眼睛？

山、云、
乾不尽。

僧、曰、
未審。
還、有、得聞者、麼？

山、云、
尽大地、未有、一箇、不聞。

僧、曰、
未審。
龍吟、是、何章句？

山、云、
也、不知、是、何章句。
聞者、皆、喪。

いま、擬道する聞者、吟者は、吟龍、吟、者に不斉なり。
この曲調は、龍吟なり。
枯木裏、髑髏裏、これ、内外にあらず、自他にあらず、而今而古なり。
猶、帯、喜、在は、さらに頭、角、生なり。
猶、帯、識、在は、皮膚、脱落尽なり。
曹山、道の血脈、不断は、道、不諱なり、語脈裏、転身なり。
乾不尽は、海枯、不尽、底なり。
不尽、是、乾なるゆえに、乾上又乾なり。
聞者ありや？　と道著せるは、不得者ありや？　というがごとし。
尽大地、未有、一箇、不聞は、さらに問著すべし。
未有、一箇、不聞は、しばらくおく。
未有尽大地時、龍吟、在、甚麼所？
速、道。
速、道。
なり。

未審。龍吟、是、何章句？　は、為、問すべし。

吟龍は、おのれずから泥裏の作、声、挙拈なり、鼻孔裏の出気なり。
也、不知、是、何章句は、章句裏、有、龍なり。
聞者、皆、喪は、可惜許なり。
いま、香厳、石霜、曹山、等の龍吟来、くもをなし、みずをなす。
不道、道。
不道、眼睛、髑髏。
只、是、龍吟の千曲万曲なり。
猶、帯、喜、在、也、蝦蟆、啼。
猶、帯、識、在、也、蚯蚓、鳴。
これによりて、血脈、不断なり、葫蘆、嗣、葫蘆なり。
乾不尽のゆえに、露柱、懐胎、生なり、灯籠、対、灯籠なり。

正法眼蔵　龍吟
于、時、寛元元年癸卯、十二月二十五日、在、越宇、禅師峰下、示、衆。

# 春秋

洞山、悟本大師、因、僧、問、
寒暑到来、如何、回避？
師、云、
何、不、向、無寒暑所、去？
僧、云、
如何、是、無寒暑所？
師、云、
寒時、寒殺、闍梨。
熱時、熱殺、闍梨。

この因縁、かつて、おおく、商量しきたれり。
而今、おおく、功夫すべし。
仏祖、かならず、参来せり。
参来せるは、仏祖なり。
西天、東地、古今の仏祖、おおく、この因縁を現成の面目とせり。
この因縁の面目、現成は、仏祖、公案なり。
しかあるに、僧、問の寒暑到来、如何、回避？　くわしく、すべし。
いわく、正当寒到来時、正当熱到来時の参詳看なり。
この寒暑、渾寒、渾暑、ともに、寒暑ずからなり。
寒暑ずからなるゆえに、到来時は、
寒暑ずからの頂𩕳より到来するなり。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
寒暑ずからの眼睛より現前するなり。
この頂𩕳上、これ、無寒暑のところなり。
この眼睛裏、これ、無寒暑のところなり。
高祖、道の寒時、寒殺、闍梨。熱時、熱殺、闍梨。は、正当到時の消息なり。
いわゆる、寒時たとえ道、寒殺なりとも、熱時かならずしも熱殺、道なるべからず。
寒、也、徹蔕、寒なり。
熱、也、徹蔕、熱なり。
たとえ万、億の回避を参得すとも、なお、これ、以、頭、換、尾なり。
寒は、これ、祖宗の活眼睛なり。
暑は、これ、先師の暖皮肉なり。

浄因、枯木禅師(、嗣、芙蓉和尚、諱、法成和尚)、云、
衆中、商量、道、
這僧問、既、落、偏。
洞山答、帰、正位。
其僧、言中、知、音、却、入正、来。
洞山、却、従、偏、去。

如斯、商量、不、唯、謗涜、先聖、亦、乃、屈沈、自己。
不見、道？
聞、衆生解、意下、丹青。
目前、雖、美、久、蘊、成、病。
大凡行、脚高、士、欲、窮、此事、先、須、識取、上祖、正法眼蔵。
其余仏祖言教、是、什麼、熱椀、鳴声。
雖然、如是、敢、問、諸人、
畢竟、作麼生、是、無寒暑所？
還、会、麼？
玉楼、巣、翡翠。
金殿、鎖、鴛鴦。

師は、これ、洞山の遠孫なり、祖席の英豪なり。
しかあるに、箇箇、おおく、あやまりて、偏、正の窟宅にして、高祖、洞山大師を礼拝せんとすることを炯誡するなり。
仏法もし偏、正の局量より相伝せば、いかでか今日にいたらん？
あるいは、野猫児、あるいは、田庫奴、いまだ洞山の堂奥を参究せず。
かつて仏法の道閫を行李せざるともがら、あやまりて、洞山に偏、正、等の五位ありて人を接す、という。
これは、胡説乱説なり。見聞すべからず。
ただ、まさに、上祖の正法眼蔵あることを参究すべし。

慶元府、天童山、宏智禅師(、嗣、丹霞和尚、諱、正覚和尚)、云、
若、論、此事、如、両家、著、碁、相似。
爾、不応、我著。
我、即、瞞、汝、去、也。
若、恁麼、体得、始、会、洞山、意。
天童、不免、下、箇注脚。

裏頭、看、勿、暑、寒。
直下、滄溟、瀝、得、乾、
我、道、巨鼇、能、俯、拾、
笑、君、沙際、弄、釣竿。

しばらく、著、碁は、なきにあらず。
作麼生、是、両家？
もし両家、著、碁といわば、八目なるべし。
もし八目ならんは、著、碁にあらず。
いかん？
いうべくば、かくのごとく、いうべし。
著、碁、一家、敵手、相逢なり。
しかありというとも、いま、宏智、道の爾、不応、我著、こころをおきて功夫すべし、身をめぐらして参究すべし。
爾、不応、我著というは、なんじ、われなるべからず、というなり。
我、即、瞞、汝、去、也。すごすことなかれ。
泥裏、有、泥なり。
踏者、あしをあらい、また、纓をあらう。
珠裏、有、珠なり。
光明するに、かれをてらし、自をてらすなり。

夾山、圜悟禅師(、嗣、五祖法演禅師、諱、克勤和尚)、云、
盤、走、珠。
珠、走、盤。
偏中正。
正中偏。
羚羊、掛、角、無、蹤跡。
猟狗、遶、林、空、踧踖。

いま、盤、走、珠の道、これ、光前絶後、古今、罕(まれ)、聞なり。
古来は、ただ、いわく、盤に、はしる珠の住著なきがごとし。
羚羊、いまは、空に掛、角せり。
林、いま、猟狗をめぐる。

慶元府、雪竇山、資聖寺、明覚禅師(、嗣、北塔、祚和尚、諱、重顕和尚)、云、

垂手、還、同、万仞崖、
正、偏、何必、在、安排。
瑠璃、古殿、照、明月。
忍、俊、韓獹、空、上、階。

雪竇は、雲門、三世の法孫なり。
参飽の皮袋といいぬべし。
いま、垂手、還、同、万仞崖といいて、奇絶の標格をあらわすといえども、
かならずしも、しかあるべからず。
いま、僧、問、山、示の因縁、あながちに垂手、不垂手にあらず。
出世、不出世にあらず。
いわんや、偏、正の道をもちいんや？
偏、正の眼をもちいざれば、この因縁に下手のところなきがごとし。
参請の巴鼻なきがごとくなるは、高祖の辺域にいたらず。
仏法の大家を覰見せざるに、よれり。
さらに草鞋を拈来して参請すべし。
みだりに高祖の仏法は、正、偏、等の五位なるべし、ということ、やみね。

東京、天寧、長霊禅師、守卓和尚、云、
偏中、有、正。
正中、偏、
流落、人間、千百年。
幾度、欲、帰、帰、未得。
門前、依旧、草、芊芊。

これも、あながちに偏、正と道取すといえども、しかも拈来せり。
拈来は、なきにあらず。
いかならんか、これ、偏中、有？

潭州、大潙、仏性和尚(、嗣、圜悟、諱、法泰)、云、
無寒暑所、為、君、通。
枯木、生、華、又、一重。
堪、笑、刻、舟、求、剣、者。
至、今、猶、在、冷灰中。

この道取、いささか公案、踏著戴著の力量あり。

泐潭、湛堂文準禅師、曰、
熱時、熱殺。
寒時、寒。
寒、暑、由来、総、不、干。
行尽、天涯、諳、世事。
老君、頭、戴、猪皮冠。

しばらく、とうべし。
作麼生ならんか、これ、不干底、道理？
速、道。
速、道。

湖州、何山、仏燈禅師(、嗣、太平、仏鑑、慧懃禅師、諱、守珣和尚)、云、
無寒暑所、洞山、道。
多少、禅人、迷、所所。
寒時、向、火。
熱、乗、冷、
一生、免、得、避、寒、暑。

この珣、師は、五祖法演禅師の法孫といえども、小児子の言語のごとし。
しかあれども、一生、免、得、避、寒、暑、のちに、老大の成風ありぬべし。
いわく、
一生とは、尽生なり。
避、寒、暑は、脱落、身心なり。

おおよそ、諸方の諸代、かくのごとく鼓、両片皮をこととして頌古を供、達すといえども、いまだ高祖、洞山の辺事を覰見せず。
いかん？　とならば、
仏祖の家常には、寒、暑、いかなるべし、ともしらざるによりて、いたずらに乗、冷。向、火。とらいう。
ことに、あわれむべし。
なんじ、老尊宿のほとりにして、なにを寒、暑というとか聞取せし？
かなしむべし、祖師道、廃せることを。
この寒、暑の形段をしり、寒、暑の時節を経歴し、寒、暑を使得しきたりて、さらに高祖、為、示の道を頌古すべし、拈古すべし。
いまだ、しかあらざらんは、知、非には、しかじ。

俗、なお、日月をしり、万物を保任するに、聖人、賢者のしなじな、あり。
君子と愚夫との、しなじな、あり。
仏道の寒、暑、なお、愚夫の寒、暑と、ひとしかるべし、と錯会することなかれ。
直、須、勤学すべし。

正法眼蔵　春秋
爾時、寛元二年甲辰、在、越宇、山奥、再、示、衆。

逢、仏事、面、転、仏麟経。
祖師、道、
衆角、雖、多、一、麟、足、矣。

# 祖師西来意

香厳寺、襲燈大師(、嗣、大潙、諱、智閑)、示、衆、云、
如、人、千尺懸崖、上、樹。
口、啣(くわえる)、樹枝。
脚、不踏、樹。
手、不攀、枝。
樹下、忽、有、人、問、
如何、是、祖師西来意？
当、恁麼時、
若、開口、答、他、即、喪身失命。
若、不答、他、又、違、他、所問。
当、恁麼時、
且、道、
作麼生、即、得？

時、有、虎頭、照、上座、出、衆、云、
上樹時、即、不問。
未上樹時、請、和尚、道。
如何？

師、乃、呵呵、大笑。

而今の因縁、おおく、商量、拈古あれど、道得箇、まれなり。
おそらくは、すべて、茫然なるがごとし。
しかありといえども、不思量を拈来し、非思量を拈来して思量せんに、おのずから香厳老と一蒲団の功夫あらん。
すでに香厳老と一蒲団上に兀坐せば、さらに香厳、未開口已前に、この因縁を参詳すべし。
香厳老の眼睛をぬすみて覷見するのみにあらず、釈迦牟尼仏の正法眼蔵を拈出して覷破すべし。

如、人、千尺懸崖、上、樹。
この道、しずかに参究すべし。
なにをか人という？

露柱にあらずは木橛、というべからず。
仏面祖面の破顔なりとも、自己、他己の相見、あやまらざるべし。
いま、人、上、樹のところは、尽大地にあらず、百尺竿頭にあらず、これ、千尺懸崖なり。
たとえ脱落、去すとも、千尺懸崖裏なり。
落時あり、上時あり。
如、人、千尺懸崖裏、上、樹という。
しるべし、上時あり、ということ。
しかあれば、
向上、也、千尺なり。
向下、也、千尺なり。
左頭、也、千尺なり。
右頭、也、千尺なり。
這裏、也、千尺なり。
那裏、也、千尺なり。
如、人、也、千尺なり。
上、樹、也、千尺なり。
向来の千尺は、恁麼なるべし。
且、問すらくば、
千尺量、多少？
いわく、
如、古鏡量なり。
如、火炉量なり。
如、無縫塔量なり。

口、銜、樹枝。
いかにあらんか、これ、口？
たとえ口の全闊、全口をしらずといえども、しばらく、樹枝より、尋、枝、摘、葉しもってゆきて、口の所在、しるべし。
しばらく、樹枝を把、拈して口をつくれる、あり。
このゆえに、
全口、是、枝なり。
全枝、是、口なり。
通身、口なり。
通口、是、身なり。

樹、自、踏、樹。
ゆえに、脚、不踏、樹という。
脚、自、踏、脚のごとし。

枝、自、攀、枝。
ゆえに、手、不攀、枝という。
手、自、攀、手のごとし。

しかあれども、
脚跟、なお、進歩、退歩あり。
手頭、なお、作、拳、開、拳あり。
自他の人家、しばらく、おもう、掛、虚空なり、と。
しかあれども、掛、虚空、それ、銜、樹枝に、しかんや？

樹下、忽、有、人、問、
如何、是、祖師西来意？
この樹下、忽、有、人は、樹裏、有、人というがごとし、人、樹ならんがごとし。
人下、忽、有、人、問、すなわち、これなり。
しかあれば、
樹、問、樹なり。
人、問、人なり。
挙樹、挙、問なり。
挙西来意、問、西来意なり。
問著人、また、口、銜、樹枝して問来するなり。
口、銜、枝にあらざれば、問著すること、あたわず。
満口の音声なし。
満言の口あらず。
西来意を問著するときは、銜、西来意にて問著するなり。

若、開口、答、他、即、喪身失命。
いま、若、開口、答、他の道、したしくすべし。
不開口、答、他も、あるべし、と、きこゆ。
もし、しかあらんときは、不喪身失命なるべし。
たとえ開口、不開口ありとも、口、銜、樹枝をさまたぐ、べからず。
開閉、かならずしも全口にあらず。

口に開閉も、あるなり。
しかあれば、銜、枝は、全口の家常なり。
開閉、口をさまたぐ、べからず。
開口、答、他というは、
開樹枝、答、他するをいうか？
開西来意、答、他するをいうか？
もし開西来意、答、他にあらずば、答、西来意にあらず。
すでに答、他にあらず、これ、全身保命なり、喪身失命というべからず。
さきより喪身失命せば、答、他、あるべからず。
しかあれども、香厳のこころ、答、他を辞せず、ただ、おそらくは、喪身失命のみなり。
しるべし。
未答他時、護身保命なり。
忽答他時、翻身、活、命なり。
はかりしりぬ。
人人、満口、是、道なり。
答、他すべし。
答、自すべし。
問、他すべし。
問、自すべし。
これ、口、銜、道なり。
口、銜、道を口、銜、枝というなり。
若、答他時、口上、更、開、一隻口なり。

若、不答他、違、他、所問なりといえども、不違、自、所問なり。
しかあれば、しるべし。
答、西来意する一切の仏祖は、みな、上、樹、口、銜、樹枝の時節に、あいあたりて、答来するなり。
問、西来意する一切の仏祖は、みな、上、樹、口、銜、樹枝の時節に、あいあたりて、問来せるなり。

雪竇、明覚禅師、重顕和尚、云、
樹上、道、即、易。
樹下、道、即、難。
老僧、上、樹、也。
致、将、一問来。

いま、致、将、一問来は、たとえ尽力来すとも、この問きたること、おそくして、うらむらくは、答よりも、のちに、問来せることを。
あまねく古今の老古錐に、とう、
香厳、呵呵、大笑する。
これ、
樹、上、道なりや？
樹、下、道なりや？
答、西来意なりや？
不答、西来意なりや？
試、看、道。

正法眼蔵　祖師西来意
爾時、寛元二年甲辰、二月四日、在、越宇、深山裏、示。

# 優曇華

霊山、百万衆前、世尊、拈、優曇華、瞬目。
于、時、摩訶迦葉、破顔微笑。
世尊、云、
我有、正法眼蔵、涅槃妙心、付属、摩訶迦葉。

七仏、諸仏は、おなじく、拈華来なり。
これを向上の拈華と修、証、現成せるなり。
直下の拈華と裂破開明せり。
しかあれば、すなわち、拈華裏の向上下、向自他、向表裏、等、ともに、渾華、拈なり、華量、仏量、心量、身量なり。
いく拈華も面面の嫡嫡なり。
付属、有在なり。
世尊、拈華来、なお、放下著、いまだし。
拈華、世尊来、ときに、嗣、世尊なり。
拈華時、すなわち、尽時のゆえに、同参、世尊なり、同、拈華なり。
いわゆる、拈華というは、華、拈華なり、梅華、春華、雪華、蓮華、等なり。
いわくの梅華の五葉は、三百六十余会なり、五千四十八巻なり、三乗十二分教なり、三賢十聖なり。
これによりて、三賢十聖、およばざるなり。
大蔵あり、奇特あり、これを華開、世界起という。
一華、開、五葉、結、果、自然、成とは、渾身、是、已、掛、渾身なり。
桃華をみて眼睛を打失し、翠竹をきくに耳処を不現ならしむる、拈華の而今なり。
腰雪断臂、礼拝得髄する、華、自、開なり。
石、碓、米、白、夜半、伝衣する、華、已、拈なり。
これら世尊手裏の命根なり。
おおよそ、拈華は、世尊、成道より已前にあり、世尊、成道と同時なり、世尊、成道よりも、のちにあり。
これによりて、華、成道なり。
拈華、はるかに、これらの時節を超越せり。
諸仏、諸祖の発心、発足、修、証、保任、ともに、拈華の春風を蝶舞するなり。

しかあれば、いま、瞿曇世尊、はなのなかに身をいれ、空のなかに身をかくせるによりて、鼻孔をとるべし。
虚空をとれり、拈華と称す。
拈華は、眼睛にて拈ず、心識にて拈ず、鼻孔にて拈ず、華拈にて拈ずるなり。
おおよそ、この山河大地、日、月、風雨、人畜、草木のいろいろ角角、拈来せる、すなわち、これ、拈、優曇華なり。
生死去来も、華のいろいろなり、華の光明なり。
いま、われら、かくのごとく参学する、拈華来なり。

仏、言、
譬、如、優曇華。
一切、皆、愛、楽。

いわくの一切は、現身、蔵身の仏祖なり、草木、昆虫の自、有、光明、在なり。
皆、愛、楽とは、面面の皮肉骨髄、いまし活鱍鱍なり。
しかあれば、すなわち、一切は、みな、優曇華なり。
かるがゆえに、すなわち、これを、まれなり、という。
瞬目とは、樹下に打坐して明星に眼睛を換却せしときなり。
このとき、摩訶迦葉、破顔微笑するなり。
顔容、はやく破して、拈華顔に換却せり。
如来、瞬目のときに、われらが眼睛、はやく打失しきたれり。
この如来、瞬目、すなわち、拈華なり。
優曇華のこころずから、ひらくるなり。
拈華、正当恁麼時は、一切の瞿曇、一切の迦葉、一切の衆生、一切のわれら、ともに、一隻の手をのべて、おなじく、拈華すること、只今までも、いまだ、やまざるなり。
さらに手裏蔵身三昧あるがゆえに、四大、五陰というなり。
我有は、付属なり。
付属は、我有なり。
付属は、かならず、我有に罣礙せらるるなり。
我有は、頂𩕳なり。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
その参学は、頂𩕳量を巴鼻して参学するなり。
我有を拈じて付属に換却するとき、保任、正法眼蔵なり。
祖師西来、これ、拈華来なり。
拈華を弄、精魂という。

弄、精魂とは、祗管、打坐、脱落、身心なり。
仏となり、祖となるを弄、精魂という。
著衣、喫、飯を弄、精魂というなり。
おおよそ、仏祖、極則事、かならず、弄、精魂なり。
仏殿に相見せられ、僧堂を相見する、華に色々いよいよ備わり、色に光ますます重なるなり。
さらに、僧堂、いま、板をとりて、雲中に拍し、仏殿、いま、笙をふくんで、水底に、ふく。
到恁麼のとき、あやまりて梅華引を吹、起せり。

いわゆる、先師古仏、いわく、
瞿曇、打失、眼睛、時、雪裏、梅華、只一枝。
而今、到所、成、荊棘。
却、笑、春風、繚乱、吹。

いま、如来の眼睛、あやまりて、梅華となれり。
梅華、いま、弥綸せる荊棘をなせり。
如来は、眼睛に蔵、身し、
眼睛は、梅華に蔵、身す。
梅華は、荊棘に蔵、身せり。
いま、かえりて、春風をふく。
しかも、かくのごとくなりといえども、桃華楽を慶快す。

先師、天童古仏、云、
霊雲、見所、桃華、開。
天童、見所、桃華、落。

しるべし。
桃華、開は、霊雲の見所なり、直、至、如今、更、不疑なり。
桃華、落は、天童の見所なり。
桃華のひらくるは、春のかぜに、もよおされ、
桃華のおつるは、春のかぜに、にくまる。
たとえ春風、ふかく桃華をにくむとも、桃華おちて身心、脱落せん。

正法眼蔵　優曇華
爾時、寛元二年甲辰、二月十二日、在、越宇、吉峰精藍、示、衆。

# 発無上心

西国高祖、曰、
雪山、喩、大涅槃。

しるべし。
たとうべきをたとう。
たとうべき、というは、親曾なるなり、端的なるなり。
いわゆる、
雪山を拈来するは、喩、雪山なり。
大涅槃を拈来する、大涅槃にたとうるなり。

震旦初祖、曰、
心心、如、木、石。

いわゆる、心は、心、如なり、尽大地の心なり。
このゆえに、自他の心なり。
尽大地人、および、尽十方界の仏祖、および、天、龍、等の心心は、これ、木、石なり。
このほか、さらに、心、あらざるなり。
この木、石、おのれずから有、無、空、色、等の境界に籠羅せられず。
この木石心をもって発心、修、証するなり。
心木心石なるがゆえなり。
この心木心石のちからをもって、而今の思量、箇不思量底は、現成せり。
心木心石の風声を見聞するより、はじめて外道の流類を超越するなり。
それより、さきは、仏道にあらざるなり。

大証国師、曰、
牆壁、瓦礫、是、古仏心。

いまの牆壁、瓦礫、いずれのところにか、ある？　と参詳看あるべし。
是、什麼物、恁麼現成と問取すべし。
古仏心というは、空王那畔にあらず、粥足飯足なり、草足水足なり。
かくのごとくなるを拈来して坐仏し作仏するを発心と称す。

おおよそ、発菩提心の因縁、ほかより拈来せず、菩提心を拈来して発心するなり。
菩提心を拈来する、というは、一茎草を拈じて造、仏し、無根樹を拈じて造、経するなり。
いさごをもって供、仏し、漿をもって供、仏するなり。
一摶の食を衆生にほどこし、五茎の華を如来にたてまつるなり。
他のすすめによりて片善を修し、魔に嬈せられて礼、仏する、また、発菩提心なり。
しかのみにあらず、
知、家、非、家、捨、家、出家、入山、修道、信行、法行するなり。
造仏、造塔するなり。
読経、念仏するなり。
為、衆、説法するなり。
尋師訪道するなり。
結跏趺坐するなり。
一礼、三宝するなり。
一称、南無、仏するなり。
かくのごとく、八万法蘊の因縁、かならず、発心なり。
あるいは、夢中に発心するもの得道せる、あり。
あるいは、酔中に発心するもの得道せる、あり。
あるいは、飛華落葉のなかより発心、得道する、あり。
あるいは、桃華、翠竹のなかより発心、得道する、あり。
あるいは、天上にして発心、得道する、あり。
あるいは、海中にして発心、得道する、あり。
これ、みな、発菩提心中にして、さらに発菩提心するなり。
身心のなかにして発菩提心するなり。
諸仏の身心中にして発菩提心するなり。
仏祖の皮肉骨髄のなかにして発菩提心するなり。
しかあれば、而今の造塔、造仏、等は、まさしく、これ、発菩提心なり。
直、至、成仏の発心なり。
さらに、中間に、破廃すべからず。
これを無為の功徳とす。
これを無作の功徳とす。
これ、真如観なり。
これ、法性観なり。

これ、諸仏集三昧なり。
これ、得、諸仏陀羅尼なり。
これ、阿耨多羅三藐三菩提心なり。
これ、阿羅漢果なり。
これ、仏、現成なり。
このほか、さらに無為、無作、等の法、なきなり。

しかあるに、小乗、愚人、いわく、
造像、起塔は、有為の功業なり。
さしおきて、いとなむべからず。
息慮凝心、これ、無為なり。
無生、無作、これ、真実なり。
法性、実相の観行、これ、無為なり。

かくのごとく、いうを西天、東地の古今の習俗とせり。
これによりて、
重罪、逆罪をつくるといえども、造像、起塔せず。
塵労稠林に染汚すといえども、念仏、読経せず。
これ、ただ、人、天の種子を損壊するのみにあらず、如来の仏性を撥無するともがらなり。
まことに、かなしむべし。
仏法僧の時節にあいながら、仏法僧の怨敵となりぬ。
三宝の山にのぼりながら、空手にして、かえり、
三宝の海にいりながら、空手にして、かえらんことは、
たとえ千仏万祖の出世にあうとも、得度の期なく、発心の方を失するなり。
これ、経巻にしたがわず、知識にしたがわざるによりて、かくのごとし。
おおく、外道、邪師にしたがうによりて、かくのごとし。
造塔、等は、発菩提心にあらず、という見解、はやく、なげすつべし。
こころをあらい、身をあらい、みみをあらい、めをあらうて、見聞すべからざるなり。
まさに、仏経にしたがい、知識にしたがいて、正法に帰し、仏法を修学すべし。
仏法の大道は、
一塵のなかに大千の経巻あり。
一塵のなかに無量の諸仏まします。
一草、一木、ともに、身心なり。

万法、不生なれば、一心も、不生なり。
諸法、実相なれば、一塵、実相なり。
しかあれば、
一心は、諸法なり。
諸法は、一心なり、全身なり。
造塔、等、もし有為ならんときは、仏果、菩提、真如、仏性も、また、有為なるべし。
真如、仏性、これ、有為にあらざるゆえに、造像、起塔、すなわち、有為にあらず、無為の発菩提心なり、無為、無漏の功徳なり。
ただ、まさに、造像、起塔、等は、発菩提心なり、と決定、信解すべきなり。
億劫の行願、これより生長すべし。
億、億万劫、くつ、べからざる、発心なり。
これを見仏聞性というなり。
しるべし。
木、石をあつめ、泥、土をかさね、金、銀、七宝をあつめて造仏、起塔する、すなわち、一心をあつめて造塔、造像するなり。
空、空をあつめて作仏するなり。
心、心を拈じて造仏するなり。
塔、塔をかさねて造塔するなり。
仏、仏を現成せしめて造仏するなり。

かるがゆえに、経に、いわく、
作是思惟時、十方仏、皆、現。

しるべし。
一思惟の、作仏なるときは、十方思惟仏、皆、現なり。
一法の、作仏なるときは、諸法、作仏なり。

釈迦牟尼仏、言、
明星出現時、我、与、大地、有情、同時、成道。

しかあれば、発心、修行、菩提、涅槃は、同時の発心、修行、菩提、涅槃なるべし。
仏道の身心は、草木、瓦礫なり、風雨、水、火なり。
これをめぐらして仏道ならしむる、すなわち、発心なり。
虚空を撮得して造塔、造仏すべし。

谿水を掬啗して造仏、造塔すべし。
これ、発、阿耨多羅三藐三菩提なり。
一発菩提心を百、千、万発するなり。
修、証も、また、かくのごとし。

しかあるに、
発心は、一発にして、さらに発心せず。
修行は、無量なり、証果は、一証なり。
と、のみ、きくは、仏法をきくにあらず、仏法をしれるにあらず、仏法にあうにあらず。

千億発の発心は、さだめて、一発心の発なり。
千億人の発心は、一発心の発なり。
一発心は、千億の発心なり。
修、証、転法も、また、かくのごとし。
草木、等にあらずば、いかでか身心ならん？
身心にあらずば、いかでか草木あらん？
草木にあらずば、草木あらざるがゆえに、かくのごとし。
坐禅、弁道、これ、発菩提心なり。
発心は、一異にあらず。
坐禅は、一異にあらず、再三にあらず、処分にあらず。
頭頭、みな、かくのごとく参究すべし。

草木、七宝をあつめて造塔、造仏する始終、それ、有為にして成道すべからずば、
三十七品菩提分法も、有為なるべし。
三界、人、天の身心を拈じて修行せん、ともに、有為なるべし。
究竟地あるべからず。

草木、瓦礫と、四大、五蘊と、おなじく、これ、唯心なり、おなじく、これ、実相なり。
尽十方界、真如、仏性、おなじく、法住法位なり。
真如、仏性のなかに、いかでか草木、等あらん？
草木、等、いかでか真如、仏性ならざらん？
諸法は、有為にあらず、無為にあらず、実相なり。
実相は、如是実相なり。

如是は、而今の身心なり。
この身心をもって発心すべし。
水をふみ、石をふむをきらうことなかれ。
ただ一茎草を拈じて丈六金身を造作し、一微塵を拈じて古仏、塔廟を建立する、これ、発菩提心なるべし。
見仏なり。
聞仏なり。
見法なり。
聞法なり。
作仏なり。
行仏なり。

釈迦牟尼仏、言、
優婆塞、優婆夷、善男子、善女人、
以、妻子肉、供養、三宝。
以、自身肉、供養、三宝。
諸比丘、既、受、信施。
云何、不修？

しかあれば、しりぬ。
飲食、衣服、臥具、医薬、僧房、田林、等を三宝に供養するは、自身、および、妻子、等の身肉、皮骨髄を供養したてまつるなり。
すでに三宝の功徳海にいりぬ。
すなわち、一味なり。
すでに一味なるがゆえに、三宝なり。
三宝の功徳、すでに自身、および、妻子の皮肉骨髄に現成する、精勤の弁道、功夫なり。
いま、世尊の性、相を挙して仏道の皮肉骨髄を参取すべきなり。
いま、この信施は、発心なり。
受者、比丘、いかでか不修ならん？
頭正尾正なるべきなり。
これによりて、
一塵、たちまちに発すれば、一心、したがいて発するなり。
一心、はじめて発すれば、一空、わずかに発するなり。
おおよそ、有学、無学の発心するとき、はじめて一仏性を種得するなり。
四大、五蘊をめぐらして誠心に修行すれば、得道す。

草木、牆壁をめぐらして誠心に修行せん、得道すべし。
四大、五蘊と、草木、牆壁と、
同参なるがゆえなり。
同性なるがゆえなり。
同心、同命なるがゆえなり。
同身、同機なるがゆえなり。
これによりて、仏祖の会下、おおく、拈、草木心の弁道あり。
これ、発菩提心の様子なり。
五祖は、一時の栽松道者なり。
臨済は、黄檗山の栽、杉、松の功夫あり。
洞山には、劉氏翁あり、栽、松す。
かれこれ松栢の操節を拈じて仏祖の眼睛を抉出するなり。
これ、弄、活眼睛のちから、開明、眼睛なることを見成するなり。
造塔、造仏、等は、弄、眼睛なり、喫、発心なり、使、発心なり。
造塔、等の眼睛をえざるがごときは、仏祖の成道、あらざるなり。
造仏の眼睛をえてのちに、作仏作祖するなり。

造塔、等は、ついに、塵、土に化す。
真実の功徳にあらず。
無生の修練は、堅牢なり、塵、埃に染汚せられず。
というは、仏語にあらず。

塔婆もし塵、土に化すといわば、無生も、また、塵、土に化するなり。
無生もし塵、土に化せずば、塔婆、また、塵、土に化すべからず。
這裏、是、甚麼所在、説、有為、説、無為？　なり。

経、曰、
菩薩、於、生死、最初発心時、一向、求、菩提、堅固、不可動。
彼一念功徳、深、広、無涯際。
如来、分別、説、窮、劫、不能、尽。

あきらかに、しるべし。
生死を拈来して発心する、これ、一向、求、菩提なり。
彼一念は、一草、一木と、おなじかるべし。
一生、一死なるがゆえに。
しかあれども、その功徳の深も、無涯際なり、広も、無涯際なり。

窮、劫を言語として如来、これを分別すとも、尽、期あるべからず。
海、かれて、なお、底、のこり、人は、死すとも、心、のこるべきがゆえに、不能、尽なり。
彼一念の深、広、無涯際なるがごとく、一草、一木、一石、一瓦の深、広も無涯際なり。
一草、一石もし七尺、八尺なれば、彼一念も、七尺、八尺なり、発心も、また、七尺、八尺なり。
しかあれば、すなわち、
入、於、深山、思惟、仏道は、容易なるべし。
造塔、造仏は、甚難なり。
ともに、精進、無怠より成就すといえども、心を拈来すると、心に拈来せらるると、はるかに、ことなるべし。
かくのごとくの発菩提心、つもりて、仏祖、現成するなり。

正法眼蔵　発無上心
爾時、寛元二年甲辰、二月十四日、在、越州、吉田県、吉峰精舎、示、衆。

# 如来全身

爾時、釈迦牟尼仏、住、王舎城、耆闍崛山、告、薬王菩薩摩訶薩、言、
薬王、
在在所所、
若、説、
若、読、
若、誦、
若、書、
若、経巻、所住之所、
皆、応、起、七宝塔、極、令、高、広、厳飾。
不、須、復、安、舎利。
所以、者、何？
此中、已有、如来全身。
此塔、応、以、一切、華、香、瓔珞、繒蓋、幢幡、妓楽、歌頌、供養、恭敬、尊重、讃歎。
若、有、人、得見、此塔、礼拝、供養、当、知、是等、皆、近、阿耨多羅三藐三菩提。

いわゆる、経巻は、
若、説、これなり。
若、読、これなり。
若、誦、これなり。
若、書、これなり。
経巻は、実相、これなり。
応、起、七宝塔は、実相を塔という。
極、令、高、広、その量、かならず、実相量なり。
此中、已有、如来全身は、経巻、これ、全身なり。
しかあれば、若、説、若、読、若、誦、若、書、等、これ、如来全身なり。
一切の華、香、瓔珞、繒蓋、幢幡、妓楽、歌頌をもって供養、恭敬、尊重、讃歎すべし。
あるいは、天華、天香、天繒蓋、等なり。
みな、これ、実相なり。
あるいは、人中、上華、上香、名衣、名服なり。
これら、みな、実相なり。

供養、恭敬、これ、実相なり。
起、塔すべし。
不、須、復、安、舎利という。
しりぬ、経巻は、これ、如来舎利なり、如来全身なり、ということを。
まさしく、仏口の金言、これを見聞するよりも、すぎたる大功徳、あるべからず。
いそぎて、功をつみ、徳をかさぬべし。
もし人ありて、この塔を礼拝、供養するは、まさに、しるべし、皆、近、阿耨多羅三藐三菩提なり。
この塔をみんとき、この塔を誠心に礼拝、供養すべし。
すなわち、阿耨多羅三藐三菩提に皆、近ならん。
近は、さりて近なるにあらず、きたりて近なるにあらず。
阿耨多羅三藐三菩提を皆、近というなり。
而今、われら、受持、読誦、解説、書写をみる、得見、此塔なり。
よろこぶべし。
皆、近、阿耨多羅三藐三菩提なり。
しかあれば、
経巻は、如来全身なり。
経巻を礼拝するは、如来を礼拝したてまつるなり。
経巻にあいたてまつれるは、如来にまみえたてまつるなり。
経巻は、如来舎利なり。
かくのごとくなるゆえに、
舎利は、此経なるべし。
たとえ、経巻は、これ、舎利なり、としるというとも、舎利は、これ、経巻なり、としらずば、いまだ仏道にあらず。
而今の諸法実相は、経巻なり。
人間、天上、海中、虚空、此土、他界、みな、これ、実相なり、経巻なり、舎利なり。
舎利を受持、読誦、解説、書写して開悟すべし。
これ、或、従、経巻なり。
古仏舎利あり。
今仏舎利あり。
辟支仏舎利あり。
転輪王舎利あり。
獅子舎利あり。

あるいは、木仏舎利あり。絵仏舎利あり。
あるいは、人舎利あり。
現在、大宋国、諸代の仏祖いきたるとき、舎利を現出せしむるなり。
闍維ののち、舎利を生ぜる、おおく、あり。
これ、みな、経巻なり。

釈迦牟尼仏、告、大衆、言、
我、本、行、菩薩道、所成、寿命、今猶、未尽、復、倍、上数。

いま、八斛四斗の舎利は、なお、これ、仏寿なり。
本、行、菩薩道の寿命は、三千大千世界のみにあらず、そこばくなるべし。
これ、如来全身なり。
これ、経巻なり。

智積菩薩、言、
我、見、釈迦如来、於、無量劫、難行、苦行、積功累徳、求、菩薩道、未曾、止息。
観、三千大千世界、乃至、無有、如、芥子許、非、是、菩薩、捨、身命、所。
為、衆生、故。
然後、乃、得、成、菩提道。

はかりしりぬ。
この三千大千世界は、赤心、一片なり、虚空、一隻なり、如来全身なり。
捨、未捨にかかわるべからず。
舎利は、仏前、仏後にあらず、仏とならべるにあらず。
無量劫の難行、苦行は、仏胎仏腹の活計、消息なり、仏、皮肉骨髄なり。
すでに未曾、止息という。
仏にいたりても、いよいよ精進なり。
大千界に化しても、なお、すすむなり。
全身の活計、かくのごとし。

正法眼蔵　如来全身
爾時、寛元二年甲辰、二月十五日、在、越州、吉田県、吉峰精舎、示、衆。

# 三昧王三昧

驀然として尽界を超越して、仏祖の屋裏に大尊貴生なるは、結跏趺坐なり。
外道、魔党の頂𩕳を踏翻して、仏祖の堂奥に箇中人なることは、結跏趺坐なり。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
仏祖の極之極を超越するは、ただ、この一法なり。
このゆえに、仏祖、これをいとなみて、さらに余務あらず。
まさに、しるべし。
坐の尽界と、余の尽界と、はるかに、ことなり。
この道理をあきらめて、仏祖の発心、修行、菩提、涅槃を弁肯するなり。
正当坐時は、尽界、それ、竪なるか？　横なるか？　と参究すべし。
正当坐時、その坐、それ、いかん？
翻巾斗なるか？
活鱍鱍地なるか？
思量か？　不思量か？
作か？　無作か？
坐裏に坐すや？　身心裏に坐すや？
坐裏、身心裏、等を脱落して坐すや？
恁麼の千端万端の参究、あるべきなり。
身の結跏趺坐すべし。
心の結跏趺坐すべし。
身心、脱落の結跏趺坐すべし。

先師古仏、云、
参禅、者、身心、脱落、也。
祇管、打坐、始、得。
不要、焼香、礼拝、念仏、修懺、看経。

あきらかに仏祖の眼睛を抉出しきたり、仏祖の眼睛裏に打坐すること、四、五百年より、このかたは、ただ先師ひとりなり。震旦国に斉肩、すくなし。
打坐の仏法なること、仏法は、打坐なることをあきらめたる、まれなり。
たとえ打坐を仏法と体解すというとも、打坐を打坐としれる、いまだあらず。
いわんや、仏法を仏法と保任する、あらんや？
しかあれば、すなわち、
心の打坐あり、身の打坐と、おなじからず。

身の打坐あり、心の打坐と、おなじからず。
身心、脱落の打坐あり、身心、脱落の打坐と、おなじからず。
既得恁麼ならん、仏祖の行、解、相応なり。
この念、想、観を保任すべし。
この心、意、識を参究すべし。

釈迦牟尼仏、告、大衆、言、
若、結跏趺坐、
身心、証、三昧。
威徳、衆、恭敬。
如、日、照、世界。
除、睡、懶、覆、心。
身、軽、不疲懈。
覚悟、亦、軽便。
安坐、如、龍、蟠。
見、画、跏趺坐、魔王、亦、驚、怖。
何、況、証道人、安坐、不傾動？

しかあれば、跏趺坐を画図せるを見聞するを魔王、なお、おどろき、うれえ、おそるるなり。
いわんや、真箇に跏趺坐せん、その功徳、はかりつくすべからず。
しかあれば、すなわち、よのつねに打坐する、福徳、無量なり。

釈迦牟尼仏、告、大衆、言、
以、是故、結跏趺坐。

復、次、
如来、世尊、教、諸弟子、
応、如是、坐。
或、外道輩、
或、常、翹足、求道、
或、常、立、求道、
或、荷、足、求道。
如是、狂狷心、
没、邪海。
形、不、安穏。

以、是故、
仏、教、弟子、結跏趺坐、直、身、坐。
何、以、故？
直、身心、易、正、故。
其身、直、坐、
則、心、不懶。
端心正意、繫念、在前。
若、心、馳散、若、身、傾動、摂、之、令、還。
欲、証、三昧、
欲、入、三昧、
種種、馳念、種種、散乱、皆悉、摂、之。
如此、修習、
証、入、三昧王三昧。

あきらかに、しりぬ。
結跏趺坐、これ、三昧王三昧なり、これ、証、入なり。
一切の三昧は、この王三昧の眷属なり。
結跏趺坐は、
直、身なり。
直、心なり。
直、身心なり。
直、仏祖なり。
直、修、証なり。
直、頂□なり。(「□」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
直、命脈なり。
いま、人間の皮肉骨髄を結跏して、三昧中、王三昧を結跏するなり。
世尊、
つねに、結跏趺坐を保任しまします。
諸弟子にも、結跏趺坐を正伝しまします。
人、天にも、結跏趺坐をおしえましますなり。
七仏、正伝の心印、すなわち、これなり。
釈迦牟尼仏、菩提樹下に跏趺坐しましまして、五十小劫を経歴し、六十劫を経歴し、無量劫を経歴しまします。
あるいは、三七日、結跏趺坐。
あるいは、時間の跏坐。
これ、転、妙法輪なり。

これ、一代の仏化なり。
さらに虧缺せず。
これ、すなわち、黄巻朱軸なり。
ほとけの、ほとけをみる、この時節なり。
これ、衆生、成仏の正当恁麼時なり。
初祖、菩提達磨、尊者、西来の、はじめより、嵩嶽、少室峰、少林寺にして、面壁、跏趺、坐禅のあいだ、九白を経歴せり。
それより、頂𩕳、眼睛、いまに、震旦国に、遍、界せり。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
初祖の命脈、ただ結跏趺坐のみなり。
初祖、西来より、さきは、東土の衆生、いまだかつて、結跏趺坐をしらざりき。
祖師西来より、のち、これをしれり。
しかあれば、すなわち、一生、万生、把尾収頭、不離、叢林、昼夜、祇管、跏趺坐して、余務あらざる、三昧王三昧なり。

正法眼蔵　三昧王三昧
爾時、寛元二年甲辰、二月十五日、在、越宇、吉峰精舎、示、衆。

# 三十七品菩提分法

古仏の公案あり。
いわゆる、三十七品菩提分法の教行証なり。
昇降、階級の葛藤する、さらに葛藤、公案なり、喚、作、諸仏なり、喚、作、諸祖なり。

四念住。(四念処とも称す。)

一、者、観、身、不浄。
二、者、観、受、是、苦。
三、者、観、心、無常。
四、者、観、法、無我。

観、身、不浄というは、いまの観、身の一袋皮は、尽十方界なり。
これ、真実体なるがゆえに、活路に跳跳する観、身、不浄なり。
不跳ならんは、観、不得ならん。
若、無身ならん、行取、不得ならん、説取、不得ならん、観取、不得ならん。
すでに観得の現成あり。
しるべし。
跳跳得なり。
いわゆる、観得は、毎日の行履、掃、地、掃、牀なり。
第幾月を挙して掃、地し、正、是、第二月を挙して掃、地、掃、牀するゆえに、尽大地の恁麼なり。
観、身は、身、観なり。
身、観にて、余物、観にあらず。
正当観は、卓卓来なり。
身、観の現成するとき、心、観、すべて、摸、未著なり、不現成なり。
しかあるゆえに、金剛定なり、首楞厳定なり。
ともに、観、身、不浄なり。
おおよそ、夜半、見、明星の道理を観、身、不浄というなり。
浄、穢の比論にあらず。
有身、是、不浄なり。
現、身、便、不浄なり。
かくのごとくの参学は、

魔、作仏のときは、魔を拈じて降魔し作仏す。
仏、作仏のときは、仏を拈じて図、仏し作仏す。
人、作仏のときは、人を拈じて調、人し作仏するなり。
まさに拈所に通路ある道理を参究すべし。
たとえば、浣、衣の法のごとし。
水は、衣に染汚せられ、衣は、水に浸却せらる。
この水を用著して浣洗し、この水を換却して浣洗すといえども、なお、これ、水をもちいる、なお、これ、衣をあらうなり。
一番、洗、両番、洗に、見、浄ならざれば、休歇に滞累することなかれ。
水、尽、更、用、水なり。
衣、浄、更、浣、衣なり。
水は、諸類の水、ともに、もちいる、洗、衣に、よろし。
水、濁、知、有、魚の道理を参究するなり。
衣は、諸類の衣、ともに、浣洗あり。
恁麼功夫して、浣、衣、公案、現成なり。
しかあれども、浄潔を見取するなり。
この宗旨、かならずしも衣を水に浸却するを本期とせず、水の、衣に染却するを本期とせず。
染汚水をもちいて衣を浣洗するに浣、衣の本期あり。
さらに火、風、土、水、空を用著して衣をあらい物をあらう法あり。
地水火風空をもちいて地水火風空をあらいきよむる法あり。
いまの観、身、不浄の宗旨、また、かくのごとし。
これによりて蓋身、蓋観、蓋不浄、すなわち、嬢、生、袈裟なり。
袈裟もし嬢、生、袈裟にあらざれば、仏祖、いまだ、もちいざるなり。
ひとり商那和修のみならんや？
この道理、よくよく、こころをとめて参学、究尽すべし。

観、受、是、苦というは、苦、これ、受なり。
自受にあらず、他受にあらず、有受にあらず、無受にあらず。
生身、受なり。
生身、苦なり。
甜熟瓜を苦葫蘆に換却するをいう。
これ、皮肉骨髄に、にがきなり。
有心、無心、等に、にがきなり。
これ、一上の神通、修、証なり。
徹蔕より跳出し、連根より跳出する、神通なり。

このゆえに、将、謂、衆生、苦。更、有、苦、衆生。なり。
衆生は、自にあらず。
衆生は、他にあらず。
更、有、苦、衆生、ついに瞞、他、不得なり。
甜瓜、徹蔕、甜。苦匏、連根、苦。なりといえども、苦、これ、たやすく摸索著すべきにあらず。
自己に問著すべし。
作麼生、是、苦？

観、心、無常は、
曹谿古仏、いわく、
無常、者、即、仏性、也。

しかあれば、諸類の所解する無常、ともに、仏性なり。

永嘉、真覚大師、云、
諸行無常。
一切、空。
即、是、如来、大円覚。

いまの観、心、無常、すなわち、如来、大円覚なり、大円覚、如来なり。
心もし不観ならんとするにも、随、他、去するがゆえに、心、もし、あれば、観も、あるなり。
おおよそ、無上菩提にいたり、無上正等覚の現成、すなわち、無常なり、観、心なり。
心、かならずしも常にあらず、離四句、絶百非なるがゆえに、牆壁、瓦礫、石頭大小、これ、心なり、これ、無常なり、すなわち、観なり。

観、法、無我は、長、者、長法身。短、者、短法身。なり。
現成、活計なるがゆえに、無我なり。
狗子、仏性、無なり。
狗子、仏性、有なり。
一切衆生、無仏性なり。
一切仏性、無衆生なり。
一切諸仏、無衆生なり。
一切諸仏、無諸仏なり。

一切仏性、無仏性なり。
一切衆生、無衆生なり。
かくのごとくなるがゆえに、一切法、無一切法。を観、法、無我と参学するなり。
しるべし。
跳出、渾身、自、葛藤なり。

釈迦牟尼仏、言、
一切諸仏、菩薩、長、安、此法、為、聖胎、也。

しかあれば、諸仏、菩薩、ともに、この四念住を聖胎とせり。
しるべし。
等覚の聖胎なり。
妙覚の聖胎なり。
すでに一切諸仏、菩薩とあり、妙覚にあらざらん諸仏も、これを聖胎とせり。
等覚よりさき、妙覚よりほかに超出せる菩薩、また、この四念住を聖胎とするなり。
まことに、諸仏、諸祖の皮肉骨髄、ただ四念住のみなり。

四正断。(あるいは、四正勤と称す。)

一、者、未生悪、令、不生。
二、者、已生悪、令、滅。
三、者、未生善、令、生。
四、者、已生善、令、増長。

未生悪、令、不生というは、
悪の称、かならずしも、さだまれる形段なし。
ただ地にしたがい、界によりて、立称しきたれり。
しかあれども、未生をして不生ならしむるを仏法と称し正伝しきたれり。

外道の解には、これ、未萌我を根本とせり、という。
仏法には、かくのごとくなるべからず。

しばらく、問取すべし。
悪、未生のとき、いずれのところにか、ある？

もし未来にあり、と、いわば、ながく、これ、断滅見の外道なり。
もし未来きたりて現在となる、と、いわば、仏法の談にあらず、三世、混乱しぬべし。
三世混乱せば、諸法、混乱すべし。
諸法、混乱せば、実相、混乱すべし。
実相、混乱せば、唯仏与仏、混乱すべし。
かるがゆえに、未来は、のちに現在となる、と、いわざるなり。

さらに、問取すべし。
未生悪とは、なにを称すべきぞ？
だれが、これを知取見取せる？
もし知取見取することあらば、未生時あり、非未生時あらん。
もし、しかあらば、未生法と称すべからず、已滅の法と称しつべし。
外道、および、小乗、声聞、等に学せずして、未生悪、令、不生の参学すべきなり。
弥天の積悪、これを未生悪と称す。
不生悪なり。
不生というは、昨日、説、定法、今日、説、不定法なり。

已生悪、令、滅というは、
已生は、尽生なり。
尽生なりとは、半生なり。
半生なりとは、此生なり。
此生は、被、生、礙なり、跳出、生之頂𩕳なり。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
これをして滅ならしむ、というは、
調達、生身、入、地獄なり。
調達、生身、得、授記なり。
生身、入、驢胎なり。
生身、作仏なり。
かくのごとく道理を拈来して、令、滅の宗旨を参学すべきなり。
滅は、滅を跳出、透脱するを滅とす。

未生善、令、生というは、
父母未生前の面目、参飽なり。
朕兆已前の明挙なり。

威音(王)以前の会取なり。

已生善、令、増長は、
しるべし。
已生善、令、生といわず、令、増長するなり。
自、見、明星、訖、更、教、他、見、明星なり。
眼睛、作、明星なり。
胡乱、後、三十年、不曾闕、塩、酢なり。
たとえば、増長するゆえに、已生するなり。
このゆえに、
谿、深、杓、柄、長なり。
只、為、有、所以、来なり。

四神足。

一、者、欲神足。
二、者、心神足。
三、者、進神足。
四、者、思惟神足。

欲神足は、
図、作仏の身心なり。
図、睡快なり。
因、我、礼、爾なり。
おおよそ、欲神足、さらに身心の因縁にあらざるなり。
莫涯空の鳥、飛なり。
徹底水の魚、行なり。

心神足は、
牆壁、瓦礫なり。
山河大地なり。
条条の三界なり。
赤赤の椅子、竹、木なり。
尽使得なるがゆえに、
仏祖心あり。
凡聖心あり。

草木心あり。
変化心あり。
尽心は、心神足なり。

進神足は、
百尺竿頭、驀直、歩なり。
いずれのところか、これ、百尺竿頭？
いわゆる、不驀直、不得なり。
驀直、一歩は、なきにあらず。
這裏、是、甚麼所在、説、進、説、退？
正当進神足時、尽十方界、随、神足、到、也、随、神足、至、也。

思惟神足は、
一切仏祖、業識、茫茫、無、本、可、拠なり。
身、思惟あり。
心、思惟あり。
識、思惟あり。
草鞋、思惟あり。
空劫已前、自己、思惟あり。

これをまた、四如意足という。
無躊躇なり。

釈迦牟尼仏、言、
未運、而、到、名、如意足。

しかあれば、すなわち、
鋭(と)きこと、錐(きり)の口のごとし。
方なること、鑿(のみ)の刃のごとし。

五根。

一、者、信根。
二、者、精進根。
三、者、念根。
四、者、定根。
五、者、慧根。

信根は、
しるべし。
自己にあらず、
他己にあらず、
自己の強為にあらず、
自己の結構にあらず、
他の牽挽にあらず、
自立の規矩にあらざるゆえに、
東西、密、相付なり。
渾身、似、信を信と称するなり。
かならず、仏果位と随、他、去し、随、自、去す。
仏果位にあらざれば、信、現成あらず。
このゆえに、いわく、
仏法大海、信、為、能入なり。
おおよそ、信、現成のところは、仏祖、現成のところなり。

精進根は、
省、来、祗管、打坐なり。
休、也、休、不得なり。
休得、更、休得なり。
大区区生なり。
不区区者なり。
大区、不区、一月、二月なり。

釈迦牟尼仏、言、
我、常、勤、精進。
是故、我、已得、成、阿耨多羅三藐三菩提。

いわゆる、常、勤は、尽、過、現、当来、頭正尾正なり。
我、常、勤、精進を我、已得、成、菩提とせり。
我、已得、成、阿耨菩提のゆえに、我、常、勤、精進なり。
しかあらずば、いかでか常、勤ならん？
しかあらずば、いかでか我、已得ならん？
論師、経師、この宗旨を見聞すべからず。
いわんや、参学せる、あらんや？

念根は、
枯木の赤肉団なり。
赤肉団を枯木という。
枯木は、念根なり。
摸索、当の自己、これ、念なり。
有身のときの念あり。
無心のときも、念あり。
有心の念あり。
無身の念あり。
尽大地人の命根、これを念根とせり。
尽十方仏の命根、これは、念根なり。
一念に多人あり。
一人に多念あり。
しかあれども、有念人あり、無念人あり。
人に、かならずしも、念、あるに、あらず。
念、かならずしも、人に、かかれるにあらず。
しかありといえども、この念根、よく、持して究尽の功徳あり。

定根は、
惜取、眉毛なり。
策起、眉毛なり。
このゆえに、不昧因果なり、不落因果なり。
ここをもって、入、驢胎、入、馬胎なり。
石の、玉をつつめるがごとし。
全石、全、玉なり、というべからず。
地の、山をいただけるがごとし。
尽地、尽、山、というべからず。
しかあれども、頂𩕳より跳出し跳入す。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)

慧根は、
三世諸仏、不知、有なり。
狸奴、白牯、却、知、有なり。
為、甚、如此？　というべからず、いわれざるなり。
鼻孔、有、消息なり。

拳頭、有、指尖なり。
驢は、驢を保任す。井は、井に相見す。

おおよそ、根、嗣、根なり。

五力。

一、者、信力。
二、者、精進力。
三、者、念力。
四、者、定力。
五、者、慧力。

信力は、
被、自、瞞、無回避所なり。
被、他、喚、必、回頭なり。
従、生、至、老、只、是、這箇なり。
七顛、也、放行なり、八倒、也、拈来なり。
このゆえに、信、如、水清珠なり。
伝法、伝衣を信とす。
伝仏伝祖なり。

精進力は、
説取、行、不得底なり。
行取、説、不得底なり。
しかあれば、すなわち、
説得、一寸、不如、説得、一寸なり。
行得、一句、不如、行得、一句なり。
力裏、得、力、これ、精進力なり。

念力は、
拽、人鼻孔、太殺人なり。
このゆえに、
鼻孔、拽、人なり。
抛、玉、引、玉なり。
抛、瓦、引、瓦なり。
さらに、未抛、也、三十棒なり。

天下人、用著、未磷なり。

定力は、
あるいは、如、子、得、其母なり。
あるいは、如、母、得、其子なり。
あるいは、如、子、得、其子なり。
あるいは、如、母、得、其母なり。
しかあれども、
以、頭、換、面にあらず。
以、金、買、金にあらず。
唱、而、弥、高なるのみなり。

慧力は、
年代、深遠なり。
如、船、遇、渡なり。

かるがゆえに、ふるく、いわく、
如、渡、得、船。

いう、こころは、渡、必、是、船なり。
渡の、渡を罣礙せざるを船という。
春、氷、自、消、氷なり。

七等覚支。

一、者、択法覚支。
二、者、精進覚支。
三、者、喜覚支。
四、者、除覚支。
五、者、捨覚支。
六、者、定覚支。
七、者、念覚支。

択法覚支は、
毫釐、有、差、天地懸隔なり。
このゆえに、至道、不、難易。唯、要、自揀択のみなり。

精進覚支は、
不曾、攙奪、行市なり。
自買、自売、ともに、定価あり、知、貴あり。
屈、己、推、人に相似なりといえども、通身、撲、不砕なり。
一転語を自売すること、いまだ、やまざるに、一転心を自買する商客に相逢す。
驢事、未了、馬事、到来なり。

喜覚支は、
老婆心、切、血、滴滴なり。
大悲千手眼、遮莫、太多端。
臘雪、梅華、先、漏泄。来春、消息、大家、寒。なり。
しかも、かくのごとくなりといえども、活鱍鱍、笑、呵呵なり。

除覚支は、
もし、みずからがなかにありては、みずからと群せず、他のなかにありては、他と群せず。
我、得、爾、不得なり。
灼然、道著、異類中行なり。

捨覚支は、
設使、将来、他、亦、不受なり。
唐人、赤脚、学、唐歩。南海、波斯、求、象牙。なり。

定覚支は、
機先、保護、機先眼なり。
自家、鼻孔、自家、穿なり。
自家、把、索、自家、牽なり。
しかも、かくのごとくなりといえども、さらに牧、得、一頭、水牯牛なり。

念覚支は、
露柱、歩、空、行なり。
このゆえに、口、似、椎。眼、如、眉。なりというとも、なお、これ、梅檀林裏、薫、梅檀。獅子窟中、獅子吼。なり。

八正道支。(また、八聖道とも称す。)

一、者、正見道支。
二、者、正思惟道支。
三、者、正語道支。
四、者、正業道支。
五、者、正命道支。
六、者、正精進道支。
七、者、正念道支。
八、者、正定道支。

正見道支は、
眼睛裏、蔵、身なり。
しかあれども、身先、須、具、身先眼なり。
向前の堂堂、成見なりといえども、公案、見成なり、親曾見なり。
おおよそ、眼裏、蔵、身せざれば、仏祖にあらざるなり。

正思惟道支は、
作是思惟時、十方仏、皆、現なり。
しかあれば、十方、現。諸仏、現。これ、作是思惟時なり。
作是思惟時は、自己にあらず、他己をこえたりといえども、而今も、思惟、
是事、已、即、趣、波羅奈なり。
思惟の所在は、波羅奈なり。

古仏、いわく、
思量、箇不思量底。

不思量底、如何、思量？

非思量。

これ、正思量、正思惟なり。
破、蒲団、これ、正思惟なり。

正語道支は、
唖子、自己、不、唖子なり。
諸人中の唖子は、未道得なり。
唖子界の諸人は、唖子にあらず。
不慕、諸聖なり。

不重、己霊なり。
口、是、掛、壁の参究なり。
一切口、掛、一切壁なり。

正業道支は、
出家、修道なり。
入山、取、証なり。

釈迦牟尼仏、言、
三十七品、是、僧業。

僧業は、大乗にあらず、小乗にあらず。
僧は、仏僧、菩薩僧、声聞僧、等、あり。
いまだ出家せざるものの、仏法の正業を嗣続せること、あらず、仏法の大道を正伝せること、あらず。
在家、わずかに、近事男女の学道といえども、達道の先蹤なし。
達道のとき、かならず、出家するなり。
出家に不堪ならんともがら、いかでか仏位を嗣続せん？
しかあるに、二、三百年来のあいだ、大宋国に、禅宗僧と称するともがら、おおく、いわく、在家の学道と、出家の学道と、これ、一等なり、という。
これ、ただ在家人の屎、尿を飲食とせんがために、狗子となれる類族なり。
あるいは、国王、大臣にむかいて、いわく、万機の心は、すなわち、祖仏の心なり。さらに、別心あらず。という。
王、臣、いまだ正説正法をわきまえず、大悦して、師号、等をたまう。
かくのごとくの道ある諸僧は、調達なり。
涕唾をくらわんがために、かくのごとくの小児の狂語あり。
啼哭というべし。
七仏の眷属にあらず。
魔党、畜生なり。
いまだ身心、学道をしらず、参学せず、身心、出家をしらず。
王、臣の法、政にくらく、仏祖の大道をゆめにもみざるによりて、かくのごとし。
維摩居士の、仏出世時にあうし、道、未尽の法、おおし、学、未到、すくなからず。
龐、蘊、居士が祖席に参歴せし、薬山の堂奥をゆるされず、江西におよばず。
ただ、わずかに参学の名をぬすめりといえども、参学の実、あらざるなり。

自余の李駙馬、楊文公、等、おのおの、参飽とおもうといえども、乳餅、いまだ喫せず。
いわんや、画餅を喫せんや？
いわんや、喫、仏祖粥飯せんや？
未有、鉢盂なり。
あわれむべし、一生の皮袋、いたずらなることを。
普勧すらくは、
尽十方の天衆生、人衆生、龍衆生、諸衆生、はるかに如来の法を慕古して、いそぎて出家、修道し、仏位祖位を嗣続すべし。
禅師、等が未達の道をきくことなかれ。
身をしらず、心をしらざるがゆえに、しかのごとく、いうなり。
あるいは、また、すべて、衆生をあわれむこころなく、仏法をまもるおもいなく、ただ、ひとすじに在家の人の屎、糞をくらわんとして、悪狗となれる、人面狗、人皮狗、かくのごとく、いうなり。
同坐すべからず。
同語すべからず。
同依止すべからず。
かれらは、すでに生身、堕、畜生なり。
出家人もし屎、糞、ゆたかならば、出家人、すぐれたり、と、いわまし。
出家人の屎、糞、この畜生に、およばざるがゆえに、かくのごとく道取するなり。
在家心と、出家心と、一等なり、ということ、証拠といい、道理といい、五千余軸の文に、みえず、二千余年のあと、なし。
五十代、四十余世の仏祖、いまだ、その道取なし。
たとえ破戒、無戒の比丘となりて、無法、無慧なりというとも、在家の有智、持戒には、すぐるべきなり。
僧業、これ、智なり、悟なり、道なり、法なるがゆえに。
在家、たとえ随分の善根、功徳あれども、身心の善根、功徳、おろそかなり。
一代の化儀、すべて、在家、得道せるもの、なし。
これ、在家、いまだ学仏道の道場ならざるゆえなり。
遮障、おおき、ゆえなり。
万機心と、祖師心と、一等なり、と道取するともがらの身心をさぐるに、いまだ仏法の身心にあらず、仏祖の皮肉骨髄、つたわれざらん。
あわれむべし、仏正法にあいながら、畜生となれることを。
かくのごとくなるによりて、曹谿古仏、たちまちに辞親尋師す。

これ、正業なり。
金剛経をききて発心せざりしときは、樵夫として家にあり。
金剛経をききて仏法の薫力あるときは、重担を放下して出家す。
しるべし、身心もし仏法あるときは、在家にとどまること、あたわず、ということを。
諸仏祖、みな、かくのごとし。
出家すべからず、という、ともがらは、造逆よりも、おもき罪条なり、調達よりも、猛悪なり、というべし。
六群比丘、六群尼、十八群比丘、等よりも、おもし、としりて、共語すべからず。
一生の寿命、いくばくならず。
かくのごとくの魔子、畜生、等と、共語すべき光陰なし。
いわんや、この人身は、先世に、仏法を見聞せし種子より、うけたり。
公界の調度なるがごとし。
魔族となすべきにあらず。
魔族と、ともならしむべきにあらず。
仏祖の深恩をわすれず、法乳の徳を保護して、悪狗の叫吠をきくことなかれ。
悪狗と、同坐、同食することなかれ。
嵩山高祖古仏、はるかに西天の仏国をはなれて、辺邦の神丹に西来するとき、仏祖の正法、まのあたり、つたわれしなり。
これ、出家、得道にあらずば、かくのごとくなるべからず。
祖師西来、已前は、東地の衆生、人、天、いまだかつて正法を見聞せず。
しかあれば、しるべし。
正法、正伝、ただ、これ、出家の功徳なり。
大師、釈尊、かたじけなく父王の位をすてて嗣続せざることは、王位の貴ならざるにあらず、仏位の最貴なるを嗣続せんがためなり。
仏位は、これ、出家位なり。
三界の天衆生、人衆生、ともに、頂戴、恭敬する、くらいなり。
梵王、釈王の同坐するところにあらず。
いわんや、下界の諸人王、諸龍王の同坐する、くらいならんや？
無上正等覚位なり。
くらい、よく、説法、度、生し、放、光、現、瑞す。
この出家位の諸業、これ、正業なり、諸仏、七仏の懐業なり。
唯仏与仏にあらざれば、究尽せざるところなり。

いまだ出家せざらんともがらは、すでに出家せるに奉覲、給仕し、頭頂、敬礼し、身命を抛捨して供養すべし。

釈迦牟尼仏、言、
出家、受戒、是、仏種子、也。
已得度人。

しかあれば、すなわち、しるべし。
得度というは、出家なり。
未出家は、沈淪にあり。
かなしむべし。
おおよそ、一代の仏説のなかに、出家の功徳を讃歎せること、称計すべからず。
釈尊、誠説し、諸仏、証明す。
出家人の破戒、不修なるは、得道す。
在家人の得道、いまだあらず。
帝者の、僧、尼を礼拝するとき、僧、尼、答拝せず。
諸天の、出家人を拝するに、比丘、比丘尼、まったく答拝せず。
これ、出家の功徳、すぐれたる、ゆえなり。
もし出家の比丘、比丘尼に拝せられば、諸天の宮殿、光明、果報、等、たちまちに破壊、墜堕すべきがゆえに、かくのごとし。
おおよそ、仏法、東漸より、このかた、出家人の得道は、稲麻竹葦のごとし。
在家ながら得道せるもの、一人も、いまだあらず。
すでに仏法、その眼、耳におよぶときは、いそぎて出家をいとなむ。
はかりしりぬ。
在家は、仏法の在所にあらず。
しかあるに、万機の身心、すなわち、仏祖の身心なり、という、やからは、いまだかつて仏法を見聞せざるなり。
黒闇獄の罪人なり。
おのれが言語、なお、見聞せざる、愚人なり。
国賊なり。
万機の心をもって仏祖の心に同ずるを詮とするは、仏法のすぐれたるによりて、しかいうを帝者よろこぶ。
しるべし、仏法、すぐれたり、ということ。
万機の心は、仮令、おのずから仏祖の心に同ずとも、仏祖の身心、おのずから万機の身心とならんとき、万機の身心なるべからず。

万機心と仏祖心と、一等なり、という禅師、等、すべて、心法のゆきかた、様子をしらざるなり。
いわんや、仏祖心をゆめにもしること、あらんや？
おおよそ、梵王、釈王、人王、龍王、鬼神王、等、おのおの、三界の果報に著することなかれ。
はやく出家、受戒して、諸仏、諸祖の道を修習すべし。
曠大劫の仏因ならん。
みずや？
維摩老もし出家せましかば、維摩よりも、すぐれたる、維摩比丘をみん。
今日は、わずかに空生、舎利子、文殊、弥勒、等をみる。
いまだ半維摩をみず。
いわんや、三、四、五の維摩をみんや？
もし三、四、五の維摩をみず、しらざれば、一維摩、いまだ、みず、しらず、保任せざるなり。
一維摩いまだ保任せざれば、維摩仏をみず。
維摩仏をみざれば、維摩文殊、維摩弥勒、維摩善現、維摩舎利子、等、いまだ、あらざるなり。
いわんや、維摩山河大地、維摩、草木、瓦礫、風雨、水火、過去、現在、未来、等あらんや？
維摩、いまだ、これらの光明、功徳みえざることは、不出家のゆえなり。
維摩もし出家せば、これらの功徳あるべきなり。
当時、唐朝、宋朝の禅師、等、これらの宗旨に達せず、みだりに維摩を挙して、作得、是とおもい、道得、是という。
これらのともがら、あわれむべし、言教をしらず、仏法にくらし。
あるいは、また、あまりさえは、維摩と釈尊と、その道、ひとしとおもい、いえる、おおし。
これら、また、いまだ仏法をしらず、祖道をしらず、維摩をもしらず、はからざるなり。
かれら、いわく、維摩、黙然、無言して諸菩薩にしめす、これ、如来の無言、為、人にひとし、という。
これ、おおきに仏法をしらず、学道の力量なし、というべし。
如来の有言、すでに自余と、ことなり、無言も、また、諸類と、ひとしかるべからず。
しかあれば、如来の一黙と、維摩の一黙と、相似の比論にすら、およぶべからず。

言説は、ことなりとも、黙然は、ひとしかるべし、と憶想せるともがらの力量をさぐるには、仏辺人とするにも、およばざるなり。
かなしむべし。
かれら、いまだ声、色の見聞なし。
いわんや、跳、声、色の光明あらんや？
いわんや、黙の黙を学すべしとだにもしらず、ありとだにもきかず。
おおよそ、諸類と諸類と、その動静、なお、ことなり。
いかでか釈尊と諸類と、おなじといい、おなじからずと比論せん？
これ、仏祖の堂奥に参学せざるともがら、かくのごとく、いうなり。
あるいは、邪人、おおく、おもわく、言説、動容は、これ、仮法なり。寂黙凝然は、これ、真実なり。

かくのごとく、いう、また、仏法にあらず。
梵天、自在天、等の経教を伝聞せるともがらの所計なり。
仏法、いかでか、動静にかかわらん？
仏道に、動静ありや？　動静なしや？　動静を接すや？　動静に接せらるや？　と審細に参学すべし。
而今の晩学、たゆむことなかれ。
現在、大宋国をみるに、仏祖の大道を参学せるともがら、断絶せるがごとし。
両、三箇あるにあらず。
維摩は是にして一黙あり、いまは一黙せざるは、維摩よりも、劣なり、とおもえるともがらのみ、あり。
さらに、仏法の活路なし。
あるいは、また、維摩の一黙は、すなわち、世尊の一黙なり、とおもうともがらのみ、あり。
さらに、分別の光明あらざるなり。
かくのごとく、おもい、いう、ともがら、すべて、いまだかつて仏法、見聞の参学なし、というべし。
大宋国人にあれば、とて、仏法なるらん、とおもうことなかれ。
その道理、あきらめやすかるべし。
いわゆる、正業は、僧業なり。
論師、経師のしるところにあらず。
僧業というは、
雲堂裏の功夫なり。
仏殿裏の礼拝なり。
後架裏の洗面なり。

乃至、合掌、問訊、焼香、焼湯する、これ、正業なり。
以、頭、換、尾するのみにあらず。
以、頭、換、頭なり。
以、心、換、心なり。
以、仏、換、仏なり、
以、道、換、道なり。
これ、すなわち、正業道支なり。
あやまりて仏法の商量すれば、眉、髭、堕落し、面目、破顔するなり。

正命道支とは、
早朝、粥、午時、飯なり。
在、叢林、弄、精魂なり。
曲木座上、直指なり。
老趙州の不、満、二十衆、これ、正命の現成なり。
薬山の不、満、十衆、これ、正命の命脈なり。
汾陽の七、八衆、これ、正命のかかれるところなり。
もろもろの邪命をはなれたるがゆえに。

釈迦牟尼仏、言、
諸声聞人、未得、正命。

しかあれば、すなわち、声聞の教行証、いまだ正命にあらざるなり。

しかあるを、近日、庸流、いわく、
声聞、菩薩を分別すべからず。
その威儀、戒律、ともに、もちいるべし。
といいて、小乗、声聞の法をもって、大乗、菩薩法の威儀、進止を判す。

釈迦牟尼仏、言、
声聞、持戒、菩薩、破戒。

しかあれば、声聞の持戒とおもえる、もし菩薩戒に比望するがごときは、声聞戒、みな、破戒なり。
自余の定、慧も、また、かくのごとし。
たとえ不殺生、等の相、おのずから声聞と菩薩と、あいにたりとも、かならず、別なるべきなり。
天地懸隔の論におよぶべからざるなり。

いわんや、仏仏、祖祖、正伝の宗旨と諸声聞と、ひとしからんや？
正命のみにあらず、清浄命あり。
しかあれば、すなわち、仏祖に参学するのみ、正命なるべし。
論師、等の見解、もちいるべからず。
未得、正命なるがゆえに、本分命にあらず。

正精進道支とは、
抉出、通身の行李なり。
抉出、通身、打、人面なり。
倒、騎、仏殿、打一帀、両帀、三、四、五帀なるがゆえに、九九算来八十二なり。
重、報、君の千、万条なり。
換、頭、也、十字、縦横なり。
換、面、也、縦横、十字なり。
入室来、上堂来なり。
望州亭、相見、了、也。烏石嶺、相見、了、也。
僧堂前、相見、了、也。仏殿裏、相見、了、也。
両鏡、相対して三枚、影あるをいう。

正念道支は、
被、自、瞞の八、九成なり。
念より、さらに、発、智する、と学するは、捨、父、逃逝なり。
念中、発、智、と学するは、纏縛之甚なり。
無念は、これ、正念、というは、外道なり。
また、地水火風の精霊を念とすべからず。
心、意、識の顛倒を念と称せず。
まさに、汝、得、吾皮肉骨髄、すなわち、正念道支なり。

正定道支とは、
脱落、仏祖なり。
脱落、正定なり。
他、是、能、挙なり。
剖来、頂𩕳、作、鼻孔なり。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
正法眼蔵裏、拈、優曇華なり。
優曇華裏、有、百、千枚、迦葉、破顔微笑なり。
活計、ひさしく、もちいきたりて、木杓、破なり。

このゆえに、落草、六年、花開、一夜なり。
劫火、洞燃、大千、倶、壊、随、他、去なり。

この三十七品菩提分法、すなわち、仏祖の眼睛、鼻孔、皮肉骨髄、手足、面目なり。
仏祖、一枚、これを三十七品菩提分法と参学しきたれり。
しかあれども、一千三百六十九品の公案、現成なり、菩提分法なり。
坐断すべし。
脱落すべし。

正法眼蔵　三十七品菩提分法
爾時、寛元二年甲辰、二月二十四日、在、越宇、吉峰精舎、示、衆。

# 転法輪

先師、天童古仏、上、堂、挙、

世尊、道、
一人、発、真、帰、源、十方虚空、悉皆、消殞。

師、拈、云、
既、是、世尊、所説。
未免、尽作、奇特商量。

天童、則、不然。
一人、発、真、帰、源、乞児、打破、飯椀。

五祖山、法演和尚、道、
一人、発、真、帰、源、十方虚空、築著磕著。

仏性法泰和尚、道、
一人、発、真、帰、源、十方虚空、只、是、十方虚空。

夾山、圜悟禅師、克勤和尚、道、
一人、発、真、帰、源、十方虚空、錦上、添、華。

大仏、道、
一人、発、真、帰、源、十方虚空、発、真、帰、源。

いま、挙するところの一人、発、真、帰、源、十方虚空、悉皆、消殞は、首楞厳経のなかの道なり。
この句、かつて数位の仏祖、おなじく、挙しきたれり。
いまより、この句、まことに、仏祖、骨髄なり、仏祖、眼睛なり。
しか、いうこころは、首楞厳経、一部、十軸、あるいは、これを偽経という、あるいは、偽経にあらずという。

両説、すでに、往往より、いまにいたれり。
旧訳あり、新訳ありといえども、疑著するところ、神龍年中の訳をうたがうなり。
しかあれども、いま、すでに五祖演和尚、仏性泰和尚、先師、天童古仏、ともに、この句を挙しきたれり。
ゆえに、この句、すでに仏祖の法輪に転ぜられたり、仏祖、法輪、転なり。
このゆえに、この句、すでに仏祖を転じ、この句、すでに仏祖をとく。
仏祖に転ぜられ、仏祖を転ずるがゆえに、たとえ偽経なりとも、仏祖もし転挙しきたらば、真箇の仏経祖経なり、親曾の仏祖、法輪なり。
たとえ瓦礫なりとも、たとえ黄葉なりとも、たとえ優曇華なりとも、たとえ金襴衣なりとも、仏祖、すでに拈来すれば、仏法輪なり、仏正法眼蔵なり。
しるべし。
衆生もし超出、成、正覚すれば、仏祖なり、仏祖の師資なり、仏祖の皮肉骨髄なり。
さらに、従来の兄弟衆生を兄弟とせず。
仏祖、これ、兄弟なるがごとく、十軸の文句、たとえ偽なりとも、而今の句は、超出の句なり、仏句祖句なり、余文余句に群すべからず。
たとえ、この句は超越の句なりとも、一部の文句、性、相を仏言祖語に擬すべからず、参学眼睛とすべからず。
而今の句を諸句に比論すべからざる道理、おおかる。
そのなかに、一端を挙拈すべし。
いわゆる、転法輪は、仏祖儀なり。
仏祖、いまだ不転、法輪あらず。
その転法輪の様子、
あるいは、声、色を挙拈して声、色を打失す。
あるいは、声、色を跳脱して転法輪す。
あるいは、眼睛を抉出して転法輪す。
あるいは、拳頭を挙起して転法輪す。
あるいは、鼻孔をとり、あるいは、虚空をとるところに、法輪、自転なり。
而今の句をとる、いまし、これ、明星をとり、鼻孔をとり、桃華をとり、虚空をとる、すなわちなり。
仏祖をとり、法輪をとる、すなわちなり。
この宗旨、あきらかに転法輪なり。
転法輪というは、功夫、参学して一生、不離、叢林なり、長連牀上に請益、弁道するをいう。

正法眼蔵　転法輪
于、時、寛元二年甲辰、二月二十七日、在、越宇、吉峰精舎、示、衆。

# 自証三昧

諸仏、七仏より仏仏、祖祖の正伝するところ、すなわち、自証三昧なり。
いわゆる、或、従、知識、或、従、経巻なり。
これは、これ、仏祖の眼睛なり。
このゆえに、
曹谿古仏、問、僧、云、
還、仮、修、証、也？　無？
僧、云、
修、証、不無、染汚、即、不得。

しかあれば、しるべし。
不染汚の修、証、これ、仏祖なり。
仏祖三昧の霹靂、風、雷なり。
或、従、知識の正当恁麼時、
あるいは、半面を相見す。
あるいは、半身を相見す。
あるいは、全面を相見す。
あるいは、全身を相見す。
半自を相見することあり。
半他を相見することあり。
神頭の被毛せるを相証し、鬼面の戴角せるを相証す。
異類行の随、他、来あり。
同条、生の変、異、去あり。
かくのごとくのところに、為、法、捨、身すること、いく千、万回ということをしらず。
為、身、求法すること、いく億、百劫ということをしらず。
これ、或、従、知識の活計なり。
参自、従自の消息なり。
瞬目に相見するとき、破顔あり。
得髄を礼拝するちなみに、断臂す。
おおよそ、七仏の前後より、六祖の左右にあまれる、見自の知識、ひとりにあらず、ふたりにあらず。
見他の知識、むかしにあらず、いまにあらず。

或、従、経巻のとき、自己の皮肉骨髄を参究し、自己の皮肉骨髄を脱落するとき、桃華、眼睛ずから突出、相見せらる、竹声、耳根ずから霹靂、相聞せらる。
おおよそ、経巻に従学するとき、まことに、経巻、出来す。
その経巻というは、尽十方界、山河大地、草木、自他なり、喫、飯、著衣、造次動容なり。
この一一の経典にしたがい学道するに、さらに未曾有の経巻、いく千、万巻となく出現、在前するなり。
是、字の句ありて宛然なり。
非、字の偈、あらたに歴然なり。
これらにあうことをえて、拈、身心して参学するに、長劫を消尽し、長劫を挙起すというとも、かならず、通利の到所あり。
放、身心して参学するに、朕兆を抉出し、朕兆を趯飛すというとも、かならず、受持の功、成ずるなり。
いま、西天の梵文を東土の法本に翻訳せる、わずかに半万軸にたらず。
これに、三乗、五乗、九部、十二部あり。
これら、みな、したがい学すべき経巻なり。
したがわざらんと回避せんとすとも、うべからざるなり。
かるがゆえに、あるいは、眼睛となり、あるいは、吾髄となりきたれり。
頭角正なり、尾条正なり。
他より、これをうけ、これを他にさずくといえども、ただ眼睛の活出なり、自他を脱落す。
ただ吾髄の付属なり、自他を透脱せり。
眼睛、吾髄、それ、自にあらず、他にあらざるがゆえに、仏祖、むかしより、むかしに正伝しきたり、而今より而今に付属するなり。
拄杖経あり。
横説縦説、おのれずから、空を破し、有を破す。
払子経あり。
雪を澡し、霜を澡す。
坐禅経の一会、両会あり。
袈裟経、一巻、十軸あり。
これら、諸仏祖の護持するところなり。
かくのごとくの経巻にしたがいて修、証、得道するなり。
あるいは、天面、人面、あるいは、日面、月面あらしめて、従、経巻の功夫、現成するなり。

しかあるに、たとえ知識にも、したがい、たとえ経巻にも、したがう、みな、これ、自己にしたがうなり。
経巻、おのれずから自経巻なり。
知識、おのれずから自知識なり。
しかあれば、遍参、知識は、遍参、自己なり。
拈、百草は、拈、自己なり。
拈、万木は、拈、自己なり。
自己は、かならず、恁麼の功夫なりと参学するなり。
この参学に、自己を脱落し、自己を証契するなり。
これによりて、仏祖の大道に、自証、自悟の調度あり。
正嫡の仏祖にあらざれば、正伝せず。
嫡嫡、相承せる調度あり。
仏祖の骨髄にあらざれば、正伝せず。
かくのごとく参学するゆえに、人のために伝授するときは、汝、得、吾髄の付属、有在なり。
吾有、正法眼蔵、付属、摩訶迦葉なり。
為、説は、かならずしも自他にかかわれず。
他のための説著、すなわち、みずからのための説著なり。
自と自と、同参の聞説なり。
一耳は、きき、一耳は、とく。
一舌は、とき、一舌は、きく。
乃至、眼耳鼻舌身意根、識、塵、等も、かくのごとし。
さらに、一身、一心ありて、証する、あり、修する、あり。
耳ずからの聞説なり、舌ずからの聞説なり。
昨日は、他のために不定法をとくといえども、今日は、みずからのために定法をとくなり。
かくのごとくの日面あいつらなり、月面あいつらなれり。
他のために法をとき法を修するは、生生のところに、法をきき法をあきらめ法を証するなり。
今生にも、法を他のためにとくに、誠心あれば、自己の得法、やすきなり。
あるいは、他人の、法をきくをも、たすけ、すすむれば、みずからが学法、よき、たよりをうるなり。
身中に、たよりをえ、心中に、たよりをうるなり。
聞法を障礙するがごときは、みずからが聞法を障礙せらるるなり。
生生の身身に法をとき法をきくは、世世に聞法するなり。

前来、わが正伝せし法を、さらに、今世にも、きくなり。
法のなかに生じ、法のなかに滅するがゆえに。
尽十方界のなかに法を正伝しつれば、生生に、きき、身身に修するなり。
生生を法に現成せしめ、身身を法ならしむるゆえに、一塵、法界、ともに、拈来して法を証せしむるなり。
しかあれば、東辺にして一句をききて、西辺にきたりて一人のためにとくべし。
これ、一自己をもって聞著、説著を一等に功夫するなり。
東自西自を一斉に修、証するなり。
なにとしても、ただ仏法、祖道を自己の身心にあいちかづけ、あいいとなむをよろこび、のぞみ、こころざすべし。
一時より一日におよび、乃至、一年より一生までの、いとなみとすべし。
仏法を精魂として弄すべきなり。
これを、生生をむなしく、すごさざる、とす。
しかあるを、いまだ、あきらめざれば、ひとのために、とくべからず、とおもうことなかれ。
あきらめんことをまたんは、無量劫にも、かなうべからず。
たとえ人仏をあきらむとも、さらに、天仏、あきらむべし。
たとえ山のこころをあきらむとも、さらに、水のこころをあきらむべし。
たとえ因縁生法をあきらむとも、さらに、非因縁生法をあきらむべし。
たとえ仏祖辺をあきらむとも、さらに、仏祖向上をあきらむべし。
これらを一世にあきらめおわりてのちに他のためにせんと擬せんは、不功夫なり、不丈夫なり、不参学なり。
おおよそ、学仏祖道は、一法、一儀を参学するより、すなわち、為、他の志気を衝、天せしむるなり。
しかあるによりて、自他を脱落するなり。
さらに自己を参徹すれば、さきより、参徹、他己なり。
よく、他己を参徹すれば、さきより、参徹、自己なり。
この仏儀は、たとえ生知というとも、師承にあらざれば、体達すべからず。
生知、いまだ師にあわざれば、不生知をしらず、不生不知をしらず。
たとえ生知というとも、仏祖の大道は、しるべきにあらず。
学して、しるべきなり。
自己を体達し、他己を体達する、仏祖の大道なり。
ただ、まさに自初心の参学をめぐらして、他初心の参学を同参すべし。
初心より、自他、ともに、同参しもってゆくは、究竟、同参に得到するなり。

自功夫のごとく、他功夫をも、すすむべし。
しかあるに、自証、自悟、等の道をききて、麤人、おもわくは、師に伝授すべからず、自学すべし。

これは、おおきなる、あやまりなり。
自解の思量分別を邪計して、師承なきは、西天の天然外道なり。
これをわきまえざらんともがら、いかでか仏道人ならん？
いわんや、自証の言をききて、積集の五陰ならん、と計せば、小乗の自調に同ぜん。
大乗、小乗をわきまえざるともがら、おおく、仏祖の児孫と自称する、おおし。
しかあれども、明眼人、だれが、瞞ぜられん？

大宋国、紹興のなかに、径山の大慧禅師、宗杲という、あり。
もとは、これ、経、論の学生なり。
遊方のちなみに、宣州の理禅師にしたがいて、雲門の拈古、および、雪竇の頌古、拈古を学す。
参学のはじめなり。
雲門の風を会せずして、ついに、洞山、微和尚に参学すといえども、微、ついに、堂奥をゆるさず。
微和尚は、芙蓉和尚の法子なり。いたずらなる席末人に斉肩すべからず。
杲禅師、やや、ひさしく参学すといえども、微の皮肉骨髄を摸著すること、あたわず。
いわんや、塵中の眼睛ありとだにもしらず。
あるとき、仏祖の道に臂香、嗣書の法ありとばかりききて、しきりに嗣書を微和尚に請す。
しかあれども、微和尚、ゆるさず、ついに、いわく、
なんじ、嗣書を要せば、倉卒なることなかれ。
直、須、功夫、勤学。
仏祖、受授、不妄、付授、也。
吾、不惜、付授。
只、是、爾、未具眼、在。

ときに、宗杲、いわく、
本、具、正眼、自証、自悟。
豈、有、不付授、也？

微和尚、笑、而、休、矣。

のちに、湛堂、準和尚に参ず。

湛堂、一日、問、宗杲、云、
爾、鼻孔、因、什麼、今日、無、半辺？

杲、云、
宝峰、門下。

湛堂、云、
杜撰、禅和。

杲、看経、次、湛堂、問、
看、什麼経？

杲、云、
金剛経。

湛堂、云、
是法、平等。
無有、高下。
為、什麼、雲居山、高、宝峰山、低？

杲、云、
是法、平等。
無有、高下。

湛堂、云、
爾、作得、箇座主、奴。

又、一日、湛堂、見、於、粧、十王、所、問、宗杲上座、云、
此官人、姓、什麼？

杲、云、
姓、梁。

湛堂、以、手、自、摸、頭、云、
爭奈、姓、梁底、少、箇幞頭？

杲、云、
雖、無、幞頭、鼻孔、髣髴。

湛堂、云、
杜撰、禅和。

湛堂、一日、問、宗杲、云、
杲上座、
我這裏禅、爾、一時、理会得。
教、爾、説、也、説得。
教、爾、参、也、参得。
教、爾、做、頌古、拈古、小参、普説、請益、爾、也、做得。
祗、是、爾、有、一件事、未在。
爾、還、知？　否？

杲、云、
甚麼事、未在？

湛堂、云、
爾、祗、欠、這一解、在。
囨。
若、作不得、這一解、
我、方丈、与、爾、説時、便、有、禅、
纔、出、方丈、便、無、了、也。
惺惺、思量時、便、有、禅、
纔、睡著、便、無、了、也。
若、如此、
如何、敵得、生死？

杲、云、
正、是、宗杲疑所。

後、稍、経、載、湛堂、示、疾。

宗杲、問、云、
和尚、百年後、宗杲、依、付、阿誰、可、以、了、此大事？

湛堂、嘱、云、
有、箇勤、巴子。
我、亦、不識、他(かれ)。
雖然、爾、若、見、他(かれ)、必、能、成就、此事。
爾、若、見、他(かれ)、了、不可、更、他、遊。
後世、出来、参禅、也。

この一段の因縁を撿点するに、湛堂、なお、宗杲をゆるさず、たびたび開発を擬すといえども、ついに、欠、一件事なり。
補、一件事あらず。
脱落、一件事せず。
微和尚、そのかみ、嗣書をゆるさず。
なんじ、いまだしきこと、あり、と勧励する。
微和尚の観、機、あきらかなること、信仰すべし。
正、是、宗杲疑所を究参せず、脱落せず、打破せず、大疑せず、被、疑、礙なし。
そのかみ、みだりに嗣書を請する、参学の倉卒なり、無道心のいたりなり、無稽古の、はなはだしきなり、無遠慮なりというべし、道、機ならずというべし、疎学のいたりなり。
貪名愛利によりて、仏祖の堂奥をおかさんとす。
あわれむべし、仏祖の語句をしらざることを。
稽古は、これ、自証と会せず。
万代を渉猟するは自悟、ときかず、学せざるによりて、かくのごとく、不是あり、かくのごとくの自錯あり。
かくのごとくなるによりて、宗杲禅師の門下に一箇、半箇の真巴鼻あらず、おおく、これ、仮底なり。
仏法を会せず、仏法を不会せざるは、かくのごとくなり。
而今の雲水、かならず、審細の参学すべし。
疎慢なることなかれ。

宗杲、因、湛堂之嘱、而、湛堂、順寂後、参、圜悟禅師、於、京師之天寧。

圜悟、一日、陞坐、

宗杲、有、神悟、以、悟、告、呈、圜悟。

悟、云、
未、也。
子、雖、如是、而、大法、故、未明。

又、一日、圜悟、上、堂、挙、五祖演和尚、有句無句、語。
宗杲、聞、而、言下、得、大安楽法。
又、呈、解、圜悟。

圜悟、笑、而、云、
吾、不欺、汝、耶。

これ、宗杲禅師、のちに圜悟に参ずる因縁なり。
圜悟の会にして書記に充す。
しかあれども、前後、いまだ、あらたなる得所みえず。
みずから普説、陞坐のときも、得所を挙せず。
しるべし。
記録者は、神悟せるといい、得、大安楽法と記せりといえども、させることなきなり。
おもく、おもうことなかれ。ただ参学の生なり。
圜悟禅師は、古仏なり。十方中の至尊なり。
黄檗よりのちは、圜悟のごとくなる尊宿、いまだ、あらざるなり。
他界にも、まれなるべき古仏なり。
しかあれども、これをしれる人、天まれなり。
あわれむべき娑婆国土なり。
いま、圜悟古仏の説法を挙して、宗杲上座を撿点するに、
師におよべる智、いまだあらず。
師にひとしき智、いまだあらず。
いかに、いわんや、師よりも、すぐれたる智、ゆめにもいまだみざるがごとし。
しかあれば、しるべし。
宗杲禅師は、減師半徳の才におよばざるなり。
ただ、わずかに華厳、楞厳、等の文句を諳誦して伝説するのみなり。
いまだ仏祖の骨髄あらず。

宗杲、おもわくは、大小の隠倫、わずかに依草付木の精霊にひかれて保任せるところの見解、これを仏法とおもえり。

これを仏法と計せるをもって、はかりしりぬ、仏祖の大道、いまだ参究せずということを。
圜悟よりのち、さらに他、遊せず、知識をとぶらわず。
みだりに大刹の主として雲水の参頭なり。
のこれる語句、いまだ大法のほとりに、およばず。
しかあるを、しらざるともがら、おもわくは、宗杲禅師、むかしにも、はじざる、とおもう。
みしれるものは、あきらめざると決定せり。
ついに、大法をあきらめず、いたずらに口吧吧地のみなり。
しかあれば、しりぬ、洞山の微和尚、まことに、後鑑、あきらかに、あやまらざりけり、ということを。
宗杲禅師に参学せるともがらは、それ、すえまでも微和尚をそねみ、ねたむこと、いまに、たえざるなり。
微和尚は、ただ、ゆるさざるのみなり。
準和尚のゆるさざることは、微和尚よりも、はなはだし。
まみゆるごとには、勘過するのみなり。
しかあれども、準和尚をねたまず。
而今、および、こしかたの、ねたむともがら、いくばくの懡㦬なりとかせん？
おおよそ、大宋国に、仏祖の児孫と自称する、おおかれども、まことを学せる、すくなきゆえに、まことをおしうる、すくなし。
そのむね、この因縁にても、はかりしりぬべし。
紹興のころすらなお、かくのごとし。
いまは、そのころよりも、おとれり。たとうるにも、およばず。
いまは、仏祖の大道、なにとあるべし、とだにもしらざるともがら、雲水の主人となれり。
しるべし。
仏仏、祖祖、西天、東土、嗣書、正伝は、青原山下、これ、正伝なり。
原山下よりのち、洞山、おのずから正伝せり。
自余の十方、かつて、しらざるところなり。
しるものは、みな、これ、洞山の児孫なり。雲水に声名をほどこす。
宗杲禅師、なお、生前に自証、自悟の言句をしらず。
いわんや、自余の公案を参徹せんや？

いわんや、宗杲禅老よりも晩進のもの、だれが自証の言をしらん？
しかあれば、すなわち、仏祖道の道自、道他、かならず、仏祖の身心あり、仏祖の眼睛あり。
仏祖の骨髄なるがゆえに、庸者の得皮にあらず。

正法眼蔵　自証三昧
爾時、寛元二年甲辰、二月二十九日、在、越宇、吉峰精舎、示、衆。

# 大修行

洪州、百丈山、大智禅師(嗣、馬祖、諱、懐海)、凡参、次、有、一老人、常、随、衆、聴、法。
大衆、若、退、老人、亦、退。
忽、一日、不退。

師、遂、問、
面前、立、者、復、是、何人？

老人、対、曰、
某甲、是、非人、也。
於、過去、迦葉仏時、曾、住、此山。
因、学人、問、
大修行底人、還、落、因果、也？　無？
某甲、答、佗、云、
不落因果。
後、五百生、堕、野狐身。
今、請、和尚、代、一転語、貴、脱、野狐身。
遂、問、曰、
大修行底人、還、落、因果、也？　無？

師、云、
不昧因果。

老人、於、言下、大悟。
作、礼、曰、
某甲、已、脱、野狐身、住、此山、後。
敢、告、和尚、
乞、依、亡僧、事例。

師、
令、維那、白椎、
告、衆、曰、
食後、送、亡僧。

大衆、言議、
一衆、皆、安。
涅槃堂、又、無、病人。
何故、如是？

食後、只、見、師、領、衆。
至、山、後。
岩下、以、杖、指出、一死野狐。
乃、依、法、火葬。

師、至、晩、上、堂、挙、前因縁。

黄檗、便、問、
古人、錯対、一転語、堕、五百生、野狐身。
転転、不錯、合、作、箇什麼？

師、云、
近、前来。
与、爾、道。

檗、遂、近、前、与、師、一掌。

師、拍手、笑、云、
将、為、胡鬚、赤、更、有、赤鬚、胡。

而今、現成の公案、これ、大修行なり。
老人、道のごときは、
過去、迦葉仏のとき、洪州、百丈山あり。
現在、釈迦牟尼仏のとき、洪州、百丈山あり。
これ、現成の一転語なり。
かくのごとくなりといえども、
過去、迦葉仏時の百丈山と、現在、釈迦牟尼仏時の百丈山と、一にあらず、
異にあらず、前三三にあらず、後三三にあらず。
過去の百丈山きたりて、而今の百丈山となれるにあらず。
いまの百丈山、さきだちて、迦葉仏時の百丈山にあらざれども、
曾、住、此山の公案あり。
為、学人、道、それ、今、百丈の為、老人、道のごとし。

因、学人、問、それ、今、老人、問のごとし。
挙、一、不得、挙、二。
放過、一著、落在、第二。なり。
過去、学人、問、
過去、百丈山の大修行底人、還、落、因果、也？　無？
この問、まことに、卒爾に容易、会すべからず。
そのゆえは、後漢、永平のなかに、仏法、東漸より、のち、梁代、普通のなか、祖師西来の、のち、はじめて老野狐の道より過去の学人、問をきく。
これよりさきは、いまだ、あらざるところなり。
しかあれば、まれに、きく、というべし。
大修行を模得するに、これ、大因果なり。
この因果、かならず、円因満果なるがゆえに、いまだかつて落、不落の論あらず、昧、不昧の道あらず。
不落因果もし、あやまりならば、不昧因果も、あやまりなるべし。
将錯就錯すといえども、堕、野狐身あり、脱、野狐身あり。
不落因果たとえ迦葉仏時には、あやまりなりとも、釈迦仏時は、あやまりにあらざる道理もあり。
不昧因果たとえ現在、釈迦仏のときは脱、野狐身すとも、迦葉仏時、しかあらざる道理も現成すべきなり。
老人、道の後、五百生、堕、野狐身は、作麼生、是、堕、野狐身？
さきより野狐ありて、先、百丈をまねき、おとさしむるにあらず。
先、百丈、もとより野狐なるべからず。
先、百丈の精魂いでて野狐、皮袋に撞入す、というは、外道なり。
野狐きたりて先、百丈を呑却すべからず。
もし先、百丈、さらに野狐となる、と、いわば、まず、脱、先、百丈身あるべし。のちに、堕、野狐身すべきなり。
以、百丈山、換、野狐身なるべからん。
因果の、いかでか、しかあらん？
因果の本有にあらず、始起にあらず。
因果の、いたずらなる、ありて、人をまつこと、なし。
たとえ不落因果の祗対、たとえ、あやまれりとも、かならず、野狐身に堕すべからず。
学人の問著を錯対する業因によりて、野狐身に堕すること必然ならば、近来ある臨済、徳山、および、かの門人、等、いく千、万枚の野狐にか堕在せん？

そのほか、二、三百年来の杜撰、長老、等、そこばくの野狐ならん？
しかあれども、堕、野狐せり、ときこえず。
おおからば、見聞にも、あまるべきなり。
あやまらず、あるらん、というつべしといえども、不落因果よりも、はなはだしき胡乱答話のみ、おおし。
仏法の辺に、おくべからざるも、おおきなり。
参学眼ありて、しるべきなり。
未具、眼は、わきまうべからず。
しかあれば、しりぬ。
あしく祇対するによりて野狐身となり、よく祇対するによりて野狐身とならず、というべからず。
この因縁のなかに、脱、野狐身ののち、いかなり、と、いわず。
さだめて皮袋につつめる真珠あるべきなり。
しかあるに、すべて、いまだ仏法を見聞せざるともがら、いわく、
野狐を脱しおわりぬれば、本覚の性海に帰するなり。
迷妄によりて、しばらく、野狐に堕生すといえども、大悟すれば、野狐身は、すてて、本性に帰するなり。

これは、外道の本我にかえるという義なり。
さらに、仏法にあらず。
もし、野狐は、本性にあらず。野狐に本覚なし。と、いわば、仏法にあらず。
大悟すれば、野狐身は、はなれぬ。すてつる。と、いわば、野狐の大悟にあらず、閑、野狐なるべし。
しか、いうべからざるなり。
今、百丈の一転語によりて、先、百丈、五百生の野狐、たちまちに脱、野狐す、という。
この道理、あきらむべし。
もし傍観の一転語すれば、傍観、脱、野狐身す、と、いわば、従来のあいだ、山河大地、いく一転語となく、おおくの一転語、しきりなるべし。
しかあれども、従来、いまだ脱、野狐身せず。
今、百丈の一転語に脱、野狐身す。
これ、疑殺、古先なり。
山河大地、いまだ一転語せず、と、いわば、今、百丈、ついに、開口のところ、なからん。
また、往往の古徳、おおく、不落、不昧の道、おなじく、道、是なる、というを競頭、道とせり。

しかあれども、いまだ不落、不昧の語脈に体達せず。
かるがゆえに、堕、野狐身の皮肉骨髄を参ぜず、脱、野狐身の皮肉骨髄を参ぜず。
頭正あらざれば、尾正、いまだし。
老人、道の後、五百生、堕、野狐身、なにが、これ、能堕？　なにが、これ所堕なる？
正当、堕、野狐身のとき、従来の尽界、いま、いかなる形段か、ある？
不落因果の語脈、なにとしてか五百枚なる？
いま、山、後、岩下の一条皮、那裏、得来なりとかせん？
不落因果の道は、堕、野狐身なり。
不昧因果の聞は、脱、野狐身なり。
堕、脱、ありといえども、なお、これ、野狐の因果なり。
しかあるに、古来、いわく、
不落因果は、撥無、因果に相似の道なるがゆえに、墜堕す。
という。
この道、その宗旨なし。
くらきひとの、いうところなり。
たとえ先、百丈、ちなみ、ありて、不落因果と道取すとも、大修行の瞞、他、不得なるあり、撥無、因果なるべからず。
また、いわく、
不昧因果は、因果にくらからず、というは、大修行は、超、脱の因果なるがゆえに、脱、野狐身す。
という。
まことに、これ、八、九成の参学眼なり。
しかありといえども、
迦葉仏時、曾、住、此山。
釈迦仏時、今、住、此山。
曾身、今身、日面、月面。
遮、野狐精、現、野狐精するなり。
野狐、いかにしてか五百生の生をしらん？
もし野狐の知をもちいて五百生をしる、と、いわば、野狐の知、いまだ一生の事を尽知せず。一生、いまだ野狐、皮に撞入するにあらず。
野狐は、かならず、五百生の堕を知取する公案、現成するなり。
一生の生を尽知せず。しることあり、しらざることあり。
もし身、知、ともに、生滅せずば、五百生を算数すべからず。

算数すること、あたわずば、五百生の言、それ、虚設なるべし。
もし野狐の知にあらざる知をもちいて、しる、と、いわば、野狐の、しるにあらず。
だれ、ひとが、野狐のために、これを代、知せん？
知、不知の通路、すべて、なくば、堕、野狐身、というべからず。
堕、野狐身せずば、脱、野狐身、あるべからず。
堕、脱、ともに、なくば、先、百丈あるべからず。
先、百丈、なくば、今、百丈あるべからず。
みだりに、ゆるすべからず。
かくのごとく参詳すべきなり。
この宗旨を挙拈して、梁、陳、隋、唐、宋のあいだに、ままに、きこゆる謬説、ともに、勘破すべきなり。
老、非人、また、今、百丈に告して、いわく、乞、依、亡僧、事例。
この道、しかあるべからず。
百丈より、このかた、そこばくの善知識、この道を疑著せず、おどろかず。
その宗趣は、死野狐、いかにしてか亡僧ならん？
得戒なし、夏臘なし、威儀なし、僧宗なし。
かくのごとくなる物類、みだりに亡僧の事例に依、行せば、未出家の何人死、ともに、亡僧の例に準ずべきならん？
死優婆塞、優婆夷、もし請することあらば、死野狐のごとく亡僧の事例に依、準すべし。
依、例をもとむるに、あらず、きかず。
仏道に、その事例を正伝せず。
おこなわん、とおもうとも、かなうべからず。
いま、百丈の、依、法、火葬す、という。
これ、あきらかならず。
おそらくは、あやまりなり。
しるべし。
亡僧の事例は、入、涅槃堂の功夫より、到、菩提園の弁道におよぶまで、みな、事例ありて、みだりならず。
岩下の死野狐、たとえ先、百丈の自称すとも、いかでか大僧の行李あらん？
仏祖の骨髄あらん？
だれが、先、百丈なることを証拠する？
いたずらに野狐精の変怪をまことなりとして、仏祖の法儀を軽慢すべからず。
仏祖の児孫としては、仏祖の法儀をおもくすべきなり。

百丈のごとく、請するにまかすることなかれ。
一事、一法も、あいがたきなり。
世俗にひかれ、人情にひかれざるべし。
この日本国のごときは、仏儀祖儀、あいがたく、ききがたかりしなり。
而今、まれにも、きくことあり、みることあらば、ふかく、髻珠よりも、おもく崇重すべきなり。
無福のともがら、尊崇の信心、あつからず。
あわれむべし。
それ、事の軽重をかつて、いまだ、しらざるによりてなり。
五百歳の智なし、一千年の智なきによりてなり。
しかありというとも、自己をはげますべし、他己をすすむべし。
一礼拝なりとも、一端坐なりとも、仏祖より正伝することあらば、ふかく、あいがたきに、あう、大慶快をなすべし、大福徳を歓喜すべし。
このこころ、なからん、ともがら、千仏の出世にあうとも、一功徳あるべからず、一得益あるべからず。
いたずらに付仏法の外道なるべし。
くちに仏法をまなぶに相似なりとも、くちに仏法をとくに証実あるべからず。
しかあれば、すなわち、たとえ国王、大臣なりとも、たとえ梵天、釈天なりとも、未作僧のともがら、きたりて、亡僧の事例を請せんに、さらに聴許することなかれ。
出家、受戒し、大僧となりて、きたるべし、と答すべし。
三界の業報を愛惜して、三宝の尊位を願求せざらんともがら、たとえ千枚の死皮袋を拈来して亡僧の事例をけがし、やぶるとも、さらに、これ、おかしの、はなはだしきなり。功徳となるべからず。
もし仏法の功徳を結、良縁せんとおもわば、すみやかに仏法によりて出家、受戒し、大僧となるべし。
今、百丈、至、晩、上、堂、挙、前因縁。
この挙底の道理、もっとも未審なり。
作麼生、挙ならん？
老人、すでに五百生来のおわり、脱、従来身、というがごとし。
いま、いう、五百生、そのかず、人間のごとく算取すべきか？　野狐道のごとく算取すべきか？　仏道のごとく算数するか？
いわんや、老野狐の眼睛、いかでか百丈を覰見することあらん？
野狐に覰見せらるるは、野狐精なるべし。
百丈に覰見せらるるは、仏祖なり。

このゆえに、
枯木禅師、法成和尚、頌、曰、
百丈、親曾見、野狐。
為、渠、参請、太心麤。
而今、敢、問、諸参学、
吐得、狐涎、尽、也？　無？

しかあれば、野狐は、百丈、親曾、眼睛なり。
吐得、狐涎、たとえ半分なりとも、出、広長舌、代、一転語なり。
正当恁麼時、脱、野狐身、脱、百丈身、脱、老非人身、脱、尽界身なり。
黄檗、便、問、
古人、錯対、一転語、堕、五百生、野狐身。
転転、不錯、合、作、箇什麼？

いま、この問、これ、仏祖道、現成なり。
南嶽下の尊宿のなかに、黄檗のごとくなるは、さきにも、いまだあらず、のちにも、なし。
しかあれども、老人も、いまだ、いわず、錯対、学人、と。
百丈も、いまだ、いわず、錯対せりける、と。
なにとしてか、いま、黄檗、みだりに、いう、古人、錯対、一転語、と。
もし錯によれりというならんといわば、黄檗、いまだ百丈の大意をえたるにあらず。
仏祖道の錯対、不錯対は、黄檗、いまだ参究せざるがごとし。
この一段の因縁に、先、百丈も、錯対、と、いわず、今、百丈も、錯対、と、いわず、と参学すべきなり。
しかありといえども、野狐皮、五百枚、あつさ三寸なるをもって、曾、住、此山し、為、学人、道するなり。
野狐皮に脱落の尖毛あるによりて、今、百丈、一枚の臭皮袋あるなり。
度量するに、半野狐皮の脱来なり。
転転、不錯の堕、脱あり。
転転、代、語の因果あり。
歴然の大修行なり。
いま、黄檗きたりて、転転、不錯、合、作、箇什麼？　と問著せんに、いうべし、
也、堕、作、野狐身。
と。

黄檗、もし、なにとしてか恁麼なる？　と、いわば、さらに、いうべし、
這野狐精。

かくのごとくなりとも、錯、不錯にあらず。
黄檗の問を問得、是なり、とゆるすことなかれ。
また、黄檗、合、作、箇什麼？　と問著せんに、
摸索、得、面皮、也？　未？
というべし。
また、
爾、脱、野狐身、也？　未？
というべし。
また、
爾、答、他学人、不落因果、也？　未？
というべし。
しかあれども、百丈、道の近、前来、与、爾、道、すでに、合、作、箇這箇の道所あり。
黄檗、近、前す。
亡前失後なり。
与、百丈、一掌する。
そこばくの野狐変なり。
百丈、拍手、笑、云、
将、為、胡鬚、赤、更、有、赤鬚、胡。
この道取、いまだ十成の志気にあらず、わずかに八、九成なり。
たとえ八、九成をゆるすとも、いまだ八、九成あらず。
十成をゆるすとも、八、九成なきものなり。
しかあれども、いうべし、
百丈、道所、通方。
雖然、未出、野狐窟。
黄檗、脚跟、点、地。
雖然、猶、滞、蟷螂、径。
与、掌、拍手、一有、二無。
赤鬚、胡。
胡鬚、赤。

正法眼蔵　大修行

爾時、寛元二年甲辰、三月九日、在、越宇、吉峰古精舎、示、衆。

# 鉢盂

七仏向上より七仏に正伝し、
七仏裏より七仏に正伝し、
渾七仏より渾七仏に正伝し、
七仏より二十八代正伝しきたれり。
第二十八代の祖師、菩提達磨高祖、みずから神丹国にいりて、二祖、大祖、正宗普覚大師に正伝し、
六代、つたわれて、曹谿にいたる。
東西、都、盧、五十一伝。
すなわち、正法眼蔵、涅槃妙心なり、袈裟、鉢盂なり。
ともに、先仏は、先仏の正伝を保任せり。
かくのごとくして、仏仏、祖祖、正伝せり。
しかあるに、仏祖を参学する皮肉骨髄、拳頭、眼睛、おのおの道取あり。
いわゆる、
あるいは、鉢盂は、これ、仏祖の身心なり、と参学する、あり。
あるいは、鉢盂は、これ、仏祖の飯椀なり、と参学する、あり。
あるいは、鉢盂は、これ、仏祖の眼睛なり、と参学する、あり。
あるいは、鉢盂は、これ、仏祖の光明なり、と参学する、あり。
あるいは、鉢盂は、これ、仏祖の真実体なり、と参学する、あり。
あるいは、鉢盂は、これ、仏祖の正法眼蔵、涅槃妙心なり、と参学する、あり。
あるいは、鉢盂は、これ、仏祖の転身所なり、と参学する、あり。
あるいは、鉢盂は、これ、仏祖の縁(ふち)、底なり、と参学する、あり。
かくのごとくのともがらの参学の宗旨、おのおの道得の処分ありといえども、さらに向上の参学あり。

先師、天童古仏、大宋、宝慶元年、住天童日、上、堂、曰、
記得、

僧、問、百丈、
如何、是、奇特事？
百丈、云、
独坐、大雄峰。

大衆、不得、動著。
且、教、坐殺、這漢。

今日、忽、有、人、問、浄上座、
如何、是、奇特事？
只、向、佗、道、
有、甚、奇特？

畢竟、如何？
浄慈、鉢盂、移過、天童、喫、飯。

しるべし。
奇特事は、まさに、奇特人のためにすべし。
奇特事には、奇特の調度をもちいるべきなり。
これ、すなわち、奇特の時節なり。
しかあれば、すなわち、奇特事の現成せるところ、奇特、鉢盂なり。
これをもって、四天王をして護持せしめ、諸龍王をして擁護せしむるも、仏道の玄軌なり。
このゆえに、仏祖に奉献し、仏祖より付属せらる。

仏祖の堂奥に参学せざるともがら、いわく、
仏袈裟は、絹なり、布なり、化糸の、おりなせるところなり。
という。
仏鉢盂は、石なり、瓦なり、鉄なり。
という。

かくのごとく、いうは、未具、参学眼のゆえなり。
仏袈裟は、仏袈裟なり。
さらに、絹、布の見、あるべからず。
絹、布、等の見は、旧見なり。
仏鉢盂は、仏鉢盂なり。
さらに、石、瓦というべからず。鉄、木というべからず。
おおよそ、仏鉢盂は、これ、
造作にあらず。
生滅にあらず。
去来せず。

得失なし。
新旧にわたらず。
古今にかかわれず。
仏祖の衣、盂は、
たとえ雲、水を採集して現成せしむとも、雲、水の羅籠にあらず。
たとえ草木を採集して現成せしむとも、草木の羅籠にあらず。
その宗旨は、
水は、衆法を合成して水なり。
雲は、衆法を合成して雲なり。
雲を合成して雲なり。
水を合成して水なり。
鉢盂は、
但、以、衆法、合成、鉢盂なり。
但、以、鉢盂、合成、衆法なり。
但、以、渾心、合成、鉢盂なり。
但、以、虚空、合成、鉢盂なり。
但、以、鉢盂、合成、鉢盂なり。
鉢盂は、鉢盂に罣礙せられ、鉢盂に染汚せらる。
いま、雲水の伝持せる鉢盂、すなわち、四天王、奉献の鉢盂なり。
鉢盂もし四天王、奉献せざれば、現前せず。
いま、諸方に、伝、仏正法眼蔵の仏祖の、正伝せる鉢盂、これ、透脱、古今底の鉢盂なり。
しかあれば、いま、この鉢盂は、
鉄漢の旧見を覷破せり。
木橛の商量に拘牽せられず。
瓦礫の声、色を超越せり。
石、玉の活計を罣礙せざるなり。
碌塼ということなかれ。
木橛ということなかれ。
かくのごとく承当しきたれり。

正法眼蔵　鉢盂
爾時、寛元三年、三月十二日、在、越宇、大仏精舎、示、衆。

# 虚空

這裏、是、什麼、所在？　のゆえに、道、現成をして仏祖ならしむ。
仏祖の道、現成、おのれずから嫡嫡するゆえに、皮肉骨髄の渾身せる掛、虚空なり。
この虚空は、二十空、等の群にあらず。
おおよそ、空、ただ二十空のみならんや？
八万四千空あり。
および、そこばくあるべし。

撫州、石鞏慧蔵禅師、問、西堂智蔵禅師、
汝、還、解、捉得、虚空、麼？

西堂、曰、
解、捉得。

師、云、
爾、作麼生、捉？

西堂、以、手、撮、虚空。

師、云、
爾、不解、捉、虚空。

西堂、曰、
師兄、作麼生、捉？

師、把、西堂、鼻孔、拽。

西堂、作、忍痛声、曰、
太殺。
拽、人鼻孔。
直、得、脱去。

師、云、
直、須、恁地、捉、始、得。

石鞏、道の汝、還、解、捉得、虚空、麼？
なんじ、また、通身、是、手眼なりや？　と問著するなり。

西堂、道の解、捉得。
虚空、一塊、触、而、染汚なり。
染汚より、このかた、虚空、落、地しきたれり。

石鞏、道の爾、作麼生、捉？
換、作、如如、早、是、変、了、也。なり。
しかも、かくのごとくなりといえども、随、変、而、如、去、也。なり。

西堂、以、手、撮、虚空。
只、会、騎、虎頭。未会、捉、虎尾。なり。

石鞏、道、
爾、不解、捉、虚空。

ただ不解、捉のみにあらず、虚空、也、未夢見在なり。
しかも、かくのごとくなりといえども、年代、深遠、不欲、為、伊(かれ)、挙似。なり。

西堂、道、
師兄、作麼生、捉？

和尚、也、道取、一半。莫、全、靠、某甲。なり。

石鞏、把、西堂鼻孔、拽。
しばらく、参学すべし。
西堂の鼻孔に石鞏、蔵、身せり。
あるいは、鼻孔、拽、石鞏の道、現成あり。
しかも、かくのごとくなりといえども、虚空、一団、磕著築著なり。

西堂、作、忍痛声、曰、
太殺。
拽、人鼻孔。
直、得、脱去。

従来は、人にあうとおもえども、たちまちに自己にあうことをえたり。
しかあれども、染汚、自己、即、不得なり。
修己すべし。

石鞏、道、
直、須、恁地、把捉、始、得。

恁地、把捉、始、得は、なきにあらず。
ただし、石鞏と石鞏と、共、出、一隻手の捉得なし。
虚空と虚空と、共、出、一隻手の捉得あらざるがゆえに、いまだ、みずからの費力をからず。
おおよそ、尽界には、容、虚空の間隙なしといえども、この一段の因縁、ひさしく虚空の霹靂をなせり。
石鞏、西堂よりのち、五家の宗匠と称する参学、おおしといえども、虚空を見聞、測度せる、まれなり。
石鞏、西堂より前後に、弄、虚空を擬するともがら、面面なれども、著手せる、すくなし。
石鞏は、虚空をとれり。
西堂は、虚空を覷見せず。
大仏、まさに、石鞏に為、道すべし。
いわゆる、
そのかみ、西堂の鼻孔をとる。
捉、虚空なるべくば、みずから石鞏の鼻孔をとるべし。
指頭をもって指頭をとることを会取すべし。
しかあれども、石鞏、いささか捉、虚空の威儀をしれり。
たとえ捉、虚空の好手なりとも、虚空の内外を参学すべし。
虚空の殺、活を参学すべし。
虚空の軽重をしるべし。
仏仏、祖祖の功夫、弁道、発心、修、証、道取、問取、すなわち、捉、虚空なると保任すべし。

先師、天童古仏、道、
渾身、似、口、掛、虚空。

あきらかに、しりぬ。
虚空の渾身は、虚空にかかれり。

洪州、西山、亮座主、因、参、馬祖。

祖、問、
講、什麼経？

師、曰、
心経。

祖、云、
将、什麼、講？

師、曰、
将、心、講。

祖、云、
心、如、工伎児。
意、如、和伎者。
六識、為、伴侶。
争、解、講得、経？

師、曰、
心、既、講不得、莫、是、虚空、講得、麼？

祖、云、
却、是、虚空、講得。

師、払、袖、而、退。

祖、召、云、
座主。

師、回首。

祖、云、
従、生、至、老、只、是、這箇。

師、因、而、有、省。

遂、隠、西山。
更、無、消息。

しかあれば、すなわち、仏祖は、ともに、講経者なり。
講経は、かならず、虚空なり。
虚空にあらざれば、一経をも講ずることをえざるなり。
心経を講ずるにも、身経を講ずるにも、ともに、虚空をもって講ずるなり。
虚空をもって思量を現成し不思量を現成せり。
有師智をなす。
無師智をなす。
生知をなし、学而知をなす。
ともに、虚空なり。
作仏作祖、おなじく、虚空なるべし。

第二十一祖、婆修盤頭、尊者、道、
心、同、虚空界。
示、等、虚空法。
証得、虚空、時、
無、是。
無、非法。

いま、壁面人と人面壁と、相逢、相見する牆壁心、枯木心、これは、これ、虚空界なり。
応、以、此身、得度者、即、現、此身、而、為、説法。
これ、示、等、虚空法なり。
応、以、他身、得度者、即、現、他身、而、為、説法。
これ、示、等、虚空法なり。
被、十二時、使、および、使得、十二時、これ、証得、虚空、時なり。
石頭、大、底、大。
石頭、小、底、小。
これ、無、是。無、非法。なり。
かくのごとくの虚空、しばらく、これを正法眼蔵、涅槃妙心と参究するのみなり。

正法眼蔵　虚空

爾時、寛元三年乙巳、三月六日、在、越宇、大仏寺、示、衆。

# 安居

先師、天童古仏、結夏、小参、云、
平地、起、骨堆。
虚空、剜、窟籠。
驀、透、両重関。
拈却、黒漆桶。

しかあれば、得、這巴鼻子、了、未免、喫、飯、伸、脚、睡、在、這裏、三十年なり。
すでに、かくのごとくなるゆえに、打併、調度、いとま、ゆるくせず。
その調度に、九夏安居あり。
これ、仏仏、祖祖の頂􏿾、面目なり。(「􏿾」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
皮肉骨髄に親曾しきたれり。
仏祖の眼睛、頂􏿾を拈来して、九夏の日月とせり。
安居、一枚、すなわち、仏仏、祖祖と喚、作せるものなり。
安居の頭尾、これ、仏祖なり。
このほか、さらに、寸土なし、大地なし。
夏安居の一橛、これ、新にあらず、旧にあらず、来にあらず、去にあらず。
その量は、拳頭量なり。
その様は、巴鼻様なり。
しかあれども、
結夏のゆえに、きたる、虚空、塞破せり、あまれる十方あらず。
解夏のゆえに、さる、帀地を裂破す、のこれる寸土あらず。
このゆえに、
結夏の公案、現成する、きたるに相似なり。
解夏の羅籠、打破する、さるに相似なり。
かくのごとくなれども、親曾の面面、ともに、結、解を罣礙するのみなり。
万里、無、寸草なり。
還、吾、九十日飯銭、来なり。

黄檗死心和尚、云、
山僧、行脚、三十余年。
以、九十日、為、一夏。

増一日、也、不得。
減一日、也、不得。

しかあれば、三十余年の行脚眼、わずかに見徹するところ、九十日、為、一夏安居のみなり。
たとえ増一日せんとす、というとも、九十日、かえりきたりて競頭参すべし。
たとえ減一日せんとす、というとも、九十日、かえりきたりて競頭参するものなり。
さらに、九十日の窟籠を跳脱すべからず。
この跳脱は、九十日の窟籠を手脚として□跳するのみなり。(「□」は「𧾷孛」という一文字の漢字です。)
九十日、為、一夏は、我箇裏の調度なりといえども、仏祖の、みずから、はじめて、なせるにあらざるがゆえに、仏仏、祖祖、嫡嫡、正稟して今日にいたれり。
しかあれば、夏安居にあうは、諸仏、諸祖にあうなり。
夏安居にあうは、見仏見祖なり。
夏安居、ひさしく、作仏祖せるなり。
この九十日、為、一夏、その時、量、たとえ頂□量なりといえども、一劫、十劫のみにあらず、百、千、無量劫のみにあらざるなり。(「□」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
余時は、百、千、無量、等の劫波に使得せらる。
九十日は、百、千、無量、等の劫波を使得するゆえに、無量劫波、たとえ九十日にあうて見仏すとも、九十日、かならずしも劫波にかかわれず。
しかあれば、参学すべし。
九十日、為、一夏は、眼睛量なるのみなり。
身心、安居は、それ、また、かくのごとし。
夏安居の活鱍鱍地を使得し、夏安居の活鱍鱍地を跳脱せる、来所あり、職由ありといえども、他方、他時より、きたり、うつれるにあらず、当所、当時より起興するにあらず。
来所を把定すれば、九十日、たちまちに、きたる。
職由を摸索すれば、九十日、たちまちに、きたる。
凡、聖、これを窟宅とせり、命根とせりといえども、はるかに凡、聖の境界を超越せり。
思量分別のおよぶところにあらず。
不思量分別のおよぶところにあらず。
思量、不思量の不及のみにあらず。

世尊、
在、摩竭陀国。
為、衆、説法。
是時、将、欲、白、夏、乃、謂、阿難、曰、

諸大弟子、人、天、四衆、我、常、説法、不、生、敬仰。
我、今、入、因沙臼室中、坐、夏九旬。
忽、有、人、来、問法之時、
汝、代、為、我、説、
一切法、不生。
一切法、不滅。

言、訖、掩、室、而、坐。

しかありしより、このかた、すでに、二千一百九十四年(、当日本寛元三年乙巳歳)なり。

堂奥にいらざる児孫、おおく、摩竭、掩、室を無言の証拠とせり。
いま、邪党、おもわくは、
掩、室、坐、夏の仏意は、それ、言説をもちいるは、ことごとく実にあらず、善巧方便なり。
至理は、言語道断し、心行所滅なり。
このゆえに、
無言、無心は、至理にかなうべし。
有言、有念は、非、理なり。
このゆえに、掩、室、坐、夏九旬のあいだ、人跡を断絶せるなり。
とのみ、いい、いうなり。

これらのともがらのいうところ、おおきに世尊の仏意に孤負せり。
いわゆる、もし言語道断、心行所滅を論ぜば、一切の治生産業、みな、言語道断し、心行所滅なり。
言語道断とは、一切の言語をいう。
心行所滅とは、一切の心行をいう。
いわんや、この因縁、もとより、無言をとうとびんためには、あらず。
通身、ひとえに泥水し入草して、説法、度、人、いまだ、のがれず、転法拯物、いまだ、のがれざるのみなり。

もし児孫と称するともがら、坐、夏九旬を無言説なりといわば、還、吾、九旬坐夏、来というべし。
阿難に勅令して、いわく、
汝、代、為、我、説、
一切法、不生。
一切法、不滅。
と代説せしむ。
この仏儀、いたずらに、すごすべからず。
おおよそ、掩、室、坐、夏、いかでか無言不説なりとせん？
しばらく、もし阿難として当時、すなわち、世尊に白すべし、
一切法、不生。
一切法、不滅。
作麼生、説？
縦、説、恁麼、要、作、什麼？

かくのごとく白して世尊の道を聴取すべし。
おおよそ、而今の一段の仏儀、これ、説法、転法の第一義諦、第一無諦なり。
さらに、無言説の証拠とすべからず。
もし、これを無言説とせば、可憐、三尺、龍泉剣、徒、掛、陶家、壁上、梭ならん。
しかあれば、すなわち、九旬坐夏は、古転法輪なり、古仏祖なり。
而今の因縁のなかに、時、将、欲、白、夏とあり。
しるべし。
のがれず、おこなわるる、九旬、坐、夏安居なり。
これをのがるるは、外道なり。
おおよそ、世尊、在世には、あるいは、忉利天にして九旬安居し、あるいは、耆闍窟山、静室中にして、五百比丘ともに、安居す。
五天竺国のあいだ、ところを論ぜず、ときいたれば、白、夏安居し、九旬安居おこなわれき。
いま、現在せる仏祖、もっとも一大事として、おこなわるる、ところなり。
これ、修、証の無上道なり。
梵網経中に、冬安居あれども、その法、つたわれず。
九夏安居の法のみ、つたわれり。
正伝、まのあたり、五十一世なり。

清規、云、

行脚人、欲、就、所所、結夏、須、於、半月前、掛搭。
所貴、茶湯、人事、不倉卒。

いわゆる、半月前とは、三月下旬をいう。
しかあれば、三月の内に、きたり、掛搭すべきなり。
すでに、四月一日よりは、比丘僧、ありきせず。
諸方の接待、および、諸寺の旦過、みな、門を鎖せり。
しかあれば、四月一日よりは、雲衲、みな、寺院に安居せり、庵裏に掛搭せり。
あるいは、白衣舎に、安居せる。
先例なり。
これ、仏祖の儀なり。
慕古し、修行すべし。
拳頭、鼻孔、みな、面面に、寺院をしめて、安居のところに掛搭せり。

しかあるを、魔党、いわく、
大乗の見解、それ、要枢なるべし。
夏安居は、声聞の行儀なり。
あながちに、修習すべからず。

かくのごとくいう、ともがらは、かつて仏法を見聞せざるなり。

阿耨多羅三藐三菩提、これ、九旬安居坐夏なり。
たとえ大乗、小乗の至極ありとも、九旬安居の枝、葉、華、果なり。

四月三日の粥罷より、はじめて、ことをおこなうといえども、堂司、あらかじめ四月一日より、戒臘の榜を理会す。
すでに、四月三日の粥罷に、戒臘牌を衆寮前にかく。
いわゆる、前門の下間の窓外にかく。
寮窓、みな、連子なり。
粥罷に、これをかけ、放参鐘ののち、これをおさむ。
三日より五日にいたるまで、これをかく。
おさむる時節、かくる時節、おなじ。
かの榜、かく式あり。
知事、頭首によらず、戒臘のままに、かくなり。
諸方にして頭首、知事をへたらんは、おのおの首座、監寺とかくなり。

数職をつとめたらんなかには、そのうちに、つとめて、おおきならん職をかくべし。
かつて住持をへたらんは、某甲西堂とかく。
小院の住持をつとめたりといえども、雲水にしられざるは、しばしば、これをかくして称せず。
もし師の会裏にしては、西堂なるもの、西堂の儀なし。
某甲上座とかく例もあり。
おおくは、衣鉢侍者寮に歇息する。勝躅なり。
さらに、衣鉢侍者に充し、あるいは、焼香侍者に充する。旧例なり。
いわんや、その余の職、いずれも師、命にしたがうなり。
他人の弟子の、きたれるが、小院の住持をつとめたるといえども、おおきなる寺院にては、なお、首座、書記、都寺、監寺、等に請するは、依例なり、芳躅なり。
小院の小職をつとめたるを称するをば、叢林、わらうなり。
よき人は、住持をへたる、なお、小院をば、かくして称せざるなり。
榜式、かくのごとし。

某国 某州 某山 某寺 今夏 結夏 海衆 戒臘 如後
陳如尊者
堂頭和尚

建保元戒
某甲上座　某甲蔵主　某甲上座　某甲上座

建保二戒
某甲西堂　某甲維那　某甲首座　某甲知客　某甲上座　某甲浴主

建暦元戒
某甲直歳　某甲侍者　某甲首座　某甲首座　某甲化主　某甲上座　某甲典座
某甲堂主

建暦三戒
某甲書記　某甲上座　某甲西堂　某甲首座　某甲上座　某甲上座

右 謹具 呈 若 有 誤錯 各 請 指揮 謹状
某年 四月三日 堂司比丘 某甲 謹状

かくのごとく、かく。
しろきかみに、かく。
真書にかく。
草書、隷書、等をもちいず。
かくるには、布線の、ふとさ両米粒許なるをその紙、榜頭につけて、かくるなり。
たとえば、簾額の、すぐ、ならんがごとし。
四月五日の放参罷に、おさめおわりぬ。
四月八日は、仏生会なり。
四月十三日の斎罷に、衆寮の僧衆、すなわち、本寮につきて煎点、諷経す。
寮主、ことをおこなう。
点湯、焼香、みな、寮主、これをつとむ。
寮主は、衆寮の堂奥に、その位を安排せり。
寮首座は、寮の聖僧の左辺に安排せり。
しかあれども、寮主、いでて焼香、行事するなり。
首座、知事、等、この諷経におもむかず。
ただ本寮の僧衆のみ、おこなうなり。
維那、あらかじめ一枚の戒臘牌を修理して十五日の粥罷に僧堂前の東壁にかく。
前架のうえにあたりて、かく。
正面のつぎの、みなみの間なり。

清規、云、
堂司、預、設、戒臘牌、香、華、供養。
(在、僧堂前、設、之。)

四月十四日の斎後に念誦牌を僧堂前にかく。
諸堂、おなじく、念誦牌をかく。
至晩に、知事、あらかじめ土地堂に香、華をもうく。
額のまえに、もうくるなり。
集衆、念誦す。
念誦の法は、大衆、集定ののち、住持人、まず、焼香す。
つぎに、知事、頭首、焼香す。
浴仏のときの、焼香の法のごとし。
つぎに、維那、くらいより正面にいでて、まず、住持人を問訊して、つぎに、土地堂にむかうて問訊して、おもてをきたにして、土地堂にむかうて念誦す。

詞、云、

竊、
以、薫風、扇、野。
炎帝、司、方。
当、法王、禁足之辰。
是、釈子、護生之日。
躬、裒、大衆、粛、詣、霊祠、誦持、万徳、洪名、回向、合堂、真宰。
所祈、加護、得、遂、安居。
仰、憑、尊衆、
念、

清浄 法身 毘盧遮那仏。(金打。)
円満 報身 盧遮那仏。(金打。)
千百億 化身 釈迦牟尼仏。(金打。)
当来 下生 弥勒尊仏。(金打。)
十方 三世 一切 諸仏。(金打。)
大聖 文殊師利菩薩。(金打。)
大聖 普賢菩薩。(金打。)
大悲 観世音菩薩。(金打。)
諸尊 菩薩摩訶薩。(金打。)
摩訶 般若 波羅蜜。(金打。)

上来、念誦、功徳、並、用、回向、護持、正法、土地、龍神。

伏、願、
神光、協賛、発揮、有利之勲。
梵楽、興隆、亦、錫(たまわる)、無私之慶。

再、
憑、尊衆、
念、

十方 三世 一切 諸仏。
諸尊 菩薩摩訶薩。
摩訶 般若 波羅蜜。

ときに、鼓、響すれば、大衆、すなわち、雲堂の点湯の座に赴す。
点湯は、庫司の所弁なり。
大衆、赴堂し、次第、巡堂し、被位につきて、正面、而、坐す。
知事一人、行、法事す。
いわゆる、焼香、等をつとむるなり。

清規、云、
本、合、監院、行事。
有、改、維那、代、之。

すべからく念誦以前に写、榜して首座に呈す。
知事、搭、袈裟、帯、坐具して首座に相見するとき、あるいは、両展三拝しおわりて、榜を首座に呈す。
首座、答拝す。
知事の拝と、おなじかるべし。
榜は、箱に袱子をしきて、行者にもたせゆく。
首座、知事をおくり、むかう。

榜式。

庫司 今晩 就 雲堂 煎点 特為 首座 大衆
聊 表 結制之儀
伏 冀
衆慈 同 垂
光降
寛元三年 四月十四日 庫司 比丘 某甲 等 謹 白

知事の第一の名字をかくなり。
榜を首座に呈してのち、行者をして雲堂前に貼せしむ。
堂前の下間に貼するなり。
前門の南頬の外面に榜を貼いる板あり。
このいた、ぬれり。
殼漏子あり。
殼漏子は、榜の初に、ならべて、竹釘にて、うちつけたり。
しかあれば、殼漏子も、かたわらに押貼せり。
この榜は、如法につくれり。

五分許の字にかく。おおきに、かかず。
殻漏子の表書は、かくのごとく、かく。

状 請 首座 大衆 庫司 比丘 某甲 等 謹 封

煎点おわりぬれば、榜をおさむ。
十五日の粥前に、知事、頭首、小師、法眷、まず、方丈内にもうでて人事す。
住持人もし隔宿より免人事せば、さらに方丈にもうづべからず。
免人事というは、十四日より、住持人、あるいは、頌子、あるいは、法語をかけるを方丈門の東頬に貼せり。
あるいは、雲堂前にも、貼す。
十五日の陞座罷、住持人、法座より、おりて、階のまえに、たつ。
拝席の北頭をふみて、面、南して、たつ。
知事、近、前して両展、三拝す。
一展、云、
此際、安居、禁足、獲、奉、巾瓶。
惟(これ)、仗、和尚法力、資持、願、無難事。

又、一展、叙、寒暄、触礼三拝。
叙、寒暄、云、者、展、坐具、三拝、了、収、坐具、進、云、
即、辰、孟夏、漸、熱。
法王、結制之辰。
伏、惟、
堂頭和尚、法候、動止、万福。
下情、不勝、感激之至。

かくのごとくして、その次に、触礼三拝。
ことば、なし。住持人、みな、答拝す。
住持人、念、
此、者、多幸、得、同、安居。
亦、冀、
某(首座、監寺)、人等、法力、相資、無諸難事。

首座、大衆、同、此式、也。
このとき、首座、大衆、知事、等、みな、面、北して、礼拝するなり。
住持人ひとり、面、南にして、法座の階前に立せり。

住持人の坐具は、拝席のうえに展ずるなり。
つぎに、首座、大衆、於、住持人前、両展三拝。
このとき、小師、侍者、法眷、沙弥、在、一辺、立。
未得、与、大衆、雷同、人事。
いわゆる、一辺にありて、たつ、とは、法堂の東壁のかたわらにありて、たつなり。
もし東壁辺に施主の垂、箔のことあらば、法鼓のほとりに、たつべし。
また、西壁辺にも立すべきなり。
大衆、礼拝おわりて、知事、まず、庫堂にかえりて主位に立す。
つぎに、首座、すなわち、大衆を領して庫司にいたりて人事す。
いわゆる、知事と、触礼三拝するなり。
このとき、小師、侍者、法眷、等は、法堂上にて住持人を礼拝す。
法眷は、両展三拝すべし。
住持人の答拝あり。
小師、侍者、おのおの、九拝す。
答拝なし。
沙弥、九拝、あるいは、十二拝なり。
住持人、合掌して、うくるのみなり。
つぎに、首座、僧堂前にいたりて、上間の知事牀のみなみのはしにあたりて、雲堂の正面にあたりて、面、南にして、大衆にむかうて、たつ。
大衆、面、北して、首座にむかうて、触礼三拝す。
首座、大衆をひきて入堂し、戒臘によりて巡堂、立定す。
知事、入堂し、聖僧前にて大展礼三拝して、おく。
つぎに、首座前にて触礼三拝す。
大衆、答拝す。
知事、巡堂、一帀して、いでて、くらいによりて、叉手して、たつ。
住持人、入堂、聖僧前にして焼香、大展三拝、起。
このときは、小師、於、聖僧、後、避、立。
法眷、随、大衆。
つぎに、住持人、於、首座、触礼三拝。
いわく、住持人、ただ、くらいによりて、たち、面、南にて、触礼す。
首座、大衆、答拝、さきのごとし。
住持人、巡堂して、いづ。
首座、前門の南頬より、いでて、住持人をおくる。
住持人、出堂ののち、首座以下、対、礼三拝して、いわく、

此際、幸、同、安居。
恐、三業、不善。
且、望、慈悲。

この拝は、展坐具三拝なり。
かくのごとくして、首座、書記、蔵主、等、おのおの、その寮に、かえる。
もし、それ、衆寮僧は、寮主、寮首座已下、おのおの、触礼三拝す。
致、語は、堂中の法に、おなじ。
住持人、こののち、庫堂より、はじめて、巡寮す。
次第に大衆、相随、送、至、方丈。
大衆、乃、退。
いわゆる、住持人、まず、庫堂にいたる。
知事と人事しおわりて、住持人、いでて、巡寮すれば、知事、しりえに、あゆめり。
知事のつぎに、東廊のほとりにある人、あゆめり。
住持人、このとき、延寿院に、いらず。
東廊より西におりて、山門をとおりて、巡寮すれば、山門の辺の寮にある人、あゆみ、つらなる。
みなみより西の廊下、および、諸寮に、めぐる。
このとき、西をゆくときは、北にむかう。
このときより、安老、勤旧、前資、頤堂、単寮のともがら、浄頭、等、あゆみ、つらなれり。
維那、首座、等、あゆみ、つらなる。
つぎに、衆寮の僧衆、あゆみ、つらなる。
巡寮は、寮の便宜によりて、あゆみ、くわわる。
これを大衆相随送とはいう。
かくのごとくして、方丈の西階より、のぼりて、住持人は、方丈の正面のもやの住持人のくらいによりて、面、南にて、叉手して、たつ。
大衆は、知事以下、みな、面、北にて、住持人を問訊す。
この問訊、ことに、ふかかるべし。
住持人、答、問訊あり。
大衆、退す。

先師は、方丈に大衆をひかず、法堂にいたりて、法座の階前にして、面、南、叉手して、たつ。
大衆、問訊して退す。

これ、古往の儀なり。

しこうしてのち、衆僧、おのおの、こころにしたがいて人事す。
人事とは、あい礼拝するなり。
たとえば、おなじ郷間のともがら、あるいは、照堂、あるいは、廊下の便宜のところにして、幾十人も、あい拝して、同、安居の理致を賀す。
しかあれども、致、語は、堂中の法に、なずらう。
人にしたがいて、今案のことばも、存す。
あるいは、小師をひきいたる本師あり。
これ、小師、かならず本師を拝すべし。
九拝をもちいる。
法眷の、住持人を拝する、両展三拝なり。
あるいは、ただ大展三拝す。
法眷の、ともに、衆にあるは、拝、おなじかるべし。
師叔、師伯、また、かならず、拝あり。
隣単、隣肩、みな、拝す。
相識、道旧、ともに、拝あり。
寮、堂にあるともがらと、首座、書記、蔵主、知客、浴主、等と、到、寮、拝、賀すべし。
単寮にあるともがらと、都寺、監寺、維那、典座、直歳、西堂、尼師、道士、等とも、到、寮、到、位して拝、賀すべし。
到、寮せんとするに、人、しげくして、入寮門に、ひまをえざれば、榜をかきて、その寮門に、おす。
その榜は、ひろさ一寸余、ながさ二寸ばかりなる白紙に、かくなり。
かく式は、

某寮 某甲
拝　賀

又の式、

巣雲 懐昭 等
拝　賀

又の式、

某甲

礼　賀

又の式、

某甲
拝　賀

又の式、

某甲
礼　拝

かく式、おおけれど、大旨、かくのごとし。
しかあれば、門側には、この榜、あまた、みゆるなり。
門側には左辺に、おさず。
門の右に、おすなり。
この榜は、斎罷に、本寮主、おさめ、とる。
今日は、大小、諸堂、諸寮、みな、門簾をあげたり。
堂頭、庫司、首座、次第に煎点、ということ、あり。
しかあれども、遠島、深山のあいだには、省略すべし。
ただ、これ、礼数なり。
退院の長老、および、立僧の首座、おのおの、本寮につきて、知事、頭首のために、特、為、煎点するなり。
かくのごとく、結夏してより、功夫、弁道するなり。
衆行を弁肯せりといえども、いまだ夏安居せざるは、仏祖の児孫にあらず。
また、仏祖にあらず。
孤独園、霊鷲山、みな、安居によりて現成せり。
安居の道場、これ、仏祖の心印なり、諸仏の住世なり。

解夏、七月十三日、衆寮、煎点、諷経。
また、その月の寮主、これをつとむ。
十四日、晩の念誦。
来日の陞堂。
人事、巡寮、煎点、並、同、結夏。
唯、榜状詞語、不同、而、已。
庫司、湯榜、云、
庫司、今晩、就、雲堂、煎点、特、為、首座、大衆。

聊、表、解制之儀。
伏、冀、
衆慈、同、垂。
光降。
庫司、比丘、某甲、謹、白。

土地堂、念誦、詞、云、
切、
以、金風、扇、野。
白帝、司、方。
当、覚皇、解制之時。
是、法歳、周円之日。
九旬、無難。
一衆、咸、安。
誦持、諸仏、洪名、仰、報、合堂、真宰。
仰、憑、大衆、念。

これよりのちは、結夏の念誦に、おなじ。
陞堂罷、知事、等、謝詞に、いわく、
伏、喜、
法歳、周円、無諸難事。
此、蓋、和尚法力、蔭庇。
下情、無任、感激之至。

住持人、謝詞、いわく、
此、者、法歳、周円。
皆、謝、某(首座、監寺)、人等、法力、相資。
不任、感激之至。

堂中、首座已下、寮中、寮主已下、謝詞に、いわく、
九夏、相依。
三業、不善、悩乱、大衆。
伏、望、慈悲。

知事、頭首、告、云、
衆中、兄弟、行脚、須、候、茶湯罷、方、可、随意。

(如、有、緊急縁事、不在、此限。)

この儀は、これ、威音、空王の前際後際よりも、頂𩕳量なり。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
仏祖の、おもくすること、ただ、これのみなり。
外道、天魔の、いまだ惑乱せざる、ただ、これのみなり。
三国のあいだ、仏祖の児孫たるもの、いまだ、ひとりも、これをおこなわざる、なし。
外道は、いまだ、まなびず。
仏祖、一大事の本懐なるがゆえに、得道のあしたより涅槃のゆうべにいたるまで開演するところ、ただ安居の宗旨のみなり。
西天の五部の僧衆、ことなれども、おなじく、九夏安居を護持して、かならず、修、証す。
震旦の九宗の僧衆、ひとりも破、夏せず。
生前に、すべて、九夏安居せざらんをば、仏弟子、比丘僧と称すべからず。
ただ因地に修習するのみにあらず、果位の修、証なり。
大覚世尊、すでに一代のあいだ、一夏も闕如なく修、証しましませり。
しるべし、果上の仏、証なり、ということを。
しかあるを、九夏安居は修、証せざれども、われは仏祖の児孫なるべし、というは、わらうべし。
わらうに、たえざる、おろかなるものなり。
かくのごとく、いわんともがらの、ことばをば、きくべからず。
共語すべからず。
同坐すべからず。
ひとつ、みちを、あゆむべからず。
仏法には、梵壇の法をもって悪人を治するがゆえに。
ただ、まさに、九夏安居、これ、仏祖、と会取すべし、保任すべし。
その正伝しきたれること、七仏より摩訶迦葉におよぶ。
西天二十八祖、嫡嫡、正伝せり。
第二十八祖、みずから震旦にいでて、二祖、太祖、正宗普覚大師をして正伝せしむ。
二祖より、このかた、嫡嫡、正伝して、而今に正伝せり。
震旦にいりて、まのあたり、仏祖の会下にして正伝し、日本国に正伝す。
すでに正伝せる会にして、九旬坐夏しつれば、すでに夏、法を正伝するなり。
この人と共住して安居せんは、まことの安居なるべし。

まさしく、仏、在世の安居より嫡嫡、面授しきたれるがゆえに、仏面祖面、まのあたり、正伝しきたれり。
仏祖身心したしく証契しきたれり。
かるがゆえに、いう、
安居をみるは、仏をみるなり。
安居を証するは、仏を証するなり。
安居を行ずるは、仏を行ずるなり。
安居をきくは、仏をきくなり。
安居をならうは、仏を学するなり。
おおよそ、九旬安居を、諸仏、諸祖、いまだ違越しましまさざる法なり。
しかあれば、すなわち、人王、釈王、梵王、等、比丘僧となりて、たとえ一夏なりというとも、安居すべし。
それ、見仏ならん。
人衆、天衆、龍衆、たとえ一九旬なりとも、比丘、比丘尼となりて、安居すべし。
すなわち、見仏ならん。
仏祖の会に、まじわりて、九旬安居しきたれるは、見仏来なり。
われら、さいわいに、いま、露命のおちざる、さきに、あるいは、天上にもあれ、あるいは、人間にもあれ、すでに一夏安居するは、仏祖の皮肉骨髄をもって、みずからが皮肉骨髄に換却せられぬるものなり。
仏祖、きたりて、われらを安居するがゆえに、面面、人人の、安居を行ずるは、安居の面面、人人を行ずるなり。
恁麼なるがゆえに、安居あるを千仏万祖というのみなり。
ゆえ、いかん？　となれば、
安居、これ、
仏祖の皮肉骨髄、心識、身体なり。
頂⊠、眼睛なり。(「⊠」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
拳頭、鼻孔なり。
円相、仏性なり。
払子、拄杖なり。
竹篦、蒲団なり。
安居は、あたらしきをつくりいだすにあらざれども、ふるきをさらにもちいるには、あらざるなり。

世尊、告、円覚菩薩、及、諸大衆、一切衆生、言、
若、経、夏首、三月安居、当、為、清浄、菩薩、止住。

心、離、声、聞。
不、仮、徒、衆。
至、安居日、即、於、仏前、作、如是言。

我、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、某、
踞、菩薩乗、
修、寂滅、行、
同、入、清浄実相、住持。
以、大円覚、為、我伽藍、身心、安居。
平等性智、涅槃自性、無、繋属、故。
今、我、敬、請、
不、依、声、聞、
当、与、十方如来、及、大菩薩、三月安居。
為、修、菩薩、無上、妙覚、大因縁、故、不、繋、徒、衆。

善男子、
此、名、菩薩示現安居。

しかあれば、すなわち、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、等、かならず、安居、三月にいたるごとには、十方如来、および、大菩薩とともに、無上、妙覚、大因縁を修するなり。
しるべし。
優婆塞、優婆夷も、安居すべきなり。
この安居のところは、大円覚なり。
しかあれば、すなわち、鷲峰山、孤独園、おなじく、如来の大円覚、伽藍なり。
十方如来、及、大菩薩、ともに、安居三月の修行あること、世尊のおしえを聴受すべし。

世尊、於、一所、九旬安居。

至、自恣日、文殊、倏、来、在、会。

迦葉、問、文殊、
今夏、何所、安居？

文殊、云、
今夏、在、三所、安居。

迦葉、於、是、集、衆、白椎、欲、擯、文殊。

纔、挙、犍稚、
即、見、
無量仏刹、顕現、
一一仏所、有、一一文殊、有、一一迦葉、挙、椎、欲、擯、文殊。

世尊、於、是、告、迦葉、云、
汝、今、欲、擯、阿那箇、文殊？

于、時、迦葉、茫然。

圜悟禅師、拈古、云、
鐘、不撃、不響。
鼓、不打、不鳴。
迦葉、既、把定、要津。
文殊、乃、十方、坐断。
当時、好、一場、仏事。
可、惜、放過一著。
待、釈迦老師、道、欲、擯、阿那箇、文殊？
便、与、撃、一椎、
看、佗(かれ)、作、什麼、合殺。

圜悟禅師、頌古、云、
大象、不遊、兎径。
燕、雀、安、知、鴻鵠？
拠、令、宛、若、成、風。
破、的、渾、如、囓、鏃。
遍界、是、文殊。
遍界、是、迦葉。
相対、各、厳然。
挙、椎、何所、罰？

好、一箚。
金色頭陀、曾、落、節。

しかあれば、すなわち、世尊、一所、安居、文殊、三所、安居なりといえども、いまだ不安居あらず。
もし不安居は、仏、及、菩薩にあらず。
仏祖の児孫なるもの、安居せざるは、なし。
安居せんは、仏祖の児孫、としるべし。
安居するは、仏祖の身心なり、仏祖の眼睛なり、仏祖の命根なり。
安居せざらんは、仏祖の児孫にあらず。仏祖にあらざるなり。
いま、泥、木、素金、七宝の仏、菩薩、みな、ともに、安居三月の夏坐おこなわるべし。
これ、すなわち、住持、仏法僧宝の故実なり、仏訓なり。
おおよそ、仏祖の屋裏人、さだめて、坐、夏安居三月、つとむべし。

正法眼蔵　安居
寛元三年乙巳、夏安居、六月十三日、在、越宇、大仏寺、示、衆。

# 他心通

西京、光宅寺、慧忠国師、者、越州、諸暨人、也。
姓、冉、氏。
自受、心印、居、南陽、白崖山、党子谷、四十余祀、不、下山門。
道行、聞、于、帝里。

唐、粛宗、上元二年、勅中使、孫朝進、賚、詔、徵、赴京。
待、以、師礼。
勅、居、千福寺、西禅院。

及、代宗、臨御、復、迎止、光宅精藍。

十有六載、随、機、説法。

時、有、西天、大耳三蔵。
到、京、云、
得、他心慧眼。

帝、勅、令、与、国師、試験。

三蔵、才、見、師、便、礼拝、立、于、右辺。

師、問、曰、
汝、得、他心通、耶？

対、曰、
不敢。

師、曰、
汝、道。
老僧、即、今、在、什麼所？

三蔵、云、
和尚、是、一国之師。
何、得却、去、西川、看、競渡？

師、再、問、
汝、道。
老僧、即、今、在、什麼所？

三蔵、云、
和尚、是、一国之師。
何、得却、在、天津橋上、看、弄、猢猻？

師、第三、問、
汝、道。
老僧、即、今、在、什麼所？

三蔵、良、久、罔、知、去所。

師、叱、曰、
這野狐精。
他心通、在、什麼所？

三蔵、無、対。

僧、問、趙州、曰、
大耳三蔵、第三度、不見、国師、在所。
未審。
国師、在、什麼所？

趙州、云、
在、三蔵、鼻孔上。

僧、問、玄沙、
既、在、鼻孔上。
為、什麼、不見？

玄沙、曰、
只、為、太近。

僧、問、仰山、曰、
大耳三蔵、第三度、為、什麼、不見、国師？

仰山、曰、
前両度、是、渉境心。
後、入、自受用三昧。
所以、不見。

海会、端、曰、
国師、若、在、三蔵、鼻孔上、有、什麼、難見？
殊、不知、
国師、在、三蔵、眼睛裏。

玄沙、徴、三蔵、曰、
汝、道。
前両度、還、見、麼？

雪竇、明覚、重顕禅師、曰、
敗也。
敗也。

大証国師の、大耳三蔵を試験せし因縁、ふるくより下語し道著する臭拳頭、おおしといえども、ことに五位の老拳頭あり。
しかあれども、この五位の尊宿、おのおの、諦当、甚諦当は、なきにあらず、国師の行履を覷見せざるところ、おおし。
ゆえ、いかん？　となれば、
古今の諸員、みな、おもわく、前両度は、三蔵、あやまらず、国師の在所をしれり、とおもえり。
これ、すなわち、古先の、おおきなる不是なり。
晩進、しらずは、あるべからず。
いま、五位の尊宿を疑著すること、両般あり。
一、者、いわく、国師の、三蔵を試験する本意をしらず。
二、者、いわく、国師の身心をしらず。

しばらく、国師の、三蔵を試験する本意をしらず、というは、
第一番に、国師、いわく、汝、道。老僧、即、今、在、什麼所？　という本意は、三蔵もし仏法を見聞する眼睛、ありや？　と試、問するなり。
三蔵、おのれずから仏法の他心通、ありや？　と試、問するなり。
当時もし三蔵に仏法あらば、老僧、即、今、在、什麼所？　としめされんとき、出身のみち、あるべし、親曾の便宜、あらしめん。
いわゆる、国師、道の老僧、即、今、在、什麼所？　は、作麼生、是、老僧？　と問著せんがごとし。
老僧、即、今、在、什麼所？　は、即、今、是、什麼時節？　と問著するなり。
在、什麼所？　は、這裏、是、什麼所在？　と道著するなり。
喚、什麼、作、老僧？　の道理あり。
国師、かならずしも老僧にあらず。
老僧、かならず、拳頭なり。
大耳三蔵、はるかに西天より、きたれりといえども、このこころをしらざることは、仏道を学せざるによりてなり。
いたずらに外道、二乗のみちをのみ、まなべるによりてなり。
国師、かさねて、とう、汝、道。老僧、即、今、在、什麼所？
ここに、三蔵、さらに、いたずらのことばをたてまつる。
国師、かさねて、とう、汝、道、老僧、即、今、在、什麼所？
ときに、三蔵、やや、ひさしくあれども、茫然として祗対なし。
国師、ときに三蔵を叱して、いわく、這野狐精。他心通、在、什麼所？
かくのごとく叱せらるといえども、三蔵、なお、いうことなし、祗対せず、通路なし。
しかあるを、古先、みな、おもわくは、
国師の三蔵を叱すること、
前両度は、国師の所在をしれり。
第三度のみしらず、みざるがゆえに、国師に叱せらる。
とおもう。
これ、おおきなる、あやまりなり。
国師の三蔵を叱することは、おおよそ、三蔵、はじめより仏法、也、未夢見在なるを叱するなり。
前両度は、しれりといえども、第三度をしらざる、と叱する、にあらざるなり。

おおよそ、他心通をえたり、と自称しながら、他心通をしらざることを叱するなり。
国師、まず、仏法に他心通、ありや？　と問著し試験するなり。
すでに、不敢、といいて、あり、ときこゆ。
そののち、国師、おもわく、
たとえ仏法に他心通ありといいて、他心通を仏法にあらしめば、恁麼なるべし。
道所もし挙所なくば、仏法なるべからず。
とおもえり。
三蔵、たとえ第三度、わずかに、いうところありとも、前両度のごとくあらば、道所あるにあらず、総じて叱すべきなり。
いま、国師、三度、こころみに問著することは、三蔵もし国師の問著をきくことをうるや、と、たびたび、かさねて、三番の問著、あるなり。

二、者、いわく、
国師の身心をしれる古先なし。
いわゆる、国師の身心は、三蔵法師の、たやすく見及すべきにあらず、知及すべきにあらず。
十聖三賢も、およばず。
補処、等覚の、あきらむるところにあらず。
三蔵学者の凡夫なる、いかでか国師の渾身をしらん？
この道理、かならず、一定すべし。
国師の身心は、三蔵の学者しるべし、みるべし、といわば、謗、仏法なり。
経論師と斉肩なるべしと認ずるは、狂顛の、はなはだしきなり。
他心通をえたらんともがら、国師の在所しるべし、と学することなかれ。
他心通は、西天竺国の土俗として、これを修得するともがら、ままにあり。
発菩提心によらず、大乗の正見によらず。
他心通をえたるともがら、他心通のちからにて仏法を証究せる勝躅、いまだかつて、きかざるところなり。
他心通を修得してのちにも、さらに、凡夫のごとく発心し修行せば、おのずから仏道に証入すべし。
ただ他心通のちからをもって、仏道を知見することをえば、先聖、みな、まず、他心通を修得して、そのちからをもって、仏果をしるべきなり。
しかあること、千仏万祖の出世にも、いまだあらざるなり。
すでに仏祖の道をしること、あたわざらんは、なにかはせん？
仏道に不中用なり、というべし。

他心通をえたるも、他心通をえざる凡夫も、ただ、ひとしかるべし。
仏性を保任せんことは、他心通も、凡夫も、おなじかるべきなり。
学仏のともがら、外道、二乗の五通、六通を、凡夫よりも、すぐれたり、とおもうことなかれ。
ただ道心あり仏法を学せんものは、五通、六通よりも、すぐれたるべし。
頻伽の卵にある、声、まさに、衆鳥に、すぐれたるがごとし。
いわんや、いま、西天に、他心通というは、他念通といいぬべし。
念起はいささか縁すといえども、未念は茫然なり。
わらうべし。
いかに、いわんや、心、かならずしも念にあらず。
念、かならずしも心にあらず。
心の、念ならんとき、他心通、しるべからず。
念の、心ならんとき、他心通、しるべからず。
しかあれば、すなわち、西天の五通、六通、このくにの薙草、修田にも、およぶべからず。
都、無所用なり。
かるがゆえに、震旦国より東には、先徳、みな、五通、六通をこのみ修せず。
その要、なきによりてなり。
尺璧は、なお、要なるべし。
五通、六通は、要にあらず。
尺璧、なお、宝にあらず。
寸陰、これ、要枢なり。
五、六通、だれの、寸陰をおもくせん人が、これを修習せん？
おおよそ、他心通のちから、仏智の辺際におよぶべからざる道理、よくよく決定すべし。
しかあるを、五位の尊宿、ともに、三蔵、さきの両度は、国師の所在をしれり、とおもえるは、もっとも、あやまれるなり。
国師は、仏祖なり。
三蔵は、凡夫なり。
いかでか、相見の論にも、およばん？
国師、まず、いわく、汝、道。老僧、即、今、在、什麼所？
この問、かくれたるところなし、あらわれたる道所あり。
三蔵の、しらざらんは、とがにあらず。
五位の尊宿の、きかず、みざるは、あやまりなり。
すでに、国師、いわく、老僧、即、今、在、什麼所？　とあり。

さらに、汝、道。老僧心、即、今、在、什麼所？　といわず。
老僧念、即、今、在、什麼所？　といわず。
もっとも、ききしり、みとがむべき道所なり。
しかあるを、しらず、みず、国師の道所をきかず、みず。
かるがゆえに、国師の身心をしらざるなり。
道所あるを国師とせるがゆえに。
もし道所なきは、国師なるべからざるがゆえに。
いわんや、国師の身心は、大小にあらず、自他にあらざること、しるべからず。
頂𩕳あること、鼻孔あること、わすれたるがごとし。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
国師、たとえ行李、ひまなくとも、いかでか作仏を図せん？
かるがゆえに、仏を拈じて相待すべからず。
国師、すでに仏法の身心あり。
神通、修、証をもって測度すべからず。
絶慮忘縁を挙して擬議すべからず。
商量、不商量のあたれるところに、あらざるべし。
国師は、有仏性にあらず、無仏性にあらず、虚空身にあらず。
かくのごとくの国師の身心、すべて、しらざるところなり。
いま、曹谿の会下には、青原、南嶽のほかは、わずかに大証国師、その仏祖なり。

いま、五位の尊宿、おなじく、勘破すべし。

趙州の、いわく、国師は、三蔵の鼻孔上にあるがゆえに、みず、という。
この道所、そのいいなし。
国師、なにとしてか三蔵の鼻孔上にあらん？
三蔵、いまだ鼻孔あらず。
もし三蔵に鼻孔ありとゆるさば、国師、かえりて三蔵をみるべし。
国師の、三蔵をみること、たとえ、ゆるすとも、ただ、これ、鼻孔、対、鼻孔なるべし。
三蔵、さらに国師と相見すべからず。

玄沙、いわく、只、為、太近。
まことに、太近は、さもあらばあれ、あたりには、いまだ、あたらず。
いかならんか、これ、太近？

おもいやる、
玄沙、いまだ太近をしらず、太近を参ぜず。
ゆえ、いかん？　となれば、
太近に相見なし、とのみしりて、相見の太近なることをしらず。
いうべし、仏法におきて遠之遠なり、と。
もし第三度のみを太近といわば、前両度は、太遠、在なるべし。
しばらく、玄沙に、とう、
なんじ、なにをよんでか、太近とする？
拳頭をいうか？
眼睛をいうか？
いまよりのち、太近に、みるところなし、ということなかれ。

仰山、いわく、前両度、是、渉境心。後、入、自受用三昧。所以、不見。
仰山、なんじ、東土にありながら、小釈迦のほまれを西天にほどこすといえども、いまの道取、おおきなる不是あり。
渉境心と自受用三昧と、ことなるにあらず。
かるがゆえに、渉境心と自受用との、ことなるゆえに、みず、というべからず。
しかあれば、自受用と渉境心とのゆえを立すとも、その道取、いまだ道取にあらず。
自受用三昧にいれば、他人、われをみるべからず、といわば、自受用、さらに自受用を証すべからず、修、証あるべからず。
仰山、なんじ、前両度は実に国師の所在を三蔵みる、とおもい、しれりと学せば、いまだ学仏の漢にあらず。
おおよそ、大耳三蔵は、第三度のみにあらず、前両度も、国師の所在は、しらず、みざるなり。
この道取のごとくならば、三蔵の、国師の所在をしらざるのみにあらず、仰山も、いまだ国師の所在をしらず、というべし。
しばらく、仰山に、とう、
国師、即、今、在、什麼所？
このとき、仰山、もし開口を擬せば、まさに、一喝をあたうべし。

玄沙、徴して、いわく、前両度、還、見、麼？
いま、この前両度、還、見、麼？　の一言、いうべきをいう、と、きこゆ。
玄沙、みずから自己の言句を学すべし。
この一句、よきことは、すなわち、よし。

しかあれども、ただ、これ、見、如、不見といわんがごとし。
ゆえに、是にあらず。

これをききて、
雪竇山、明覚禅師、重顕、いわく、敗也。敗也。
これ、玄沙のいうところを道とせるとき、しか、いうとも、玄沙の道は道にあらず、とせんとき、しか、いうべからず。

海会、端、いわく、国師、若、在、三蔵、鼻孔上、有、什麼、難見？　殊、不知、国師、在、三蔵、眼睛裏。
これ、また、第三度を論ずるのみなり。
前両度も、かつて、いまだ、みざることを呵すべきを呵せず。
いかでか、国師を三蔵の鼻孔上にあり、眼睛裏にある、ともしらん。
もし恁麼いわば、国師の言句、いまだきかず、というべし。
三蔵、いまだ鼻孔なし、眼睛なし。
たとえ三蔵、おのれが眼睛、鼻孔を保任せんとすとも、もし国師きたりて鼻孔、眼睛裏に、いらば、三蔵の鼻孔、眼睛、ともに、当時、裂破すべし。
すでに裂破せば、国師の窟籠にあらず。

五位の尊宿、ともに、国師をしらざるなり。
国師は、これ、一代の古仏なり、一世界の如来なり。
仏正法眼蔵あきらめ正伝せり。
木槵子眼、たしかに保任せり。
自仏に正伝し、他仏に正伝す。
釈迦牟尼仏と同参しきたれりといえども、七仏と同時、参究す。
かたわらに三世諸仏と同参しきたれり。
空王のさきに、成道せり。
空王ののちに、成道せり。
正当空王仏に、同参、成道せり。
国師、もとより娑婆世界を国土とせりといえども、娑婆、かならずしも法界のうちにあらず、尽十方界のうちにあらず。
釈迦牟尼仏の、娑婆国主なる、国師の国土をうばわず、罣礙せず。
たとえば、前後の仏祖、おのおの、そこばくの成道あれども、あいうばわず、罣礙せざるがごとし。
前後の仏祖の成道、ともに、成道に罣礙せらるるがゆえに、かくのごとし。

大耳三蔵の、国師をしらざるを証拠として、声聞、縁覚人、小乗のともがら、仏祖の辺際をしらざる道理、あきらかに決定すべし。
国師の三蔵を叱する宗旨、あきらめ学すべし。
いわゆる、たとえ国師なりとも、前両度は所在をしられ、第三度は、わずかに、しられざらんを叱せんは、その、いいなし。
三分に両分しられんは、全分をしれるなり。
かくのごとくならん、叱すべきにあらず。
たとえ叱すとも、全分の不知にあらず。
三蔵のおもわんところ。
国師の懡㦬なり。
わずかに第三度しられず、とて、叱せんには、だれが国師を信ぜん？
三蔵の前両度をしりぬるちからをもって、国師をも叱しつべし。
国師の三蔵を叱せし宗旨は、三度ながら、はじめより、すべて、国師の所在、所念、身心をしらざるゆえに、叱するなり。
かつて仏法を見聞、習学せざりけることを叱するなり。
この宗旨あるゆえに、第一度より第三度にいたるまで、おなじことばにて問著するなり。
第一番に三蔵、もうす、和尚、是、一国之師。何、得却、去、西川、看、競渡。
しか、いうに、国師、いまだ、いわず、なんじ、三蔵、まことに、老僧、所在をしれり、とゆるさず。
ただ、かさねざまに二、三度、しきりに問するのみなり。
この道理をしらず、あきらめずして、国師よりのち数百歳のあいだ、諸方の長老、みだりに下語、説、道理するなり。
前来の箇箇、いうこと、すべて、国師の本意にあらず、仏法の宗旨にかなわず。
あわれむべし、前後の老古錐、おのおの、蹉過せること。
いま、仏法のなかに、もし他心通あり、といわば、まさに、他身通あるべし。
他拳頭通あるべし。
他眼睛通あるべし。
すでに恁麼ならば、まさに、自心通あるべし、自身通あるべし。
すでに、かくのごとくならんには、自心の自拈、いまし、自心通なるべし。
かくのごとく道取、現成せん、おのれずから、心ずからの他心通ならん。
しばらく、問著すべし、
拈、他心通、也、是？

拈、自心通、也、是？
速、道。
速、道。

是、則、且、置。

汝、得、吾髓、是、他心通、也。

正法眼蔵　他心通
爾時、寛元三年乙巳、七月四日、在、越宇、大仏寺、示、衆。

# 王索仙陀婆

有句無句、
如、藤、
如、樹、
餧、驢、
餧、馬、
透、水、
透、雲。

すでに、恁麼なるゆえに、
大般涅槃経中、世尊、道、
譬、如、大王、告、諸群臣、仙陀婆、来。
仙陀婆、者、一名、四実。
一、者、塩。
二、者、器。
三、者、水。
四、者、馬。
如是四物、共同、一名。
有智之臣、善、知、此名。
若、王、洗時、索、仙陀婆、即便、奉、水。
若、王、食時、索、仙陀婆、即便、奉、塩。
若、王、食已、欲、飲漿時、索、仙陀婆、即便、奉、器。
若、王、欲、遊、索、仙陀婆、即便、奉、馬。
如是智臣、善、解、大王四種密語。

この王、索、仙陀婆、ならびに、臣、奉、仙陀婆、きたれること、ひさし。
法服と、おなじく、つたわれり。
世尊、すでに、まぬがれず、挙拈したまうゆえに、児孫、しげく挙拈せり。
疑著すらくは、世尊と同参しきたれるは、仙陀婆を履践とせり。
世尊と不同参なるは、更、買、草鞋、行脚、進、一歩、始、得。
すでに仏祖屋裏の仙陀婆、ひそかに漏泄して、大王家裏に仙陀婆あり。

大宋、慶元府、天童山、宏智古仏、上、堂、示、衆、云、
挙、

僧、問、趙州、
王、索、仙陀婆、時、如何？
趙州、曲躬、叉手。

雪竇、拈、云、
索、塩、奉、馬。

師、云、
雪竇、一百年前、作家。
趙州、百二十歳、古仏。
趙州、若、是、雪竇、不是。
雪竇、若、是、趙州、不是。
且、道、
畢竟、如何？
天童、不免、下、箇注脚。
差之毫氂、失之千里。
会、也、打、草、驚、蛇。
不会、也、焼、銭、引、鬼。
荒田、不揀、
老倶胝、只今、信、手、拈来、底。

先師古仏、上堂のとき、よのつねに、いわく、宏智、古仏。
しかあるを、宏智古仏を古仏と相見せる、ひとり先師古仏のみなり。

宏智のとき、径山の大慧禅師、宗杲という、あり。
南嶽の遠孫なるべし。
大宋一国の天下、おもわく、大慧は宏智に、ひとしかるべし。
あまりさえ、宏智よりも、その人なり、とおもえり。
この、あやまりは、大宋国内の道、俗、ともに、疎学にして、道眼、いまだ、あきらかならず、知、人の、あきらめ、なし、知、己のちから、なきによりてなり。

宏智のあぐるところ、真箇の立志あり。
趙州古仏、曲躬、叉手の道理を参学すべし。
正当恁麼時、これ、

王、索、仙陀婆なりや？　いなや？
臣、奉、仙陀婆なりや？　いなや？
雪竇の索、塩、奉、馬の宗旨を参学すべし。
いわゆる、索、塩、奉、馬、ともに、
王、索、仙陀婆なり。
臣、索、仙陀婆なり。
世尊、索、仙陀婆、迦葉、破顔微笑なり。
初祖、索、仙陀婆、四子、馬、塩、水、器を奉ず。
馬、塩、水、器の、すなわち、索、仙陀婆なるとき、奉、馬、奉、水する関棙子、学すべし。

南泉、一日、見、鄧、隠峰、来、遂、指、浄瓶、云、
浄瓶、即、境。
瓶中、有、水。
不得、動著、境、与、老僧、将、水、来。
峰、遂、将、瓶水、向、南泉、面前、瀉。
泉、即、休。

すでに、これ、南泉、索、水、徹底、海枯。
隠峰、奉、器、瓶、漏、傾、湫。
しかも、かくのごとくなりといえども、境中、有、水。水中、有、境。を参学すべし。
動、水、也？　未？
動、境、也？　未？

香厳、襲燈大師、因、僧、問、
如何、是、王、索、仙陀婆？
厳、云、
過、這辺、来。
僧、過、去。
厳、云、
鈍置、殺人。

しばらく、とう、
香厳、道底の過、這辺、来、これ、索、仙陀婆なりや？　奉、仙陀婆なりや？

試、請、道、看。
ちなみに、僧、過、這辺、去せる、香厳の索底なりや？　香厳の奉底なりや？　香厳の本期なりや？
もし本期にあらずば、鈍置、殺人というべからず。
もし本期ならば、鈍置、殺人なるべからず。
香厳、一期の尽力、道底なりといえども、いまだ喪身失命をまぬがれず。
たとえば、これ、敗軍之将、さらに武勇をかたる。
おおよそ、説、黄、道、黒、頂、眼睛、おのれずから仙陀婆の索、奉、審審細細なり。（「」は「寧頁」という一文字の漢字です。）
拈、拄杖、挙、払子、だれが、しらざらん？　といいぬべし。
しかあれども、膠柱調絃するともがらの分上にあらず。
このともがら、膠柱調絃をしらざるがゆえに、分上にあらざるなり。

世尊、一日、陞座。

文殊、白椎、曰、
諦観、法王、法、
法王、法、如是。

世尊、下座。

雪竇山、明覚禅師、重頸、云、
列聖叢中、作者、知、
法王、法令、不如欺。
衆中、若、有、仙陀客、何必、文殊、下、一椎。

しかあれば、雪竇、道は、一椎もし渾身、無孔ならんがごとくは、下了、未下、ともに、脱落、無孔ならん。
もし、かくのごとくならんは、一椎、すなわち、仙陀婆なり。
すでに恁麼人ならん、これ、列聖一叢、仙陀客なり。
このゆえに、法王、法、如是なり。
使得、十二時、これ、索、仙陀婆なり。
被、十二時、使、これ、索、仙陀婆なり。
索、拳頭、奉、拳頭すべし。
索、払子、奉、払子すべし。

しかあれども、いま、大宋国の諸山にある長老と称するともがら、仙陀婆、すべて、夢也未見在なり。
苦哉。
苦哉。
祖道、陵夷なり。
苦学おこたらざれ。
仏祖の命脈、まさに、嗣続すべし。
たとえば、如何、是、仏？　というがごとき、即心是仏と道取する、その宗旨、いかん？
これ、仙陀婆にあらざらんや？
即心是仏というは、だれ、というぞ？　と審細に参究すべし。
だれが、しらん、仙陀婆の築著磕著なることを？

正法眼蔵　王索仙陀婆
爾時、寛元三年、十月二十三日、在、越州、大仏寺、示、衆。

# 示庫院文

寛元四年、八月六日、示、衆、云、
斎僧之法、以、敬、為、宗。
はるかに、西天竺の法を正伝し、ちかくは震旦国の法を正伝するに、如来、滅度ののち、あるいは、諸天の天供を仏、ならびに、僧に奉献し、あるいは、国王の王膳を仏、ならびに、僧に供養したてまつりき。
そのほか、長者、居士のいえより、たてまつり、毘闍、首陀のいえより、たてまつるも、ありき。
かくのごとくの供養、ともに、敬重するところ、ねんごろなり。
よく、天上、人間のなかに、極重の敬礼をもちい、至極の尊言をして、うやまいたてまつりて、飯饌、等の供養のそなえを造作するなり。
深意あり。
いま、遠方の深山なりとも、寺院の香積局、その礼儀、言語、したしく正伝すべきなり。
これ、天上、人間の仏法を習学するなり。
いわゆる、
粥をば、御粥、と、もうすべし。朝粥、とも、もうすべし。
粥、と、もうすべからず。
斎をば、御斎、と、もうすべし。斎時とも、もうすべし。
斎、と、もうすべからず。
よね(米)、しろめまいらせよ、と、もうすべし。
よね、つけ、と、いうべからず。
よね、あらいまいらするをば、浄米しまいらせよ、と、もうすべし。
よね、かせ、と、もうすべからず。
御菜の御料のなにもの、えりまいらせよ、と、もうすべし。
菜、えれ、と、もうすべからず。
御汁のもの、しまいらせよ、と、もうすべし。
汁、によ、と、もうすべからず。
御羹しまいらせよ、と、もうすべし。
羹、せよ、と、もうすべからず。
御斎、御粥は、うませさせたまいたる、と、もうすべし。
斎、粥、いれたてまつらん調度、みな、かくのごとく、うやまうべし。
不敬は、かえりて殃過をまねく。功徳をうること、なきなり。

斎、粥をととのえまいらするとき、人の息にて、米、菜、および、いずれのものをも、ふくべからず。
たとえ、かわきたるものなりとも、綴袖に触することなかれ。
頭、顔に触たる手をいまだあらわずして、斎、粥の器、および、斎、粥に手ふるることなかれ。
よねをえりまいらするより、乃至、飯、羹に、つくりまいらする経営のあいだ、身のかゆきところ、かきては、かならず、その手をあらうべし。
斎、粥、ととのえまいらするところにては、仏経の文、および、祖師の語を諷誦すべし。世間の語、雑穢の話、いうべからず。
おおよそ、米、菜、塩、醤、等の、いろいろのもの、まします、と、もうすべし。
米あり。菜あり。と、もうすべからず。
斎、粥のあらんところをすぎんには、僧、行者は、問訊したてまつるべし。
零(こぼした)菜、零米、等ありとも、斎、粥ののち使用すべし。
斎、粥、おわらざらんほど、おかすべからず。
斎、粥、ととのえまいらする調度、ねんごろに護惜すべし。他事に、もちいるべからず。
在家より、きたれらん、ともがらの、いまだ手をきよめざらんには、手をふれさすべからず。
在家より、きたれらん菜、果、等、いまだ、きよめずは、洒水して行、香し行、火してのちに、三宝、衆僧にたてまつるべし。
現在、大宋国の諸山、諸寺には、もし在家より饅頭、乳餅、蒸餅、等きたらんは、かさねて、むしまいらせて、衆僧にたてまつる。
これ、きよむるなり。
いまだ、むさざれば、たてまつらざるなり。
これ、おおかるなかに、すこしばかりなり。
この大旨をえて、庫院、香積、これを行ずべし。
万事、非儀なることなかれ。
右、条条、
仏祖之命脈、衲僧之眼睛、也。
外道、未、知。
天魔、不堪。
唯有仏子、乃、能、伝、之。
庫院之知事、明察、莫、失、焉。

開闢沙門、道元、示。

永平寺、今、告、知事、
自今已後、若、過午後、檀那、供、飯、留、待、翌日。
如、其麺、餅、果子、諸般、粥、等。
雖、晩、猶、行、乃、仏祖会下、薬石、也。
況、大宋国内、有道之勝躅、也。
如来、曾、許、雪山、僧裏服衣。
当山、亦、許、雪時之薬石、矣。

開闢永平寺、希玄、印。

# 出家

禅苑清規、云、
三世諸仏、皆、曰、出家、成道。
西天二十八祖、唐土六祖、伝、仏心印、尽、是、沙門。
蓋、以、厳浄、毘尼、方、能、洪範、三界。
然、則、参禅、問道、戒律、為、先。
既、非、離過、防非、何、以、成仏作祖？
受戒之法、応、備、三衣、鉢具、並、新浄衣物。
如、無、新衣、浣染、令、浄。
入壇、受戒、不得、借、衣鉢。
一心専注、慎、勿、異縁。
像、仏形儀、具、仏戒律、得、仏受用。此、非、小事。
豈、可、軽心？
若、借、衣鉢、雖、登壇、受戒、並、不得、戒。
若、不曾、受、
一生、為、無戒之人。
濫、廁(まじる)、空門。
虚、受、信施。
初心、入道、法律、未諳、
師匠、不言、陥、人、於、此。
今、茲、苦口、敢、望、銘、心。
既、受、声聞戒、応、受、菩薩戒。
此、入法之漸、也。

あきらかに、しるべし。
諸仏、諸祖の成道、ただ、これ、出家、受戒のみなり。
諸仏、諸祖の命脈、ただ、これ、出家、受戒のみなり。
いまだかつて出家せざるものは、ならびに、仏祖にあらざるなり。
仏をみ、祖をみる、とは、出家、受戒するなり。

摩訶迦葉、随順、世尊、志求、出家、冀、度、諸有。

仏、言。
善来比丘。

鬢髪、自、落。
袈裟、著、体。

ほとけを学して諸有を解脱するとき、みな、出家、受戒する勝躅、かくのごとし。

大般若経、第三、曰、
仏世尊、言、
若、菩薩摩訶薩、作、是思惟、
我、於、何時、当、捨、国位、出家之日、即、成、無上正等菩提。
還、於、是日、転、妙法輪。
即、令、無量、無数、有情、遠、塵、離、垢、生、浄法眼。
復、令、無量、無数、有情、永、尽、諸漏、心、慧、解脱。
亦、令、無量、無数、有情、皆、於、無上正等菩提、得、不退転。

是菩薩摩訶薩、欲、成、斯事、応、学、般若波羅蜜。

おおよそ、無上菩提は、出家、受戒のとき満足するなり。
出家の日にあらざれば、成、満せず。
しかあれば、すなわち、出家之日を拈来して、成、無上菩提の日を現成せり。
成、無上菩提の日を拈出する、出家の日なり。
この出家の翻筋斗する、転妙法輪なり。
この出家、すなわち、無数、有情をして無上菩提を不退転ならしむるなり。
しるべし。
自利、利他、ここに満足して、阿耨菩提、不退不転なるは、出家、受戒なり。
成、無上菩提、かえりて出家の日を成、菩提するなり。
まさに、しるべし。
出家の日は、一異を超越せるなり。
出家の日のうちに、三阿僧祇劫を修、証するなり。
出家之日のうちに、往、無辺、劫海、転、妙法輪するなり。
出家の日は、謂如食頃にあらず、六十小劫にあらず、三際を超越せり、頂⊠を脱落せり。(「⊠」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
出家の日は、出家の日を超越せるなり。
しかも、かくのごとくなりといえども、羅籠、打破すれば、
出家の日、すなわち、出家の日なり。

成道の日、すなわち、成道の日なり。

大論、第十三、曰、
仏、在、祇。

有、酔婆羅門、来至、仏所、欲、作、比丘。
仏、勅、諸比丘、与、剃頭、著袈裟。
酒醒、驚怪、見、身変異、忽、為、比丘、即便、走、去。

諸比丘、問、仏、
何、以、聴、酔婆羅門、而、作、比丘、而、今、帰、去？

仏、言、
此婆羅門、無量劫中、無出家心。
今、因、酔後、暫、発微心。
為、此縁、故、後、出家。
如是、種種、因縁。
出家、破戒、猶、勝、在家、持戒。
以、在家戒、不、為、解脱。

仏勅の宗旨、あきらかに、しりぬ。
仏化は、ただ、出家、それ、根本なり。
いまだ出家せざるは、仏法にあらず。
如来、在世、もろもろの外道、すでに、みずからが邪道をすてて仏法に帰依するとき、かならず、まず、出家をこうし、なり。
世尊、あるいは、みずから、善来比丘、と、さずけましまします。
あるいは、諸比丘に勅して剃頭鬚髪、出家、受戒せしめましますに、ともに、出家、受戒の法、たちまちに具足せしなり。
しるべし。
仏化、すでに身心にこうむらしむるとき、頭髪、自、落し、袈裟、覆、体するなり。
もし諸仏、いまだ聴許しましまさざるには、鬚髪、剃除せられず、袈裟、覆、体せられず、仏戒、受得せられざるなり。
しかあれば、すなわち、出家、受戒は、諸仏、如来の親、受記なり。

釈迦牟尼仏、言、
諸善男子、

如来、見、
諸衆生、楽、於、小法、徳薄垢重者、
為、是人、説、我、少、出家、得、阿耨多羅三藐三菩提。
然、我、実、成仏已来、久遠、若斯。
但、以、方便、教化、衆生、令、入、仏道、作、如是説。

しかあれば、久遠、実、成は、我、少、出家なり。
得、阿耨多羅三藐三菩提は、我、少、出家なり。
我、少、出家を挙拈するに、徳薄垢重の楽、小法する衆生、ならびに、我、少、出家するなり。
我、少、出家の説法を見聞、参学するところに、見、仏、阿耨多羅三藐三菩提なり。
楽、小法の衆生を救、度するとき、為、是人、説、我、少、出家、得、阿耨多羅三藐三菩提なり。
しかも、かくのごとくなりというとも、畢竟じて、とうべし、
出家、功徳、それ、いくらばかりなるべきぞ？

かれに、むかうて、いうべし、
頂𩕳許なり。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)

正法眼蔵　出家
爾時、寛元四年丙午、九月十五日、在、越于、永平寺、示、衆。

# 三時業

第十九祖、鳩摩羅多尊者、至、中天竺国、有、大士、名、闍夜多、問、曰、
我家、父母、素、信、三宝。
而、
嘗、縈(まとう)、疾瘵。
凡、所営事、皆、不如意。
而、我隣家、久、為、栴陀羅行。
而、
身、常、勇健。
所作、和合。
彼、何、幸？
而、
我、何、辜？

尊者、曰、
何、足、疑、乎？
且、善悪之報、有、三時、焉。
凡人、但、見、
仁、夭、
暴、寿、
逆、吉、
義、凶、
便、謂、
亡、因果、
虚、罪福。
殊、不知、
影響、相随、毫釐、靡(ない)、忒(たがえる)。
縦、経、百、千、万劫、亦、不、磨滅。

時、闍夜多、聞、是語、已、頓、釈、所疑。

鳩摩羅多、尊者は、如来より第十九代の付法なり。
如来、まのあたり名字を記しまします。

ただ釈尊、一仏の法をあきらめ正伝せるのみにあらず、かねて、三世の諸仏の法をも暁了せり。
闍夜多、尊者、いまの問をもうけしよりのち、鳩摩羅多、尊者にしたがいて、如来の正法を修習し、ついに、第二十代の祖師となれり。
これも、また、世尊、はるかに、第二十祖は、闍夜多なるべし、と記しましませり。
しかあれば、すなわち、仏法の批判、もっとも、かくのごとくの祖師の所判のごとく習学すべし。
いまのよに、因果をしらず、業報をあきらめず、三世をしらず、善悪をわきまえざる邪見のともがらに群すべからず。

いわゆる、善悪之報、有、三時、焉というは、
一、者、順現報受。
二、者、順次生受。
三、者、順後次受。
これを三時という。

仏祖の道を修習するには、その最初より、この三時の業報の理をならい、あきらむるなり。
しかあらざれば、おおく、あやまりて邪見に堕するなり。
ただ邪見に堕するのみにあらず、悪道におちて長時の苦をうく。
続善根せざるあいだは、おおくの功徳をうしない、菩提の道、ひさしく、さわり、あり。
おしからざらめや？
この三時の業は、善悪にわたるなり。

第一、順現報受業、者、
謂、
若、業、此生、造作、増長、即、於、此生、受、異熟果。
是、名、順現報受業。

いわく、
人ありて、あるいは、善にもあれ、あるいは、悪にもあれ、この生に、つくりて、すなわち、この生に、その報をうくるを順現報受業という。

悪をつくりて、この生に、悪報をうけたる例。

曾、有、採樵者、入山、遇、雪、迷、失、途路。
時、会、日暮、雪、深、寒、凍、将、死、不久。
即、前、入、一蒙密林中、乃、見、一羆。
先、在、林内。
形色、青紺。
眼、如、双、炬。
其人、惶恐、分、当、失命。
此、実、菩薩、現、受、羆身。
見、其憂、恐、尋、慰、諭、言、
汝、今、勿、怖。
父母、於、子、或、有、異心。
吾、今、於、汝、終、無、悪意。

即、前、捧、取、将、入、窟中。
温煖、其身、令、蘇息、已、
取、諸根、果、勧、随、所食。
恐、冷、不消、抱持、而、臥。
如是、恩、養、経、於、六日。
至、第七日、天、晴、路、現。
人、有、帰心。
羆、既、知、已、復、取、甘果、而、餞、之。
送、至、林外、慇懃、告、別。
人、跪、謝、曰、
何、以、報、恩？

羆、言、
我、今、不、須(まつ)、余報。
但、
如、比日、我、護、汝身、
汝、於、我命、亦、願、如是。

其人、敬、諾。
担、樵、而、下山。
逢、二猟師。
問、言、
山中、見、何蟲獣？

樵人、答、言、
我、亦、不見、余獣、唯、見、一羆。

猟師、求、請、
能、示、我？　不？

樵人、答、言、
若、能、与、三分之二、吾、当、示、汝。

猟師、依、許。
相、与、倶、行。
竟、害、羆命、分、肉、為、三。
樵人、両手、欲、取、羆肉、悪業力、故、双臂、倶、落。
如、珠縷、断。
如、截、藕根。
猟師、危忙、驚、問、所以。
樵人、恥愧、具、述、委曲。
是二猟師、責、樵人、曰、
佗(かれ)、既、於、汝、有、此大恩。
汝、今、何、忍、行、斯悪逆？
怪哉、汝身、何、不、糜爛？

於、是、猟師、共、持、其肉、施、僧伽藍。
時、僧上座、得、妙願智、時、入、定、観、是、何肉？
即、知、是、与、一切衆生、作、利楽者、大菩薩肉。
尋、時、出、定、以、此事、白、衆。
衆、聞、驚、歎、共、取、香薪、焚、焼、其肉。
収、其余骨、起、卒堵婆、礼拝、供養。

如是、悪業、要、待、相続、或、度、相続、方、受、其果。

かくのごとくなるを悪業の順現報受業となづく。
おおよそ、恩をえては、報をこころざすべし。
他に恩しては、報をもとむることなかれ。
いまも恩ある人を逆害をくわえんとせん、その悪業、かならず、うくべきなり。

衆生、ながく、いまの樵人のこころ、なかれ。
林外にして告別するには、いかがして、この恩を謝すべき、というといえども、やまのふもとに、猟師にあうては、二分の肉をむさぼる。
貪欲にひかれて大恩所を害す。
在家、出家、ながく、この不知恩のこころ、なかれ。
悪業力のきるところ、両手を断ずること、刀剣のきるよりも、はやし。

この生に善をつくりて、順現報受に善報をえたる例。

昔、健駄羅国、迦膩色迦王、有、一黄門、恒、監、内事。
暫、出、城外、見、有、群牛、数、盈(みちる)、五百、来入、城内。

問、駆牛者、
此、是、何牛？

答、言、
此牛、将、去、其種。

於、是、黄門、即、自、思惟、
我、宿悪業、受、不男身。
今、応、以、財、救、此牛難。

遂、償、其債、悉、令、得、脱。
善業力、故、令、此黄門、即、復、男身。
深、生、慶悦。
尋、還、城内、侍立、宮門、付、使、啓、王、請、入、奉覲。
王、令、喚、入。
怪、問、所由。
於、是、黄門、具、奏、上事。
王、聞、驚、喜、厚、賜、珍財、転、授、高官、令、知、外事。

如是、善業、要、待、相続、或、度、相続、方、受、其果。

あきらかに、しりぬ。
牛畜の身、おしむべきにあらざれども、すくうひと、善果をうく。
いわんや、恩田をうやまい、徳田をうやまい、もろもろの善を修せんをや。
かくのごとくなるを善の順現報受業となづく。

善によりて、悪によりて、かくのごとくのこと、おおかれど、つくし、あぐるに、いとまあらず。

第二、順次生受業、者、
謂、
若、業、此生、造作、増長、於、第二生、受、異熟果。
是、名、順次生受業。

いわく、
もし人ありて、この生に五無間業をつくれる、かならず、順次生に地獄におつるなり。
順次生とは、この生の、つぎの生なり。
余のつみは、順次生に地獄におつるも、あり。
また、順後次受の、ひくべき、あれば、順次生に地獄におちず、順後業となることも、あり。
この五無間業は、さだめて、順次生受業に地獄におつるなり。
順次生、また、第二生とも、これをいうなり。

五無間業というは、
一、者、殺、父。
二、者、殺、母。
三、者、殺、阿羅漢。
四、者、出、仏身、血。
五、者、破、法輪、僧。
これを五無間業となづく。
また、五逆罪となづく。

はじめの三は、殺生なり。
第四は、殺生の加行なり。
如来は、いかにも人にころされさせたまわず。
ただ、身、血をいだすを逆とす。

中夭なきは、
最後身、菩薩。
都史多天、一生所繋、菩薩。
北洲。

樹提伽。
仏医。
なり。

第五、破、僧、罪は、虚誑語なり。

この五逆、かならず、順次生受業に、地獄におつるなり。

提婆達多は、この五無間業のなかに、三をつくれり。
いわく、

蓮華色比丘尼をうちころす。
この比丘尼、大阿羅漢なり。
これを殺、阿羅漢とす。

盤石をなげて、世尊をうちころしたてまつらんとす。
盤石、ときに、山神にさえられて、くだけぬ。
その、くだけ、ほとばしりて、如来の足指にあたれり。
足指やぶれ、血、まさに、いづ。
これ、出、仏身、血、罪なり。

初学、愚鈍の比丘、五百人を、かたらいて、迦耶山頂にゆきて、別、羯磨をつくる。
これ破、僧、罪なり。

この三逆罪によりて、阿鼻地獄におちぬ。

いまに、無間の苦をうく。

四仏の提婆達多、なお、阿鼻にあり。

倶伽離比丘、この生に、舎利弗、目犍連を謗ずるに、無根、波羅夷の法をもってす。
世尊、みずから、いさめまします。
梵王、きたりて、制すれども、やまず。
二尊者を謗じて、地獄におちぬ。

四禅比丘、臨、命、終のときに、謗、仏せしによりて、阿鼻地獄におつ。

かくのごとくなるを順次生受業となづく。

第三、順後次受業、者、
謂
若、業、此生、造作、増長、随、第三生、或、復、過、此、雖、百、千劫、受、異熟果。
是、名、順後次受業。

いわく、
人ありて、この生に、あるいは、善にもあれ、あるいは、悪にもあれ、造作しおわれりといえども、あるいは、第三生、あるいは、第四生、乃至、百、千生のあいだにも、善悪の業を感ずるを順後次受業となづく。
菩薩の三祇劫の功徳、おおく、順後次受業なり。
かくのごとくの道理、しらざるがごときは、行者、おおく、疑心をいだく。
いまの、闍夜多、尊者の在家のときのごとし。
もし鳩摩羅多、尊者にあわずば、その、うたがい、とけ、がたからん。
行者もし思惟、それ、善なれば、悪、すなわち、滅す。
それ、悪、思惟すれば、善、すみやかに滅するなり。

室羅筏国、昔、有、二人。

一、恒、修、善。

一、常、作、悪。

修善行者、於、一身中、恒、修、善行。
未嘗、作、悪。

作悪行者、於、一身中、常、作、悪行。
未嘗、修、善。

修善行者、臨、命、終、時、順後次受、悪業力、故、欻(たちまち)、有、地獄、中有、現前。
便、作、是念、
我、一身中、恒、修、善行。
未嘗、作、悪。

応、生、天趣。
何縁、有、此中有、現前？

遂、起、念、言、
我、定、応、有、順後次受、悪業。
今、熟、故、此地獄中有、現前。

自、憶念、一身、已来、所修、善業。
深、生、歓喜。
由、勝善思、現在前、故、地獄中有、便、隠歿、天趣中有、欻(たちまち)爾、現前。
従、此命、終、生、於、天上。

この恒、修、善行のひと、順後次受の、さだめて、うくべき、わが身にありけり、とおもうのみにあらず、さらに、すすみて、おもわく、一身の修、善も、また、さだめて、のちに、うくべし。
ふかく歓喜す、とは、これなり。
この憶念、まことなるがゆえに、地獄の中有、すなわち、かくれて、天趣の中有、たちまちに現前して、いのち、おわりて、天上にうまる。
この人もし悪人ならば、命、終のとき、地獄の中有、現前せば、おもうべし、われ、一身の修、善、その功徳なし。
善悪あらんには、いかでか、われ、地獄の中有をみん？

このとき、因果を撥無し、三宝を毀謗せん。
もし、かくのごとくならば、すなわち、命、終し、地獄におつべし。
かくのごとくならざるによりて、天上にうまるるなり。
この道理、あきらめ、しるべし。

作悪行者、臨、命、終、時、順後次受、善業力、故、欻(たちまち)、有、天趣中有、現前。
便、作、是念、
我、一身中、常、作、悪行。
未嘗、修、善。
応、生、地獄。
何縁、有、此中有、現前？

遂、起、邪見、撥無、善悪、及、異熟果。

邪見力、故、天趣中有、尋、即、隠歿。
地獄中有、欻(たちまち)爾、現前。
従、此命、終、生、於、地獄。

この人、いけるほど、つねに悪をつくり、さらに一善を修せざるのみにあらず、命、終のとき、天趣の中有の現前せるをみて、順後次受をしらず、
われ、一生のあいだ、悪をつくれりといえども、天趣にうまれんとす。
はかりしりぬ。
さらに善悪なかりけり。
かくのごとく、善悪を撥無する邪見力のゆえに、天趣の中有、たちまちに隠歿して、地獄の中有、すみやかに現前し、いのち、おわりて、地獄におつ。
これは、邪見のゆえに、天趣の中有、かくるるなり。

しかあれば、すなわち、行者、かならず、邪見なることなかれ。
いかなるか、邪見？　いかなるか、正見？　と、かたちをつくすまで学習すべし。
まず、因果を撥無し、仏法僧を毀謗し、三世、および、解脱を撥無する、ともに、これ、邪見なり。
まさに、しるべし。
今生の、わがみ、ふたつ、なし。みっつ、なし。
いたずらに邪見におちて、むなしく悪業を感得せん。
おしからざらめや？
悪をつくりながら、悪にあらずとおもい、悪の報あるべからずと邪思惟するによりて、悪の報を感得せざるにはあらず。

皓月、供奉、問、長沙景岑、和尚、

古徳、云、
了、即、業障、本来、空。
未了、応、須、償、宿債。

只、如、獅子尊者、二祖大師、為、什麼、得、償、債、去？

長沙、云、
大徳、不識、本来、空。

彼、云、

如何、是、本来、空？

長沙、云、
業障、是。

又、問、
如何、是、業障？

長沙、云、
本来、空、是。

彼、無語。

長沙、便、示、一偈、云、
仮有、元、非、有。
仮滅、亦、非、無。
涅槃、償債、義、一性、更、無、殊(ことなる)。

長沙の答は、答にあらず。
鳩摩羅多の、闍夜多にしめす道理、なし。
しるべし。
業障のむねをしらざるなり。
仏祖の児孫、修、証、弁道するには、まず、かならず、この三時の業をあきらめ、しらんこと、鳩摩羅多、尊者のごとくなるべし。
すでに、これ、祖宗の業なり。
廃怠すべからず。
このほか、不定業、あり。
また、八種の業、あること、ひろく参学すべし。
いまだ、この業報の道理、あきらめざらんともがら、みだりに人、天の導師と称することなかれ。
かの三時の悪業報、かならず、感ずべしといえども、懺悔するがごときは、重を転じて軽、受せしむ。
また、滅、罪、清浄ならしむるなり。
善業、また、随喜すれば、いよいよ増長するなり。
これ、みな、作業の黒白にまかせたり。

世尊、言、

仮令、経、百劫、所作、業、不亡。
因縁、会遇時、果報、還、自受。
汝等、当、知。
若、純黒業、得、純黒異熟。
若、純白業、得、純白異熟。
若、黒白業、得、雑異熟。
是故、応、離、純黒、及、黒白雑業、当、勤、修学、純白之業。

時、諸大衆、聞、仏説、已、歓喜、信受。

正法眼蔵　三時業
建長五年癸丑、三月九日、在、於、永平寺、首座寮、書写、之、畢。
懐弉

# 四馬

世尊、一日、外道、来詣、仏所、問、仏、
不問、有言。
不問、無言。

世尊、拠坐。
良、久。
外道、礼拝、讃歎、云、
善哉。
世尊。
大慈大悲、開、我迷雲、令、我、得入。

乃、作、礼、而、去。
外道、去、已、阿難、尋、白、仏、言、
外道、以、何所得、而、言、得入、称讃、而、去？

世尊、言、
如、世間良馬、見、鞭影、而、行。

祖師西来よりのち、いまにいたるまで、諸善知識、おおく、この因縁を挙して参学のともがらに、しめすに、あるいは、年載をかさね、あるいは、日月をかさねて、まさに、開明し、仏法に信入するもの、あり。
これを外道問仏の話と称す。
しるべし。
世尊に聖默、聖説の二種の施設まします。
これによりて得入するもの、みな、如、世間良馬、見、鞭影、而、行なり。
聖默、聖説にあらざる施設によりて得入するも、また、かくのごとし。

龍樹祖師、曰、
為、人、説、句、如、快馬、見、鞭影、即、入、正路。

あらゆる機縁、あるいは、生、不生の法をきき、三乗、一乗の法をきく、しばしば邪路におもむかんとすれども、鞭影しきりに、みゆるがごときは、すなわち、正路にいるなり。

もし師にしたがい、人にあいぬるがごときは、ところとして説、句にあらざることなし、ときとして鞭影をみずということなきなり。
即座に鞭影をみるもの、三阿僧祇をへて鞭影をみるもの、無量劫を経て鞭影をみ、正路にいることをうるなり。

雑阿含経、曰、
仏、告、比丘、
有、四種馬。
一、者、見、鞭影、即便、驚、悚(おそれ)、随、御者意。
二、者、触、毛、便、驚、悚(おそれ)、随、御者意。
三、者、触、肉、然後、乃、驚。
四、者、徹骨、然後、方、覚。
初馬、如、聞、他集落、無常、即、能、生、厭。
次馬、如、聞、己集落、無常、即、能、生、厭。
三馬、如、聞、己親、無常、即、能、生、厭。
四馬、猶、如、己身、病苦、方、能、生、厭。

これ、阿含の四馬なり。
仏法を参学するとき、かならず、学するところなり。
真善知識として人中、天上に出現し、ほとけのつかいとして祖師なるは、かならず、これを参学しきたりて、学者のために伝授するなり。
しらざるは、人、天の善知識にあらず。
学者もし厚、殖、善根の衆生にして、仏道ちかきものは、かならず、これをきくことをうるなり。
仏道、とおきものは、きかず、しらず。
しかあれば、すなわち、
師匠、いそぎ、とかんことをおもうべし。
弟子、いそぎ、きかん、と、こいねがうべし。
いま、生、厭というは、
仏、以、一音、演説、法、
衆生、随、類、各、得、解。
或、有、恐怖。
或、歓喜。
或、生、厭離。
或、断、疑。
なり。

大経、云、
仏、言、
復、次、
善男子、
如、調馬者、凡、有、四種。
一、者、触、毛。
二、者、触、皮。
三、者、触、肉。
四、者、触、骨。
随、其所触、称(かなう)、御者意。
如来、亦、爾。
以、四種法、調伏、衆生。
一、者、為、説、生、便、受、仏語。
如、触、其毛、随、御者意。
二、者、説、生、老、便、受、仏語。
如、触、毛、皮、随、御者意。
三、者、説、生、及、以、老、病、便、受、仏語。
如、触、毛、皮、肉、随、御者意。
四、者、説、生、及、以、老、病、死、便、受、仏語。
如、触、毛、皮、肉、骨、随、御者意。
善男子、
御者、調馬、無有、決定。
如来、世尊、調伏、衆生、必定、不虚。
是故、号、仏、調御丈夫。

これを涅槃経の四馬となづく。
学者、ならわざる、なし。
諸仏、ときたまわざる、おわしまさず。
ほとけに、したがいたてまつりて、これをきき、
ほとけをみたてまつり供養したてまつるごとには、かならず、聴聞し、
仏法を伝授するごとには、衆生のために、これをとくこと、
歴劫に、おこたらず。
ついに、仏果にいたりて、はじめ初発心のときのごとく、菩薩、声聞、人、天、大会のために、これをとく。
このゆえに、仏法僧宝種、不断なり。

かくのごとくなるがゆえに、諸仏の所説と、菩薩の所説と、はるかに、ことなり。
しるべし。
調馬師の法に、おおよそ、四種あり。
いわゆる、
触、毛。
触、皮。
触、肉。
触、骨。
なり。
これ、なにものを触、毛せしむる、と、みえざれども、伝法の大士、おもわくは、鞭なるべし、と解す。
しかあれども、かならずしも、調馬の法に鞭をもちいるも、あり、鞭をもちいざるも、あり。
調馬、かならず、鞭のみには、かぎるべからず。
たてる、たけ八尺なる、これを龍馬とす。
このうま、ととのうること、人間に、すくなし。
また、千里馬という、うま、あり。
一日のうちに千里をゆく。
このうま、五百里をゆくあいだ、血汗をながす。
五百里すぎぬれば、清涼にして、はやし。
このうまにのる人、すくなし。
ととのうる法、しれるもの、すくなし。
このうま、神丹国には、なし。
外国に、あり。
このうま、おのおの、しきりに鞭を加す、と、みえず。
しかあれども、古徳、いわく、調馬、かならず、鞭を加す。
鞭にあらざれば、うま、ととのわらず。
これ、調馬の法なり。
いま、触、毛、皮、肉、骨の四法あり。
毛をのぞきて、皮、骨、触すること、あるべからず。
毛、皮をのぞきて、肉、骨に触すること、あるべからず。
かるがゆえに、しりぬ。
これ、鞭を加すべきなり。
いま、ここに、とかざるは、文の不足なり。

諸経、かくのごときのところ、おおし。
如来、世尊、調御丈夫、また、しかなり。
四種の法をもって、一切衆生を調伏して、必定、不虚なり。
いわゆる、
生を為、説するに、すなわち、仏語をうくる、あり。
生老を為、説するに、仏語をうくる、あり。
生老病を為、説するに、仏語をうくる、あり。
生老病死を為、説するに、仏語をうくる、あり。
のちの三をきくもの、いまだ、はじめの一をはなれず。
世間の調馬の、触、毛をはなれて、触、皮、肉、骨、あらざるがごとし。
生老病死を為、説す、というは、如来、世尊の生老病死を為、説しまします、衆生をして、生老病死をはなれしめんがために、あらず。
生老病死、すなわち、道、と、とかず。
生老病死、すなわち、道なり、と解せしめんがために、とくにあらず。
この生老病死を為、説するによりて、一切衆生をして、阿耨多羅三藐三菩提の法をえしめんがためなり。
これ、如来、世尊、調伏、衆生、必定、不虚。是故、号、仏、調御丈夫。なり。

正法眼蔵　四馬
建長七年乙卯、夏安居日、以、御草案、書写、之、畢。　　　　懐弉

# 発菩提心

おおよそ、心、三種あり。
一、者、質多心。此方、称、慮知心。
二、者、汗栗多心。此方、称、草木心。
三、者、矣栗多心。此方、称、積聚精要心。
このなかに、菩提心をおこすこと、かならず、慮知心をもちいる。
菩提は、天竺の音、ここには、道という。
質多は、天竺の音、ここには、慮知心という。
この慮知心にあらざれば、菩提心をおこすこと、あたわず。
この慮知心を、すなわち、菩提心とするにはあらず。
この慮知心をもって菩提心をおこすなり。
菩提心をおこす、というは、おのれ、いまだ、わたらざる、さきに、一切衆生をわたさんと発願し、いとなむなり。
そのかたち、いやしというとも、この心をおこせば、すでに、一切衆生の導師なり。
この心、もとより、あるにあらず。
いま、あらたに、欻(たちまち)、起するにあらず。
一にあらず。多にあらず。
自然にあらず。
凝然にあらず。
わが身のなかに、あるにあらず。
わが身は、心のなかに、あるにあらず。
この心は、法界に周遍せるにあらず。
前にあらず。後にあらず。
なきにあらず。
自性にあらず。他性にあらず。
共性にあらず。
無因性にあらず。
しかあれども、感応道交するところに、発菩提心するなり。
諸仏、菩薩の所授にあらず。
みずからが所能にあらず。
感応道交するに、発心するゆえに、自然にあらず。
この発菩提心、おおくは、南閻浮の人身に発心すべきなり。

八難所、等にも、すこしきは、あり。おおからず。
菩提心をおこしてのち、三阿僧祇劫、一百大劫、修行す。
あるいは、無量劫、おこないて、ほとけになる。
あるいは、無量劫、おこないて、衆生をさきにわたして、みずからは、ついに、ほとけにならず。
ただし衆生をわたし、衆生を利益するも、あり。
菩薩の意、楽(ねがう)に、したがう。
おおよそ、菩提心は、いかがして一切衆生をして菩提心をおこさしめ仏道に引導せまし、と、ひまなく三業に、いとなむなり。
いたずらに世間の欲楽をあたうるを利益、衆生とするにはあらず。
この発心、この修、証、はるかに迷悟の辺表を超越せり。
三界に勝出し、一切に抜群せり。
なお、声聞、辟支仏のおよぶところにあらず。

迦葉菩薩、偈をもって釈迦牟尼仏をほめたてまつるに、いわく、
発心、畢竟、二、無別。
如是二心、先心、難。
自、未得度、先、度、他。
是故、我、礼、初発心。
初発、已、為、天人師。
勝出、声聞、及、縁覚。
如是発心、過、三界。
是故、得、名、最無上。

発心とは、はじめて、自、未得度、先、度、他の心をおこすなり。
これを初発菩提心という。
この心をおこすよりのち、さらに、そこばくの諸仏にあいたてまつり供養したてまつるに、見仏聞法し、さらに、菩提心をおこす。
霜上加霜なり。
いわゆる、畢竟とは、仏果菩提なり。
阿耨多羅三藐三菩提と初発菩提心と、格量せば、劫火、蛍火のごとくなるべしといえども、自、未得度、先、度、他のこころをおこせば、二、無別なり。

毎、自、作、是念、
以、何、令、衆生、得入、無上道、速、成就、仏身。

これ、すなわち、如来の寿量なり。
ほとけは、発心、修行、証果、みな、かくのごとし。
衆生を利益す、というは、衆生をして自、未得度、先、度、他のこころをおこさしむるなり。
自、未得度、先、度、他の心をおこせるちからによりて、われ、ほとけにならん、とおもうべからず。
たとえ、ほとけになるべき功徳、熟して円満すべし、というとも、なお、めぐらして衆生の成仏、得道に回向するなり。
この心、われにあらず、他にあらず、きたるにあらずといえども、この発心よりのち、大地を挙すれば、みな、黄金となり、大海をかけば、たちまちに甘露となる。
これよりのち、土石、砂礫をとる、すなわち、菩提心を拈来するなり。
水沫、泡、焔を参ずる、したしく菩提心を担来するなり。
しかあれば、すなわち、国、城、妻子、七宝、男女、頭、目、髄、脳、身肉、手足をほどこす、みな、菩提心の鬧聒聒なり、菩提心の活鱍鱍なり。
いまの質多、慮知の心、ちかきにあらず、とおきにあらず、みずからにあらず、他にあらず、といえども、この心をもって、自、未得度、先、度、他の道理にめぐらすこと不退転なれば、発菩提心なり。
しかあれば、いま、一切衆生の、我有と執せる草木、瓦礫、金、銀、珍宝をもって菩提心にほどこす、また、発菩提心ならざらめや？
心、および、諸法、ともに、自、他、共、無因にあらざるがゆえに、もし一刹那この菩提心をおこすより、万法、みな、増上縁となる。
おおよそ、発心、得道、みな、刹那、生滅するによるものなり。
もし刹那、生滅せずば、前刹那の悪、さるべからず。
前刹那の悪、いまだ、さらざれば、後刹那の善、いま、現、生すべからず。
この刹那の量は、ただ如来ひとり、あきらかに、しらせたまう。
一刹那心、能、起、一語。
一刹那語、能、説、一字。
も、ひとり如来のみなり。
余聖、不能なり。
おおよそ、壮士の一弾指のあいだに、六十五の刹那ありて、五蘊、生滅すれども、凡夫、かつて不覚不知なり。
怛刹那の量よりは、凡夫も、これをしれり。
一日一夜をふるあいだに、六十四億九万九千九百八十の刹那ありて、五蘊、ともに、生滅す。

しかあれども、凡夫、かつて覚知せず。
覚知せざるがゆえに、菩提心をおこさず。
仏法をしらず、仏法を信ぜざるものは、刹那、生滅の道理を信ぜざるなり。
もし如来の正法眼蔵、涅槃妙心をあきらむるがごときは、かならず、この刹那、生滅の道理を信ずるなり。
いま、われら、如来の説教にあうたてまつりて、暁了するに、にたれども、わずかに怛刹那より、これをしり、その道理、しかあるべし、と信受するのみなり。
世尊、所説の一切の法、あきらめず、しらざることも、刹那量をしらざるがごとし。
学者、みだりに貢高することなかれ。
極小をしらざるのみにあらず。極大をも、また、しらざるなり。
もし如来の道力によるときは、衆生、また、三千界をみる。
おおよそ、本有より中有にいたり、中有より当本有にいたる、みな、一刹那、一刹那に、うつりゆくなり。
かくのごとくして、わがこころにあらず、業にひかれて流転、生死すること、一刹那も、とどまらざるなり。
かくのごとく流転、生死する身心をもって、たちまちに自、未得度、先、度、他の菩提心をおこすべきなり。
たとえ発菩提心のみちに身心をおしむとも、生老病死して、ついに、我有なるべからず。
衆生の寿行、生滅して、とどまらず、すみやかなること、
世尊、在世、有、一比丘、来詣、仏所、頂礼双足、却、住、一面、白、世尊、言、
衆生、寿行、云何、速疾、生滅？

仏、言、
我、能、宣説、
汝、不能、知。

比丘、言、
頗、有、譬喩、能、顕示？　不？

仏、言、
有。
今、為、汝、説。

譬、如、四善射夫、各、執、弓箭、相背、攢(あつまる)、立、欲、射、四方、有、一捷夫、来、語、之、曰、
汝等、今、可、一時、放、箭、
我、能、遍、接、俱、令、不堕。

於、意、云何？
此、捷疾？　不？

比丘、白、仏、言、
甚疾。
世尊。

仏、言、
彼人、捷疾、不及、地行夜叉。
地行夜叉、捷疾、不及、空行夜叉。
空行夜叉、捷疾、不及、四天王天、捷疾。
彼天、捷疾、不及、日、月、二輪、捷疾。
日、月、二輪、捷疾、不及、堅行天子、捷疾。此、是、導引日月輪車者。
此等、諸天、展転、捷疾。
寿行、生滅、捷疾、於、彼。
刹那、流転。
無有、暫、停。

われらが寿行、生滅、刹那、流転、捷疾なること、かくのごとし。
念念のあいだ、行者、この道理をわするることなかれ。
この刹那、生滅、流転、捷疾にありながら、もし自、未得度、先、度、他の一念をおこすごときは、久遠の寿量、たちまちに現在前するなり。
三世十方の諸仏、ならびに、七仏世尊、および、西天二十八祖、東地六祖、乃至、伝、仏、正法眼蔵、涅槃妙心の祖師、みな、ともに、菩提心を保任せり。
いまだ菩提心をおこさざるは、祖師にあらず。

禅苑清規、一百二十問、云、
発、悟、菩提心？　否？

あきらかに、しるべし、仏祖の学道、かならず、菩提心を発、悟するをさきとせり、ということ。

これ、すなわち、仏祖の常法なり。
発、悟す、というは、暁了なり。
これ、大覚にはあらず。
たとえ十地を頓、証せるも、なお、これ、菩薩なり。
西天二十八祖、唐土六祖、等、および、諸大祖師は、これ、菩薩なり。
ほとけにあらず。
声聞、辟支仏、等にあらず。
いまのよにある参学のともがら、菩薩なり、声聞にあらずということ、あきらめ、しれるともがら、一人もなし。
ただ、みだりに衲僧、衲子と自称して、その真実をしらざるによりて、みだりがわしくせり。
あわれむべし、澆季、祖道、廃せることを。
しかあれば、すなわち、たとえ在家にもあれ、たとえ出家にもあれ、あるいは、天上にもあれ、あるいは、人間にもあれ、苦にありというとも、楽にありというとも、はやく自、未得度、先、度、他の心をおこすべし。
衆生界は、有辺、無辺にあらざれども、先、度、一切衆生の心をおこすなり。
これ、すなわち、菩提心なり。
一生補処菩薩、まさに、閻浮提に、くだらんとするとき、覩史多天の諸天のために、最後の教をほどこすに、いわく、
菩提心、是、法明門。
不断、三宝、故。

あきらかに、しりぬ、三宝の不断は、菩提心のちからなり、ということを。
菩提心をおこしてのち、かたく守護し、退転なかるべし。

仏、言、
云何、菩薩、守護、一事？
謂、
菩提心。
菩薩摩訶薩、常、勤、守護、是菩提心。
猶、如、世人、守護、一子。
亦、如、瞎者、護、余一目。
如、行、曠野、守護、導者。
菩薩、守護、菩提心、亦復、如是。
因、護、如是、菩提心、故、得、阿耨多羅三藐三菩提。

因、得、阿耨多羅三藐三菩提、故、常楽我浄、具足、而、有。即是、無上、大般涅槃。
是故、菩薩、守護、一法。

菩提心をまもらんこと、仏、語、あきらかに、かくのごとし。
守護して退転なからしむる、ゆえは、
世間の常法に、いわく、
たとえ生ずれども、熟せざるもの、三種あり。
いわく、
魚子。
菴羅果。
発心、菩薩。
なり。
おおよそ、退失するもの、おおきがゆえに、われも退失とならんことをかねてより、おそるるなり。
このゆえに、菩提心を守護するなり。
菩薩の初心のとき、菩提心を退転すること、おおくは、正師にあわざるによる。
正師にあわざれば、正法をきかず。
正法をきかざれば、おそらくは、因果を撥無し、解脱を撥無し、三宝を撥無し、三世、等の諸法を撥無す。
いたずらに現在の五欲に貪著して、前途、菩提の功徳を失す。
あるいは、天魔波旬、等、行者をさまたげんがために、仏形に化し、父、母、師匠、乃至、親族、諸天等のかたちを現じて、きたり、ちかづきて、菩薩にむかいて、こしらえ、すすめて、いわく、
仏道、長遠。
久、受、諸苦。
もっとも、うれうべし。
しかじ、まず、われ、生死を解脱し、のちに、衆生をわたさんには。

行者、このかたらいをききて、菩提心を退し、菩薩の行を退す。
まさに、しるべし。
かくのごとくの説は、すなわち、これ、魔説なり。
菩薩、しりて、したがうことなかれ。
もっぱら自、未得度、先、度、他の行願を退転せざるべし。

自、未得度、先、度、他の行願にそむかんがごときは、これ、魔説、としるべし、外道説としるべし、悪友としるべし。
さらに、したがうことなかれ。

魔、有、四種。
一、煩悩魔。
二、五衆魔。
三、死魔。
四、天子魔。

煩悩魔、者、
所謂、百八煩悩、等。
分別、八万四千、諸煩悩。

五衆魔、者、
是、煩悩、和合、因縁。
得、是身、四大、及、四大、造、色、眼根、等、色、是、名、色衆。
百八煩悩、等、諸、受、和合、名、為、受衆。
大小、無量所有、想、分別、和合、名、為、想衆。
因、好醜心、発、能、起、貪欲、瞋恚、等、心、相応、不相応、法、名、為、行衆。
六情、六塵、和合、故、生、六識。是六識、分別、和合、無量、無辺心、是、名、識衆。

死魔、者、
無常因縁、故、破、相続五衆寿命、尽、離、三法、識熱寿、故、名、為、死魔。

天子魔、者、
欲界主、深、著、世楽、用有所得、故、生、邪見、憎、嫉、一切賢聖涅槃道法、是、名、天子魔。

魔、是、天竺語。
秦言、能奪命者。
唯、死魔、実、能、奪、命。
余者、亦、能、作、奪命因縁、亦、奪智慧命。
是故、名、殺者。

問、曰、
一、五衆魔、摂、三種魔。
何以故、別、説、四？

答、曰、
実、是、一魔。
分別、其義、故、有、四。

上来、これ、龍樹祖師の施設なり。
行者、しりて勤学すべし。
いたずらに魔嬈をこうむりて、菩提心を退転せざれ。
これ、守護、菩提心なり。

正法眼蔵　発菩提心
爾時、寛元二年甲辰、二月十四日、在、越州、吉田県、吉峰精舎、示、衆。
建長七年乙卯、四月九日、以、御草案、書写、了。　　　　　懐弉

# 出家功徳

龍樹菩薩、言、

問、曰、
若(ごとき)、居家戒、
得、生、天上、
得、菩薩道、
亦、得、涅槃。
復、何、用、出家戒？

答、曰、
雖、倶、得度、然(しかも)、有、難易。
居家、生業、種種、事務。
若、欲、専心、道法、家業、則、廃。
若、専修、家業、道事、則、廃。
不取不捨、能、応、行、法。
是、名、為、難。
若、出家、
離、俗、
絶、諸忿乱、
一向、専心、行、道。
為、易。
復、次、
居家、
憒閙。
多事多務。
結使之根。
衆罪之府。
是、為、甚難。
若、出家者、
譬、若、有、人、出在、空野、無人之所、而、一其心、無心無慮。
内想、既、除、外事、亦、去。
如、偈、説、
閑坐、林樹間、寂然、滅、衆悪。

恬澹、得、一心。
斯楽、非、天楽。
人、求、富貴、利、名衣、好牀褥。
斯楽、非、安穏。
求、利、無、厭、足。
衲衣、行、乞食、動止、心、常、一。
自、以、智慧眼、観知、諸法実。
種種法門中、皆、以、等、観入。
解慧心、寂然、三界、無、能、及。
以、是故、知、
出家、修、戒、行道、為、甚易。

復、次、
出家、修、戒、得、無量善律儀、一切具足円満。
以、是、故、
白衣等、応当、出家、受、具足戒。

復、次、
仏法中、出家法、第一難修。
如、

閻浮呿提梵志、問、舎利弗、
於、仏法中、何者、最難？

舎利弗、答、曰、
出家、為、難。

又、問、
出家、有、何等、難？

答、曰、
出家、内、楽、為、難。

既、得、内、楽、復、次、何者、為、難？

修、諸善法、難。
以、是故、応、出家。

復、次、
若、人、出家、時、
魔王、驚、愁、言、
此人、
諸結使、欲、薄、
必、得、涅槃、
堕、僧宝、数中。

復、次、
仏法中、出家人、雖、破戒、堕罪、罪、畢、得、解脱。
如、優鉢羅華比丘尼本生経中説。

仏、在世時、此比丘尼、得、六神通、阿羅漢。
入、貴人舎、常、讃、出家法、語、諸貴人婦女、言、
姉妹、
可、出家。

諸貴婦女、言、
我等、少、壮、容色、盛美。
持戒、為、難。
或、当、破戒。

比丘尼、言、
破戒、便、破。
但、出家。

問、言、
破戒、当、堕、地獄。
云何、可、破？

答、言、
堕、地獄、便、堕。

諸貴婦女、笑、之、言、
地獄、受、罪。
云何、可、堕？

比丘尼、言、
我、自、憶念、本宿命時、
作、戯女、著、種種衣服、而、説、旧語。
或時、著、比丘尼衣、以、為、戯笑。
以、是因縁、故、迦葉仏時、作、比丘尼。
自、恃、貴姓、端正、心、生、憍慢、而、破、禁戒。
破戒、罪、故、堕、地獄、受、種種罪。
受、罪、
畢竟、値、釈迦牟尼仏、出家、
得、六神通、阿羅漢道。
以、是故、知、
出家、受戒、雖、復、破戒、以、戒因縁、故、得、阿羅漢道。
若、但、作、悪、無、戒因縁、不得道、也。
我乃昔時、
世世、堕、地獄、
従、地獄、出、為、悪人。
悪人、死、還、入、地獄。
都(すべて)、無所得。
今、以、此証知、
出家、受戒、雖、復、破戒、以、是因縁、可、得道果。

復、次、
如、

仏、在、祇桓、有、一酔婆羅門、来到、仏所、求、作、比丘。
仏、勅、阿難、与、剃頭、著、法衣。
酔酒、既、醒、驚、怪、己身、忽、為、比丘、即便、走去。
諸比丘、問、仏、
何、以、聴、此婆羅門、而、作、比丘？

仏、言、
此婆羅門、無量劫中、初、無、出家心。
今、因、酔、故、暫、発微心。
以、此因縁、故、後、出家、得道。
如是、種種因縁。

出家之功徳、無量。
以、是、
白衣、雖、有、五戒、不如、出家。

世尊、すでに酔婆羅門に出家、受戒を聴許し、得道、最初の下種と、せしめましします。
あきらかに、しりぬ。
むかしより、いまに、出家の功徳なからん衆生、ながく仏果菩提をうべからず。
この婆羅門、わずかに酔酒のゆえに、しばらく微心をおこして、剃頭、受戒し、比丘となれり。
酒酔さめざるあいだ、いくばくにあらざれども、この功徳を保護して、得道の善根を増長すべきむね、これ、世尊、誠諦の金言なり、如来、出世の本懐なり。
一切衆生、あきらかに、已、今、当の中に、信受、奉行したてまつるべし。
まことに、その発心、得道、さだめて、刹那より、するものなり。
この婆羅門、しばらくの出家の功徳、なお、かくのごとし。
いかに、いわんや、いま、人間一生の寿者命者をめぐらして出家、受戒せん功徳、さらに酔婆羅門よりも、劣ならめやは？
転輪聖王は、八万歳已上のときに、いでて、四洲を統領せり、七宝、具足せり。
そのとき、この四洲、みな、浄土のごとし。
輪王の快楽、ことばの、つくすべきにあらず。
あるいは、三千界、統領するも、あり、という。
金、銀、銅、鉄輪の別、ありて、一、二、三、四洲の統領、あり。
かならず、身に十悪なし。
この転輪聖王、かくのごときの快楽にゆたかなれども、こうべに、ひとすじの白髪おいぬれば、くらいを太子にゆずりて、わがみ、すみやかに出家し、袈裟を著して、山林にいりて、修練し、命、終すれば、かならず、梵天にうまる。
この、みずからが、こうべの白髪を銀函にいれて、王宮に、おさめたり。
のちの輪王に相伝す。
のちの輪王、また、白髪おいぬれば、先王に一如なり。
転輪聖王の出家ののち、余命のひさしきこと、いまの人に、たくらぶべからず。
すでに、輪王、八万上という。

その身に三十二相を具せり。
いまの人、およぶべからず。
しかあれども、白髪をみて無常をさとり、白業を修して功徳を成就せんがために、かならず、出家、修道するなり。
いまの諸王、転輪聖王におよぶべからず。
いたずらに光陰を貪欲の中にすごして、出家せざるは、来世、くやしからん。
いわんや、小国、辺地は、王者の名あれども、王者の徳なし。
貪して、とどまるべからず。
出家、修道せば、
諸天、よろこび、まもるべし。
龍神、うやまい保護すべし。
諸仏の仏眼、あきらかに証明し随喜しましまさん。
戯女のむかしは、信心にあらず。
戯笑のために比丘尼の衣を著せり。
おそらくは、軽法の罪あるべしといえども、この衣をその身に著せしちから、二世に、仏法にあう。
比丘尼衣とは、袈裟なり。
戯笑、著、袈裟のちからによりて、第二生、迦葉仏のときに、あうたてまつり、出家、受戒し、比丘尼となれり。
破戒によりて堕、獄、受、罪すといえども、功徳、くちずして、ついに、釈迦牟尼仏に、あいたてまつり、見仏聞法、発心、修習して、ながく三界をはなれて、大阿羅漢となれり。
六通三明を具足せり。
かならず、無上道なるべし。
しかあれば、すなわち、はじめより一向、無上菩提のために、清浄の信心をこらして、袈裟を信受せん、その功徳の増長、かの戯女の功徳よりも、すみやかならん。
いわんや、また、無上菩提のために、菩提心をおこし、出家、受戒せん、その功徳、無量なるべし。
人身にあらざれば、この功徳を成就すること、まれなり。
西天、東土、出家、在家の菩薩、祖師、おおしというとも、龍樹祖師におよばず。
酔婆羅門、戯女、等の因縁、もっぱら、龍樹祖師、これを挙して、衆生の出家、受戒をすすむ。
龍樹祖師、すなわち、世尊、金口の所記なり。

世尊、言、
南洲、有、四種、最勝。
一、見仏。
二、聞法。
三、出家。
四、得道。

あきらかに、しるべし。
この四種、最勝、すなわち、北洲にも、すぐれ、諸天にも、すぐれたり。
いま、われら、宿善根力にひかれて最勝の身をえたり。
歓喜、随喜して、出家、受戒すべきものなり。
最勝の善身を、いたずらにして、露命を無常のかぜに、まかすることなかれ。
出家の生生をかさねば、積功累徳ならん。

世尊、言、
於、仏法中、出家、果報、不可思議。
仮使、有、人、起、七宝塔、高、至、三十三天、所得、功徳、不如、出家。
何、以、故？
七宝塔、者、貪悪愚人、能、破壊、故。
出家功徳、無有、壊毀。
是故、
若、教、男女、
若、放、奴婢、
若、聴、人民、
若、自己身、
出家、入道、者、
功徳、無量。

世尊、あきらかに、功徳の量をしろしめして、かくのごとく、校量しましま
す。
福増、これをききて、一百二十歳の耄及なれども、しいて出家、受戒し、少
年の席末につらなりて修練し、大阿羅漢となれり。
しるべし。
今生の人身は、四大、五蘊、因縁、和合して、かりになせり。
八苦、つねにあり。
いわんや、刹那、刹那に生滅して、さらに、とどまらず。

いわんや、一弾指のあいだに六十五の刹那、生滅すといえども、みづから、くらきによりて、いまだ、しらざるなり。
すべて一日夜があいだに、六十四億九万九千九百八十の刹那ありて、五蘊、生滅すといえども、しらざるなり。
あわれむべし、われ、生滅すといえども、みずから、しらざること。
この刹那、生滅の量、ただ仏世尊、ならびに、舎利弗とのみ、しらせたまう。
余聖、おおかれども、ひとりも、しるところにあらざるなり。
この刹那、生滅の道理によりて、衆生、すなわち、善悪の業をつくる。
また、刹那、生滅の道理によりて、衆生、発心、得道す。
かくのごとく生滅する人身なり。
たとえ、おしむとも、とどまらじ。
むかしより、おしんで、とどまれる一人、いまだ、なし。
かくのごとく、われにあらざる人身なりといえども、めぐらして出家、受戒するがごときは、三世の諸仏の所証なる阿耨多羅三藐三菩提、金剛不壊の仏果を証するなり。
だれの智人が欣求せざらん？
これによりて、過去、日月灯明仏の八子、みな、四天下を領する王位をすてて出家す。
大通智勝仏の十六子、ともに、出家せり。
大通、入、定のあいだ、衆のために、法華をとく。
いまは、十方の如来となれり。
父王、転輪聖王の所将衆中、八万億人も、十六王子の出家をみて、出家をもとむ。
輪王、すなわち、聴許す。
妙荘厳王の二子、ならびに、父王、夫人、みな、出家せり。
しるべし。
大聖、出現のとき、かならず、出家するを正法とせり、ということ、あきらけし。
このともがら、おろかにして出家せり、というべからず。
賢にして出家せり、と、しらば、ひとしからんことを、おもうべし。
今、釈迦牟尼仏のときは、羅睺羅、阿難、等、みな、出家し、また、千釈の出家あり、二万釈の出家あり。
勝躅というべし。
はじめ、五比丘、出家より、おわり、須跋陀羅が出家にいたるまで、帰仏のともがら、すなわち、出家す。

しるべし、無量の功徳なり、ということ。
しかあれば、すなわち、世人もし子孫をあわれむことあらば、いそぎ出家せしむべし。
父母をあわれむことあらば、出家をすすむべし。
かるがゆえに、偈に、いわく、
若、無、過去世、応、無、過去仏。
若、無、過去仏、無、出家、受具。

この偈は、諸仏、如来の偈なり。
外道の、過去世なし、というを、破するなり。
しかあれば、しるべし。
出家、受具は、過去諸仏の法なり。
われら、さいわいに、諸仏の妙法なる出家、受戒するときに、あいながら、むなしく出家、受戒せざらん、なにの、さわりによる？　と、しりがたし。
最下品の依身をもって、最上品の功徳を成就せん、閻浮提、および、三界のなかには、最上品の功徳なるべし。
この閻浮の人身、いまだ滅せざらんとき、かならず、出家、受戒すべし。

古聖、云、
出家之人、雖、破、禁戒、猶、勝、在俗受持戒者。
故、経、偏、説、
勧、人、出家。
其恩、難、報。

復、次、
勧、出家、者、即是、勧、人、修、尊重業。
所得、果報、勝、琰魔王、輪王、帝釈。
故、経、偏、説、
勧、人、出家。
其恩、難、報。

勧、人、受持、近事、戒、等、無、如是事。
故、経、不証。

しるべし。
出家して禁戒を破すといえども、在家にて戒をやぶらざるには、すぐれたり。

帰仏、かならず、出家、受戒、すぐれたるべし。
出家、すすむる果報、
琰魔王にも、すぐれ、
輪王にも、すぐれ、
帝釈にも、すぐれたり。
たとえ毘舎、首陀羅なれども、出家すれば、刹利にも、すぐるべし。
なお、琰魔王にも、すぐれ、
輪王にも、すぐれ、
帝釈にも、すぐる。
在家戒、かくのごとくならず。
ゆえに、出家すべし。
しるべし、世尊の所説、はかるべからざる、を。
世尊、および、五百大阿羅漢、ひろく、あつめたり。
まことに、しりぬ、仏法におきて、道理、あきらかなるべし、ということ。
一聖、三明六通の智慧、なお、近代の凡師のはかるべきにあらず。
いわんや、五百の聖者をや？
近代の凡師らが、しらざるところをしり、みざるところをみ、きわめざるところをきわめたりといえども、凡師らが、しれるところ、しらざるにあらず。
しかあれば、凡師の黒闇、愚鈍の説をもって、聖者、三明の言に、比類することなかれ。

婆沙、一百二十、云、
発心、出家、尚、名、聖者。
況、得、忍法？

しるべし。
発心、出家すれば、聖者となづくるなり。

釈迦牟尼仏、五百大願中、第一百三十七願、
我、未来、成、正覚、已、
或、有、諸人、於、我法中、欲、出家、者、願、無、障礙。
所謂、羸劣、失念、狂乱、憍慢、無有、畏懼、痴、無智恵、多諸結使、其心、散乱。
若、不爾者、不、成、正覚。

第一百三十八願、

我、未来、成、正覚、已、
或、有、女人、欲、於、我法、出家、学道、受大戒、者、願、令、成就。
若、不爾者、不、成、正覚。

第三百十四願、
我、未来、成、正覚、已、
若、有、衆生、少、於、善根、於、善根中、心、生、愛、楽、
我、当、令、其、於、未来世、在、仏法中、出家、学道、安、止、令、住、
梵浄十戒。
若、不爾者、不、成、正覚。

しるべし。
いま、出家する善男子、善女人、みな、世尊の往昔の大願力にたすけられて、
さわりなく、出家、受戒することをえたり。
如来、すでに誓願して出家せしめまします。
あきらかに、しりぬ、最尊最上の大功徳なり、ということを。

仏、言、
及、
有、依、我、剃除、鬚、髪、著、袈裟片、不受戒者、
供養、是人、亦、得、乃至、入、無畏城。
以、是縁、故、
我、如是、説。

あきらかに、しる。
剃除、鬚、髪して袈裟を著せば、戒をうけずというとも、これを供養せん人、
無畏城にいらん。

又、云、
若、復、有、人、為、我、出家、不得、禁戒、剃除、鬚、髪、著、袈裟片、
有、以、非法、悩害、此者、乃至、破壊、三世諸仏、法身、報身、
乃至、盈満、三悪道、故。

仏、言、
若、有、衆生、為、我、出家、剃除、鬚、髪、被服、袈裟、設不持戒、
彼等、悉、已、為、涅槃印之所印、也。
若、復、出家、不持戒者、

有、以、非法、而、作、悩乱、
罵辱、
毀訾、
以、手、刀、杖、打縛、斫截、
若、奪、衣鉢、
及、奪、種種資生具、者、
是人、則、壊、三世諸仏、真実報身、
則、挑、一切人、天、眼目。
是人、為、欲、隠没、諸仏所有、正法、三宝種、故。
令、諸天、人、不得、利益、堕、地獄、故。
為、三悪道、増長、盈満、故。

しるべし。
剃髪、染衣すれば、たとえ不持戒なれども、無上、大涅槃の印のために印せらるるなり。
ひと、これを悩乱すれば、三世諸仏の報身を壊するなり。逆罪と、おなじかるべし。
あきらかに、しりぬ、出家の功徳、ただちに三世諸仏にちかし、ということを。

仏、言、
夫、出家者、不、応、起、悪。
若、起悪者、則、非、出家。
出家之人、身口、相応。
若、不相応、則、非、出家。
我、
棄、父母、兄弟、妻子、眷属、知識、
出家、修道。
正、是、修、集、諸善覚、時。
非、是、修、集、不善覚、時。
善覚、者、憐愍、一切衆生、猶、如、赤子。
不善覚、者、与、此、相違。

それ、出家の自性は、憐愍、一切衆生、猶、如、赤子なり。
これ、すなわち、不起、悪なり、身口、相応なり。
その儀、すでに出家なるがごときは、その徳、いま、かくのごとし。

仏、言、
復、次、
舎利弗、
菩薩摩訶薩、若、欲、出家日、
即、成、阿耨多羅三藐三菩提、
即、是日、転、法輪、
転、法輪、時、
無量、阿僧祇、衆生、遠塵離垢、於、諸法中、得、法眼浄、
無量、阿僧祇、衆生、得、一切法、不受、故、諸漏、心、得、解脱、
無量、阿僧祇、衆生、於、阿耨多羅三藐三菩提、得、不退転、
当、学、般若波羅蜜。

いわゆる、学般若菩薩とは、祖祖なり。
しかあるに、阿耨多羅三藐三菩提は、かならず、出家、即日に成就するなり。
しかあれども、三阿僧祇劫に修、証し、無量阿僧祇劫に修、証するに、有辺、無辺に染汚するにあらず。
学人、しるべし。

仏、言、
若、菩薩摩訶薩、作、是思惟、
我、於、何時、当、捨、国位、出家之日、即、成、無上正等菩提、
還、於、是日、転、妙法輪、即、令、無量、無数、有情、遠塵離垢、生、浄法眼、
復、令、無量、無数、有情、永、尽、諸漏、心慧、解脱、
亦、令、無量、無数、有情、皆、於、無上正等菩提、得、不退転、
是菩薩摩訶薩、欲、成、斯事、応、学、般若波羅蜜。

これ、すなわち、最後身の菩薩として、王宮に降生し、捨、国位、成、正覚、転、法輪、度、衆生の功徳を宣説しましますなり。

悉達太子、従、車匿、辺、索、取、摩尼、雑飾、荘厳、七宝、靶、刀、
自、以、右手、執、於、彼刀、
従、鞘、抜、出、
即、以、左手、攬捉、紺青優鉢羅色、螺髻之髪、
右手、自、持、利刀、割、取、

以、左手、擎(ささげる)、擲、置、空中。
時、天帝釈、以、希有心、生、大歓喜、捧、太子髻、不、令、堕、地。
以、天妙衣、承受、接取。
爾時、諸天、以、彼勝上天諸供具、而、供養、之。

これ、釈迦如来、そのかみ、太子のとき、夜半に踰城し、日、たけて、やまに、いたりて、みずから頭髪を断じまします。
ときに、浄居天、きたりて、頭髪を剃除したてまつり、袈裟をささげたてまつれり。
これ、かならず、如来、出世の瑞相なり、諸仏世尊の常法なり。
三世十方諸仏、みな、一仏として在家成仏の諸仏ましまさず。
過去、有、仏のゆえに、出家、受戒の功徳あり。
衆生の得道、かならず、出家、受戒によるなり。
おおよそ、出家、受戒の功徳、すなわち、諸仏の常法なるがゆえに、その功徳、無量なり。
聖教のなかに、在家成仏の説あれど、正伝にあらず。
女身成仏の説あれど、また、これ正伝にあらず。
仏祖、正伝するは、出家、成仏なり。

第四祖、優婆毱多尊者、有、長者子、名、曰、提多迦、来、礼、尊者、志求、出家。
尊者、曰、
汝、身、出家？　心、出家？

答、曰、
我、求、出家、非、為、身心。

尊者、曰、
不、為、身心、復、誰、出家？

答、曰、
夫、出家、者、無、我、我所。
無、我、我所、故、即、心、不、生滅。
心、不、生滅、故、即是、
常道。
諸仏、亦、常。

心、無、形、相。
其体、亦、然。

尊者、曰、
汝、当、大悟、心、自、通達。
宜、依、仏法僧、紹隆、聖種。

即、与、出家、受具。

それ、諸仏の、法にあうたてまつりて出家するは、最第一の勝、果報なり。
その法、すなわち、
我のためにあらず。
我所のためにあらず。
身心のためにあらず。
身心の、出家するにあらず。
出家の我、我所にあらざる道理、かくのごとし。
我、我所にあらざれば、諸仏の法なるべし。
ただ、これ、諸仏の常法なり。
諸仏の常法なるがゆえに、我、我所にあらず、身心にあらざるなり。
三界の、肩をひとしくするところにあらず。
かくのごとくなるがゆえに、出家、これ、最上の法なり。
頓にあらず。漸にあらず。
常にあらず。無常にあらず。
来にあらず。去にあらず。
住にあらず。
作にあらず。
広にあらず。狭にあらず。
大にあらず。小にあらず。
作にあらず。無作にあらず。
仏法、単伝の祖師、かならず、出家、受戒せずということなし。
いまの、提多迦、はじめて優婆毱多尊者にあうたてまつりて出家をもとむる道理、かくのごとし。
出家、受具し、優婆毱多に参学し、ついに、第五の祖師となれり。

第十七祖、僧伽難提尊者、室羅閥城、宝荘厳王之子、也。
生、而、能、言。

常、讃、仏事。
七歳、即、厭、世楽。
以、偈、告、其父母、曰、
稽首、大慈父。
和南、骨肉母。
我、今、欲、出家。
請願、哀愍、故。

父母、固、止、之。
遂、終日、不食。
乃、許、其在家出家。
号、僧伽難提。
復、命、沙門、禅利多、為、之、師。
積、十九載、未嘗、退、倦。
尊者、毎、自、念、言、
身、居、王宮。
胡(なんぞ)、為、出家？

一夕、天光、下属。
見、一路、坦平。
不覚、徐行、約十里許、至、大岩前、有、石窟、焉。
乃、燕寂、于、中。
父、
既、失、子、
即、擯、禅利多、
出国、訪尋、其子、
不知、所在。
経、十年、尊者、得法、授記、已、行、化、至、摩提国。

在家出家の称、このとき、はじめて、きこゆ。
ただし、宿善のたすくるところ、天光のなかに坦、路をえたり。
ついに、王宮をいでて石窟にいたる。
まことに、勝躅なり。
世楽をいとい、俗塵をうれうるは、聖者なり。
五欲をしたい、出離をわするるは、凡愚なり。

代宗、粛宗、しきりに僧徒にちかづけりといえども、なお、王位をむさぼりて、いまだ、なげすてず。
盧居士は、すでに親を辞して祖となる、出家の功徳なり。
龐居士は、たからをすてて、ちりをすてず、至愚なりというべし。
盧公の道力と、龐公が稽古と、比類にたらず。
あきらかなるは、かならず、出家す。
くらきは、家におわる。黒業の因縁なり。

南嶽懐譲禅師、一日、自、歎、曰、
夫、出家、者、為、無生法。
天上、人間、無有、勝者。

いわく、無生法とは、如来の正法なり。
このゆえに、天上、人間に、すぐれたり。
天上というは、欲界に六天あり、色界に十八天あり、無色界に四種。
ともに、出家の道に、およぶことなし。

盤山宝積禅師、曰、
諸禅徳、
可、中、学、道、
似、地、擎、山、不知、山之孤峻。
如、石、含、玉、不知、玉之無瑕。
若、如是、者、是、名、出家。

仏祖の正法、かならずしも知、不知にかかわれず。
出家は、仏祖の正法なるがゆえに、その功徳、あきらかなり。

鎮州、臨済院、義玄禅師、曰、
夫、出家、者、
須、弁得、平常、真正、見解、
弁、仏、
弁、魔、
弁、真、
弁、偽、
弁、凡
弁、聖。

若、如是弁得、名、真出家。
若、魔、仏、不弁、
正、是、出一家、入一家、
喚、作、造業衆生、
未得、名、為、真正出家。

いわゆる、平常、真正、見解というは、深信、因果、深信、三宝、等なり。
弁、仏というは、ほとけの因中、果上の功徳を念ずること、あきらかなるなり。
真偽、凡、聖をあきらかに弁肯するなり。
もし魔、仏をあきらめざれば、学道を阻、壊し、学道を退転するなり。
魔事を覚知して、その事に、したがわざれば、弁道、不退なり。
これを真正出家の法とす。
いたずらに魔事を仏法とおもうもの、おおし。
近世の非なり。
学者、はやく、魔をしり、仏をあきらめ、修、証すべし。

如来、般涅槃時、迦葉菩薩、白、仏、言、
世尊、
如来、具足、知諸根力、
定、知、善星、当、断善根。
以、何因縁、聴、其出家？

仏、言、
善男子、
我、於、往昔、初出家時、
吾弟、難陀、
従弟、阿難、調婆達多、
子、羅睺羅、
如是等、輩、皆、悉、随、我、出家、修道。
我、若、不聴、善星、出家、
其人、次、当、得、紹、王位、其力、自在、当、壊、仏法。
以、是因縁、我、便、聴許、出家、修道。( or 聴、其出家、修道。)
善男子、
善星比丘、若、不出家、亦、断善根、於、無量世、都、無、利益。
今、出家、已、

雖、断善根、
能、受持、戒、
供養、恭敬、耆旧、長宿、有徳之人、
修習、初禅、乃至、四禅。
是、名、善因。
如是善因、能、生、善法。
善法、既、生、能、修習、道。
既、修習、道、当、得、阿耨多羅三藐三菩提。
是故、我、聴、善星出家。
善男子、
若、我、不聴、善星比丘、出家、受戒、
則、不得称、我、為、如来、具足、十力。
善男子、
仏、観、
衆生、具足、善法、及、不善法。
是人、雖、具、如是二法、
不久、能、断、一切善根、具、不善根。
何以故？
如是衆生、不親、善友、
不聴、正法、
不善思惟、
不、如法、行。
以、是因縁、能、断善根、具、不善根。

しるべし。
如来、世尊、あきらかに、衆生の断善根となるべきをしらせたまうといえども、善因をさずくるとして、出家をゆるさせたまう。
大慈大悲なり。
断善根となること、善友にちかづかず、正法をきかず、善思惟せず、如法に行ぜざるによれり。
いま、学者、かならず、善友に親近すべし。
善友とは、諸仏まします、と、とくなり、罪、福あり、と、おしうるなり。
因果を撥無せざるを善友とし善知識とす。
この人の所説、これ、正法なり。
この道理を思惟する、善思惟なり。
かくのごとく行ずる、如法、行なるべし。

しかあれば、すなわち、衆生は、親、疎をえらばず、ただ出家受戒をすすむべし。
のちの退、不退をかえりみざれ、修、不修をおそるることなかれ。
これ、まさに、釈尊の正法なるべし。

仏、告、諸比丘、
当、知、
閻羅王、便、作、是説、
我、当、何日、脱、此苦難、
於、人中、生、
以、得、人身、
便、得、出家、剃除、髭、髪、著、三法衣、出家、学道。

閻羅王、尚、作、是念。
何、況、汝等、今、得、人身、得、作、沙門。
是故、諸比丘、当、念、
行、身口意行、
無、令、有缺、
当、滅、五結、
修行、五根。
如是、諸比丘、当、作、是学。

爾時、諸比丘、聞、仏所説、歓喜、奉行。

あきらかに、しりぬ。
たとえ閻羅王なりといえども、人中の生をこいねがうこと、かくのごとし。
すでに、うまれたる人、いそぎ剃除、髭、髪し、著、三法衣して、学仏道すべし。
これ、余趣にすぐれたる、人中の功徳なり。
しかあるを、人間にうまれながら、いたずらに官途、世路を貪求し、むなしく国王、大臣のつかわしめとして、一生を夢幻にめぐらし、後世は黒闇におもむき、いまだ、たのむところなきは、至愚なり。
すでに、うけがたき人身をうけたるのみにあらず、あいがたき仏法にあいたてまつれり。
いそぎ諸縁を抛捨し、すみやかに出家、学道すべし。
国王、大臣、妻子、眷属は、ところごとに、かならず、あう。

仏法は、優曇華のごとくに、として、あいがたし。
おおよそ、無常、たちまちに、いたるときは、国王、大臣、親昵、従僕、妻子、珍宝、たすくる、なし。
ただひとり黄泉に、おもむくのみなり。
おのれに、したがいゆくは、ただ、これ、善悪業、等のみなり。
人身を失せんとき、人身をおしむこころ、ふかかるべし。
人身をたもてるとき、はやく出家すべし。
まさに、これ、三世の諸仏の正法なるべし。

その出家行法に、四種あり。
いわゆる、四依なり。
一、尽形寿、樹下、坐。
二、尽形寿、著、糞掃衣。
三、尽形寿、乞食。
四、尽形寿、有、病、服、陳棄薬。

共、行、此法、
方、名、出家。
方、名、為、僧。
若、不行、此、不、名、為、僧。
是故、名、出家行法。

いま、西天、東地、仏祖、正伝するところ、これ、出家行法なり。
一生、不離、叢林なるは、すなわち、この四依の行法、そなわれり。
これを行四衣と称す。
これに違して五依を建立せん、しるべし、邪法なり。
だれが信受せん？
だれが忍、聴せん？
仏祖、正伝するところ、これ、正法なり。
これによりて出家する、人間、最上、最尊の慶幸なり。
このゆえに、西天竺国に、すなわち、難陀、阿難、調達、阿那律、摩訶男、抜提、ともに、これ、獅子頬王のむまご、刹利、種姓の、もっとも尊貴なるなり、はやく出家せり。
後代の勝躅なるべし。
いま、刹利にあらざらんともがら、その身、おしむべからず。
王子にあらざらんともがら、なにの、おしむところかあらん？

閻浮提、最第一の尊貴より、三界、最第一の尊貴に帰するは、すなわち、出家なり。
自余の諸小国王、諸離車衆、いたずらに、おしむべからざるをおしみ、ほこるべからざるに、ほこり、とどまるべからざるに、とどまりて、出家せざらん。
だれが、つたなし、とせざらん？
だれが、至愚なり、とせざらん？
羅睺羅尊者は、菩薩の子なり、浄飯王のむまごなり。
帝位をゆずらんとす。
しかあれども、世尊、あながちに出家せしめまします。
しるべし、出家の法、最尊なり、と。
密行、第一の弟子として、いまにいたりて、いまだ涅槃に、いりましまさず、衆生の福田として世間に現住しまします。
西天、伝、仏正法眼蔵の祖師のなかに、王子の出家せる、しげし。
いま、震旦の初祖、これ、香至王、第三皇子なり。
王位をおもくせず、正法を伝持せり。
出家の最尊なる、あきらかに、しりぬべし。
これらに、ならぶるに、およばざる身をもちながら、出家しつべきにおきて、いそがざらん。
いかならん明日をか、まつべき？
出息、入息をまたず、いそぎ出家せん、それ、かしこかるべし。
また、しるべし。
出家、受戒の師、その恩徳、すなわち、父母に、ひとしかるべし。

禅苑清規、第一、云、
三世諸仏、皆、曰、出家、成道。
西天二十八祖、唐土六祖、伝、仏心印、尽、是、沙門。
蓋、以、厳浄、毘尼、方、能、洪範、三界。
然、則、参禅問道、戒律、為、先。
既、非、離過、防非、何、以、成仏作祖？

たとえ澆風の叢林なりとも、なお、これ、薝蔔の林なるべし。
凡木凡草のおよぶところにあらず。

また、合、水の乳のごとし。
乳をもちいんとき、この和、水の乳をもちいるべし。

余物をもちいるべからず。

しかあれば、すなわち、三世諸仏、皆、曰、出家、成道の正伝、もっとも、これ、最尊なり。
さらに、出家せざる三世諸仏おわしまさず。
これ、仏仏、祖祖、正伝の正法眼蔵、涅槃妙心、無上菩提なり。

正法眼蔵　出家功徳
建長七年乙卯、夏安居日。

# 供養諸仏

仏、言、
若、無、過去世、応、無、過去仏。
若、無、過去仏、無、出家、受具。

あきらかに、しるべし。
三世に、かならず、諸仏ましますなり。
しばらく、過去の諸仏におきて、そのはじめあり、ということなかれ。そのはじめなし、ということなかれ。
もし始終の有無を邪計せば、さらに仏法の習学にあらず。
過去の諸仏を供養したてまつり、出家し、随順したてまつるがごとき、かならず、諸仏となるなり。
供仏の功徳によりて作仏するなり。
いまだかつて一仏をも供養したてまつらざる衆生、なにによりてか作仏することあらん？
無因作仏あるべからず。

仏本行集経、第一供養品、曰、
仏、告、目犍連、

我、念、往昔、於、無量、無辺、諸世尊所、種、善根、乃至、求、於、阿耨多羅三藐三菩提。

目犍連、
我、念、往昔、作、転輪聖王身、値、三十億仏。
皆、同一号。
号、釈迦。
如来、及、声聞衆、尊重、承事、恭敬、供養、四事、具足。
所謂、衣服、飲食、臥具、湯薬。
時、彼諸仏、不、与、我、記、汝、当、得、阿耨多羅三藐三菩提、及、世間解、天人師、仏世尊、於、未来世、得、成、正覚。

目犍連、
我、念、往昔、作、転輪聖王身、値、八億諸仏。

皆、同一号。
号、燃燈。
如来、及、声聞衆、尊重、恭敬、四事、供養。
所謂、衣服、飲食、臥具、湯薬、幡蓋、華、香。
時、彼諸仏、不、与、我、記、汝、当、得、阿耨多羅三藐三菩提、及、世間解、天人師、仏世尊。

目犍連、
我、念、往昔、作、転輪聖王身、値、三億諸仏。
皆、同一号。
号、弗沙。
如来、及、声聞衆、四事、供養、皆、悉、具足。
時、彼諸仏、不、与、我、記、汝、当、作仏。

このほか、そこばくの諸仏を供養しまします。
転輪聖王の身としては、かならず、四天下を統領すべし。
供養諸仏の具、まことに、豊饒なるべし。
もし大転輪王ならば、三千界に、王なるべし。
そのときの供養、いまの凡慮、はかるべからず。
ほとけ、ときましますとも、解了すること、えがたからん。

仏蔵経、浄見品、第八、曰、
仏、告、舎利弗、

我、念、過去、求、阿耨多羅三藐三菩提、値、三十億仏。
皆、号、釈迦牟尼。
我、時、皆、作、転輪聖王、尽、形、供養、仏、及、諸弟子、衣服、飲食、臥具、医薬、為、求、阿耨多羅三藐三菩提。
而、是諸仏、不、記、我、言、汝、於、来世、当、得、作仏。
何以故？
以、我、有所得、故。

舎利弗、
我、念、過去、得、値、八千仏。
皆、号、定光。

我、時、皆、作、転輪聖王、尽、形、供養、仏、及、諸弟子、衣服、飲食、臥具、医薬、為、求、阿耨多羅三藐三菩提。
而、是諸仏、不、記、我、汝、於、来世、当、得、作仏。
何以故？
以、我、有所得、故。

舍利弗、
我、念、過去、値、六万仏。
皆、号、光明。
我、時、皆、作、転輪聖王、尽、形、供養、仏、及、諸弟子、衣服、飲食、臥具、医薬、為、求、阿耨多羅三藐三菩提。
而、是諸仏、亦、不、記、我、汝、於、来世、当、得、作仏。
何以故？
以、我、有所得、故。

舍利弗、
我、念、過世、値、三億仏。
皆、号、弗沙。
我、時、皆、作、転輪聖王、四事、供養。
皆、不、記、我。
以、有所得、故。

舍利弗、
我、念、過世、得、値、万八千仏。
皆、号、山王。
劫名、上八。
我、皆、於、此万八千仏所、剃髪、染衣、修習、阿耨多羅三藐三菩提。
皆、不、記、我。
以、有所得、故。

舍利弗、
我、念、過世、得、値、五百仏。
皆、号、華上。
我、時、皆、作、転輪聖王、悉、以、一切、供養、諸仏、及、諸弟子。
皆、不、記、我。
以、有所得、故。

舍利弗、
我、念、過世、得、値、五百仏。
皆、号、威徳。
我、悉、供養。
皆、不、記、我。
以、有所得、故。

舍利弗、
我、念、過世、得、値、二千仏。
皆、号、憍陳如。
我、時、皆、作、転輪聖王、悉、以、一切供具、供養、諸仏。
皆、不、記、我。
以、有所得、故。

舍利弗、
我、念、過世、値、九千仏。
皆、号、迦葉。
我、以、四事、供養、諸仏、及、弟子衆。
皆、不、記、我。
以、有所得、故。

舍利弗、
我、念、過去、於、万劫中、無有、仏、出。
爾時、初五百劫、有、九万辟支仏。
我、尽、形、寿、悉、皆、供養、衣服、飲食、臥具、医薬、尊重、讃嘆。

次五百劫、復、以、四事、供養、八万四千億、諸辟支仏、尊重、讃嘆。

舍利弗、
過、是千劫、已、無、復、辟支仏。
我、時、閻浮提、死、生、梵世中、作、大梵王。
如是、展転、五百劫中、常、生、梵世、作、大梵王、不生、閻浮提。

過、是五百劫、已、下生、閻浮提、治、化、閻浮提、命、終、生、四天王天。
於、中、命、終、生、忉利天、作、釈提桓因。
如是、展転、満五百劫、生、閻浮提。

満五百劫、生、於、梵世、作、大梵王。

舎利弗、
我、於、九千劫中、但、一、生、閻浮提、九千劫中、但、生、天上。
劫、尽、焼、時、生、光音天。
世界、成、已、還、生、梵世。
九千劫中、都、不生、人中。

舎利弗、
是九千劫中、無有、諸仏、辟支仏。
多、諸衆生、堕、在、悪道。

舎利弗、
是万劫、過、已、有、仏、出世。
号、曰、普守、如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏世尊。
我、於、爾時、梵世、命、終、生、閻浮提、作、転輪聖王。
号、曰、共天。
人寿、九万歳。
我、尽、形、寿、以、一切楽具、供養、彼仏、及、九十億比丘。
於、九万歳、為、求、阿耨多羅三藐三菩提。
是普守仏、亦、不、記、我、汝、於、来世、当、得、作仏。
何以故？
我、於、爾時、不能、通達、諸法実相、貪著、計我、有所得見。

舎利弗、
於,
是劫中、有、百仏、出。
名号、各、異。
我、時、皆、作、転輪聖王、尽、形、供養、仏、及、諸弟子、為、求、阿耨多羅三藐三菩提。
而、是諸仏、亦、不、記、我、汝、於、来世、当、得、作仏。
以、有所得、故。

舎利弗、
我、念、過去、第七百阿僧祇劫中、得、値、千仏。

皆、号、閻浮檀。
我、尽、形、寿、四事、供養。
亦、不、記、我。
以、有所得、故。

舎利弗、
我、念、過去、亦、於、第七百阿僧祇劫中、得、値、六百二十万、諸仏。
皆、号、見一切儀。
我、時、皆、作、転輪聖王、以、一切楽具、尽、形、供養、仏、及、諸弟子。
亦、不、記、我。
以、有所得、故。

舎利弗、
我、念、過去、亦、於、第七百阿僧祇劫中、得、値、八十四仏。
皆、号、帝相。
我、時、皆、作、転輪聖王、以、一切楽具、尽、形、供養、仏、及、諸弟子。
亦、不、記、我。
以、有所得、故。

舎利弗、
我、念、過去、亦、於、第七百阿僧祇劫中、得、値、十五仏。
皆、号、日明。
我、時、皆、作、転輪聖王、以、一切楽具、尽、形、供養、仏、及、諸弟子。
亦、不、記、我。
以、有所得、故。

舎利弗、
我、念、過世、亦、於、第七百阿僧祇劫中、得、値、六十二仏。
皆、号、善寂。
我、時、皆、作、転輪聖王、以、一切楽具、尽、形、供養。
亦、不、記、我。
以、有所得、故。

如是、展転、乃至、見、定光仏、乃、得、無生忍。
即、記、我、言、
汝、於、来世、過、阿僧祇劫、当、得、作仏。

号、釈迦牟尼、如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏世尊。

はじめ三十億の釈迦牟尼仏にあいたてまつりて、尽、形、寿、供養より、このかた、定光如来にあうたてまつらせたまうまで、みな、つねに、転輪聖王の身として、尽、形、寿、供養したてまつりまします。
転輪聖王、おおくは、八万歳已上なるべし。
あるいは、九万歳、八万歳の寿量、そのあいだの一切楽具の供養なり。
定光仏とは、燃燈如来なり。
三十億の釈迦牟尼仏にあいたてまつりまします、仏本行集経、ならびに、仏蔵経の説、おなじ。

釈迦菩薩、
初阿僧企耶、逢、事、供養、七万五千仏。
最初、名、釈迦牟尼。
最後、名、宝髻。
第二阿僧企耶、逢、事、供養、七万六千仏。
最初、即、宝髻。
最後、名、燃燈。
第三阿僧企耶、逢、事、供養、七万七千仏。
最初、即、燃燈。
最後、名、勝観。
於、修、相異熟業、九十一劫中、逢、事、供養、六仏。
最初、即、勝観。
最後、名、迦葉波

おおよそ、三大阿僧祇劫の供養諸仏、はじめ身命より、国、城、妻子、七宝、男女、等、さらに、おしむところなし。
凡慮のおよぶところにあらず。
あるいは、黄金の粟を白銀の椀にもり、みて、あるいは、七宝の粟を金、銀の椀にもり、みてて、供養したてまつる。
あるいは、小豆、あるいは、水陸の華、あるいは、栴檀、沈水香、等を供養したてまつり、あるいは五茎の青蓮華を五百の金、銀をもって買取して燃燈仏を供養したてまつりまします。
あるいは、鹿皮衣、これを供養したてまつる。
おおよそ、供仏は、諸仏の要枢にましますべきを供養したてまつるにあらず。

いそぎ、わがいのちの存せる光陰をむなしく、すごさず、供養したてまつるなり。
たとえ金、銀なりとも、ほとけのおおんため、なにの益が、あらん？
たとえ香、華なりとも、また、ほとけのおおんため、なにの益が、あらん？
しかあれども、納受せさせたまうは、衆生をして功徳を増長せしめんためのの大慈大悲なり。

大般涅槃経(、第二十二)、曰、
仏、言、
善男子、
我、念、過去、無量、無辺、那由他劫。
爾時、世界、名、曰、娑婆。
有、仏世尊。
号、釈迦牟尼、如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏世尊。
為、諸大衆、宣説、如是、大涅槃経。
我、於、爾時、従、善友、所転、聞、彼仏、当、為、大衆、説、大涅槃。
我、聞、是、已、其心、歓喜、欲、設、供養。
居、貧、無物。
欲、自、売、身。
薄福、不、售(うる)。
即、欲、還、家。
路、見、一人。
而、便、語、言、
吾、欲、売、身。
君、能、買？　不？

其人、答、曰、
我家、作業、人、無、堪者。
汝、設、能、為、我、当、買、汝。

我、即、問、言、
有、何作業、人、無、能堪？

其人、見、答、
吾、有、悪病。

良医、処薬、応、当日、服、人肉、三両。
卿、若、能、以、身肉、三両、日日、見給、便、当、与、汝、金銭、五枚。

我、時、聞、已、心中、歓喜。
我、復、語、言、
汝、与、我、銭。
仮、我七日。
須、我、事、訖、便、還、相就。

其人、見、答、
七日、不可。
審、能、爾者、当、許、一日。

善男子、
我、於、爾時、即、取、其銭、還、至、仏所、頭面礼足、尽、其所有、而、以、奉献。
然後、誠心、聴受、是経。
我、是時、闇鈍、雖、得、聞、経、唯、能、受持、一偈、文句。

如来、証、涅槃。
永、断、於、生死。
若、有、至心、聴、常、得、無量楽。

受、是偈、已、即便、還、至、彼病人家。
善男子、
我、時、雖、復、日日、与、三両、肉、以、念、偈、因縁、故、不、以、為、痛。
日日、不廃、具満、一月。
善男子、
以、是因縁、其病、得、瘥(いえる)、我身、平復、亦、無、瘡痍。
我、時、見、身、具足、完具、即、発、阿耨多羅三藐三菩提心。
一偈之力、尚、能、如是。
何、況、具足、受持、読誦。
我、見、此経、有、如是利、復、倍、発心、願、於、未来、得、成、仏道、字、釈迦牟尼。
善男子、

以、是一偈因縁力、故、令、我、今日、於、大衆中、為、諸天、人、具足、宣説。
善男子、
以、是因縁、是大涅槃、不可思議、成就、無量、無辺、功徳。
乃、是、諸仏、如来、甚深、秘密之蔵。

そのときの売身の菩薩は、今、釈迦牟尼仏の往因なり。
他経を会通すれば、初阿僧祇劫の最初、古、釈迦牟尼仏を供養したてまつりましますときなり。
かのときは、瓦師なり。
その名を大光明と称す。
古、釈迦牟尼仏、ならびに、諸弟子に供養するに、三種の供養をもってす。
いわゆる、草座、石蜜漿、燃燈なり。
そのときの発願に、いわく、
国土、名号、寿命、弟子、一如、今、釈迦牟尼仏。

かのときの発願、すでに今日、成就するものなり。
しかあれば、すなわち、ほとけを供養したてまつらんとするに、その身、まずし、ということなかれ。
そのいえ、まずし、ということなかれ。
みずから身をうりて諸仏を供養したてまつるは、いま、大師、釈尊の正法なり。
だれが、これを随喜、歓喜したてまつらざらん？
このなかに、日日に三両の身肉を割取する、ぬしにあう。
善知識なりといえども、他人の、たうべからざるなり。
しかあれども、供養の深志のたすくるところ、いまの功徳あり。
いま、われら、如来の正法を聴聞する、かの往古の身肉を処分せられたる、なるべし。
いまの四句の偈は、五枚の金銭にかうるところにあらず。
三阿僧祇、一百大劫のあいだ、受生、捨生にわするることなく、彼仏是仏のところに証明せられきたりましますところ、まことに、不可思議の功徳あるべし。
遺法の弟子、ふかく頂戴、受持すべし。
如来、すでに、一偈之力、尚、能、如是と宣説しまします。
もっとも、おおきに、ふかかるべし。

法華経、曰、
若、人、於、塔廟、宝像、及、画像、以、華、香、幡蓋、敬心、而、供養、
若、使、人、作、楽、撃、鼓、吹、角貝、簫笛、琴、箜篌、琵琶、鐃銅鈸、
如是、衆妙音、尽、持、以、供養、
或、以、歓喜心、歌唄頌、仏徳、
乃至、一少音、
皆、已、成、仏道。
若、人、散乱心、乃至、以、一華、供養、於、画像、
漸、見、無数仏。
或、有、人、礼拝、或、復、但、合掌、乃至、挙、一手、或、復、少、低頭、
以、此、供養、像、
漸、見、無量仏、自、成、無上道、広、度、無数衆。

これ、すなわち、三世諸仏の頂𩕳なり、眼睛なり。(「𩕳」は「寧頁」という一文字の漢字です。)
見賢思斉の猛利、精進すべし。
いたずらに光陰をわたることなかれ。

石頭、無際大師、いわく、
光陰、莫、虚、度。

かくのごときの功徳、みな、成仏す。
過去、現在、未来、おなじかるべし。
さらに、二あり、三ある、べからず。
供養、仏の因によりて、作仏の果を成ずること、かくのごとし。

龍樹祖師、曰、
如、求、仏果、
讃歎、一偈、
称、一南謨、
焼、一捻香、
奉献、一華、
如是、小行、必、得、作仏。

これ、ひとり龍樹祖師菩薩の所説というとも、帰命したてまつるべし。

いかに、いわんや、大師、釈迦牟尼仏、説を、龍樹祖師、正伝、挙揚しましますところなり。
われら、いま、仏道の宝山にのぼり、仏道の宝海にいりて、さいわいに、たからをとれる。
もっとも、よろこぶべし。
曠劫の供仏のちからなるべし。
必、得、作仏、うたがうべからず。決定せるものなり。
釈迦牟尼仏の所説、かくのごとし。

復、次、
有、小因大果、小縁大報。
如、求、仏道、
讃、一偈、
一称、南無仏、
焼、一捻香、
必、得、作仏。
何、況、聞知、諸法実相、不生不滅、不不生不不滅、而、行、因縁業、亦、不失。

世尊の所説、かくのごとく、あきらかなるを龍樹祖師、したしく正伝しましますなり。
誠諦の金言、正伝の相承あり。
たとえ龍樹祖師の所説なりとも、余師の説に比すべからず。
世尊の所示を正伝、流布しましますに、あうことをえたり。
もっとも、よろこぶべし。
これらの聖教をみだりに東土の凡師の虚設に比量することなかれ。

龍樹祖師、曰、
復、次、
諸仏、
恭敬、法、故、
供養、於、法、
以、法、為、師。
何以故？
三世諸仏、皆、以、諸法実相、為、師。

問、曰、
何、以、不、自、供養、身中法、而、供養、他法？

答、曰、
随、世間法。
如、比丘、欲、供養、法宝、不、自、供養、身中法、而、供養、余、持法、知法、解法者。
仏、亦、如是。
雖、身中、有、法、而、供養、余仏、法。

問、曰、
如、仏、不、求、福徳。
何以故、供養？

答、曰、
仏、従、無量阿僧祇劫中、修、諸功徳、常、行、諸善。
不、但、求、報。
敬、功徳、故、而、作、供養。
如、
仏在時、有、一盲比丘。
眼、無所見。
而、以、手、縫、衣。
時、針、袵、脱。
便、言、
誰、愛、福徳？
為、我、袵、針。

是時、仏、到、其所、語、比丘、
我、是、愛福徳人。
為、汝、袵来。

是比丘、識、仏声、疾、起、著、衣、礼仏足、白、仏、言、
仏、功徳、已、満。
云何、言、愛、福徳？

仏、報、言、
我、雖、功徳、已、満、我、深知、功徳因、功徳果報、功徳力。

今、我、於、一切衆生中、得、最第一、由、此功徳。
是故、我、愛。

仏、
為、此比丘、讃、功徳、已、
次、為、随、意、説、法。

是比丘、得、法眼浄、肉眼、更、明。

この因縁、むかしは、先師の室にして夜話をきく。
のちには、智度論の文にむかうて、これを撿校す。
伝法、祖師の示誨、あきらかにして遺落せず。
この文、智度論、第十に、あり。
諸仏、かならず、諸法実相を大師としましますこと、あきらけし。
釈尊、また、諸仏の常法を証しまします。
いわゆる、諸法実相を大師とする、というは、仏法僧、三宝を供養、恭敬したてまつるなり。
諸仏は、無量阿僧祇劫、そこばくの功徳、善根を積集して、さらに、その報をもとめず。
ただ功徳を恭敬して供養しましますなり。
仏果、菩提のくらいにいたりて、なお、小功徳を愛し、盲比丘のために衽、針しまします。
仏果の功徳をあきらめん、とおもわば、いまの因縁、まさしく、消息なり。
しかあれば、すなわち、仏果、菩提の功徳、諸法実相の道理、いまのよにある凡夫のおもうがごとくには、あらざるなり。
いまの凡夫のおもうところは、
造悪の諸法実相ならん、とおもう。
有所得のみ仏果、菩提ならん、とおもう。

かくのごとくの邪見は、たとえ八万劫をしるというとも、いまだ本劫本見、末劫末見をのがれず。
いかでか、唯仏与仏の究尽しましますところの諸法実相を究尽すること、あらん？
ゆえ、いかん？　となれば、
唯仏与仏の究尽しましますところ、これ、諸法実相なるがゆえなり。

おおよそ、供養に十種あり。
いわゆる、
一、者、身供養。
二、者、支提供養。
三、者、現前供養。
四、者、不現前供養。
五、者、自作供養。
六、者、他作供養。
七、者、財物供養。
八、者、勝供養。
九、者、無染供養。
十、者、至処道供養。

このなかの第一身供養とは、
於、仏色身、而、設、供養、名、身供養。

第二、供、仏霊廟、名、支提供養。

僧祇律、曰、
有、舎利、者、名、為、塔婆。
無、舎利、者、説、為、支提。
或、曰、通名、支提。
又、梵、曰、塔婆。称、偸婆。
此、翻、方墳。亦、言、霊廟。
阿含、言、支徴(知荷反)

あるいは、塔婆と称し、あるいは、支提と称する。
おなじきに、にたれども、南嶽、思大禅師の法華懺法に、いわく、
一心、敬礼、十方世界、舎利、尊像、支提、妙塔、多宝如来全身宝塔。

あきらかに、支提と妙塔と、舎利と尊像とは、別なるがごとし。

僧祇律第(、第三十三)、曰、
塔法、者、
仏、住、拘薩羅国、遊行時、
有、婆羅門、
耕、地。

見、世尊行過、持、牛杖、拄(つく)、地、礼、仏。
世尊、見、已、便、発、微笑。
諸比丘、白、仏、
何因縁故、笑？
唯、願、欲、聞。

仏、便、告、諸比丘、
是婆羅門、今、礼、二世尊。

諸比丘、白、仏、言、
何等、二仏？

仏、告、諸比丘、
礼、我、当、其杖下、有、迦葉仏塔。

比丘、白、仏、言、
願、見、迦葉仏塔。

仏、告、諸比丘、
汝、従、此婆羅門、索、土塊、並、是地。

諸比丘、即便、索、之。
時、婆羅門、便、与、之。
得、已、爾時、世尊、即、現出、迦葉仏七宝塔、高、一由延、面広、半由延。
婆羅門、見、已、即便、白、仏、言、
世尊、
我姓、迦葉。
是、我、迦葉塔。

爾時、世尊、即、於、彼家、作、迦葉仏塔。
諸比丘、白、仏、言、
世尊、
我、得、授、泥土？　不？

仏、言、
得、授。

即、時、説、偈、言、
真金、百、千担。
持、用、行、布施、不如、一団泥、敬心、治、仏塔。

爾時、世尊、自、起、迦葉仏塔、下、基、四方、周帀、欄楯、円、起、二重、方牙、四、出、上、施、播、蓋、長、表、輪相。
仏、言、
作塔法、応、如是。

塔、成、已、世尊、敬、過去仏、故、便、自、作、礼。
諸比丘、白、仏、言、
世尊、
我、得、作、礼？　不？

仏、言、
得。

即、説、偈、言、
人等、百、千金、持、用、行、布施、不如、一善心、恭敬、礼、仏塔。

爾時、世人、聞、世尊作塔、持、香、華、来、奉、世尊。
世尊、恭敬、過去仏、故、即、受、華、香、持、供養、塔。
諸比丘、白、仏、言、
我等、得、供養？　不？

仏、言、
得。

即、説、偈、言、
百、千車、真金、持、用、行、布施、不如、一善心、華、香、供養、塔。

爾時、大衆、雲集。
仏、告、舍利弗、
汝、為、諸人、説、法。

仏、即、説、偈、言、
百、千閻浮提、満、中、真金、施、不如、一法、施、随順、令、修行。

爾時、座中、有、得道者。
仏、即、説、偈、言、
百、千、世界中、満、中、真金、施、不如、一法、施、随順、見、真諦。

爾時、婆羅門、得、不壊信、即、於、塔前、飯、仏、及、僧。

時、波斯匿王、聞、世尊造迦葉仏塔、即、勅、載、七百車、瓦、来詣、仏所、頭面礼足、白、仏、言、
世尊、
我、欲、広、作、此塔。
為、得？　不？

仏、言、
得。

仏、告、大王、
過去世時、迦葉仏、般泥洹時、
有、王、名、吉利、欲、作、七宝塔。
時、有、臣、白、王、
未来世、当、有、非法人、出、当、破、此塔、得、重罪。
唯、願、大王、当、以、瓦、作、金、銀、覆、上。
若、取金銀者、塔、故、在、得、全。

王、即、如、臣言、以、瓦、作、金、薄、覆、上。
高、一由延。
面広、半由延。
銅、作、欄楯。
経、七年七月七日、乃、成。
作、成、已、香、華、供養、仏、及、比丘僧。

波斯匿王、白、仏、言、
彼王、福徳、多、有、珍宝。
我、今、当、作、不及、彼王。

即便、作、経、七月七日、乃、成。
成、已、供養、仏、及、比丘僧。

作塔法、者、
下、基、四方、周帀、欄楯。
円、起、二重。
方牙、四、出。
上、施、播、蓋。
長、表、輪相。

若、言、世尊、已、除、貪欲、瞋恚、愚痴、用、是塔、
為、得、越毘尼罪。
業報、重、故。

是、名、塔法。

塔事、者、
起、僧伽藍、時、先、預、度、好地、作、塔、所。
塔、不得、在南、不得、在西。応、在東、応、在北。
不得、僧地、侵、仏地。
仏地、不得、侵、僧地。
若、塔、近、死尸林、若、狗、食残、持来、汚、地、応、作、垣牆。
応、在西、若、南、作、僧坊。
不得、使、僧地、水、流入、仏地。
仏地、水、得、流入、僧地。
塔、応、在、高顕所、作。
不得、在、塔垣中、曬、浣染衣、著、革履、覆、頭、覆、肩、涕唾、地。
若、作、是言、
世尊、貪欲、瞋恚、愚痴、已、除、用、是塔、
為、得、越毘尼罪。
業報、重、故。
是、名、塔事。

塔龕、者、
爾時、波斯匿王、往詣、仏所、頭面礼足、白、仏、言、
世尊、
我等、為、迦葉仏、作塔。
得、作、龕？　不？

仏、言、
得。
過去世時、迦葉仏、般泥洹後、吉利王、為、仏、起、塔。
四面、作、龕。
上、作、獅子像、種種彩画。
前、作、欄楯。安置、華、所。
龕内、懸、旗、蓋。
若、人、言、世尊、貪欲、瞋恚、愚痴、已、除、但、自、荘厳、而、受、楽、者、
得、越毘尼罪。
業報、重。
是、名、塔龕。

あきらかに、しりぬ。
仏果、菩提のうえに、古仏のために塔をたて、これを礼拝、供養したてまつる、これ、諸仏の常法なり。
かくのごとくの事、おおけれど、しばらく、これを挙揚す。
仏法は、有部、すぐれたり。
そのなかに、僧祇律、もっとも根本なり。
僧祇律は、法顕、はじめて荊棘をひらきて西天にいたり、霊山にのぼれりし、ついでに、将来するところなり。
祖祖、正伝しきたれる法、まさしく、有部に相応せり。

第三、現前供養。

面対、仏身、及与、支提、而、設、供養。

第四、不現前供養。

於、不現前、仏、及、支提、広、設、供養。

謂、
現前、共、不現前、供養、仏、及、支提、塔廟、並、供、不現前仏、及、支提、塔廟。
現前供養、得、大功徳。
不現前供養、得、大大功徳。
境、寛広、故。

現前、不現前供養、者、得、最大大功徳。

第五、自作供養。

自身、供養、仏、及、支提。

第六、他作供養、仏、及、支提。
有、少財物、不依、懈怠、教、他、施、作、也。

謂、自他供養、彼此、同、為。
自作供養、得、大功徳。
教、他、供養、得、大大功徳。
自他供養、得、最大大功徳。

第七、財物供養、仏、及、支提、塔廟、舎利。

謂、財、有、三種。
一、資具供養。謂、衣食、等。
二、敬具供養。謂、香、華、等。
三、厳具供養。謂、余一切宝、荘厳、等。

第八、勝供養。

勝、有、三。
一、専、設、種種供養。
二、純浄信心、信、仏徳、重、理、合、供養。
三、回向心、求、仏、心中、而、設、供養。

第九、無染供養、者、
無染、有、二。
一、心、無染、離、一切過。
二、財物、無染、離、非法過。

第十、至処道供養。

謂、供養、順、果、名、至処道供養。
仏果、是、其所、至之所。
供養之行、能、至、彼所。

名、至処道。
至処道供養、
或、名、法供養。
或、名、行供養。

就、中、有、三。
一、財物供養、為、至処道供養。
二、随喜供養、為、至処道供養。
三、修行供養、為、至処道供養。

供養、於、仏、既、有、此十供養。
於、法、於、僧、類、亦、同然。

謂、供養、法、者、
供養、仏所説、理、教行法、並、供養、経巻。

供養、僧、者、謂、
供養、一切、三乗聖衆、及、其支提、並、其形像、塔廟、及、凡夫僧。

次、供養心、有、六種。

一、福田無上心。

生、福田中最勝。

二、恩徳無上心。

一切善楽、依、三宝、出生。

三、生一切衆生最勝心。

四、如優曇鉢華難遇心。

五、三千大千世界殊独一心。

六、一切世間出世間具足依義心。

謂、如来、具足、世間、出世間法、能、与、衆生、為、依止所。

名、具足依義。

以、此六心、雖、是、少物、供養、三宝、能、獲、無量、無辺、功徳。
何、況、其多。

かくのごとくの供養、かならず、誠心に修設すべし。
諸仏、かならず、修しきたりましますところなり。
その因縁、あまねく経、律に、あきらかなれども、なお、仏祖、まのあたり、正伝しきたりましします。
執事服労の日月、すなわち、供養の時節なり。
形像、舎利を安置し、供養、礼拝し、塔廟をたて、支提をたつる儀則、ひとり仏祖の屋裏に正伝せり。
仏祖の児孫にあらざれば、正伝せず。
また、もし如法に正伝せざれば、法儀、相違す。
法儀、相違するがごときは、供養、まことならず。
供養、まことならざれば、功徳、おろそかなり。
かならず、如法、供養の法、ならい、正伝すべし。
令韜禅師は、曹谿の塔頭に陪侍して年月をおくり、盧行者は昼夜にやすまず碓米供衆する、みな、供養の如法なり。
これ、その少分なり。
しげく、あぐるに、いとまあらず。
かくのごとく供養すべきなり。

正法眼蔵　供養諸仏
建長七年、夏安居日。

# 帰依三宝

禅苑清規、曰、
敬、仏法僧？　否？

(一百二十問、第一)

あきらかに、しりぬ。
西天、東土、仏祖、正伝するところは、恭敬、仏法僧なり。
帰依せざれば、恭敬せず。
恭敬せざれば、帰依すべからず。
この帰依、仏法僧の功徳、かならず、感応道交するとき、成就するなり。
たとえ天上、人間、地獄、鬼、畜なりといえども、感応道交すれば、かならず、帰依したてまつるなり。
すでに帰依したてまつるがごときは、生生、世世、在在所所に増長し、かならず、積功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり。
おのずから悪友にひかれ、魔障にあうて、しばらく断善根となり、一闡提となれども、ついには続善根し、その功徳、増長するなり。
帰依、三宝の功徳、ついに、不朽なり。
その帰依、三宝とは、まさに、浄信をもっぱらにして、あるいは、如来、現在、世にもあれ、あるいは、如来、滅後にもあれ、合掌し低頭して、口にとなえて、いわく、
我、某甲、
従、今身、至、仏身、
帰依、仏、
帰依、法、
帰依、僧、
帰依、仏、両足尊、
帰依、法、離欲尊、
帰依、僧、衆中尊、
帰依、仏、竟、
帰依、法、竟、
帰依、僧、竟。

はるかに仏果、菩提をこころざして、かくのごとく僧那を始発するなり。

しかあれば、すなわち、身心、いまも刹那、刹那に生滅すといえども、法身、かならず長養して、菩提を成就するなり。
いわゆる、帰依とは、
帰は、帰投なり。
依は、依伏なり。
このゆえに、帰依という。
帰投の相は、たとえば、子の、父に帰するがごとし。
依伏は、たとえば、民の、王に依するがごとし。
いわゆる、救済の言なり。
仏は、これ、大師なるがゆえに、帰依す。
法は、良薬なるがゆえに、帰依す。
僧は、勝友なるがゆえに、帰依す。

問、
何故、偏、帰、此三？

答、
以、此三種、畢竟、帰所。
能、令、衆生、出離、生死。
証、大菩提。
故、帰。

此三種、畢竟、不可思議、功徳なり。

仏は、
西天には、仏陀耶と称す。
震旦には、覚と翻す。
無上正等覚なり。

法は、
西天には、達磨と称す。
また、曇無と称す。
梵音の不同なり。
震旦には、法と翻す。
一切の善、悪、無記の法、ともに、法と称すといえども、いま、三宝のなかの帰依するところの法は、軌則の法なり。

僧は、
西天には、僧伽と称す。
震旦には、和合衆と翻す。

かくのごとく称讃しきたれり。

住持三宝。

形像、塔廟、仏宝。
黄紙朱軸、所伝、法宝。
剃髪、染衣、戒法儀相、僧宝。

化儀三宝。

釈迦牟尼世尊、仏宝。
所転法輪、流布聖教、法宝。
阿若憍陳如等五人、僧宝。

理体三宝。

五分法身、名、為、仏宝。
滅諦無為、名、為、法宝。
学無学功徳、名、為、僧宝。

一体三宝。

証理大覚、名、為、仏宝。
清浄離染、名、為、法宝。
至理和合、無擁無滞、名、為、僧宝。

かくのごとくの三宝に帰依したてまつれるなり。
もし薄福少徳の衆生は、三宝の名字、なお、ききたてまつらざるなり。
いかに、いわんや、帰依したてまつることをえんや？

法華経、曰、
是諸罪衆生、以、悪業因縁、過、阿僧祇劫、不聞、三宝、名。

法華経は、諸仏、如来、一大事、因縁なり。

大師、釈尊、所説の諸経のなかには、法華経、これ、大王なり、大師なり。
余経、余法は、みな、これ、法華経の臣民なり、眷属なり。
法華経中の所説、これ、まことなり。
余経中の所説、みな、方便を帯せり、ほとけの本意にあらず。
余経中の説をきたして法華に比校したてまつらん、これ、逆なるべし。
法華の功徳力をこうむらざれば、余経、あるべからず。
余経、みな、法華に帰投したてまつらんことをまつなり。
この法華経のなかに、いまの説まします。
しるべし、三宝の功徳、まさに、最尊なり、最上なり、ということを。

世尊、言、
衆人、怖、所逼、多、帰依、諸山、園苑、及、叢林、孤樹、制多、等。
此帰依、非、勝。
此帰依、非、尊。
不、因、此帰依、能、解脱、衆苦。
諸、有、帰依、仏、及、帰依、法、僧、
於、四聖諦中、恒、以、慧、観察、知、苦、知、苦集、知、永超、衆苦。
知、八支聖道、趣、安穏、涅槃。
此帰依、最勝。
此帰依、最尊。
必、因、此帰依、能、解脱、衆苦。

世尊、あきらかに、一切衆生のために、しめしまします。
衆生、いたずらに所逼をおそれて、山神、鬼神、等に帰依し、あるいは、外道の制多に帰依することなかれ。
かれは、その帰依によりて衆苦を解脱することなし。
おおよそ、外道の邪教にしたがうて、
牛戒、鹿戒、羅刹戒、鬼戒、瘂戒、聾戒、狗戒、鶏戒、雉戒、
以、灰、塗、身、
長髪、為、相、
以、羊、祠、時、
先、呪、後、殺、
四月、事、火、
七日、服、風、
百、千、億華、供養、諸天、所欲願、因、此、成就。
如是等法、能、為、解脱因、者、無有、是所。

智者、所不讃。
唐(むなしく)、苦、無、善報。

かくのごとくなるがゆえに、いたずらに邪道に帰せざらんこと、あきらかに甄(みわける)、究すべし。
たとえ、これらの戒に、ことなる法なりとも、その道理、もし孤樹、制多、等の道理に符合せらんは、帰依することなかれ。
人身、うること、かたし。
仏法、あうこと、まれなり。
いたずらに鬼神の眷属として一生をわたり、むなしく邪見の流類として多生をすごさん、かなしむべし。
はやく仏法僧の三宝に帰依したてまつりて、衆苦を解脱するのみにあらず、菩提を成就すべし。

希有経、曰、
教化、四天下、及、六欲天、皆、得、四果、不如、一人、受、三帰、功徳。

四天下とは、東西南北洲なり。
そのなかに、北洲は、三乗の化、いたらざるところなり。
かしこの一切衆生を教化して阿羅漢となさん、まことに、はなはだ希有なり、とすべし。
たとえ、その益ありとも、一人をおしえて三帰をうけしめん功徳には、およぶべからず。
また、六天は、得道の衆生、まれなりとするところなり。
かれをして四果をえせしむとも、一人の受、三帰の功徳の、おおく、ふかきに、およぶべからず。

増一阿含経、曰、
有、忉利天子、五衰相、現、当、生、猪中。
愁憂之声、聞、於、天帝。
天帝、聞、之、喚、来、告、曰、
汝、可、帰依、三宝。
即時、如、教。
便、免、生、猪。

仏、説、偈、言、

諸有、帰依、仏、
不墜、三悪道、
尽、漏、
処、人、天、
便、当、至、涅槃。

受、三帰、已、
生、長者家、
還、得、出家、
成、於、無学。

おおよそ、帰依、三宝の功徳、はかり、はかるべきにあらず、無量、無辺なり。

世尊、在世に、二十六億の餓龍、ともに、仏所に詣し、みな、ことごとく、あめのごとく、なみだをふらして、もうして、もうさく、
唯、願、哀愍、救済、於、我。
大悲世尊、
我等、憶念、過去世時、於、仏法中、雖、得、出家、備造、如是、種種、悪業。
以、悪業、故、経、無量身、在、三悪道。
亦、以、余報、故、生、在、龍中、受、極大苦。

仏、告、諸龍、
汝等、今、当、尽、受、三帰、一心、修、善。
以、此縁、故、於、賢劫中、値、最後仏、名、曰、楼至。
於、彼仏世、罪、得、除滅。

時、諸龍等、聞、是語、已、
皆、悉、至心、尽、其形、寿、各、受、三帰。

ほとけ、みずから諸龍を救済しましますに、余法なし、余術なし、ただ三帰をさずけまします。
過去世に出家せしとき、かつて三帰をうけたりといえども、業報によりて餓龍となれるとき、余法の、これをすくうべき、なし。
このゆえに、三帰をさずけまします。

しるべし、三帰の功徳、それ、最尊、最上、甚深、不可思議なり、ということ。
世尊、すでに証明しまします。
衆生、まさに、信受すべし。
十方の諸仏の名号を称念せしめましまさず、ただ三帰をさずけまします。
仏意の甚深なる、だれが、これを測量せん？
いまの衆生、いたずらに各各の一仏の名号を称念せんよりは、すみやかに三帰をうけたてまつるべし。
愚闇にして、大功徳をむなしくすることなかれ。

爾時、衆中、有、盲龍女。
口中、
膖爛、満、諸雑蟲、
状、如、屎尿。
乃至、穢悪、猶、若、婦人根中、不浄。
臊臭、難、看。
種種噬食。
膿血、流出。
一切身分、常、有、蚊、虻、諸悪毒蠅之所唼食、
身体、臭所、難、可、見聞。

爾時、世尊、以、大悲心、見、彼龍婦、眼、盲、困苦、如是、問、言、
妹、
何縁、故、得、此悪身？
於、過去世、曾、為、何業？

龍婦、答、言、
世尊、
我今此身、衆苦、逼迫、無、暫時、停。
設、復、欲、言、而、不能、説。
我、念、過去三十六億、於、百千年、悪龍中、受、如是苦、乃至、日夜、刹那、不停。
為、
我、往昔、九十一劫、於、毘婆尸仏法中、作、比丘尼、
思念、欲事、過、於、酔人、
雖、復、出家、不能、如法、

於、伽藍内、敷施、牀褥、数数、犯、於、非梵行事、以、快欲心、生、大楽、受、
或、貪、求、他物、多、受、信施。
以、如是、故、於、九十一劫、常、不得、受、天人之身、恒、三悪道、受、諸焼、煮。

仏、又、問、言、
若、如是、此中、劫、尽、妹、何所、生？

龍婦、答、言、
我、以、過去業力、因縁、生、余世界、彼劫、尽、時、悪業、風、吹、還、来生、此。

時、彼龍婦、説、此語、已、作、如是言、
大悲世尊、
願、救済、我。
願、救済、我。

爾時、世尊、以、手、掬、水、告、龍女、言、
此水名、為、瞋陀留脂薬和。
我、今、誠実、発、言、語、汝、
我、於、往昔、為、救、鴿、故、棄捨、身命、終、不、疑念、起、慳惜心。
此言、若、実、令、汝、悪患、悉皆、除、瘥(いえる)。

時、仏世尊、
以、口、含、水、灑、彼盲龍婦女之身、
一切悪患臭所、皆、瘥(いえる)。

既得、瘥(いえる)、已、
作、如是、説、言、
我、今、於、仏、乞、受三帰。

是時、世尊、即、為、龍女、授、三帰依。

この龍女、むかしは毘婆尸仏の法のなかに、比丘尼となれり。
禁戒を破すというとも、仏法の通塞を見聞すべし。
いまは、まのあたり、釈迦牟尼仏にあいたてまつりて三帰を乞、受す。

ほとけより三帰をうけたてまつる、厚、殖、善根というべし。
見仏の功徳、かならず、三帰によれり。
われら、盲龍にあらず、畜身にあらざれども、如来をみたてまつらず、ほとけにしたがいたてまつりて三帰をうけず、見仏、はるかなり、はじつべし。
世尊、みずから三帰をさずけまします。
しるべし、三帰の功徳、それ、甚深、無量なり、ということ。
天帝釈の野干を拝して三帰をうけし、みな、三帰の功徳の甚深なるによりてなり。

仏、在、迦毘羅衛、尼拘陀林、時、釈摩男、来至、仏所、作、如是言、
云何、名、為、優婆塞、也？

仏、即、為、説、
若、有、善男子、善女人、諸根、完具、受、三帰依、是即、名、為、優婆塞、也。

釈摩男、言、
世尊、
云何、名、為、一分優婆塞？

仏、言、
摩男、
若、受、三帰、及、受、一戒、是、名、一分優婆塞。

仏弟子となること、かならず、三帰による。
いずれの戒をうくるも、かならず、三帰をうけて、そののち、諸戒をうくるなり。
しかあれば、すなわち、三帰によりて、得戒あるなり。

法句経、云、
昔、有、天帝、自、知、命、終、生、於、驢中、
愁憂、不已、曰、
救苦厄者、唯、仏世尊。

便、至、仏所、稽首、伏、地、帰依、於、仏。
未起之間、其命、便、終、生、於、驢胎。
母驢、鞚(くつわ)、断、破、陶家、坏器。

器主、打、之、遂、傷、其胎、
還、入、天帝身中。
仏、言、
殞命之際、帰依、三宝、罪、対、已、畢。

天帝、聞、之、得、初果。

おおよそ、世間の苦厄をすくうこと、仏世尊には、しかず。
このゆえに、天帝、いそぎ世尊のみもとに詣す。
伏、地のあいだに命、終し、驢胎に生ず。
帰仏の功徳により、驢母の鞚(くつわ)、やぶれて、陶家の坏器を踏破す。
器主、これをうつ。
驢母の身、いたみて、託胎の驢、やぶれぬ。
すなわち、天帝の身に、かえり、いる。
仏説をききて初果をうる。
帰依、三宝の功徳力なり。
しかあれば、すなわち、世間の苦厄、すみやかに、はなれて、無上菩提を証得せしむること、かならず、帰依、三宝のちから、なるべし。
おおよそ、三帰のちから、三悪道をはなるるのみにあらず、天帝釈の身に還、入す。
天上の果報をうるのみにあらず、須陀洹の聖者となる。
まことに、三宝の功徳海、無量、無辺にましますなり。
世尊、在世は、人、天、この慶幸あり。
いま、如来滅後、後五百歳のとき、人、天、いかがせん？
しかあれども、如来、形像、舎利、等、なお、世間に現住しまします。
これに帰依したてまつるに、また、かみのごとくの功徳をうるなり。

未曾有経、曰、
仏、言、
憶念、過去無数劫時、毘摩大国、徙陀山中、有、一野干。
而、為、獅子所逐欲食、奔走、堕、井、不能得、出。
経、於、三日、開、心、分、死、而、説、偈、言、
禍哉。
今日、苦、所逼。
便、当、没、命、於、丘、井。
一切万物、皆、無常。

恨、不、以、身、飴(たべさせる)、獅子。
南無、帰依、十方仏。
表知、我心、浄、無己。

時、天帝釈、
聞、仏、名、粛然、毛、竪、
念、古仏、
自、惟、
孤露、
無、導師、
耽著、五欲、自、沈没。

即、与、天八万衆、飛、下、詣、井、欲、問詰。
乃、見、野干、在、井底。
両手、攀、土、不得、出。

天帝、復、自、思念、言、
聖人、応、念、無、方術？
我、今、雖、見、野干形、斯、必、菩薩、非凡器。
仁者、向説、非凡言。
願、為、諸天、説、法要。

於、時、野干、仰、答、曰、
汝、為、天帝、無、教訓。
法師、在、下、
自、処、上、
都、不修、敬、問、法要。
法水、清浄、能、済、人。
云何、欲、得、自、貢高？

天帝、聞、是、大慚愧。
給侍諸天、愕然、笑、
天王、降趾、大無利。

天帝、即時、告、諸天、
慎、勿、以、此、懐、驚、怖。
是、我、頑蔽、徳不称。

必、当、因、是、聞、法要。

即、為、垂下、天宝衣、接取、野干、出、於、上。
諸天、為、設、甘露食。
野干、得、食、生、活望。
非意、禍中、致、斯福。
心、懐、踊躍、慶、無量。
野干、為、天帝、及、諸天、広、説、法要。

これを天帝、拝、畜、為、師の因縁と称す。
あきらかに、しりぬ、仏、名、法、名、僧、名の、ききがたきこと。
天帝の、野干を師とせし、その証なるべし。
いま、われら、宿善のたすくるによりて、如来の遺法にあうたてまつり、昼夜に三宝の宝号をききたてまつること、時とともにして、不退なり。
これ、すなわち、法要なるべし。
天魔波旬、なお、三宝に帰依したてまつりて患難をまぬがる。
いかに、いわんや、余者の、三宝の功徳におきて積功累徳せらん、はかりしらざらめやは？
おおよそ、仏子、行道、かならず、まず、十方の三宝を敬礼したてまつり、十方の三宝を勧請したてまつりて、そのみまえに焼香、散華して、まさに諸行を修するなり。
これ、すなわち、古先の勝躅なり、仏祖の古儀なり。
もし帰依、三宝の儀、いまだかつて、おこなわざるは、これ、外道の法なり、としるべし。
または、天魔の法ならん、としるべし。
仏仏、祖祖の法は、かならず、そのはじめに帰依、三宝の儀軌あるなり。

正法眼蔵　帰依三宝
建長七年乙卯、夏安居日、以、先師之御草本、書写、畢。
未及、中書、清書、等。
定、御再治之時、有、添削、欺。
於、今、不可、叶、其儀。
仍、御草、如此、云。

# 生死

生死のなかに仏あれば、生死なし。
また、いわく、生死のなかに仏なければ、生死にまどわず。
こころは、夾山、定山といわれし、ふたりの禅師のことばなり。
得道の人のことばなれば、さだめて、むなしく、もうけじ。
生死をはなれん、とおもわん人、まさに、このむねをあきらむべし。
もし人、生死のほかに、ほとけをもとむれば、ながえをきたにして越にむかい、おもてをみなみにして北斗をみんとするがごとし。
いよいよ生死の因をあつめて、さらに、解脱のみちをうしなえり。
ただ生死、すなわち、涅槃、とこころえて、生死として、いとうべきもなく、涅槃として、ねがうべきもなし。
このとき、はじめて生死をはなるる分あり。
生より死にうつる、とこころうるは、これ、あやまりなり。
生は、ひとときのくらいにて、すでに、さきあり、のちあり。
かるがゆえに、仏法のなかには、生、すなわち、不生、という。
滅も、ひとときのくらいにて、また、さきあり、のちあり。
これによりて、滅、すなわち、不滅、という。
生というときには、生よりほかに、もの、なく、
滅というときは、滅のほかに、もの、なし。
かるがゆえに、
生、きたらば、ただ、これ、生、
滅、きたらば、これ、滅にむかいて、つかうべし。
いとうことなかれ。
ねがうことなかれ。
この生死は、すなわち、仏の御いのちなり。
これをいとい、すてんとすれば、すなわち、仏の御いのちをうしなわんとするなり。
これに、とどまりて、生死に著すれば、これも、仏の御いのちをうしなうなり。
仏のありさまをとどむるなり。
いとうことなく、したうことなき、このとき、はじめて仏のこころに、いる。
ただし、心をもって、はかることなかれ。
ことばをもって、いうことなかれ。

ただ、わが身をも、心をも、はなち、わすれて、仏のいえに、なげいれて、仏のかたより、おこなわれて、これに、したがいもってゆくとき、ちからをも、いれず、こころをも、ついやさずして、生死をはなれ、仏となる。
だれの人か、こころに、とどこおるべき？
仏となるに、いと、やすき、みちあり。
もろもろの悪をつくらず、生死に著するこころなく、一切衆生のために、あわれみぶかくして、かみをうやまい、しもをあわれみ、よろずをいとうこころなく、ねがうこころなくて、心におもうことなく、うれうることなき、これを仏となづく。
また、ほかに、たずぬることなかれ。

正法眼蔵　生死

# 深信因果

百丈、大智禅師、懐海和尚、凡参、次、有、一老人、常、随、衆、聴、法。
衆人、退、老人、亦、退。
忽、一日、不退。
師、遂、問、
面前立者、復、是、何人？

老人、曰、
某甲、是、非人、也。
於、過去、迦葉仏時、曾、住、此山。
因、学人、問、
大修行底人、還、落、因果、也？　無？

某甲、対、曰、
不落因果。

後、五百生、堕、野狐身。
今、請、和尚、代、一転語、貴、脱、野狐身。

遂、問、曰、
大修行底人、還、落、因果、也？　無？

師、曰、
不昧因果。

老人、於、言下、大悟、作、礼、曰、
某甲、已、脱、野狐身。
住在、山、後。
敢、告、和尚、乞、依、亡僧事例。

師、令、維那、白椎、告、衆、曰、
食後、送、亡僧。

大衆、言議、
一衆、皆、安。

涅槃堂、又、無、病人。
何故、如是？

食後、只、見、師、領、衆、
至、山、後、岩下、
以、杖、指、出、一死野狐。
乃、依、法、火葬。
師、至、晩、上、堂、挙、前因縁。
黄檗、便、問、
古人、錯祗対、一転語、堕、五百生、野狐身。
転転、不錯、合、作、箇什麼？

師、曰、
近、前、来、与、爾、道。

檗、遂、近、前、与、師、一掌。

師、拍手、笑、曰、
将、謂、胡鬚、赤。
更、有、赤鬚、胡。

この一段の因縁、天聖広燈録にあり。
しかあるに、参学のともがら、因果の道理をあきらめず、いたずらに撥無、因果のあやまり、あり。
あわれむべし。
澆風、一扇して祖道、陵替せり。
不落因果は、まさしく、これ、撥無、因果なり。
これによりて悪趣に堕す。
不昧因果は、あきらかに、これ、深信、因果なり。
これによりて、きくもの、悪趣を脱す。
あやしむべきにあらず。
うたがうべきにあらず。
近代、参禅学道と称するともがら、おおく、因果を撥無せり。
なにによりてか、因果を撥無せり、としる？
いわゆる、不落と不昧と、一等にして、ことならず、とおもえり。
これによりて、因果を撥無せり、としるなり。

第十九祖、鳩摩羅多尊者、曰、
且、善悪之報、有、三時、焉。
凡人、但、見、
仁、夭、
暴、寿、
逆、吉、
義、凶、
便、謂、
亡、因果、
虚、罪福。
殊、不知、
影響、相随、毫釐、靡(ない)、忒(たがえる)。
縦、経、百、千、万劫、亦、不磨滅。

あきらかに、しりぬ、曩祖、いまだ因果を撥無せず、ということを。
いまの晩進、いまだ祖宗の慈誨をあきらめざるは、稽古のおろそかなるなり。
稽古、おろそかにして、みだりに人、天の善知識と自称するは、人、天の大賊なり、学者の怨家なり。
なんじ、前後のともがら、亡、因果のおもむきをもって、後学、晩進のために、かたることなかれ。
これは、邪説なり。
さらに、仏祖の法にあらず。
なんだちが疎学によりて、この邪見に堕せり。
いま、神丹国の衲僧等、ままに、いわく、
われらが人身をうけて仏法にあう、一生、二生のこと、なお、しらず。
前、百丈の野狐となれる、よく、五百生をしれり。
はかりしりぬ、業報の墜堕にあらじ。
金鎖、玄関、留、不往、行、於、異類、且、輪廻なるべし。

大善知識とあるともがらの見解、かくのごとし。
この見解は、仏祖の屋裏に、おき、がたきなり。
あるいは、人、あるいは、狐、あるいは、余趣のなかに、生得に、しばらく、宿通をえたるともがら、あり。
しかあれども、明了の種子にあらず。
悪業の所感なり。
この道理、世尊、ひろく、人、天のために演説しまします。

これをしらざるは、疎学のいたりなり。
あわれむべし。
たとえ一千生、一万生をしるとも、かならずしも仏法なるべからず。
外道、すでに八万劫をしる、いまだ仏法とせず。
わずかに五百生をしらん、いくばくの能にあらず。
近代、宋朝の、参禅のともがら、もっとも、くらきところは、ただ不落因果を邪見の説としらざるに、あり。
あわれむべし。
如来の正法の流通するところ、祖祖、正伝するに、あいながら、撥無、因果の邪党とならん。
参学のともがら、まさに、いそぎて因果の道理をあきらむべし。
いま、百丈の不昧因果の道理は、因果にくらからず、となり。
しかあれば、修因感果のむね、あきらかなり。
仏仏、祖祖の道なるべし。
おおよそ、仏法、いまだ、あきらめざらんとき、みだりに人、天のために説法することなかれ。

龍樹祖師、云、
如、外道人、
破、世間因果、則、無、今世、後世。
破、出世因果、則、無、三宝、四諦、四沙門果。

あきらかに、しるべし。
世間、出世の因果を破するは、外道なるべし。
今世、なし、というは、
かたちは、このところにあれども、性は、ひさしく、さとりに帰せり。
性、すなわち、心なり。
心は、身と、ひとしからざるゆえに。

かくのごとく解する、すなわち、外道なり。
あるいは、いわく、
人、死するとき、かならず、性海に帰す。
仏法を修習せざれども、自然に覚海に帰すれば、さらに生死の輪転なし。
このゆえに、後世、なし、という。

これ、断見の外道なり。

かたち、たとえ比丘に相似なりとも、かくのごとくの邪解あらんともがら、さらに仏弟子にあらず。
まさしく、これ、外道なり。
おおよそ、因果を撥無するより、今世、後世、なし、とは、あやまるなり。
因果を撥無することは、真の善知識に参学せざるによりてなり。
真の善知識に久学するがごときは、撥無、因果、等の邪解、あるべからず。
龍樹祖師の慈誨、ふかく信仰したてまつり、頂戴したてまつるべし。

永嘉、真覚大師、玄覚和尚は、曹谿の上足なり。
もとは、これ、天台の法華を習学せり。
左谿玄朗大師と同室なり。
涅槃経を披閲せるところに、金光、その室に、みつ。
ふかく無生のさとりをえたり。
すすみて、曹谿に詣し、証をもって六祖にもうす。
六祖、ついに、印可す。
のちに、証道歌をつくるに、いわく、
豁達、空、撥、因果。
蕩蕩、招、殃禍。

あきらかに、しるべし。
撥無、因果は、招、殃禍なるべし。
往代は、古徳、ともに、因果をあきらめたり。
近世には、晩進、みな、因果にまよえり。
今世なりというとも、菩提心、いさぎよくして、仏法のために、仏法を習学せんともがらは、古徳のごとく、因果をあきらむべきなり。
因、なし。果、なし。というは、すなわち、これ、外道なり。

宏智古仏、かみの因果を頌古するに、いわく、
一尺水、一丈波。
五百生、前、不、奈何。
不落、不昧、商量、也、依然、撞入、葛藤窠。
阿呵呵。
会、也、麼？
若、是、汝、洒洒落落、不妨、我、哆哆和和。
神歌社舞、自、成、曲。
拍手、其間、唱、哩囉。

いま、不落、不昧、商量、也、依然、撞入、葛藤窠の句、すなわち、不落と不昧と、おなじかるべし、というなり。
おおよそ、この因果、その理、いまだ、つくさず。
ゆえ、いかん？　となれば、
脱、野狐身は、いま、現前せりといえども、野狐身をまぬがれて、のち、すなわち、人間に生ず、と、いわず、天上に生ず、と、いわず、おおよそ、余趣に生ず、と、いわず。
人の、うたがうところなり。
脱、野狐身の、すなわち、善趣にうまるべくば、天上、人間にうまるべし。
悪趣にうまるべくば、四悪趣、等にうまるべきなり。
脱、野狐身ののち、むなしく生所なかるべからず。
もし衆生、死して、性海に帰し、大我に帰す、というは、ともに、これ、外道の見なり。

夾山、圜悟禅師、克勤和尚、頌古、いわく、
魚、行、水、濁。
鳥、飛、毛、落。
至鑑、難、逃。
大虚、寥、廓。
一往、迢迢、五百生。
只、縁、因果、大修行。
疾雷、破、山。
風、震、海。
百練精金色、不改。

この頌、なお、撥無、因果のおもむき、あり。
さらに、常見のおもむき、あり。

杭州、径山、大慧禅師、宗杲和尚、頌に、いわく、
不落、不昧、石頭、土塊。
陌路、相逢、銀山、粉砕。
拍手、呵呵、笑、一場。
明州、有、箇憨布袋。

これらをいまの宋朝のともがら、作家の祖師とおもえり。

しかあれども、宗杲が見解、いまだ仏法の施権のむねに、およばず。
ややもすれば、自然、見解のおもむき、あり。
おおよそ、この因縁に、頌古、拈古のともがら、三十余人、あり。
一人としても、不落因果、これ、撥無、因果なり、とうたがうもの、なし。
あわれむべし。
このともがら、因果をあきらめず、いたずらに紛紜のなかに一生をむなしくせり。
仏法参学には、第一、因果をあきらむるなり。
因果を撥無するがごときは、おそらくは、猛利の邪見おこして、断善根とならんことを。
おおよそ、因果の道理、歴然として、わたくし、なし。
造、悪のものは、堕し、修、善のものは、のぼる。
毫釐も、たがわざるなり。
もし因果、亡じ、むなしからんがごときは、諸仏の出世、あるべからず、祖師の西来、あるべからず、おおよそ、衆生の見仏聞法、あるべからざるなり。
因果の道理は、孔子、老子、等の、あきらむるところにあらず。
ただ仏仏、祖祖、あきらめ、つたえましますところなり。
澆季の学者、薄福にして正師にあわず、正法をきかず。
このゆえに、因果をあきらめざるなり。
撥無、因果すれば、このとがによりて、莽莽蕩蕩として殃禍をうくるなり。
撥無、因果のほかに、余悪、いまだ、つくらずというとも、まず、この見毒、はなはだしきなり。
しかあれば、すなわち、参学のともがら、菩提心をさきとして、仏祖の洪恩を報ずべくば、すみやかに、諸因諸果をあきらむべし。

正法眼蔵　深信因果
建長七年乙卯、夏安居日、以、御草案、書写、之。未及、中書、清書。定、可、有、再治事、也。　　　　懐弉

# 道心

仏道を求むるには、まず、道心を先とすべし。
道心のありよう、知る人、まれなり。
明らかに、知れらん人に、問うべし。
世の人は、道心あり、と言えども、まことには、道心なき人、あり。
まことに、道心ありて、人に知られざる人、あり。
かくのごとく、有り、無し、知りがたし。
おおかた、愚かに、悪しき人の言葉を信ぜず、聞かざるなり。
また、我が心を先とせざれ。
仏の、説かせたまいたる、法を先とすべし。
よくよく、道心、あるべき、ようを夜、昼、常に、心にかけて、この世に、いかでか、まことの菩提、あらまし、と願い、祈るべし。
世の末には、まことある道心者、おおかた、無し。
しかあれども、しばらく、心を無常にかけて、世の、儚く、人の命の、危うき事を忘れざるべし。
我は、世の、儚き事を思う、と知らざるべし。
あい構えて、法を重くして、我が身、我が命をかろくすべし。
法のためには、身も、命も、惜しまざるべし。
次には、深く仏法僧、三宝を敬いたてまつるべし。
生を変え、身を変えても、三宝を供養し敬いたてまつらん事を願うべし。
寝ても、覚めても、三宝の功徳を思いたてまつるべし。
寝ても、覚めても、三宝を唱えたてまつるべし。
たとえ、この生を捨てて、いまだ後の生に生まれざらん、その間、中有と言う事、有り。
その命、七日なる。
その間も、常に声も止まず三宝を唱えたてまつらんと思うべし。
七日を経ぬれば、中有にて死して、また中有の身を受けて七日、有り。
いかに、久しといえども、七日をば、過ぎず。
この時、何事を見、聞くも、障り無き事、天眼のごとし。
かからんとき、心をはげまして三宝を唱えたてまつり、
南無、帰依、仏、
南無、帰依、法、
南無、帰依、僧。

と唱えたてまつらん事、忘れず、暇無く唱えたてまつるべし。
既に中有を過ぎて、父母の辺に近づかん時も、あい構いて、正智ありて託胎せん。
所胎蔵にありても、三宝を唱えたてまつるべし。
生まれ落ちん時も、唱えたてまつらん事、怠らざらん。
六根に経て三宝を供養したてまつり、唱えたてまつり、帰依したてまつらんと深く願うべし。
また、この生の終わる時は、二つの眼、たちまちに、暗くなるべし。
その時を既に生の終わりと知りて、はげみて、南無、帰依、仏。と唱えたてまつるべし。
この時、十方の諸仏、あわれみを垂れさせたまう。
縁ありて悪趣に赴くべき罪も転じて、天上に生まれ、仏前に生まれて、仏を拝みたてまつり、仏の説かせたまう法を聞くなり。
眼の前に闇の来たらんより後は、たゆまず、はげみて、三帰依を唱えたてまつる事、中有までも、後生までも、怠るべからず。
かくのごとくして、生生、世世を尽くして唱えたてまつるべし。
仏果、菩提に至らんまでも、怠らざるべし。
これ、諸仏、菩薩の、行わせたまう道なり。
これを深く法を悟る、とも言う。
仏道の、身に備わる、とも言うなり。
さらに、異、思いを交えざらんと願うべし。
また、一生の内に仏を作りたてまつらんと営むべし。
作りたてまつりては、三種の供養したてまつるべし。
三種とは、草座、石蜜漿、燃燈なり。
これを供養したてまつるべし。
また、この生の内に、法華経を作りたてまつるべし。
書きもし、摺写もしたてまつりて、保ちたてまつるべし。
常には、頂き、礼拝したてまつり、華、香、御灯、飲食、衣服も参らすべし。
常に頂きを清くして、頂き参らすべし。
また、常に袈裟を掛けて坐禅すべし。
袈裟は、第三生に得道する先蹤あり。
既に三世の諸仏の衣なり。
功徳、はかるべからず。
坐禅は、三界の法にあらず、仏祖の法なり。

正法眼蔵　道心

# 受戒

禅苑清規、云、
三世諸仏、皆、曰、出家、成道。
西天二十八祖、唐土六祖、伝、仏心印、尽、是、沙門。
蓋、以、厳浄、毘尼、方、能、洪範、三界。
然、則、参禅問道、戒律、為、先。
若、不、離過、防非、何、以、成仏作祖？
受戒之法、
応、備、三衣、鉢具、並、新浄衣物。
如、無、新衣、浣洗、令、浄。
入壇、受戒、不得、借、他衣鉢。
一心、専注、慎、勿、異縁。
像、仏形儀、具、仏戒律、得、仏受用。此、非、小事。
豈、可、軽心？
若、借、他衣鉢、雖、登壇、受戒、並、不得、戒。
若、不、曾、受、一生、為、無戒之人。
濫、厠(まじる)、空門。
虚、受、信施。
初心、入道、法、律、未諳、
師匠、不言、陥、人、於、此。
今、茲、苦口、敢、望、銘、心。
既、受、声聞戒、応、受、菩薩戒。
此、入法之漸、也。

西天、東地、仏祖、相伝しきたれるところ、かならず、入法の最初に受戒あり。
戒をうけざれば、いまだ諸仏の弟子にあらず、祖師の児孫にあらざるなり。
離過、防非を参禅問道とせるが故なり。
戒律、為、先の言、すでに、まさしく、正法眼蔵なり。
成仏作祖、かならず、正法眼蔵を伝持するによりて、正法眼蔵を正伝する祖師、かならず、仏戒を受持するなり。
仏戒を受持せざる仏祖あるべからざるなり。
あるいは、如来にしたがいて、これを受持し、あるいは、仏弟子にしたがいて、これを受持す、みな、これ、命脈、稟受せる所なり。

いま、仏仏、祖祖、正伝するところの仏戒、只、嵩嶽曩祖、まさしく、伝来し、震旦、五伝して曹谿高祖にいたれり。
青原、南嶽、等の正伝、いまに、つたわれりといえども、杜撰の長老、等、かつてしらざるも、あり。
もっとも、あわれむべし。
いわゆる、応、受、菩薩戒。此、入法之漸、也。
これ、すなわち、参学のしるべきところなり。
その応、受、菩薩戒の儀、ひさしく仏祖の堂奥に参学するもの、かならず、正伝す。
疎怠のともがらの、うるところにあらず。
その儀は、かならず、祖師を焼香、礼拝し、応、受、菩薩戒を求請するなり。
すでに聴許せられて、沐浴、清浄にして新浄の衣服を著し、あるいは、衣服を浣洗して、華を散じ、香をたき、礼拝、恭敬して、その身に著す。
あまねく形像を礼拝し、三宝を礼拝し、尊宿を礼拝し、諸障を除去し、身心、清浄なることをうべし。
その儀、ひさしく、仏祖の堂奥に正伝せり。
そののち、道場にして、和尚、阿闍梨、まさに受者をおしえて礼拝し、長跪せしめて、合掌し、この語をなさしむ。

帰依、仏、
帰依、法、
帰依、僧、
帰依、仏陀、両足尊、
帰依、達磨、離欲尊、
帰依、僧伽、衆中尊、
帰依、仏、竟、
帰依、法、竟、
帰依、僧、竟。

(三説。)

如来、至真、無上正等覚、是、我大師。
我、今、帰依。
従、今、已後、更、不帰依、邪魔、外道。
慈愍、故。
慈愍、故。

(三遍。第三、畳、慈愍、故。三遍。)

善男子、
既、捨、邪、帰、正、戒、已、周円。
応、受、三聚清浄戒。

第一、摂律儀戒。

汝、従、今身、至、仏身、此戒、能、持？　否？

答、云、
能、持。

(三問、三答。)

第二、摂善法戒。

汝、従、今身、至、仏身、此戒、能、持？　否？（

答、云、
能、持。

(三問、三答。)

第三、饒益衆生戒。

汝、従、今身、至、仏身、此戒、能、持？　否？

答、云、
能、持。

(三問、三答。)

上来、三聚清浄戒、一一、不得、犯。

汝、従、今身、至、仏身、能、持？　否？

答、云、

能、持。

(三問、三答。)

是事、如是、持。

(受者、礼三拝、長跪、合掌。)

善男子、
汝、既、受、三聚清浄戒。
応、受、十戒。
是、乃、諸仏、菩薩、清浄、大戒、也。

第一、不殺生。

汝、従、今身、至、仏身、此戒、能、持？　否？

答、云、
能、持。

(三問、三答。)

第二、不偸盗。

汝、従、今身、至、仏身、此戒、能、持？　否？

答、云、
能、持。

(三問、三答。)

第三、不婬欲。

汝、従、今身、至、仏身、此戒、能、持？　否？

答、云、
能、持。

(三問、三答。)

第四、不妄語。

汝、従、今身、至、仏身、此戒、能、持？　否？

答、云、
能、持。

(三問、三答。)

第五、不酤酒。

汝、従、今身、至、仏身、此戒、能、持？　否？

答、云、
能、持。

(三問、三答。)

第六、不説在家出家菩薩罪過。

汝、従、今身、至、仏身、此戒、能、持？　否？

答、云、
能、持。

(三問、三答。)

第七、不自讃毀他。

汝、従、今身、至、仏身、此戒、能、持？　否？

答、云、
能、持。

(三問、三答。)

第八、不慳法財。

汝、従、今身、至、仏身、此戒、能、持？　否？

答、云、
能、持。

(三問、三答。)

第九、不瞋恚。

汝、従、今身、至、仏身、此戒、能、持？　否？

答、云、
能、持。

(三問、三答。)

第十、不謗三宝。

汝、従、今身、至、仏身、此戒、能、持？　否？

答、云、
能、持。

(三問、三答。)

上来、十戒、一一、不得、犯。
汝、従、今身、至、仏身、此戒、能、持？　否？

答、云、
能、持。

(三問、三答。)

是事、如是、持。

受者、礼三拝。

上来、三帰、三聚清浄戒、十重禁戒、是、諸仏之所受持。
汝、従、今身、至、仏身、此十六支戒、如是、持。

(受者、礼三拝。次、作、処世界梵、訖、曰、)
帰依、仏、
帰依、法、
帰依、僧。

(次、受者、出、道場。)

この受戒の儀、かならず、仏祖、正伝せり。
丹霞天然、薬山の高沙弥、等、おなじく、受持しきたれり。
比丘戒をうけざる祖師あれども、此、仏祖、正伝、菩薩戒をうけざる祖師、いまだ、あらず。
かならず、受持するなり。

正法眼蔵　受戒

# 四禅比丘

第十四祖、龍樹祖師、言、
仏弟子中、有、一比丘、得、第四禅、生、増上慢、謂、
得、四果。

初、得、初禅、謂、
得、須陀洹果。

得、第二禅、時、謂、
是、斯陀含果。

得、第三禅、時、謂、
是、阿那含果。

得、第四禅、時、謂、
是、阿羅漢。

恃、是、自、高、不、復、求、進。
欲、命、尽、時、
見、有、四禅中陰相、来、
便、生、邪見、謂、
無、涅槃。
仏、為、欺、我。

悪邪見、故、
失、四禅中陰、
便、見、阿鼻泥梨中陰相、
命、終、即、生、阿鼻泥梨中。

諸比丘、問、仏、曰、
阿蘭若比丘、命、終、生、何所？

仏、言、
是人、生、阿鼻泥梨中。

諸比丘、大驚、
坐禅、持戒、便、至、爾、耶？！

仏、如、前、答、言、
彼、皆、因、増上慢。
得、四禅、時、謂、
得、四果。

臨、命、終、時、
見、四禅中陰相、
便、生、邪見、謂、
無、涅槃。
我、是、羅漢。
今、還復、生。
仏、為、虚誑。

是時、即、見、阿鼻泥梨中陰相、
命、終、即、生、阿鼻泥梨中。

是時、仏、説、偈、言、
多聞、持戒、禅、未得、漏尽法。
雖、有、此功徳、此事、難、可、信。
堕獄、由、謗、仏。
非関、第四禅。

この比丘を称して四禅比丘という。
または、無聞比丘と称す。
四禅をえたるを四果と僻計せることをいましめ、また、謗、仏の邪見をいましむ。
人、天大会、みな、しれり。
如来、在世より今日にいたるまで、西天、東地、ともに、是にあらざるを是と執せるをいましむとして、四禅をえて四果とおもうがごとし、とあざける。
この比丘の不是、しばらく、略挙するに、三種あり。

第一には、みずから四禅と四果とを分別するにおよばざる無聞の身ながら、いたずらに師をはなれて、むなしく阿蘭若に独処す。
さいわいに、これ、如来、在世なり。

つねに仏所に詣して、常恒に、見仏聞法せば、かくのごとく、あやまり、あるべからず。
しかあるに、阿蘭若に独処して、仏所に詣せず。
ついに、見仏聞法せざるによりて、かくのごとし。
たとえ仏所に詣せずというとも、諸大阿羅漢、所にいたりて、教訓をうくべし。
いたずらに独処する、増上慢のあやまりなり。

第二には、
初禅をえて、初果とおもい、
二禅をえて、第二果とおもい、
三禅をえて、第三果とおもい、
四禅をえて、第四果とおもう。
第二のあやまりなり。
初、二、三、四禅の相と、初、二、三、四果の相と、比類に及ばず。
たとうること、あらんや？
これ、無聞のとがによれり。
師につかえず、くらきによれる、とがなり。

優婆毱多、弟子中、有、一比丘。
信心、出家、獲得、四禅、謂、為、
四果。

毱多、方便、令、往、他所。
於、路、化作、群賊。
復、化作、五百賈客。
賊、劫(おどす)、賈客、殺害、狼藉。
比丘、見、生、怖、即便、自、念、
我、非、羅漢。
応、是、第三果。

賈客、亡後、有、長者女、語、比丘、言、
唯、願、大徳、
与、我、共、去。

比丘、答、言、

仏、不許、我、与、女人、行。

女、言、
我、望、大徳、而、随、其後。

比丘、憐愍、相望、而、行。
尊者、次、復、変作、大河。
女人、言、
大徳、可、共、我、度。

比丘、在、下流。
女、在、上流。
女、便、堕、水、白、言、
大徳、済、我。

爾時、比丘、手、接、而、出、
生、細、滑、想、
起、愛欲心、
便、自、知、
非、阿那含。

於、此、女人、極、生、愛著、将、向、屏所、欲、共、交通、
方、見、是、師、
生、大慚愧、
低頭、而、立。
尊者、語、言、
汝、曾、自、謂、
是、阿羅漢。

云何、欲、為、如此、悪事？

将、至、僧中、
教、其、懺悔、
為、説、法要、
得、阿羅漢。

この比丘、はじめ生、見のあやまりあれども、殺害の狼藉をみるに、おそれを生ず。
ときに、われ、羅漢にあらず、とおもう。
なお、第三果なるべし、とおもう、あやまり、あり。
のちに、細、滑の想によりて愛欲の心を生ずるに、阿那含にあらず、としる。
さらに、謗、仏のおもいを生ぜず、謗、法のおもい、なし、聖教にそむくおもいあらず。
四禅比丘には、ひとしからず。
この比丘は、聖教を習学せるちから、あるによりて、みずから、阿羅漢にあらず、阿那含にあらず、としるなり。
いまの無聞のともがらは、阿羅漢は、いかなり。ともしらず、仏は、いかなり。ともしらざるがゆえに、みずから、阿羅漢にあらず。仏にあらず。ともしらず、みだりに、われは、仏なり。とのみ、おもい、いうは、おおいなる、あやまりなり。
ふかき、とが、なるべし。
学者、まず、すべからく、仏は、いかなるべし。とならうべきなり。

古徳、曰、
故、知、
習聖教者、薄知、次位、
縦、生、逾濫、
亦、易、開、解。

まことなるかな、古徳の語。
たとえ生、見の、あやまり、ありとも、すこしきも仏法を習学せらんともがらは、みずからにも欺誑せられじ、他人にも欺誑せられじ。

曾、聞、

有、人、自、謂、
成仏。

待、天、不暁、謂、
為、魔障。

暁、已、不見、梵王、請、説法、
自、知、

非、仏。

自、謂、
是、阿羅漢。

又、被、他人、罵、之、
心、生、異念、
自、知、
非是、阿羅漢。

乃、謂、
是、第三果、也。

又、見、女人、起、欲想、
知、
非、聖人。

此、亦、良、由、知、教相、故、乃、如是、也。

それ、仏法をしれるは、かくのごとく、みずからが非を覚知し、はやく、あやまりをなげすつ。
しらざるともがらは、一生、むなしく愚蒙のなかにあり。
生より生をうくるも、また、かくのごとくなるべし。
この優婆毱多の弟子は、四禅をえて、四果とおもうといえども、さらに我、非、羅漢の智あり。
無聞比丘も、臨、命、終のとき、四禅の中陰、みゆることあらんに、我、非、羅漢としらば、謗、仏の罪、あるべからず。
いわんや、四禅をえて、のち、ひさし。
なんぞ、四果にあらず。と、かえりみ、しらざらん？
すでに、四果にあらず。としらば、なんぞ、あらためざらん？
いたずらに僻計にとどこおり、むなしく邪見にしずめり。

第三には、命、終のとき、おおきなる、あやまり、あり。
そのとが、ふかくして、ついに、阿鼻地獄におちぬるなり。
たとえ、なんじ、一生のあいだ、四禅を四果とおもいきたれりとも、臨、命、終のとき、四禅の中陰、みゆることあらば、一生のあやまりを懺悔して、四果には、あらざりき。とおもうべし。

いかでか、仏、われを欺誑して、涅槃なきに、涅槃あり、と施設せさせたまう。とおもうべき？
これ、無間のとがなり。
このつみ、すでに、謗、仏なり。
これによりて、阿鼻の中陰、現じて、命、終して阿鼻地獄におちぬ。
たとえ四果の聖者なりとも、いかでか如来におよばん？
舎利弗は、ひさしく、これ、四果の聖者なり。
三千大千世界、所有の智慧をあつめて、如来をのぞきたてまつりて、ほかを一分とし、舎利弗の智慧を十六分にせる一分と、三千大千世界、所有の智慧とを格量するに、舎利弗の十六分の一分に、およばざるなり。
しかあれども、如来、未曾説の法をときましますをききて、前後の仏説、ことにして、われを欺誑しまします、とおもわず。
波旬、無、此事。と、ほめたてまつる。
如来は、福増をわたし、舎利弗は、福増をわたさず。
四果と仏果と、はるかに、ことなること、かくのごとし。
たとえ舎利弗、および、もろもろの弟子のごとくならん、十方界にみちみてらん、ともに、仏智を測量せんこと、うべからず。
孔、老に、かくのごとくの功徳、いまだ、なし。
仏法を習学せんもの、だれが、孔、老を測度せざらん？
孔、老を習学するもの、仏法を測量すること、いまだ、なし。
いま、大宋国のともがら、おおく、孔、老と、仏道と、一致の道理をたつ。
僻見、もっとも、ふかきものなり。
しもに、まさに、広説すべし。
四禅比丘、みずからが僻見をまこととして、如来の、欺誑しまします、とおもう、ながく仏道を違背したてまつるなり。
愚痴のはなはだしき、六師、等に、ひとしかるべし。

古徳、曰、
大師、在世、尚、有、僻計、生見之人。
況、滅度後、無師、不得禅者。

いま、大師とは、仏世尊なり。
まことに、世尊、在世、出家、受具せる、なお、無聞によりては僻計、生、見のあやまり、のがれがたし。
いわんや、如来、滅度後、後五百歳、辺地、下賤の時、所、あやまり、なからんや？

四禅を発せるもの、なお、かくのごとし。
いわんや、四禅を発するにおよばず、いたずらに貪名愛利にしずめらんもの、官途、世路をむさぼるともがら、不足、言なるべし。
いま、大宋国に寡聞、愚鈍のともがら、おおし。
かれらが、いわく、仏法と、孔子、老子の法と、一致にして異声にあらず。

大宋、嘉泰中、
有、僧、正受。
撰進、普燈録、三十巻、曰、
臣、聞、孤山智円之言、曰、
吾道、如、鼎、也。
三教、如、足。
足、一、虧、而、鼎、覆、焉。

臣、嘗、慕、其人稽、其説。
乃、知、
儒、之、為、教、其要、在、誠意。
道、之、為、教、其要、在、虚心。
釈、之、為、教、其要、在、見性。
誠意、也、
虚心、也、
見性、也、
異名、同体。
究、厥(その)攸(するところ)帰、無、適、而、不、与、此道、会。
云云。

かくのごとく、僻計、生、見のともがらのみ、おおし。
ただ智円、正受のみには、あらず。
このともがらは、四禅をえて、四果とおもわんよりも、そのあやまり、ふかし。
謗、仏、謗、法、謗、僧なるべし。
すでに、撥無、解脱なり、撥無、三世なり、撥無、因果なり。
莽莽蕩蕩、招、殃禍、うたがい、なし。
三宝、四諦、四沙門果、なし、とおもいし、ともがらに、ひとし。
仏法、いまだ、其要、見性にあらず。

七仏、西天二十八祖、いずれのところか、仏法、ただ見性のみなる、とある？
六祖壇経に見性の言あり。
かの書、これ、偽書なり。
付法蔵の書にあらず。
曹谿の言句にあらず。
仏祖の児孫、まったく依用せざる書なり。
正受、智円、いまだ仏法の一隅をしらざるによりて、一鼎三足の邪見をなす。

古徳、曰、
老子、荘子、尚、自、未識、小乗、能著、所著、能破、所破。
況、大乗中、若、著、若、破。
是故、不、与、仏法、少、同。
然者、
世間、愚者、迷、於、名、相、
濫禅者、惑、於、正理、
欲、将、道徳、道、逍遥之名、斉、於、仏法解脱之説。
豈、可、得、乎？

むかしより、名、相にまようもの、正理をしらざるともがら、仏法をもって荘子、老子にひとしむるなり。
いささかも、仏法の稽古あるともがら、むかしより、荘子、老子をおもくする、一人、なし。

清浄法行経、曰、
月光菩薩、彼称、顔回。
光浄菩薩、彼称、仲尼。
迦葉菩薩、彼称、老子。
云云。

むかしより、この経の説を挙して、孔子、老子、等も、菩薩なれば、その説、ひそかに仏説に、おなじかるべし、といい、また、仏のつかいならん、その説、おのずから仏説ならん、という。

この説、みな、非なり。

古徳、曰、

準、諸目録、
皆、推、此経、以、為、疑偽。
云云。

いま、この説によらば、いよいよ仏法と、孔、老と、ことなるべし。
すでに、これ、菩薩なり。
仏果に、ひとしかるべからず。
また、和光応迹の功徳は、ひとり三世諸仏、菩薩の法なり。
俗塵、凡夫の、所能にあらず。
実業の凡夫、いかでか応迹に自在あらん？
孔、老、いまだ応迹の説、なし。
いわんや、孔、老は、先因をしらず、当果をとかず。
わずかに一世の忠孝をもって、きみにつかえ、家をおさむる術をむねとするなり。
さらに、後世の説、なし。
すでに、これ、断見の流類なるべし。

荘、老をきらうに、小乗、なお、しらず。
いわんや、大乗をや？
というは、上古の明師なり。

三教一致というは、智円、正受なり、後代、澆季、愚闇の凡夫なり。
なんじ、なんの勝出あればか、上古の先徳の所説をさみして、みだりに、仏法と、孔、老と、ひとしかるべし、という？
なんだちが所見、すべて、仏法の通塞を論ずるに、たえず。
負、笈して明師に参学すべし。
智円、正受、なんじら、大小両乗、すべて、いまだ、しらざるなり。
四禅をえて、四果とおもいしよりも、くらし。
かなしむべし、澆風のあおぐところ、かくのごとくの魔子、おおかることを。

古徳、曰、
如、孔丘、姫旦之語、三皇五帝之書、
孝、以、治、家、
忠、以、治、国、
輔、国、
利、民。

只、是、一世之内、不渡、過、未。
未、斉、仏法之益、於、三世。
豈、謬、乎？

まことなるかな、古徳の語。
よく、仏法の至理に達せり。
世俗の道理に、あきらかなり。
三皇五帝の語、いまだ、転輪聖王のおしえに、およぶべからず。
梵王、帝釈の説にならべ論ずべからず。
統領するところ、所得の果報、はるかに、劣なるべし。
輪王、梵王、帝釈、なお、出家、受具の比丘におよばず。
いかに、いわんや、如来に、ひとしからんや？
孔丘、姫旦の書、また、天竺の十八大経におよぶべからず。
四韋陀の典籍にならべがたし。
西天、婆羅門教、いまだ、仏教に、ひとしからざるなり。
なお、小乗、声聞教にひとしからず。
あわれむべし、震旦、小国、辺方にして、三教一致の邪説あることを。

第十四祖、龍樹菩薩、曰、
大阿羅漢、辟支仏、知、八万大劫。
諸大菩薩、及、仏、知、無量劫。

孔、老、等、いまだ、一世のうちの前後をしらず。
一生、二生の宿通あらんや？
いかに、いわんや、一劫をしらんや？
いかに、いわんや、百劫、千劫をしらんや？
いかに、いわんや、八万大劫をしらんや？
いかに、いわんや、無量劫をしらんや？
この無量劫をあきらかに、てらし、しれること、たなごころをみるよりも、あきらかなる諸仏、菩薩を、孔、老、等に比類せん、愚闇というにも、たらざるなり。
みみをおおうて、三教一致の言をきくことなかれ。
邪説中、最邪説なり。

荘子、曰、
貴賤、苦楽、是非、得失、皆、是、自然。

この見、すでに西国の自然見の外道の流類なり。
貴賤、苦楽、是非、得失、みな、これ、善悪業の感ずるところなり。
満業、引業をしらず。
過去、来世をあきらめざるがゆえに、現在にくらし。
いかでか、仏法に、ひとしからん？
あるが、いわく、
諸仏、如来、ひろく法界を証するゆえに、微塵、法界、みな、諸仏の所証なり。
しかあれば、依正二報、ともに、如来の所証となりぬるがゆえに、山河大地、日月星辰、四倒三毒、みな、如来の所証なり。
山河をみるは、如来をみるなり。
三毒四倒、仏法にあらず、ということ、なし。
微塵をみるは、法界をみるに、ひとし。
造次顛沛、みな、三菩提なり。
これを大解脱という。
これを単伝直指の祖道となづく。

かくのごとくいうともがら、大宋国に稲麻竹葦のごとく、朝野に遍満せり。
しかあれども、このともがら、だれ人の児孫ということ、あきらかならず。
すべて、仏祖の道をしらざるなり。
たとえ諸仏の所証となるとも、山河大地、たちまちに凡夫の所見、なかるべきにあらず。
諸仏の所証となる道理をならわず、きかざるなり。
なんじ、微塵をみるは、法界をみるに、ひとし、という。
たみの、王に、ひとし、と、いわんがごとし。
また、なんぞ、法界をみて、微塵に、ひとし、と、いわざる？
このともがらの所見を仏祖の大道とせば、諸仏、出世すべからず、祖師、出現すべからず、衆生、得道すべからざるなり。
たとえ生、即、無生と体達すとも、この道理にあらず。

真諦三蔵、云、
震旦、有、二福。
一、無、羅刹。
二、無、外道。

このことば、まことに、西国の外道、婆羅門の伝来せるなり。
得通の外道、なしというとも、外道の見をおこすともがら、なかるべきにあらず。
羅刹は、いまだ、みえず。
外道の流類は、なきにあらず。
小国、辺地のゆえに、中印度のごとくにあらざることは、仏法をわずかに修習すといえども、印度のごとくに証をとれる、なし。

古徳、曰、
今時、多、有、還俗者、畏憚、王役、入、外道中。
偸、仏法義、
竊、解、荘、老、
遂、成、混雑、迷惑、初心、孰、正、孰、邪。
是、為、発、得、韋陀法之見。

しるべし。
仏法と、荘、老と、いずれが正、いずれが邪をしらず、混雑するは、初心のともがらを迷惑する。
いまの知円、正受、等、これなり。
ただ愚昧のはなはだしきのみにあらず。
稽古なきのいたり、顕然なり、炳焉なり。
近日、宋朝の、僧徒、ひとりとしても、孔、老は、仏法におよばず、としれるともがら、なし。
名を仏祖の児孫にかれるともがら、稲麻竹葦のごとく、九州の山野にみてりというとも、孔、老のほかに、仏法、すぐれ、いでたり、と暁了せる一人、半人あらず。
ひとり先師、天童古仏のみ、仏法と、孔、老と、ひとつにあらず、と暁了せり、昼夜に施設せり。
経論師、また、講者の名、あれども、仏法、はるかに、孔、老の辺を勝出せり、と暁了せる、なし。
近代、一百年来の、講者、おおく、参禅学道のともがらの儀をまなび、その解会をぬすまんとす。
もっとも、あやまれり、というべし。
孔子の書に生知者あり。
仏教には、生知者なし。
仏法には、舎利の説あり。

孔、老、舎利の有無をしらず。
一にして混雑せん、とおもうとも、広説の通塞、ついに、不得ならん。

論語、云、
生、而、知、之、上。
学、而、知者、次。
困、而、学、之、又、其次、也。
困、而、不学、民、斯、為、下、矣。

もし生知あらば、無因のとが、あり。
仏法には、無因の説なし。
四禅比丘は、臨、命、終の時、たちまちに謗、仏のつみに堕す。
仏法をもって、孔、老の教に、ひとし、とおもわん、一生のうちより謗、仏のつみ、ふかかるべし。
学者、はやく、仏法と、孔、老と、一致なり、と邪計する解をなげすつべし。
この見、たくわえて、すてずば、ついに、悪趣に堕すべし。
学者、あきらかに、しるべし。
孔、老は、三世の法をしらず、因果の道理をしらず、一洲の安立をしらず。
いわんや、四洲の安立をしらんや？
六天のこと、なお、しらず。
いわんや、三界九地の法をしらんや？
小千界しらず。
中千界をしるべからず。
三千大千世界をみること、あらんや？　しること、あらんや？
震旦一国に、なお、小臣にして帝位にのぼらず。
三千大千世界に王たる如来に比すべからず。
如来は、梵天、帝釈、転輪聖王、等、昼夜に恭敬、侍衛し、恒時に、法を請したてまつる。
孔、老に、かくのごとくの徳、なし。
ただ、これ、流転の凡夫なり。
いまだ出離、解脱の道をしらず。
いかでか、如来のごとく、諸法実相を究尽すること、あらん？
もし、いまだ究尽せずば、なににによりてか、世尊にひとし、とせん？
孔、老、内徳、なし、外用、なし。
世尊に、およぶべからず。
三教一致の邪説をはかんや？

孔、老、世界の有辺際、無辺際を通達すべからず。
広をみず、しらず。
大をしらず、みざるのみにあらず。
極微色をみず。
刹那量をしるべからず。
世尊、あきらかに極微色をみ、刹那量をしらせたまう。
いかにしてか、孔、老に、ひとしめたてまつらん？
孔、老、荘子、恵子、等は、ただ、これ、凡夫なり。
なお、小乗の須陀洹に、およぶべからず。
いかに、いわんや、第二、第三、第四の阿羅漢に、およばんや？
しかあるを、学者、くらきによりて、諸仏にひとしむる、迷中又深迷なり。
孔、老は、三世をしらず、多劫をしらざるのみにあらず、一念、しるべからず、一心、しるべからず。
なお、日、月天に比すべからず。
四大王、衆天におよぶべからざるなり。
世尊に比せば、世間、出世間に、迷惑するなり。

列伝、云、
喜、為、周大夫。
善、星象。
因、見、異気。
而、東、迎、之、果、得、老子。
請、著書、五千有言。
喜、亦、自、著書、九篇、名、関令子。準、化胡経。
老、過、関、西。
喜、欲、従、聃、求、去。
聃、云、
若、欲、志心、求、去、当、将、父母、等、七人頭、来。
乃、可、得、去。

喜、乃、従、教、
七頭、皆、変、猪頭。

古徳、云、
然、俗典、孝儒、尚、尊、木像。
老聃、設、化、令、喜、害、親。

如来、教門、大慈、為、本。
如何、老氏、逆、為、化原？

むかしは、老聃をもって、世尊にひとしむる邪党あり。
いまは、孔、老、ともに、世尊にひとし、という愚侶あり。
あわれまざらめやは？
孔、老、なお、転輪聖王の、十善をもって世間を化するに、およぶべからず。
三皇五帝、いかでか、金、銀、銅、鉄、諸輪王の、七宝、千子、具足して、あるいは、四天下を化し、あるいは、三千界を領せるに、およばん？
孔、老は、いまだ、これにも、比すべからず。
過、現、当来の諸仏、諸祖、ともに、父母、師僧、三宝に孝順し、病人、等を供養するを化原とせり。
害、親を化原とせる、いまだ、むかしより、あらざるところなり。
しかあれば、すなわち、老聃と、仏法と、ひとつにあらず。
父母を殺害するは、かならず、順次生業にして泥梨に堕すること、必定なり。
たとえ老聃、みだりに虚無を談ずるとも、父母を害せんもの、生、報をまぬがれざらん。

伝燈録、云、
二祖、毎、歎、云、
孔、老之教、礼術、風規。
荘、易之書、未尽、妙理。
近、聞、達磨大士、住止、少林。
至人、不遠。
当、造、玄境。

いまのともがら、あきらかに信ずべし。
仏法を震旦に正伝せることは、ただ、ひとえに、二祖、参学のちからなり。
初祖、たとえ西来せりとも、二祖をえずば、仏法、つたわれざらん。
二祖もし仏法をつたえずば、東地、いまに、仏法、なからん。
おおよそ、二祖は、余輩に群すべからず。

伝燈録、云、
僧、神光、者、曠達之士。
久、居、伊洛。
博覧、群書。

善、談、玄理。

むかし、二祖の、群書を博覧すると、いまの人、書巻をみると、はるかに、ことなるべし。
得法、伝衣ののちも、むかし、われ、孔、老之教、礼術、風規とおもいしは、あやまりなり、としめすことば、なし。
しるべし。
二祖、すでに、孔、老は、仏法におよぶこと、あらず、と通達せり。
いまの遠孫、なにとしてか、祖父に違背して、仏法と一致なり、というや？
まさに、しるべし、邪説なり、と。
二祖の遠孫にてあらば、正受、等が説、だれが、もちいん？
二祖の児孫たるべくば、三教一致、ということなかれ。

如来、在世、有、外道、名、論力。
自、謂、
論議、無、学、等者。
其力、最大。

故、曰、論力。
受、五百、梨昌、募、
撰、五百、明難、
来、難、世尊。
来至、仏所、而、奉、問、仏、云、
為、一究竟道？
為、衆多究竟道？

仏、言、
唯一究竟道。

論力、云、
我等、諸師、各、説、
有、究竟道。
以、外道中、各、
自、謂、是。
毀訾、他法。
互、相、是非、故。

有、多道。

世尊、其時、已、化、鹿頭。
成、無学果。
在、仏、辺、立。

仏、問、論力、
衆多道中、誰、為、第一？

論力、云、
鹿頭、第一、也。

仏、言、
其、
若、第一、
云何、捨、其道、
為、我弟子、
入、我道中？

論力、
見、
既、慚愧、低頭、帰依、入道。

是時、仏、説、義品、偈、曰、
各各、謂、究竟、
而、各、自、愛著、
各、自、是、
非、他。
是、皆、非、究竟。
是人、入、論衆、弁明、義理、時、
各各、相、是非、勝負、懐、憂苦。
勝者、堕、慢、坑。
負者、堕、憂、獄。
是故、
有智者、不堕、此二法。
論力、汝、当、知、
我諸弟子法、無、虚、亦、無、実。

汝、欲、何所、求？
汝、欲、壊、我論、
終、已、無、此所。
一切知、難、明。
還、是、自、毀壊。

いま、世尊の金言、それ、かくのごとし。
東土、愚闇の衆生、みだりに仏教に違背して、仏道とひとしき道あり、ということなかれ。
すなわち、謗、仏、謗、法となるべきなり。
西天の鹿頭、並、論力、乃至、長爪梵志、先尼梵志、等は、博学の人たり。
東土に、むかしより、いまだ、なし。
孔、老、さらに、およぶべからざるなり。
これら、みな、みずからが道をすてて、仏道に帰依す。
いま、孔、老の俗人をもって、仏法に比類せんは、きかんものも、つみ、あるべし。
いわんや、阿羅漢、辟支仏も、みな、ついに、菩薩となる。
一人としても、小乗にして、おわるもの、なし。
いかでか、いまだ仏道にいらざる孔、老を、諸仏にひとし、と、いわんや？
大邪見なるべし。
おおよそ、如来、世尊、はるかに、一切を超越しましますこと、すなわち、諸仏、如来、諸大菩薩、梵天、帝釈、みな、ともに、ほめたてまつり、しりたてまつれるところなり。
西天二十八祖、ともに、しれるところなり。
おおよそ、参学のちからあるもの、みな、ともに、しれり。
いま、澆運の衆生、宋朝、愚暗のともがらの、三教一致の狂言、もちいるべからず。
不学のいたりなり。

正法眼蔵　四禅比丘
建長七年乙卯、夏安居日、以、御草案本、書写、畢。　　　　懐弉

# 唯仏与仏

仏法は、人の、知るべきには、あらず。
このゆえに、昔より、
凡夫として、仏法を悟る、無し。
二乗として、仏法を極むる、無し。
独り仏に悟らるるゆえに、唯仏与仏、乃、能、究尽と言う。
それを究め悟る時、我ながらも、かねてより、悟りとは、かくこそ、あらめ、と思わるる事は無きなり。
たとえ、おぼゆれども、その、おぼゆるに、違わぬ悟りにて無きなり。
悟りも、おぼえしがごとくにても、無し。
かくあれば、かねて思う、その用に立つべきにあらず。
悟りぬる折は、いかに、ありけるゆえに、悟りたり、とおぼえぬなり。
これにて、かえり、知るべし、悟りより先に、とかく思いけるは、悟りの用にあらぬ、と。
先の様々思う思いのように、あらざりけるは、思いのまことに悪しくして、その力の無きにては無し。
こしかたの思いも、さながら悟りにてありけるを、その折は、さかさまにせんとしけるゆえに、力の、無き、とは、思いも、言いも、するなり。
用にあらず、とおぼゆる事は、知るべき所、必ず、有り。
いわゆる、小さくは、ならじ、と恐れける。
もし悟りより先の思いを力として、悟りの、出で来んは、頼もしからぬ悟りにてありぬべし。
悟りより先に、力とせず、遥かに越えて来たれるゆえに、悟りとは、一筋に悟りの力にのみ、助けらる。
惑いは、無き物ぞ、とも知るべし。
悟りは、無き事ぞ、とも知るべし。
無上菩提の人にてある折、これを仏と言う。
仏の無上菩提にてある時、これを無上菩提と言う。
この道にある時の面目、知らざらんは、愚かなりぬべし。
いわゆる、その面目は、不染汚なり。
不染汚とは、趣向、無く、取捨、無からん、と強いて営み、趣向にあらざらん所、つくろいするには、あらぬなり。
いかにも趣向せられず、取捨せられぬ、不染汚のあるなり。

例えば、
人に会うに、面目の、いかようなる、とおぼえず、
又、華にも月にも今、一つの光、色を思い重ねず、
又、春は、ただ春ながらの心、秋も、また、秋ながらの美悪にて、
逃るべきにあらぬを、我にあらざらん、とするには、我なるにても、思い知るべし。
この春、秋の声、我ならん、とするにも、我にあらざるにても、省みるべし。
我に積もれるにても無し。
今も我に有る思いにても無きなり。
その心は、
今の四大、五蘊、各各、我とすべきにてもあらず、誰と辿るべからず。
しかあれば、華、月のもよおす心の色、また、我とすべきにあらぬを我と思う。
我にあらぬを我と思うも、さもあらばあれ、背くべき方の色も、趣くべき方の染められぬべきも無し、と照らす時、自ずから道にある行履も、隠れざりける本来の面目なり。
古き人の曰く、
尽大地、これ、自己の法身にてあれども、法身に遮られざるべし。
もし法身に遮られぬるには、いささか身を転ぜんとするにも叶わず。
出身の道、有るべし。
いかなるか、これ、諸人の出身の道？
と。

もし、この出身の道を言わざらん者は、法身の命も、たちまちに絶えて、長く苦海に沈みぬべし。
かくのごとく問わんに、いかに、と言わんか、法身をも生け、苦海にも沈まざるべき、と？
この時、言うべし、
尽大地、自己の法身なり。
と。

もし、この道理にてあらん、尽大地、自己の法身、と言う折は、言われぬ。
また、言われざらん時、フツと言わぬとや？　心得べき。
言わぬ、古仏の言える事、有り。
死の中に生ける事、有り。
生ける中に死せる事、有り。

死せるが、常に死せる、有り。
生けるが、常に生ける、有り。

これ、人の強いて、しかあらしむるに、あらず。
法の、かくのごとくなるなり。
しかあれば、法輪を転ずる折も、かくのごとくの光、有り。声、あり。
現、身、度、生にも、しかあり、と知るべし。
これを無生の知見とは言う。
現、身、度、生とは、度、生、現、身にて、ありけるなり。
度に向かいて現を辿らず。
現を見るに、度を怪しむ事、無かるべし。
この度に、仏法は、究め尽くせり、と心得べし、説くべし、証すべし。
現にも、身にも、度のごとくに、ありける、と聞くなり、説くなり。
これも、現、身、度、生の、しかあらしめける、となり。
この旨を証しけるにぞ、得道の朝より涅槃の夕べに至るまで、一字をも説かざりけるとも、説かるる言葉の自在なりける。
古仏、曰く、
尽大地、是、真実人体なり。
尽大地、是、解脱門なり。
尽大地、是、毘盧、一隻眼なり。
尽大地、是、自己、法身なり。

いわゆる、心は、
真実とは、まことの身となり。
尽大地を、我らが仮にあらざりける、まことしき身にてありける、とは知るべし。
日頃は、何としてか、知らざりける？　と問う人、有らば、尽大地、是、真実人体と言いつる事を我に返せ、と言うべし。
また、尽大地、是、真実人体とは、かくのごとく知るとも言うべし。
また、尽大地、是、解脱門とは、いかにも、纏われ、拘うる事、無きに名づくるなり。
尽大地の言葉は、時にも、年にも、心にも、言葉にも、親しくして、暇、無く、親密なり。
限り無く、辺、無きを尽大地と言うべきなり。
この解脱門に入らん事を求め、出でん事を求めんに、また、得べからざるなり。

何として、かくのごとくなる？
発問を顧みるべし。
あらぬ所を尋ねばや、と思わんにも、叶うべからざる物なり。
また、尽大地は、これ、毘盧の一つの眼なり、とは、仏は、一つの眼と言える。
かならずしも、人の眼のようにあらんずる、とは思わざれ。
人にも目こそは二つも有れ、眼を言う時は、人眼とばかり言いて、二つとも、三つとも、言わぬなり。
教を学ぶ者の、仏眼と言い、法眼と言い、天眼などと言うも、目にてありとは習わぬなり。
目のようにあらん、と知れるをば、儚き、と言う。
今は、ただ仏の眼、一つにて、尽大地、ありける、と聞くべし。
千眼もあれ、万眼もあれ、まず、しばらく、尽大地が、その中の一つにてあるとなり。
かく、多かる中に一つぞ、と言うも、咎、無し。
また、仏には、ただ眼は一つのみあり、と知るも誤らず。
眼は、様々あるべきぞかし。
三つ有るも、有り、千眼、有るも、有り、八万四千、有りと言う事も有れば、眼の、かくのごとくなり、と聞きて耳を驚かさざるべし。
また、尽大地は、自ら法身なり、と聞くべし。
自らを知らん事を求むるは、生ける者の、さだまれる心なり。
しかあれども、眼の、自らをば見る者、まれなり。
独り仏のみ、これを知れり。
その他の外道、等は、いたずらに、あらぬをのみ、我、と思うなり。
仏の言う、自らは、すなわち、尽大地にてあるなり。
しかあれば、自ら、と知るも、知らぬも、皆、共に、己にあらぬ尽大地は無し。
この時の言葉、かの時の人に譲るべし。

昔、僧、有りて、古徳に問う、
百、千、万境、一時に来たらん時、いかが、すべき？

古徳、曰く、
莫、管、佗。

言う心は、

来たらん事は、さもあらばあれ、ともかくも、動かすべからず。
となり。
これ、すみやかなる仏法にてあり。
境にては、無し。
この言葉をば、炳誡とは心得べからず。
諦実にてあり、と心得べし。
いかにも管するか！　とすれば、管せられ、ざりけるなり。

古き仏の曰く、
山河大地と諸人と、同じく、生まれ、
三世の諸仏と諸人と、同じく、行い来たれり。

しかあれば、すなわち、一人、生まるる折に、山河大地を見るに、この一人が生まれざりつる先よりありける山河大地の上に、今、一重、重ねて生まれ出づると見えず。
しかあればとても、また、古き言葉の虚しかるべきには、あらず。
いかにか、心得べき？
心得られずとて、差し置くべきには、あらねば、必ず、心得べし、と思うべし。
既に説ける言葉にてあれば、聞くべし。
聞きては、また、心得べきなり。
これを心得ん様は、この生まるる一人が、かたより、この生を尋ぬるに、この、生、と言う事は、いかに、ある事？　と初め終わり明らめける人は、誰ぞ？
終りも、初めも、知らざれども、生まれ来たれり。
それ、ただ、山河大地の際も知らざれども、ここをば、見る、この所をば、踏み歩くがごとし。
生のごとくにあらぬ山河大地よ、と恨むる思い無かれ。
山河大地を、等しき、我が生なり、と言えりけり、と明らむべし。
また、三世諸仏は、既に行いて、道をも成り、悟りも終われり。
この仏と、我と、等し、とは、また、いかにか、心得べき？
まず、しばらく、仏の行を心得べし。
仏の行は、尽大地と、同じく、行い、尽衆生、共に、行う。
もし尽一切にあらぬは、いまだ、仏の行にては、無し。
しかあれば、心を起こすより悟りを得るに至るまで、必ず、尽大地と、尽衆生と、悟りも、行いも、するなり。

これに、いかにか？　疑う思いも有るべきに、知られぬ思いも交じるに似たるを明らめんとて、かくのごとくの声の聞こゆるも、人のようとは、怪しまざるべし。
これは、心得る教えにては、三世の諸仏の心をも起こし行うは、必ず、我らが身心をば、漏らさぬ理の有るなり、と知るべし。
これを疑い思うは、既に三世の諸仏をそしるなり。
静かに顧みれば、我らが身心は、まことに、三世の諸仏と、同じく、行いける道理、有り、発心しける道理も有りぬべく見ゆるなり。
この身心の先、後を顧み照らせば、尋ぬべき人の、我にあらず、人にあらざらんには、何の滞る所としてか、三世には、隔たれり、と思わん。
この思いども、しかしながら、我にあらず。
何としてかは、また、三世諸仏の本心の所行道の時をば、遮んとは、すべき？
しばらく、道は、知、不知には、あらぬ、とは名づくべし。

古き人の曰く、
撲落も、他物にあらず。
縦横、これ、論にあらず。
山河、および、大地、すなわち、全、露、法王身なり。

いまの人も、昔の人の言えるがごとく習うべし。
既に法王の身にて有り。
しかれば、撲落も、異なる物にはあらざりける、と心得る、法王、ありける。
この心は、
山の、地にあるがごとし。
地の、山を載せてあるに似たり。

心得るに、心得ざりつる折の来たりて、心得るを妨げず。
また、心得るが、心得ざりつるを破る事も無くして、しかも、心得ると、心得ぬとの、春の色、秋の声、有り。
それをも心得ざりつるは、声、大きにして、説きける、その声、耳に入らず、耳、声の中に遊び歩きける。
心得るは、声、既に耳に入りて、三昧、現るる折にてあるべし。
この心得るは、小さく、心得ぬは、大きにてありけるとも、思わざるべし。
私に思い得たる事には、あらねば、法王の、かくのごとくなりける、と知るべし。

法王の身とは、眼も、身のごとくにあり、心も、身と等しかるべし。
心と身と、一毫の隔て無く、全、露にてあるべし。
光明にも、説法にも、上に言うがごとくに、法王身にてあり、と心得るなり。
昔より言える事、有り。
いわゆる、
魚にあらざれば、魚の心を知らず。
鳥にあらざれば、鳥の跡を訪ね難し。

この理をも、よく、知れる人、まれなり。
人の、魚の心を知らぬ、と、人の、鳥の心を知らぬ、と、のみ思えるは、悪しく知れり。
これを知る様は、魚と魚とは、必ず、相互いに、その心を知るなり。
人のように知らぬ事は無くて、龍門をさかのぼらんと思うにも、共に、知られ、同じく、心を一つにするなり。
九浙をしのぐ心も通い知らるなり。
これを魚にあらぬは、知る事、無し。
また、鳥の空を飛びぬるをば、いかにも、行く獣は、この足の跡を知り、この跡を見て訪ぬる事は、夢にも未だ思い寄らず。
さ、有りと知らねば、思い寄る試しも無し。
しかあるを、鳥は、よく、小さき鳥の幾百、千、群がれ、過ぎにける、これは、大きなる鳥の幾つら、南に去り、北に飛びにける跡よ、と数々に見るなり。
車の跡の、道に残り、馬の跡の、草に見ゆるよりも、隠れ、無し。
鳥は、鳥の跡を見るなり。
この理は、仏にも有り。
仏の、幾、世々に行い過ぎにけるよ、と思われ、小さき仏、大きなる仏、数に漏れぬる数ながら、知るなり。
仏にあらざる折は、いかにも、知らざる事なり。
いかに、知らざるぞ？　と言う人も有りぬべし。
仏の眼にて、その跡を見るべきがゆえに、仏にあらぬは、仏の眼を備えず。
仏の物、数うる数なり。
知らねば、全て、仏の道の跡をば、辿りぬべし。
この跡、もし目に見えば、仏にてあるやらん、と、足の跡をも、たくらぶべし。
たくらぶる所に、仏の跡も知られ、仏の跡の長短も浅深も知られ、我が跡の明らめらるる事は、仏の跡をはかるより、得るなり。

この跡を得るを仏法とは、言うなるべし。

正法眼蔵　唯仏与仏
弘安十一年、季春、晦日、於、越州、吉田県、志比庄、吉祥山、永平寺、知賓寮、南軒、書写、之。

# 八大人覚

諸仏、是、大人、也。
大人之所覚知、所以、称、八大人覚、也。
覚知、此法、為、涅槃因。
我本師、釈迦牟尼仏、入涅槃夜、最後之所説、也。

一、者、少欲。

(於、彼、未得、五欲、法中、不、広、追求、名、為、少欲。)

仏、言、
汝等比丘、当、知。
多欲之人、多、求、利、故、苦悩、亦、多。
少欲之人、無、求、無欲、則、無、此患。
直爾、少欲、尚、応、修習。
何、況、少欲、能、生、諸功徳。
少欲之人、
則、無、諂曲、以、求、人意。
亦復、不、為、諸根、所牽。
行少欲者、
心、則、坦然。
無所、憂、畏。
触、事、有、余。
常、無、不足。
有少欲者、則、有、涅槃。
是、名、少欲。

二、者、知足。

(已得法中、受取、以、限、称、曰、知足。)

仏、言、
汝等比丘、
若、欲、脱、諸苦悩、当、観、知足。
知足之法、即是、富、楽、安穏之所。

知足之人、雖、臥、地上、猶、為、安楽。
不知足者、雖、処、天堂、亦、不、称(かなう)、意。
不知足者、雖、富、而、貧。
知足之人、雖、貧、而、富。
不知足者、常、為、五欲、所牽、為、知足者之所憐愍。
是、名、知足。

三、者、楽寂静。

(離、諸憒閙、独処、空閑、名、楽寂静。)

仏、言、
汝等比丘、
欲、求、寂静、無為、安楽、当、離、憒閙、独処、閑居。
静所之人、帝釈、諸天、所、共、敬重。
是故、当、捨、己衆、他衆、空閑、独処、思、滅、苦本。
若、楽衆者、則、受、衆悩。
譬、如、大樹、衆鳥、集、之、則、有、枯折之患。
世間、縛著、没、於、衆苦。
譬、如、老象、溺、泥、不能、自、出。
是、名、遠離。

四、者、勤精進。

(
於、諸善法、勤修、無間、故、云、精進。
精、而、不、雑。
進、而、不退。
)

仏、言、
汝等比丘、
若、勤、精進、則、事無難者。
是故、汝等、当、勤、精進。
譬、如、少水、常、流、則、能、穿、石。
若、行者之心、数数懈廃、譬、如、鑽、火、未熱、而、息、雖、欲、得、火、火、難、可、得。

是、名、精進。

五、者、不忘念。

(
亦、名、守正念。
守、法、不、失、名、為、正念。
亦、名、不忘念。
)

仏、言、
汝等比丘、
求、善知識、求、善護助、無如、不忘念。
若、有、不忘念、者、諸煩悩賊、則、不能、入。
是故、
汝等、常、当、摂念在心。
若、失念、者、則、失、諸功徳。
若、念力、堅強、雖、入、五欲賊中、不、為、所害。
譬、如、著、鎧、入、陣、則、無、所畏。
是、名、不忘念。

六、者、修禅定。

(住、法、不乱、名、曰、禅定。)

仏、言、
汝等比丘、
若、摂、心、者、心、則、在、定。
心、在、定、故、能、知、世間、生滅、法、相。
是故、汝等、常、当、精進、修習、諸定。
若、得、定、者、心、則、不、散。
譬、如、惜水之家、善、治、堤塘。
行者、亦、爾。
為、智慧、水、故、善、修、禅定、令、不、漏失。
是、名、為、定。

七、者、修智慧。

(起、聞、思、修、証、為、智慧。)

仏、言、
汝等比丘、
若、有、智慧、
則、無、貪著。
常、自、省察、不、令、有、失。
是、則、於、我法中、能、得、解脱。
若、不、爾、者、
既、非、道人、
又、非、白衣、
無、所名、也。
実、智慧、者、
則、是、度、老病死海、堅牢船、也。
亦、是、無明、黒暗、大明燈、也。
一切病者之良薬、也。
伐、煩悩樹之利斧、也。
是故、汝等、当、以、聞、思、修、慧、而、自、増、益。
若、人、有、智慧之照、雖、是、肉眼、而、是、明眼人、也。
是、名、智慧。

八、者、不戯論。

(
証、離、分別、名、不戯論。
究尽、実相、乃、不戯論。
)

仏、言、
汝等比丘、
若、種種戯論、其心、則、乱。
雖、復、出家、猶、未得、脱。
是故、比丘、当、急、捨離、乱心、戯論。
若、汝、欲、得、寂滅、楽、者、唯、当、善、滅、戯論之患。
是、名、不戯論。

これ、八大人覚なり。
一一、各、具、八。
すなわち、六十四あるべし。
ひろくするときは、無量なるべし。
略すれば、六十四なり。
大師、釈尊、最後之説、大乗之所教誨。
二月十五日、夜半の極唱。
これよりのち、さらに説法しましまさず。
ついに、般涅槃しましけます。

仏、言、
汝等比丘、
常、当、一心、勤、求、出道。
一切世間、動、不動法、皆、是、敗壊、不安之相。
汝等、且、止。
勿、得、復、語。
時、将、欲、過。
我、欲、滅度。
是、我最後之所教誨。

このゆえに、如来の弟子は、かならず、これを習学したてまつる。
これを修習せず、しらざらんは、仏弟子にあらず。
これ、如来の正法眼蔵、涅槃妙心なり。
しかあるに、いま、しらざるものは、おおく、見聞せること、あるものは、すくなきは、魔嬈によりて、しらざるなり。
また、宿殖善根のすくなき、きかず、みず。
むかし、正法、像法のあいだは、仏弟子、みな、これをしれり、修習し、参学しき。
いまは、千比丘のなかに、一、両箇の八大人覚しれるもの、なし。
あわれむべし。
澆季の陵夷、たとうるに、もの、なし。
如来の正法、いま、大千に流布して、白法、いまだ滅せざらんとき、いそぎ習学すべきなり。
緩怠なることなかれ。
仏法にあいたてまつること、無量劫にも、かたし。
人身をうることも、また、かたし。

たとえ人身をうくといえども、三洲の人身、よし。
そのなかに、南洲の人身、すぐれたり。
見仏聞法、出家、得道するゆえなり。
如来の般涅槃より、さきに、さきだちて死せるともがらは、この八大人覚をきかず、ならわず。
いま、われら、見聞したてまつり、習学したてまつる、宿殖善根のちからなり。
いま、習学して生生に増長し、かならず、無上菩提にいたり、衆生のために、これをとかんこと、釈迦牟尼仏に、ひとしくして、ことなること、なからん。

正法眼蔵　八大人覚
建長五年、正月六日、書、于、永平寺。

如今、建長七年乙卯、解制之前日、令、義演書記、書写、畢。
同、一校、之。

右本、
先師、最後、御病中之御草、也。

仰、
以前、所撰、仮字、正法眼蔵、等、皆、書改、並、新草具、都、盧、一百巻、可、撰、之。
云云。

既、始草之御此巻、当、十二、也。

此後、御病、漸漸、重増。
仍、御草案、等、事、即、止、也。

所以、此御草、等、先師、最後之教勅、也。

我等、不幸、而、不、拝見、一百巻之御草。
尤、所恨、也。

若、奉、恋慕、先師之人、必、書、此巻、而、可、護持、之。

此、釈尊、最後之教勅、且、先師、最後之遺教、也。

懐丼、記、之。